
白銀の来訪者

ホワイト・グリント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白銀の来訪者

【Nコード】

N6229L

【作者名】

ホワイト・グリント

【あらすじ】

グラニデの世界樹に生み出され知らぬ間に役目を終えて捨てられた青年、シノン・ガライドはネガティブネストでのゲーデとの戦いでディセンダーを庇って瀕死の重傷を負った。

シノンは消えかけていく意識の中、今までの血と苦しみに満ちた人生を思い出し、ただ一言「ああ、．．もうちょっと生きたかったな」と言っただけでシノンは瞳を閉じた。

しかしその時、世界樹が輝きシノンの体を光が包んだ。・・・光が
晴れると、そこにはシノンが流した血以外に何も無かった。

そしてシノンが目を覚ますと、見えたそこは見知らぬ場所・・・い
や、見知らぬ世界だった。

主人公の紹介と設定（前書き）

はじめまして、雪月花と申します。今回リリカルなのはとテイルズのクロス作品を書かせていただきました。作者自身はまだこのページの機能をあまり理解できていない上に初投稿なので温かい目で見てください。

主人公の紹介と設定

シノン・ガラード

年齢 19歳（推定）

性別 男

身長 185cm

体重 60kg

容姿 腰まである銀髪、蒼色の眼、顔はかなりのイケメン

好きなもの：家事全般（旅でやっていたら好きになった）絵描き、曇りや嘘のない笑顔

嫌いなもの：好きで人を殺したり、理由をつけて人を見捨てる奴。^{クズ}

権力を使い人を見下す奴

魔力ランク：SS

職業 マルチウエポン

武器 ほとんど剣（刀も使う）と格闘を使うが、重火器や弓矢などさまざまな武器を使いこなせる。

さらに一度見た全ての秘奥義を使える。（ティルズキャラ全ての秘奥義）

詳細

グラニデの世界樹がグラニデにディセクターが必要かどうか判断するために生み出した人工生命体。

普通の人間と違い体の全てがマナで構成されている（ゲーデが負の塊ならシノンは質量化したマナの塊）。さらに身体能力もかなり優れていて体内に魔術回路を持っている（数、60本）シノン自身は自覚していなかったが、突然真っ白な空間に飛ばされ「弟子のミスに巻き込んだ」と言った老人からお詫びとして魔術を教えてもらった。使う魔術は投影魔術（真名開放とソードバレルフルオープン、^{ブローケン・ファンタズム}壊れた幻想などは使えるが士郎のような異例ではないので固有結界

などは使えない」とガンド、強化など。

シノン自身は名前以外の記憶がない状態で生み出されたので自分が「世界を見る目」として生み出されたことを知らずに死に物狂いで生きてきた。(生み出された時は4、5歳の子供だった)そのまま傭兵として十数年生きて、アドリビトムに雇われた。そして二人に自分がどういった存在か教えられ、デイセクターが生まれたことで自分がもう世界樹に捨てられた存在だと知った。その後は少なからず世界樹を憎んだが、自分が生きてきたグラニデを守るためにアドリビトムで戦い続けた。

主人公の紹介と設定（後書き）

読んでくださってありがとうございます。恐らくかなりひどい駄文になると思っているのでよろしくお願いします。

プロローグ(前書き)

プロローグです。どうぞ。

プロローグ

世界樹よりもたらされたマナの恩恵により栄えた世界、グラニデ。

この世界には古くから伝わったおとぎ話があった。

”世界に危機が訪れたとき世界樹から世界を救う英雄デイセンドーが現れ世界を救う”グラニデでは有名な物語だったが、人々の頭には「所詮物語りだ」程度にしか認識されていなかった。

だが、現実にはデイセンドーは誕生した。

デイセンドーは海賊チャット船の船バンエルティア号に拾われ、次第にアドリビトムというギルド名を得た組織で次第にグラニデの危機に関わっていった。

世界の負の増大とマナの枯渇、それがグラニデの直面していた危機だった。”負”人の感情から生まれるそれは、世界に留まりさまざまな悪影響を与えていた。それに対極に存在するグラニデにとって恵みのエネルギーである”マナ”は年々その量を確実に減らしていた。

この二つの問題と一人の科学者、ジャンヌ・カーンの実験により、のちに世界樹から負の塊である”ゲーデ”が生まれた。それによって負の悪影響はさらに加速し、グラニデはさらに乱れた。

だが、デイセンドーたちはひとつの希望を見つけた。

”穢れ流し”世界中に溢れた負を世界樹に送り世界にマナを満たす

という古代の儀式である。デイセクターたちは穢れ流しに必要な物や手順をたどった。そしてそんな時、デイセクターたちはジェイド・カーティスが傭兵として雇いアドリビトムにやってきた青年、シノン・ガラードに出会った。

そしてシノンはアドリビトムに穢れ流しの方法を教えてくれた異世界の住人、ニアタに「君は世界樹から生み出された」世界を見るための目”だ」と教えられた。シノンは”自分は世界を見るために作り出された存在だった”自分はデイセクターが生まれた時点で役目を終えて捨てられていた”その二つを知って少なからず絶望した。「自分が死に物狂いで生きてきた今までの人生は全て世界樹がデイセクターを生み出すための材料だった」その思いを抱き、シノンは世界樹を憎んだ。だが、シノンはゲーデのように世界を無差別に破壊するようなことはせず、自分が必死に生きた「世界」を守るために世界のために戦った。

穢れ流しの準備が完了し、世界樹に負を送ろうとした時ゲーデが現れ、送るはずだった負をせき止めて名の通りの負の巣、ネガティブネストを作った。

ネガティブネストに乗り込んだデイセクターとシノンたちはゲーデの元にたどり着き、互いの思いを伝えた。デイセクター・・・『ノア』は「大好きなみんながいる世界を守りたい」ゲーデは「負として勝手に生み出されて勝手に消えたくない」シノンは「たとえ偽りで生まれた命でも、自分が生きてきた世界を守り抜きたい」三つの思いは今・・・・・・衝突した。

Side（以後、視点を变える場合はこうなると思いますが）シノン

駆け出す。敵と認識したゲーデに向かってオレは走りながら腰に差している長刀を抜く。

「剛・紅蓮剣!!」

居合いの勢いでゲーデに目掛けて刀を振り下ろす。

火柱が上がったと同時に手応えがないことを感じ、次の瞬間にいやな予感を感じてすぐに体を沈めた。次の瞬間オレの頭上をものすごい勢いで大きなナニカが通り過ぎていった。

「エアスラスト!!」

後方から声が響き、ゲーデの頭上に緑色の球体が生まれゲーデに目掛けてカマイタチのような斬撃が襲い掛かる。

「ちっ……」

しかしゲーデは舌打ちしながらバックステップをして簡単にかわした。

オレも立ち上がってバックステップを一回やって距離をとる。

「ありがとうな、カノンノ」

後ろを向かずに後ろにいるカノンノに礼を言う。そして、ゲーデの頭上からひとつの影が迫った。

「鳳凰天駆!!」

「甘い！！はああ！！」

ノアの炎を纏った空中からの突進がゲーデに迫るがゲーデは骨がむき出しになり鋭い爪を持った巨大な右腕を振るって炎を纏ったノアをそのまま押し返した。ノアはそのまま後方に吹き飛び壁に激突した。

「ティア、頼む」

「わかった、任せて」

オレは後方にいるティアにノアの治療を頼み、走り出す。前衛が一人減ったのだからその分はオレがカバーしなければならぬ。

近づいてくるオレに対しゲーデは右腕を左から右になぎ払うように振るってきた。オレはタイミングを読んで真上に跳んでゲーデの腕を飛び越えた。だが、ゲーデの攻撃の本命はこれじゃない。

案の定、ゲーデは右腕を振るった勢いを殺さずにそのまま引き寄せたオレの真上から振り下ろしてきた。空中で身動きが取れないオレは空中で刀を構え、ゲーデの右腕に刀を横薙ぎに一閃して迎え撃つ。

「風刃閃！！」

暴風を纏った刀身と骨組みの豪腕がぶつかり合い、オレとゲーデは発生した竜巻で互いに後退した。オレはバック転をして着地、それと同時に刀を鞘にしまって居合いの構えを取る。一瞬目を閉じて・
・見開く！

「高速の斬撃・・・見切れるか？」

言い終わると同時に地面が削れるほどに強く足を蹴って接近する。そして動き出した次の瞬間、オレはその場所から消えたような速さでゲーデの左側面を通り過ぎた。

「・・・・・・・・なに！？・・・・・・・・ぐっ！！」

ブシューウウウ！！

驚きと同時にゲーデの左肩から血が噴き出す。悪いがオレは立ち直りを待ってやれるほど優しくない。

再びオレは消えたように移動、そして出現する。そのたびにゲーデの体に傷が生まれていく。10、20・・・斬撃が無数に飛び、シンが刀を腰溜めに構えた。

「受ける！光刃閃！！」

オレは今までよりもさらに速い速度でゲーデに一閃を放った。

プロローグ（後書き）

うわぁーこりゃひどー。

すみません。プロローグが一話では書き切れませんでした。

プロローグ2（前書き）

すみません。

前回書ききれなかったんで2回目です。どしどし

プロローグ 2

Side シノン

オレが放った光速の斬撃はゲーデを両断せんと迫る。

(決まったか?)

そう思ったが、敵もそう簡単にくたばる相手ではなかった。

「イヤだ………。イヤだああ—————!!!!!!」

ゲーデは叫びと共に斬撃と体の間に無理やり右腕を割り込ませ斬撃をガードしてきた。

ガアアアアアアン!!!!!!

響く衝突音と共に右手にすさまじい衝撃が伝わる。だがオレの頭の中は驚愕で染まっていた。

光刃閃、名の通り光に並んだ速度で放つ斬撃だ。それをこいつは反応しガードまでした。本来ならば不可能に近い、その力はどこから来るのか。それにこいつは今「イヤだ」と言った。

(消えたくないという意地、か)

穢れ流しは負を世界樹に送り、それをマナに変える儀式だ。送られる負に選抜などはない。ゲーデのような負の塊など真っ先に消えらるだろう。ゲーデは死に対する抵抗が人一倍強い。オレの斬撃に反応

出来たのは恐らく生存本能のなせる技だろう。

オレは斬撃の勢い余ってゲーデの横を通り過ぎたが、地に足を踏ん張らせ、すぐに方向転換する。すぐに体勢を立て直したオレと違い、ゲーデは無理なガードを行った反動で体勢を崩している。

「エンシェントノヴァー!!」

「ホーリーランス!!」

そしてそこにカノンノとティアの魔法が射ち込まれる。

「シノン、チャンスだよ!! 一気に決めよう!!」

カノンノの声を背後に聞き、オレは返事をせずすぐに走り出した。

「くそぉ!!」

ゲーデは自分の周りに舞う煙を右腕で振り払い、オレに目掛けて走り出してきた。

「魔皇刃!!」

「でああ!!」

刀と巨大な右腕がぶつかり、その場で互いに押し合いが始まる。オレもゲーデもその場から状態が傾かず動けない。だがオレはゲーデをその場に足止めできればそれでいい。なぜなら……後ろで仲間の3人が準備をしているから。

「今を越える力となるの！刻めラブビート！！」

「穢れ無き風よ、我にあだなす者を包み込まん、イノセントシャイン！！」

カノンノのアンチエンド・ノートとティアのイノセントシャインが発動したのを確認し、オレはゲーデの腕を横に振り払ってその場から後ろに跳ぶ。

その瞬間ゲーデの足元から紫色の音符が吹き出し、頭上からは光が降り注ぎ巨大な光の柱が出来た。だが、まだ終わらない。ゲーデの頭上に最後の一人がいるのだから。

「うおおお！！！緋凰！！絶炎衝！！」

ノアが炎を纏った鳳凰となって地面をすべり、すべった場所に一字のラインが出来る。そして次の瞬間、ラインから噴水のように炎が吹き出した。

連続の爆発がゲーデを襲い、巨大な煙が生まれた。

秘奥義の三連射、”勝った”三人が思ったが、オレだけは気を抜かなかった。幼いころに油断して仕留め切れなかった魔物に殺されかけた時の雰囲気今の状況がよく似ている。

そして、見えた。煙の中に起こった黒い霞を。そして、感じた。深く濃厚な殺気を、そしてその先にいたのは…………ノアだった。

ドン！！…………ドスツ！！

「えっ？」

目の前には尻餅をついたノアが呆然とした表情でオレを見上げている。はっはっ、面白い顔してやがる。目線をずらすとカノンノとティアも似たような顔をしていた。お前ら、ジェイドの野郎が見たら一生からかわれるような顔してるぞ。

そして目線を下にうつすとそこにはオレの左脇腹に突き刺さり貫通したゲーデの腕。腹からは大量の血が流れ出している。やばいな、貫通してるというよりえぐれてやがる。血が止まらん。

「シノン……さん？」

カノンノがふらふらした足取りでオレに近づいてくる。ばか、あぶねえぞ。カノンノの頭に左手を置き、頭を撫でてやる。

「ごめんな」

笑いながら眩き、カノンノの頭から手を離す。そして手の平をノアたちに向け、詠唱に入る。

「吹き荒れる、ウィンドウエーブ」

手の平から突風が吹き出し、カノンノ達を後方に吹き飛ばす。

そして次の瞬間、脇腹から腕が引き抜かれ激痛が襲う。倒れそうになるが、何かに右腕をつかまれ留まった。見上げてみると、全身から血を流したゲーデが歪んだ笑みを浮かべて右腕でオレの右腕をつかんでいた。

オレは右腕に握った刀を振るおうとしたが……。

ぶしゃ!!

気味の悪い音の後に右肘から先の感覚が無くなった。……痛みは無かった。ただ冷静に、右腕が潰されたと理解できた。

当然血が止めどなく溢れ出す。そしてオレの視界はだんだん暗くなっていた。

Side Out

シノンの右腕を潰したゲーデは左腕でシノンの襟首をつかむ。そのままシノンを頭上に持ち上げ、再び歪んだ笑みを浮かべた。

「なあ、お前つてオレと同じように世界樹から生まれたんだろ？」

シノンは答えない。いや、出血のせいで答えられないのかもしれない。

「なんだ？もう死んだか……いや……」

「……黄泉の……汝……」

シノンは生きていた。唇を微かに動かし何かを呟いている。

「？おい、なにを言っているん……」

その瞬間、ゲーデの第六感が何かを感じた。

「出でよ、神の雷……」

その時、シノンがはっきり聞こえる音量で声を発した。

「終わりだ、インディグネーション」

そして頭上から巨大な雷がゲーデに降り注いだ。

「ぎゃああああー……！！！！！！！！！！」

ゲーデは悲鳴を上げてもがく。そのさなかでシノンの体は手放され遠くに飛んでいった。

side シノン

地面に叩き付けられた。そう自覚したのを最後に体の感覚が徐々に無くなっていく。

「シノンさん……」

地面に仰向けに倒れているオレの体をカノンノが抱き上げた。オレのわき腹と右腕からは止まることなく血が流れ続けている。恐らく……いや、絶対に助からないだろう。すでに致死レベルの出血量だ。だが、目の前の妹分は認めたくないというような顔をしている。

「いやだよう……シノンさん……死んじゃだよう……」

カノンノの目から零れた涙がオレの顔に落ちる。横に顔を向けるとノアとティアが涙を流しながらゲーデと戦っているのが見える。

(悪いことをしたなあー)

そう思いながら痛む体を動かしてカノンノの頭を撫でてやる。カノンは相変わらず泣き止まない。だから、ただ一言……。

「カノンノ……しつかりと……今……やるべきことを……果たせ……」

そう伝えた。やばいなそろそろ限界か……目が……霞んできた。

「シノンさん……でも……でも……」

カノンノはまだ振り切れないようだがきつと大丈夫だろう。

ああー、過去が見えてくる……これが走馬灯か。

こうして見るとやっぱりろくな思いでねえなオレの過去。

(あなたは何かを望んでいますか?)

なんだ? 幻聴か? どこかで聞いた……いや、声そのものに懐かしい何かを感じるような……。まあいいか、そうだな、許されるなら……。

「もうちょっと……まともに生きてみたかったな」

許されない願いかもしれない。だが、アドリビトムのみんなの生き方を見てオレも変われると思った。

そして、いよいよ瞼を開けていられなくなりオレは意識を手放した。

Side Out

シノンが瞳を閉じた瞬間、グラニデの中心にそびえ立つ世界樹が強烈な光を発光した。そして黄金色放たれた光はネガティブネストの中にまで突き抜け、シノンの体を包んだ。

そのまま光は留まっていたが、数秒後に光は拡散を始め、そのまま完全に霧散した。

光が消えた。だが、その場に血まみれだったシノンの体は無かった。

近くにいたカノンノでさえ、一瞬でシノンの感覚が無くなったようなものだった。

（私は自分の業であなたを生み出し、今まであなたに何もしてあげられなかった。だからせめてあなたには生き続けてほしい。だから、幸せになって頂戴。我が息子、シノン・ガラード）

この瞬間、シノン・ガラードはグラニデという世界そのものの枠から姿を消した。

ここから始まる。

勝手に生み出され自分の生きる意味に絶望した男が魔法という翼

で飛び立つ少女達と出会う物語が

プロローグ2（後書き）

とりあえずプロローグ完成です。

なんかグダグダな部分もある気がするんですが・・・orz
次はたぶんなのはとのご対面に入れると思います。

第1話 訪れた異世界（前書き）

すいません。なのはとの対面にもってけませんでした。

第1話 訪れた異世界

Side シノン

「ぐっ！……」

瞳を閉じて意識を失った後、突然の頭痛を感じてオレは目を覚ました。

（なんだ？あの世に着いたか？ずいぶん到着の仕方がイメージと違うな……）

そう思つて目を開けると、俺の目に映つたのは花畑でもなければ綺麗な川でもない、真つ暗な暗闇と月夜に照らされた木々だった。恐らく森の中だろう。……待てよ？

「まさか、オレ……生きてるのか？なんで……」

体を起こして確かめようとしたが激しい頭痛が頭に響き、いろんな知識が頭に流れ込んでくる。しかもなぜか体が思うように動いてくれない、いや力が入らないと言つたほうが近い。そのせいで起き上がれない。あと、なんだか声の調子が変わつたような気が……。

「ふっ！……がぁ！！……はぁ、はぁ……くそ、起きられん」

起きるのを一端諦め呼吸を整える。寝つ転がりながら痛む頭に右手を当てた。ふうー、いくらか楽になったかな、痛みがあるということはやはり、生きているのか……待て、オレは今どっちの

手を使った？そうだ、オレは今・・・潰されたはずの右手を使った。

「なんで・・・なんで右手があるんだ・・・あの時、確かに潰されたはずだ・・・いや・・・これは」

右手を強く握って開く運動を繰り返す。そして気づいた。右手の感覚がまったく無い。思った通りに動いてくれるが、動かした感触がまったく伝わってこない。・・・調べてみるか、アレで。

瞳を閉じる。たしか、こう・・・だったかな？

「解析 開始（アクセス、スタート）」

昔に突然現れた宝石で出来た短剣を持った老人に教えてもらったグラニデの世界の魔法とは違う術（あの老人は魔術と言っていた）の一つの強化の魔術の副産物として覚えた魔術、解析を自分の体にする。

（肉体に外傷なし、内臓も同じく全て無傷。・・・ん？血液の量が少し減ってる、怪我のせいか？まあいい、あと少しで動けるようになる。せいぜいだるさが残る程度だ。ん？格好まで変わってるのかさて、肝心の右手は・・・何だこりゃ・・・）

調べた結果、この右手は確かに人間の腕だった。皮膚も骨も本物、血液も脳からの電子信号も流れている。義手ではなく真正銘の腕だ。唯一つ、圧縮された超高密度のManaで出来ていること以外は。

オレの体は普通の人間と同じつくりになっているが、体の全てが世界樹の作ったManaによって作られている。今のオレの肉体もそこ

は変わらない。だがこの右手、この腕を作るのに使われているマナの量は潰された前の腕の約20倍以上の量だ。言うなればこの腕は圧縮されたマナで作られた義手、ということか？・・・ちなみにオレの格好は青いジーパンに黒のTシャツ、その上に茶色の皮のジヤンパーという格好だった。前の格好は黒のズボンに黒のインナー、その上に真っ黒のロングコートと言う格好だったのだが・・・。

(まあ、この腕のことはひとまず置いておくか・・・えーと他は何か・・・ん？・・・何？肉体の年齢が約11歳まで低下？どういうことだ？潰れた腕が義手に変わって次は体が若返った？なんだこの謎の現象のオンパレードは)

「くそ・・・どうなってんだよ・・・」

誰に対しても無く呟く。いろんなことが起こりすぎて頭が混乱する。ただでさえ、自分はもう死んでいるはずなのだ。さらに体が縮んで右手が義手になった？嫌になる。

(さて、これからどうするかな・・・誰か！・・・僕の声が聞こえますか！) なんだ？今頭の中に声が・・・)

(この声が聞こえている人がいるならお願いします！力を・・・)

頭に聞こえた声が途切れる。なんだったんだ？今のは。そう思った次の瞬間に遠く、しかも耳がかなり良い者でしか聞き取れない距離で破壊音が聞こえた。

「今の音は・・・今の声の内容からして誰かが破壊音の犯人に襲われているって所か？」

まったく、こちらら頭の中ぐちゃぐちゃだったのに……そろそろ動くか？

体に力を込めて何とか体を起こす。ただし木に手をつきながらだが……。

「ふう……やつぱり体に少しだるさがあるな。まあいいか、走る程度なら大丈夫だろ……よし行くか……」
「すいません、よろしいですか？」
「……なんだ？今度は頭じゃなくてすぐ近くから女性の声が……」

『「ここです」「ん？」』
『「ここです、あなたの後方にある木の後ろです」「あーっと、こっちか？」』

言われた通り後方の木の後ろに回り込んでみる。すると、そこにあったのは銀色のカードだった。

拾って見てみると表面は純銀、真ん中に蒼い宝玉が填まっっていて、X状の線が刻まれている。一目見ただけでかなりの高級品だとわかる。……と言うか、もしかしてさっきの声って……。

「話しかけてたのはお前か？」
『「はい、初めまして……私は……」』
「どーん……」

「おっと、忘れてた。すまんがお前の話は後だ、優先することがある」

『「え？ちよ……ちよっと……」』

銀色カードが何か言っているが無視する。カードを胸ポケットに突っ込んで破壊音が聞こえた方向に向かって走り出す。

二分ほど走って森を抜けられた。本来ならすぐに破壊音の発生地
点に走るところだが、オレの体はまったく動いてくれない。

「なんだよ……どこだよ……」

目に映ったのは見たことも無い町並み。オレはこんな町を知らない。
いやグラニデのどこにもこんな町は存在しない。つまり……こ
こは……。

「あああ！！くそ！今は考えるのはなしだ……」

頭の中の思考を無理矢理中断して走り出す。……今は考えたくな
かった。恐らくオレの推測は当たっている。だがそれを認めたらオ
レはしばらくショックで動けない。それはだめだ。今はさっきの声
の主を助けなければならぬのだ。動けなくなつては助けられなく
なる。だが、恐らく真実と向き合ったらオレはたぶん……壊れ
るかもな。

走って破壊音の発生地帯に到着した。……したのは良いんだ
がその場はなんというか。

「なんだこのカオス。どういう状況？」

そこには動物病院（字は頭に流れてきた知識で読めた）と書かれて
いる建物があった。ただし建物の8割以上が崩壊しているが……。

そして近くの電柱（これも知識でわかった）には腕の中に小動物（フェレットだろうか？）を抱えている茶髪をツインテールにした少女が尻餅をついている。

だが、少女よりオレの目が明確に見たのは1m半程の真つ黒い球体。赤い目が輝き触手のようなものがうねうね動いている。どう見ても通常の生態系に存在する生物ではない。だがオレの知ってる魔物にもあんな奴は存在しない。ならアレはなんだ？というか助けを呼んだ奴はどこだ？

そう考えている内に黒い生物が少女に迫った。少女は怖がって体を縮める。

（……今はアレをなんとかするか。）

内心舌打ちしながらオレは両足に力を込めて走り出した。

第1話 訪れた異世界（後書き）

シノンの知識は軽く博士の座を取れるくらいだと思ってください。

第2話 白き魔導師との出会いと異世界での初戦闘（前書き）

やっとなのはとご対面です。どうぞ。

デバイスの言語は本編にあった台詞や技名などを言うときは出来る限り英語にして普通の会話は日本語で書いていきます。『』は通信やデバイスの言葉を書くときに使います。

第2話 白き魔導師との出会いと異世界での初戦闘

少女、高町なのははその日は奇妙な夢を見て目覚めた。暗い森の中で民族装束を着た少年が黒いナニかと戦い深手を負い助けを求めた。夢だった。なのはは目覚めてその夢を”変な夢”と片付けた。

だがその日の学校が終わり放課後に友人たちと塾に行こうとした時、夢で見た森とそっくりの道を通り、そこで一匹の怪我を負ったフェレットを見つけた。そのフェレットは普通のフェレットの中でも変わった毛並みをしていて、首に赤い宝玉をぶら下げている。とりあえずフェレットは動物病院に預け、誰が預かるかを友人達と相談しながらそのときはそのまま塾に向かった。

そしてその夜、なのはは親にフェレットを飼う許可をもらい、そのことを友人達にメールで伝えて眠ろうとした。だが、その時……

(助けて……お願い助けて……)

頭の中に直接声が響いてきた。なのはは謎の声に驚き体をビクリと震わせる。

(誰か……この声が聞こえたら……お願い……)

声はそこで途切れた。なのはは混乱したが、直感で昼間のフェレットと何か関係があると思いつきに替えて家を飛び出し動物病院に向かった。

そして動物病院に着いたのだが、そこで最初に映ったのは夢で見たのと同じ黒いナニかが病院に突っ込んでいる姿だった。

混乱に頭を悩ませていると昼間のフェレットが病院から飛び出してきた。

フェレットが無事なことになのはは一瞬安堵したが、次の瞬間なんとフェレットがしゃべり「君には力がある。お願い力を貸して！」と言ってきた。

なのは今は説明より目の前の事態を何とかすることを優先することにし、フェレットに合意の返事を返そうとして顔を上げた。・・・だが、目の前にはこちらにタックルをかましてきた黒い球体があった。

背後は壁。回避は不可能。そう頭が理解した。なのはは恐怖に耐えられなくなり目を瞑った。

だが次の瞬間。

「崩襲脚・風牙!！」

左の方から男の声が聞こえ・・・。

ドオオン!!

電柱にトラックが激突したような音が響いた。

なのはは恐る恐る目を開ける。すると目の前にいた黒い球体は右の方向の約5メートル程の所にクレーターを作って横たわっていた。だが、まだ生きているらしく球体の体を動かして起き上がるうとしている。

そして今なのは目の前に立っていたのはなのはより少し年上ぐらいの少年。青いジーパンをはいて上には黒のTシャツ、その上に茶色の皮のジャンパーを着ている。顔はかなり整っていて将来は確実に美形になる顔だ。瞳は夜間でも美しい深い蒼眼。そしてなのは視線は少年の腰ぐらいまである髪に留まった。銀髪。白髪ではなく確かに銀髪と言える髪が月の光を浴びてとても美しく見えた。

そして少年はなのはの方に眼を向け、なのはと眼を合わせた。

S i d e シノン

オレは黒い球体が少女に近づこうとしたので走る速度を上げる。そして走りながら右足に風を集める。やがて風は右足の爪先から膝までを竜巻のように覆った。

およそ3メートル先まで近づいたところで黒い球体の赤い眼がこちらを向くが遅い。オレはもうその場からまっすぐにジャンプして球体の懐に入っているのだから。

オレはそのまま後ろに引いた右足を振るって跳び蹴りを放つ。(イメージ：仮面ライダーカブトのガタツクのライダーキック)*説明しづらい時はこんな風に例えを使います。

「崩襲脚・風牙!!」

蹴りは見事に黒い球体に突き刺さり、脚に纏った風が球体を奥に吹き飛ばす。というか蹴りの感触が沼地の地面を踏んだような感じ(はつきりって気持ち悪い感触)だったので手応えがわからない。

球体は5メートルほど奥に吹っ飛び地面にクレータを作って着地（？）した。

オレは一端球体から眼を外し、少女の方に眼を向ける。少女はオレを見上げて呆けている。なんだ？

「大丈夫か？」

一応体調の確認のために聞いてみる。すると少女は……。

「え？あ！……は、はい大丈夫です。……あの……「ああ待って」……え？」

「まずはアレを黙らせてからにしよう」

そう言っただけでオレは親指で黒い球体を差す。いつの間にか立ち上がってカエルのように跳んでこちらに近づいてくる。少女は驚いたのか恐怖したのか体をびくりと震わせる。どうやらさっきの蹴りで倒されたと思っただけらしい。

「すぐに終わらせるからそこで「待ってください！！」「ん？」

突然オレの声でも少女の声でもない声が割り込んでくる。しかもかなり近くから。聞こえた方向に眼を動かすとそこにいたのは一匹のフェレット。……まさか。

「もしかして……さっきの助けを呼んだのは……」

「はい、僕です」

とりあえずなんでフレットが喋っている事については今は置いておこう。

「で？なんだい？」

「あれはジュエルシードという物によってああいう姿をしているんです。ジュエルシードを封印しないとあれは倒せません」

フレットの言葉にオレは内心舌打ちする。ジュエルシードという物がどういう物かは知らないが倒しきれないととなると長期戦になるかもしれない。今のオレの体調は悪すぎると言う訳ではないがよい状態でもない。あまり長くなると下手したら倒れるかもしれない。・
・いや。ようは封印できればいいのだ。

「その封印はこの女の子と君だけでできるか？」

「え？はい、可能です」

「なら頼む。オレはそれまで時間を稼ごう」

そう言つてオレは黒い球体に向き直る。球体は後2メートル程まで近づいていた。カエルのように跳んで近づく様は少し笑いものだがそのせいで動きがかなり遅い。この程度のザコに武器は必要ないな。右足から前に踏み込みおよそ三步で距離をゼロにする。そのまま左足を上に突き上げて球体を空中に打ち上げる。そこから右足で地面を蹴って空中に跳び右足で蹴りを撃つ。

「崩襲脚！！」

右足の崩襲脚は空中に浮いた黒い球体を再び地面に叩き落す。今度は落下のエネルギーも加わったのでさつきより一回り大きなクレーターを作った。

「ついでだ・・・烈破掌！」

手応えがよくわからないので念には念を入れて落下の際に球体に掌底を打ち込んでおく。さらなる衝撃でクレーターが深くなりおよそ2メートルぐらいまで深くなった。

クレータの中を覗くと球体が体をピクピク痙攣させながらなんとか起き上がろうとしている。なんださつきの攻撃全部通ってたのか。

そう思うと後ろから桜色の綺麗な光が輝き柱を作った。ちょうどさつきの少女がいた場所からだ。

（封印とやらに必要な準備か？ん？なんだこのバカ魔力！本当にあの子一般人かよ！？）

オレに魔術を教えてくれた老人から魔力の感じ方を教えてもらったがここまで莫大な魔力を持った人間はグラニデには一人も存在しなかった。

そして光の柱が消えると少女の姿がさつきと違っていた。白い衣服に白いロングスカート、そして少女の腕には先端に大きな赤い宝玉がはまった杖のような物が握られていた。

「リリカル・マジカル！！ジュエルシード、シリアル21。封印！！」

少女が呪文（？）のような言葉を叫ぶと杖の宝玉部分から女性の声が聞こえ桜色の鞭のような光が伸びて球体を締め付ける。球体はもがいて抵抗するが光はそれ以上の力で球体を包んでいく。

数秒後に光が消え、球体があった場所には21と英語の数字が刻まれた青い宝石があった。

「それがジュエルシードです。レイジングハートで触れて」

フレットの言葉に少女は頷きレイジングハート（恐らくあの杖の名前だろう）を宝石、ジュエルシードに近づける。するとジュエルシードはレイジングハートの宝玉部分に吸収された。それと同時にレイジングハートが輝き小さなネックレスサイズの赤い宝玉に戻り、少女の服装も元の格好に戻る。

「封印完了、か？」「あ・・・あの・・・」「ん？」

一人で安堵の息を吐くと少女が話しかけてきた。

「何かな？」

「は、はい！！・・・あのさっきは助けてくれて・・・あの」

少女は恐らく礼を言おうとしているのだろうが慌てているので発言が拳動不審だ。

「えーと、とりあえず少し落ちついて」にあ！！」「ん！！んん？」

落ち着かせようとして声をかけると少女が足元にはら撒かれていたコンクリートの破片に脚をつまずかせ猫のような悲鳴を上げて地面に前のめりにこけた。数秒待ってみて少女がまったく動かないということは気絶したのだろうか？

「えーと・・・なに？これ・・・」

しばらく呆然としていたが周りからパトカーのサイレンの音が聞こえ、家に明かりが点き始めた。このままここにいと不味いな。仕方ない。

「よいしょっと」

気絶している少女を右肩に担ぎ、フェレットを頭の上に乗せる。呆然としているフェレットを手で持ち上げ頭に寄せ「掴まってるよ」といって走り出しオレはその場を離れた。

第2話 白き魔導師との出会いと異世界での初戦闘（後書き）

崩襲脚・風牙

シノンが生み出したオリジナル技。普通の崩襲脚と違い足に風を纏わせることで貫通力と攻撃の命中回数が上がっている。

はい。ジュエルシードの初封印でした。主人公暴走体を圧倒しました。

言い忘れていたのですが作者は原作知識が少しうる覚えなので本編と微妙な違い生じると思います。例 台詞とか敵の攻撃や姿とか。

第3話 向き合う真実と自分の欠陥（前書き）

サブタイトル考えるの難しいです。

第3話 向き合う真実と自分の欠陥

Side シノン

オレは少女を肩に担ぎフェレットを頭に寄せ、ひとまず近くにあった公園にたどり着いた。相変わらず体調の悪さが体に響いている。というか足の感覚が徐々に無くなり始めている。体もなんだか重し。

まあ女の子一人とフェレット一匹ぐらいでどうにかなるほどぬるい体をしていないが。

「よつと」

少女をベンチに仰向けに寝かせ、オレも座る。深夜なのか公園には人が一人もいない。

「あ……」「ん？」

周りを見渡しているとフェレットが話しかけてきた。

「助けてくれてありがとうございます。僕はユーノ・スクライア。ユーノが名前でスクライアが部族名です」

「ユーノか……オレはシノン。シノン・ガラードだ。よろしく」

フェレットに部族名？フェレットの部族でもあんの？頭の中でフェレットが集落を作っている状況を想像しかけたが振り払って自己紹介をする。

「はい。あと、ごめんなさい。僕のせいでシノンさんとこの女の子を巻き込んでしまいました」

「ああ、この子はともかくオレはたぶん平気だよ。さっきぐらいの奴ならいくらいても八つ裂きにして返り討ちにできるから。あと、さん、はいらないよ」

冗談で言ったつもりは無い。あんな本能レベルでしか動けないような奴など敵ではない。今の状態ではどうだかわからないが……。

それからオレはユーノにジュエルシードについて詳しい事情を聞いた。なんでもジュエルシードは合計21個あって、利用方法が”願いを叶える”という漠然としたものらしい。だがジュエルシードは願いの叶え方がひどく歪んでいてまともな形で願いが叶うことはまず無いそうだ。それとジュエルシードはユーノが異世界で発掘し、運送していた所を何者かに襲撃されてジュエルシードはこの町、海鳴市に散らばったらしい。ユーノは責任を感じジュエルシードを回収に来たのだが力不足によりさつき封印した奴に深手を負わされ、そしてそこを少女に拾われたそうだ。

つうかユーノって異世界から来たんだな。ニアタから異世界の存在は聞いてたけど……。なるほど、異世界ならフェレットの集落があっても不思議じゃないな。

「ねえシノン、なんだかすごい誤解とかしてない？」

「え？いや別に。と言うかそれってユーノに責任って無いんじゃないか？」

ユーノは発掘しただけでジュエルシードが散らばったのはほぼ犯人

のせいだろう。

「でも、あれは僕が発掘したものなんだ。だから僕が回収しなくちゃ」

「・・・そうか」

ユーノにはユーノなりのけじめのつけ方がある。そう納得してオレはそれ以上言わなかった。

一通り話を終えたオレたちは今だ気絶している少女に目を向ける。起きる気配はまったくない、家に運んでやりたいがこの子がどこに住んでいるのかまったく知らない。ユーノとどうするか迷っている。少女の額にたんこぶが出来ているのを見つけた。

(可愛い顔が台無しだな、よし)

少女の額に右手の指先を乗せ、瞳を閉じる。

「聖なる力よ、来い。ファーストエイド」

恐らくこれで消えるだろう。そう思って治療術を使うと、右手が一瞬強く発光し本来ゆっくり治っていくはずの傷が一瞬で治った。

「な!?!」

「デバイスの補助なしで回復魔法を使った!?!」

となりでユーノがなにか驚いているがオレも驚いていてそれどころ

ではない。今の治癒術、本来の効果より約2〜3倍の力を発揮した。どう考えても異常だ。理由として考えられるのは……。

(この右腕か……)

これしかない。理屈はさっぱりだがどうやらこの右腕は術の威力や効果を増幅させる機能があるようだ。なんだか……ただでさえオレは人間かどうか怪しいのに段々人間離れしていつてるな。

「ん？ユーノ、デバイスってなんだ？」

「え？魔法が使えるのにデバイスを知らないの？デバイスって言うのは僕たち魔導師の補助をしてくれる武器みたいな物だよ。たとえばその宝玉、レイジングハートもデバイスだよ」

『初めまして、シノン』

「おう、よろしく」

挨拶されたのでレイジングハートに挨拶を返す。

さて、そろそろ聞くか……。

「なあ、ユーノ」

「なに？」

「この世界ってさ、なんて名前だ？」

確かめなければならぬ。オレがあそこに帰れるのか。

「ええーと、97管理外世界”地球”だけど」

「んじゃさ、グラニデって世界聞いたことあるか？」

「んー。僕も結構別の世界を知ってるけど聞いたこと無いかな」

「……………そっか、ありがとう」

ユーノの言葉はオレの頭の中に引つかかっていた物を綺麗に破壊した。それと同時に自分の考えていたことが正解だったと理解する。

(ああー、オレはもう”元の世界には帰れない”んだな)
グラニデ

少し呆然としてみると、少女のポケットの中に携帯電話が入っているのに気づいた。アドレス帳を見ると、自宅と書かれた番号があったので早速電話をかける。

ぷるるるる……………はい、もしもし。高町ですが」

2、3回コールがなった後、声から察するに20代後半ほどの若い男性が電話に出た。オレは喉を数回鳴らして秘密技の一つである声変わりを使って声を変える。(ジェイドの声)

「すみません。そちらのお宅に茶色の髪をした9歳くらいの女の子はいらっしゃいますか？」

とりあえず少女の特徴を述べて確認を取る。

『はい、一番下の娘がいますが。なのはに何か？』

ふむ、どうやら間違いないらしい。あとこの少女の名前は、なのはか。

「いえ、道ばたで転んだのが気絶していたので公園に寝かせています。送り届けたいのですが家がわからないので迎えに来ていただけませんか？」

『……………！！わかりました。すぐに向かいます』

そう言われて電話が切れる。携帯を少女の体に乗せ、ユーノの方を向く。

「ユーノ、この子の家に電話して迎えを呼んだからお前はこの子についてあげてくれ」

「え？シノンは？」

「オレは少しやることがあるんでな。ここでお別れだ」

「え？ちょ……シノン！？どうかしたの？なんだか様子が……」

ユーノの言葉を無視してオレは走り出し、公園を離れた。

3分ほど走ったところで止まり、オレは近くにあった木を右拳で……
………思いっきり殴った。

ベキ！！！！

木は折れこそしなかったが大きな亀裂を作った。

「……ちくしょう……ちくしょう……」

うわ言のように呟きながらその場に膝を着く。

「もう帰れないって……あの場所にはもう帰れないって……悲しいはずなのに……」

もう一度右拳を木に打つ。だが先ほどの威力はなく、とても非力に見える。

「なんで……なんで涙が出ない……どうしてオレはこんなに冷静でいられる……」

自分の生まれに絶望し、仲間とともに戦い、死んだはずなのに生きていて、仕舞いには異常な体となって自分の世界とは違う世界に飛ばされた。やってられない。いやになる。泣き出してしまいたい。だがオレ自身が事態を冷静に受け止めていた。

「くそ……こんなにも感情が溢れてくるのに……こんなにも空っぽだったのか、オレは……」

そのときもオレは冷静に自分が人としてとっくに壊れていると認めた。

第3話 向き合う真実と自分の欠陥（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

グラニデは次元世界ではなく並行世界なのでユーノも管理局もグラニデの存在は知らないという設定です。

感想などありましたらお願いします。

第4話 雷光との出会い（前書き）

すみません。更新遅くなりました。

今回ほんの少しですがフェイトト出せました。どうぞ。

第4話 雷光との出会い

S i d e シノン

オレはしばらくその場で自分の現状を悔やんでいた。結局最後まで涙は一滴も出なかった。

だが、涙が出せなかったことから冷静になるのにさほど時間はかからなかった。

「・・・さて、これからどうしたものかなあ」

さつきは自分の現状に冷静さを失いユーノの元を離れたが、よく考えれば今のオレはこの世界の見方で” 戸籍も家も無い謎の孤児” に当てはまるのだ。頭に流れ込んできた知識のおかげで右も左もわからないというわけではないというのが唯一つの救いか。なぜかわからないが流れ込んできた知識の中にはパソコンの使い方と作り方、さらにはハッキングと偽造戸籍の作り方もある。

「とりあえず偽造戸籍で不法入国の危険は無くなったな。あとは・・・衣食住の問題か・・・」

衣服は今着ている服で当分持つだろう、洗濯などは川の水を使えばいい。まあいざとなったら投影魔術で作ればいい。食料も森にいる動物やキノコをとればいいか。調理法はもともと知ってるしうまく出来る自信がある。あとは・・・住む場所だ。どこかに廃屋でもあれば改造して家にすることもできるのだがそんな都合のいいものがそこら辺に転がっているはずないか。

「とりあえず今日は森で野宿でもするか、さすがに少し休みたい。あとは食料調達場の確保か、幸いこの世界には魔物はいないみたいだし」

グラニデでは基本街を出て馬鹿正直に歩いていけば5分で魔物と遭遇できる。だから森などで野宿をする際は交代制で見張りを決めるのが基本だった。だがこの世界には魔物はいないようなので森の中で爆睡しても大丈夫だ。異世界に来たことは驚いたが魔物がいない世界に来れたことは幸運なのだろう。

「……さて、行くか……ん？」

歩き出そうとした瞬間膨大な魔力が無差別に撒き散らされた気配を感じた。この気配はさつきにも感じた。そう……。

「ジュエルシード……気配から大体、2つくらいか？」

森の方からジュエルシードの気配を感じた。どうする……今の体調でさつきのような奴らを2体同時に相手にするのは別に難しくない。だがユーノが言っていた。”ジュエルシードは封印しないと対処できない”オレの手にはレイジングハートのようなデバイスは無い。つまりオレにはジュエルシードを無力化することは出来ないということ。でも……。

「ほっとくわけにはいかねえーよなー、やっぱり」

さつき戦ったような奴がもし街のほうに出てきたら被害が出るだろう。最悪死者が出るかもしれない。それはだめだ。第一オレ自身が許せない。となればやることは一つ。

「行くか」

ほとんど感覚が無くなってきた足に鞭打ちオレは森の中に走っていた。

Side Out

シノン は森に入ってジュエルシードの気配を辿る。

(二つともすぐ近くにあるな、それに二つとも同じ場所か)

「こつちだな」

草木を裂いて進み、シノンは二つの反応の発生源にたどり着いた。

『あの・・・すみません、よろしいですか?』

「ん? ああ、お前か・・・どうしたんだ?」

『あなたは今デバイスがいるのでしょうか? でしたら私を・・・「ちよい待ち」え?』

銀色カードの言葉をシノンは一端止める。シノンが睨むように見た林の中に二つの巨大な影があった。

目を凝らすと、そこにいたのは・・・巨大な蛇とカマキリだった。両方が3メートルほどあり、ヘビが口を開くと体と一緒に巨大化した牙も見えた。しかも牙の先端から少し紫色の液体が垂れたのが見えたのでもしかしたら毒を持っているのかもしれない。隣にいるカマキリは人の体を簡単に切断できそうなほど巨大化した両手の刃

を構えている。その刃が横の木に振るわれると……木は綺麗に横半分になった。

「おいおい、原生物まで取り込むのかよ。いや、この場合願いを叶えたか。」

2体の武器を目の当たりにしてもシノンは冷静に身構え、殺気を放った。

シノンの殺気を本能で感じたのかヘビとカマキリはシノンの方に急接近してくる。

シノンも2対に向かって走り出す。

平行して走っていた二体の内のヘビが近づく速さを早めてシノンに近づいてくる。首を前に出してリアルアナコンダのような口をシノンに向けてきた。シノンはそれを上に飛び越えて回避する。ヘビの口はシノンの後ろにあった木に噛み付く。すると噛み付かれた木は不気味な音を立てて溶け出した。シノンは一瞬顔が凍りついたがすぐに気を取り戻して上を取った状態から足を地面を踏み潰すような勢いで振り下ろした。

「鷹爪襲撃!!」

振り下ろされた足はヘビの体に直撃し、体をくの字に折り曲げた。シノンは蹴りが突き刺さった体制からひざを軽く折り、反動でばねのように体を上に打ち上げる。ヘビはくの字のまましばらく体を痙攣させて地面に倒れた。

(まず一体目と……次は……)

『そんな、先ほどもでしたがロストロギアを取り込んだ原生生物を生身で圧倒すなんて・・・あなた本当に人間ですか？』

「久々に口開いたら失礼なこと言うなお前・・・さて、もう一体は・・・」

片膝着地と同時にシノンは銀色カードに軽口を叩きながら周りを見渡してカマキリを探す。しかし、さっきまでの場所にカマキリはいなかった。シノンは気配を探り、カマキリを探しだした。

『危ない!!うし・・・後ろか』・・・な!?!』

シノンはすぐにその場から右に転がる。すると次の瞬間、シノンの立っていた場所に鋭く巨大な刃が突き刺さった。その刃を振り下ろしたカマキリはそのまま空いている右手の刃をシノンに目掛けて横薙ぎに振るってきた。シノンは身を低くして前に前転、カマキリの懐に入り込み右手を掌底の構えにする。手の平に闘気を圧縮しカマキリの体に叩きつける。

「くたばれ・・・白虎こ・・・ぐっ!!」

そのまま闘気を爆発させようとしたが突然シノンの体を莫大な疲労感が襲い、膝が力を失いがくりと倒れた。体に今までの反動が出てき始めたのだ。

「くそ・・・こんな時に・・・がっ!!」

シノンは額に手を当ててぐらつく視界を整えようとするが、カマキリの振るった腕になぎ払われ木に背中からぶつかった。怪我と呼べ

るレベルではないが痛いものは痛い。

「ちっ！……本調子ならこんなザコ一瞬で……仕方ないか……」

シノンには舌打ちしながら右腕を左に振りかぶる状態に持つてくる。シノンの詠唱の構えだ。カマキリは何か危ういと感じたのかシノンに接近してくる。シノンは左手の人差し指と親指を立て、ピストルの形を作る。人差し指をカマキリに向けると指の先端に薄紫が混じった黒い色の球体が出る。すると、黒い球体は指の先端からカマキリに向けて発射された。しかも一発だけでなくマシンガンのフルオート射撃のような勢いで連続でだ。黒い球体はカマキリに着弾すると弾けてカマキリを後ろに後退させた。

ガンド、シノンが習った魔術の一つで軽い呪いを放つ魔術だ。だが呪いと言っても風邪で三日寝込む程度のものだが。しかし錬度を磨いた上級のガンドは質量を持ち、物理的な破壊力が得られる。決して大きくは無いが連射すればカマキリの足止めくらいできる。

その隙にシノンは口を動かした。

「揺らめく焰、猛追……ファイアーボール！」

右腕を左に振りかぶる。すると、シノンの近くに16個の火球が現れ、すさまじい速さでカマキリのほうに一齐に発射された。（イメージ：ネギまの魔法の射手）

火球は全て同タイムで着弾、右腕の効果で威力が上がっているおかげで手榴弾10個分の爆発がカマキリを包む。

数秒で煙が晴れる。そして煙が晴れると、そこにはカマキリが体に焦げ目をつけながら倒れていた。

「ふうー。終わりか・・・しかしこんなザコに魔術まで使うことになるとは・・・」

シノンはひざに手をつけて呼吸を整える。

「でもこれ、まだ終わってねえーんだよな・・・オレ自身がいつまで持つか・・・」

ジュエルシールドが摘出されていないのだからこの二匹は遅かれ早かれまた復活するだろう。しかもシノンの肉体は予想よりもひどく疲労感を抱え込んでいる。恐らくそんなに長くは戦えないだろう。

「さあーて、マジでどうするか『Sealing』ん？」

突然シノンの後方から電子音が混じった低い男性の音が聞こえた。シノンがそちらに首を向けようとした瞬間、カマキリとヘビをサークル上に囲った巨大な落雷が落ちてきた。

そして雷が止むと、体の大きさが元に戻った二匹とジュエルシールドが二つ落ちていた。

「それを渡してください」

今度は後方から女の子の音が聞こえた。しかし、声は先ほど助けた高町なのは”とは違かった。

そして、シノンは今度こそ後ろを向いた。

するとそこにいたのは、美しい金色の髪とルビーの瞳をもち、手に黒く長い斧（デバイスだろうか？）を持った少女だった。

第4話 雷光との出会い（後書き）

文才が欲しいです。ちくしょーーーー！！

今回は多分銀色カードがなんなのかの判明（たぶんとっくに予想できてると思いますが）とフェイトとの対面を書けると思います。

第5話 銀色カードの正体（前書き）

刀の部分の色の表現をミスっていたので直しました。ご覧ください。

第5話 銀色カードの正体

Side シノン

突然現れた少女は空に浮きながらオレに話しかけてきた。(とい
うかユーノたちの魔法って空も飛べたんだな)少女が言った”それ
”とは多分ジュエルシードだろう。だが、オレにはそのことより優
先するべき質問がある。

「なあー1つ聞いていいかな？その格好は君の趣味か？」

目の前の少女の格好は変の一言に尽きる。まずマント。なんと
でもマントだ。黒いマント。コスプレか？グラニデでもマントを
着るやつはいたがこの世界では珍しいを通り越して変人や怪しい人
の格好だ。そして、服装。これはとてもひどい。ファッション
どころではなく格好がとても際どいのだ。袖なしのぴったりとし
た黒い生地にミニスカート、黒いニーソックスに黒い手袋。オレも
グラニデでは黒一色の服装だったが、少女の姿はあの年でよく着る
気になったなと素直に感心するところがある。

今までも普段から際どい服を着ている女性は見たことがあるが、あ
の年くらいであんな際どい格好をする輩はさすがに初めてだ。

(ませんでんのか？あの年で？)

少女の年齢は軽く見て高町なのはと同じ(約9歳か8歳後期)くら
いだ。あの年の子供にあんな変化を与える出来事とはどんなものな
のだろう。事情によっては少し解決に協力しようかと思う。うーん、
オレが人にこんなに同情の感情をだすとはなあー。

「え？これはバリアジャケットを生成するときに動きやすさをイメージしたらこうなったんですけど」

バリアジャケットとは恐らく高町なのはが途中から着ていた白い服と同じものことだろう。というか、つまりあれか？あの格好はあの子自身がイメージして出来た産物だと？動きやすさ追求するにしても限度があるだろう。

「そうか、ありがと。・・・とりあえず強く生きてくれ・・・」

「？」

掛ける言葉が見つからずとりあえずエールを送ったが、少女は小鳥のように首を傾げたのでどうやら通じていないようだ。

「とにかく、その青い石を渡してください」

少女は気を取り直して再び要求してきた。オレは少女の心境の複雑さについての考えを一端捨て、少女と目を合わせる。

「悪いがオレはさっきもこのジュエルシードの恐ろしさを身を持って体験したんでね。できればこのまま破壊したいんだが・・・」

「そうですか・・・」

オレの言葉に少女は一瞬残念そうな顔をしたがすぐに真剣な表情に戻り、手に持っている黒い斧の矛先をこちらに向けてきた。

「なら、力尽くでいただいでいきます。バルディッシュュ！」

『Yes, sir. Photon Lancer. get set.』

少女がバルディッシュ（恐らくあのデバイスの名前だろう）の名を呼ぶと、少女の足元に金色の円形の陣（恐らく魔方陣）が現れる。そして待つていたと言わんばかりの速さで少女の周囲に雷を纏った黄金の光の槍が4つ程出現した。

「打ち砕け・・・ファイアー！！」

少女の命令が響き光の槍の矛先が全てオレの方に向けられ発射される。弾丸より早いか分からないが恐らく時速150キロぐらいはあるだろう。オレは落ちているジュエルシールドを拾って胸ポケットに突っ込み、その場から前転で移動した。

ドン！！ドン！！ドン！！ドン！！

転がった後すぐにさっきまでいた場所から砲弾が命中したような音が聞こえた。振り返ってみると、そこには本当に砲弾が着弾したような跡が4つあった。もし当たっていたらと思うと全身から冷や汗が出てくる。

「殺す気か！！あんなもの食らってたら頭がトマトみたいになつたぞ！？」

「大丈夫です。非殺傷設定ですから」

非殺傷？つまり出血などの傷は出来ないってことか？だがいくらなんでもあんなものを人間に向けるなんてオーバークイルも良い所だ。そんなことを考えている間に少女はまた光の槍、フォトンランサー

を出現させてオレに狙いを定めてくる。しかも今度は5発、さつきよりも多い。

「ちい！！」

オレは舌打ちして木々が濃い方向に走っていく。さつきフォトランスナーを避けた時にわかったが、あれは誘導弾ではなく直射弾だ。木々が多いところに入り込めば木々が盾になってくれる。ただでさえ向こうは空を飛んでいて地形的なアドバンテージがあり魔力も高町なのはと同じくらいに膨大、対してこっちは体調最悪、過労、物理的攻撃がほとんど届かない、最悪の状態だ。とりあえず一端逃げる。ジュエルシードが封印できてそれは今オレの手の中にあるんだ、あの少女と無理に戦う必要は無い。

「よし、とりあえず逃げて・・・うつ！！」

本格的に速度を上げようとした瞬間、また莫大な疲労感に襲われた。目が霞む、足が動かない。後ろから少女の気配が近づいてくる。

追いつかれる。今の体であのフォトランスナーを一発でも喰らえば確実に気絶する。あの少女の雰囲気からして殺されることは無いだろうがジュエルシードが奪われてしまう。

(逃げないと・・・くそ・・・動けよ・・・)

動こうとしても体がまったく動いてくれない。感覚がもう無い足はガタガタと悲鳴を上げ、視界は霧のようなもやがかかってきてだんだん暗くなっていく。

「ちくしょー・・・限界・・・かよ・・・」

毒づきながらオレの瞼は閉じていく。そして瞼が閉じようとした瞬間……。

『あなたに問います』

銀色カードの女性の声が聞こえた。いままでと違って真剣な雰囲気を感じさせる声だ。

『力が欲しいですか？今を乗り越える魔導の力が……』

「欲しい」

自分でも驚くぐらいの速さで即答した。何故だろう。別に負けても殺されるわけでもないのに、ただ”負ける”という言葉自体の中の何か在必死に否定した。

『承知しました。では私に名を与えてください』

「お前の名は……」

名前はすぐに決まった。こいつの名は……。

「……」
「ヴェルフグリント」

『登録開始……完了。自機の名前を”ヴェルフグリント”に設定。今より私はあなたの命尽きるまであなたの剣であり、盾であり、どこまでもあなたと共にあるデバイスです。』

そう言うと銀色カード、ヴェルフグリントは空中に浮き始め、オレ

の周りに銀色の魔法陣が展開された。だが、形が少女のものとは違う。オレの魔法陣は中心に剣十字が描かれ、それを三角形が囲んでいるという形の魔法陣だった。そして魔方陣から銀色の粒子のようなものが発生しオレの体に溶け込んでいく。すると、今にも吹っ飛びそうだった意識がはつきりしてきた。

『マスターの魔力を借りて初期搭載の簡単な治癒魔法を使いました。これですばらくは体が問題なく動きます。マスター、武装と騎士甲冑のイメージをお願いします』

「騎士甲冑？」

『戦闘中の魔導師が着ているバリアジャケットと同じものです』

「わかった。武装は……なんでも良いのか？」

『はい、私は基本どんな形態にでも変化が可能なので復元不可能な形はありません。ジャケットもです。マスターはイメージだけしてください、生成は私が行いますので』

そう聞いてオレはすぐにイメージを開始する。服装、バリアジャケットは簡単に決まるが武器はどうするか……。うん、なんでも使えるがやっぱりここは使い慣れた武器にするか。

『イメージ受信完了。生成開始。』

光が弾け、オレの体を白い光が包む。もともと着ていた服が無くなり、新しい……。オレのイメージした服が装着される。

まず上半身に黒いインナーが現れ、その上に黒い皮製のコートを着

る。続いて下半身に灰色が混じり、両方のポケット辺りに一本のベルトが小さい山を作るように着けられた薄黒い長いズボンが現れ足には茶色のブーツ。ちなみにこのブーツ、靴底にかなり硬い鉄板が仕込んであったりする。復元不可能な形は無いと言ったのでイメージしてみたが本当に出てきたよ。

そしてヴェルフグリントの蒼い宝玉部分が輝き武器へと形を変える。どこからともなく幅広で、厚みがある日本刀とそれを収める黒塗りの鞘が現れた。刃は月光を浴びて輝く美しい銀色。柄は白く鍔は円形の形で黒塗り。そしてヴェルフグリントの蒼い宝玉部分は日本刀の柄尻に埋め込まれている。(イメージ：DMCの閻魔刀の柄尻に蒼い宝玉がはまったバージョン)

オレは右手で日本刀を、左手で鞘を手を取って右手の刀を上空に放り投げる。刀は縦に回転しながら垂直に落ちてくる。オレは鞘を持ったままの左手を左に伸ばす。すると放り投げた刀はカチャン！と綺麗に音を立てて鞘に納まった。納まった瞬間オレの両手に指出しのグローブが着き、そのまま納めた刀を左腰に差す。

これで準備完了。オレは目の前で呆然としている少女に目を合わせて口を開く。その言葉は戦う合図にも、相手に対する挑発にも聞こえてくる。

「さあー。戦おうか、魔導師の少女・・・」

第5話 銀色カードの正体（後書き）

古代ベルカ式デバイス・ヴェルフグリント

シノンが地球に現れた場所の近くに偶然落ちていたデバイス。

古代ベルカ時代に作られた純系の古代ベルカ式デバイス。ただし、本来の使用用途が戦闘ではないのでカートリッジシステムは未搭載（それでも並みのアームドデバイスなど比べ物にならない程の処理能力、強度、優秀なAIを持つ、さらには形態の自由変化機能なども積んでいる）データなどの内包量がかなりの量。（データの図書館といえるくらい）

AI人格は女性。稼働年数はかなりのものなので普通のデバイスのAIより人間臭く人間とも普通に話せるほど人格が完成されている。

5話まで出来ました。でもやっぱりぐだぐだ・・・orz。
文才が欲しいくらいですが、がんばります。引き続き温かい目で見てください。
それでは。

第6話 圧倒する実力（前書き）

1万PV突破！！やったー！！！！
皆さん、ありがとうございます。

ではご覧下さい、どうぞ。

第6話 圧倒する実力

Side シノン

オレは目の前の少女に言葉を飛ばした。すると少女は、はっとなって手に握っているバルディッシュの矛先をこちらに向けてくる。

「くっ！！打ち砕け！ファイアー！！」

ドン！！ドン！！ドン！！

少女の声と共にフォトンランサーが3発オレ目掛けて発射される。さっきまでの状態ならすぐに回避を取っていたが今の状態なら避ける必要はない。左腰に差した刀に右手をかける。そしてフォトンランサー3発が当たるまであと1メートルほどになった瞬間、右手を瞬速の速さで振りぬいた。

次の瞬間、フォトンランサーはオレの体に着弾せずに金色の粒子になって大気に霧散した。1発ではない、3発全て同時に、だ。

「え？あれ？」

少女は何が起こったのかわからないらしくオロオロしている。

（ふむ、なんとなくだがあの少女、いじったら楽しそうだな）

そんなことを考えながら右手に握った刀を握りなおして縦に一回振る。

「うん、不具合なし・・・今のに耐えたんだ、上等だな」

今オレがやったのはごく単純、振りぬいた途端に一瞬で三回分の斬撃を出しただけ。まあ一口で言うだけで実現できる技ではないがな。んで、実は少女の攻撃を無力化したついでに手に握っている”こいつ”がオレの剣技にどのくらい耐えられるか試してみた。

オレは生み出されてからのほとんどの年月が戦闘なので戦闘技術は武器の中では剣が一番高い。自惚れているわけではないがそこら辺のなまくらな刀ではオレの剣技に耐えることは出来ない。

これは予想ではなく事実だ。昔、傭兵の仕事中に持っていた刀がオレの術技に耐え切れず中間から綺麗に折れたことがあったのだ。おかげでその後は素手で敵を倒す羽目になった。そのことからオレはグラニデでは自分専用の刀を使って戦っていた。

そんなこんなで今この刀を試したのだが・・・予想以上だった。今の3連続の斬撃を放つても刃がまったく悲鳴を上げない。もしかしたらオレの剣技に全部耐えられるかもしれない。まあ一試さなければ分からないが。

さて、自分の武器の調子も掴んだし・・・。

「そろそろ行くか・・・」

『了解。敵対象をミットチルダ式魔導師と決定。敵魔導師のバリアジャケット密度から計算して敵魔導師の戦闘スタイルは高機動を生かしたインファイトと判断します』

なんだか意味が分からない単語が少し混ざっているが今は置いてお

こう。というか、高機動のインファイトだと？じゃーさっきまで撃つてたフォトンランサーは牽制、または射撃用の補助ってところか？

「バルディッシュ」

『Yes, sir. Scythe form.』

少女の声の後に少女のデバイスが形を変えた斧の刃部分が持ち上がり金色の光（恐らく魔力）で作られた鎌の形をした刃が出てきた。少女の服の色からどこか死神を想像させる。オレに射撃が効かないと思つて近接戦闘に切り替えたのか、というかデバイスってあんなことも出来るのか、今度ヴェルフグリントと話してみるか。

『Sonic Move』

バルディッシュの声が聞こえた次の瞬間、少女の姿が消えたようにその場からなくなった。もちろん本当に消えたわけではないだろう、恐らく高速移動の類だ。経験で分かる。それでもつてそういうのに頼りすぎる奴は大抵は……。

「後ろに来るんだよなあ」

そう言いながら右手の刀を逆手に持つて右手を後ろに突き出す。すると……。

ガン！！

後ろからかん高い音が聞こえ、右手に衝突の衝撃が伝わってくる。目を移すと、少女がびっくりした顔で鎌を横薙ぎに振るつた体制で固まっていた。

「速いな・・・だが、それだけだ」

そう言つて右腕を前に振り切り少女の鎌を後ろに押し返す。オレは右腕を振り切りながら刀を順手に持ち替えて刀を両手で握つて、後方に目掛けて左薙ぎに振る。

「くっ!!」

少女は後方に跳んで避けようとするがオレに押し返された体制からの回避なので回避しきれない。少女はバルディッシュを前に突き出して盾にする。だがオレの放った斬撃は少女が盾として突き出したバルディッシュの持ち手に食い込み、そのまま綺麗に半分に両断した。

「なんだ、意外にもろいな」

『マスターの斬撃の鋭さが異常なんです』

そうか？せいぜい斬鉄ができる程度の力しか出してないんだが。

「そんな・・・バルディッシュ・・・」

少女は信じられないという顔をしながら空に飛び上がった。一瞬だがあの少女、とても悲しい顔をしていた。

「やりすぎたかな？」

『心配りませんマスター、デバイスのコア部分は無事でしたので恐らく自己修復できるレベルでしょう』

そう言われてよく見てみると、確かにバルディッシュの持ち手の部分がもうくつついている。

「そうか、それならよかった」

『あの、マスター……上を……』

「ん？……うわぁー……」

ヴェルフグリントに言われて上、丁度少女が飛んでいる方向を見ると巨大な雷が少女の周りに留まっていた。まるで少女の命令で雷がその場に集まっているように。

「ええーと……あれは？」

『ミットチルダ式の魔導師が得意とする広域攻撃型の魔法です。およそあと10秒で発射されます』

「防ぐ、または回避することは可能か？」

『初期登録の防御魔法ではあの攻撃は防げません。飛行魔法を使用して逃げてでも恐らく射程範囲からは逃げ切れません』

「となると……残ったのは……」

防ぐのも避けるのも無理、となれば残ってるのは、攻撃による正面からの撃破だ。少女が撃とうとしてる攻撃を上回る攻撃は確かにある。それもたくさん。けどそれをやれば恐らくオレの体は今度こそぶっ倒れるだろう。でも……。

「やるしか、ないんだよなあー」

オレは一度ため息をついて右手の刀を逆手に持つ。そのまま腰を落として右手を後ろに引き、左手を前に向ける。すると、刀の刀身に黒い粒子が集まり始め黒電がほとばしり始める。

少女は気付いたが構わず魔法の発射準備に入る。

オレは刀を後方に引き絞り、少女は槍のような形に変わったバルデイッシュを自分の足元に突き刺すように構える。互いに技を撃つ直前の構えだ。

そして次の瞬間、オレと少女は攻撃を……。

「闇に飲まれる、アイン・ソフ……」

「サンダー……」

放った。

「……アウル!!」

「……レイジ!!」

オレは右手を正面に振りぬいて放った黒い斬撃波。少女は魔方陣に槍を突き刺して放った自然の雷。互いにぶつかり合って数秒後、技の押し合いの均衡が傾いた。有利に傾いたのはオレの方だった。

アイン・ソフ・アウルは雷の真ん中を突っ切ってそのまま少女に命

中。大きな煙を空中に作った。やったかと思ったが視界の端に離脱する金色の光が見えた。

「逃げたか・・・ありがたい・・・うっ！」

『マスター！どうしたのですか！？』

「技と過労の反動だろうな・・・」

回復した体力ごとアイン・ソフ・アウルを撃って全部無くしてしまったのだ。そろそろ本当に限界だろう。

「すまん。少し、休む・・・」

ヴェルフグリントが何かを叫んでいたがオレの意識は今度こそ深い闇に沈んだ。

第6話 圧倒する実力（後書き）

戦闘描写難しいです。（いまさら）

今回初めて秘奥義使いました。ラタトスクのエミルの技です。

他の秘奥義も考えたんですが、サンダーレイジとのぶつかり合いで他にあまり良いのが思いつきませんでした。インディグネイションとかだと威力がありすぎるような気がするし剣の秘奥義だとぶつかり合いにならないような気がしまして。

次からは少しストーリーを飛ばすことになると思います。では、また次回。

第7話 図書館で能力アップ（前書き）

睡魔と闘いながら書いたんでたぶん後半所々文がつながってない部分があるかもしれないです。
では、どうぞ。

第7話 図書館で能力アップ

Side Out

夢の世界。人間が持った決して他人の邪魔が入らない安息の領域。

その世界の一つに、一人の少年が居た。しかしその少年は年相応とはとても言えない場所と状況に居た。

暗い洞窟の中、地に落ちる水滴の音が響く場所。その奥にその少年は居た。およそ7、8程の歳の少年が……血まみれの体で。

少年の近くには1メートル程の体躯の狼の軍勢が倒れていた。もちろん全て死んでいる。首や体を両断された、腹を切られた、頭を潰された、顎と足を砕かれた、さまざまな死に方をした死体がある。やったのは立っている少年だ。少年の体に着いた血は狼の血と同じ臭いがする。だが周辺は狼の死体の腐敗臭の方が強烈だった。

少年も無傷ではない、体に着いた血の中には少年自身の血も混ざっている。よく見ると少年の体もかなりの重傷だ。左腕は肘を狼に噛み付かれて動かなくなり、右の額部分は爪に深く引き裂かれて顔の右半分が真っ赤になるほど血が出ている。さらに腹、噛まれたのか引き裂かれたのか分からないが奥の腸が傷つけられ止まらなく血が流れている。

満身創痍、などと言う言葉を通り越してもはや死に体だ。だが少年の眼からは活力が消えず、右手に持った少年と同じく血塗れの刀を決して手放さない。

「依頼……達成……か……」

それだけを口にして少年は歩き出した。普通ならそのまま大量出血で死ぬがその少年は違った。痛々しく見える傷が徐々に塞がり始めているからだ。

少年は止まらない。”生きるため”ただそれだけの為に、少年はその世界を傷つきながら生きていく。

そこで、その夢の世界は終わった。

Side シノン

顔にざらざらする物が触れている感触を感じてオレは目を覚ました。どうやら顔を横にして眠っているらしい左の頬から草の感触が伝わってきて右眼は太陽の光を浴びている。とりあえず地面に両手を着いて起き上がりその場に胡坐をかいて座る。

「えーと、確かオレは……」

『マスター！！眼が覚めたのですね！！』

「うおっ！ー！」

突然響く女性の声にオレは驚く。周りを見渡し声の発生源を発見。右膝のすぐ側に落ちていた蒼い宝玉が中心にはまった銀色のカードのデバイス、ヴェルフグリントを拾う。

「心配かけたようだな、すまん。ヴェルフグリント」

『いえ、無事に起きられたなら何よりでしたマスター』

そんな会話をしてオレは自分の体の調子を調べる。

「解析、開始（アクセス、スタート）」

（ふむ、疲労は完全に消えたな、血量も正常、病状もなし、うん、完全な健康体だ）

「さっそくで悪いがヴェルフグリント、気絶していた間に何かあったか？」

『はい、マスターが気絶なされていた間にジュエルシードの発動は合計4回確認されました。ですがすべて別の魔導師が封印しました。今の所、町に目立った被害は確認されません』

「4回、か……」

封印したのは高町なのはかあの黒い少女か、どちらにしても人的被害が出てないのならそれに越したことはない。よし、それぐらい分かったならもうここにいる理由はないな。さて、とりあえず森を出るかな。

『しかし本当に安心しました。マスターがあんなに長い間眠っていたのでもう目覚めないかと……』

その言葉にオレは歩き出そうとした足を止めた。なんだろう、今の

言葉の詳細がとても知りたくなってきたぞ。・・・聞いてみるか。

「・・・なあーヴェルフグリント、オレはあの夜からどれくらい気絶してたんだ？」

『は？そうですね・・・月日単位で約3日、詳細時間では49時間38分になります』

「・・・・・・はあ！！！！！」

その時のオレの驚愕の声は森全体に響き、鳥達が一斉に飛び立つほどだった。

あのあとしばらく驚きで動けなかったオレはなんとか現実に戻り、森を抜けた。体力が完璧に戻った今のオレなら森を抜けるぐらいで体力はまったく減らない。

そして森を抜けた後にオレが向かったのは図書館。まずはこの世界の情報と地理が欲しい、それと魔術に関して試したいことがあるのだ。

んで、今は図書館のパソコンを使って世界地図と日本の詳細地図を閲覧中。だが実はまじめに地図を見ているわけでもない、もちろん目を通してはいるが本当の目的はヴェルフグリントを通じてのハッキングによる偽造国籍の作成とヴェルフグリント本体に閲覧中の地図を保存することだ。

(マスター、完了しました)

(うん、ご苦労さま)

今の頭の中に聞こえてきた声による会話はユーノも使っていた魔法の一種である思念通話、通称、念話だ。人前でアクセサリーと会話などとしては危ない人と見られるのでヴェルフグrintが教えてくれたのだ。便利なもので頭の中で相手に話しかけるだけで会話が成立するという魔法だ。魔術でも思念通話はあるにはあるが特殊なパスを繋いだ間でないとならないものだからこれほど便利ではない。

ハッキングという名の情報収集を終えたオレはその後本棚を歩いて回って二十冊位の本を持って本を読むときに使う机に座った。なんだか本を運ぶ際に周りの人たちから奇怪な視線を向けられたが何だ？キールとかハロルドに比べたらこの位少ない方だ。あいつらなんて本を読んで読み終わった本を物体の形に重ねていって、仕舞いには本でベッドを作ってそのまま寝ちまうんだぞ？しかも無意識に、只者じゃねえよ。

おっと、話がずれた。俺の今読んでいる本は神話に登場した英雄や神とその人物が使っていた武器、いわゆる宝具などのことが載っている本だ。ちなみにジャンルはギリシャ、ケルト、北欧、メソポタミア、クトゥルー、全てとはいかないだろうがほとんどのジャンルがある。

そして、なぜこんな本を読んでいるかというところ、オレの投影魔術の強力な手札になるからだ。魔術を教えてくださいました老人(以後、老人)が言っていたが、オレの投影は普通の投影とはまったく使用方法が異なっておりかなり戦闘に特化した形なっているんだそうだ。

本来投影は儀式に不足している道具をその場凌ぎで用意するのが本来の使用用途だ。だがオレの投影は道具の中で神秘を秘めた道具、概念武装という普通の魔術師が作れば腕一本は無くなっても不思議ではない宝具を魔力消費だけのリスクで作ることが出来る。

だが、なんでも作れるというわけではない概念武装とはその名の通り『概念』が込められた武装だ。その概念を理解しなければただの飴細工と変わりない。そしてその『概念』を理解するためには本物を見る、あるいは触れなければならぬ。だが、そんなことは過去にタイムスリップでもしなければ不可能である。

だが、ここでオレの意外な魔術としても才能が発揮された。……
……『起源』である。

起源とはその生命の前世が続いてきた始まりの場所のことだ。起源はたまに魔術師の属性を示すものにもなり、自身の起源を理解した魔術師はその起源に関連する能力を得られることもある。そのなかでオレは老人にオレ自身の起源を教えられ、その能力で投影魔術の強力な使い方を入れた。

オレの起源は3つ『理解』『決断』『選択』である。起源というのは生命の原点であるのでそこに生命というものは存在しない。なかには『静止』『切断』『繋ぐ』などの単語も存在する。あと老人に聞いたが弟子の友人にオレと同じく投影魔術を使う魔術師は『剣』という起源を持っていて少ない魔力で名剣、聖剣を本物と同じくらいの精度で作れるらしい。オレの投影はその魔術師の投影より魔力を喰うし投影は人の不安定なイメージを触媒として物を作るので精度も本物より2、3割低いながらも作ったのは宝具、本物でなくとも強力な武器になることは変わらない。

結果的にオレの投影は文献などの資料から『理解』の起源のおかげで宝具の概念や神秘までもを完全に知ることに成功した。そして知った知識を使って投影を行う。奇跡的にオレの起源のおかげで投影魔術を戦闘技術として利用できるようになった。

ほんでもって現在進行形でオレは急速に宝具の情報を読みついでいる。スレイプニール、カラドボルグ、ゲイボルク、エクスカリバー、他いろいろ。

うん、すごいなこの世界。なんか、もう、色んな意味で。

「うし、これで最後か……ん？」

本を読み終えて顔を上げると、車椅子に座った女の子が本棚に必死に手を伸ばしているのが見えた。オレは席から立ち上がって本を全て片手に持ちながら少女の方に歩いていく。あと、本を一冊ずつ返していくのが面倒だったので視界に入る借りた本の置いてあった場所に返せる本は手裏剣の要領で投げ入れて返却した。おかげで20冊ほどあった本は6冊ほどに減った。

そして、少女が取ろうとした本を取ってあげる。少女は突然現れたオレを呆然と見上げている。

「これかな？」

「あ、はい」

「他にある？取って上げるよ」

「え？ああ、ど、どうも」

その後は少女が求める本を5冊ほど取ってあげた。ちなみに本棚の上部分にある本は跳んで取った。やっぱりというか三角跳びで本を取ったら驚くか。

およそ一時間後。

「あんがとーな、本取ってくれて、さすがに三角跳びはびっくりしたけど。ええーと……」

「ああー、シノン、シノン・ガロード」

「シノン君か、うちは八神はやて。ひらがな三文字ではやて。シノン君ってやっぱり見た目からしてやっぱり外国人？」

少女の言葉にはなまり、関西弁がかかっていた。

「よろしく、はやて。オレはまあー確かに外国人かな育ったのはほとんど……!!」

突然、膨大な魔力の発動を感じて図書館の外が映った窓の方を見る。

(マスター……今……)

(分かってる。ジュエルシールドだな……これは……しかも前とは魔力の発生量が……)

「はやて、すまん。急用が出来た」

「え？そんなん？そつかあー……」

はやては残念そうな顔で俯く、オレははやての頭に手を乗せて軽く撫でてやる。

「すまん、きつとまた会えるよ。互いの名を覚えていれば、ね」

「……うん！」

「それじゃーな、ああーそれとしばらく外には出るな、危ないから
そう言つてオレは身を翻して外に出た。そして町の風景がよく見え
そんな高台を見つけ、そこに走っていく。

高台に登って町を見渡し始めた途端町の交差点から蒼い光が放たれ、
その後すぐに町全体を異変が包んだ。

第7話 図書館で能力アップ（後書き）

なんか今回少し長くなりました。超眠いー。
では、次回。

第8話 街を襲う異変（前書き）

突然なのですがシノンのデバイスは魔法を使う時に声が英語とドイツ語の両方を使い分けます。

第8話 街を襲う異変

Side シノン

街の一角から蒼い光が放たれた後、街を強大な地響きが襲った。オレは丘の手すりに掴まりながら転倒を防ぐ。

「くそっ！……なにが！……って!？」

地響きが止んだと思うと街中の地面に亀裂が走り、亀裂の奥から巨大な木の根が伸び始めた。さらには数箇所から樹齢二千年はいつてそんな大木が生えてきた。当然生えた大木や根などによって街の住宅街に被害が出る。家が壊れる、根の伸びに巻き込まれる、色々だ。

「やばいな……ヴェルフグリント、どうすれば良い？教えてくれ」

『ですが、人の目があります。魔法行使を一般人に見られる危険が……』

「んなこと言ってる場合か！！人が死ぬよりずっとマシだろ！！」

『……了解しました。ではまず私を起動させてください。セットアップと言えば起動します』

「わかった。ヴェルフグリント、セットアップ！」

『Set up.』

銀色の三角形型の魔方陣が現れ、オレの格好が騎士甲冑に変わる。

『いいですか？ここまでジュエルシードの力が働いたということは恐らく人間が発動させたのでしよう。まずはこの木々の中から発動した原点を探すべきです』

「とはいってもこんなに枝や巨木があちこちにあっちゃん見つけるのも難しいぞ。仕方ない、ヴェルフグリント、お前はジュエルシードの場所の特定に全機能を回せ。オレのサポートはいい。オレはとりあえず木や枝をしらみ潰しに斬っていく」

『了解しました、お気をつけてマスター』

サーチに入ったのかヴェルフグリントは沈黙する。それを確認し、オレは白いフードを投影して重ねて着る。一応姿を覚えられないための処置だ。そしてオレは腰の日本刀を抜刀し丘から飛び降りた。飛び降りてちょうど真下に延びていた枝を縦に刀を振り下ろして両断する。

そして崖になっている部分に足をつけてその場から街目掛けて一直線に跳ぶ。

一軒の屋根の上に着地、そのまま屋根から屋根へ飛び移りながら走る。やっぱり無事な家のほうが少ないな。

屋根の上を走りながら張り詰められている枝を通り過ぎ様に全てばらばらにぶった斬っていく。だが、オレを敵と認識したのか近くの枝がオレを拘束しようと四方から4本ほど迫ってくる。オレは真上に跳んで枝同士を衝突させ、足に赤い炎を纏わせて一気に枝のぶつかった場所に蹴りを打ち下ろす。

「紅蓮襲撃！！」

枝は爆発で消し飛び、4本の枝は炭のようになって崩れて消える。だがオレの着地と同時に第二波として上空から6本の枝が鋭くなつた先端を刺すように迫ってきた。あせらずに刀を腰溜めに構え、その場から真上に6メートルほど跳躍。枝を通り過ぎ、落ちてくる6本の枝の中心でオレはその場で剣を抜いて竜巻のように回転する。

「断空剣！！」

空を斬りながら枝を微塵切りにする。枝の勢いはそこで死んだが微塵切りにした木のパーツや残った木の部分がしたの住宅街に落ちていく。オレは刀を左手に持って右手で詠唱の構えをとる。

「フレアトルネード！！」

右腕を振りかぶるとオレを中心に炎で出来た竜巻が巻き起こる。もちろんオレに熱は襲ってこない。炎の竜巻が焼き尽くしたのは落ちている木だ。

オレは着地と同時にその場から走り出す。さっきは住宅に被害が出るからあの場から動かさず迎撃したが本来ならその場にずっと留まっ
ていてはただの的だ。

街の通りに下りて道の邪魔になつている木々や枝を斬っていく。一般人がオレを驚く目で見ているがオレは常に走りながら刀を振っているしフードを着ているので身体的特徴を覚えられない心配はない。

(マスター、屋根の上に移動してください)

突然ヴェルフグリントからの念話が聞こえ、言われたとおりに近くの屋根の上に跳ぶ。

「見つかったか？」

『はい、ここから5時の方向、約400メートルです』

言われた方向に目を向けると、その方向には巨木が一本しか立っていないかった。そして、木の中心に膨らんだ部分があり、そこから蒼い光が点滅している。どうやらあれで当たりらしい。だが400メートルという距離はそれなりに遠い。ここから今走っては少し時間がかかる。

「仕方ない、ここから宝具で狙撃するか」

右手の刀を足元に刺して左手を前に出し、右手を横に水平にする。

「投影、開 待つてくださいマスター！」 ・ ・ ・ どうした？」

『あの膨らんだ部分から二つ子供の生体反応が出ています。宝具を使えば彼らごと吹き飛ばしてしまいます』

ヴェルフグリントには魔術のことを話しているので宝具の威力も知っている。オレは両眼を強化して視力をライフルのスコープ並みにまで上げる。そしてよく見ると確かに膨らんだ部分に男の子と女の子が1人ずつの2人がいた。

（くそっ！！どうする・・・カラドボルグやゲイボルグ、グングニルでは抑えても威力がありすぎるしルールブレイカーを使っても・・・

・ここから届くか？)

ドオオオーーーーン!!!

「ん？」

必死に頭を動かしているとオレの頭上を桜色のビームが轟音と共に通り過ぎた。ビームはそのまま巨木に着弾、ジュエルシールドを封印した。オレは再度両眼を強化して木の方を見してみる。すると……。

「無傷だと！あの威力でか!?!」

二人組みは無事だった。多少服が汚れているが目立った怪我などはない。あれも黒い少女の言っていたデバイスの非殺傷設定のおかげか。

『マスター、先ほどの砲撃は恐らく高町なのはによるものです。魔力光の色が同じでした』

「砲撃？」

『名の通りに大砲のような威力の魔法を射つ魔法です。高町なのはの膨大な魔力があつて出せる威力でした』

「なるほど、とにかくジュエルシールドは封印完了か。さて、引き上げるか・・・」

オレは刀を鞘に納めてその場から人気のない場所に移動した。そこでデバイスを解除し、一端街の方に向かう。やっぱり街にはそれな

りに被害が出たようだ、パトカーや消防車のサイレンの音が聞こえる。

「さて、オレの方はどうすっかなあー・・・」

すっかり忘れていたのだが、オレ自身の住む場所の問題がまだ解決していなかった。しかたない、今日のところは野宿にしよう。

そう思っつて森の方に向かって歩いていく。そして住宅街の曲がり角を曲がり森への入り口が見える所でオレの足はぴたりと止まった。理由は恐らく目の前の少女、栗色の髪をツインテールにした美少女の高町なのはだろう。まさか鉢合わせとは思っていなかった。向こうも同じなのか呆然としてオレを見ている。

オレは自然とため息を吐き・・・。

「オレに平穩の時間は訪れないのか？」

誰に対してもなくいつの間にかそう呟いた。

第8話 街を襲う異変（後書き）

ええーと、前書きの意味なのですが。ベルカ式のデバイスはドイツ語を話して、ミットチルダ式のデバイスは英語を話すのですが、作者自身ドイツ語がまったくわからないので主人公のデバイスは英語と数少ないドイツ語を使い分けることになります。

では、また次回。

(間違っていた内容を大きく修正) 第9話 やって来た、高町家……

今回は高町家の方々とご対面です。

修正しました。修正した場所はほんの一部なのですが、重大な内容ミスをしていました。

では、ごうござ。

(間違っていた内容を大きく修正) 第9話 やって来た、高町家……

Side シノン

「あああああー！ー！ー！ー！」

オレの眩きの後に目の前の高町なのはと肩に乗っていたフェレットのユーノがオレを指差しながら町中に響きそうなほどの音量の声を放った。ていうか、うるせーよ。ああー耳痛いなあー。

「あの！あの時助けてくれた人だよね？」

高町なのははオレに近づいてきて尋ねてくる。

「ああ、あの後ちゃんと家の人に着てくれたみたいだね。よかった。ユーノも元気そうだな」

「うん、あの後なのはの家にお世話になってるんだ」

「う、うん。あの時はごめんね？いきなり気絶しちゃって……あ！私高町なのは、なのはだよ」

「シノンだ。シノン・ガラード。よろしく、なのは」

知ってる、などとは返さずにちゃんと自己紹介しておく。ていうか気絶したこと覚えてたのか。

『おひさしぶりです。シノン様』

なのはの首元に下がっている赤い宝玉のアクセサリー、レイジングハートも挨拶してきた。

「おう、ひさしぶり。あっそうだ、こいつはオレのデバイスだ・・・
ヴェルフグリント」

『はい、皆様初めまして。マスターシノンのデバイス、ヴェルフグリントと申します』

「デバイス！じゃーシノン・・・キミって・・・」

「魔導師なの!?!」

「いや、こいつは偶然拾っただけだよ」

ユーノとなのはの質問に丁寧に答えてヴェルフグリントをしまう。

そのあとオレは場所を移動してなのはとユーノの二人から今までのことなどを詳しく聞いた。ほんで聞いた結果、今回の街の異変はなのはがジュエルシードを見つけたが詳しく探ろうとしなかったからだそうだ。んで、なのはは今までジュエルシード探しをユーノの手伝いとしてやっていたが今度からは自分の意思で本気で取り組んでいくそうだ。

そして、話が終了したと思うと・・・。

「あのねシノン君、お願いがあるんだ・・・」

突然なのはがそんなことを言ってきた。オレはなのはのほうに顔を向けずにただ、なんだ?、と答える。なのははオレを真剣な瞳で見

てくる。その瞳には決意や覚悟、そんな光が見えた。そして、なのはが言ったのは……。

「私に……戦い方を教えて欲しいの」

そんな言葉だった。オレはその言葉を聞いてしばらくなんの反応も示さなかった。返事はせず、少しして口を開く。

「……理由を聞いても良いか？」

「うん、今回は私の不注意でこんなことになっちゃったから、今回はなんとかしたけどもつとひどいことになった時、そんなことがあってもちゃんとしっかり人を守ってジュエルシードを封印できるようにしておきたいんだ。だめ……かな？」

なのはは不安げにオレの顔を見ってくる。たぶんオレが今複雑そうな顔をしているからだろう。彼女の、なのはの力を求める理由はオレと違って純粹だった。オレは生き残る術として戦い方、否、殺し方を覚えた。周りが、オレの生きてきた環境が覚えさせた。そんなオレが彼女に力の振るい方を教えて良いんだろうか？たぶんなのはは力の使い方を間違えない。だが、オレの今までの過去が不安を逃がさない。

「……ひとつだけ、きかせてくれ。お前が力を求めるのは奪うためでなく、守るためだな？」

「うん」

「……わかった。……だがひとつだけ言っておくぞ、もしお前が道を踏み外しそうになったら、オレが黙っていないぞ？」

その時のオレの声は恐らく殺気が籠もった声になっていたのだろう。目の前のなのは肩の震えがそれを教えてくれた。

そのままオレは殺気を消してなのはの頭に手を置いて……。

「教えることになったからにはきつくいくぞ？精進しろよ？弟子一
号」

その後……。

「ねえー、シノン君ってどこに住んでるの？」

なのはにそんなことを聞かれた。

「……どうしてそんなことをいきなり？」

「だって、戦い方を教えてもらう時シノン君の家がわからないと困るし……」

まったくもってその通りだ。やばい、どうしよう。森で野宿するつもりです、などと言えるわけないしな。

「あれ？そういえばシノンって僕と同じく異世界から着たんじゃ……」

ユーーーーノオオオオ!!!!

「え？じゃーもしかして家も……」

オレはその言葉に沈黙でしか答えることが出来なかった。ちくしゅう、ユーノめ後でしばく。

「なら私の家においでよ。シノン君のことは前に助けてくれた人として親に話してあるし、きっと歓迎してくれるよ」

「んー……」

普段ならここで断っているが、この世界は身寄りのない孤児は補導されて施設などに預けられる。捕まるようなへマはしないが追いかけられるのは面倒だ。仕方ない、か。

「……なら、すまんがこの世界で住宅が手に入るまで世話になる」

「うん!!よろしくね!!」

オレの答えになのはは太陽のような笑顔で答えた。

そのあとなのはに案内されて着いたのは一軒の喫茶店。翠屋と看板に書かれているがこの字は……ええーと……。

「すいや?」

「みどりや、だよ。シノン君」

深読みしすぎた。

中に入ると、中はとても綺麗な喫茶店だった。木製の床に良き雰囲気を感じさせる店内の模様。なんだか、リリースやパニールが働いたらとても似合っただろうな店だと思った。あ、ちなみになのはは店の中に入っただけで店の奥に行った。なんでも家族を呼んでくるらしい。

そしてちょうど、店の奥から2人の男性と女性の計4人が出てきた。4人全員どこかなのはに似ている雰囲気があるので恐らくこの4人がなのはの家族なのだろう。というか、男性組の2人が気付かせてやっているとこのような殺気をこちらに飛ばしているのは何故だろう？

「なのは、その子が？」

「うん、前に私を助けてくれたシノン君だよ」

「初めまして、シノン・ガードです」

頭を下げた前の4人に挨拶をする。ほんで、足運びで気付いたが目の前の4人の内2人の男性と眼鏡を掛けた女性、武術を学んでいる。それもかなりの腕だ。

今この場で3人を殺そうと挑んでも恐らく不意打ちで眼鏡の女性1人を殺すのが限界だ。

刀があればいい勝負が出来ると思うが……。というか、この世界でもグラニデでも人外の存在のオレが本気で挑んでも返り討ちの可能性があるって、この人たちまともな人間なのだろうか？この後、オレの疑問は綺麗に破壊されることになるのは別の話。

「あら、礼儀正しいのね。初めましてシノン君、なのはの母親の高

町桃子です」

その女性、桃子さんの言葉を聞いてオレの思考は一瞬止まった。母親？姉じゃないの？桃子さんは見ただけなら20歳と言っても通るぐらいの美貌だ。ありえない、ジエイド並かそれ以上の若作りだ。

「私はなのはの姉の高町美由紀、よろしくね」

「なのはの父親の高町士郎だ。よろしく」

「なのはの兄で長男の高町恭也だ」

他の家族の方々も挨拶してくる。まあ男性の方々はオレへの警戒で声が少し硬いが。特に最後の恭也さんは不機嫌な声で殺気を隠そうともしない。この人本当に達人か？

その後、オレは喫茶店からなのはの本当の住宅（豪邸とはいかないが普通の家よりは明らかにでかい）の道場に招かれた。なのは、桃子さん、美由紀さんは食事の準備をしている。

そしてオレは現在恭也さんと士郎さんの2人と対面中。士郎さんは警戒こそしているが武器は持っていない。それに対して恭也さんは初めから殺すつもりのように濃厚な殺気を放ちながら、両の手に小太刀を持っている。

だが、恭也さんの腕の服の中に暗器を仕込んだような気配がある。オレ自身なのはの家族と殺し合いをやるつもりはないが死にたくはない。一応保険ぐらい準備しておくか……。

(ヴェルフグリント、念のため刀をすぐに出せるようにしておいてくれ)

(了解しました)

「まずはお礼を言わせてくれ。なのはを助けてくれてありがとう。あの時の電話の主も君だろうか?」

「なんだ、ばれてましたか」

「まあー半場勘だけどね、それで聞きたいんだが……キミは何者だい?」

その質問と同時に恭也さんの殺気が強くなったがオレは特に動揺していない。

「何者、というと?」

「キミからは人を殺した人間と同じ気配がする。それになんだかキミの気配はなんだか普通の人よりなんだか違う様な感じがしてね」

普通の人より違う、か。

「その見方は半分正解ですかね。ああー人を殺したことはありますよ。それなりにたくさん。というか、そういう土郎さんもそうですよ?まあー数ならオレの方が圧倒的に多いでしょうけど……」

オレは右手を右目の上に置きをながら他人のことを話すように答えた。土郎さんと恭也さんはまったく動揺していない。だが、最後の

オレの発言に少なからず驚いているようだ。今僅かに隙が出来た。

「……半分正解、とは？……」

士郎さんが多少ためらうように聞いてきた。オレは口元に歪んだ笑みを浮かべ、笑いながら口を動かした。

「はっはっはっ……簡単ですよ。オレの見た目は普通の人間に見えますが、中身は違う。内臓や血、皮膚、全てがある特殊な物質で作られた偽者なんですよ。言うなればこの体はオレの体ですが、別の者に作り出された”入れ物”です。怪我の治りや体の促進が異常に早く、ある程度に体が成長すればその状態から老化が止まり、肉体のスペックに限界が理論上存在しない、こんな”入れ物”に宿った化け物……それがオレの正体ですよ」

その時のオレの笑顔は恐らくよほど醜い笑顔だったのだろう。目の前の士郎さんと恭也さんの驚愕の表情がそれを証明していた。

(間違っていた内容を大きく修正) 第9話 やって来た、高町家……

ご覧いただきありがとうございます。相変わらずグダグダですいません。

次回は恐らくシリアスになると思います。場合によっては恭也との戦闘もあるかもしれません。

では、また次回。

修正点ですが、私の情報不足で、感想で真相を教えられたのですが、恭也はこの時点で人を殺してはいませんでした。

大変申し訳ありません。10話の方も少し修正を行いましたので、気が向けばご覧になってください。

（大きく修正）第10話 勝負と怒り（前書き）

今回は戦鬪民族高町家の恭也との戦いです。

どうぞ。

誤字脱字直しました。

私の情報不足で大きな問題点がありました。全体を少し修正して
います。

(大きく修正) 第10話 勝負と怒り

Side Out

歪んだ笑みを浮かべながらシノンには自分の正体を教えた。その笑みを見て恭也は小太刀を構え、士郎はどこか悲しそうに眼を細めた。

(あれが、なのはとそう年も変わらない少年が出来る顔なのか……。それにあの眼、あれはまるで……救いや希望を知らない、諦めた眼だ)

シノンの顔は歪んだ笑みを浮かべていたが、眼は無表情そのものだった。なんとも思っていない。怖がられようが、罵られようが、なんとも思わない。もう、なにをされても言われても慣れたから。そんな眼をしていた。

「……では、その自分を化け物と呼ぶキミがなぜなのはを助けてくれたんだい？」

「大した理由はありませんよ。なんにも悪くない子供が危ない目にあつてる、そういうこと自体が気に食わなかっただけです」

シノンは”それがなんですか”と言うような表情で答えた。その時のシノンの眼には微かにだが姿の見えないナニかに対しての怒りが混ざっていた。

「俺からも聞きたいことがある。最近なのはが俺たちに内密で何かに首を突っ込んでいるようだが、原因はお前か？答える」

「いえ、原因はオレではありません。むしろオレも被害者に入りま
すね」

恭也の一方的な質問にシノンはいやな顔ひとつせず答えていく。そ
こには感情の色がない。

「なのは一体どんな事件に首を突っ込んでいる？」

「それはオレ自身の口から言えません。なのは自身から聞いてくだ
さい」

「だめだ、言え」

「お断りします。第一あなたの命令に従う必要性はありません。こ
れは譲れません」

恭也の要求をシノンは頑として受けない。無表情のままでも決して
揺らがない。そして次の瞬間、恭也が動いた。

すさまじいスピードでシノンに接近し、右手の小太刀をシノンに振
り下ろしてきた。もちろん峰ではなく刃、刃潰しもない本物の刀だ。
だがその刃はシノンの体を切り裂かず、突然進行を阻まれた。シノ
ンが突き出した右手に握られた白い柄の日本刀が納まっている鉄製
の黒い鞘によって。

もちろんそれはヴェルフグレントだ。だが魔法を知らない恭也にと
ってはシノンの手に突然刀が現れたように見えただろう。

「……なんの手品を使った？」

「教えるつもりはありません。それより、刀を納めてください。あなたに刃を向けられる理由はないはずですが？」（マスター、騎士甲冑は・・・）（いや、刀だけでいい）

シノンが鞘を振り切りながらヴェルフグリントとの念話を終える。振り払われた恭也はバックステップを一回やって距離をとる。

「お前がなのはの関わっていることについて教えてくれれば納めよう。そうでなければこの場で斬る」

「恭也！やめろ！！」

「だめだ父さん。さっきので確信した。こいつは危険だ。なんの感情も籠もっていない顔でたくさんの人を殺したなんていう奴を野放しになんてできない」

「違う！その子はただ・・・」

もう諦めてしまった。太郎の口はその言葉を言えなかった。言ったら目の前の子供はどうするだろう？その時の反応はまったくわからない。わからないからこそ怖いのだ。

だが、そのためらいが恭也の行動を許した。その瞬間、恭也はシノンに再び切りかかった。

恭也がシノン君に近づいて刀を振る。止めに入ろうとするがともじやないが今からでは間に合わない。

(くそっ!!マズイっ・・・なっ!!)

言葉を放とうとした瞬間、私は驚愕した。シノン君は恭也の斬撃を右手に持った刀が納まった鞘で全て防いだ。刀を抜かず、鞘のみで。恭也は斬撃のスピードを上げるが全てシノン君は受け流したり、避けるだけ。

「もうやめたほうがいいです。こんなことやっても意味がない」

その言葉に恭也は怒りを覚えたのか、左の小太刀を逆手に持ち替え、服の中、右手の手首の部分に着いている黒いホルスターに左手の指を掛ける。まさか、あいつ・・・。

頭の中を不安が横切った瞬間恭也が左腕を横に振りかぶる。

すると、シノン君はすぐにその場から横に跳んだ。シノン君がさっきまで居た場所には3本の長い投擲用の針。一般には飛針と呼ばれる暗器だ。

シノン君は着地した場所から刺さった飛針を見ている。そのまましばらくすると恭也の方に眼を向けた。

「暗器ですか。どうやら普通の剣道を学んでいるというわけではなさそうですね」

シノン君の顔には焦りや不安の色は無い。下手をしたら自分が傷を負わされていたかも知れないのに。余裕そのものの表情だ。恭也は

それに気付いたのかわからないが、再び走り出した。

右の小太刀を左から右に振った。シノン君はその斬撃に刀の鞘を打ち込んで防ぐが、打ち込んだ瞬間シノン君の眼が細まった。シノン君はすぐに小太刀を弾いて続いて放たれた恭也の斬撃を回避しようとする。だが、恭也の放った斬撃はシノン君の防御や回避をすり抜くようにシノン君に迫る。だが、シノン君は冷静に対処し、斬撃をすべて避けきる。

永久不動八門一派・御神真刀流、小太刀二刀術。通称、御神流。

それが高町家で私と恭也、美由紀の3人が体得した流派だ。御神流には表と裏があり、表の御神流は名の如く大切なものを守る剣。裏の剣は暗殺などの人を殺す剣。習う型や技は一緒だがその生き方はまったく違う。ちなみに先ほど恭也が使った飛針も御神流の技の一つだ。他にも鋼系などがある。

そして恭也は今放った斬撃に御神流の技を混ぜた。

^{とおし}徹。御神流で使われる撃ち型で表面に衝撃を伝えずに内面に衝撃を伝える技。

打撃などにも使えるので内臓などを攻撃することが出来るという応用の広い技だ。シノン君がガードをしたときに眼を細めたのは恐らく衝撃が内側に響いたからだろう。

^{めき}貫。これは相手の防御や回避のパターンを見切り、その動きに合わせて攻撃を放つ技だ。

防御や回避をすり抜けてきた斬撃の正体はこれだ。だが、シノン君

はあの一瞬で貫の仕組みを見抜いたのか、回避や防御のパターンをわざと乱して貫を無力化していた。

ガンッ！！

一際大きい弾く音が響き、シノン君と恭也は再び距離を取る。シノン君は変わらず刀を鞘に納めたままで汗ひとつ掻いていない。

対して恭也は多少息が乱れて動きから洗練さが無くなり始めている。恐らく素人だと思つて無鉄砲に飛ばしたのだろう。

「気が済みましたか？」

シノン君は額に軽く左指を当ててため息を吐きながら言葉を放った。恭也は舌打ちをしながら小太刀を握りなおす。

「そうやって……余裕の顔を浮かべながら無表情に人を殺してきたのか？」

突然の恭也の言葉。恐らく恭也本人は挑発のつもりで言ったのだろう。だが、その言葉を聞いた途端シノン君がピタッと体を固めた。

道場の明かりを点けていないせいかわ表情はまったく見えない。だがその瞬間、なぜだか全身に寒気が走り背筋がゾツとした。

「お前はさっき言ったな、俺や父さん以上に人を殺してきたと。あのときのお前の顔、まさに無表情そのものだった。お前自身もう人を殺すことをなんとも思つてないんじゃない……バン！！……ドン！！」

やめる！！そう言葉を口にしようとした次の瞬間、恭也の体は空中に打ち上げられ、道場の床に背中から落下した。

そして恭也が立っていた場所には、白い柄の日本刀を抜刀し振りぬいているシノン君だった。

S i d e シノン

目の前には背中から道場の床に落ちた恭也さん。峰打ちでも吹き飛ばすくらいのを力を込めたはずなんだがな。いきなり恭也さんの動きが速くなったので防がれ打ち上げるようになってしまった。

「がっ！！・・・ごほっ！ごほっ！！・・・」

目の前で立ちながら咳き込む恭也さんを見下すように見る。なんだか今は頭の中がひどくクリアだ。

(ああーなるほど・・・)

これがキレた状態か。恭也さんの言葉を聞いて体がほぼ無意識に動いたが、どうやら先ほどの言葉はよほどオレの頭に作用したらしい。不思議と今の感覚は悪くない。

「なんとも思っていない、ですか。ずいぶん悟ったような結論ですな？」

「違うのか？お前の剣は俺たちのような守る剣ではなく、殺す剣だ。」

おまえ自身、人を殺すことに躊躇いは無かったのか？なぜ殺さずに気絶させるなどの道を選ば「うるせえよ」・・・なに？」

今納得したオレはどうやら完全に頭にきている。この人の理想論に、この人の知った風な言葉に。

「守る剣？オレには守ることなんて選んでる余裕なかったよ。躊躇いは無かった？あつたに決まってるんだろ。でもな殺さなきゃオレが死んでたんだよ・・・。あんたは人を殺したことがあるのか？」

「・・・いや、無い・・・」

「オレは5、6歳のころに初めて人を殺した。そんな時のガキに大勢の大人を相手して1人も殺さずに全員気絶させただけで済ませるって？無理に決まってるんだろ。あんたは出来んのかよ？剣を握って1ヶ月程度しかたってない腕で大人を1人も殺さずにさあー」

「どづいことかい？」

いままで黙っていた土郎さんが急に口を開いた。

「さつきオレの体について話したよね？オレの体を作っている特殊な物質を作るものを宗教の信仰対象として崇めてる奴らがいましてね、そいつらにとってオレは殺すべき生贄に見えたらしいですよ？そしてそれからはその連中に襲われる毎日・・・ホント、地獄のようでしたよ」

これは本当の話だ。どこからオレのことを知ったのかわからないが、ナディの連中はオレ自身よりも早くオレの存在の意味に気付き、オレの体のマナを大気に返すためにオレを殺そうとしたのだ。始めて

殺した人間もナデイの襲撃者だった。

「あなたは知ってるのか？体に降りかかる血の飛沫の熱を、矛先から刃を通して伝わる肉の感触を、目の前で流れる血と共に体温を失っていく人の姿を……死ぬその時まで、自分を殺した相手を見詰める憎しみの眼差しを……」

グラニデで何度も、それこそ気が遠くなるほど体感した。

最初はナデイの人間を刀で貫いて手が振るえ、震えている手と体にべつとりと付着した血の温かさに狂って叫んだ。

動かない体でずっとオレを見ていた眼差しが怖くなり、その場から逃げ出した。逃げ出して思いつきり泣きながら嘔吐した。

そんなことを何度も何度も、オレは体験してきた。

オレの言葉に恭也さんは眼を見開いて驚愕している。この人は”人を殺す”ことをまだ知らない。知ることが無いのかもしれない。

それはとても幸福なことだ。ならば、そのことを知る必要は無いと教えよう。

「あなたの望みどおり、今からは刀を抜いて戦ってやる。だが覚えておけ。ここからは行儀が良い剣の打ち合いじゃねえ、本気の打ち合いだ」

オレが……”人を殺す剣”を見せよう。

決してこの道へ入らぬように、オレのように……諦めぬよう

に。

右手に持った刀を握りしめ、踏み込んで真上から片手で振り下ろす。殺すつもりは毛頭無いが、刃で振り下ろす。

恭也さんは頭上で小太刀をクロスさせてガードした。だがオレは防がれたと同時に右手から力を抜いて右に全身を回転させ右足を地面すれすれの高さで横に振るう。

足は恭也さんの両足を払い、恭也さんの体を空中に浮かす。オレは右足を振るった勢いを回転力に加えて再び右回転、そして今度は左足で跳び蹴りに似た蹴りを恭也さんの無防備な腹部に打ち込む。

蹴りはもろに恭也さんの腹部に直撃し、恭也さんの体はきりもみ回転させながら道場の壁に激突した。人を殺さないようにする加減はよく心得ている。骨もやっっていないだろうし、内蔵にダメージもない。まあ―苦痛と衝撃ははかなりのものだろうが。

「げえっ!!.....ごぼっ!!.....」

恭也さんは腹部を押さええながら胃液を吐いている。さきほどオレに守る剣などとほざいてきた人と同一人物とは思えない変わりようだ。

「そんな無様さでよく守る剣だとかほざけたもんだな。見せてみるよ？不殺のあんたが誇る剣を.....」

オレの言葉が挑発として効いたのか恭也さんはオレを睨みながら立ち上がって小太刀を構えた。その姿は先ほどとは違い覚悟のようなものが宿っていた。そして次の瞬間.....。

恭也さんがその場から消えた。

「(消えっ、いや違う!!)…………ツ!!」

反射的にオレはその場で刀の矛先を前に出して一回転、いわゆる回転斬りを放った。

ガンツ!!ガンツ!!

回転斬りで竜巻のような防御陣を作る。すると右側面の方向から金屬を2つ弾いた感触が伝わってきた。オレは即座に足を固定して感触のした方向に刀を振る。

するとその方向には弾かれた二本の小太刀と両手を上に振り上げた状態で呆然とした恭也さん。オレは立ち直る前に恭也さんの水月みづづちに左手の縦拳を打ち込み、右足で恭也さんの体を前方に飛ばす。

「ぐう!!…………がぁ!!」

恭也さんは腹に手を当ててうずくまっている。

「今のは”歩法”ですか。見た限り身体のリミッターの人為的解除、そんなところですかね?さすがに焦りましたよ。で、これで限界ですか?」

歩法、拳法などの奥義などでもある移動術の呼び方だ。この世界の中国拳法の1つ、八極拳の技にも”活歩”という歩法もある。

今恭也さんが使った技は人間の体に無意識にかかっているリミッターを人為的に解除する技なのだろう。だからいきなり恭也さんの姿

が消えたように速くなったわけだ。

「くっ・・・そっ・・・まだ、だ・・・」

恭也さんは途切れ途切れに言葉を吐きながら立ち上がった。別に不思議なことは無い。オレの放った打撃は威力はかなりのものだが骨を砕いたわけでもない。

恭也さんは小太刀を二本とも鞘に納め、居合いに似た構えをとる。どうやら恭也さんは次の一手で決めるつもりらしい、オレも刀を右手だけで構えて迎え撃つ準備をする。

そして、ほんの数秒後、オレと恭也さんは・・・同時に踏み込んだ。

「薙旋!!」

恭也さんはさっきの歩法を発動させ、その場で二本の小太刀を抜刀術の要領で振るって4つの斬撃を放った。あの歩法を使っているおかげかかなりの速度だ。クラトスやクレスなら反応できるかもしれないがカイルやロイドなどの青年組みでは見切れないだろう。それほどに速い。

だが、濃い実戦を何度も積んできたオレの実戦時の動体視力は時に弾丸でさえも凌駕するほどだ。そして、弾丸よりも遅い斬撃のコースなど目ではつきりと捉えられる。

4つの斬撃の隙間を読んで刀を腰溜めに構える。そしてオレはそのまま刀を振るおうとしたが・・・。

(待て、今オレは何をしようとした?)

突然動きを止めた。今刀を振るっていたら刀は恭也さんの斬撃を弾き、そのまま首を両断していた。つまり、今オレは無意識に恭也さんを殺そうとしたのだ。そのことに気付いて足も完全に止まった。

ざっーざっーざっーざっー!

「ぐっ!.....」

体に走る4つの斬撃と4つの血飛沫が舞った。オレが足を完全に止めたので恭也さんの斬撃が全てオレに直撃したのだろう。

当たったことが予想外なのか、オレの目の前で恭也さんは信じられないという目をしている。

(人を殺すことをなんとも思っていない、か。あながち、間違いじゃないのかもな.....ちくしょう)

心の中で皮肉の微笑を浮かべ、オレの意識はそこで途絶えた。

（大きく修正）第10話 勝負と怒り（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

あれ？もともと恭也とは軽く剣の打ち合いをさせるだけのつもりだったのに全然違っぞ？・・・どうしてこうなった・・・orz

でも、挫けずにがんばっていくのでこれからもよろしく願いします。

では、また次回。

第11話 目が覚めて……

Side シノン

瞼の上に光を感じ、オレは目を覚ました。

「んっ……」

体を起こして周りを見てみるとオレは和室の布団に寝ていて、覚えが無い少しぶかぶかのパジャマを着ていた。ちなみに枕の隣には刀の姿をしたままのヴェルフグリントが置かれていた。

（確か、恭也さんと勝負になって最後に動きを止めたせいでオレが斬られたんじゃない……）

そう思って体を見てみると、斬られた4箇所には器用に包帯が巻かれている。邪魔なので外させてもらうか。そう思って包帯を解くとそこには軽いかさぶたのような跡があるだけで傷はまったく無い。オレの体は自然治癒力が異常なのであの程度の傷なら数時間で塞がる。

「ヴェルフグリント。どれくらい寝てたんだ？」

『ほんの一晚です。ですが、さすがに出血量も少なくなかったのですね。それなりに時間がかかったようです』

「一晚、か。よっと」

体を立ち上がらせて首を鳴らす。格好はオレの着ていた服が無いのでパジャマのままだ。ヴェルフグリントには待機状態に戻ってもらう。さすがにずっと日本刀の姿をしているのはまずい。

銀色カード状態のヴェルフグリントを持って部屋を出る。くそ、パジャマがぶかぶかで歩きづらい。リビングのような部屋の方向から人の気配がした。入ってみると、台所と思われる場所から長い栗色の髪が見えた。ええと、あれは……。

「桃子、さん？」

オレが声を発すると桃子さんはすごい速さでこっちに振り向きオレに近づいてきた。そして近づいてきた桃子さんはオレに近づき……。

ぎゅ。

オレの体を正面から抱きしめた。ええーと、なんで？

「あの、桃子さ「よかった……」え？」

「道場に呼びに行ったら血塗れで倒れていたのよ？もしかしたら目覚めないと思つてしまつて……よかった。……本当によかった」

ふと気付いた。桃子さんの肩が震えている。泣いているのだ。

「なんで……あなたが泣くんですか？赤の他人なのに……」

桃子さんは無言だった。オレ自身はこんなときにどうしたらいいの

かもわからず、呆然とするしかなかった。

数分後。

「ごめんなさいね。いきなり・・・」

桃子さんは落ち着いたようだが、泣いたせいで目が少し赤い。

「いえ、オレもお邪魔していきなりあんな姿になって・・・ご心配をおかけしたようで、すみませんでした」

「・・・ううん、いいのよ。それにごめんなさい。恭也があなたにあんな怪我を・・・」

「いえ、お気になさらず。傷もすでに塞がってますし」

「え！？・・・あら、本当。包帯がもう取れてる。大丈夫なの！？」

オレの言葉に桃子さんは一瞬悲しそうな目をしたがすぐにびっくりしてオレの体をぺたぺたと手探りで調べた。まあー普通の子供ならあの傷ではただではすまないだろう。良くて1ヶ月ほど寝たきり、悪くて重い後遺症を抱えるだろう。

「はい、あの程度の傷、どうと言うことはありません。以前にあれ以上の怪我を何度も負ったことがありますし、あれぐらいじゃオレは死にませんよ」

オレの言葉を聞いて桃子さんはまた悲しそうに目線を伏せる。しまったな。オレ自身は普通に言ったがこの人にとってはかなり重い話題だ。少し配慮すべきだったな。

その後、桃子さんに朝食をご馳走になったのだが、感想はただ一言。めちゃくちゃうまかった。パニール達の料理もかなりうまかったが桃子さんの料理はその上を行くかもしれない。そう言えば、たまにオレが食事を作ったときパニール以外の女性陣が「負けた」とかいつて床に手を着いて、orz、の体勢を取ってたなあー。なんでだ？

あと、桃子さんにオレの服はどこにあるのか聞いてみると、血塗れになっていて洗濯中だそうだ。その返答にオレが目一杯の謝罪を込めて桃子さんに土下座したのは言うまでも無いだろう。

仕方ないのでパジャマで過ごすことになったのだが、お世話になるのにさすがに何もしないというのは図々しい。というわけで現在は桃子さんの食器洗いを手伝っている。家事全般は得意なので身長が縮んだ体でも問題なくスムーズに作業が出来る。桃子さんは最初はかなり驚いていたがすぐに順応してくれた。

「そつえば、他の皆さんはどうしたんですか？他に誰もいないみたいですけど・・・」

「土郎さんと美由紀は翠屋の方に行ってるは。なのはと恭也はお友達の月村っていうお家に遊びに行ってるの。なのもシノン君が心配だったみたいで最初は残るって言っただけ、私が診ておくから行ってきないさいっていったの」

「・・・そうですか」

なのにも心配をかけてしまったか。猛反省だな。

そのままオレはずっと桃子さんの手伝いをしていたが、さすがにパジャマのままでは限界がある。仕方ないのでオレは桃子さんに、変えの服を用意します、と言って目の着かない場所に移動した。土郎さんからオレの事について聞いているのか、桃子さんは何も詳しく聞いてこなかった。オレはその場で精神を落ち着かせる。

「創造、開始（クリエイト、スタート）」

魔術師にとっての血管とも呼べる魔術回路に魔力を流し、頭の中で適当な衣服をイメージする。今から行うのは投影魔術、媒体となるのはオレ自身のイメージなので、より正確ではっきりとしたイメージでなければダメだ。

（イメージ確立。創造……完了）

手の中に確かな重量感を感じ目を開ける。手の中にある服は、黒いジーパンに黒の長袖のTシャツ。その場凌ぎの服なのでデザインなどは一切無い。

服を着替えて、桃子さんの手伝いを続ける。今は夕食の手伝い中だ。オレの仕事は食材の皮むきや包丁を使って食材を斬ることだ。

料理は好きなのでどんな作業をしていてもとても楽しい。

（よし、これで最後つと……ん？魔力反応？）

皮むきを全部終わらせた途端にそう遠くない場所から魔力の反応を

感じた。ジュエルシールドでもなのは魔力でもない、という消去法で……。

「桃子さん、すみません。皮むき終わったのでちょっと出かけてきます」

「あら、どこまで？」

「そんな遠くないので、1時間くらいで戻れると思います」

「そう、一応気をつけてね。シノン君」

「はい」

桃子さんから承諾をもらって家の外に出る。反応がした場所を目指し、その場所、川辺に着くとその場所に魔術師で言う人避けの結界のようなものが展開されていた。

『マスター、これは結界です』

「人避けの結界か？」

『いえ、内部と外部の位相ずらすものです。マスターなら普通に中に入れるはずですよ。進んで見てください』

言われたとおり進んでみると、スライム状の膜を通ったような感覚を感じたあとに夕焼けが少し出ていた空とはまったく別の色の空がある川辺が見えた。

「普通に存在を認識される結界とは、二流か三流ってところだな」

張られていた結界に評価をつけながら周りを見渡す。すると、川のすぐ近くで前回戦った、黒い斧、バルディッシュを持っている黒い衣服の少女がいた。

少女はオレに気付いたのか、こちらに目を向けてきた。そのとき、自然と、オレと少女の視線が合わさった。

第11話 目が覚めて……（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

それと、お久しぶりです。そして申し訳ありませんでした。試験があつたので小説の更新が出来ませんでした。これからこういふ事態になつた場合は事前にお知らせするように努力いたします。

ではまた次回。

第12話 雷光との戦い、2回戦目（前書き）

フェイトとの第二ラウンドです。

じいじ。

第12話 雷光との戦い、2回戦目

S i d e シノン

オレの姿を認識した途端に目の前の黒い少女はその手に持つバル
ディッシュの矛先をこちらに向けてくる。以前に負けたからか警戒
心に満ちた目をしている。オレは右手の人差し指と中指の間にヴェ
ルフグリントを挟んで持ち、川辺の坂を下りる。ちょうど黒い少女
と正面から向き合う状態だ。

「やあー、あの時はすぐに立ち去ったからわからなかったが、どう
やら元気そうだな」

一応気にはなっていたのだ。オレの術技や魔法、もちろん魔術にも
デバイスのような非殺傷設定などと言う温いものは無い。一応前に
戦ったときのアイン・ソフ・アウルはオレの体調が最悪だったこと
と手加減を加えたという二つのハンデが重なって威力は五分の一程
度しか出なかった。だがいくら加減した威力でも武術の到達点の1
つだ。必ず無事とは限らない。

「……ジュエルシードを渡してください」

オレの言葉には一言も反応せず黒い少女は相変わらずバルディッシ
ュを構えてくる。オレはため息を吐きながらヴェルフグリントを顔
の前に突き出すように手に持つ。ちなみにオレの持っているジュエ
ルシードはヴェルフグリントの中に収容されている。(イメージ：
ディケイドの変身する時の構え)

「悪いが答えは変わらないよ。あれは危険だからね」

「なら、私と勝負してください。勝負に互いにジュエルシードを1つ賭けて」

「賭けか・・・仕方ない、それで気が済むなら受けよう」

そう答えるとその場にしばらく静寂が落ちる。だがその静寂は、黒い少女の放ったバルディッシュ本体の唐竹の斬撃で破られた。オレはまだセットアップをしていないのでバリアジャケットも装備していない。だが、少女の筋力で放たれた斬撃を見切れないほど弱くない。

「よつと」

体を後ろ周りで左に回転させて避ける。オレはそのまま体を180度回転させて両腕を振り切った状態の黒い少女の背中を真横から左手で右に押しやる。黒い少女は振り切った体勢からさらに力が加わったせいで前向きに倒れそうになるがなんとか踏みとどまった。だが、その隙に・・・。

「セットアップ！」

『 standby ready . set up . 』

・・・セットアップを済ませ右手で左腰に差してある日本刀を抜く。体調が万全な今なら素手だけで倒せるかもしれないが慢心は身を滅ぼすからな。黒い少女は振り返ると同時にフォトンランサーを5発展開させてこちらに照準を向ける。

「ファイアー!!!」

黒い少女の命令に従い空中に留まっていたフォトンランサーが一斉にオレ目掛けて発射された。オレは右に跳んで3発回避し、残りの2発を刀を右薙ぎに振るって切り裂く。切り裂いたと同時に黒い少女に向かって走り出す。

『Scythe form』

バルディッシュが形を鎌に変え、黒い少女が構える。リーチの差から先制を取ったのは黒い少女。こちらに接近しながら左薙ぎに鎌を振るう。オレは止まることなく走り、切り上げるように刀を振るって右側面から来た斬撃をガードする。そのまま刀を上振り切り引っ掛ける形で黒い少女の鎌を上弾く。オレはそこから左足で回し蹴りを放つが黒い少女はバックステップで避ける。

黒い少女は後退して距離を稼いだ。そしてその場で腰を少し沈め、鎌を腰溜めに構えた。そして黒い少女は腰溜めに構えた鎌を思いつき振りかぶる。すると……。

『Arc Saver』

バルディッシュの声と共に鎌状の魔力刃が切り離され、こちらに回転しながらブーメランのように飛んで来た。というかあれ分離できたのか、便利だな。

『防御しますか？』

「いや、回転を加えてるってことはあれはたぶん防御崩しの機能もある」

ヴェルフグリントに答えながらオレは近づいてくる刃のタイミングを見切つて右に転がる。オレはすぐに前を向くが黒い少女の姿が無かった。

(どこに・・・空、ちがう・・・だとすると・・・)

半分勘任せの決断で刀を背中に担ぐように置く、すると背中越しに衝撃が走った。後ろを振り向くと斧状態のバルディッシュを振り下ろしている黒い少女がいた。

「回転する刃を囿に使つたのは見事だが、奇襲の仕方が前回と同じつて言うのが惜しいな」

「くっ・・・」

背中に刀を置いた状態から腕を前に振り切つて黒い少女を後ろに後退させる。オレはそのまま刀を右払いの形で後方に目掛けて刀から峰に変えて刀を振るう。斬撃は少女の左手首に当たり衝撃を伝える。

黒い少女は左手首の痛みで顔を一瞬歪めた。しかしすぐにその場から空に飛んで絶対的な地理を取る。ちっ、少しまずいな。オレは空を飛ばんし届く攻撃も無いことは無いが少し威力が強いので今度こそ黒い少女に怪我をさせるかもしれない。

『マスター、飛行魔法ならありますよ』

「なに？あつたのか？」

『はい、ですが少し出力がピーキーな飛行魔法ですので制御がかなり困難です』

「……仕方ない、このままじゃギリ貧だ。ヴェルフグリント、頼む」

『Yes, My Lord. Axel fin. Ready go.』

ヴェルフグリントの声の後、オレの両肩から銀色のフィンが二枚ずつ出現する。そしてフィンの出現と同時に体に浮遊感がやってくる。オレは一応転倒しないように動きを止める。

『この飛行魔法は名前の通り加速力が強力なものです。本来この魔法はミッドチルダ式のものなのですが、マスターに両方の適正があったおかげで使うことが出来ました』

ミッドチルダ式と聞いたことのない言葉が気になったがそんな場合でもない、今は戦闘中だ。そして戦う敵は今日の前にいる。

「それで、ここからどうすれば「サンダー……」ん？」

飛行の方法をヴェルフグリントに聞こうとしたが、上空からの黒い少女の声に顔を上げる。そして見てみると、黒い少女の右の掌に雷を纏ったが小さな球体があった。

「……スマツシャー!!!」

黒い少女がこちらに右手を突き出すと、掌の球体から雷の極光が放たれた。その照準先はもちろんオレだ。ってちよつと待て。オレ今動けないんだけど。どうすんの？

『あれは・・・砲撃！マスター！自分が急加速して移動する姿をイメージしてください！そうすれば飛行が可能なはずです！』

「結局ぶっつけかよ！お前事前にこういうことは教えとけよ！・・・ちっ！！（動け！！）」

頭のなかで自分が空中を高速で移動している姿をイメージすると両肩のフィンが一瞬輝き体が突然右に動く。だが引つ張られるような感じはしない。まさに飛んでいる感覚だった。

飛んできた砲撃の回避に成功し、オレは今やったのと同じ要領で前方に急加速し、黒い少女に急接近する。いままで戦ってオレが飛べないと思ったのか黒い少女は動揺している。だが、動揺しながらもフォトンランサーを3発展開しオレに目掛けて撃ってくる。

オレはクイックな加速移動をしながらフォトンランサーを全て回避する。（イメージ：アーマードコアのクイックブースト）そして回避と同時に前方に急加速。ヴェルフグリントの言ったとおり出力がピーキーだがその分速さが出る。

オレは黒い少女を間合いに捕らえる。腰溜めに刀を両手で構えて黒い少女が手に持っているバルディッシュを黒い少女の手から上空に弾き飛ばす。

「あっ！バルディッシュ！」

黒い少女が上に視線を向ける、オレはゆっくり刀を動かし黒い少女の首元に近づける。

「チェックメイトだな」

「くっ……」

「んじゃ、約束通りジュエルシードを渡してもらおうか」

オレは左手で落ちてくるバルディッシュをキャッチして黒い少女に差し出す。

「………持ってないです」

「は？」

オレは一瞬間抜けな声を出す。黒い少女は泣きそうな顔で俯いている。

「………ええーと、一つも？今は持っていないとかじゃなくて？」

こくん。黒い少女は泣きそうな顔のまま無言で頷く。ええと、つまりこの子は賭けなしで賭け金が無しの状態で賭けをしたと。

（負けることを考えないっていうのはある意味良いことなんだけど……賭ける物無しに賭けしちゃうだめだろう）

「はあー。とりあえず一端地上に降りようか」

オレは刀を鞘に仕舞い、黒い少女と一緒に地上に降りる。

「あの………本当に、ごめんなさい……」

黒い少女は地上に着地した途端にペコリと頭を下げてくる。オレは

溜め息を一回吐いて黒い少女の頭に右手を乗せる。お、この金髪すごく良い触り心地。黒い少女は一瞬びくりとするがオレはそのまま黒い少女の頭を撫でてやる。黒い少女は呆然として頭を上げてくる。

「別に気にしちやいないよ、無いなら別にそれでも良い。……そうだな、じゃージュエルシードの変わりに今度ゆっくり話でもしないか？」

「え？……それで、良いの？」

「オレは全然構わないぞ。そういえば名前言ってなかったな、シノンだ。シノン・ガラード」

「……フェイト、フェイト・テストロッサ」

「フェイト……運命か。良い名前だな、実に似合ってる」

「えっ！？そつ、そうかな？／＼／」

黒い少女、フェイトは顔を赤くしながら（なんで？）オレを見上げてくる。そのまま話を続けたかつたんだが、突然ジュエルシードの発動を感じた。

「……ジュエルシードか」

「ごめん、シノン。私行かなきゃ」

「そうか、気をつけてな。……ああ、ちょっと待て。聖なる力よ、来い、ファーストエイド」

フェイトの左手首に簡単な治療を行う。だが、簡単といってもオレの右手を通して発動させたので左手首どころか体全体に治療が働いた。

「ありがとうシノン。あれ？シノンはジュエルシードを回収しないの？」

「フェイトが封印するなら心配いらないだろ。それにそろそろ戻らないとな」

桃子さんには1時間と言っておいたのでそろそろ戻らなくてはいけない。なぜかオレの今までの経験が”桃子さんを怒らせていけない”と叫んでいるしな。・・・なんでだろう？

「そっか、わかった。それじゃ、またねシノン」

「ああ、またなフェイト」

そう言葉を交わしフェイトは上空に飛び去っていった。フェイトの姿が見えなくなり、オレはセットアップを解除して高町家に戻った。

ちゃんと1時間以内に済ませることが出来たので、桃子さんは何も触れずに「おかえりなさい」と言ってくれた。その後は夕食の準備を手伝い時間を過ごした。

夕暮れになってなのはと恭也さんが帰ってきて、そのすぐ後に土郎さんと美由紀さんも帰ってきた。そして、それからは大変だった。

なのはと美由紀さんからは泣きながら抱きつかれ、土郎さんと恭也さんからは土下座で謝られた。なんでもオレが気絶した後二人は女性陣からきつく説教を受けたらしく二人が土下座をしていたときの桃子さんの笑顔が全てを教えてくれた。

ちなみにその後、ユーノからなのはの友人の家でジュエルシードを狙うほかの魔導師に出会ったと教えられた。一瞬脳裏にフェイトの顔が浮かんだが、まさかねえ。そんな・・・ねえ。

第12話 雷光との戦い、2回戦目（後書き）

シノンがフェイトと戦ったのはなのはと戦う前です。

では、また次回。

第13話 温泉に行く……だがその前に戦闘だ(なんでだよ)

Side シノン

眠っている中で意識が覚醒していく。恐らく朝なのだろう。なぜだろう、腹部あたりに少し重量感を感じるのだが。目を開ける。そして目に映ったのは……オレの腹部に馬乗りになっている私服姿の笑顔のなほだった。よし、とりあえず。

「おはよう、そしてなにをやってるんだ？お前は……」

なほの顔にアイアンクローを決めることにする。

「にやあああー！ー！ー！なにをするのシノン君！ー！？」

なほは両腕をぶんぶん振り回して悲鳴を上げているが知らん。目覚めていきなり人の腹部に笑顔で座っている奴に与える慈悲はない。

「ううー！。頭が痛いよおー！ー」

「で？なにか用か？まさか理由もなく人の腹に居座っていたわけじゃないだろう？」

「少しは心配してよっ！ー！」

だまらっしやい。手加減はちゃんとしてやったんだから文句無いだ

るう。

「結局なんなんだ？」

「あつ！・・・うんっ！実はね・・・」

そこから聞いた話を簡単にまとめると、今週の土日（つまりは今日と明日だ）は翠屋を休みにして温泉旅行に行くそうだ。なんでもなのはの友達二人とその家族も一緒に来るらしい。両方ともかなりの大金持ちの家の人なんだそう。

「そうか、ぜひ家族と友達の皆で楽しいんできてくれ」

「え？シノン君も行くんだよ？」

「・・・はい？」

「待て、行ってくつて言ってもオレは旅行の用意なんて一切してないぞ。今の今まで旅行のことなんて知らなかったし・・・」

「お母さんが全部用意してくれたんだって。下着とか着替えも全部」

『いつ用意したんですか？ミセス桃子は昨日ずっとマスターと一緒にいたはずですが・・・』

ヴェルフグリントの疑問はまさにその通り。でも、なんだろう。桃子さんが用意したと聞いただけで頭のどこかが強制的に納得するのは。

「・・・まあいいか。んで、まさかもつすぐ行くのか？」

「うん。だからシノン君を起こしにきたの」

「そうか、わかった。着替えてすぐに行く。ありがとう」

「どういたしまして、シノン君」

そう言うてなのはは部屋から出て行く。オレも着ているパジャマを脱いで私服に着替える。（洗濯が済んだのでオレが最初に来ていた服だ）

洗面所で顔を洗ってリビングに入ると桃子さんが朝食を用意してくれていた。その後用意してくれた荷物を受け取って高町家の皆様と一緒に家を出る。オレはこの世界に来てからの私物は一切無いので荷物は着替えのみだ。

家を出ると家の前に二台の車が止まっていた。その車の近くにはそれなりにたくさんの方がいた。長い金髪で気の強そうな女の子、紫の髪でおとなしそうな女の子、その隣にはその女の子とよく似た顔をしている美人さん。恐らく姉妹だろう。そして一番目を引いたのがメイド服を着たクールビューティーな感じと明るい感じの二人の美人さん。この人たちも姉妹なのだろう、顔が良く似ている。しかし……。

（なんだ？……あの紫髪の姉妹とメイドの姉妹、なんだか少し変わった気配してるな……あ、目が合った……っておい！！）

たぶん姉の方である紫髪の女性と目が合った瞬間、女性はクールビューティーな方のメイドさんになにか叫んだ。するとそのメイドさんはオレ目掛けて急接近。そしてなぜか、オレに目掛けて右ストレ

トを放ってきた。しかもただのメイドが、いや並みの人間でさえ出せるわけがない速度で、だ。

オレは右手に持った荷物を横に放り投げ、左の掌を掌底の形にして闘気を込める。そのままメイドさんの放った拳にぶつけるように放つ。

「・・・ちっ！・・・烈破掌！！」

掌底と拳が激突。バアアーン！！と大きな反響音が響く。衝撃が互いに衝突し、勝敗が傾いたのはメイドさんの方だった。オレの方は掌が嫌な音を立てて肘から指先までの間に鈍痛が走る。恐らく罫が入ったのだろう。オレの放った烈破掌は腕を後ろに引かずそのまま突き出すように放ったので威力がほとんど出せなかったのだ。え？ならなんで避けなかったって？後ろにいる高町家の妻と一番下の子供に当たっちまうからだよ。

というかこの人の拳、なんだか手応えが鉄を殴ったみたいなんだけど。どういことだ？右手だけが鋼の義手とか？もしかしてロボットとか？いや、まさかねー！。んなわけが・・・ないよな？

「ノエル！！やめる！！」

「恭也様、しかし・・・」

オレが体勢を崩したところにメイドさんが追撃を加えようとしたが恭也さんの声で動きを止めた。ふつうの人ならここでじっとしているだろうがあいにくオレは違う。いきなり殴られて腕の骨をやられたのだ、相手にもそれなりに痛みを味わってもらおう。

右手で拳を作りメイドさんのから空きの腹部に打ち込む。ただし、ただの打撃ではない。

「剛力徹破・・・咬牙あ！！！」

「・・・・・・・・ぐっ！！！」

少し拳に細工をしてあって体の内側、つまり内臓などに浸透衝撃を与える技だ。いま叩き込んだ衝撃を内臓に喰らえば普通は吐血ぐらいはするはずだ。だが・・・・・・・・。

（おいおい。まさかマジでロボットとか？）

・・・・・・・・驚くことにメイドさんは少し苦痛を訴えるような顔をして普通に立っていた。というか、さっきからなんだ？目が合った途端にいきなり襲ってきたし。オレなんかしたか？

メイドさんはオレの攻撃に反撃しよう構えをとったがオレとメイドさんの間に土郎さんが割って入った。

「そこまでしてくれないか？これ以上私達の家族を傷つけるなら私も黙っていないよ？」

表情は穏やかな様子だがメイドさんと目が合った女性にかなり濃密な殺気を放っている。それよりさっきの言葉は・・・・・・・・。

（家族、か。カノンもそんなこと言ってたっけな）

二度と聞くことが無いと思っていた言葉だった。だが、不思議と悪い感じはしないな。

「……ふむ、すまないが少し話し合いの必要があるらしいな。
桃子、美由紀、なのはやシノン君、アリサちゃんを、運転はフアリンさんに頼んでくれ」

「わかりました。さあー行きましょうシノン君、なのは」

「あの桃子さん、失礼ですがオレは行かないほうが……」大丈夫よ「え？」

「大丈夫、あなたはここにいていいのよ」

桃子さんはそう言ってオレとなのは、美由紀さん、あとさつきから呆然としていた金髪の少女を車に乗せた。あと土郎さんの言ったフアリンさんはもう一人の明るい感じのメイドさんだった。オレは無意識に警戒したがフアリンさんは気まずそうに車を出した。

そして出発してからの数分後の車内……。

「あんたが、シノン？」

急に金髪の少女がオレに訪ねてきた。

「ああ、シノン・ガードだ。なんでキミはオレを知ってるんだ？」

「なのはから学校であんたのことを聞いたのよ、あ、私はアリサよ。アリサ・バニングス。よろしく」

「ああ、よろしくな。アリサさん」

「アリサでいいわよ。わたしもシノンって呼ぶから」

「わかった。よろしく、アリサ」

アリサと軽く握手をする。ちなみに左手は案の定罅が入っていたので今は包帯で固定している。まあ夕方か夜には直るだろうが……。

「ていうかあなた、忍さんとノエルさんになんかしたの？いきなり殴りかかっていったんだし……」

「悪いがまったく心当たりはないな。あの人達とは完全に初対面だ。出会っていきなりあんな切れの良い右ストレートをかまされるようなことはしてないぞ」

そんな会話をしながら……乗っている車は海鳴温泉へとたどり着いた。

第13話 温泉に行こう・・・だがその前に戦闘だ（なんでだよ）（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

はい、なんだかノエルと戦闘になりました。シノンは今現在月村家から警戒されています。

あと、今回やっとレギオスの技が出せました。ただ、レギオスでは技を出すときの手は平手だったんですが、今回は拳にしました。

できればこのまま止めずに更新していきたいです。では、また次回。

第14話 海鳴温泉・・・そして高町夫妻の心配（前書き）

5万PV突破！！皆さんありがとうございます！！

では、じゃー。

第14話 海鳴温泉・・・そして高町夫妻の心配

Side Out

シノン達は海鳴温泉に着いた。しかし、旅館に受付などもしなければならぬので結果的に土郎さんたちを待つことになった。その間にシノン、なのは、アリサの三人はよく話し、かなり深く打ち解けていた。あと運転をしていたファリンは耐えられないというようにシノンに謝罪してきた。シノンは自分が何故いきなり襲われたのか訊ねたが、ファリンは自分の口から言うことはできない、といて教えなかった。

数分後、土郎、恭也、紫髪姉妹、姉のメイドが車に乗って到着してきた。シノンは自然と視線で紫髪姉妹に説明を求めると、紫髪姉妹とメイドさんがこっちに近づいてきて謝罪してきた。シノンは謝罪より襲撃された理由を求めたが、この場では言えないらしい。シノンはしぶしぶ納得して荷物を持って旅館に入っていった。

Side シノン

オレと恭也さんは部屋の中にみんなの荷物を運んでいる。土郎さんは桃子さんと二人きりで周りを歩きに行き、他の女性陣全員は風呂に入りに行っている。荷物運びはオレと恭也さんが自主的に申し出たのだ。

「それで、なんでオレはいきなり襲われたんですか？あの人達とは

初対面のはずですが」

オレは荷物を部屋に積み込みながら背後の恭也さんに訊ねる。あの姉妹は答えなかったので相手を恭也さんに変更だ。

「以前、おまえ自身が言っただろう。」自分は入れ物に入った化け物”だと。あいつは、忍やすずかちゃんはそういう類の存在に敏感に気付くんだ。そのせいでお前に異例の気配を感じて敵と勘違いしてしまっただ」

異例の気配に敏感、ね。確かにオレの気配は人間の気配ともはつきり一致しない。体だつて化け物と呼んでも差し支えないスペックを持っている。だが、まだ解せない部分がある。

「・・・敵と思われた理由はわかりました。でも、あの姉妹はなんでそういう存在の気配なんてわかるんですか？」

そう、オレが異例の存在だから敵と警戒するのはわかる。だがそれは襲う理由にはならない。”なぜオレを襲う必要があつたのか”なぜあの姉妹（忍とすずかと言うらしいが）は普通の人気が付かない異例の気配なんてわかるのか”恭也さんはこの二つの質問を流そうとしていた。悪いがこちらら襲われたんだ、遠慮してやるつもりはない。それにあの姉妹がもう手を出してこないということは恭也さんはオレがどういう存在かも教えたということだろう。オレのことは教えてオレに情報が無いのはフェアではない。

「・・・そ、それは・・・すまん、これは忍がない所で話すわけにはいかないんだ」

話せない、つまりはあの姉妹もなんらかの異例の存在であることは

決定か。他にもあのノエルさんとファリンさんについても詳しく聞きたいがやめておこう。下手に首を突っ込みすぎて巻き込まれるのはごめんだ。

「わかりました。なら今度落ち着いたときぐらいに。オレは風呂に入ってきます」

そう言っただけでオレは部屋を出て風呂に入った。そして風呂場を出るとなんだかなのは達の少女三人組がオレンジ髪の美人さんに絡まれている。昼間から酒でも飲んで酔っ払っているのだろうか、でなければ少女三人が外人から絡まれる理由が見当たらない。ていうかなんだかあの人からも少し変わった気配がするんだが。とりあえずどかすか。気配を消してオレンジ髪の女性の背後に立つ。え？理由？反応が面白そうだからさ。

「すみません。彼女達があなた達になにか失礼をなさいましたか？」

「わっ！！いつ、いつの間に……っ！！」

目の前の女性は予想より盛大に驚いてくれた。具体的に言うと、両肩をビクンッ！！と震わせすごい速度で首を周囲に動かしていた。

オレンジ髪の女性はオレと目が合った瞬間、冷や汗をたらだら流し始める。なんだ？少し殺気をぶつけてみる。

「わ、悪いね。知り合いに似てたから……」

「そうですか。外国の方は日本人との区別が難しいそうですからね」
表面上は普通だが目では、さっさと消えろ、と意味を込めている。

オレンジ髪の女性は半場逃げるように温泉に入ってしまった。目の前の仲良し3人組が引いているくらいわかりやすく伝えたのだ。さつさと立ち去ってくれて何よりだ。

「まったくなんなのよ!？」

「気にするなアリサ、あんな輩は忘れるのが吉だ」

「にやはは、そうだね。あつ! シノン君、髪梳いでいい?」

「ん? ああーいいぞ。わるいな」

「うっん、楽しいもん」

今のオレの髪は無造作に垂れ下がっている。オレはソファアの上にあぐらをかいて座り、手の中に全身真っ赤になったユーノを持っている。なのは達と一緒に女湯に入ってきたそうだが、のぼせたか?

オレの銀髪は腰まで届く位に長い。ここまで伸びた理由は、バンエルトティア号でばっさり切ろうとしたらカノンノに泣きながら止められたのだ。なんでも綺麗だから切らないで欲しいんだそうだ。ちなみにカノンノの泣いてる現場を目撃され、オレは他の女性陣(戦闘員)全員と戦う羽目になった。あの戦いが生きてきた中で一番過酷に見えたのは気のせいではないだろう。高町家の場合は女性陣が殺気の籠もった声で止めてきた。

そして最近ではオレの髪はなのは、美由紀さん、桃子さんの順番でループしながら整えるのが日課になっている。最初は自分でやると言ったのだが、3人が言うには整えていて楽しいんだそうだ。

「あんたって綺麗髪持つてんのねえー。それにさらさら」

「ホントに、綺麗だね」

アリスと月村すずかがオレの髪を触りながら感想を述べてくる。そんな大層なものでもないんだがな、この髪。たまに月光浴びると光るんだぞ？調べたことはないが絶対まともではない。

・・・なんか、林の方から木の枝が揺れる音がやたら響いたけど、なんでだ？

場所が変わって宴会会場。オレは浴衣から普段着に着替えて宴会場にいる。そして現在の宴会は・・・カオスだ。

なのは達に酒を飲ませようとする勇者はいなかったが、美由紀さんと恭也さんは酒でダウン。恭也さんは忍さんに膝枕状態だ。オレ？オレは元々酒にかなり強いのでまったく平気だ。

それに、他の人はそんなにオーバーに酔ってはいないみたい・・・。

「あははは・・・シノン君って温かいですねえー」

訂正しよう。メイドさんの一人、ファリンさんは見事に泥酔状態だ。

オレの背後から首に腕を通して思いつきり抱きついており、なぜか

ファリンさんの腕はまったく解けない。

「……ノエル、なんでファリンは酔ってるのかしら？」

「……わかりません。帰ったらなぜ酔うのか調べなければ」

なんだか忍さんとノエルさんのそんな会話が聞こえたが、まず助けてよ。

それはともかく、オレの身と理性が大変危ないんだけど。

背中に胸の感触が伝わってるし、いい匂いはするし。だが反面、体が強い力でホールドされているので体が苦しい。

なのは達の方に視線で救援を求めるが、なのは達はすでに部屋に戻っていた。

結局オレは、ファリンさんが眠って力が抜けるときまで開放してもらえなかった。なんだか途中で念話が聞こえた気がしたのだが、理性と意識を保つことに集中していたので聞いている余裕は無かった。かなりの力でホールドされていたらしく、首の辺りに青い痣が出来上がっていたのを見た時はさすがに冷や汗が流れた。

思ったんだが、もしかして今のオレの精神年齢は下がっているのではないのだろうか？

以前のオレなら意思をしっかりと保っていればあまり動揺しなかったのだが今回はかなり動揺した。

そういえば、前にハオルドが開いた授業で「人間の精神年齢は肉体

の年齢と互いに強く引き合う」って言ってたっけ？

動揺したのはそのせいだろう。以前ならファリンさん位の女性なら冷静に対処できたんだが。

ん？待てよ？それだと今のオレはなのはやフェイトに恋愛感情を抱く可能性があるのか？グラニデのオレの子供時代は恋愛の”れ”の字どころか平穩の”へ”の字も無かったのでもしかしたら・・・やめよう、なんだか恭也さんが恐ろしい変化を遂げる予感がする。それは置いて。

(ヴェルフグリント・・・なのはとユーノは外か？)

(はい、恐らくジュエルシードかと・・・)

(そうか・・・んじゃ、行きますか)

オレは士郎さんに「散歩してきます」と言っただけ断りを入れて宴会場を出て走り出した。

Side 士郎

シノン君が宴会場を出た後俺と桃子はいままでのことやこれからこのことを話している。

そして、話題がシノン君のことになった。

「そういえば、最近シノン君を気にかけているようだけど、どうしたんだい？」

「あの子の目を見たときにわかったの」

桃子は穏やかな声で悲しそうな表情をしている。

「あの子は多分、いままで家族の温かさや人の優しさを感じたことがないのよ」

桃子の言葉には同意見だった。恭也がシノン君に刃を振るったあのときにしていたあの目、あの目は濁っていて、壊れた目だった。全てを心のどこかで諦めている目。まるで幸福なんて初めからこの世に存在していないと言つような目だ。

「目が覚めた時だって怪我をしても、あれぐらいじゃ死なない”以前にあれ以上の怪我を負ったことがる”って言ったの。まるで自分は傷つけられるのは当たり前だから大丈夫ですって言うみたい」

つまり、自分は傷を負うのは当たり前だから怪我をしても死にはしなかったから大丈夫です、つと言ったということか？

「だから……彼には知ってもらいたいの、世の中には温もりがたくさんあるって、傷つくのが当たり前なんて嘘だって。嫌なの、あんなに優しい子が幸せから拒絶されるなんて」

その時の桃子の顔は今にも泣き出しそうな顔だった。俺は桃子の肩に手を乗せて桃子を抱き寄せる。

「知ってもらいたい・・・ううん、私が教えてあげるの、彼に温もりを。だって・・・」

「そうだな、俺も彼が傷つかないように彼を鍛えよう、だってシノン君はもう・・・」

俺たちのもう一人の息子で、もう俺たちの家族なのだから。

Side Out

この時、二人は知らなかった。シノンが幸せから拒絶されたのは自分達の世界ではなく、別の世界だと言うことを。二人は知らなかった。シノンは幸せだけでなく、自分が生まれた世界からも拒絶された事実を。

第14話 海鳴温泉・・・そして高町夫妻の心配（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

今回は戦闘前で区切れました。とらハ3の知識はほとんど知らない
ので、夜の一族どうこうの話は番外編などでやりたいと思います。

ではまた次回。

第15話 雷光の使い魔……の必死の逃走(前書き)

今回なんだかシノンが黒いです。

では、ごきげん。

第15話 雷光の使い魔……の必死の逃走

Side シノン

旅館に出てオレはすぐに先に向かっていたなのはとユーノに追いついた。少し時間が掛かると思ったがなのは走る速度が遅かったのですぐに追いつけた。(あとでなのはにこの事を言ったら怒られた)

たどり着いた場所には先客がいた。すでに封印されたジュエルシードの側に人が二人いる。風呂場の入り口でなのは達に絡んでいたオレンジ髪の女性と金色の髪をした少女。というか、あの髪とあの格好からして……。

「あ！あの子は……」

「なんだ、やっぱりフェイトか……」

「にゃあ！！シノン君知ってるの!?!」

「いや、だって二回戦って勝ったし……」

「「ええええー!!!」」

オレの言葉を聞いてなのはとユーノは驚愕の声を上げる。フェイトはオレの方に小さく手を振ってくる。一応、オレも手を上げて返す。

「そんな……シノンの魔力量であの子に勝った?」

「え？どういうこと？」

「敵を前にしてずいぶん余裕だねえーあんたら・・・」

オレ自身も少し気になるユーノの説明は聞く前にオレンジ髪の女の声に遮られた。なのはとユーノはその言葉を聞いて身構える。それに比べてオレは左手をポケットに突っ込んだ状態で振り向く。

「実際余裕あるからな、オレに会って冷や汗を流しながら逃げた奴に大した脅威など覚えん」

「ふん、言ってな。あんたはともかく、そっちの子達には忠告したはずだよ？」良い子にしてないとガブツといくよ？”ってね」

そういうとオレンジ髪の女性の体が少しグロイ変化を起こしてオレンジ色の毛並みの狼（以後、狼）の姿になった。

「やっぱり・・・あの人、あの子の使い魔だ！」

「使い魔？」

「術者である主と契約を結んだ存在、まあパートナーだな」

そう説明した後に狼がこちらに突撃してくる。すると、なのはの肩に乗っていたユーノが飛び出し狼と障壁を張って激突。同時にユーノと狼の足元に緑色の魔方陣が展開された。恐らく転移系のものだ。オレは走り出して魔方陣のサークル内に入る。

「シノン！？」

「一人じゃ辛いだろ？手伝ってやるよ。なのは」

「え？なに？」

「誰も怒らないから、自分のやりたいことをやってみな？」

なのはの返事が届く前にオレとユーノは足元の魔法陣が放った輝きに包まれた。

光が収まり、目の前の景色が見えてくる。どうやら木々の間が狭い場所に出たようだ。狼は前方の木の枝の上からオレとユーノに牙を見せながら威嚇している。オレは狼から視線を放さずにユーノに手を差し延べる。ユーノはすぐに意味がわかったのか肩によじ登ってくる。

「やられたねえー強固な障壁に強制転移を同時発動。なかなかやるじゃないか。でも、そちらの魔力がまったく感じられない少年君はどうか、ねえっ！！」

狼は枝から飛び降りて左前足の爪を振り下ろしてきた。オレは左にかるく跳んで避ける。というか、魔力がまったく感じられない？どいうことだ前に魔術を使えし、今でも体に流れる魔力を感じる。狼は空いた右前足の爪を横に振るってきたがそれもバックステップで回避する。そして着地と同時に体勢を低くして狼に急接近。

「臥龍空破！！！」

右拳を握り狼の顎を狙って上に振り上げるように放つ。俗に言うアツパーだ。しかしさすがは人間並みの知性を持った獣、狼は拳を放つ寸前に後退して拳を避けた。オレは今空中にいたので格好の的だが……。

「鷹爪襲撃!!」

無理やりに体を地上に落下させ、同時に空中から蹴りを叩き込む。狼は慌ててその場から移動し木の枝に飛び乗った。

「ヴェルフグリント、セットアップ」

『Yes, My Load. Standby Ready. Set up.』

服装がバリアジャケットに変わる。狼はこちらを警戒しながら姿勢を低くしている。

(むうー、刀で斬ると間違って殺しかねんなオレの斬撃つてもしかしたら障壁ごと斬れるかもしれないし……うん、仕方ないな)

左の掌に軽く雷撃が迸る。もちろん術技で生まれたものだ。オレはその左手を狼に向けて……。

「死にはせんから安心しろ。ライトニング!!」

術を発動させた。すると、狼の周りに数本の雷撃が落ちてくる。狼はすぐにその場から移動、雷撃の落ちて来る場所から離脱した。加減の意味で左手を使ったのでやはり威力がそんなに高くない。

「ほおー今のを避けるか、んじゃ次ぎ行くぞー」

「な!?!冗談じゃないよ!?!」

オレの言葉に反応して狼は冷や汗を流しながら木々の中に逃げた。

「シノン、まずいよ。自然の中じゃ動物の向こうの方が有利だ」

「まあー普通なら苦戦するな。でも、今はオレが追う方だぜ?」

さてさて、どこまで逃げ切れるかなあー?ふふふふ。そう思いながらオレも狼の後を追って森の中に入っていった。だが、そのときに振り返ったアルフが真っ青の顔で走る速度を上げたのは何でだろう?

Side なのは

今私は空を飛んでいる。手に持っているデバイス、レイジングハートの中にあつたフライヤーフィンという飛行魔法のおかげである。

目の前の金髪の女の子、フェイトちゃんも空を飛んでいて手にデバイスバルディッシュを私に向けて構えている。

私達は戦いにジュエルシールドを互いに1つずつ賭けることにした。本来なら賭けなんかに使っちゃいけないってわかってる。でも、シノン君の言葉を聞いてやってみようと思った。

私はユーノ君に教えてもらった攻撃に使う魔法、デイバインシューターを展開する。数は計4つ。

フェイトちゃんの使っているフォトンランサーよりも数が少ないけど、これはフォトンランサーと違ってコントロールができる誘導弾なのだ。

制御しながら私自身の移動も同時に行う。マルチタスクという魔法のおかげで誘導弾を操りながら飛行による移動も同時に行える。魔法って本当に便利だなあー。

フェイトちゃんは私が追いつけない速さで移動を始め、誘導弾を振り切ろうとする。でも、こちらが使っているのは”誘導弾”だ。コントロールを強めてフェイトちゃんを追わせる。フェイトちゃんは1、2、3発まで避けきったが4発目は避けきれなくなり左手に張った障壁で防いだ。

私はチャンスと思って誘導弾の残り3発の制御を放棄。レイジングハートをシューティングモードにして砲撃魔法をフェイトちゃんに向かって撃つ。

「デイバイン・・・バスターー！！！」

だけど、フェイトちゃんは左手でシールドを張ったまま右手のバルディッシュの矛先をこっちに向けてきた。すると矛先に金色の魔力で出来た球体が現れる。

(まさか・・・砲撃！！！)

『Thunder Smasher』

思ったとおり砲撃だった。むしろ驚いた自分を不思議に思う。相手は自分より魔法の経験があるのだ。砲撃魔法が使えたっておかしくない。

二つの砲撃がぶつかる。押し合いのような状況になった。

「レイジングハート!!お願い!!」

『All right・My master』

デイバインバスターの出力を上げてもらい、フェイトちゃんの砲撃を押し切った。

(勝った!!)

そう思ったが、押し切った先にはフェイトちゃんの姿は無かった。どこに? 次の瞬間、上の方からフェイトちゃんが降りてきて、私の首筋に鎌の形になったバルディッシュを突きつけてきた。

負けた。

頭の中で私は冷静に理解した。するとレイジングハートがジュエルシールドを1つ取り出した。フェイトちゃんは無言でジュエルシールドを手に取って地上に降りた。私もそれに続く。

「私の名前はなのは、高町なのは!!あなたは!？」

「.....シノンから聞いているはず」

「あなた自身から聞きたいの」

「……フェイト、フェイト・テストロッサ」

それだけ言ってフェイトちゃんは飛んでいこうとするが……。

「そーらどうした!? もう息切れかよ狼さん!？」

「ちくしょおおー!!」

……森の中からそんな会話が聞こえ、数秒後に森から2つの影が飛び出してきた。

1つはシノン君、なんだかとても黒い笑みで満足という顔だ。もう1つはオレンジの狼さん、なぜか涙を流しながら必死な顔をしている。シノン君の肩に乗っているユーノ君は狼さんを同情の眼差しで見っていた。

「……ん? よう、なのは、フェイト。終わったみたいだな、鬼ごっこは終わりだ。命拾いしたな狼?」

「な、なにがあったの? アルフ」

「じ、地獄を見た……思い出したくないよ」

一体シノン君は何をしたんだろう? 狼さん、アルフさんが少し可哀相と思えたのはきつと気のせいじゃないと思う。

S i d e シノン

いやぁー楽しかったー。オレはあの後に狼を追って森の中に入っていた。

狼の逃げる速度は確かには速かったが、オレも伊達になんども暗殺者を相手にしてきていない。森の中で逃げる動物を一匹追っかけることなど造作も無い。

んで、逃げ切れない狼を術技の工夫で追い詰めてやった。木の枝の間を跳びまわっている時にはウインドカッターやエアスラストでわざと近くの枝を切って追い詰め、地面を走っているときはロックブレイクやグレイブなどで逃げ道を妨害し木の上からスプラッシュによる水攻め、そしてその後にかウントダウンを数えて濡れた地面にライトニングなどの電撃を流した。火を使わなかったのは万が一に山火事になったら困るから。(ちなみに途中で空に逃げるような反則行為を行った場合はテンペストを使って無理やり地面に叩き落した。)

逃げ切れなくなったところでやめようかと思ったがけっこう粘るのてついやりすぎてしまったなぁー。途中でユーノが結界を張ってくれなきゃ旅館に騒ぎが届くかもしれない。いかなんな精神年齢が下がったらSっ気が目覚めたようだ(関係ない)。

「ええーと……じゃーね、シノン。アルフ、帰ろう」

フェイトはぼろぼろの狼、アルフを連れて空を飛んでいった。なのはの方に目を向けると、落ち込んでいると思ったのはの目には落ち込みがまったく無く、逆に闘気が宿った目だった。

「シノン君、明日からでも戦い方を教えてもらっていい？」

「わかった。ユーノ、お前さんもちょっと協力してくれ」

「うん……でも僕がなのはに教えることなんてもう……」

「違う、違う。オレの方にだ」

「え？う、うん。わかった」

そんな会話を終え、オレ達は旅館の方に戻っていった。

第15話 雷光の使い魔……の必死の逃走（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

どうでしたか？ 作者は結構黒く出来たと思うんですが……。にしても、ギャグってむずかしいです。

アルフの戦闘の描写も大変でした。だって狼って四足歩行だからマジで手が無いし。

次は修行のお話になると思います。このペースだと無印だけでどの位掛かるんだろう？

ではまた次回。

第16話 訓練と生まれる恐怖心（前書き）

今回は訓練編です。

では、ごきげん。

すいません。第何話って書くの忘れてました。

第16話 訓練と生まれる恐怖心

S i d e シノン

海鳴温泉から帰ってきた翌日、オレとなのはは森の中に結界を張って修行中だ。

「シノンくん！！デバイスなしで誘導弾作れたよぉー！！」

「おおー。んじゃ次はコントロールの錬度を鍛えろ」

「うん！！わかった！！」

なのはには現在誘導弾を使った訓練をさせている。

んで、オレはというと……。

「本当だ、確かに魔力がある。それになのは以上の量だなんて……」

『はい、マスターの体内には確かに魔力が存在します』

『しかし、センサーなどには反応が無いということでしょう？』

頭にユーノを乗せ、右手に待機状態のヴェルフグリント、左手にレイジングハートを持った状態だ。

何をしているのかと言うと、オレの体の中のリンカーコアという魔導師特有の器官を調べているそうだ。

リンカーコアとは魔導師が体内に持っている魔力を生み出す擬似内臓器官で魔導師にとっての心臓のような器官らしい。

オレの体内にも魔術回路とは別に存在している。つまり、オレの体内には確かに魔力があるということになる。だがユーノが言うにはオレからは魔力が感じられないらしい。

矛盾に首を傾げたオレとユーノと両手のデバイス二体はオレのリンカーコアを調べてみるという結論に達した。

なんだかんだでこのまますでに十分が経過している。さすがに退屈になってきた。

『……マスター、判明しました。これはマスターのレアスキルによるものです』

「レアスキル？ 先天固有技能みたいなもんか？」

『正解ですシノン様。解析の結果、シノン様は外に流れる魔力の流れを完全に隠蔽しているのです。ですからシノン様の体内を調べたときに外部と内部で違いが生じたのです』

「名前を付けるなら……魔力完全隠蔽能力って所かな？」

「魔力の完全隠蔽、か」

「あ、それとシノン、もう一つ変わったことがわかったよ」

「なに？ まだあるのか？」

オレの言葉にデバイス二体がうれしそうにデバイススコアをピコピコと点滅させる。

『調べた結果、シノン様には魔力の属性変換能力がありました』

属性変換。ユーノが言うには魔導師の中には魔力に属性を持つものがあるらしい。

現在確認されているのは炎熱、電気、氷結の三つだそうだ。だがオレの属性はそのどれでもなかった。発見されてもいないので結果的にこれはレアスキルになるらしい。

オレの属性は、“重力”という属性と呼べるのかわからないものだった。それに重力と言われても使い方も思いつかない。よって使い方についてはオレとヴェルフグントが話し合ってみつけることになり保留となった。

能力の解析を終え、本格的な特訓の開始だ。

なのははレイジングハートをセットアップして空に浮いている。オレは投影で作った黒塗りの洋弓（イメージ：Fateのアーチャーの弓）を右手に持ち、腰には矢を入れる袋を付けて地上にいる。

「いいか？次は射撃の回避訓練だ。今からオレがこの吸盤つきの矢を撃つからなのはは自由に動いて避ける。オレも移動はするが地上を走るだけ。最大3発喰らったら失格だ。なのはは避けながら誘導

弾や砲撃などでオレに一発当てられた、またはオレが矢20発を撃ち尽くすまで逃げられたら勝ち。いいな？」

オレの説明になのはは頷いて返答する。それを確認し、ユーノにアイコンタクト。

「よーい。はじめー!!」

声と同時になのははディバインシューターを四つ形成、そして撃つてくる。

オレはその場から走り出して誘導弾を振り切る。

オレの身体は鍛え上げた動体視力に着いていけるぐらいに鍛えてある。銃弾が飛び交う中を走り抜けることも可能だ。というかやったことがある。

誘導弾を振り切りながら腰の袋から矢を取り出して矢に備える。

「アストラルレーザー!!」

振り向き様に放った矢は名の如くレーザーのような速度でなのはは向かって直進していく。

なのはは慌てて高度を下げて回避、地面すれすれの高さを飛ぶ。なのはは前を向くが、さっきの場所にオレはいない。ならどこか？上である。さっきの場所から山を描くように弧を描いて跳んだのだ。

「そら、安心してる暇は無いぞ？ストローククエイカー!!」

オレは真上から真下にいるなのはに向かって矢を撃つ。これで残り18発。

なのははオレの声に反応し、速度を上げて矢の着弾点から逃れる。

オレが放った矢が地面に着弾。地響きが起こってクレイターが出来た。矢に吸盤が着いているからこんなものだが、本物の矢ならクレイターを作るときの爆発でなのはは飲み込まれていた。

オレが地面に着地した瞬間、誘導弾が正面から並んで3発襲ってくる。よく見るとなのはが砲撃のチャージをしている。追い詰めて撃つつもりだろう。

(だが甘い)

自分の姿が見つかっている時点でその作戦は失敗だ。オレは誘導弾をぎりぎりまで引き付けて横に飛んだ。誘導弾は制御が間に合わず、地面に着弾する。

すぐに矢をセットした弓をなのははに向ける。なのははまだチャージ中の状態、つまりは動けないのだ。

「時雨!」

「.....っ!」

オレの攻撃に焦ったのかなのははチャージの途中で砲撃を発射した。

矢と砲撃が衝突。一瞬だけ拮抗するが矢はすぐに砲撃に飲み込まれた。だがそれでいい。残り17発。

今の矢は当てるためではなく、なのはの砲撃を中断かあるいは完全な威力で撃たせないのが狙いだ。

そして先程の拮抗で出来た一瞬でオレは次の攻撃の準備を終えている。

「襲火の乱!!」

矢を休む間も無く連射する。纏め撃ちではない。一発ずつだ。放ったその矢の数12発。残った数は2つだ。

なのはも必死に動いて避けようとするが数が数だ。2発右腕に当たった。終わったと思ったのか一瞬警戒が緩む。だがまだだ。

「ラストオー!!」

もう一発矢を放つ。その矢は襲火の名を表すように炎を纏った火の鳥となった。なのはは抜き打ちの要領でとっさに砲撃を撃った。爆発が起こり、爆煙が広がり同時に火の鳥が消滅する。

(ほう、今で終わると思ったが・・・反射神経は悪くないな。だが、これで仕舞いだ)

「時雨の音」

さきほどの時雨より重く強い矢を放つ。矢は煙の向こうにいるなのはの額に当たる。なのはは何が起こったのかわからないのか呆然としている。

「終わりだ、なのは」

声を掛けるとなのはは残念そうな顔をして地上に降りてきた。

S i d e ユーノ

なのははゆっくり地面に降りていく。シノンも手加減をしたのだろう。なのははどこも怪我をしていない。

だが僕は、それ以上にシノンが使ったあの技に関心が向いている。

レーザーのような速さで放たれた青い矢、地面にクレーターを作った矢、火の鳥のような形になった矢など、魔法とは違い魔力を一切感じない不思議な技。

他にもこの間見た風の刃や大量の水などを生み出す技も同じものだと思う。あの時は技よりもシノンの敵の追い詰め方に目が向いてたから気にならなかったけど。

一度シノンに聞いた見たけど返ってきた言葉は”強くなつていく過程でいつの間にか覚えてた技”だった。

詳しく聞くとシノン本人も根本的な仕組みを理解していないらしい。ただ、あの技などはやはり魔力を一切必要としないものらしい。

初めに聞いたときは軽く納得したけど、今考えてみたらシノンのあの力はすごく危険な力なんじゃないのかと思う。

魔力を一切必要とせず、魔導師の魔法以上の破壊力を生み出せる存在。そう思うとすごく恐怖感を感じてしまう。もしあの力が一般人を襲ったら？

（大丈夫、だよな？シノンはそんなことしない。．．．でも、もしシノンがそうになったら、そのときは僕が．．．）

そんなことを頭で考えながら僕は戦い方の講義をしている二人のもとに向かった。

S i d e O u t

第16話 訓練と生まれる恐怖心（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。ユーノに警戒心を持たれましたあー。

あと急なのですがシノンには髪型と声のイメージとヴェルフグリントは声のイメージが決まりました。

シノン・ガラード

髪型：前髪はFF？CCのザックス前期のような髪型。腰まで届く後ろ髪はユーリのように垂らしている。

声のイメージ：小野大輔さん（普段は結構低めな声で叫ぶときはよく届くイメージで）声のイメージキャラ、キスダムの哀羽シュウ。

ヴェルフグリント

声のイメージ：坂本真綾さん。声のイメージキャラ、アーマードコ
Answerのフィオナ・イエルネフェルト。

以上です。では、また次回。

第17話 暴走と起こる異変（前書き）

今回は少し長いです。

では、ご静聴。

第17話 暴走と起こる異変

Side シノン

「……やっぱり見当たらんな」

時刻は夕日が沈みかっている頃。オレは独り言を呟いた。

オレはビル街の中で一番高いマンションから街を見下ろしている。

何をしているのかと言うと、一人でジュエルシード探した。なのは昨日の訓練で教えたことをおさらいさせている。故に今はオレ一人でジュエルシードを探している。

だが、結果はあまり良くない。どうやらオレは魔力を感じる能力がなのはやユーノより低いらしく、発動していないジュエルシードの気配は感じる事ができなかった。

なので高い所から強化した目で街の中を見ていたのだが、見つからない。

鉄橋のボルトの数を数えるくらいまで出来るのだが、街中は夜に近いのでネオン光などで奥の隅々まで見ることが出来ないのだ。

昼間にやればよかったと思うが、過ぎたことを言っても仕方が無い。

今までのジュエルシードの発動数からしてもう半数は封印されている。(ちなみにオレのジュエルシードはなのはに渡した)

残り半数の場所もこの海鳴のどこかなのだろう。しかし、全てが街中にあるとは思えない。候補としては・・・海かな。うーん、いつそのこと海の中に適当に宝具でも叩き込むか？いやだめだ。それでジュエルシードが残り全部発動したら洒落にならん。

（仕方ない、この辺が潮時か・・・ん？なんだ？）

何故か突然無差別な流れの魔力を感じた。そして、遅れてジュエルシードの気配を感じた。

『マスター、恐らく敵魔導師の二人組みが強制的にジュエルシードを発動させたのだと思います』

「馬鹿なことを・・・やるにしても結界を張ってからやれ」

そう言っていると街中を結界が包んだ。恐らくユーノが張ったものだ。

「オレ達も行くか、セットアップ」

『Yes, My load. Stund by Ready.』

セットアップの完了と同時に走り出しビル街の屋根から屋根へ跳んで気配がする場所に急ぐ。なんだ？なんだか今回はイヤな予感がする。

到着すると、すでにフェイトとなのはがビル街を飛び回りながら

戦闘を開始している。

そしてオレの方には人間形態のアルフが向かってきた。浴衣姿の時とは違い私服姿に両手に手甲を付けている。オレに接近するといきなり右のストレートを放ってきた。オレは冷静に右の掌を前に出して受け止める。

「ほう、どうやら旅館の時の戦いだけでは懲りていないらしいな？」

「はん！この前と同じようになると思わないほうがいいよ！」

そういうと右手を突き出した状態から左足で腹部を狙った蹴りを放ってきた。オレは拳を掴んでいる右手を軽く右に振るう。その瞬間アルフの体が空中を舞った。

「はっ？がっ！！！」

アルフは間抜けな声を上げて頭から地面に体を打ちつけた。知識の中の合気道を真似てみたんだが使えるな。あと、今でアルフの右肩間接を外しておいた。

「ユーノはジュエルシードを抑え込んでおいてくれ」

「う、うん……わかった」

「くそっ！！！」

毒づきながらアルフは立ち上がって左拳を放ってくる。しかし、速いが軌道が滅茶苦茶でむしろ拳骨のようなパンチだ。もしかして、こいつ。

後ろに身を引いて腕を掴み背負い投げを決める。オレの予想が正しければこいつはもろに喰らう。

結果、アルフは受身も取らずに背中を地面に打ち付けた。

オレは掴んだ腕をそのまま背中に移動させてアルフを押さえ込む。というかやっぱりこいつ……。

「な、なんで……あたしの方が身体能力は上のはずだ……」

「お前、格闘戦の技術まったく知らないだろ？身体能力どうこの前にそつちを鍛えろよ。これなら獣状態の方がまだ強いぞ」

「うう……」

アルフが悔しそうにしているがオレはなのはとフェイトの戦いに目を移す。

なのはの動きはオレが無駄な部分を指摘したので以前より動きがいい。魔力弾の精製と砲撃のチャージを同時に行えるほど技術も上がった。

だが、まだスピード面でフェイトの方が有利だ。

「……大丈夫かねえ」

「なにが？」

「いや、ジュエルシードは封印してるけど二人が全力で戦ってるか

ら影響がないのになって思ってたねえー。なにも起こらなきゃいいんだけど」

「ちよっ、お前ここでそういう台詞は……」

フラグだ、そう言おうとした途端にジュエルシードが輝き、内包されていた膨大な魔力が放出されユーノが吹き飛ばされた。

「ちっ！まずいな……」

オレは縄を投影してユーノを捕縛術の要領で確保、すぐに引き寄せ

そのままユーノを地面に置いて、先程外したアルフの右肩間接をはめ直す。

「アルフ、戦闘は一時中断だ！。封印を手伝え！」

「あれはやばいね。わかったよ」

オレ達が動こうとしたその前に……なのはとフェイトが互いのデバイスをジュエルシードに突き出していた。しかし次の瞬間白い極光が二つのデバイスを襲い、デバイスに無数の罅が走った。

なのはとフェイトは別々の方向に同時に吹き飛ばされるが怪我は無かった。とりあえずは全員無事だ。

その瞬間、ジュエルシードが魔力による強力な衝撃波を放ち始めた。さらには視界にジュエルシードに近づくフェイトが見える。

(やばい!!あのままじゃもろに喰らう)

一瞬で術と投影のイメージを完成させなのはとフェイトに向けて発動させる。

「フォースフィールド!!ロー・アイアス!!」

なのはを外界からの攻撃を全て遮断する円状のシールドが包み、フェイトの目の前には1枚が城壁1つ分の防御力を持っている7枚の花弁が出現する。

どちらとも衝撃波を完全に防いでくれた。ユーノもアルフも防御魔法を咄嗟に展開したので無事だ。

だが、オレ自身の防御に回せる時間がなかった。オレは迫る衝撃波になす術も無く吹き飛ばされた。

衝撃による激痛が体に走るが、体の内部に大量の出血を感じた。アバラも感覚頼りだが3本折れた。

「がはっ!!」

慣れ親しんだ、しかし絶対好きになれない吐血により脱力感が体に襲いかかってきた。

「シノン君!!」

「マスター!!」

なのはとヴェルフグリントの悲痛な声が耳に届く、なのはは無事だ

ったか。そう思いながらジュエルシードを見ると再び輝きが強まっていた。

「くそっ！！」

口から血を流しながら毒づく。

飛行魔法では間に合わない。使うか、爺さんが魔術の他に教えてくれた技。

『マスター！！動いてはいけません！！』

ヴェルフグリントの声を無視してオレは両足に魔力をためる。そのままスタートダッシュのような構えを取り、走り出すと同時に足にためた魔力を爆発させる。すると、次の瞬間にはオレはジュエルシードの目の前にいた。

縮地法、八極拳の活歩などのように一步で数メートルを移動する技だ。今オレがやったのは魔力を加速エンジンとして使った縮地法だ。他には体の中の気と呼ばれる力を使うこともあるらしい。

爺さんが言うには瞬動とも呼ばれているらしい。瞬間的な速度なら魔導師の飛行魔法より遥かに上だ。教えてもらった当時はまったく出来なかったのだが、完成させてそのまま忘れていた。

だが体にちゃんと衝撃は走るので今のオレの体で使えば当然傷が刺激される。

全身に激痛が走り意識が飛びそうになる。だが奥歯を噛み締めて意識を繋ぐ。

「一閃必中……クリティカル……ブレード!!」

瞬間の加速を利用して左の拳を叩きつける。その拳から生まれた衝撃波はジュエルシールドが放とうとしていた衝撃波を完全に相殺した。右手を手刀の形にする。手刀を紫色の闘気が包み3メートル程の剣の形になった。

「碎けるおお!!」

その剣を叫びと共にジュエルシールドに振り下ろす。そしてジュエルシールドは真ん中から真っ二つに両断された……。はずだった。そして、その異変は突然起こった。

ジュエルシールドと右手の手刀がぶつかった瞬間、ジュエルシールドがオレの右手の中に食い込んで来たのだ。同時に感覚が無いはずの右手から内側から体を何かに喰われているような痛みが走る。続いて体中に燃えるような熱を感じる。

「な!?!な……んだよ……これ……」

右腕を左手で掴みながらその場に膝を着く。右腕に目を移すと、右腕が生き物の鼓動をしているように膨らみと縮みを繰り返している。わけがわからない。オレの頭の中は困惑で一杯だった。ジュエルシールドに触れた途端にいきなり右腕がこんな変化が起こった。

右腕からは痛みが、体には高熱が走っている。熱のせいで思考がぼやけているので治療術の発動も出来ない。だが右腕や体の怪我などから来る痛みで気絶することも出来ない。最悪だ。

『マスター!!マスター!!しっかりしてくださいマスター!!そんな・・・体内温度が40度以上。しかもこれは・・・右手がジュエルシードを・・・』

ヴェルフグリントがなにかを言っているがよく聞こえない。熱と痛みで意識がグチャグチャになっている。だが、突然右手に走っていた痛みが消え右手が金色に発光した。

(この光・・・なんだ?前にも見たことが・・・)

光の見覚えを辿ったが体はその場に倒れた。意識が急激に刈り取られていく。

薄れていくオレの視界に最後に映ったのは、涙を流しながらオレに走ってくるなのはと・・・右の手の平に食い込むように沈んでいくジュエルシードそっくりの真紅の宝石だった。

S i d e なのは

シノン君が倒れた途端に私は涙を流しながら走り出していた。目を閉じたシノン君の体を抱き上げる。

「シノン君!!シノン君!!」

必死に呼びかけてみるがまったく反応がない。頭の中に最悪のビジョンが浮かんでくる。

「・・・のは・・・なのは!!」

突然の声にハツとなる。声のする方向には私に叫んだユーノ君。

「大丈夫。これくらいなら僕の回復魔法で助けられる」

そう言うとシノン君を中心に緑色の魔方陣が現れる。魔方陣が輝きだすと、シノン君の顔色がだんだん良くなっていく。

「よかった・・・よかった・・・」

涙を流しながら安堵する。

だけど、前の方から足音が聞こえて顔を上げる。そこに立っていたのは、フェイトちゃんとアルフさん。二人ともシノン君を心配そうに見ている。

「あ・・・シノンは大丈夫？」

「傷の方はシノン自身の回復力が強いからたぶん大丈夫。でも血をかなり消費したから安静にしなくちゃいけないかな」

・
ユーノ君の返答でフェイトちゃん表情が一瞬明るくなる。でも・

「ごめんね・・・シノン・・・ごめんね・・・」

すすり泣くように涙を流した。

アルフさんはフェイトちゃんを抱きしめ、私とユーノ君に目を向ける。

「ジュエルシードはシノンが砕いたから、帰るよ。目が覚めたらシノンには礼を言っといとくれ」

そう言っつてフェイトちゃんとアルフさんは飛び去っていった。

「砕けた・・・本当に?・・・ならシノンがいきなり苦しんだのは?・・・まさか・・・」

ユ一ノ君がなにかを呟いていたけど私はずっとシノン君の頭を撫でてあげた。

そして眠っているシノン君の顔は、ずっと苦しそうな顔だった。

S i d e O u t

第18話 寝込み生活（前書き）

今回はあまりストーリーが進みません。

では、どうぞ。

あと、イメージが止まらなかったのでキーワードの技の部分を、技（色々）に変えました。

第18話 寝込み生活

Side シノン

周り一面真っ暗の場所にオレは居る。

うつすらと瞼を開けながら夢の中だと感覚的に理解する。

見たことが無い文字で書かれた単語が浮かんでくる。

だが続いて脳内にすぐに文字の読み方と単語の意味が浮かんきて脳が強制的に理解していく。

そしてその強制的な理解速度に着いていけず頭に割れるような痛みが走る。

ロストロギア、次元干渉、次元震、次元世界、アルハザード、古代ベルカ、ミッドチルダ、聖王と霸王、他にも数々の単語や知識が流れ込んでくる。

はっきり言って地獄だ。

意識はすでに無い状態なので気絶して逃れることもできない。

頭が割れる。呼吸が出来ない。

痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、
痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、

苦しい、苦しい、苦しい、苦しい、苦しい、苦しい、苦しい、苦しい、苦しい、苦しい、苦しい、苦しい。

今までなんども経験した痛みや苦しみ同時にやってくる。

この程度ではオレは死なない。

それはオレが一番よく知っている。

だがこの痛みや苦しみは時が来るまで消えない。

それだけが憎む苦痛だった。

（いつまで……オレは……この地獄にいななければならないだ……）

そう思いながら夢の中でオレは瞼を閉じようとした。

そして次の瞬間、温かいものに包まれたような感覚を感じ、オレの地獄は終わった。

瞼が開く。

映ったのは薄暗い部屋の中の数回しか見ていない天井。額の部分に冷たく心地よい感じがする。

「……………オレは……………」

『マスター？』

枕のすぐ横からヴェルフグリントの声が聞こえる。

だが意識が呆然としていてさらには体がうまく動かない。

「ヴェルフグリント……あれから、どうなった？……」

『よかった……今はお休みください。かなりの熱がありますし血も足りていません』

言われてみれば体がひどくだるい。どうやら今体を動かすのは無理らしい。

「ああ……すこし……眠るよ……」

『おやすみなさいませ、マスター』

ヴェルフグリントの慈愛が満ちた声を聞き、オレは意識を手放した。

S i d e なのは

私は今家までの道のりを走っている。

昨日、ジュエルシードの暴走が起こってシノン君は私とフェイトちゃんを助けて大怪我をした。

さらにレイジングハートもひどく壊れかけてしまいました。

シノン君が気絶した後、ユーノ君が使った転送魔法っていうのでシノン君を公園に運んで家に連絡をしてお兄ちゃんとお父さんに”シノン君が私を庇って怪我をした”と説明してシノン君を運んでもらった。

家に戻った後に事情を聞かれるかと思ったけど誰も触れないでくれました。

お姉ちゃんが言うには、シノン君の体の傷は問題ないレベルだけど高熱を出しているので熱が収まるまでは寝ていた方がいいらしい。

看病しようと思ったけど学校があるので放課後までお母さんとお姉ちゃんに看病をお願いした。

学校でもアリサちゃんとすずかちゃんに心配されて申し訳なかった。

そんな一日を過ごして帰宅中に突然念話が聞こえた。

『なのはさん、今よろしいですか？』

『あ、うん。どうしたの？』

『3時間ほど前にマスターが少しの間ですが目を覚ましました』

『え？本当！？』

『はい、一応伝えておいた方が良くないと思ひまして』

その言葉を聞いた瞬間、私はすでに走り出していた。そして、冒頭に戻る。

「た、ただいま！」

家に着き、急いでシノン君が眠ってる部屋に向かう。

ドアを開ける。

そこには初めより穏やかな表情で眠っているシノン君がいた。枕元には子を見守る母のようにヴェルフグリントがいた。

『お帰りなさいませ、なのはさん』

「う、うん。ただいま。シノン君の具合は？」

『運ばれたときより熱はかなり下がりました。明日には平熱に戻っていると思います。あとは消化の良い物を食べて血が戻ってくれば良いのですが・・・』

説明を聞きながら私はシノン君の額に乗っているタオルに新しく水をつけてシノン君の額に乗せる。

確かに運ばれてきたときより血色の良い顔になってきた。

私は心から安堵を感じた。シノン君が目覚めなかつたらと何度も頭

の中でそんなビジョンが浮かんだ。

なんとなくだけどシノン君の手を握る。

『そういえばなのはさん、ユーノさんはどうしたのですか？今日は一切見ていませんが』

「ええーと、確かジュエルシード探しに行くって……」

『マスターのおかげで無事に済んだというのに様子を見にも来ないのですか。いささか不快に感じますね……レイジングハートの修復具合はどうですか？』

「ユーノ君の話だと、自動修復で明日までには直るって」

『明日ですか……もしその間にジュエルシードが発動されると困りますね。なのはさん、レイジングハートを私の隣に置いてくれませんか？』

そう言われて私は首に下げていたレイジングハートをヴェルフグリントの隣に置く。

「えっと、どうするの？」

『いえ、せっかくだからこの子のAIを急成長させてみようかとそれからのヴェルフグリントの説明によると、レイジングハートのようなAIを持っているデバイスはインテリジェントデバイスと呼ばれていてマスターと一緒にAIも成長していくらしい。』

ヴェルフグリントが今やろうとしているのは、レイジングハートのAIを成長させて修復速度を速めるということ。

断る理由も無いので二つ返事で私はお願いした。

『わかりました。お任せください』

その時のヴェルフグリントの声はとても優しい感じがした。

その時、私が握っていたシノン君の手が、動いた。

見てみると、眠っていたシノン君がゆっくりと目を開けた。

S i d e シノン

意識がゆっくりと覚醒し瞼が持ち上がる。

一番に目に移したのはオレの左手を握っているなのは。

部屋の明るさを見るにどうやら眠っていたのは数時間ほどらしい。前回起きたときより意識がはっきりするので熱は下がったようだ。頭痛や流れ込んでくる知識も無い。

「シノン君、大丈夫？」

目を覚まして何も言わないことを心配したのか、なのはが不安げに

訊ねてくる。

「ん？ああ、大丈夫だ。心配かけたな・・・なのはは大丈夫だったか？」

なのははオレの質問に頷いて答える。

「ん？ユーノはどうした？」

『ユーノさんは一人でジュエルシードの散策に出ています。マスタ
ー、右腕はどうですか？』

ヴェルフグリントの質問に一瞬オレは目を細めた。

(こいつには話したほうが良さそうだな・・・)

「なのは、すまんが桃子さんにオレが起きたと伝えてくれるか？い
つまでも心配させるわけにもいかないし」

「え？うん、わかった」

なのはは立ち上がって部屋を出て行った。しばらく部屋に沈黙が落
ちるがオレが念話を開始する。

『まず確認したいんだが・・・あの時、ジュエルシードは確かにオ
レの右手に・・・』

『はい、確かにマスターの右手に侵食・・・いえ、融合と言うべき
でしょうか。とにかく、今確かにジュエルシードはマスターの体内
にあります』

『そうか……腕の調子だったな？話していなかったが、この右腕は確かにオレと繋がっているが何故か痛覚や感触などは伝わってこないんだ。でも今の所右腕は問題なく動いてくれてるぞ？』

『そうですか、なら私からは他に何もありません。ですがロストロギアを体内に取り込むとは、驚きました』

『そのせいか色んな知識が頭に流れ込んできたがな。死ぬかと思っただぞ……』

『ジュエルシードを取り込んで中の情報が全て流れ込んできたのでしよう……発していた高熱は恐らくその知識の濁流のせいで起こったものかと……』

知識の濁流、確かにその通りだ。頭がパンクしそうだったのだ。

知識に殺されそうになったと言っても過言ではない。

「シノン君、具合はどう？」

扉が開くと桃子さんと容器を載せたお盆を持ったなのはが入ってきた。

「はい、かなり楽になりました。ご心配をおかけしてすみませんでした」

「その話のだけど……なのはを庇うために自分を犠牲にしたんですってね？」

ん？なんだ？熱は下がったのに体から汗が止まらないぞ。それにこの汗、どっちかと言うと冷や汗に近いような……。

おかしいな、目の前の桃子さんの笑顔は見惚れるほどに綺麗なのに背後に見える阿修羅は何だろう？

「シノン君がしたことは決して間違ったことではないけど、正しいとも言えないのよ？」

すみません。その点はアドリビトムの連中（特にカノンノ、ノア、パニール）に口が酸っぱくなるほどに指摘されてきました。

一応改善しようと努力しているのですが……。

「聞いてるの？シノン君？」

「は、はい！聞いています！」

あ、ありえん。オ、オレが気圧されるとは……。

これがパニールも持っていた母性の力なのか？

よし、決めた。

脳と心に深く刻んでおこう。高町家の真の最強は桃子さんであると。

二十分間……現在お説教中です。

で少し怒りが冷めたようなので今は作ってくれたお粥を食べている。

正直とてもおいしい。絶品だ。

あと、なのははもう遅いので部屋で寝ている。

黙々と食べていたのだが、突然部屋の中に士郎さんが入ってきた。

士郎さんは桃子さんの隣に座ってオレと目を合わせる。

「さて、シノン君。まずは娘を守ってくれてありがとう」

言葉の割には感謝の念があまり感じられない。

感謝はしているがそれ以上に怒りの感情が多いといった所だろう。

「だが、キミは自分が思っている以上にキミは色んな人から想われている。それを忘れないでくれ。キミはまだ子供だ、自分を進んで犠牲にする必要なんて無い。キミだけが傷つく必要なんて・・・」

この人、いや・・・高町家の人たちは本当にいい人たちだ。曇りが無いほど。

だが、1つだけ、認められないことがある。

「士郎さん、あなたの言ってることはわかります。でも、オレは誰

かが傷つくのを無視するのは絶対にしません。例えオレが傷つく結果になっても」

これだけは絶対に揺らがない。

オレは傷つくということの意味を身体的にも心情的にもよく知っている。そう、恐らく誰よりも。

だからと言ってオレは今までの生きてきた自分を否定するつもりは無い。

他でもない、それはオレ自身なのだから。

そして傷つく意味を知っているからこそもうオレのように誰も傷つけて欲しくない。

「……………わかった。だが約束してくれ、ここからいなくならないと」

「……………はい、必ず」

そこで会話は終わり、桃子さんと土郎さんは部屋を出て行った。

オレは布団を体に被せ、窓から夜空を見る。

『マスター、私からもお願いします。死なないと……………』

「ああ、大丈夫さ。オレは死なないよ、約束だ」

そう言ってオレは瞼を閉じて、意識を沈めた。

第18話 寝込み生活（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

今回ユーノの出番ありません。さらにアリスとの喧嘩も無しにしました。

次回は出来ればKYの登場まで持っていきたいと思えます。欲を言えばフルボッコもしたいです。

では、また次回。

第19話 時空管理局（前書き）

更新が遅れて申し訳ありません。

KY登場とフルボッコです。

では、どうぞ。

『はい、マスター』

なのはの声に反応してレイジングハートが以前までとは違い一瞬でセットアップを終える。そのままなのはは足にフライヤーフィンを展開して空を飛んでいった。

ヴェルフグリントの話だとAIを急成長させたことでデバイス自体の処理速度も上がったらしい。そのおかげで今ではセットアップを一瞬で出来るようになったし口数も増えてきた。

「ヴェルフグリント、頼む」

『了解しました、マスター』

オレもセットアップを終えて足にアクセルフィンを展開して飛び立つ。いやあーやっぱり飛んでるのは良いな。普段じゃ絶対に味わえないし。

気配がする場所に言ってみるとそこではもう戦闘が開始されていた。

フェイトと人間形態のアルフがジュエルシードで変貌した巨大な木の化け物と戦っている。見た感じ、木の化け物がバリアを張っていてそのせいで少し苦戦しているようだ。

なのはは状況を見てすぐに飛んでいこうとしている。あの程度ならなのは達だけで勝てるだろう。

(今回も見学か、暇なもんだ何か暇を潰すものは……ん？あ、
そうだ……)

『フェイト、なのは、ちょっといいか？』

『『シノン(君)？』』

『少し下がってくれ、あとのジュエルシードはお前らが好きにして
いいからその木の化け物はオレに相手をさせてくれ』

『はっ？』

その場の全員の念話がかぶった。だがオレは構わずに念話を続ける。

『どっちも体力を温存できるから悪い話じゃないだろ？』

『……わかった』

『うん、私も別に良いよ』

なのはとフェイトはそう答えて下がってくれる。ユーノとアルフも
それに連れて下がる。

オレはそれを確認して木の化け物の正面に着地。

着地して腰に差した鞘からゆっくり刀を抜刀する。

近づいてくるオレに気付いたのか木の化け物は長い木の枝を3本鞭
のように振るってきた。

オレは振るわれた木の枝をその場から高く飛んで避ける。しかし続いて2本の木の枝が振るわれ追いかけてくる。

顔面に向かって振るわれた一本の枝をカウンターのように引き付け、タイミングを計って斬り上げで両断する。

そのまま刃を返して振り下ろし、胴体に向かってきたもう一本の枝を斬る。

オレは先端を斬られて空中をくねくねと彷徨っている枝に足を乗せる。

オレを振り払おうと枝が暴れるがオレが枝に乗ったのは枝を渡るためじゃない。

足に魔力を溜めて枝を蹴ると同時に爆発させる。というか瞬動だ。体が急加速し空中から木の化け物の間近な所まで一瞬でたどり着く。

木の化け物は枝を振るってくるがオレはすでに間合いの内側にいるので間に合わない。

空気の感じからバリアが張られている場所を確認し、加速を殺さずにその場に走って近づき刀を左手に持ち替えて振り下ろす。

「瞬連刃!!!」

刀はバリアに阻まれるがオレは続いて刀を連続で振るう。4撃目で小さい罅が入り、5撃目で罅が大きく広がる。

オレは空いている右手に闘気を込めて拳を作る。

「剛昇弾!!」

右の拳を罫の真ん中に叩きつける。すると拳から闘気が透明な色で物体を破壊する圧倒的な物理エネルギーとなつて発射された。

罫が入ったバリアで防げるはずも無く（まあ、万全でも恐らく防ぎ切れなかつたろうが）バリアは完全に砕け、地面に体を固定していた木の化け物の体までも吹き飛ばした。

5メートルほど吹っ飛んだところで勢いが死に、周辺に膨大な土煙が巻き起こる。

オレは土煙の中に入って周りを見渡す。土煙のせいで視界は最悪だが木の化け物の気配を感じるのでまだあれが生きていることはわかる。

そして……オレの背後に土煙越しに大きな影が立った。

「シノン（君）!!」

なのはとフェイトが叫んだ瞬間、オレは左手で指を鳴らした。すると……。

ポオオン!!

地面から岩で出来た巨大な三本の棘、ロックブレイクが飛び出し、オレの背後に居た木の化け物の体を串刺しにした。

オレは背後に目を向けず、刀を一回振るって鞘に戻す。

『ほら、終わったぞ。封印しろ。』

オレの念話を聞いてなのはとフェイトが慌ててジュエルシードを封印する。封印すると木の化け物の体が崩れ落ち、ジュエルシードが空中に浮きだした。

なんの嫌がらせかなのはとフェイトのちょうど中間に、だ。なのはとフェイトは互いにデバイスを構えながら向き合っている。

唇が動いていたので会話があったようだが聞き取れない。

二人が同時に動き出し互いのデバイスが激突するかと思われた瞬間、二人の間に光が走り、魔方陣が展開される。

そして、魔方陣から出てきた一人の影がレイジングハートを素手で掴み、バルディッシュを手に持っている杖のデバイスで受け止めた。

「ストップだ！！ここでの戦闘は危険すぎる！！」

割って入った人物はその場で叫んだ。なのはとフェイトはいきなりの乱入者に呆然としている。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ！！詳しい事情を聞かせてもらおうか・・・」

叫んだのは黒髪の少年だった。服装は肩に角のような突起が付いた黒いロングコート。恐らくバリアジャケットだろう、あれが普段着とはとても思えない。

背丈は見た感じなのはより少し高い程度だ。

『ユーノ、あのKYが言った時空管理局ってなんだ？』

『け、KYって……。時空管理局って言うのはたくさん存在する次元世界の安全を管理する組織だよ。この世界で言う警察と裁判所が融合した司法組織みたいな感じかな』

『は？それってまともな司法組織って言えるのか？独裁組織の間違いだらう』

「まずは2人とも武器を引くんだ」

クロノと名乗る少年の命令に二人は従いそのまま地面に降りていく。

「このまま戦闘行為を続けるなら……」

そう言いかけたところで、急に空から数発の魔力弾が迫ってきた。

クロノは右手で障壁を張って攻撃を防いだ。

発射された方向を見ると、必死な顔をしたアルフがいた。

「フェイト！撤退するよ！離れて！」

そう言ってアルフはさらに魔力弾を生み出す。

フェイトは一瞬戸惑ったが、アルフの魔力弾発射と共にジュエルシールドに目掛けて飛んだ。

フェイトが飛び立った瞬間、魔力弾が地面に着弾し爆煙が巻き上がる。

オレは離れていたので爆煙の被害は無いが、クロノのデバイスからフェイトに目掛けて魔力弾が数発放たれたのが見えた。しかも後頭部を狙ったコースだ……。って、おい！！あの高さからもし地面に落ちたら……。

「くそ！……ふっ！！」

両手の指の間に3本ずつ黒鍵を投影、鉄甲作用という投擲方を加えて投擲する。

黒鍵はしっかりと全ての魔力弾を撃ち抜く。フェイトはジュエルシードを掴んでこちらを見た。

「早く逃げる」

「え？……」

「時間は稼いでやる、急げ」

そう聞いてフェイトはアルフと一緒にその場を離れていく。

クロノはフェイトたちに再びデバイスを向ける。足元に展開された魔方陣の構成からして拘束魔法だ。（ちなみに魔法の構成の読み方はヴェルフグリントから教わった）

しかしなのはが間に入り、魔方陣は消滅した。

「ダメ！フェイトちゃんに攻撃しないで！」

「いや、今のは拘束魔法だ。構成を読み取る力に弱みがあるな。訓練メニューの強化を決定する」

オレの言葉になのはが「にゃー!?」と悲鳴を上げたが視界から外す。

どうやらKY君がオレに用があるらしい、先程からこちらを睨んでいる。

「なぜ邪魔をした!？」

「いきなり現れた不審者が知り合いに暴行を働いたから助けたただだ」

「誰が不審者だ!さつき名乗っただろう!僕は時空管理局の執務官、クロノ・ハラオウンだ。先程のキミの行動は公務執行妨害に当たるぞ!」

「悪いがオレは時空管理局なんて名前は聞いたこと無いし、そんな組織は地球上のどこにも存在してないんだが？」

「デバイスを所持しているのに時空管理局を知らないはずが無いだろう!」

オレの返答にいちいち怒鳴りながら返答してくるクロノ。はつきり言っただけ耳&目障りだ。オレは左手を腰に当てながら溜め息を吐いて再びクロノの方を向く。

「お前の常識をオレに押し付けるな。そもそもなんでこんな所でお前が職権を使えるんだ？」

「時空管理局は次元世界の平和を守る組織だ。管轄下なら何処でもその権力が使える」

「管轄下なら、だろう？ここは97管理外世界だぞ？つまりここじゃお前はただの不法入国者ってことだ、くそガキ」

「く、くそガキ……僕は14歳だ！」

「は？14？10歳か9歳の間違いだろ？もし本当だとしても相当のチビだな」

「……これ以上は時間の無駄だな、組織への侮辱と公務執行妨害でキミを拘束する」

おいおい、さつきお前らの権力はここじゃ使えないと言ったばっかりなのにこれか？それにコンプレックスを点かれてすぐにきれるって、こいつ本当に組織の人間かよ。

というかなんでやましいことは何もしてないの拘束されなきゃならんのだ。ああーさすがに少し頭にきた。

クロノのデバイスからオレを気絶させようと後頭部に魔力弾が一発放たれるがオレは一瞬で刀を抜いて切り上げの斬撃で魔力弾を切り裂いた。クロノは驚いているが知らん、先に手を出したのは向こうだ。

切り上げの状態から刀を峰に変えて真下に振り下ろす。刀身はクロノの肩を叩き体を地面に叩き付けた。

「くっ！ステインガースナイプ！」

クロノの声に反応してデバイスから青い魔力弾が発射された。変則的な動きからして誘導弾だろう。

誘導弾が頭上から接近するがオレはバックステップで回避する。

一端距離を離すとクロノはすぐに立ち上がって空に飛んだ。続いて一定の高度に上がって先程と同じ誘導弾を4発撃ってくる。

オレは走り出し、クロノに近づいていく。だがそれを阻止しようと誘導弾が正面から2発同時に襲い掛かってくる。よく見ると時間差で側面からも残りの誘導弾が来るようにしている。

オレは走りを止めずに刀を右薙ぎに一閃、魔力弾二発を切り裂く。そしてそのまま右腕を振り抜き体を一回転させながら跳躍。頭を地面に向けた体勢で回転斬りを放つ。それによって側面から来た残りの誘導弾を切り裂く。

空中で体を捻り地面に着地。そして再び走り出す。だが、クロノがデバイスをこちらに向けているのが見えた。それと同時に強烈な悪寒を感じた。次の瞬間……。

「ブレイズカノン！！」

青い砲撃が撃たれた。オレは瞬時に投影を開始、左手を突き出す。

「ロー・アイアス!!」

オレの目の前に七枚の花弁が出現し爆煙を散らせ砲撃を完全に防ぐ。空中のクロノの顔を見ると信じられないという顔をしている。まあ無理も無い。あつちから見たらオレがいきなりサーカスの劇団員のような動きをして、さらに見たことも無い道具で砲撃を防いだのだから。

しかし驚いても自分が空中に居るから油断があるのか、急いで対処を取ろうとしない。

「……罪状を1つ追加だな。ロストロギアの無断使用だ」

……なんだろう。頭の中に激しい怒りを感じるぞ？権利が無いと言ったのに拘束するなんてぬかして、拳句の果てには人の所有物の使用にまでけちつけてくるだど？

「はっ、罪状を言う前に体動かせ。未だに一般人すら拘束できてない時空管理局の執務官殿」

「貴様っ!!……」

オレの言葉にクロノは怒りを浮かべるがオレは無視してクロノの真下に移動する。

そしてその場で刀を腰溜めに構えて地面を真上に強く蹴る。

「断空牙!!」

一瞬で数メートル上に居たクロノの正面に移動し峰でクロノの首筋の後ろを叩く。

「がつ！・・・」

クロノは気絶しそうになってもなんとか踏みとどまっているが（気絶しないようにしたから当たり前だが）オレはさらに畳み掛ける。コートの襟元を左手で掴みクロノを引き寄せて腹に右足を当てる。

「風烈剄！！崩襲脚・紅牙（じゅうが）！！」

左手も離し風を纏った左足で顎を蹴り上げ、続いて炎を纏った右足でクロノの腹に蹴りを突き刺す。蹴り二撃の衝撃でクロノは弾丸のような速さで地面に激突した。

「おまけだ、ストーンザッパー！！バーストライク！！クリムゾンフレア！！」

追撃として炎の炎弾3発と土煙を出しての粉塵爆発、さらに炎のシヤワーをくれてやる。そこそこの威力なのでなぶり殺しにはちょうどいい。

オレは地面に着地してクロノが落ちた場所に歩いていく。全て手加減はしたから重傷ではないはずだ。

周辺に巻き起こっていた爆煙が晴れるとクロノは肩で息をしながら杖を支えに立っていた。今自分が立っているのがバリアジャケットのおかげと気付いているかどうかは微妙だが。でも髪の毛がアフロヘアーに成りかけていて笑える頭になっているのには確実に気付いていないようだ。

「どうした？ずいぶん一般人にてこずっているな」

オレの言葉にクロノは言葉を出さずに睨むだけだった。しかしアフロヘアアのせいで全然威圧感が無い。むしろ笑いそうになる。オレはなんとか笑いを堪えて刀を鞘に戻す。

「しかしこいつはどうしたものかな。不法入国で警察に突き出すか？」

首の部分を掴んでクロノの体を持ち上げる。

すると、突然オレの体を緑色の鎖が拘束した。

「ん？これは……」

『マスター、バインドです。術者は……ちようど後方』

バインド、確か魔導師が使う拘束魔法だったな。

後ろに目を向けるとそこには足元に緑色の魔方陣を展開したユーノがいた。

(ユーノ？なんで……)

「い、今です！プツ……し、執務官！」

笑いを堪えたユーノの声の後に腹部の辺りに金属の感触が伝わり……。

「ブレイクインパルス!!」

ハンマーで殴られたような衝撃が体を襲った。最悪なことにその衝撃は治りかけだったオレのアバラを再びへし折ってくれた。しかも今度は内側のどこかを傷つけたらしく、口から血が吐き出された。

「ぐふっ!!……ごほっ!!」

咳き込みながら膝を付くと、ユーノのバインドの上からさらに青色のバインドが重ねられた。

体に踏ん張りが利かず、地面に倒れる。

(なんだか最近、気絶するのが多いな……)

そんなことを考えながらオレは意識を失った。

第19話 時空管理局（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

次回はアースラでのお話です。

では、また次回。

第20話 戦艦アースラ（前書き）

今回は短いです。

しかもシノンの出番がほとんど無いです。

では、ごうげ。

第20話 戦艦アースラ

S i d e なのは

私は今の状況がまったくわからなかった。

突然現れてシノン君を攻撃したクロノという男の子、そしてその手伝いをしたユーノ君。血を吐いて倒れたシノン君。

『マスター！！マスター！！しっかりしてくださいマスター！！』

ヴェルフグリントも必死にシノン君に呼びかけている。私は足元のユーノ君に目を向ける。

「ユーノ君……なんで……?」

「こうしなきゃ……いけないんだ。シノンは、僕が止めなきゃ……」

ユーノ君は顔を俯かせながら呟いている。

私はユーノ君が言ったことがまったく理解できなかった。シノン君はフェイトちゃんを逃がしたただけでその後はただ自分の身を守っただけなのに、なぜこんな風に傷付けられるんだろう?

すると、シノン君を攻撃したクロノ君がこちらにやってきた。シノン君の攻撃で髪がぼさぼさのアフロみたいになってるけど、気付いてないのかな?

シノン君を攻撃したという事実から私は警戒しながらレイジングハートを構える。友達を攻撃した人をすぐに信用することなんて出来るわけが無い。

（なのは、大丈夫だよ。この人は僕達を攻撃したりしないから）

（なにが大丈夫ですか・・・マスターの拘束を手伝った癖によくそんなことがほざけますね、ユーノ・スクライア。貴様はマスターを裏切った。報いが来ることを覚悟しておけ・・・）

ユーノ君からの念話が聞こえてすぐにヴェルフグリントの念話が聞こえてきた。口調が変わったことことから念話越しからでもヴェルフグリントの怒りが伝わってくる。足元のユーノ君も体を震わせた。

（なのはさん、納得出来ないでしょうがこの場はおとなしくしていただきます。少なくとも無傷で帰ることは保障されます。それと、私の回収をお願いします）

ヴェルフグリントが私だけに念話を送ってきた後にシノン君の格好がバリアジャケットから普段着に戻った。私は近づいてシノン君の側に落ちていたヴェルフグリントを拾う。

「さつきは助かった。おかげで彼を拘束することができた。ところでキミ達に話を聞きたいから付いて来てもらえるか？」

「は、はい、構いません。」

クロノ君の質問にユーノ君は気まずそうに答える。髪の毛のことが言い辛いんだと思う。私はクロノ君の質問に頷くだけで答える。

「わかった。じゃーそのままにしていってくれ」

クロノ君がそう言うのと私たちとシノン君の足元に魔方陣が現れ、私たちは光に包まれた。

そして光が晴れると、私たちは機械仕掛けの通路に立っていた。いきなり知らない場所に移動したから慌ててしまう。

(ええーと、ここは?)

(ここは時空管理局の・・・)

(時空管理局の次元潜航艦の中ですよ。簡単に言えば時空管理局が移動に使っている船のようなものです)

ユーノ君の念話にヴェルフルグリンが割り入って説明をしてくれた。視線を動かしてみると倒れているシノン君が白衣を着た数人の人に連れて行かれていた。

「あの・・・シノン君はどこに?・・・」

「あー、彼は身体検査と医療処置をした後に牢屋に移されるよ。あと、彼のデバイスもこちらに渡してくれ」

クロノ君の返答に私は驚いた。なんで?シノン君は何も悪いことしてないのに・・・。

（大丈夫ですよなのはさん。マスターが本気になれば私が無くとも簡単に脱出できますし、治療がしてもらえるならむしろそれを利用しましょう。私のほうも平気です、ご安心ください）

ヴェルフグリントの言い聞かせるような言葉を聞いて、私はクロノ君に待機状態のヴェルフグリントを渡す。受け取ったクロノ君はそれを白衣を着た人の一人に預けた。ちなみに受け取った人が必死に笑いを堪えてたのは気のせいではないと思う。

「いつまでもその格好は窮屈だろう？バリアジャケットは解除して構わないよ」

「あ、はい・・・」

そういえばデバイスをセットアップしたままなのを忘れていた。クロノ君に言われて私はセットアップを解除して普段着に戻る。

「キミも元の姿に戻っていいんじゃないか？」

「あ、そうですね・・・」

クロノ君の言葉にユーノ君が頷くと、ユーノ君の体が光に包まれた。光が消えると、そこにはフェレットではなく私と同じ年くらいの金髪の男の子が立っていた。

「ふうー、なのはにこの格好を見せるのはずいぶん久しぶりだね」

ユーノ君が私に問いかけてくるが私は呆然としていて答えられない。

「ゆ、ユーノ君？そ、その姿は？・・・」

「え？これが僕の本来の姿だけど？・・・」

「え、えええええー！！！」

結構な声で叫んだと思うけどそれどころじゃない。そんなこと一度も聞いたこともなかった。

「キミ達には見解の相違でも有るのか？悪いが艦長を待たせてるんで急ぎたいんだが・・・」

クロノ君の言葉で私たちは落ち着いて進みだした。ただなんだろう？この時だけレイジングハートがまったく無言だったのにすごく嫌な予感がした。それも私じゃなくてユーノ君に不幸が来るような予感だった。

Side out

クロノに連れられてなのはとユーノが付いたのは戦艦という搭乗物にまったく馴染まない和風の部屋だった。

この部屋のデザインが個人的な趣味によるものなら職権乱用以外の何者でもない。

そしてその部屋の中には二人の女性がいた。一人は腰に届きそうな

長い緑髪の女性、もう一人は短い茶色の髪をした女性。どちらとも美人に入るほどの女性だ。

「ようこそ、アースラへ。艦長のリンディ・ハラオウンです」

「あ、高町なのはです。なのはでいいですよ」

「ユーノ・スクライアです。僕もユーノでいいですよ」

緑髪の女性の自己紹介になのはたちも返す。次は茶色の髪の女性が自己紹介をするのかと思ったが、茶色の髪的女性を見ると、必死に笑いを堪えて目に涙を溜めている。緑髪の女性はクロノに哀れむような視線を向けている。

「クロノ、命令です。今すぐシャワールームに行ってください。理由は行けば分かります」

「は？・・・はい、わかりました・・・」

緑髪の女性の命令にクロノは疑問を抱いたが、部屋を出ていった。数分後、部屋の外から盛大な絶叫が聞こえたのは言うまでも無い。

その後、まだ焦げ目が残っているぼさぼさの髪になったクロノが戻り、話し合いが再開した。

「あ、私はエイミー・リミエツタ。エイミーでいいよ」

落ち込んでいるクロノを無視して茶色の髪の女性が自己紹介を始め

た。

「あの、リンディさんってクロノ君のお姉さんですか？顔も似てる気がするし……」

なのはの質問を聞いてリンディは嬉しそうに微笑み、エイミィは微笑を浮かべながら答えた。

「ふふふ……艦長はクロノ君の母親だよ」

「えええー！？お母さんですか!？」

「ふふ……さて、本題に入りましょうか。今回なのはさんとユーノ君に来てもらったのは状況の確認と……あの男の子のことで」

微笑んですぐにリンディは話を本題に移した。あの男の子、なのはたちは一瞬でシノンのことだと理解した。

「あの……シノン君は今どうしてるんですか？」

「そうね、あなた達も気になるでしょう。この部屋と通信を繋げましょう」

そう言うとリンディが空中の端末を操作してなのはたちの隣にスクリーンを表示した。映像はすぐに表示された。そして表示された映像には、牢屋の中のベットにバインドを掛けられたまま寝かされているシノンが映っていた。

「怪我の方は医療班が処置を施したから大丈夫よ。すぐに目覚める

そうよ」

リンディの言葉を聞いてなのはは安堵の息を吐き、ユーノは複雑そうな顔をした。

「さて、ではまずあなたたちの今までのことを聞かせてくれる？」

リンディの質問を承諾し、なのはとユーノはまず自分達がジュエルシードに関わることになった経緯を話した。

「そう、ジュエルシードはあなたが発掘したの……」

「はい、だから僕がちゃんと回収しなくちゃと思って……」

「その心意気はとても立派だわ……」

「だが同時に無謀でもある。一人だけで向かうなんてあまりにも無計画だ」

クロノの言葉にユーノは反論できずに顔を俯かせる。すると……。

『よく言うよ、こんだけ遅くに到着しといて。ユーノが来なかったら海鳴か、最悪地球は消滅してたぞ。むしろ今まで来れなかったお前らより良い仕事してるんじゃないのか？』

なのはの隣に表示されているスクリーンから声が聞こえた。全員がそちらに目を向けると、ベットの所に胡坐を掻いて座っているシンが居た。

第20話 戦艦アースラ（後書き）

お久しぶりです。

更新が少し遅くなりました。しかも短い・・・orz

今回は管理局側の人間とのお話（肉体言語じゃないよ？）になります。

では、また次回。

第21話 管理局とのお話 ん？なんだ？今一瞬、言葉に違和感が……（前

管理局との話し合いです。

では、さようなら。

第21話 管理局とのお話、ん？なんだ？今一瞬、言葉に違和感が……

Side シノン

身を包んでいたまどろみが薄れ、目を覚ます。

最初に視界に映ったのは薄暗い部屋の天井。視線を動かすと体はバインドを掛けられベッドに寝かされていた。次にはレーザーのような光で作られた檻の鉄柱が見えた。

「……捕まったか……」

部屋と自分の状況を見て直感的に理解する。上半身だけでも起こそうとしたが、起き上がろうとした途端に折れたアバラが悲鳴を上げて起き上がれない。耐えられないほどではないが、それほどまでして起き上がる時でもない。

242

再びベッドに体を預けるが、視界の端に1つのスクリーンが見えた。よく見てみると緑髪と茶色髪の二人の女性、それとあのクロノ（KY）がなのはとユーノの二人と話し合いをしている。

（たぶんここは、あのクロノとかいうKYが言っていた時空管理局の施設だな……薬も打たれてないし殺されてもないってことは、どうやら極悪非道のテロ集団というわけじゃなさそうだ。一応司法組織って言う肩書きも嘘じゃないらしい）

頭の中で状況を整理し周辺の気配を探ってみた。

……どうやら監視はいないようだ。カメラや盗聴器の気配もな

い。・・・これで拘束してるつもりか？

だが、さすがに武器を持たせておくほどぬるくはないようだ・・・
手元にヴェルフグリントが無いのがその証拠だ。

（しかし、アバラを直したくてもこれ（バインド）が邪魔だな。なんとか解除は・・・あ、そうだ）

「解析 開始（アクセス、スタート）」

時空管理局の奴らに魔術の存在を知られたくないので出来るだけ小声で呟く。そして解析の魔術でなにをするのかと言うと・・・バインドの解除だ。

ヴェルフグリントに聞いたが、魔導師の魔法というのは全てプログラムを組んで作られたものらしい。つまりバインドという魔法もプログラムで作られているということだ。プログラムで作られているのなら恐らく発動に干渉するコードが存在するはず。拘束という役割の魔法なら尚更だ。

それを今、解析の魔術をバインドに使って探しているのだ。そして解析した結果・・・ほんの5秒でバインドのプロテクトを全て解除できた。なんだか途中から自分が演算機になったようにスムーズに解除のスピードが上がった。

なんだか解析というよりもハッキングに近かったがこちらら神秘を味方にした魔術師だ。そう簡単に科学に屈したりしない。

・・・だがこの時、オレは気付くべきだった。バインドのプロテクトを解除している中、右手が僅かに蒼い光を放っていたことに。

バインドを解除してすぐにオレは右手を腹の上に当てて治療術を発動する。

「・・・キュア」

小さい声で呟き、アバラを全て完全に修復する。完治を確認して上半身を起こす。

そんな時・・・。

『そう、ジュエルシードはあなたが発掘したの・・・』

『はい、だから僕がちゃんと回収しなくちゃと思って・・・』

『その心意気はとても立派だわ・・・』

『だが同時に無謀でもある。一人だけで向かうなんてあまりにも無計画だ』

・・・スクリーンからそんなやり取りが聞こえた。もう少し様子を見るつもりだったがオレは我慢できずに口を開いた。

「よく言うよ、こんだけ遅くに到着しといて。ユーノが来なかったら海鳴、最悪地球は消滅してたぞ。今まで来れなかったお前らよりいい仕事してるじゃないのか？」

オレの声は向こうにすっかり届いたようで、スクリーンの向こう側の全員がオレの方を見た。

Side Out

シノンの姿を見てなのは安堵の、ユーノは怖がるような、クロノは不機嫌な、リンディは驚いた目を向けた。

「……貴様、どうやってバインドを解いた！？しかもさっきの言葉、管理局に不手際があると言いたいのか！！」

『別に不手際があるとは言っていないだろう？今頃到着したお前らよりはいい仕事をしたと言ってるだけだよ。お分かりですか？執務官殿』

クロノの問いかけをシノンは大して興味を示さず、めんどくさそうに答えた。

「貴様つ……！！」

「クロノ執務官、少し黙りなさい。彼とは私が話をします」

クロノの怒りが爆発しそうになった時、リンディがクロノを黙らせる。命令に従い、クロノは不満そうな顔で口を閉じた。

「初めましてシノン君。私は時空管理局次元潜航艦アースラの艦長、リンディ・ハラオウンです。今あなたが話していたクロノは私の息子です」

『息子?・・・あぁーなるほど』

「あら?意外と反応が薄いよね、なのはさんは驚いていたけど」

『同じような人を三人ほど知ってますから。それで?』

リンディの質問を適当に流すように答える。本題の話以外はするつもりはないと言った態度だ。

「用件はあなた達にジュエルシードに関わった事情とこれまでの経緯を聞くことです」

『その用件は見た限りなのは達が答えたようですが?』

「・・・では、あなた個人に関する話をします。まず一番重要な事から話します。シノン君、あなたの体内からロストロギアの反応が検出されました」

「ロスト・・・ロギア?」

ロストロギア。リンディが口にした聞き覚えのない単語なのはが首を傾げる。

『ロストロギアって言うのはすでに滅んだ文明や国などが残したロストテクノロジー。現在の文明では実現できないようなことを可能にする物のことだ。そのリンディさんが言ってるのはそのロストロギアがオレの体の中にあるって言ってるのさ。本人の許可を取らずに勝手に調べてな』

なのはの疑問にシノンは自分の状況を混ぜて説明する。さりげなく

リンディに皮肉をぶつけるのも忘れない。

「ごめんなさい。でもロストロギアの中には世界を消滅させるような力を持ったものもあるの。前にもロストロギアによって引き起こされた次元震という事象で幾つもの次元世界が消滅した災害があったから・・・でもその冷静さからして、気付いてはいたということかしら？というか、何故知ってるの？」

『その反応の元に教えられました。反応はどの辺りから出ましたか？』

「え？右手の甲部分、だけど・・・どうして？」

『いえ、少し実験してみようかと・・・』

そう言っただけでシノンは右手を握り、左手で右手の手首を掴む。そして目を閉じ、精神を集中する。リンディ達も無言で見つめている。

数秒後、シノンの右腕が蒼い光を放ち始めた。リンディ達が見ていたスクリーンは光で一杯になり、一瞬何も映らなくなった。

そして光が収束し、スクリーンに再び映像が映る。

スクリーンに映っていたシノンの右手、その甲の部分にはシリアルナンバーが刻まれていない”真紅”のジュエルシードが埋め込まれていた。

「これって・・・」

「ジュエルシードが・・・」

「シノンの体内に……」

「融合してる……？」

上から、エイミィ、クロノ、ユーノ、リンディ、の順で言葉が放たれる。なのはは口元に両手を当てて驚きに目を見開いている。

『マジで出来た。……これが反応の正体でしょう。安心してください、暴走する様子はありませんから』

しかしシノン本人は大して驚きもせず冷静に言葉を放った。シノン自身、もともとヴェルフグリントから体内にジュエルシードがあることは教えられていたので驚きがあまり出てこない。

『……それで、ロストロギアの正体がわかりましたが。どうするんですか？この右手ごと斬り落とすとか？さっさと話を進めてほしいんですが』

いつまでも話が進まないのでもシノンが質問を口にする。

「そ、そんなことしないわ……確認するけど、暴走する気配はないのね？」

『ええ、それは保証します。意識しないと手の甲に出してられるのもどつやらそんな長くないようですし』

シノンの言葉の後に真紅のジュエルシードは小さく発光しながら右手の中に沈んでいく。

「では、とりあえずこの話は保留にして先になのはさんたちとの話を終わらせましょうか。なのはさん、ユーノさん、シノン君。これより、ロストログア、ジュエルシードの回収は時空管理局が全権を持ちます」

リンデイの言葉になのはは驚く。フェイトとコンタクトを取る手段が封じられたのだ、当然と言えば当然だ。

「事は重大なことだ。民間人が関与するレベルの話じゃない」

「でも……でも、私……」

「と言っても、いきなりじゃあなた達も混乱するでしょうし……少しの間よく考えて……」

『いえ、結構です。ジュエルシードの回収はそちらにお任せします』

リンデイの言葉を突然シノンが遮る。なのはは驚きの目をシノンに向けた。

『なのは、ジュエルシードの回収は時空管理局がやってくれるらしいぞ。よかったなー』

「でもシノン君、私……私フェイトちゃんとお話したいよ……」

『なら会って話せばいいわ』

「えっどつじつじつとっ？」

なのははシノンの一見矛盾している言葉に首を傾げる。

『別にジュエルシード探しをしなきゃフェイトに合えないわけじゃない。フェイトには個人的に会いに行つて話しをすればいいさ。リンディさんたちがジュエルシードの回収をやってくれるおかげで時間はたっぷりあるしな』

シノンの言葉にリンディは一瞬目を見開いて僅かに汗を流す。そして、その動揺の瞬間をシノンは見逃さなかった。シノンはリンディに目を合わせ皮肉げな笑みを浮かべた。

『さて、話は終わりましたね。んじゃさっさとオレの右腕の対応を決めて帰らせてください』

「ま、待って。あなたにはそれ以外にも聞きたいことがあるの」

『はあー、まだあるんですか。なんですか？』

「あなたが戦闘中に使用した炎や風を発生させた戦闘技術のことについてです。あの技やあなた自身には魔力が感知されませんでした。あれは一体なんなの？」

戦闘技術、恐らく術技のことだろう。まあー当たり前である。術技のエネルギーは闘気、あり大抵に言えば気合から生まれるものだ。シノン自身に魔力が感知されないのも単純にレアスキルのせいである。

シノンは質問の答えを両方知っている。しかし……

「答えるつもりはありません」

「何を言っているんだキミは！！艦長は答えると『お前は黙っていると言われただろ。オレからも言ってるやろ。口を開くな。黙っている』……くっ！！」

「……なぜ、答えられないのかしら？」

クロノとは違いリンディは冷静にシノンに質問する。しかしリンディの瞳の中には微かに不満の色がある。シノンはそれに気付いているが構わずに話を続ける。

『簡単です。あなた達が信用できないから、それだけです。信用できない人間に自分のことを話す人はいないでしょう？ちなみに聞かれるのも面倒なんで今のうちに答えておきます。信用できない理由は、罪を押し付けられ執行権も無いのに強制的に拘束され牢屋に監禁、そんな対応をする組織に好感なんて抱けるわけないでしょう？それともう一つ、この組織のやり方に虫酸が走るから。以上です』

シノンの少し長い、しかしシノンの抱いているしつかりとした管理局への嫌悪感と不信感が感じられる説明を聞いて、リンディとクロノは思い当たる節があるのか冷や汗を流している。

クロノの場合は自分達の管理外である世界の一般人を攻撃し拘束し牢屋に入れたことを言われているということに気付いている。

「ま、待て……二つ目の管理局のやり方が気に入らないと言うのはどう言う意味だ！？」

しかし、その本人は自分の失態を認めたくないらしく話題を替える。しかし、その行動が自分の母を追い詰めているということに気付い

ていない。

『……そうだな、どうやらお前は気付いていないようだし、ちよつどいいな。質問に質問で返すよつで悪いが、さつきリンディさんは”ジュエルシードの回収は時空管理局が全権を持ちます”と言つたな?』

「ああ、確かに言つた」

『ならどうして、少しの間考える必要があるんだ?』

「それは……ん?……待てよ?艦長……」

シノンがこの会話で言いたいことに気が付いたのか、クロノはリンディに目を向けた。リンディ本人の表情は動いていないが目が泳いで動揺が走っている。

『答えないんですか?リンディさん。ならオレが答えますよ。クロノ、その人はなのは、ユーノ、できればオレも含めて三人を戦力として取り込みたかつたのさ』

「なつ!!そんな……」

『考えてみる、関わらせないなら余計な情報は一切与えないはずだ。なのにその人は聞いてもいないのに過去にあつた災害のことをオレたちに教えた。不安にならないか?自分の世界がそんな風に消えるんじゃないかつてな。しかし、オレたちにはそれを防ぐ力がある。さて、ここまで聞いたら……どうする?』

シノンの質問になのは、ユーノは一瞬考えるがすぐに答えを決める。

そう、この二人は迷わずその災厄を防ぐことに力を使う。リンディの行ったのはその決意を愚弄し、あまつさえ年端もいかない子供達を騙して戦場に狩り出す下種な策略だ。

『どうですかね？違うんなら納得のいく説明をして欲しいんですけど、なにかありますか？リンディさん？』

全員の視線がリンディに集まる。リンディは固く目を閉じて黙っていたが目を開き、なのはとユーノ、シノンに頭を下げた。

「ごめんなさい。シノン君の言うとおり、私はあなた達を戦力として欲しました」

『おい、なに誤魔化してんだ。あなた達の力を欲してあなた達を騙しました、だろうが』

リンディの言葉をシノンが怒りの感情を含めた声で封殺する。シノンにとってなのはやユーノ、さらには自分の息子も戦力として使うリンディは今では嫌悪の対象でしかない。

「……はい、その通りです。すみませんでした。ですが、あなた達へ失礼を働いたことを承知でお願いします。ジュエルシードの回収に力を貸してくれませんか」

シノンはもちろん、なのはやユーノでさえ軽蔑の視線を向けている中、リンディは三人に頼んだ。しばらく沈黙がその場に落ちた。

『オレはごめんだね。もともと、こんなやり方をするから信用できない、とさっき言ったしな』

「私は……手伝いたい。ジュエルシード探しは全力でやるって決めたから」

「僕も……元々僕はそのために来たんだし」

三人それぞれの答えが示され、シノン は軽く溜め息を吐いた。

『はあー、わかったよ。お前らが決めたんなら好きにやりな。言っとくがオレは手を貸さんぞ?』

「シノン君。申し訳ないけどあなたには右腕のジュエルシードの事があるのじゃなくアースラにいて欲しいの」

『お断りします。言っときますがこの答えは曲げません』

「自分が拘束されてるといふ身分だとわかっているのか?今のキミにはデバイスも……」

『私のことですか?』

突然クロノの声を遮って女性の声が聞こえる。そしてその声の発生源はシノンの目の前に一瞬の発光と共に現れた。

それはシノンの剣であり盾である最高の相棒、ヴェルフグリントだった。

S i d e シノン

突然オレの目の前に円型の魔方陣が出現しヴェルフグレントが現れた。恐らく転移の魔法だろう。オレは立ち上がって右手で掴む。

「よう、そっちは無事だったか？」

「はい、解析作業をされましたが逆にこちらからシステムを乗っ取ってやりました。その際に魔法の術式やデータベースのパスワードも見つけておきました」

「なんだと！！お前なにを勝手なことを……………」

「おや？どうやらあなたは自分の状況をわかっていないようですね……………」

「あのさ、クロノ君」

「なんだ、エイミィ」

今までさっぱり口を開かなかった栗色の女性がクロノに話しかけた。恐らくヴェルフグレントがなにかを仕掛けたのだろう。

「ええーと、実はアースラのシステムの制御が全部乗っ取られてるんだけど……………」

「は…!？」

エイミィと言う女性の報告にリンディさんとクロノは驚きの声を上げる。

「わかりましたか？私が今その気になればこの艦のエンジンを暴走

させてマスターとなのはさんだけを無事に地球に送ることが出来るのですよ?。」

「ん? ユーノが入ってないぞ・・・。」

『マスターを裏切ったあの者を生かしておく理由はありませんから』
殺気満タンの声で答える我が相棒。しかし・・・裏切った、か。

「構わんよ。慣れてるし、ユーノの反応は人として普通のものだ」

『しかし・・・わかりました。今回は忘れます。しかし、受けるべき罰は受けてもらわなければいけませんね・・・』

なにやら後半が気になったがスルーしよう。

「・・・ということ帰らせてもらいます。ちなみに阻止しようとしても何も出来ませんからあしからず」

『これは管理局に対する明確な敵対行動だぞ!? こんなことをしたらどうなると思って・・・』

「ほお、どうするんだ? オレを捕まえるか? さっきボコられてアフ口ヘアーになったお前が? それとも司法組織って肩書きを掲げてオレを殺しに来るか? 別に挑んでくるなら構わんが・・・一人も生きては帰れんぞ?」

モニター先で怒鳴ったクロノにオレは凍えるような冷たい笑みで殺気を飛ばす。すると、クロノはその場に尻餅を着いて震えでした。慌てて立ち上がるうとするが膝がすぐに折れる。

オレはふつと鼻笑いを飛ばして身を翻す。それと同時に檻の鉄柱が消え、入り口が開く。

「あつと、そつだ。なのは、ユーノ、お前らはどうする？一応家には一回帰った方が良くないんじゃないか？」

だが檻を出る寸前で足を止め、なのはとユーノに声を飛ばす。

『ふえ？……あ、うん。そつだね、一回私も戻る』

『僕も……いいの？』

「さつき言つたる？別にあの事は気にしていない。二人とも、来るなら急げよ。場所はレイジングハートに聞けばわかる」

そつ言つてオレは今度こそ檻から出て牢屋を後にした。部屋を出たところの廊下でしばらく待つと、なのはとユーノがやってきた。

オレはそれを確認後ヴェルフグリントに転移を頼み、地球に移動した。

第21話 管理局とのお話、ん？なんだ？今一瞬、言葉に違和感が……（後

ご覧いただきありがとうございます。

気が付いたら10万PV突破しました。皆さんありがとうございます！。

では、また次回。

第22話 怒りとアイアンクロ―

S i d e シノン

オレとなのは、ユーノが時空管理局の戦艦から帰ってきて数日が過ぎた。

あの後家に戻ったなのはは桃子さんと話をして当分の間外出する許可をもらった。結局魔法のことは話さなかったようだが桃子さんは理解してくれたらしい。学校の方にも当分の間学校を休むと連絡済みだ。

なのはも向こうで頑張っているのだろう時々街中で魔力反応が発生するがすぐに鎮圧されている。

んで、なのはがない状況でオレは何をしているのかと言うと・・・
・現在、道場の中で木刀を右手に持って美由希さんと勝負をしている。

左斜め下からくる木刀をバックステップで回避する。だが続いて突きが迫ってくる。木刀を上振り上げて突きを放ってきた木刀の矛先を強制的に上に弾く。そのまま木刀を振り上げた状態から両手で木刀を握り真下に振り下ろす。

しかし美由希さんはその場から右、オレから見て左の方に跳んで回避した。そのまま美由希さんは右手の木刀を振り下ろしてくるがオ

レは体を左に向け、木刀を右逆袈裟に打ち込む。打ち合った瞬間に腕に衝撃が伝わってくる。恐らく徹だ。だがオレはそのまま木刀を押し切って美由希さんの体勢を崩す。

その隙を逃さず木刀を左袈裟に振るう。美由希さんは右の木刀で受け止めるが力が足りず木刀が床に叩きつけられる。そのまま美由希さんの首筋に向けて鋭い突きを放つ。美由希さんは左の木刀で防御しようとするが間に合わず木刀は首筋に………当たると前で止まった。

「そこまで!!」

恭也さんの声でオレはゆっくり体を戻し、美由希さんはその場に尻餅をつく。

「うー。シン君って本当に強いねー恭ちゃんが負けたのもわかるかな……」

「そう言う美由希さんだっけかなり強い方ですよ。実際危なかったです」

そう答えながら美由希さんに手を差し出す。美由希さんは意味を理解し、手を掴んで立ち上がる。

何故オレが今こんなことをしているのかと言うと、暇なところを土郎さんに目撃されて道場に連れてこられたのだ。

そして土郎さんの提案で『剣術のみで戦ってみてくれ』と言われたのだ。剣術のみと言うのは殴りや蹴りを一切使わずに、という意味だ。最初は意図がわからなかったが打ち合ってみてわかった。

恐らくオレの戦い方に疑問を持ったのだろう。オレの戦い方はなんというか、我流という言葉一つで片付けられないのだ。いや、もしかしたら我流の方がまだマトモだ。

基本は剣や刀を使った斬撃だが、所々に殴りや蹴りなどの攻撃を加えて攻撃する。それがオレの基本の戦闘スタイルだ。だがオレの剣術は術技以外、すべてが大型の獣や確実に人の息の根を止めることを想定したものだ。

打撃の方もいつの間にか浸透剣などの技を覚えたせいで内臓や急所ばかりを狙うような殺人技になってしまった。

士郎さんはすこし考え、恭也さんや美由希さんを相手にしながらオレに加減が効く剣術を知ってもらおうということにしたらしい。

オレとしては暇だしまともな剣術を学べるのならありがたい話だ。ついでだが御神流の技も盗ませてもらおう。アレは覚えておいて損はない。

そんな流れで打ち合いを続けて休憩中、ふと海の方から今までとは比べ物にならない程大きいジュエルシードの気配がした。

(一つの発動にしては大き過ぎる・・・恐らく複数による発動か。結界は張られているようだが、これだけ離れたところでこの魔力だ、長くは保たないだろうな・・・僅かだがフェイトとアルフの気配があるが・・・何故管理局の人間が一人もいない・・・)

「シノン君」

気が付くと目の前に恭也さんが悲痛な顔で立っていた。隣を見ると美由希さんも同じような顔をしていた。

「はい、なんですか……？」

「頼む、なのはを……助けてやってくれ……」

オレはその言葉を聞いて一瞬体が固まった。

「なんとというか、嫌な予感がするんだ。なのはが危ないような……そんな予感が。お前に頼るしかない自分が許せないよ、力を一番嫌ってるお前にこんなお願いをしてるんだからな。だが、頼む……」

恭也さんはそう言っただけで頭を下げる。オレは無言で立ち上がり手にヴェルフグリンツを持って道場の出口に歩いていく。

「……やれるだけはやってみます。オレにとっても大切な日常ですし」

それだけ言ってオレは道場を後にした。

そしてオレは家から出てすぐに海の方角に走り出した。

Side Out

外とは違い、結界内の海上は地獄のようだった。海は大きく荒れ、ジュエルシードが生み出したであろう六つの竜巻が暴れている。

その海上でフェイトは竜巻の間を飛び回っていた。

フェイトは前回やったように海の中にあつたジュエルシードに魔力をぶつけて強制的に発動させた。しかし、発動したジュエルシード六個の力をフェイトは侮っていた。

暴走状態のジュエルシード六個を封印しようにもフェイト一人の力では足りないのだ。アルフも竜巻に妨害されて分断されたフェイトの元にたどり着けない。

そして回避を続けていたフェイトはついに竜巻に完全に包囲された。

「フェイトオーー!!」

(ここまでなんて・・・ごめんなさい・・・母さん、シノン)

その名を浮かべたのは何故かわからない。

ただそう思いながらフェイトは涙を流しながら瞳を閉じた。

(はっ、悪いが聞く耳持たん・・・死にたくないなら全力で右に飛べー!!)

突然脳内に響いた念和。

次の瞬間、フェイトはほとんど無意識に動いた。先程の声の主の性格なら口にしたことは本当にやる。

そしてフェイトが全力で右に飛んだと同時に先程までフェイトがい

た場所を雷撃を纏った3本の槍が通過した。

槍は竜巻を2つ程貫いて海に着弾。そのまま海中で巨大な爆発を起こし、残りの竜巻を全て後方に押し返した。

その隙にフェイトは竜巻から離れ、安全圏まで移動する。もし移動しなかったらあれが自分に当たっていた、そう思うとフェイトの体を冷たい汗が流れる。

「まったく、とんだ無茶をするなお前は……」

突然フェイトの後ろから聞こえてきた声。振り向くとそこには、騎士甲冑を纏った姿で溜め息を吐いているシノンがいた。

Side シノン

フェイトのふざけた念話を無視してサンダーブレードを三発打ち込んだ後、フェイトの近くに移動した。見た所魔力を消費しただけらしい。

（さて、とりあえず……）

フェイトの顔を左手で掴み……。力を込める。俗に言うアイアンクローだ。

「え？いたたた！な、なに！？……なんなのシノン！」

「やかましい！！自分の力量を無視して無茶を行い拳句にこれだけでかい騒ぎにして。管理局もお前も随分とオレの平穏をぶち壊して

くれるなあー？」

フェイトが暴れるが力は緩めない。実際オレはかなり頭に来てるのだ。ジュエルシード六個の同時封印などという馬鹿げた事を行ったフェイトにも、これだけの騒ぎになっても何も反応を見せない管理局にも。どちらとも、このまま放っておけば地球が消滅することをわかっているのだ。

管理局の連中が気付いていないとは思えない。恐らくフェイトの自滅を高みの見物で待っているのだろう。ご大層な言葉を並べても結局は地球の消滅よりジュエルシードとフェイトの確保を優先する、と言っことか。

「下衆共が、反吐が出る」

「え？」

オレの言葉にフェイトが反応を見せるがオレは無視してフェイトの前に出る。

「フェイト、発動させた手前に封印を手伝え。ジュエルシードはオレが黙らせる」

「シノン君ー！！」

上空から声が聞こえ、なのはとユーノが降りてきた。

「遅かったな、見た所管理局の連中の指示を無視してきたって所か？」

「せ、正解です……」

「まあいい。なのは、お前はフェイトに魔力を分けてやれ。そのあとに二人で封印だ。ユーノは結界の維持を頼む、町には絶対に被害を出すな。フェイト、アルフにはユーノの手伝いをさせてやってくれ」

「うん!!」

三人の頷きを確認してオレは右手を上げて目を閉じる。

「創造 開始（クリエイト、スタート）」

頭の中に数十の剣をイメージする。一本一本出現させるのではなく頭の中に溜め込むようにする。

（装填固定、一斉射出準備）

「ソードバレル・フルオープン!!」

目を開き、右手を振り下ろす。すると50本ほどの剣群が一斉に出現しライフル弾のような速さで発射された。剣郡は竜巻を全て貫いて海中に直進した。しかし、まだ終わりではない。

「壊れた幻想」
ブローケン・ファンタズム

シノンの眩きと同時に海中に沈んだ剣が全て大爆発を起こした。爆発は竜巻をも巻き込み、ジュエルシードの力を完全に鎮圧した。

壊れた幻想、あの老人がおまけに教えてくれた投影の追加魔術だ。

簡単に言えば自身の投影した物を即席の爆発物に変える魔術らしい。投影物を複数射出するソードバレル・フルオープンと一緒に使ったことはなかったが、自分自身で想像以上の威力だと思う。後ろのなのはとフェイトは呆然としてまったく動かない。

「おい、二人とも早く封印しろ」

オレの言葉を聞いて二人が慌ててデバイスを構えて封印を行い始めた。

封印を完全に終了したと同時になのはがフェイトが話しかけていた少し遠くて会話は聞こえないが唯一言だけなのはの言葉が聞こえた。

「友達に、なりたいんだ」

その時がなのはがフェイトに伝えたかったことを言えた瞬間だった。

『マスター……！上空から魔力反応が……』

「……………ッ……！」

ヴェルフグリンツの言葉に空を見上げる。空が一瞬輝き、巨大な紫電が落ちてきた。

そしてその紫電の落下ポイントにいたのは、フェイトだった。

「くそっ！！・・・間に合え！！」

アクセルフィンの出力を一気に引き上げてフェイトを背中に庇う形に移動する。

回避が間に合わないと判断し、咄嗟にフェイトの体を抱きしめてオレの体を盾にする。

次の瞬間、一瞬だけ背中、次の瞬間に全身が麻痺し、オレは意識を失った。

第22話 怒りとアイアンクロー（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

更新が遅れてしまいすいませんでした。しかも短い。
出来ればこれから前のように書いていきたいと思えます。

では、また次回。

第23話 元凶、プレシア・テストロッサ（前書き）

今回ストーリーがかなり飛びます。

第23話 元凶、プレシア・テストロッサ

Side out

とある時空に存在する要塞のような建築物、時の庭園の中。その一室でシノンは目を覚ました。

「……………またか」

その咳きはほとんど独り言だった。ただ”これで気を失ったのは何度目だろうか？”そんな事を思いながらシノンは回りを見渡す。

ヨーロッパ風のデザインの部屋、まともな明かりが無いのでよく見えないが部屋の中にはシノンが乗っているベットとスクリーンしかない。

シノンは自分の所有物を確認したがやはりヴェルフグリントはない。

(十中八九、ここはあの紫電を撃った奴の根城だろうな……………しかし、なんでオレを助けた?)

紫電の狙いはフェイトだった。なら邪魔をしたシノンをあの場から助ける理由はない。

すると突然、入り口のドアが開き一人の女性が入ってきた。

逆光で顔がよく見えないが体は見えた。腰に届くほどの長い紫髪、やたらと露出が多いローブのような服装、そしてその女性の手には機械的な杖が握られている。

それだけで魔導師と判断し、シノンにはベットから立ち上がって自然と身構える。女性はこちらに歩いて近づくる。

目が段々と光に慣れ始め、女性の顔が見えるようになっていく。

そして目に映った女性の顔は美人の顔だった。しかし、顔の血色は決して良さそうに見えず、その瞳の中はひどく濁っていた。

（あの目は、絶望、怒り？いや……………あれは、狂気か）

「……………まず助けしてくれたことに礼を言う。あなたは？」

「プレシア・テストロッサ。あなたが会った、フェイトの……………母親よ」

「（今の間はなんだ？）シノン、シノン・ガードだ。なぜオレはここに？」

「気絶したあなたをフェイトに連れてこさせたのよ。ちなみにあなたが気絶してからすでに2日が経過しているわ」

「……………それで、あの紫電を放った本人がオレに何か用か？」

シノン自身、その問いに確証はなかった。しかし、シノンの中の何かが決断を後押しした。

プレシアは一瞬驚いた表情を見せ、小さく笑った。

「驚いたわね。では単刀直入に聞いわ、あなたは何者？」

プレシアが鋭い視線でシノンを見るが、シノンは身動き一つしない。シノンの意識はプレシアの視線より別のことに向いていた。

（なんだ？この女と対峙した時から変な気配を感じる。しかもこの気配、知ってる気配だ。こっちに来てからじゃなくて、グラニデの頃に……）

「聞いているのかしら？それとも話せないの？」

プレシアの殺気が混じった声にシノンは我に返る（殺気はなんとも思わなかったが）。

「……すまなかった。だが、”何者だ”というのはどうゆう意味だ？」

「……私は此処、時の庭園からフェイトやあなた達のことを見ている。そしてジュエルシードが暴走を起こしたあの時、あなたはその体内に確かにジュエルシードを取り込んでいた」

プレシアの言葉にシノンは”何者”の意味を直感的に理解した。恐らくフェイトに地球でジュエルシードを探すように命令したのはプレシアだ。

その欲しがっていた物を一人の少年が体内に取り込んだ。嫌でも興味を引く材料になるだろう。

「理解したようね。けどまだあるわ。さっき調べたけど、少し変わったあなたの体内にあるジュエルシードは、フェイトが回収しているジュエルシードより完全に安定していて出力も数倍以上にまで上

がっている。知っでいて？」

「いや、初耳だ」

「ここから先は私の仮説、恐らくあなたの体内にあるジュエルシードが本来の姿をしているのだと思うわ。あなたの体内で何らかの働きが起こり、ジュエルシードはもとの姿、あるべき姿に”浄化”された。これが私の考えよ」

”浄化”その言葉を聞いたとき、シノンの頭の中で何かが引つ掛かった。

（浄化だと？そういえばジュエルシードを取り込んだときに右手から出た光、あの光もどこかで・・・そうか思い出した、あの光は・・・マナの光だ）

思い出した。

グラニデでカノンノがゲーデから浴びた負をマナに変えたあの時の光、あの光とまったく同じ光なのだ。

つまり、高純度のマナの塊であるシノンの右手が負をマナに変えるように、ジュエルシードを本来の姿に文字通り浄化したのだ。

「・・・プレシアさん、あなたの仮説は当たっている。つまり、あなたが欲しいのはこの腕か？」

シノンは右腕を指差して問う。しかしプレシアは満足そうな顔をして肩をすくめる。

「違うわ。私はあなたの正体と先程の仮説が正解かどうかを知りたかっただけ。その腕も魅力的だけでもっと良い物を見つけることが出来たから私には必要ない」

そう答えてプレシアは何かをシノンに投げた。シノンは無言でキャッチ。プレシアが投げたのはヴェルフグリントだった。

「返すわ。ロックが難しすぎて1つも解析できなかったからもう必要ないわ。あと、帰りたいのなら少しこの部屋にいなさい。此処はそれなりの設備が専用パスワードがなければ外からも中からも転移できない。この部屋でおとなしくしていれば何もせずに家に帰してあげるわ」

説明を終えてプレシアは部屋を出て行くとする。シノンは何故かその背中に狂気と希望が混ざったような気配を感じた。

「なぜそこまでしてくれる？用が済んだらオレを殺せばよかったはずだ」

「別に特別な理由はないわ。強いて言うなら”さっきの質問に答えてくれたお礼”よ」

シノンの質問にプレシアはそっけなく答え、今度こそ部屋を出た。

（暇になりそうならスクリーンでも見てみなさい、面白いものが見れるから。ふふっ）

部屋を出た途端に聞こえた念話。シノンは特にやることもないので言われたとおりスクリーンの電源をつけた。プレシアが口にする”面白い”の種類が予想できないが、少なくともバラエティー番組が

映るとは思えない。

そしてスクリーンに映ったのは、海上でバインドを掛けられているなのはと見ただけで大技を放つ準備をしているフェイトだった。

場所が変わって海鳴の海上。

なのはとフェイトはここで手持ちのジュエルシードを互いに全て賭けた勝負をすることにした。

海上の空中戦はまったくの互角。陸地の方にはプレシアがフェイトに行った虐待に耐えられなくなりプレシアに牙を向いたが返り討ちにあったアルフとなのはの勝負を見届けるために着たユーノ。初めはただ巨大な魔力を持っているだけだったなのははこの短期間でフェイトと互角の領域まで到達していた。

それに対してフェイトは本気でやらねばやられると判断し、なのはにバインドを搔け自身の最強の技を叩き込むために詠唱を開始した。

「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかけ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル」

フェイトの詠唱に呼応し浮いているフォトンスフィアが輝きを増す。

「フォトンランサー・ファランクスシフト。撃ち砕け、ファイア！」

フォトンスファイアから機関銃のような勢いでフォトンランサーが発射される。その勢いはまさに名の通り、ファランクス。

その全てがバインドで身動きが出来ないのはに直撃した。

爆音と共になのはを爆煙が包む。さらに爆風が吹き荒れ海上に大きな波を起こした。

「……………アンタ、助けなくて良かったのかい？」

「やろうとしてもなのはは絶対に断るよ、シノンでも多分止めただろうし。それに、まだ終わってないしね」

ユーノの返答を聞いてアルフは段々と晴れていく爆煙を見つめる。

そして爆煙が晴れると、そこにはラウンドシールドを展開してフェイトの攻撃を凌いだのはがいた。

「攻撃が終わると、バインドも解けるんだね。それじゃ、今度はこっちの……………」

レイジングハートをシューティングモードに変えて構える。

『Divine……………』

「……………番だよ!!」

『……………Buster』

レイジングハートから放たれる桜色の砲撃、狙いはもちろんフェイ

ト。

「……くっ!!!」

迫る砲撃に対して咄嗟にフェイトは障壁を張って受け止めた。

普通の状態のフェイトなら避けられたが、ファランクスシフトによる消耗、それを防いだなのには対する驚きがフェイトの反応を遅らせた。

(直撃!?!?!?!でも耐え切る。……あの子だって耐えたんだから!?)

フェイトは障壁に魔力を籠めるが、もともとフェイトの防御力はなのはそれより遥かに低い。フェイトの本来の戦闘スタイルは高速機動によるインファイトなのだ。

手袋が破け、バリアジャケットも段々とぼろぼろになっていく。

しかし、渾身の力を込めてなのはの砲撃を防ぎ切った。

だが、それと同時に頭上から照らされる桜色の輝きに気付く。

上を見上げると、そこには強大な魔方陣を展開しているのがいた。

「受けてみて、デイバインバスターのバリエーション」

『Starrlight Breaker』

魔方阵の中心に空気中の魔力が収束され、デイバインバスターとは比べ物にならない規模の砲撃が発射準備を開始している。

フェイトは急ぎ逃げようとするが手足を桜色のバインドに拘束される。

「くっ！！バインド！？」

「これが私の全力全開！スターライト・・・ブレイカー！！！」

叫びと共に放たれる特大の砲撃。

その砲撃は抵抗が一切出来なかったフェイトを飲み込んだ。

Side シノン

「・・・ひでえー」

戦闘の決着を確信したオレの第一声がそれだった。

手足を拘束され逃げられない状態であんな魔法を撃たれば、受けた本人は普通に恐怖を刻み付けるトラウマものだ。

「確かに収束砲撃が得意なのは知っていましたけど・・・私達、どこで間違えたんでしょうか？」

すまんフェイト、お前にそんな恐怖を体験させた原因はオレ達にも

あるかもしれん。

そんなことを考えているとスクリーンにフェイトを巻き込んでジュエルシードを奪って行った紫電が映った。

その時、プレシアが放ったであろう紫電にオレは負に似た気配を感じた。負に似ていて完全な負ではないなにかそんな感じの気配だ。

『マスター、さっきの攻撃、わざとフェイトさんを巻き込んで撃つたようです』

「は？つまり、自分の娘を故意に攻撃した？なんでまた……」

『私のアリシアに……近寄らないで!!』

突然スクリーンから聞こえたプレシアの叫び声。スクリーンに目を移すと、プレシアとプレシアの周りに倒れている大勢の人間が映っていた。恐らく時空管理局の人間だろう。

「正面から乗り込んで行って、たった一人に全滅させられたのか……錬度低くね？」

『あの執務官と艦長位しか張り合わないんじゃないですかね』

敵の根城に束になって突っ込んでいく時点で一網打尽にしてくださいと言ってるようなもんだろ。しかも奇襲さえしないって。

「ん？あれって……おいおい、こりゃどうゆうことだ？」

倒れている管理局員から視線を動かすと、プレシアが愛しそうに眺

めている生体ポッドが目に入った。

しかし、オレが驚いたのはその中身、そのポッドの中にいるフェイトそっくりの少女だ。

第24話 断てぬ因縁（前書き）

今までもありましたが今回も無茶苦茶なオリジナル設定があります。

第24話 断てぬ因縁

S i d e シノン

モニターに映っている少女の容姿は本当にフェイトそっくりだった。しかし気配がフェイトと異なっているしプレシアはさっきアリシアと叫んだので別人のはずだ。しかもあの少女……。

「……間違いない、あの子、すでに死に体だ。けどなんで死体をわざわざあんなに大切に保管してるんだ？」

『マスター、調べたんですがこの通信はどうやら管理局との通信がこつちに流れてきたみたいです』

つまり、こうしてオレが見れているのも偶然ということ。視線をモニターに戻すと、プレシアはアリシアと呼んだ少女が入っているポッドに抱きついている。

『もう時間がない、集めたジュエルシードを使っても完全な次元震を起こせるかどうか……。やっぱり、アレを使うしかないでしょうね。もう終わりに出来る……。この子を亡くした憂鬱感を感じるのも、この子の身代わり人形を娘として扱うのも……。』

どういうことだ？アレを使って次元震を起こす？身代わり人形？オレは会話の流れがまったく理解できなかった。

『聞いていてフェイト？あなたのことよ。せつかくその身にアリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ。役立たずでまったく使えない私の人形』

人形、記憶をあげた、この単語を聞いてオレはなんとなく理解した。つまり、フェイトは……。

『あの子を事故で亡くしたあの日から私は最後に行っていた研究、使い魔とは違い、使い魔を超える人工生命体の生成、プロジェクト FATE。これで私はフェイトを造った。ここまでなら管理局も調べたと思うけど……』

そう、導き出された答えは人造生命体、プレシアは娘を失ったことを認められずに自分の傲慢で命を造った。大切な娘の命を失った。乗り越えられないほどの悲しみだろう。

しかし、オレはプレシアには僅かな同情もない。はっきり言おう、オレはプレシアに怒りを抱いた。殺意とも言ってもいい。

娘を失ったからフェイトを造った？そっくりなのは見た目だけ？役立たずでまったく使えない人形？何様のつもりだ。ヒステリーな自己中心女が。人の死などオレは気が遠くなるほど触れてきた。親しい者だろうと親しくなろうとだ。その中でも悲しみを受け止められない者もいた。

しかし、こいつは今まで見た人間の中で一番腐った生き方をしている。自分が人形と呼ぶ存在にすぎること悲しみを埋めようとしていたのだから。そしてその事実を受け止めようもしない。

『でも、やっぱりダメね。ちっともうまくいかなかった。作り物の命は所詮作り物……あの子の代わりにはならなかった。アリシアはもっと優しく笑ってくれた。アリシアは時々我侭も言ったけど、私の言うことをとてもよく聞いてくれた』

『やめて……』

プレシアの言葉になのはの声が割って入った。しかし、プレシアの戯言は続いた。

『アリシアは私にいつでも優しくかった……。フェイト、やっぱりあなたはアリシアの偽者。せつかくのアリシアの記憶もあなたではだめだった』

『やめて……。やめてよ!』

『アリシアを蘇らせるまでの私が慰めに使う人形……。だからあなたはもう要らない、どこへなりと消えなさい!』

その言葉を聞いて、オレの中の何かが切れた。視界がクリアになる。頭がやけに落ち着く。頭の中に在るのは唯一つ、冷たく鋭い冷酷な殺意だけ。

『お願い!もうやめて!』

『フツハハハハ!……。ハハハハハ!』

なのはの叫びをあざ笑うようにプレシアは笑う。

『最後に良い事を教えてあげるは……。フェイト、あなたを造ったときから私はあなたのことが大嫌いだったのよ!』

その言葉と同時にプレシアの周囲に黒く濃い霧が浮かび始めた。あの霧をオレは知っている。グラニデで嫌というほど関わった負から

生まれしエネルギー、ラルヴァ。

『私は旅立つのよ、失われた都アルハザードに！！』

「なるほど、プレシアが言ったアレとはラルヴァのことか、元々の負がどこか知らんが確かにあのエネルギーを使えばジュエルシードを上回る効果を得られるだろうな」

その果てが自爆という条件でな。オレは底冷えした声に心の中で付け足した。

「ヴェルフグリント、アルハザードって何のことだ？」

『すでに滅んだと言われている伝説都市の名です。そこには現在では再現が出来ないテクノロジーが眠っている。それがアルハザードの見解です。プレシア・テストアツサの目的は恐らく死者蘇生の方法を見つける、そんなところでしょう。』

「まるで別の事実が存在するみたいない言い方だな」

『はい、事実上確かにアルハザードは滅びました。しかし、その土地とテクノロジーは失われてはいません。実際私はアルハザードで作られたデバイスですから』

いきなりとんでもない事実を言われたが、確信した。つまり、アルハザードはまだ存在する。そしてプレシアはラルヴァを所持しているなら、オレのやることは決まった。アドリビトムのメンバーだった者として負の始末はオレの仕事だ。

「ヴェルフグリント、セットアップだ」

『Yes, My load』

セットアップを完了し、腰に差した日本刀を出口に一振り。すると、出口と出口の周りを見えない衝撃波が襲い、横一文字の穴を作った。

「少し加減が効かん、まあいいか。破壊を遠慮してやるつもりはないしな。プレシア・テストロツサ、フェイトには悪いかもしれんが、あんたはオレがこの手で、斬る」

『……………』

心の内に確かな怒りを感じたオレは部屋を出た。

「……………結局は、断てない因縁ってことか」

その言葉には何の感情はなかった。歩きながら、誰に対してでもなくオレは呟いた。

Side フェイト

母さんの言葉を聞いて私は何もかもがどうでも良くなった。

ブリッジで崩れ落ちて私は今医務室のベットに寝ている。

これからどうなるのかはわからない。知らずとも思わない。もう何もしたくない。

さっきまで私の側にいたアルフは母さんの所に行った子達が心配だからと言っていない。

少しはつきりになった視界で私はモニターを見た。

(母さんは最後まで私に微笑んでくれなかった・・・私が生きていたいと思ったのは、母さんに認めてほしかったから・・・どんなに酷いことをされても、ただ母さんに笑ってほしかった・・・はつきりと捨てられた今でも、私は心の中で母さんに縋ってる・・・)

モニターに白い女の子と合流したアルフが映った。

(アルフ・・・ずっと私の側にいてくれたアルフ・・・言う事を聞かなかった私の側にいきつと悲しいと思うこともあったはず・・・)

視界に白い女の子が映る。

(何度も戦った白い女の子・・・何度も戦って、何度も私の名前を呼んでくれた・・・)

ベットから身を起こして罅割れたバルディッシュを手取る。

『ただ捨てればいいって訳じゃないよね・・・逃げればいいって訳じゃ、もつとない』

最後の決闘を始める前にあの白い女の子が言った言葉が脳裏によみがえる。

(私の・・・私の全ては・・・まだ始まってもない)

バルディッシュがデバイスフォームに形態を変える。しかし砕けかけの罅は消えていない。

「そうなのかな？バルディッシュ・・・私、まだ始まってもいなかったのかな？」

『Get set』

バルディッシュがぎこちない動きで無理矢理に起動する。その姿を見て私の目から涙が流れた。

「そうだよね・・・バルディッシュも、ずっと私の側にいてくれたんだもんね・・・お前もこのまま終わるなんて、嫌だよね」

『Yes, sir』

「うまく出来るかわからないけど、一緒に頑張ろう」

バルディッシュが金色の輝きに包まれ、すぐに光が弾ける。

そして光が弾けると、バルディッシュは傷一つ無い姿に戻っていた。

『Recovery』

「私達の全ては、まだ始まってもない・・・」

バリアジャケットを纏って足元に魔方陣を発生させる。

「だから本当の自分を始めるために、今の自分を終わらせよう」

『Sir ヴェルフグリントからメッセージが来ています。「起きたのなら急げ、まだ親が人であるうちに」だそうです』

メッセージの意味はわからない。けどシノンもきつと時の庭園で戦ってる。もしシノンが私の立場だったら、きつとこんな所で終わったりしない。

「行くっ」

そう言っって私は転移魔法を使い、時の庭園へと向かった。

第24話 断てぬ因縁（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

ラルヴァのパワーはジュエルシードより強力という設定にさせていただきました。

ちなみにプレシアはラルヴァの力を使って次元跳躍魔法を使ったという設定です。

では、また次回。

第25話 積極的破壊活動（前書き）

気が付いたらPVが15万突破していて驚きました。

皆さんありがとうございます。

今回は少し無双気味です。

それでは、どござ。

第25話 積極的破壊活動

Side シノン

「ちつ。邪魔だな、魔神剣・双牙！！青龍燐！！」

オレは空に浮いた体制で左手に握った刀を振るう。それから放たれた二つの斬撃破で近づいてくる4、50体ほどの巨体群を、切り裂き、吹き飛ばし、薙ぎ払う。

それで仕留められなかった奴は右腕によって威力が跳ね上がった青いエネルギー弾で消し飛ばされた。

全滅を確認し、右手に刀を持ち替えて再び飛行を開始する。

部屋を出た後、通路に出たのは良いのだが、すぐ後にさっきのような機械仕掛けの巨体に襲われたのだ。というかすでに300体ほど破壊しているのだが。幸い巨体だけで一体一体に脅威はない。

そしてオレは現在ヴェルフグリントが事前に読み取ってくれていた地図を頼りにプレシアのいる場所を目指している。

なのは達もすでに乗り込んできているようだが、始めから中にいたオレの方が距離的にはかなり近い。ちなみにプレシアがいるのは一番奥の部屋だ。

『マスター、地図の通り進むとこの先の長い螺旋階段を一直線に降りなきゃならないようですよ？』

「階段か、待ち伏せされるかもしれんし別の道を通るか」

そう言つてオレは刀を鞘に納めアクセルフィンの展開を解除。地上では無い空中で、だ。

『ちよつ！？マスター！！』

万有引力の法則に従いオレの体は頭を下にして真下に落ちていく。そして落ちながら右の拳を後ろに引いて、地面に目掛けて一気に突き出す。

「剛力徹破・突！！」

突き出した拳は地面を突き抜け、爆発を起こして地面に大穴を空ける。

普通なら爆発の反動でそのまま落下の速度が死ぬ。しかしその時、オレの頭の中で何かのスイッチが入った。直感のようなものが導くままに頭の中で何かのスイッチを入れた。

スイッチを入れた次の瞬間、下の方向に目掛けて体にとつともない力が加わる。そして脳内に莫大な情報が送られてくる。

（なんだ、これ？落下の際の空気抵抗、落下角度、落下速度、下方向にプラスされる重力、なんでいきなりこんなものがオレの頭に流れ込んでくるんだ？なぜこんな莫大な情報を受け止めてオレの脳は悲鳴を上げないんだ？）

急に加わった力によつて真下に向かう速度が急上昇する。一瞬慌てたがすぐに右拳を引き、再度放つ。

地面を殴る、破壊。殴る、破壊。殴る、破壊。その作業を繰り返して地面を連続でぶち抜いていく。

『マスター、ストップです!!』

急に響くヴェルフグリントの声を聞き、頭を上にして落下を止めようとした。その時、再びさっきのスイッチが入る。すると、周りが無重力になったように体がその場で停止した。

それと同時にまた脳内に莫大な情報が送られてきた。今度は周辺重力の重さ、身体に掛かっている重力、などだ。

『マスター、何をしたんですか？いきなりマスターの周りだけ重力が増したり、無くなったりしましたけど』

「オレもさっぱりわからん。急に頭の中でスイッチみたいのが入った途端にあんなことが起きた。これが前にお前らが言った重力の属性変換ってやつじゃなのか？」

『それが、マスターの魔力隠蔽能力のせいで魔力があったのかわからないんです』

「そうか……まあいい、このことは後にでも考えられる」

左手で鞘から刀を抜き、アクセルフィンを展開する。地面を殴る前に右拳を魔力で補助しておいたのだが恐らく右手少しが痺れている。感覚が無いからはつきりとわからない。さっきの手は今後あまり使わないようにしよう。

飛行を再開。人が住むには広すぎると思うぐらいの部屋にでた。

下を見ると一際今までのより大きく、肩にキャノン砲を搭載した巨体が20体ほど大きな扉の前に集まっていた。恐らくあそこが目的地だ。巨体共は無視することもできるが後で邪魔になられたくない。消すか。

『あの大型はシールドも搭載しているようです。エネルギー系の攻撃はお勧めしません』

「わかった。刀だけで片付けるとしよう」

加速。一気に巨体共の群れに突っ込んでいく。何体かが肩のキャノン砲を撃ってくるが全て回避し群れのほぼ中心に着地する。その場で刀を下から斬り上げるように振るう。

「義翔閃!!」

打ち上げるように放たれた衝撃波がすぐ近くの3体に直撃。防御の役割があるシールドは確かに作動したが、シノンとの距離が近すぎたので役に立たなかった。

足が消し飛び、3体は後ろに倒れる。そこからドミノのように後ろにいた巨体共を10体ほど巻き込んでいく。嫌な気配を感じ後ろを向く。何体かがキャノン砲をオレに発射しようとしていた。

すぐにその場から離脱。狙いを外したキャノン砲はドミノ崩しで倒れたやつらに命中した。これでもう半分になった。

「味方もろともか、どうやら高度な人工知能ではないらしいな」

キャノン砲を撃つた一体に正面から接近。休ませた右手を握り、シールドに拳を叩き込む。

「爆導掌！！」

拳を打ちつけた場所が爆発。シールドがあっさり砕ける。そこから体を右に一回転し急接近、風を纏った蹴りを放つ。

「風烈剄！！」

風を纏った蹴りは巨体の胴体を半分以上抉る。残り9体。倒れるのを確認せずに次の目標を定める。定めた目標からキャノン砲が放たれるが上昇して回避。そのまま頭上に移動する。

「蛇落とし！！」

頭上から身をよじらせ竜巻のように落下する。連続の回転斬りによって2体のシールドを抉り、砕く。着地。そのまま右手で刀を横に一閃。

「続いて・・・焰蛇！！」

炎を帯びた竜巻を起こし、シールドが砕けた二体を融解させ、吹き飛ばす。残り7体。

次の目標は正面に密集した4体。刀を鞘に納め、居合いの構えをとる。一端目を閉じ、開くと同時に右手で刀を抜き放つ。

「裂衝・・・蒼破刃！！」

一閃と共に放たれた斬撃破は巨体共をシールドごと両断する。胴体がずれて4体は家が崩れるように倒れた。残り3体。こちらも固まって行動している。

飛行して急接近。刀を両手で持ち、右払いの斬撃。

「閃断！！」

リーチの伸びた斬撃が3体のシールドを纏めて斬り裂く。そこから右側にいたやつの側面に移動。刀を逆手に持ち右手を後ろに引く。槍投げの構えのような体制だ。

「すまん、少し手荒く扱うぞ。轟剣！！」

ヴェルフグリントに先に謝罪を入れて右手の刀を槍投げのように投擲。横一列に並んでいた巨体の横っ腹を全て貫通した。これで全部だ。

地面に突き刺さったヴェルフグリントを回収し、鞘に納めようとす。しかし、後ろから這いつくばるように動きで巨体が迫ってきた。オレを潰そうと握り拳を振り下ろしてきた。

オレは振り向かず刀を後ろに一閃。振り下ろされた巨大な拳を斬り落とす。返す刃で縦に一振り。巨体は真っ二つに斬り裂かれ、今度こそただのガラクタと成り果てた。

鞘に刀を納め、周りを見渡す。明るく美しかった部屋はキャノン砲や巨体の転倒などによってガラクタ置き場のような光景になっていた。

『飛行魔法しか使わず他の攻撃方法に魔力はほぼ使っていない。魔導師殺しもいい所ですよマスター』

「確かに身体能力がここまで異常な魔導師はいないだろうな。なのはなんて運動神経切れてるし」

そんな会話をしながら扉の前に立つ。普通に開けて中に入ってやるつもりはない。本気で殺しに行かせてもらおう。右手で拳を作り……

「剛昇弾!!」

……叩きつける。扉は歪みを起こして飛んでいく。目標は向こうにいるヒステリー女。

室内に紫色の光が迸る。一瞬の閃光と共に放たれた紫電。それは圧倒的な暴力で飛んでいった扉を消し炭にした。

「ノックにしては随分雑音が酷いわね。呼び鈴でも着ければ良かったかしら？」

暴力を放った張本人は薄く笑いを浮かべながらこちらを見た。その人物の周りには浮遊する黒い霧。スクリーン越しで見たときよりも遥かに密度を増している。

オレは無言で刀を抜き部屋に足を踏み入れる。

そして、オレは目の前の元凶、プレシア・テストロッサに矛先を向けた。

第25話 積極的破壊活動（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

今回はレギオスの技を中心に使いました。

ちなみに「・・・何かのスイッチを入れた」という所で起こったことは後から主人公のチートの一つとなります。というかわかる人もいるのではないかと・・・。

次回も出来れば無双ものにしたいと思います。もちろんオリジナル設定も満載になります。

第26話 眠っていた憎しみ(前書き)

今回は長いです。さらにオリジナル設定も当然あります。

第26話 眠っていた憎しみ

Side out

プレシアに刀を向けたシノン。プレシアはシノンの方に体を向ける。

「何しに来たのかしら？あの部屋にいればちゃんと地球に返してあげたのに」

「悪いが遠慮することにした。それより聞きたいことがある。お前はそのエネルギー、ラルヴァをどうやって手に入れた」

プレシアの質問を流し、シノンは質問する。この質問はシノンが一番に気になっていたことでもある。

ラルヴァのエネルギーの源は”負”。あの科学者、ジャニス・カーンはグラニデに満ちた負を特殊な装置で採取してラルヴァを生産していた。

しかしプレシアは根っからの魔導師。言うなれば科学理論を主体に見ている人間だ。人の負の感情が形になったもの、などと言われて簡単に納得出来る人間だとシノンは思えなかった。

つまり、プレシアは前からラルヴァの存在を知っていた。そしてラルヴァの存在か生産方法、あるいはその両方を教えた人間がいるとシノンは考えた。本当にそんな人間がいるのならそいつを放っておくことは出来ない。

「いいわ。教えてあげる。私がこのエネルギーの生産方法を知っていたのはアリシアを事故で失う前に公開されたある論文のおかげ。もっともその論文は書いた人間もわからず、私を含めて誰も興味を示さなかった。あなたのおかげでこの論文に書いてあることが本当だとわかったけど」

論文。つまりその人物は少なからず科学者が管理局の人間ということ。

「原料の場所は……聞くまでもないことか」

プレシアの周りに浮遊している黒い霧、あれは間違いなく負。ラルヴァの使用によってプレシア本人の中にあつた負が外に流れ出したのだ。そしてプレシアは自分から生まれる負を使ってラルヴァのエネルギーを得た。

「質問は終わり？なら今度は私の番よ。私の答えを聞いて、あなたはどつするの？あなたはここに何をしに来たの？」

何をしに来た。その問いはシノンにとってはなんでもない質問だった。

シノンは刀を顔の横に置くように構え（イメージ：セフィロスの構え）その身から殺気を吐き出す。シノンの目はどこまでも冷たくプレシアを映している。

「お前を殺しに来た、プレシア・テストロッサ」

その言葉にプレシアは、三日月のように口を歪ませた。そしてゆっくりと杖をシノンに向けた。

「歓迎しましょう、シノン・ガロード!!」

名を呼ぶと同時に巨大な紫電が杖から放たれた。扉を破壊した紫電より大きく早い。魔方陣の出現の方が遅いほどだ。魔導師が普段、魔法に備えている非殺傷設定は恐らく解除されている。

つまり、一発でも当たればシノンの体は重傷を負う。

爆発。一瞬部屋の中を閃光と爆音が支配した。沈黙が落ちる。

プレシアの後ろで鈍い銀の光が煌く。走る銀線。

背後に回ったシノンの刃がプレシアの首を刎ねようと迫った。

しかし、プレシアの全身を紫のプロテクションが囲み、刃が阻まれる。プレシアとシノンがすれ違う。シノンの振るった斬撃はプレシアのプロテクションに少し罅を入れた程度で止まった。

「驚いた……オーバーSランクの攻撃にも耐えられる強度だと言うのに……ッ!!」

振り向いた途端にプレシアの目の前にはシノンがいた。突きが放たれる。それは先程プロテクションに入った罅を通り、刀の矛先を僅かにプロテクションの内側に喰い込ませた。

シノンはもうプレシアと口を聞く気はなかった。話をしない相手の言葉などシノンは聞く気もない。

「爆刺孔」

瞬間、矛先で爆発が起こりプロテクションが碎ける。シノンはそのまま袈裟斬りを放つ。

プレシアは驚きながら瞬時にフォトンランサーを60発ほど出現させシノンに発射する。シノンは軽く舌打ちしながらバックステップで回避。そこに追撃としてフォトンランサーが連続で放たれる。

フェイトのフランクスシフトを軽く超える数のフォトンランサーがシノンに迫ってくる。

シノンは瞬動を使ってフォトンランサーの雨から逃れる。そこから再度瞬動。

プレシアに一直線で迫って背後を取る。

そのまま首を落とそうとするがプレシアの姿が紫の光と共にその場から消えた。

それと同時にシノンの背後から紫電が迫る。シノンは咄嗟に大きく右に飛ぶ。先程まで立っていた場所が消滅する。

発射元の方には50メートルほど離れた距離で杖をシノンに向けているプレシア。

細い体をしているプレシアが一瞬で移動できる距離ではない。

「どう？ラルヴァのおかげで可能になった簡易型の転移魔法よ。あなたでも追い着けるかしら？」

100を超えるフォトンランサーが放たれ、続いて紫電が2連続で放たれる。

プレシアの戦闘スタイルはフェイトとはまったくの逆。ミドルレンジかロングレンジによる砲撃、射撃魔法による遠距離タイプ。言うなれば超火力と高速連射を備えた移動砲台だ。

ラルヴァの力によって威力、精度共に最上級の魔法。同じ力で、体の病気（シノンには知らない）を押さえ込み、バックアップによって無限に近い魔力量。さらには簡易型の空間転移。

絶対的な機動力と火力。プレシアのような戦闘スタイルの魔導師にとっては至り尽くせりだ。

だが………魔導師の常識はシノンには通用しない。

「フォースフィールド」

眩きと共にシノンを絶対防御の力が包む。それはプレシアの攻撃を全て受け止めてもまったく揺らぐず綻びの一つも生み出さない。

「……なっ!?!」

プレシアの驚きと共にシノンは刀を左手に持ち替え右手をプレシアに向ける。

「フリーズランサー、サンダーブレード」

人に当たれば大きな風穴が出来るサイズの氷槍が虚空から機関銃のような勢いで放たれ、上空からは雷を纏った巨大な剣が打ち出され

る。

プレシアはプロテクションを展開しフォトンランサーをフリーズランサーに、紫電をサンダーブレードに放つ。しかし、その行為はもはや抵抗とも呼べなかった。

氷槍に触れたフォトンランサーは氷槍の速度を一切減らさずに消滅し、紫電も雷刃に紙のように貫かれた。氷槍と雷刃はそのままプレシアに直進する。

シノンの右腕によって強化が加えられているとはいえ、この破壊力は元々のシノン自身の鍛え上げた錬度によることの方が大きい。

氷槍はプレシアのプロテクションを一発ごとに大きく削り、6発ほど当たったところで完全にプロテクションを砕いた。これまで展開されていたプロテクションは全てプレシアが今作り出せる最大出力のもの、つまりシノンの攻撃に対してプレシアの防御は一度きりしか役に立たない。防御手段が無くなったプレシアの頭上からはより高い威力を持った雷刃が迫る。

プレシアは舌打ちと共に簡易型転移魔法を発動、即座にその場から転移し雷刃を避けた。雷刃は目標を失い着弾と同時に大爆発、部屋中に爆煙を撒き散らす。

プレシアは転移を完了すると同時にシノンが立っていたであろう場所に向かってフォトンランサーを雨のように叩き込み、紫電を放つて煙を吹き飛ばす。

轟音と共に煙が晴れる。着弾点にシノンは……いなかった。

「絶破……」

プレシアの背後から聞こえたシノンの声、プレシアは咄嗟にプロテクションを展開する。しかし、プロテクションは一瞬で真つ二つになり、霧散した。プレシアの目に映ったのは右手に握った刀を上に向けているシノン。

シノンは返す刃で振り上げた刀を振り下ろす。振り下ろされるまでの時間で転移は間に合わない。

プレシアは初めて危機感を覚え、バックステップで後ろに跳んだ。振り下ろされた刃は避けられた。しかし、まだ終わりではなかった。シノンは左掌をプレシアに突き出す。

「……烈氷撃」

左掌から氷の破片が撃ち出された。プロテクションの展開が間に合わなかったプレシアは数個の破片を喰らって後ろに吹き飛んだ。

破片はプレシアの左肩と右脇腹を切り裂いた。決して深い傷では無いが戦闘の達人ではなく科学者に近い存在のプレシアにとっては充分に行動の支障になる。

プレシアは今まで感じたことが無いほど痛みを感じてその場に膝を着く。プレシアは膝を着いたまま憎しみの目でシノンを睨み、フォトンランサーを200、紫電を3発放つ。これだけの魔法を同時に行使用するのはラルヴァの力を借りても体に負荷がくる。

「フォースフィールド」

しかし、その攻撃も展開された絶対防御の力によってシノンには届かなかった。

(不思議だ・・・魔術を使わずに術技だけでここまで戦えたことなんてあったかな？体が軽い、攻撃の全てが遅く見える。・・・ああーわかった。あの”負”を見たからか)

シノンは無自覚の内でも負に対して強烈な憎悪を抱いていた。自分が造られた元凶、自分に徹底的な絶望を植えつけた原因。シノンの心の中でその憎悪は自分でも知らぬほどに膨れ上がっていた。そう、今のシノンの強さは憎しみもあつての物だ。

思考を中断し、シノンは瞬動でその場から消える。

プレシアは攻撃に備えてプロテクションを展開する。シノンはプレシアの左側に現れ刀を右薙ぎに振るった。プロテクションが碎けるがプレシアは構わずに至近距離でシノンにフォトンランサーを30発撃った。

咄嗟の回避が間に合わず、シノンの左肩にフォトンランサーが6発当たった。騎士甲冑を貫通し爆発、左肩から血が飛び散る。左肩から後ろに向かつてきた衝撃に体が吹き飛びそうになるがなんとか堪える。

シノンは一瞬痛みに顔をしかめる。しかし、後ろに上半身が傾いている状態から右足で蹴りを放つ。放った蹴りはプレシアの左のこめかみを捉え、プレシアを横に蹴り飛ばした。

(ぐっ！！左腕が・・・死んだか・・・)

肩の痛みにはシノンには内心毒づき左肩にキュアを使う。傷口が光に包まれ出血は止まるが流れた血の量が多かったせいで左腕の反応が鈍い。動かせないことはないが本気で力を込めればただでは済まないだろう。

左腕をだらりと下げたままシノンはプレシアの方に目を向ける。プレシアは左側の額を押さえながら膝を着いていた。しばらく動かなかったプレシアは顔を上げた。

「何故？・・・何故なの？・・・」

そんな言葉を放ったときのプレシアの顔は自分への理不尽が納得できずに嘆き涙を流す悲痛な顔だった。

S i d e プレシア

アリシアを失った時から私の心には埋められない穴がぽっかりと空いた。それはどんなことをしても消えることはなかった。

そして私は願った。アリシアの笑顔が見たい。アリシアに会いたい。またあの時間を取り戻したい。

失ったものもあつた。苦しんだこともあつた。でもアリシアに会うためなら全て耐えられた。

そして遂にアルハザードへ旅立つ時がやってきた。

あの頃の時間を取り戻せる。そのことを考えて歓喜が抑えられなかった。

邪魔をする者を殺す力も手に入れた。もう私を阻む者はもういない。そう、思っていた。否、確信していた。だって本当にそれほどの力を手にしたのだから。

しかし、あれはなんだ？

私に力を与えることの決定打となった少年。最初はそれだけの存在と思っていた。真剣に感謝した。しかし今は私の前に立って私と私の願いを殺しに来ている。

私の力と正面から挑み優位に立ち、その手に持つ刃で私に理不尽を叩きつけてくる。

体のあちこちが痛い、全身に疲労感を感じる。

「何故？・・・何故なの？・・・」

無意識に呟いた。瞳から涙を流してシノンと名乗った少年を見つめる。彼のその瞳には冷たさと虚無が宿っていた。

「・・・もう一度愛しい娘に会いたい、笑顔を見たいという願いさえも叶わないの？何故なの？」

すがり付くように、救いを求めるように先程まで殺そうとしていた彼に言葉を放つ。

「お前だって心の底で理解しているだろう。そんな願いさえも叶えてくれないのがお前の生きる世界の姿だ。理不尽に、冷酷に、ただ今在る現実しか映さない、そこに過去という通り道は絶対的に存在

しない」

彼の声色は変わらなかった。ただ冷静に動じない声で私の心の叫びを否定した。

「その世界でお前は前を見ず、狂気にとり憑かれたように過去を追い続けた。過去を受け止められないよなやつが未来を語るな」

その言葉を聞いた瞬間、頭の中で何かが壊れたような音がした。認めたくない。そう思った次の瞬間、気が付けば私は叫びながら彼に放てる限りのフォトンランサーを出し尽くしていた。

しかし、そんな無茶苦茶な攻撃が彼に当たるはずも無かった。横に大きく回避され攻撃の全てが通り過ぎていった。そして……気が付いてしまった。

私の攻撃が向かうコースの先にあるもの、大切なアリシアの体を保管してある生体ポッドの存在に。戦闘に巻き込まれないようにあらかじめあのポッドには私が展開しているプロテクションを何重にもかけておいた。

しかし、私が文字通り出せる限りの攻撃に耐えられるかといえはその可能性は低い。

ポッドのプロテクションに次々と私の魔法が直撃する。プロテクションは確実に削られていく。死に物狂いで転移魔法を用意するが、遅かった。

遂に最後のプロテクションが砕け……フォトンランサーの一発がポッドに当たり……割れた破片が内部のアリシアの体を……

・切り裂いた。

S i d e シノン

「あ、あああ……いやあああああ——————！！！！」

突然プレシアが顔を手で覆い絶叫を上げた。視線の先を見るとポツドの中の少女、アリシアがケースの破片に切られたのか腹部辺りから血を流している。

とどめだ。いくら無傷で保管していても所詮あの体は死体。肉体に免疫力がもう存在していない以上あの傷は自然完治しない。

魔法で傷を塞いでも流れた血液は補充できない。輸血を使っても針を体に刺すので同じことの繰り返しだ。つまり、今度こそ本当にあの子はもう助からない。

「いえ……まだ……まだよ……出血さえ一時的に止めれば……
……アルハザードに辿り着ければきっと……」

最終的には全てアルハザードに託すつもりか。わかっているのに認められない、認めたくない。愚かにもほどがある。なにより娘のアリシアが哀れ過ぎる。

オレは無言でポツドの前に瞬動で辿り着く。これからオレがやることは最低な自己満足だ。

右手の刀を構える。目の前には眠るアリシア。

「…………ごめんな」

誰にも聞こえないほどの小さい声で呟く。そしてオレは、刀を四角を描くように振るう。

ガラスが四角に斬られ、中からアリシアの体が外に放り出される。すばやく刀を鞘に納めアリシアの体を受け止める。受け止めた体は世辞などではなく羽のように軽かった。

アリシアを地に寝かせ、数歩後ろに下がる。アリシアに右手を向ける。

「もう、休んでくれ。おやすみ、アリシア・テストロッサ……………
…………フレアトルネード」

アリシアの体を紅蓮の旋風が包む。それはアリシアの体を骨ごと一瞬で焼き尽くす。

吹き荒れる熱気の中、一瞬だけ金色の光が目に見え……………。

『ありがとう』

…………そんな声が聞こえたような気がした。

第26話 眠っていた憎しみ（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

皆さんには誠に申し訳ないのですが、近々中間テストがありますので更新がかなり間を空けると思います。ご了承ください。

では、また次回。

第27話 モンスターと化け物（モンスター）（前書き）

テストの合間でなんとか投稿です。

では、ごきげん。

第27話 モンスターと化け物（モンスター）

S i d e シノン

吹き荒れていた熱気が晴れ、部屋が静寂に包まれる。プレシアの絶叫と攻撃を覚悟していたのだが何も起こらない。

後ろを振り返ると、プレシアは活力の抜けた目で天井を見ていた。いや、その瞳は恐らく天井すら移していない。

「……………終わった……………もう……………なにも……………」

プレシアは独り言のように言葉を述べる。まるで抜け殻のような存在だった。だが、オレがやることは変わらない右手で刀を抜こうとした。

しかし、扉のほうから数人の足音が聞こえた。目を向けると、そこにはなのは、フェイト、クロノ、ユーノ、アルフの5人がいた。オレが無視した螺旋階段でかなり足止めを喰らったらしい。

「シノン！？え？……………母さん？」

フェイトがオレの存在に気付き、続いて変わり果てたプレシアの姿を見て驚いている。

母さん、と言う呼び掛けに反応したのかプレシアが一瞬ピクリと震え、フェイトの方を見た。

「フェイト……………そうよね……………もう……………いないのだから

ら……」

「母さん？……どうしたの？母さん？」

「もうアリシアはいない……もう生きる意味なんてない……
……もう……」

その時、プレシアの周りに浮いていた負に変化が起こった。激しく空中で震え、プレシアの周りを吹き荒れる台風のように動き出した。

その動きは狂ったように見えてどこか歓喜に増えているようにも見える。まるで飢えていた獣がようやく獲物を捕らえたときのように。

「……もう……なにもかも……どうでもいい……」

その言葉をトリガーに、それは起こった。激しく動いていた負が突然動きを止め、黒い球体状の形となり、プレシアをその中に取り込んだ。だがプレシアは自分を襲うその現象に何の反応も示さない。

「母さん!!」

負に取り込まれるプレシアを助けようとフェイトが走り出す。オレは瞬動でフェイトの背後に移動して肩を掴む。

「よせ、お前も取り込まれるぞ」

それでもフェイトはオレの言葉を無視して行こうとするがオレは無理矢理フェイトを後ろに引く。

「放して!!……母さんが!……母さんが!!」

黒い球体に包まれていくプレシアを見てフェイトは必死に手を振り切ろうとするがオレは放してやるわけにはいかない。プレシアを囲んでいる負の勢いは見境無しだ。近くにあった瓦礫さえ引き寄せて取り込んでいる。大きさも膨れ上がっている。

あの中にフェイトが飛び込んだところで何も出来ずに負の糧になるだけだ。しかもあれだけの負が一箇所に集まっているのだ、絶対に何か起こる。

「母さん！！・・・くっ！放せ！！」

ついに限界なのか、フェイトが怒りの形相でバルディッシュを振るってくる。その斬撃はオレの頭部に迫る。

「いいかげんにしろ。死にたいのか」

本気の殺気を籠めた目で睨む。すると、フェイトはバルディッシュを手から落としその場に崩れ落ちた。オレの殺気に耐え切れなかったのだ。

「なのは、こいつを頼む。執務官、説明している暇はない。急いでこいつら全員を連れて脱出しろ」

「何を言ってるんだ、まだプレシア・テストロッサの身柄を確保していない。それにこの事態を放って置いて戻れる訳が無いだろう！」

「囿にも盾にも使えん奴がいられても目障りなだけだ。消えろ」

「なっ！！！」

執務官が怒りそうだが無視する。左掌を握り、開きと動かしてみる。うん、少し反応に違和感があるが大丈夫だ。

「なのは、説明もせんで悪いが今回は言うとおりにしてくれ。ここにいたらお前らは完全に殺される」

「……………わかった。でも、シノン君も大丈夫だよね？」

「……………ああ、大丈夫だ」

その返事は虚勢だった。今から何が起こるのかわからない以上、帰れるかどうかなんてわからない。

しかし、なのはは信じてくれたのか何も言わずに来た道を戻って行った。視界の端に緑とオレンジのバインドに吊るされた人間が見えたが無視した。

遂に部屋に残ったのはオレだけ。負は未だに球体の形を保ったままだ。だが良く見ると球体の大きさが段々と小さくなっている。

右手に刀を持ち、球体を警戒する。そして、球体の収縮が、止まった。

『来ます。お気をつけて』

「了解だ」

手に握る相棒に答え、刀を持ち上げる。そして、球体の中から突如黒く鋭いなにかが飛んできた。刀を下から振り上げて迎撃する。刀

身に確かな手応えが伝わる。

(ぐっ!!!・・・重いッ!・・・ちっ!!!)

弾き返すのは諦め、刀を横にずらして右に受け流す。オレの右側を通り過ぎた物体は地面に衝突。だがそれだけでは納まらず、地面を貫通して床に大穴を空けた。

その破壊力を見て、よく少しだけでも拮抗できたな、と自分に驚く。床に空いた大穴からは何やら奇妙な色をした地面が広がっている。見るからに落ちたら唯では済まなそうだ。

『マスター、その空間は虚数空間といってあらゆる魔法の行使が無力化されてしまう空間です。落ちないように気を付けてください』

「なるほど、飛行魔法も使えないから絶対に這い上がれないってわけか」

足場には細心の注意を払わなければならぬ。足を踏み外して落下なんて笑えん。

床に大穴を空けた黒いものは良く見ると、脚のような形をしていた。これは・・・蜘蛛の脚か？

脚は球体の中に吸い込まれ、再び取り込まれた。そして、黒い球体が霞のように消え始めた。霞が晴れて、そこにいたのはオレが見慣れた異形の化け物だった。

全長は見た限り15メートルほど。先程オレに攻撃をしてきた蜘蛛

の脚が数え切れないほど着いている下半身。人間の手を左右に数え切れないほど生やした胴体。紫の体色、獣の口のような形になっている両腕が着いた上半身。顔は赤い一つ目が輝いているのみ。

グラニデでもここまで禍々しい姿をしたモンスターは見たことはない。ある意味、こいつは本当の意味で化け物と呼べる存在かもしれない。

しかもこの化け物に理性は無いらしい、オレの姿を一つ目で捉えた瞬間に異様な咆哮を上げて獣の口が着いたような腕（イメージ：GOD EATERのスサノオの腕）を突き出してきた。

「
」

「鳴き声と呼ぶのも怪しいものだな、これは。しかし、こいつは・・・」

オレの体を一飲み出来る腕が迫ってくる。しかしそう簡単には当たらない。その場からジャンプで迫ってきた腕を跳び越え、腕の上に刀を突き刺して着地。刀が刺さった部分から青色の血のような液体が噴き出す。

化け物は右腕に走る痛み悲鳴を上げ、オレの右側から左腕を突き出してくる。突き刺した刀を引き抜いてその場で上に大きくバツク転。オレを喰らおうとした腕は再び空を切る。

（弱すぎる、あの負の量から生まれたにしては）

化け物の左腕に着地しすぐに跳躍、赤い一つ目を狙って突きを放つ。その時、化け物に異変が起きた。

胴体に生えている無数の手が急激に伸び始め、オレの四肢と首を徹底的に拘束した。

無数の手から伝わる怪力によって全身が悲鳴を上げる。首にも同程度の力が加わり、呼吸がほぼ完全に遮断される。それにより景色が霞み脳内がかき乱され、体が酸欠で麻痺する。

「があ……あ……あ……く……そ……」

だが化け物の異変は終わらなかった。紫の体色が発光し、赤目に紫の光が収束し始め、化け物の背後に多数の光の点が出現する。

(おい……ちよつと待て……あの光つて……)

体に走る予感は見事に的中し、次の瞬間……。

身動きが出来ないオレの体に極大の雷撃と1000に並ぶ数の光の槍がすべて放たれ、今まで生きてきた中で感じたことの無い規模の爆音と熱と衝撃に包まれた。

第27話 モンスターと化け物（モンスター）（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

なのはたちはとりあえず退場です。戦いには介入してきません。それと時の庭園はまだ崩壊が始まっていません。

では、また次回。

第28話 決着(前書き)

更新遅くなってすみません!!

今回は少し長いです。

では、ごうき。

第28話 決着

Side Out

化け物は敵が爆煙に包まれたことを赤い一つ目に捉え、歡喜の咆哮を上げた。理性が存在せず本能のみで活動しているこの化け物のその身には破壊衝動しか宿していなかった。

その衝動に従った行動を終えた化け物は次なる標的を探そうとした。しかし、その身に残った本能が化け物に違和感を与えた。

晴れた爆煙の中、そこにあるはずの敵の死体が存在していなかった。

肉体の全てが完全に消滅したということはない。いくら理性が欠落しているとはいえこの化け物は自身の攻撃による破壊力ぐらいは理解している。そして、よく見てみると敵の右半身を拘束していた手がほとんど斬り落とされていた。

敵は何処かに逃げたのか？そう思い化け物は敵の気配を探る。

だが気配を感じられず、部屋中を見回してみても敵の姿は見つからない。

「げほっ……げほっ……がはっ!!」

突然。化け物の真下から聞こえた咳きと嘔吐の声。そして床に液体をばら撒いたような水音が響いた。

化け物の視線が下を向く。そして化け物が目にしたのは……そ

の場に片膝を着き、床に血の水溜りを作っている敵の姿だった。

Side シノン

痛みと出血で意識が朦朧とする。くそ、油断していた。

あれほどの負から生まれた存在なら体に変化したり肉体以外の攻撃をするのは当然だ。しかし、負から生まれた化け物がプレシアの使っていた魔法まで使うとは想定外だった。

化け物の魔法が放たれる寸前に感覚を感じてない右手で体を拘束していた手を斬り落とし、首と右半身をなんとか解放したおかげで直撃は免れた。

だが左半身は開放できなかったせいでも左脇腹と左胸にフォトンランサーの直撃を5発ほど受けた。しかも威力がプレシアより上だったので傷がかなりでかい。おかげで吐血まで出てきた。

すぐに化け物から離れるべきなんだろうが今は何より酸素がほしい。今も半分気絶しているような状態なので視界や聴覚がまったく回復していない。

そしてやっと耳が少し聞こえるようになる・・・。

「
」

響いたきたのは今もつとも聞きたくない音。おまけに、すぐ側から重い何かを持ち上がるような音まで聞こえてくる。

「くっ！！！！・・・おらぁぁ！！！」

本気でまずい。そう感じて見えない視界の中、後先など考えずに全力で後方に瞬動を使った。

え？行き先やブレーキ？知るか！！大小構わず怪我で済むんならトマトのような死体になるより遙かにマシだ！！

バアアアン！！！！

「がっ！！！！・・・あぁぁ・・・」

覚悟していた衝撃が背中に伝わり肺から空気が搾り出される。おかげで戻ってきた意識が一瞬で飛びそうになった。衝撃の後に視界が回復を始め、両目に景色が映りだす。

視線を化け物の方に向けると、恐らく先程オレが居た場所に蜘蛛のような脚を3本突き刺していた。どうやら咄嗟の瞬動は間違いではなかったらしい、あのままそこに居たらトマトどころかミンチと化していた。

そしてオレの状態だが、背中に走った衝撃で折れた骨は無し、体が浅く壁にめり込んだだけ。とりあえず体を抜き出して地面に着地、すぐに左半身の傷全てに右手込みのヒールを使う。

暖かい光が傷口を塞いでくれるがなくなった血は戻らない。傷自体もかなり深いものだったので下手をすれば塞いだ傷が再び開く。

けだるさが走る体で立ち上がり、右手のみで刀を持つ。左手が使えないのは良くて一回が限界だ。もちろんその一回で傷が開くと確定し

て。

対して化け物は理性が存在しないくせに自分から攻めに動かず、様子を見るようにこちらを赤い一つ目で見つめている。そして化け物が動き出すと同時に変化が起こる。

再び紫の体色が発光を始め、段々と輝きを強くしていく。そして一瞬の閃光と共に化け物の巨体がその場から消えた。

「は？」

オレ自身のものとは思えない素っ頓狂な声が出た。そして次の瞬間、化け物はオレの真上に出現した。大質量の肉体がオレの体を押し潰そうと迫る。

「な！？・・・くそっ！！」

咄嗟に瞬動で移動。30メートル程距離を取る。

（ふざけるなよ・・・射撃魔法が使えただけでも厄介だったのに、簡易型転移魔法まで使える？しかも発動までの時間は軽く見て2〜3秒、範囲は大体・・・50〜60メートル。部屋の中ほぼ全ては範囲内だ。逃げ切れない上に遠距離も抑えられてる・・・最悪だ）

心の中で悪態を吐きながら化け物に走り出す。止まっていれば化け物がすぐに転移でその場に現れるからだ。専攻を取られるならこっちから仕掛けたほうがいい。

だが化け物も簡単にオレを近付けるわけも無い。ありったけのフォ

トンランサーと紫電をオレに放ってくる。

両肩にアクセルフィンを急展開。低空飛行しながら左右に小刻みな空中ダツシュを繰り返す。回避が出来ないフォトンランサーもあつたが刀で全て斬り裂く。フォトンランサーはともかく紫電だけは当たるわけにはいかない。

回避しながら近付き、あと5メートルほどの所で化け物の真上に向かって急上昇。そこからすぐに真下に向かって急降下。そこから勢いを加えて刀を振り下ろす。

「魔皇刃!!!」

頭を両断しようとした斬撃は化け物が割り込ませた右腕に阻まれた。刀は右腕の三分の一程まで斬り裂いた所で止まった。化け物は斬撃を受けた右手を振り回してオレを振り落とそうとする。

「ぐつ!!!.....くそおお!!!」

空中を体が舞いながら振り落とされないように刀をしがみつこうに握りしめて耐える。

脳を盛大にシエイクされながら刀を化け物の腕から引き抜く。しかし引き抜いたのはいいが意識がグラグラの状態を狙われて化け物が左腕を振るってきた。

「烈破.....乱掌!!!」

掌底と爆発を打ち付けるが勢いを完全には殺しきれず後ろに吹き飛ばされた。アクセルフィンを羽ばたかせて後ろへの衝撃をなんとか

相殺しようとする。

(やばい……傷口開いた……)

左半身に感じる痛みと流れる液体の感触につい動きを止めてしまった。

その隙に化け物がフォトンランサーを数発準備してきた。ぐらつきを無理矢理に抑えこみオレも同時に術を発動する。

「バーンストライク!!!」

「
」
炎弾と光の槍が同時に放たれる。互いにすれ違い、炎弾は全て化け物に命中する。対してオレは詠唱を終えたと同時にアクセルフィンを飛ばたかせて移動したのでダメージは無い。爆煙が目くらましになっている隙に別の術を準備する。

「
」
しかし本能のみで活動している化け物は爆煙越しにオレの気配を見つけて口が付いた右腕を突き出してくる。刀を盾にして受け止めるが、地面に落とされ後ろに大きく後退する。

さらに化け物は動けないのを狙って紫電とフォトンランサーを放ってくる。オレは刀をずらして突き出された腕の下に潜り込む。そこから右足で90度真上に蹴りを放ち、化け物の腕を打ち上げる。

「フォースフィールド!!!」

魔法への対処も忘れず防御を行う。展開したシールドが全ての攻撃を受け止め無効化する。

（時間が無いな……勝ちに出るか……いや、勝つ！）

シールドが消える前に瞬動を発動。一気に化け物の足元に移動する。

化け物は気付いて鋭い蜘蛛の脚を突き出してくる。オレはそれが届く前に跳躍、化け物の顔と向かい合う高さまで跳んだ。

「
」

化け物は”かかった”と言うような咆哮を上げて背後にフォトンランサーを待機させ、腹部の無数の腕を伸ばしてくる。しかし、この行動が、本能のみで活動している化け物の限界だった。

「なめるなよ、化け物が」

そう言うと共にオレは”展開中だった”アクセルフィンを羽ばたかせて右に飛ぶ。急な動きに腕は付いて来れず、空中を彷徨う。飛んだ場所から即座に旋回して化け物の左側に移動。頭に刀を突き刺しそれを軸にして化け物の顔の左側、人間で言うこめかみの部分に全力の右膝蹴りを打つ。

化け物の全身が右に傾き、展開されていたフォトンランサーが消滅する。

右足を戻して今度は化け物の一つ目に左足で蹴りを叩き込む。蹴りを打ち込んだ部分が凹み、今度は化け物の体が後ろに傾く。突き刺

した刀を即座に抜き、化け物の足元に着地する。

「終わりにするぞ……」

刀を鞘に納め、居合いの構えを取る。強い思いを乗せて刀を抜き放つ。

「全てを断ち切れ！ 獣破・轟衝斬！！」

炎を纏った斬撃が化け物の脚を横一文字に6本ほど斬り裂く。足の支えを一瞬失って化け物は倒れかける。そこから刀を持ち直し、両手で刀を握って勢い良く斬り上げた。

「
」

化け物の悲痛な叫びが響く。化け物の傷口から噴水のように溢れる血の量が傷の深さを示している。

勝った。オレの斬撃は化け物の胴体から右半身を完全に両断した。さらに前面を支えている脚も斬り落としたので化け物はもうまとも動くことはできない。

しかし、化け物は諦めを知らないのか無様に体を引きずりながらオレに近付いてくる。

「……いいだろう。まだ続けるなら、完全に消し去ってやる」

そう言ってもオレ自身の体も無事とは言えない開いた傷口からの出血は今も止まっていない。次で本当に決めなければ時間が無い。

「行くぞ……誇りを抱いて永久に眠れ!……」

両手を左右に広げる。突然化け物の周りを膨大な冷気が襲う。化け物の体が凍り、突き出た無数の氷槍が体を貫く。

「……塵となれ!虚無へと消える!……」

続いて右手に握った刀を投げる。刀はブーメランのように空を舞い緑色の竜巻を作り出す。凍り付いていた化け物の体が今度はカマイタチで切り刻まれた。

この時点で化け物の体はもう原形を留めていなかった。だが化け物は止まらない。敵を、オレという存在を殺しに来る。自然の猛襲を受けながら近付いた化け物がまだ無事な左腕をオレに叩きつけようとする。しかし、それはオレに届かなかった……。

「……エターナルセレナーデ」

……背を向けると同時に鳴らした指の音で降ってきた巨大な火球によって。

爆発。

オレの後ろで化け物が終焉の業火に焼き尽くされる。もはや悲鳴を上げること許さないその熱量は化け物を確実に消滅させていく。

右手を虚空に振るう。戻ってきた刀をキャッチ、ゆっくりと鞘に戻す。

刃を完全に鞘に納め、カチン、という音と共に一段強力な爆発が起
こる。

煙が晴れて、そこにいたのは腹部に大きな穴が空き血溜りを作っ
て床に倒れているプレシア・テストアロッサだった。

第28話 決着（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

グレイセスの秘奥義の連射です。台詞が少し違うのはちょっとしたオリジナルです。マリクのエターナルセレナーデは投刃ではなく刀をそのまま投げて無理矢理使いました。

無印編もあと少しで終わりです。

では、また次回。

第29話 後始末（無理矢理やらされた）

Side シノン

プレシアの鳩尾部分に空いた穴から流れる血の量は決して多くはなかったが助かる見込みはとも見えない。

しかしプレシアは自分に迫る死などにまったく興味を示さず薄く開いた両目で周囲に拡散している負を見つめている。

左胸の傷を手で押さえながらプレシアに近付く。何故刀を抜いていないのかは自分でもわからない。油断か、余裕か、または殺す必要が無いと思ったのか。

「……私は、こんなものにまで縊っていたのね」

近付いてくるオレに気付いたのかプレシアが呟く。プレシアの顔は重りを外したような、なにかが吹っ切れたような顔をしていた。

「あなたは今までも……私のような人間を見てきたの？」

「ああ、”死人を生き返らせる”などと負に頼ったのはお前くらいだったかな」

”負”によって自分を見失ったのはプレシアだけではない、ゲーデ、ナデイの人間、セシル、アニス、ファラ、さらには精霊のセルシウスまでもその一人である。

しかしそのほとんどは自分自身の心の傷を負に刺激されたからだ。

しかもセルシウスなどは完全にただの被害者だ。決してプレシアのように自身から負を望んだ者など一人もいない。

オレに言わせればプレシアの結末は自業自得、その過程はどうだろうとプレシアは間違っていた。

誰かが思ったのではない、”世界”という一つの意味が間違いだと言判断したのだ。

オレ自身が世界そのものに生み出された存在なので、世界が下す時に冷酷で時に温厚な判断は本能の部分でよく理解している。

（そう言えばあの爺さんも言ってたな、世界が世の流れを操作して生み出す存在がいるって。確か、抑止力だったか？・・・ここまで来ても見えない存在に使われる、か。胸糞悪い）

「オレの見てきた人間は皆負に負けなかった。お前は娘への愛より心が弱すぎたんだ」

「・・・そう・・・なのでしょうね。でも・・・気付くのが遅すぎた」

プレシアの閉じた瞳から一筋の涙が流れる。その時のプレシアの顔は叶わぬ願いを求める狂者の顔ではなく一人の母としての顔だった。

「一つ聞かせて頂戴。なぜあの化け物と戦ったの？戦わずに逃げることもあなたには容易だった筈」

「別に、個人的な事情で負に恨みがある、というのが一番しっくり来る理由だがな。取り込まれていた間、負の中はどんな感じだった

「？」

「そうね……虚しい、いえ、寂しかったと言っのがしっくり来るわね」

「正解。あれはそういう感じが一番近い。そして、あそこよりせめてまともな場所で死なせたほうがいい、そうも思ったただけだ」

オレも一度ミスをして負に飲み込まれたことがあった。あの中は本当に居たくないと思える場所だった。あの空間の嫌悪感を知っているから戦ったということもある。

だが理由はそれだけでもない。あの化け物は転移魔法まで使えるほどの能力を持っていた。時の庭園を脱出して他の世界に行く可能性も否定できない。それも戦う理由の一つだったのだろう。

「そう……でもありがとう。おかげで最後は、人として死ねるわ……早く逃げなさい、此処はもう少しで崩壊を始めるわ」

そう言われてみると両足から僅かな振動が伝わってくる。止まることなく続いているのですでに崩壊が始まっているのだろう……待てよ？確かこの下は虚数空間、つまり脱出が不可能な所だ。

つまりこのまま崩壊が進めば虚数空間に落ちる、ということ。

「さっさと逃げたほうが良さそうだ。……フェイトに何か伝えることはあるか？」

自分でもらしくないことを聞いていると思う。先程まで冷徹に殺そうとしていた人物の遺言を聞いてやるなど。

「……………自由に生きて、そう伝えてくれるかしら？」

「……………わかった、伝えよう。行こう、ヴェルフグリント」

『はい、指定した場所に行って頂ければ私の転移魔法で脱出できます。少し遠いですがまずはそこに……………!!』

突然黙りだしたヴェルフグリントと同時にオレも異質な魔力の気配を感じた。今居る部屋の中の中央近くの穴、そこから感じる複数の禍々しい魔力。その魔力の気配は初めて感じたものではない。そう、この深い穢れを纏ったような魔力は……………。

「……………ジュエルシード」

穴の中からゆっくりと浮遊してきたのは蒼い輝きを放つ9個のジュエルシード。感じた魔力の正体はこいつ以外には考えられない。

『どうやらなのはさんとフェイトさんが集めたジュエルシードの全体的ようです。しかもこの様子は……………暴走が始まっています。このままでは5分ほどで時の庭園は消し飛びます』

「冗談じゃねえぞ……………」

冷や汗が全身から溢れ出し苦笑がこぼれる。

5分でこの庭園から脱出する、どう考えても不可能だろう。

ならどうする？オレの前には現在進行形で暴走中の9個のジュエルシード。

以前暴走したジュエルシードは”なのはとフェイトの二人を守る”
というハンデを背負っているとはいえただの衝撃波でオレに軽くな
い傷を負わせた。

しかも完全な暴走を迎えたジュエルシードは単体で次元震を引き起
こすほどのもの。次元震の規模は知らないがこの時の庭園が消える
だけでは恐らく済まないだろう。下手をすれば周辺の多数の世界を
飲み込むかもしれない。

そんな存在が今日の前に9個もあり、その力を受ける最初の被害者
はオレときている。

黙って殺されるつもりは毛頭無い。しかしどうする？。

前回はジュエルシードを力尽くで黙らせてなんとかだったが今回は
あの9倍。しかもオレの体は満身創痍、どうやっても力尽くで沈め
ることはできない。

せめて出血量がもう少し少く、左手が使えればなんとかあったかも
しれないが。

ならあの9個全てをオレの体に取り込むか？却下、論外だ。一つ体
に取り込んだだけであれほどの苦しみがやってきたのだ。9個なん
て考えただけで死ぬる。それに、体が耐え切れず崩壊するだろう。

絶対絶命とはまさに今の状況を言うのだから？血に染まりきった過
去を乗り越えて手にした力も、化け物と呼べる位に異様なこの体も
役に立たない。

・・・何が頭に引つ掛かった。なんだ？なにが引つ掛かった？
過去・・・力・・・異様な体・・・体？・・・。自然と自身の右手、
続いて地に倒れているプレシアに目が向いた。

オレの右手には浄化された真紅のジュエルシールドが融合している。
プレシアの言っていたことが本当ならこいつの発揮する総合的スペ
ックは通常のジュエルシールドの数倍。頭の中でパズルのピースが繋
がっていく。

設計図は浮かんだ、次は専門家の意見だ。痛む体に鞭打ってプレシ
アに近付く。

「プレシア、教えてくれ。ジュエルシールドの力は魔力をぶつけて相
殺できるものなのか？」

「・・・出来ると思うわ。ジュエルシールドの力も所詮は魔力の
暴風。同格かそれ以上の魔力をぶつければ暴走は無力化できる。で
もそんなことを聞いて・・・まさか・・・」

『マスター？』

「ヴェルフグリント、合図と同時にオレの保有する魔力を全て右手
に収束できるか？」

『は？なぜそんな・・・マスター、もしかして・・・』

「・・・コレを使って暴走を力尽くで鎮める」

オレは右手で握り拳を作り、余裕を思わせるように空中で浮遊して

いるジュエルシートを睨み付けた。

S
i
d
e

O
u
t

第29話 後始末（無理矢理やらされた）（後書き）

なかなか終わらないジュエルシード騒動です。

次回の更新もかなり遅くなるかもしれせん。

では、また次回。

第30話 始まりの場所（前書き）

零戦様から初めての感想をいただきました。本当にありがとうございます。
います！！ご期待に応えられるように頑張っていきたいと思えます。

今回は少し長いです。そのせいか後半が少しグダグダです。

第30話 始まりの場所

Side Out

崩壊がゆっくりだが確実に進んでいる時の庭園の玉座の間。

浮遊しているジュエルシードと対峙するように血に濡れた体でその場に立つシノン。

その目に迷いの気配は一切存在しない。ただ自分へ襲い来る脅威を打ち砕く、そんな決意を思わせる目だ。

シノンが今からやろうとしていることは実に簡単。真紅のジュエルシードと自身が発揮できる全ての魔力をジュエルシードにぶつけて暴走を相殺する。

聞くだけなら単純明快で済むのだが、現実でそれを行うには幾つかの問題が待ち構えている。

まず一つ、相殺を行うために必要なジュエルシードと同等の膨大な魔力量。

プレシアの言うとおりなら真紅のジュエルシードの発揮できる魔力量は蒼いジュエルシードの数倍。だが幾らなんでも9個分の魔力量と並べるとは思えない。

そしてその足りない分の魔力はシノン自身の魔力で補うことになる。

だがそれでも足りるかどうかはわからない。ジュエルシード一個分

の魔力量もわかりきっていないのだからこれは仕方ないと言えは仕方ない。

ならもし足りなかった場合はどうするか？魔力以外の物理エネルギーをぶつけるしかない。そしてシノンの使える魔力以外の物理エネルギー、それは闘気、詳しくはそれを使って発揮される強力な術技だ。

真紅のジュエルシードと自身の全魔力、現在の体調で放てる最大の術技。この二つがシノンが切れる全ての手札だ。これで通用しなければシノンは一瞬でこの世から消滅する。

そして二つ、相殺の前の衝突中にシノンの体が地上から飛ばされないようにする安定した足場の確保。

力を全方位に放ってくるジュエルシードとは違ってシノンは力を受け止める側だ。

そうなれば当然、風や衝撃波で体が吹き飛ばされそうになってしまう。だがシノンは血を流しすぎて脚にうまく力が入らない。言ってみれば踏ん張る力が出ないのだ。

おまけに時の庭園は崩壊を始めているので自分が立つ場所も衝突時の衝撃で崩れ落ちるかもしれない。

だが、シノンにはその問題を解決する頼りがある。ここに辿り着くまでの道で直感的に使った力、アレがシノンの想像通りの力で、かつ自分の意思で発動することが出来れば、この問題は解決できる。

そして三つ、これで最後だ。シノンの意識と体が暴走を相殺する

までの間、気絶せずに機能してくれるかどうか。

何度も言うがシノンの体はボロボロ、作戦を立てている今でさえ意識に霞が掛かり始めている状態だ。だがこの問題を解決するのは他ならぬシノン自身。

だが裏を返せばシノンが意地でも意識を鮮明に繋ぎとめることができればこの問題は解決するということだ。

三つ、この三つ全てをクリアすればシノンは生き残ることが出来る。

「……………始めるぞ」

『はい』

右手の手首を左手で掴んでシノンは目を閉じる。そして感覚の無い右手に意識を集中する。

一見矛盾した行為の果てにある力を求めて。

（集中しろ……………アースラでやったときと同じだ……………体の奥底に眠るものを引き上げるような感覚を思い出せ……………そしてあの時よりも強く、深く求めろ！）

シノンの意識に答えるように右手が微かに蒼い光を放ち始める。そのまま光は大きさを増していく。

「……………ハアアアアアア！！！！」

シノンの咆哮が響く。その瞬間、蒼い光は発光から一瞬の閃光へと

変貌した。

室内を一瞬で満たす蒼閃は蒼いジュエルシードのような禍々しさが宿ったものではない。深い闇を照らし、人を包むような光だ。

溢れる光が収束を始め、全ての光がシノンの右手に収束する。シノンを中心に蒼い光が螺旋を描き、数秒で右手が全ての光を吸収した。
ドオオン！！

無色の小規模衝撃波がシノンを中心に爆ぜた。シノンの足場が円形に抉れ、周りにばら撒かれていた岩の破片が宙を舞う。

衝撃波が収まり、余波で起こった風が後ろから見ていたプレシアの目にシノンをはっきり映した。

右手の内側から芽生えたような輝く真紅のジュエルシード。僅かに浮遊感を纏い、微かに蒼色が混じった銀髪。全身を膜のように包む螢火の光。そしてプレシアやシノンにも見えないが蒼色の濃さが増したサファイアのような瞳。

真紅のジュエルシードによって変化を纏ったシノンは調子を確認めるように右手で握り開きを繰り返してみる。

体内に巡る膨大で暖かな魔力は意識の底から感じる事が出来る。おまけに流れてきた魔力の副産物として肉体の中を膨大な活力が巡ってきた。もちろん万全と言えるほどでは無いが血が足りない体にコレはありがたい。

「どつだ？」

『計測するのが馬鹿らしい程の魔力量です。確かにこれなら成功するかもしれませんが。合図を頂ければ魔力のほうはお任せください』

「わかった。……次は足場か」

力のぶつけどころを求めて疼く魔力を一時的に抑え、シノンは目を閉じて頭の中のどこかにあるスイッチを探す。いや、正確にスイッチの形をしているわけではない。

力そのものの意識、眠っている自分の一面、その事象を起こすきっかけ、どれもはっきりしないものばかり。しかし無意識の元で使った力の感覚というのは消えそうなほどに曖昧なものだ。

そしてシノンは今回それを自分の意識の元で使う。霞を掴むようなその行為は確かに無謀と言えるものだ。しかし出来なければシノンは死ぬ。

無謀な行為をやるしかない。しかし無茶無謀な状況はシノンにとっては決して苦にはならなかった。むしろ走る緊張感がシノンの思考を研ぎ澄ませていく

(……こうか)

シノンは意識の水底で掴んだ感覚に従い意識を集中させる。すると頭の中に無数の情報が流れ始め、脳がその情報を処理していく。

(周囲半径2メートル内の重力を増加、無事な足場を崩壊の影響に耐えられるように固定、範囲内にとプレシアの周りに侵入してくる風圧は全てカット。合図と同時に以下の事象を実行)

力を発動させたことの喜びを後にし、シノンは額を殴って意識を万全にする。

『準備は万端ですね』

「ああ、ちょうど向こうも準備が出来たらしい。…………行くぞ！」

『はい、マスター！』

ジュエルシールドが強烈な発光を放ったと同時にシノンは後方に大きくバツク転ずる。壁に足を着き、そこから全力の瞬動で壁を蹴る。蹴った壁の部分に大きな穴が開くと同時にシノンの体は大きな加速力を得て流星の如く疾走する。

「風を纏いて、我が障害を貫く！！……………」

ジュエルシールドが衝撃波を放つ。

「ぶちぬけええー！！シャドウ・モーメント！！！」

シノンは加速をつけて地面に足を着ける。右手を後ろに大きく振りかぶる。右手にはクリティカルブレードとは比べ物にならないほどの闘気が渦巻く。

そして衝撃波と振りぬかれた右拳が、衝突した。

一瞬、全ての音が聞こえなくなった。だが所詮は一瞬、すぐ後に強烈な反響音が響き、感覚の無い右手を通過して全身に確かな手応え

が伝わってくる。

衝突したのはジュエルシードから約5メートルほど離れた場所。手応えを感じると同時に暴風が巻き起こり、地に着いていた足が一瞬で宙に舞いそうになる。

だが突然シノンの全身を不可視の力が無理矢理押さえつけてその場に固定した。さらに不可視の力はシノンを中心に半径2メートルに吹き荒れていた暴風を全てシャットアウトする。

障害が全て無くなりシノンの体を包んでいた蒼い光が全て右手に収束していく。

（今だ！やれ、ヴェルフグリント！）

念話を送ったその瞬間に体内から何かをこっそり持っていられる感覚が走った。一瞬視界がぐらついたが歯を食いしばって耐え抜く。

シノンという障害物に激突した衝撃波はシノンの目前で無色から段々と形を取っていく。気が付けば白一色の球体が出来上がっている。それに比べて非常に小さなシノンは衝撃波の一点に穴を開けるように力を込めた右手で全力で抗っている。

『あのおお！！マスター！！』

「なんだああ！！」

『どうやら魔力量はこちらが明らかに負けています！！』

「みたいだなああ！！」

シノンとそのデバイスは大声を張り上げて会話を繰り返す。決してやけくそになっているわけではない。念話を使う魔力量でさえ今は惜しい、だからこうして反響音に負けないぐらいに大声で叫ばなければいけないのだ。

そして自身の右手が少しずつ後方に押されていることはシノンも無論承知だ。はつきり言って負けているのだ。

『ですが予想外のことが起こっています！！ジュエルシードの反応が段々と弱くなりはじめています！！』

「弱くなってる！！？消滅し始めてるってことか！！」

『はい！！詳しい説明は後にして！！今は耐えてください！！！！』

「我慢比べか！！上等だ！！逆に押し返してやるよ！！」

シノンたちは知らないが、9個のジュエルシードは一斉に衝撃波を放ち融合させ、一つの攻撃として扱った。しかし融合させたせいで衝撃破の破壊力がジュエルシードごと飲み込むほどになってしまった。そのせいで今9個のジュエルシードは一つ、また一つと砕け始めているのだ。

それら全てが砕けるまで耐え切れればシノンの勝ち、途中で衝撃波に飲み込まれればシノンの負け、そういうことだ。

そしてそのシノンに余裕は……無かった。

「がああああアアア！！！！」

もはや獣のような叫びを上げて必死に右手を前に突き出している。まっすぐ伸ばすように突き出した右腕は今では肘が完全に曲がるほどに下がっている。右手以外の部分の怪我もかなり酷い、左半身の出血は元々、衝撃波に当てられて右半身の肋骨は全て折れ、踏ん張っている足も先程から嫌な音を立て続けている。だが手の甲にある輝きを失わないジュエルシールドはまさしくシノンの不屈の心の具現だ。

さらに意識は不安定も良い所、一分内に一回は一瞬意識が飛んでいる。叫んでいるのは気合の意味もあるが、意識を保つほうの意味が強いかもしれない。

しかしシノンの方が不利なのかと言えば実はそうでもない。シノンからは見えず、ヴェルフグリントでもわからないがジュエルシールドはすでに半分以上が砕け散っている。その数3つ。互角とも言えずどちらが有利なのかも断言できないこの状況。シノンとジュエルシールドの我慢比べに優勢を運ぶ事と言えば”人と物体”ただそれだけしかない。

だがその一つは、シノンにとって決定打も同然のことだった。

(我慢比べ？悪いが限界を知ってる”物”に負けるほど弱い心じゃねえんだよ！！)

……ジュエルシールドがまた一つ砕ける。シノンの右腕がほんの少し前に進む。

シノンはもう叫びを上げていない。ただ黙って白い球体の中心を睨んでいる。

……シノンが足を前に進める。僅かに、だが力強く、少しずつ。残ったジュエルシードの二つの内一つに罅が入り始めた。ジュエルシードとの距離が縮む、あと3メートル。

右手の中指がボキッ！と音を立てて砕ける。だが感覚の無い腕なので痛みは無い。

……二つ目のジュエルシードの全体に罅が走る。シノンの右手が再びまっすぐに伸びる。あと二メートル。

左足の膝が嫌な音を立てて折れる。シノンは左足を一瞥して再び歩き出す。折れた左足は引きずるように前に進める。

……そしてついに二つ目が完全に砕け、シノンはジュエルシードの目の前に辿り着いた。

右手は突き出されたままだが9個全てと衝突した時に比べてみればほとんど力が入っていない。

残ったジュエルシードに刻まれたシリアルは21、なのはが最初に封印したジュエルシードだ。それを思い出しシノンは薄く笑う。

（そういえば、こいつを始めに非日常に足を突っ込んだな、オレは）握りしめた右手を開く。開いた右手はジュエルシードを握り締めるようにジュエルシードを包む。中指の骨が砕けているのでしっかりと力を込められないが問題ない。

「……でも、これで終わりだ。消えろ」

そのままシノンは力を振り絞って最後のジュエルシールドを握り潰した。

砕け散る宝石は地面に静かに零れていく。発動源を失った衝撃波はその場で破裂した風船のように無害の暴風になって霧散した。

ジュエルシールドを破壊して一瞬気が緩んだシノンはその風をもろに受けてしまう。後方に大きく飛ばされ、ちょうど地面に倒れているプレシアの側に仰向けに寝るような体制で地面に落ちた。

S i d e シノン

痛い。床に背中を強く打ち付けて心の中で痛みを訴える。

まあー痛いのは背中どころかほぼ全身なのであまり気にならない。怪我の酷さはもう考えるのも嫌になってきた。

それより体はまだ動いてくれるだろうか？今すぐに時の庭園から脱出しなければならぬのだ。

体を起き上がらせようと力を込めてみる。だがオレの体は激しく痙攣するだけで一向に動いてくれない。右手はどうか動くようだが力が入らないので這いつくばって逃げることもできない。魔力はエンプティー状態なので飛行魔法も使えない。

「本気でまずいな……どうしたものか……っ!？」

必死に頭を巡らせていると、側の地面に大きな亀裂が走りそこから先の地面が崩壊を始めた。崩壊はプレシアも飲み込み虚数空間に落

ちていく。

「くっ！！」

右手を必死に伸ばして落ちていくプレシアの右手を掴む。プレシアの体はなんとか空中に留まったがこのままではまずい。

「……………放しなさい、シノン。このままでは二人とも落ちてしまっ
まっ」

「ぐっ！……があ……………」

プレシアの言うとおりこのままでは二人とも虚数空間に落ちるだけだろう。オレは右手以外の体を使えないし、右手も中指が使えないので人間一人を持ち上げることはできない。

『マスター！危ない！』

ヴェルフグリントの声を聞いて視線を動かすと、追い討ちをかけるようにオレの近くの地面にまで亀裂が走ってきた。

(やばいー！)

心の中で叫んだときには既に遅かった。オレの足元の地面は一瞬真上に爆発したように打ち上げられそのまま虚数空間に落ちていった。

(……………ちくしょう！こんなところで……………っ！)

無駄だと知りながらなお右手を伸ばすオレは愚かだろうか？まだ生きたいと願うのは傲慢だろうか？

オレは最後に遠ざかる地面を視界に移して、半場強制的に意識を失った。

……次の瞬間、プレシア・テストロッサの要塞、時の庭園は完全に崩壊した。

第30話 始まりの場所（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

まだ公式でまともに登場していない秘奥義を使ってしまったorz
STS編でスカさんが持っていたジュエルシードはシノンに全て破
壊してもらいました。

一応残っているジュエルシードはシノンの右手にあるジュエルシ
ードだけという設定でいこうと思います。

もしかしたらオリジナル設定でほかのジュエルシードを出現させる
かもしれませんがまだわかりません。

予定ではあと3、4話ほどで無印編を終えたいと思います。

では、また次回。

第31話 懐かしき思い出と忘れられた都（前書き）

PVが20万を突破しました。

皆さん本当にありがとうございます…！

では、ごきげん。

第31話 懐かしき思い出と忘れられた都

Side Out

グランマニエ皇国の港町を7、8歳ぐらいの少年がフードを被り大きな皮袋を右手で担いながら歩いてきた。フードを被って街中を歩く人間はこの世界では別段珍しくない。

その人物は、飢え切った戦災孤児、危険な環境地帯を越えてきたあるいは越えようとする人間、そして各所を巡り歩いている賞金稼ぎか傭兵、このいずれかだ。

その中で少年は二つと三つ目に該当する。少年は先程アメル洞窟と呼ばれるモンスターの出る洞窟に行つて来た。目的はその洞窟に生息していた凶暴な狼状のモンスターの殲滅。通り過ぎていく人間には見えないが少年が背中に背負っている鞘の中の刀には今でも大量のモンスターの血が付着している。

「なあー聞いたか？あの宗教団体の噂・・・」

「ああ、確か世界樹を信仰する宗教らしいな・・・」

通行人の会話に一瞬歩みを止める。しかし少年は再び歩き出して一軒の建物の中に入っていった。建物の看板にはただクエストと書いているだけ。建物の中にはグランマニエの軍人と、身に武器を携帯している傭兵のどちらかしかない。

傭兵さえいなければただの軍事事務所にしか見えないが、この場所は色んな所から寄せられてくる依頼を管理する事務所だ。基本的に

はここで依頼を受けて報酬を受け取る。

少年は建物に入ってもフードを取らず、空いている受付に向かつて歩き出す。あまりにも場違いな少年の存在に他の傭兵が目を向けるが少年は気にせず受付の前に立つ。受付を勤めていた女性軍人も自分の受付に現れた少年に驚いた。

「あ、あの……」

女性はどうしたらいいのかわからずうつろたえていた。仕方の無いことかも知れないが少年は少なからず苛立ちを覚えながら皮袋を置き、受付に一枚の書類を置いた。

「え？これって確か誰も受けなかった依頼の承諾書類！？……坊やが受けたの？」

「……」

女性の問いかけに少年は答えなかった。女性はそれで聞くことを諦めて咳払いをして書類を確認する。

「で、では依頼の達成の証拠を見せてください」

女性の要求を聞いて少年は肩に担いでいた皮袋を受付に置いた。モニターの討伐依頼ではなんでもいいから納得する成功の証拠を見せなければいけない。

置いた皮袋を他の軍人が持っていき離れた机の上で縄を解く。

「最後に、依頼を受けた本人かどうかの確認として素顔を見せてく

ださい」

そう言われて少年は少し間を置いて、フードに手をかけて素顔を晒した。

「ひっ！！」

少年の顔は血塗れだった。顔の右半分は真っ赤に染まりきり、血が無ければ美しく見えるであろう銀髪も所々が血を吸っている。

少年はこの体たらくを見せないほうがいいと思いいフードを脱がなかった。しかも、フードの中に隠れている少年の全身は返り血と出血に染まりきり、左手はだらりと垂れ下がっている。

受付の女性は悲鳴を上げ、椅子を倒して盛大に尻餅をついた。傭兵たちも気味悪がるような視線を少年に向ける。そんな反応をされても少年の瞳はまったく動じない。それは慣れか、それとも興味がないのかはわからない。

「うわああ！！・・・うっ！！・・・おえっ！！」

女性とは別の、男性の悲鳴が響いた。全員の視線がそちらを見ると、少年の皮袋を受け取った男性軍人が床に嘔吐していた。

袋が横を向いて中身が水音と共に撒き散らされる。皮袋の中に入っていたのは親玉だったモンスターの死骸。いや、肉塊だった。斬り落とされた2本の足、腹部と背中に無数の裂傷が刻まれた胴体、片目が抉られ脳の部分が少し見える頭部。

いったいどれだけの抵抗を受ければここまで醜いモンスターの死骸

ができるのだろうか。傭兵の誰一人として想像しようとは思えなかった。

尻餅をついた女性の視線もモンスター肉塊に向きそうになる。しかしその瞬間に少年が動いた。受付を軽く跳び越えて女性の目を右手で隠した。

「見ないほうがいい、傷になる」

初めて少年が口を開いた。言葉は少ないがそこには確かな優しさが籠められていた。女性は少年の言葉を素直に聞き、ゆっくり頷いた。少年は女性を助け起こして受付まで連れて行く。

女性は落ち着いたのか小さな皮袋を少年に差し出した。じゃらじゃらという音がしているので依頼の報酬だろう。少年は無言で報酬をフードの中に納め、身を翻して建物を出て行った。

「おい、待てよ坊主」

建物を出て狭い裏路地に入ったところで少年は男の二人組みに話しかけられた。一人は細い体つきをしていて長身、腰に小さなシミタ―を差している。もう一人は筋肉質で体格のいい大男だ。こっちは背中に大きなアックスを背負っている。よく見るとさっきの建物のなかにいた傭兵だ。

「……………」

少年は顔だけを二人組みに向けて視線で”何の用だ”と語りかける。長身の男は少年の前に回り込んで視線を少年に合わせる。大男は少年の少し後ろの位置に移動した。

自然とやっているつもりなのだろうが、挟み撃ちにしているのは少年にバレバレである。

「あの依頼をお前みたいなガキが達成するなんてな、かなり驚いたもんだ。……だがなあー実はあの依頼はオレたちが受けるはずだったんだよ……だからさあ〜ガキのお前にはもつたないその金、俺らがもらってやるよ」

そう言うと二人の男は自分の武器を抜いて少年に突きつける。しかし少年はまったく動揺せず、ただ鼻先に突きつけられたシミターの刃を見ている。

少年の反応が気に入らなかったのか長身の男は小さく舌打ちする。対する少年はこういう輩に絡まれたことは初めてではないので二人の男がどういう行動に出るかを静かに待ち構える。

まったく行動を示さない少年に我慢の限界が来たのか大男が手に持っているアックスを振り上げる。長身の男はにやりとわらって少年から少し離れる。それを確認して大男はアックスを少年の小さな体に振り落とした。

本来なら少年はアックスに切り裂かれて絶命していただろう。しかし、二人の男は気付くべきだった。自分達を含めた全ての傭兵が恐れて受けなかった依頼を達成したのが目の前の少年だと。

「え？」

その声の主はアックスを振り下ろした大男。大男の手に握られていたはずのアックスは地面を転がっている。そして大男が感じた一番の違和感、生まれたその時から感じていた肘から先の感覚が無いのだ。

そしてその肘から先は、アックスと一緒に地面を転がっていた。

「ぎ、ぎゃあああああつあああつああああああ！！！！」

腕を斬りおとされた。思考がその事実を受け止め、大男はその場に膝を着いて精一杯叫んだ。しかしここは裏路地、賑やかな街の市民の耳にその悲鳴が届くことは無い。

大男とは違って長身の男は一切傷を負っていない。しかし無傷でいられたのは少年の単なる気まぐれ。そしてその気まぐれはもう無い。少年の右手に握られているいつ抜いたのかもわからない刀が男の身を両断するのはそれほど簡単なのだ。

少年の顔はまったくの無表情。来るなら斬る、引くなら追わない。それが少年の正直な心境だ。

長身の男は自分の命を守ることにしたのか大男を置いて無様に逃げていく。少年はそれを確認して刀を背中の鞘に納めようとする。しかし、後方からもう馴染んできた殺気を感じて刀を後方に一閃。

カン！カン！

刀越しに伝わった金属の手応えと体の各部に走る痛みを感じると同時に少年は動き出す。犯人の姿を確認するより回避を真っ先に行う

のは少年の生きることへの関心を強く表している。

軽い跳躍の後に右の壁を蹴る。蹴った勢いを殺さずに次は左、右、左と壁蹴りを続ける。地面から5メートルほど上がった高さの地点で壁に刀を突き刺して空中に留まった。

下を見下ろしてみると大男と長身の男の全身に無数の矢が刺さっていた。先程少年が感じたのも矢が掠った痛みなのだろう。少年の叩き落とした矢は体に直撃するものだけだ。

男達の死には少年はまったく関心が湧かない。少年は無表情のまま刀を抜いて地面に着地する。

矢の発射元を見てみると着た道と進行方向の道を20人ずつの人間が固まって壁を作っていた。その人間は全員長いフードを被り、素顔を隠している。

ナデイ。街の通行人が言っていた世界樹を信仰する宗教団体だ。だがその実態は宗教団体という名を飾ったテロリストだ。

ナデイは確かに世界樹を信仰している。その信仰の強さは絶対的なものだ。

そしてどんな物事にも必ず限度が存在する。だがナデイはその限度を完全に逸脱している。

限度を越えるトリガーになったのはマナが減少の傾向に向かっていくという各国が判明した事実だ。それからナデイは世界樹のマナをこれ以上減少させないために武力と言う名の方法を得て行動を起こした。

最初の行動は世界各国にマナを使用しないレベルまで文明を退化させる、という文を送ったこと。もちろん各国はそんな要求を一蹴した。惑星エネルギーを守るために文明を退化させるなど、この上ないほどの愚行だ。

だがこの時のナディはすでに手段を選ばないただのテロリストと遜色なかった。

各所の村への襲撃、軍船や輸入船を手当たり次第に撃沈させる、これら全てを世界樹への信仰という一つの希望の元に行ったのだ。

話の腰が折れたが、そんなテロリスト集団が何故こんな所に来ているのか。簡単だ。この場にもう生きているのは少年ただ一人。つまり用のある人間は少年しかいないのだ。

少年もこの連中に襲われるのはこれが初めてではない。少年が最初にナディに襲われたのは2年前、そこから少年は何度もこの連中に襲われている。

少年も最初はイカれているテロリストに襲われる理由に心当たりが無かったので襲われる理由を聞いたことがあった。だが……。

「……見よ、落とし子。お前が生きる為に抵抗したせいで今また尊い命が二つ消えた。お前はいつたいどれほどの生贄を喰らってその身を世界に捧げるのだ……」

聞いてみた結果がこれである。少年を”落とし子”と呼び、わけのわからない言葉を並べて少年が抵抗すればするほど少年に罪を押し付ける。しかもこんな台詞を錯乱せずに言えるのだから頭が痛くな

る。

「今日こそは……今日こそはお前の血肉をこの世に捧げ、そして世界は永遠の輝きを取り戻すのだ……」

リーダー格の男の言葉と共にナデイの全員が腰の剣を抜き、前方と後方の両方から少年を押し潰すような勢いで迫る。

少年は疲れた顔で軽く溜め息を一回吐く。もう慣れた、と言ってしまえば片付くのもかもしれないが毎度命を狙われているのだ。せめて一瞬だけ弱音を吐くことぐらい許されるものだろう。そう、一瞬だ。少年が顔を上げる。その顔はもう目の前の敵を殺すことにしか関心を置かない目だった。

そして少年、幼きシノン・ガラードは長いフードをなびかせて刀を振るっていく。その手を血に染めながら。

S i d e シノン

夢を見ていた気がする。とても懐かしく、そして苦しかった日々の一日の夢を。

何故突然にこれを見たのかはわからない。遅れてやってきた走馬灯の一部だろうか？

自分が気絶する前の状況は良く覚えている。覚えているからこそあの夢を走馬灯とも思ってしまう。

だがもし、あれが走馬灯ではなく本当にただの夢だとしたら、オレ

は生きているということになる。

自分でも見苦しいと思える理屈を浮かべながら瞳を開けてみる。そして視界に広がってきたのは・・・深い青色が混ざった暗い天上だった。

「は？」

わけがわからなかった。てつきり時の庭園で見たあの気色悪い虚数空間が広がっていると思っていた。しかも落ち着いて見てみると、どうやらオレは天井を青いガラス越しに見ているようだ。恐らくだが生体ポッドの中にいるのだろう。

「助かった・・・のか？」

「ちゃんと助かったんですよ。マスター」

聞こえてきたのは最後まで身に着けていた相棒の声、なぜかポッド越しにカードの状態で空中に浮遊している。ヴェルフグリントってあんな機能持ってたのか？

「ヴェルフグリント、ここは・・・何かの研究プラントか？治療してもらってるってことは悪い人間の所ってことは無いんだろぅが・・・」

『あーここですか？ここはアルハザードの治療プラントですよ』

「・・・One more please?」

『なぜ疑問系なんですか・・・いいですか・・・ここは、』

忘れられた都アルハザードにある治療プラントです』

どうやら聞き間違いではないらしい。アルハザード、確かにヴェルフグリントはそう言った。

「けど………なんで………」

『そういえばご説明していませんでしたね。アルハザードに行く方法は知ってれば実はとても簡単なものなんです。虚数空間の中でアルハザードの空間座標を入力する。簡単でしょう？と言っても虚数空間内ではこの座標は使えませんが』

「プレシアの求めていたものはいつの間にかすぐ近くにあったんだな」

『はい。でもプレシアは私をただの年代物のデバイスと見たみたいで、詳しくは調べませんでした。まったく愚かなものです。どうやらあの人は科学者としても二流らしいですね』

ヴェルフグリントの皮肉にはオレも強く同意する。大したこと無いと判断した物が実は目的に辿り着く鍵だったのだから。

というかそのプレシアはどうなったんだ？ヴェルフグリントにどうなったのか聞いてみた。

『プレシアですか？私達の転移に巻き込まれたのか一緒にいましたよ。でも、転移終了時にはもう死んでいました。マスターを運んだ後に墓を作っておきました』

死んだか、あの傷なら自然に死んでいただろう。それは覆せないこ

とだった。助かるとは思ってたし、オレにも助ける気は無かった。しかし本当に皮肉なものだ、負の力を使っても辿り着けなかった場所に死んだ後に辿り着けたのだから。

「そうか……ん？運んだ？どうやって？」

『ああ、そうですね。紹介します。入ってきなさい』

ヴェルフグリントの声に応えて部屋の扉が開く。そしてその奥からやたら大きな影が出てきた。しかも良く見ると影は四足歩行で歩いている。獣だろうか？

『調べてみたらここのプラントで冷凍保管されていたのでこの子に開放してマスターを運んでもらったんですよ。アルハザードでも相当希少な生物みたいですよ』

そこにいたのは、やたら体が大きな狐だった。いや、狐と呼ぶのは多少躊躇いがあるかもしれない。見た所体躯は頭から後ろまで3から5メートル程。その大きさだけでも驚きものだが、こいつの異様さはそれだけではない。

狐の種類としてはありえない薄い青色が混じった白く美しい毛並み。そしてオレの視線をもっとも引いたのは体の後ろでふらふらと揺れている”4本”の大きな尻尾だ。1本、ではない、4本、だ。

「なるほど、保管された理由が大体わかった」

『え？単に希少種だからでは？』

まあーある意味でこいつはとんでもない希少種だろう。人に手に余

るほどの、だが。

魔術を教えてくれた爺さんが言っていた。歴史に名を残した英雄がいるように、世界には神格化して神獣や幻獣などと呼ばれた動物だって存在する。その中には狐だっている。代表的なのは九尾あたりか？

そして狐霊の力の大きさは尾の数が多いほど大きいものだ。しかし善狐のような狐の場合は対照的に尾の数が減っていく。

聞いた話では1本の尾が増えたり減ったりするのに必要とする歳月はおおよそ300から500年もかかるらしい。

『えつと……ではこの子は……』

「膨大な妖気を内包した神獣だということだ」

この時オレとヴェルフグリントはどれほどの危険な生物を開放したのかはつきり自覚した。

第31話 懐かしき思い出と忘れられた都（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

アストラル様、感想ありがとうございます！！

あれ？なんか本編進めるより過去編の方が長かった気が……。

無印完結……いつになるのかなあ（遠い目）

とにかく次も頑張っていきます。

では、また次回。

第32話 狐の名前、楽園からの帰還（前書き）

間が空いてしまいました。申し訳ありません。

では、ごじゆ。

第32話 狐の名前、楽園からの帰還

Side シノン

目の前に座っている座している狐の正体はわかった。その危険性も。

「……ヴェルフグリント、この狐が発見されたのは今からどれほど前だ？」

『少し待ってください、調べてみます。ああそうだ、マスター、外傷はほとんど治っているので歩く程度なら問題ありませんよ？』

そう言うとヴェルフグリントは沈黙してデバイスコアを点滅させる。恐らくデータベースを調べているのだろう。

やることなく仰向け体勢で動けないオレはなんとなく狐に目を向けた。

その身に秘めている危険性からは考えられないほどに大人しくしている狐。しばらく見つめてみるとオレと目が合った。無闇に視線をそらすと怒りを買うかもしれないので視線は動かさない。狐もオレの目をずっと見ている。

そんな状態がしばらく続くと、突然狐が動き出した。ゆっくりとした歩調でオレに近付いてくる。殺気は感じないので少なくとも襲っては来ないだろう。

手元にあったボタンを押してみると青いガラスが開けられ、自然な

空気が肺に取り込まれる。邪魔なガラスが無くなって狐はオレに顔を寄せてくる。鼻を近づけて匂いを嗅いだり、オレの体を上から下まで見通したり、そんなことを繰り返し始めた。

横だけでなく縦にも大きい（イメージ：もののけ姫のモロと子供の犬達のおよそ中間ぐらい）狐が真ん前にあつてオレ自身はけっこう威圧感を感じているのだが。

すると、狐の腹部に少し大きな傷を見つけた。出血は止まっているようだが、軽い傷では無い。

気が付くと狐の傷に右手が伸びていた。狐も気付いているのだろうかただ黙して見ている。

「ファーストエイド」

最低限の動きしか出来ない今ではこのくらいの治療術しか使えないが、右手を通して使えば初級の治療術でも中級クラスと同等の効果が発揮できる。

あと感覚でわかったのだが、ジュエルシールドは変わらず右手に融合したままとなっている。

暖かい光が狐の傷に吸い込まれ、一瞬で傷が塞がる。痛みが消えた違和感に気付いて狐が傷口に顔を近づける。傷口の周りを入念に調べ、異常が無いとわかって再びオレに近付いてくる。やばい、やはり無闇に触れて傷を治したのは迂闊だったか？

噛み付かれるのかと思っていたが、狐はオレに近付いてくるとオレの頬に「くうくん」と鳴いて顔をすり寄せてきた。これって、懐か

れたのか？

右手で顔を撫でてあげると手に顔を寄せてくる。嫌そうに見えないので本当に懐いてくれたようだ。

『おや？少しの時間で随分と好かれていますね』

調べ物が終わったのか空中で点滅を繰り返していたヴェルフグリントが話しかけてきた。大事な話が始まると感じたのか狐はオレから離れる。

「随分と時間が掛かったな。プロテクトでもあったのか？」

『いえ、セキリテイーの類は一つも無かったんです。ただ全体規模が大きすぎて探すのにも一苦労でした。それとわかったんですが、どうやらその子が初めて発見されたのは冷凍保管される150年ほど前ほどです。発見された時の映像がこれです』

目の前にスクリーンが展開される。ていうか2世紀前でも空中モニターなんて技術があったのかここは。

スクリーンに映っているのは今とあまり変化が無い狐が森の中を歩いている姿。だが、小さい、しかし大きな変化を見つけた。

「尾が”1本”だと？」

映っている狐の尾は1本。そしてこの映像は冷凍保管されるおよそ150年前のもの。これでは尾の数が合わない。尾の数を1本変化させるのには最低でも300年は必要なのだ。

『実はこれのせいで探すのに時間が掛かったんです。マスター、こちらも見てください。こっちは100年前、50年前、冷凍保管されるときの映像です』

どの映像でも狐の体躯は変わっていない。しかし、尾の数が2本、3本、4本と順に増えている。

「うそだろ……まさか、こいつは……300年分の靈力を僅か50年で取り込んだっていいのか？」

信じられない。信じられないがこれを見ては納得するしかない。突然変異、固有特性、候補はいろいろ思い浮かぶが、少なくともこの狐が300年分の成長を六分の一の時間で遂げることが出来るのは理解できた。

今の尾の数は4本、一本50年と換算すると9本に辿り着くのは250年後。良くて100年近くしか生きれない人間と違って神獣にとっては大した時間ではない。

『マスター、とりあえずはこの子のことは後にしませんか？今すぐどうこうできる問題でも無いのですし。それより、気分転換に外に出てみませんか？』

気を使わせたのだろう。ヴェルフグrintの突然すぎる発言からすぐにわかった。だがヴェルフグrintの言うとおり狐の問題はすぐになんとかできることではない。それに今は風に当たりたい気分だ。

「そうだな、少し外の風に当たりたいしアルハザードがどんな所かも見ておきたい。お前も来るか？」

「くうくん!!」

狐に話しかけてみると、嬉しそうに鳴いてオレの体に顔を擦り付けてくる。結構でかい体躯をしているので腹部に確かな圧力を感じる。

「んじゃ、行くか……」

外に出ようとオレは足を進めた。しかし、その時床に足を引っ掛けてしまった。普通なら大したことは無いことだ。しかしオレは、その場で盛大にずっこけた。不審に思いながら足と腕に力を込める。しかし……。

「あれ?……立てない?」

「……自分で自分が情けない」

『仕方ありません、あれだけの大怪我をしたのですから。明日には完璧に治っていますのでご安心くださいマスター』

結局、怪我による出血のせいでうまく動かない体では立つことも出来なかった。

ヴェルフグリントが、全ての怪我を治せたのはアルハザードの施設だから、と言っていたのでこうして五体満足でいる時点で感謝でいっぱいだ。

そんなわけで今は狐の背中に乗せてもらって移動している。毛並み

がふさふさで気持ちいいのだが、反面では自分の状況に落ち込む。そんな流れでプラントの外に出たのだが、外の風景はオレにとって良い意味で予想外だった。

ヴェルフグリンツの話ではアルハザードは滅びたと聞いたのでつきり紛争地帯のような風景を想像していたのだが、実際はその正反對だった。

きちんと道が作られ広がる草原、水に淀みが一つも無い川、心地よく響く鳥の鳴き声、まるで自然公園の中にいるような光景だった。空が晴れていたので気温にも苦を感じない。なぜ滅びた都にこれほどの美しい自然が存在しているのだろうか。

『驚きましたか？アルハザードの人間は基本的に自然破壊を嫌うんです。さすがに住宅は破壊されているものもありますが、土地はほとんど無事です。寝心地も良いらしいので昼寝でもしませんか？』

「くう〜ん」

確かにあの暗い部屋で眠るよりは心地よく眠れそうだ。狐の背中から降りてもらって、丸まった狐の体に包まれるような体勢でオレは仰向けに地面に寝る。心地よい風が肌を撫で、狐の毛並みから気持ちの良い暖かさが伝わってくる。

疲れも溜まっていたのだろうか、睡魔が急速に押し寄せてきた。スリープモードになって沈黙するヴェルフグリンツを視界に捉えた後にオレは目を閉じて眠りに落ちた。

あとでヴェルフグリンツにその時の写真を見せてもらったが、まる

で家族全員が眠っているような微笑ましい絵になっていた。ちなみにオレたちが目を覚ましたのは地球でいう午後7時ぐらいだった。

目を覚ましてやってきたのは大して破壊の痕跡が見えない研究所。その中の一室に入ると、中には大きなコンピューターが設置され、先程オレが眠っていたポッドに似たものが3台ほど置かれていた。ちなみに狐は寝足りないのか部屋の端で丸くなっている。

『昼寝にしては寝すぎてしまいましたね。ついぞと言ってはなんです。が早めにマスターの体調を万全にしておきましょう。そのポッドに寝てください』

ヴェルフグリントに言われたとおりポッドの中に仰向けに寝る。ポッドが閉まり、青い光が薄い濃度で全身を照らす。おそらくこの光で治療を行うのだろう。

「ヴェルフグリント、ちょっと話に付き合ってもらえるか？」

『はい、終わるまでは私も暇ですので構いません。それで、どうしたのですか？』

「ずっと気になってたことがある。この世界の人間達はこうして滅んだんだ？街があ程度の損害で済んだのなら文明一つが丸ごと滅ぶはずがない。教えてくれ、アルハザードの世界の住人はなんで滅んだんだ？」

『……申し訳ありませんマスター。その問いに対しての答えは私の中にも、データベースの中にも存在していないのです』

オレの問いにヴェルフグリントはしばらくの沈黙の後に答えた。そ

の沈黙はおそらく思考の時間ではない、本当にわからないのだろう。

「そうか、なら次だ。今地球の方ではどれ位時間が経っている」

『マスターが時の庭園で虚数空間に飲み込まれてから約3日が経過しました。ちなみに地球に帰還できるのは予定では2日後です』

「2日、か。なら空いた一日でやれることをやるか」

アルハザードのテクノロジーの高さはオレの怪我を完治させた時点でよくわかった。しかもシステムがまだ生きているならデバイスのパーツや設計図、魔法のプログラムなどもあるかもしれない。それらをつまぐ確保できたら次は管理局を利用しよう。

今回の事件の不幸際に対しての謝礼としてデバイス面の知識をいただこう。実際あの連中のせいで死に掛けたんだ、そのくらいは許されるだろう。

とりあえず今は体を万全にしよう。まずはそれからだ。物資を探す他に狐のことについても考えなければならぬ。

そんなわけで体調が万全になったオレは今ヴェルフグリントの集めた情報を頼りにデバイス関連の施設を見つけた。え？展開が速い？ただくだらない会話をしてただけだ。省いても問題は無い。

思ったとおり、ここには新品と相違ない資材が山ほどあった。デバイスのパーツについて知識が無いので今は利用できないがそこは地

球に戻ってからでもなんとかなる。

ヴェルフグリントにはデータベースの方からデバイス設計関連のデータを探してもらっている。こちらについても知識がないがこちらもなんとかなるのだろう。

さて、資材の問題についてはヴェルフグリントの作業が終われば完了だ。

残った問題は、あの狐だ。

オレの視線の先には子猫程度の大きさになった狐がいる。いきなり姿が変わって驚いたがあれは狐、変化して姿を変えることなど朝飯前だろう。

300年分の進化を僅か50年で遂げてしまう特性を持ったあの狐を放って置くことはあまりに危険だ。九尾クラスの神獣の強さは人知を遥かに超えている。世界一つなど軽く滅ぼしてしまうだろう。時空管理局が対応に出るかもしれないがあの組織が鎮圧を行ったとしても果たして太刀打ちできるだろうか？

だからと言ってオレにあれほど懐いてくれた狐を始末する気にもなれない。そこで考えたのだが、オレ自身の手である狐の面倒を見ようと思う。

あの狐の知能はかなり物なのでペットとして育てることは可能だろう。あとは力を完全に制御できるようにしてなんらかの方法で力の成長を抑えればいい。それでもあの狐が誰かを傷付けてしまったのならオレがけじめをつける。

「なあ。お前、オレと一緒に来ないか？」

「くうくん？」

「ここにいても一人になるだけだ。だったら一緒に来いよ。ここに残るよりは絶対に楽しいぞ」

「くうくん……………くうくん！」

狐は少し悩んだようだが決断した途端にオレの頭の上に飛び乗ってくる。そこが気に入ったのか柔らかい手でしっかりと掴まっている。

「あ、そうだ。お前の名前を決めないとな」

「くうくん？」

「そうだな……………美音みおんなんてどうだ？」

「……………み……………おん……………？」

「え？」

「くうくん！」

今こいつが喋ったような気がしたんだが、気のせいだろうか？とりあえずは名前は気に入ってくれたようだからいいか。美しい音、簡素な意味かもしれないがこれはこれで良い名前だと思う。

しかし自分で自分に驚いたものだ。自分からこうして手を差し延べるなど昔のオレからは想像すら出来ないこと。カノンノたちとの生

活の影響だろうか？例えそうでもこの変化は良い変化だろう。

さて、ヴェルフグリントの作業が終わったらもう眠るとしよう。そろそろ美音の背中ではなく自分の足で地面を歩きたい。

次の朝、目を覚ましてオレが最初に行ったのは素振りと術技の試し撃ち。ヴェルフグリントの言ったとおり怪我の後遺症はまったくない。体に少しなまりを感じるが元の調子はすぐに取り戻せるだろう。

そしてついに地球に帰る時がやってきた。やってきた部屋の中には転送装置のような物が置かれ、光を放っている。恐らくあれで帰ることが出来るのだろう。

あれ？待てよ。あの装置をいじれば地球側からアルハザードに来ることが出来るんじゃないのか？

『いえ、あの装置自体かなりガタが来ているので使えるのは……』

「一回だけってことか」

まあーそうだろう。オレが簡単に思いついたことをヴェルフグリントが考えないはずが無い。

『ですがマスター、興味深いものがあつたので修理してみました。これを使えばまた此処に来ることが出来ますよ』

足元の床が開いて上に持ち上がってくる。持ち上がってきた床に置かれていたのは一つの黒いグリップ。いや、よく見てみると上部に黒いスイッチが着いている。形もグリップと言うよりは何かの操縦スティックに近い。(イメージ：第一期のコードギアスでルルーシュが使っていたマイスウィッチの真っ黒バージョン)

「これは……転移専用のデバイスか？」

「非人格型転移用デバイスであるのは確かですが、転移はあくまで私が追加した機能です。このデバイスの本来の使用目的はハッキングです。名前を与えてボタンを押してみてください」

ハッキング？見た所このデバイスにはボタンが一つあるだけのようだが、これだけでどうやってハッキングを行うのだろうか。とりあえず言われたとおりボタンを押す。

「ソフィア、セットアップ……ポチツとな」

スイッチを押すときのお約束台詞を口にしながら親指でスイッチを押す。

トカツ。少し癖になりそうな音が聞こえた次の瞬間、手の中のスイッチが変化を起こした。柄尻から無数のコードが飛び出し、周りの電子機器全てに張り付く。コードは機械に張り付くと同時に柄尻から分離し、小さな赤いチップとなった。

そしてデバイス本体も変化を始めた。複雑な変形を始め、その形を変えていく。やがて変形を遂げた姿は大きな金属製のゴーグルだった。(イメージ：ムシウタのかっこうが使っているゴーグル)顔を

隠せるほどに大きいのにとても軽い。

着けてみると、先程チップが着いた機械の状態が小さく表示されている。この程度の大きさなら戦闘でも邪魔にならない。

『驚きましたか？チップが張り付いた機械は全てそのゴーグルで作ることが出来ます。大小問わず、デバイスだって操れます』

「とんでもないデバイスだな……確か転移の方がおまけなんだっけ？」

『はい。しかしアルハザードに転移するには膨大な魔力が必要です。ですからアルハザードへの行き帰りを行うには3ヶ月の間が必要です。すのでお忘れなきように。……では、そろそろ帰りましょう』

「そつだな。……行こう、美音」

「くうくん！」

肩に乗ってきた美音の頭を撫でてやって装置の中に入る。空中に浮いているヴェルフグリントは手にとって胸ポケットに入れてやる。時間ごとに装置は光を強め、オレの体を包んでいく。

「さあ……帰ろう、海鳴に」

言葉と同時に施設内を光が埋め尽くした。不思議とその光は目に痛み無く、オレは目を閉じなかった。数秒間、景色の全てが真っ白になったが段々と晴れてくる。

光が晴れ、目前に広がっていたのは何度か目にしたことがある海鳴

市の美しい海だった。

第32話 狐の名前、楽園からの帰還（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

零戦様、感想ありがとうございます！！

狐改め美音が仲間になりました。美音は主人公の”家族”であって使い魔ではありません。恐らく美音も強者になっていくと思います。最強にはなりません。

さらにデバイスが追加され主人公が機械に強くなりました。これもチートの一つになります。

アルハザード型ミットチルダ式ストレージデバイス・ソフィア

データベースを閲覧していたヴェルフグリントが偶然見つけ、興味深さから改造を加えて完成させたデバイス。

非人格型なのでAIは搭載されていない。命令への返答は合成音で回答する。

アルハザードへ行くための魔力を自動で充填する機能をヴェルフグリントによって追加されているが、本来の使用用途は”機械”という概念を持ったものに対してのハッキング。機械の中にはデバイスやアースラのような戦艦も入る。ハッキングの性能は保証付き。具体的にはs t sのスカリエッティとクアットロの二人掛かりを上回るほど。

セットアップ時に無数のコードを周りの機械に張り付けさせ、赤いチ

チップを装着、固定する。固定されたチップはデバイスによるアクセスでは解除できない。力尽くなら外すことも出来るがチップが小さい(3mm程)ので外そうとすれば大きな隙が出来る。

セットアップ完了後はゴーグルの形となってチップを装着した対象を操ることが出来る。顔を隠せるほどに大きなゴーグルだがシノンの場合は銀髪のせいで知り合いには一発ではれる。

新デバイス、ソフィアの紹介はこんなところでした。正直少し疲れしました。また間が空くかもしれません。頑張ります。

では、また次回。

第33話 しばしの別れ（前書き）

遅れてしまって申し訳ありません!!

では、ごきげん。

第33話 しばしの別れ

Side なのは

プレシアさんのお城、時の庭園が崩壊した後に私は地球に帰ってきて5日が過ぎた。

今日の朝早くにクロノ君から電話が来てフェイトちゃんの処遇が決定したと聞かされた。

フェイトちゃんは本局に移動、そこで取り調べと裁判などを行って処罰を決めるらしい。

でもフェイトちゃんの動機が家庭事情からなるもので、家庭事情の詳細からはば確実に無罪になるらしい。そして本局に移動となる少し前に私は会えることになった。

何よりもフェイトちゃんから私に会いたいと言ってくれたことが嬉しかった。

けどフェイトちゃん表情からは少し悲しみの色がある。きっとプレシアさんやシノン君のことがあったからだと思う。

あの時、時の庭園が完全に崩壊してもシノン君は帰ってこなかった。

リンディさんとクロノ君の話では虚数空間に飲み込まれたらどんな生き物でも助からないらしい。

簡単に捉えればシノン君は”死んだ”ということ。小学生の私でも簡単に理解できた。

そう、確かに理解した。でも不思議と悲しさをまったく感じなかった。普段の私なら理解した途端に大泣きしてしまうはずなのに。

ちなみにシノン君が死んでしまったと決定したリンディさんは私の家に来て魔法のこと、シノン君のことを全て話した。

しかし、よく思い出してみればあの時の私の家族も誰一人として泣いていなかった。

シノン君が死んだことが悲しくない？そんなのは絶対にありえない。誓ってそう言える。

じゃあ、なんだろう？わからなくなつて、他の人に聞くわけにもいかず、レイジングハートに密かに聞いてみた。

『そんなこと簡単ですよマスター。マスターがシノン様のことを一番理解しているからではないですか』

私がシノン君を一番理解している？確かにシノン君と一番接しているのは私だと思う。でも一番理解しているのなら一番悲しむのではないだろうか？

『はい。死んでしまったのなら確かに一番悲しむでしょう。ですがマスター、マスターは本当にシノン様が死んだと思っっているのです

か？』

レイジングハートのその言葉は私の脳内に強く響き、そして反響した。

そうだ、私は悲しくなかったんじゃない。悲しむ理由が無いと心の奥底で理解してたんだ。

あのシノン君が死んだなんて実は本心で鼻で笑っていたのかもしれない。

私の知っている限りシノン君は簡単には死なない。

恐らく私は心の奥底でシノンが「実はあれは～～でな、～～を～～したら簡単に脱出できたんだ」と言っただけで帰ってくると思っていたのだろう。お父さん達も同じかもしれない。

そして本心に気付いた今でも答えは変わらない。

シノン君は死んでない。きっとその内にけろっと帰ってくる。

「すまない、そろそろいいか？」

クロノ君の声に頷いて、フェイトちゃんは魔方陣の中に入っていく。ちょっと悲しいけど、二度と会えないわけじゃない。

魔方陣の光が強まり、アルフさん、クロノくん、フェイトちゃんが光に包まれていく。

そして、その姿が消えそうになった時……………。

「あれ？・・・もう終わったのか？」

私の真後ろからよく知っている声が聞こえた。その声の主は到着した状況に少なく困惑しているみたいに聞こえる。

そんな予想をしながら後ろを振り向くと、そこには、片手で後頭部を掻きながら少し困った顔をしたシノン君がいた。何故か頭に白い毛並みをした、狼？狐にも見える生き物に乗せて。

Side シノン

ヴェルフグリントがなのはたちを見つけたらしいので来てみたが・・・タイミング悪かったか？

なんだかフェイトたちは魔方陣の上に立っていて今にも帰りそうな雰囲気だし、なのははリボンを解いておろした髪型で少し涙目になっている。

これって・・・どう見ても感動のお別れの瞬間だよな？

しかもオレの登場と言葉で場の空気が固まってしまっている。どうすればいいんだ？

内心で冷や汗をたらたら流しながら脳をフル稼働させる。だが、まったく案が浮かんでこない。

「あ……あんだ！……なんで生きてんだい！？」

ありがとう、アルフ！！

狙ってやったものじゃないとしてもお前の言葉は今オレにとっての究極の救いだ！！

「なんでと言われてもな……死んでいないから生きている、としか言えないのだが……」

完璧なポーカーフェイスで余裕を見せ付ける。はははは！どうだ！誰もオレの慌てようなど気付けないだろう。

自分で言うとなんだが、とてつもなく今の自分が惨めに思える。

自分の動揺を必死に隠すなんて、ガキかオレは。いや、今はガキだったっけ。……鬱だ。

「貴様……どうやって虚数空間から脱出した！！返答によっては君を拘束する！！」

沈んでいる心に追い討ちをかますようにイラつく声が響いてくる。

「おやおや、これはKY執務官殿。その名に恥じぬくらいに空気が読めませんねえ」

「クロノ！執務官だ！。それより、どうやって虚数空間から生きて帰ってきたんだ！教える！」

うるせえな。感動の瞬間を邪魔をしたのを謝ろうと思ったがこいつ

が存在しているせいで謝罪の気持ちが消えちまったよ。

「どうやってと言われても、何も言えん。．．．．崩落に巻き込まれた瞬間に気を失って、気が付いたら全身ボロボロの状態で知らない森の中で寝てた。オレが覚えているのはこれだけだ。ちなみにこの狐は森の中で懐かれた」

もちろん嘘。だがこんな奴らにアルハザードが実在していたと言ったらきつと碌なことにならない。美音のことにも首を突っ込んでくるかもしれないしな。

KY執務官（名前忘れた（8割本当））は納得がいかないらしく通信を行ってリンディさん（名前が徐々に記憶から消え始めている）と話をしている。馬鹿め、今のオレに対してその隙は致命的だ。ずっと左ポケットの中で握っていたソフィアのスイッチを押す。

柄尻から排出された小さなコードを人差し指と中指の腹で挟むように持つ。そしてそのコードを。

「ただいま、なのは、フェイト。アルフとユーノも心配かけたな」

挨拶をする時に手を振る動作の最中に混ぜて、KYに投げた。結構無茶な賭けだがコードは音を立てずにKYの側に辿り着いた。

コードはそこから動き出し、KYのポケットに入っているデバイスに取り付いた。

コードが取り着いたことでKYのデバイスにチップが装着される。よし、ここからは我が相棒の領分なのでオレはなのは達との再会に

専念しよう。

S i d e ヴェルフグリント

マスターがなのなさん達と会話を始めたと同時に、私はマスターから任された仕事を開始する。

マスターが出した私への命は2つ。

1つ目。ソフィアのチップを通してあの執務官のデバイスから情報を端末を閲覧するのに必要なパスワードやパスコードのコピー。

2つ目。収集したパスを利用してアースラなど、可能な限りの情報端末からデータを収集する。

収集するデータの内容は、デバイス作成のマニュアルと設計図。構成員の名簿（可能なら幹部候補まで、無理なら魔導師関連のみ）と各施設の詳細情報。管理局の汚点、あるいは隠匿された重要機密。

通常のデバイスならば無理難題と嘆くほどの命令です。実際私だけでは難しいでしょう。そう、”私だけ”ならば。

確かに私だけならばこれだけの情報を集めるのは難しい、しかしソフィアが加われれば話は別です。

ソフィアに収集を全面的に任せ、収集した情報を私が立て続けに保存していく。私が他のどのデバイスよりも勝っているのは一つ、底

なしとも言える膨大なデータ内包量。

ソフィアの行動をデータ収集だけに限定し、私がデータを全て保存していく。こうすれば作業のペースは格段に早くなる。俗に言う適材適所ですね。おっと、そう言っている間にもう8割が完了しました。

Side シノン

ヴェルフグリントとソフィアが作業を行っている間にオレはなのは達と再会の挨拶をしている。

だが、オレの予想していた再会とは随分違うものだった。アルフは大泣きしながら大喜び、ユーノはアルフの肩に乗っていたので涙や鼻水によって被害を受けている。

フェイトはおろおろしながら対応に困り果て、なのはは笑顔で事態を納めようとしている。

自分で言った後だが、なんだ？このカオスは。今は感動の再会じゃなかったっけ？

ちなみにオレ自身は心配掛けたので怒鳴られる覚悟ぐらいはしておいたのだが、無駄だったようだ。

というか、なのはがまったく泣いていないのが結構驚きだった。思い切って本人に聞いてみると。

「だって、シノン君ならその内ひよっこり帰ってくるってわかったもん」

だそうだ。いや、信頼してくれるのはうれしいんだが、ヴェルフゲリントがいてくれなかったらオレでも死んでいたぞ？

「あの……シノン……」

ためらうような声でフェイトが話しかけてくる。

その目には明らかな恐怖や戸惑いが見えた。オレに対しての感情では無いと思う、恐らくプレシアに関してのことだろう。

「……プレシアのことか？」

「……ッ！……うん……お願い教えて、母さんは……」

「……伝言を預かってる。」何か縛られず、自由に生きる”と”母親としての”あいつからの伝言だ」

「……ッ！……うん……あり……がとう……」

オレの言葉でプレシアの最後を悟ったのだろう。

フェイトはその場にうずくまって静かに涙を流す。アルフも涙を流してフェイトを抱きしめた。

視線でなのはとユーノに”少し離れよう”と言葉を送り、オレたちはフェイトたちから離れた。

「……シノン、フェイトのお母さんが死んだのって……」
海岸沿いで海を見詰めていると、なのはの肩に乗っているユーノがいきなりそんな質問をしてきた。

「なんだ？唐突に……オレが攻撃した胸部からの大量出血、それによる失血死。これで満足か？」

返答に迷いは無い。例えプレシアが負に取り込まれ化け物の姿をしていたとはいえ、プレシアの命を最後に奪ったのは紛れも無く、オレなのだ。

あの戦いの果てを誰も知らないとはいえ、この事実は否定できない。オレ自身も否定しない。

「本当に……本当にそれしかなかったの？」

「ユーノ君……」

「ねえ、シノン。本当に殺すしかなかったの？確かにあの人はひどい人だったかもしれない、けど捕まえてフェイトとよく話をすれば、目を覚ますかもしれないのに……」

「前置きはいらぬ。何が言いたいんだ、ユーノ？」

「……………どうしてあの人を殺したんだ、シノン」

オレの言葉を聞いた途端にユーノの声が酷く冷淡になる。何度も感じたことがある敵意を背中越しに感じ、振り返らずともオレを睨んでいるのがわかる。ただユーノの睨みを見て美音が威嚇しているが頭を撫でてやって”大丈夫だ”と伝える。

「キミなら出来たんじゃないのか？あの人を殺さずに無力化することが…………。キミはとても強い。少なくともキミより強い人間を僕は見たことが無い…………そんな力を持っているのに、なんであの人を救えなかつたんだ！フェイトの母をその手で殺すことが…………フェイトの心に深い傷を作ることが、本当にキミの限界だったのか！」

「お前は一体オレを何に見てるんだ？救世主？英雄？神様？悪いがオレはそのどれでもない。人間と言うには少しおかしな体だが、オレはただの人だ。何が限界だ、お前の勝手な想像をオレに押し付けるな。はつきり言つて不愉快極まりない」

首を動かして視線だけをユーノに向ける。

プレシアを殺したことは否定しない。むしろ肯定する。

だがユーノの言い様は聞き捨てならない。こいつがオレにどんな期待をしているのかは知らないがそんなものをオレに押し付けるな。

それに、なんでいきなりユーノはこんなことを言ってきた？KY執務官の正義理論でも聞かされたか？

「けど……それでもキミなら!……」

『いいかげんになさい、ユーノ・スクライア』

まだ何か言おうとしたユーノをヴェルフグリントが制した。会話に加わってきたということは情報収集は終わったのだろう。

『少し黙って聞いていましたがそろそろ腹が立ってきました。はっきり言いましょう。あなたはもちろん、なのは様も、管理局の人間も、あの場にいなかった人間にマスターを責める資格はありません』

「で、でも……それはシノンが戻って……」

『ええ、確かにそう言いました。ですがあの場にいなかったのは事実。結果は変わりません。大体なんですか限界って、なんですか救うって、あなたはプレシア・テストロツサの苦しみの何を知っているのですか?知らないでしょう。それなのにあなたはマスターに何故救えなかったと怒鳴る始末ですか、随分とえらいご身分ですね』

「そこまでだ、ヴェルフグリント。……ユーノ、別にお前がオレを許さないと思うなら構いはしない。フェイトに何かを伝えるのも好きにしる。だがな、二度と勝手な期待をオレに向けるな」

それだけ言っただけでオレは先程からこちらに目を向けているKY執務官に向かつて歩き出す。一瞬だけ視界に入ったユーノの目は、何かに陶酔したように濁っていた。

「終わったのか？フェレットもどきと話し込んでいたようだったが……」

「実に有意義な会話だったよ。そっちも話し合いは終わりか？」

『私が話しましょう。シノン君、確認するけど、虚数空間内でもことは何も覚えていないのね？』

一言も生還を喜ばずに質問してきたのはスクリーン越しのリンディさん（だっけ？）だった。その後ろではエイミィさんが笑顔でこちらに手を振っている。

「ええ、さっぱりと」

『そうですか……シノン君、提案があるの。あなたにも悪くないはずよ』

提案？てつきり正義の名の下に連行するのかと思っていたが、一応は交渉のやり方を知っているらしいな。

「聞くだけ聞きましょう。内容によってはお断りします。例えどんな脅しを出されても」

『ありがとう。こちらの要求は一つ、”虚数空間に落ちたということを決して他言しないこと”』

少し驚いた。相手への要求が口約束とは想像しなかった。

「……以外ですね、連行するのかと思いましたが」

『相手が貴方ではこちらのリスクが計り知れないわ。あなただって付いて来る気はないのでしょうか?』

「無論ですね」

『そう言うことよ。・・・それで、どうかしら?』

「承知しました。口外しないことを約束しましょう。ただそちら側の関係者にも充分注意を払ってください。軽い雑談からみれる可能性もあります」

『わかっているわ。それと・・・最初に言うべきだったのだからうけど言わせて頂戴。プレシア・テストロッサを止めてくれて、ありがとう』

スクリーン越しで一部隊の最高責任者が頭を下げている。クロノとユーノは不満そうに、なのはとフェイト、アルフは複雑な顔をしていた。

その後、フェイトの処遇について話し合ってみたが裁判が終わった後は再び地球に来るつもりらしい。

それをなのはは大喜び、フェイトもうれしそうに微笑んでいた。

ユーノは裁判の関係者としてクロノ達に同伴、裁判が終わった後はフェイトやアルフと同じで地球に戻るらしい。

そして、オレのせいで中断になったお別れの時間。

「またね、フェイトちゃん、アルフさん、ユーノ君、クロノ君」

「なのは、シノン、また、会おうね」

「おう。またな、フェイト」

「……うん！」

最後で一番綺麗に微笑んだフェイトは、その瞬間に光に包まれて消えた。

第33話 しばしの別れ（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

長く更新が遅れてしまい、申し訳ありませんでした。

無印は次で終わりになると思います。

では、また次回。

無印編終了 第34話 オレに安らぎの間は無いのか……無いんだろ

また更新が遅れてしまって申し訳ありません。

今回は少し滅茶苦茶な展開になったかもしれません。

では、どうぞ。

Side シノン

フェイト達が消えた後、その場にはしばらくの沈黙が落ちた。聞こえるのは潮風が吹き荒れる音とカモメなどの鳴き声だけ。

「……………帰ろっか、シノン君」

このあとはただまっすぐ高町家に帰るはずだった。帰って高町家の皆さんに家を空けたことを一番に深く謝罪する予定だった。

「ああ。美音、行くぞ……………ッ!!」

だが、その予定は突然に襲いかかってきた強大な気配によって取り消しになった。

海岸を元気に走り回っていた美音も気配を感じて発光の後に元の姿に戻る。オレも反射的に身構えてなのは背中を庇う。

ふと下半身に若干の違和感を感じて視線を落とす。よく見ると、両足がガクガクと震えていた。

（おいおい、マジかよ…………オレが震えてる？はっ…………こいつは珍しいものを見たもんだ。オレにもまだ恐怖なんて感情があったとはな）

震えが一向に止まらない足を叩いて喝を入れる。

武の道を積んでいないのは何も感じていないようだが、逆にありがたい。オレが恐怖するほどの気配だ。なのはがこの気配を正面から受けたら気配に吞まれてシヨック死するかもしれない。

「ほお。初めて会ったときはまるで別人じゃな。わしの気配を感じた瞬間に攻撃を開始しなかったこと、その状況下で他人を守るうとしたこと。あの絶望に染まりきっていた小僧と同じでも見違えたぞ」

突然、オレが立っている場所から前方15メートルほど離れたところから声がした。

そして、その声を聞いた時には声の主がそこに立っていた。

その声の主は少々老けが見える老人だった。しかし、その身が纏う威圧感と魔力は老人の存在を完全に上位へと押し上げている。

まるで老人の存在自体がこの場において奇跡を具現させているような錯覚さえ感じるほどだ。

老人は余裕堂々としているがこっちは声さえも出せない。意識だつて気を抜けば消えかねない。

たかが15メートル先にいる老人の顔でさえ視界が揺らいでまともに捉えられない。

この状況で一番動かすべき思考回路も混乱している。

”勝てない”と心が無情に叫ぶ。

例えこの身が成人した姿でも目の前の老人には勝てない。戦う、と思うことも出来はしないだろう。

もし今オレの思考回路がまともに動いてくれたのなら目の前の強大な存在が何者なのかを突き止めてようとしていただろう。

だが混乱している今の思考回路では、なのはと美音をどうにかして逃がす方法を考えるのが精一杯だった。

「……………これ、しつかりせい。意識を落ち着ける……………」

「……………ツツ!」

突然肩に手が置かれた。

体がビクリと震え、冷や汗を掻いた顔を勢い良く向ける。

同時に震えた右拳を苦し紛れのように突き出したが効果があるとは思えない。

防がれた場合はオレの体を盾にしてもなのはと美音をこの場から離れさせる。

逆に吹き飛ばされたか、最悪腕を消し飛ばされた場合は同じく二人を連れて海に逃げ込む。

しかし想定していたプランは予想外の形で裏切られた。

ぼんぼん。

「・・・・・・・・え？」

「やれやれ・・・落ち着いたか、シノン？」

頭に置かれた大きな手、完全に攻撃されると思っていたせいで全身から張り詰めていた力が抜ける。

そして笑いながら呆れている声の主。

その時初めて冷静さを取り戻したオレは、老人の顔を見ることができた。

この人をオレは知っている。

グラニデで生み出されて4、5年ほど生きたころ。

突然真っ白の空間に包まれ、そこで出会い、戦う力を教えてくれた恩人。

「あの時の・・・・・・・・爺さん？」

「ほう、覚えてはおったか。では改めて言おう・・・久しいの、シノンよ」

孫を見るような優しい笑みを浮かべているその人は・・・・・・・・過去にオレを鍛え、魔術を教えてくれたあの優しい老人だった。

「すみませんでした。混乱していて気付かなかったとはいえ・・・」

「よい。むしろ気配に飲まれた中で抵抗の意思を見せたのじゃから満足じゃ」

落ち着きを取り戻したオレは爺さんに深く謝罪した。爺さんは笑いながら許してくれたがオレ自身は申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

「あの・・・シノン君、この人って・・・」

後ろにいたなのはが訳が分からず質問してきた。美音は爺さんを睨みつけながらオレの隣を離れない。

「お主が高町なのはか？」

「え？・・・は、はい！高町なのはです。なんで私の名前を？」

「シノンが世話になつとるな。ワシはキシユア・ゼルレッチ・シユバインオーグ。宝石翁とも呼ばれておる。お主の名前を知つとるのは先程お主の家族に会つておつたからじゃ。・・・ん？良く考えてみればお主には名前を教えておらんかったなシノン」

「あ・・・はい、言われてみれば・・・なんとお呼びすればいいんですか？」

「ふむ・・・青子の真似でもないが、”先生”とでも呼べ」

「はい。わかりました、先生」

「話を戻すぞ。先程言ったようにワシはこの娘の家族に会っておった。その用件はシノン、お前に関係のあることじゃ」

老人改め先生が話を本題に戻す。

わざわざなのは家族に会いに行ったということは唯の挨拶できたわけではないということだろう。

「今まで少しお前の戦いを見たが・・・シノン、今のままではお主はいつか死ぬぞ」

突然過ぎる死の宣告、相手が先生以外ならば興味薄げに理由を聞きだしているだろう。

故に今オレは何も言わずに先生の言葉の続きを求めている。

「恐らくお主自身が理解しているじやろう。今の肉体の限界を」

「肉体の・・・限界？」

「オレの持っている技術のほとんどは実は今のような子供の体で使うのはかなり危険なんだよ。もし成人していないこの体型で完全な動きを再現しようとするなら、肉体のリミッターを常時外さないといけないぐらいだからな」

なのはの疑問顔に答えを与えてやりながら先生の言いたいことをすくに理解する。

いくら同年代の子供の体型より遥かに優れているとは言っても”子

供の体型”であることに変わりはない。

そして子供の体型でいる以上は医学的なリミッターにより動きが成人状態より遥かに劣る。成人の姿を100%にするなら、この体で今発揮できるのは2、30%程度。

もちろんこの数字は術技を使う反動に体が耐え切れないなどのリスクを含んだためだ。

簡単に言ってみれば、今のオレは筋肉などの肉体の性能が下がってしまったせいで力が完全に出せないのだ。

それを解決するには今から肉体を鍛え続けて力を取り戻していくしかない。

しかしただの筋トレなどではない。

完全な実戦を想定した半分殺し合いのようなものでなければ。もちろん相手はオレの出せる全力と普通に並べる奴でないとダメだ。

だがこの世界にはそんな実力者は存在しない。もし存在していても発見に時間が掛かる。見つけても特訓の度に殺し合いをするなどという条件を飲むわけがない。

オレが一番知っている実力者は恭也さんと土郎さんだが、あの二人では今のオレの全力には対処できないだろう。

つまり、オレはこの世界ではこれ以上強くなれないのだ。

そして先生はオレにこのままでは死ぬと言った。その言葉からして

近い将来にまた何か騒ぎが起こるのだろう。

そして、今のオレではその時に生き抜くことは出来ない。

「理解したか？・・・ワシとしても弟子にしたお前を見殺しにするのは少々心苦しい。故にシノン、単刀直入に聞こう。強くなりたくは無いか？」

「・・・・・・・・・・なりたいです」

はつきりと断言する。このままではオレ自身も気に入らないというのもあるが、やはり一番はつきりしている理由は”生きたい”というオレの根本的な衝動だ。単純に言えば、死にたくないだけ。

短いオレの返答に先生はどこか満足した顔で頷いた。そのまま歩き出し、隣を通り過ぎる瞬間にオレに小さな声で語りかけ、小さな手紙を握らせた。

「それでこそお前か。・・・・・・・・ワシを信じるなら明日の12時にまた此処に來い、条件はコレに書いておいた。・・・・・・・・高町家の皆には事情を話しておる。来るのなら、しばしの別れは覚悟しておけ」

しばしの別れ、か。オレを強くしてくれる存在がこの世界に存在していない時点で予測はしていた。

背後を振り向いてみると、あれほど強大だった気配をまったく残らずに先生はもういなかった。

あの人の神出鬼没にはもう納得したので大した驚きは無い。短い付

き合いだがあの人は興味の無いことにはまったく動かない人だとい
う点だけは理解している。

「……………さて、とりあえずは帰るか。行こう、なのは、美音」
「う、うん」

Side Out

シノン達は寄り道せずに戻つて高町家に帰宅した。帰宅する間
はぎこちなさなど一切無く、美音について話したり、再びフェイト
と会う日のことを話したりしていた。

家に着いても同じようなものだった。

家にいた恭也さんと美由紀さんには笑顔で「おかえり」と迎えられ、
店を閉めて帰宅してきた土郎さんと桃子さんも似たようなものだっ
た。

変わらずシノンの知っている高町家だった。

そして、浮かべていた笑顔に少しの悲しみが混ざっていたのも高町
家だからこそだろう。

魔法や美音のことで一波乱あったが結果的に高町家の皆さんは笑顔
ですべて受け止めてくれた。

「ふう〜・・・よし」

夕食を終え、シノンは自室でゼルレッチに渡された手紙を読んだ。わかりやすいように日本語で書かれている。

『賢いお前のことじゃから大体の察しは着いておるじゃろう。』

お前には一旦別の平行世界に行ってもらおう。ワシの知る限りで最高の人材がそこに揃っておる。

同行者はお前の連れていた妖狐以外は認めん。わかっておると思っ
があの娘などは論外じゃ。

それとあの場では話さなかったがお前はどうかやら世界の”抑止力”
の影響をあまり受けとらんらしい。だがくれぐれも注意しろ。抑止
力に目を付けられればお前は世界の全てから死を迫られる・・・

抑止力。

世界のバランスを保つために存在する”世界そのものが持つ防衛プ
ログラム”。

抑止力は排除すべき存在をあらゆる方法で消滅させていく。事故
や自然現象、やり方は幾らでも存在する。

一番しつくり来るのは”英雄が悪を倒して世界を救う”というスト

ーリーだろうか。シノン自身は英雄などガラではないが、プレシアの計画が阻止されたのも抑止力の一環である。

そして抑止力が排除するのは悪だけではない。

世界にとってのイレギュラー、つまり平行世界の壁を越えて来たシノンもそれに該当する。

シノン本人は知らないが、シノンがまだ抑止力に捕捉されていないのは、シノンが世界樹によって生み出された存在で半分精霊のような形で世界に認識されているからである。

「抑止力……ふっ、次の相手は世界、か」

自虐的な笑いを浮かべながらシノンは手紙の最後の部分に目を向けた。

「……えーと、行き先は……え？日本？魔術師の本山はロンドンって言ってなかったけ？まあいいか……冬木市の、衛宮家？」

無印編終了 第34話 オレに安らぎの間は無いのか……無いんだろ

ご覧いただきありがとうございます。

一応無印編は終了しました。

そして名前だけだった宝石翁が登場。

弱体化したシノンを強くするために、シノンには人外魔境の極地に行ってもらうことにしました。

これからは修行編のスタートです。

では、また次回。

修行編開始 1話 強くなる為の旅立ち

Side シノン

布団の中で眠りから覚める。少々ぼんやりとした意識が朝になったことを教えてくれた。

上半身だけを起こして部屋を見渡してみる。私物が一切置かれていない簡素な部屋。あるとしたら部屋の壁にハンガーで掛けられている私服くらいだろうか。

薄暗い部屋の中、カーテンが押し留めている朝の日差しのみが光源である。

置かれている時計を見ると、現在の時刻は六時ぴったり。いつも目が覚める時間はこの位である。

パジャマから着替えようと布団から出ようとする。しかし、布団の中に薄青い丸い球体を見つけ動きを止めた。気が付けば、枕の隣にはヴェルフグントがスリープモードで置かれていた。

寒かったらしく昨夜オレの布団の中に入ってきた美音である。体を丸めて静かに寝息を立てている美音を起こすのも悪いと思い、息苦しくならないように布団を掛けてやった。

パジャマを脱いで綺麗に整えて置く。

いつもは簡単に折るだけなのだが、今日からしばらくこの家を出るのでせめての礼儀としてだ。

ハンガーに掛けられた私服に着替え、居間に向かう。そこには既に朝食の用意している桃子さん。

「あらシノン君、おはよう。相変わらず早いのね」

まあー確かに今の時間は11歳の子供が起きる時間ではないだろう。

「おはようございます、桃子さん。何か手伝うことはありますか？」

「そうねえ〜……。手伝ってもらうことも特に無いし、道場の士郎さん達の所に行ってみたら？なのはの部屋には……。その……。行きにくいでしょ？昨日の今日だし」

「……………そうですね。そうします」

居間を出て、道場の方に向かう。

昨夜、先生から渡された手紙を読んだ後になのはを含めた高町家の皆には手紙に書いてあったことを全て伝えた。

桃子さん、士郎さん、恭也さん、美由紀さんの四人は事前に先生から話を聞いていたので「絶対に帰ってくるように」と言って家を出るのを許してくれた。

しかし唯一人、なのはだけは猛反対だった。理由どうこうではなく、単純に「友達がいなくなるのは嫌だ！」と言いながら泣いていたのを覚えている。

しかしオレは修行をやめるつもりはない。なのはには悪いがこっち

は命が危ないのだ。

結局なのは最後まで納得しなかった。昨夜はそのまま部屋に籠もってしまい、まったく話しをしていない。

土郎さん達の話では、なのはがあそこまで自分の意見を突き通そうとするのはとても珍しいらしい。

それを聞いて少なからず罪悪感を感じたが、桃子さんにはただ大丈夫だと言われた。

道場に入ると、恭也さんと美由紀さんが試合をしていた。

試合と言っても二人は御神流の剣士、歩法の神速をこまめに連発している。そのせいで姿が視界内に5秒以上は留まらず現れたり消えたりを繰り返している。

ちなみに、オレは既に御神流の技のいくつかを使える。習ったものではなく見て盗んだものなので正しい技の形になっているかはわからないが。覚えた技は徹と貫、飛針と鋼系の使い方までだ。

神速の方はさすがに簡単にはいかないようでまだ使えない。

しばらく二人の試合を見ていると、土郎さんがオレに気付いた。恭也さんと美由紀さんは集中していて気付いていない。

「おはよう、シノン君。どうかしたのかい？」

「おはようございます。特に用があるって訳じゃないんです。ただ見に来ただけで・・・」

「そうかい。確かになのはの部屋とかには行きにくいだろうからな。今日の正午に出発するんだらう？見送りも出来ないのならせめて・・・」

「・・・はい。後で話をするつもりです」

「そうか。なら、俺から言うことはないな・・・。恭也！美由紀！そこまでにしておけ、もうすぐ朝食だ」

士郎さんの言葉が響き、数秒後に神速を解除した恭也さんと美由紀さんが現れた。

三人は順番に風呂に入ってから朝食に来るらしくオレは先に居間に戻った。

「あ、シノン君・・・」

居間に着くと、桃子さんが少し複雑そうな顔をしていた。理由を聞いてみると、なのはが珍しく早起きをして「朝食は自分の部屋で取る」と言って朝食を部屋に持って行ったらしい。

わかってはいたがオレと話すのは極力避けているらしい。

後からやってきた士郎さん達もやはり複雑な顔をしていた。やはり、なのはとは家を出る前に話すべきだろうな。

朝食の片付けと洗濯などを終えて部屋に戻ると、美音は静かに布団の上に座り、ヴェルフグリントは空中に浮遊している。

布団を綺麗に折って部屋の端に置き、美音に部屋で待っているように言って再び部屋を出る。現在の時刻は10時半、なのはと話すなら今しかないだろう。

「なのはの所に行くってくる。ヴェルフグリント、お前はレイジングハートと話さないのか？」

『昨夜の内に話しておきました。あの子は強いですから心配は要らないでしょう』

「しっかりしてるな。オレも早い内に話をするべきだったな」

『大丈夫ですよマスター、なのは様ならきつと理解してくださいます』

ヴェルフグリントの激励に礼を述べてオレはなのはの部屋に向かった。

部屋のドアには小さなプレートが掛けられ、『誰も入っちゃダメ』と書いてある。オレのせいとわかっていても小さく溜め息が零れる。

ドアを軽くノックしてみるが返答はなし。仕方ないか……。

「なのは、聞こえるか？」

変わらず無返答。しかしオレはドア越しに言葉を掛ける。

「オレと話がしたくないならそのままでも構わないから聞いてくれ。あの先生はオレが昔に短い間だがとても世話になった人だ。だからさ、なんとなくだけどわかるんだ。あの人の言ったことは恐らく本

当に起こる。そして今のままじゃオレは騒動で確実に死ぬだろう。

だからオレは強くなってくる。強くなってもまだ力が足りないかもしれない。けどオレはこのまま過ごすなんてイヤだ。生きるために、何より此処での日常を失わないために。

……そろそろ時間だ。間違っても見送りなどには来るな。先生にも魔術師として守るべきルールがあるんだ。……行ってくる」

伝えるべきことを伝えてオレは部屋を離れていく。その時、部屋の中から本当に耳の良い人間でなければ聞き取れないほどの小さな声で「行つてらっしゃい」と聞こえた。

自分でも珍しいと思う笑みを口元に小さく浮かべ「行つてきます」と言つて今度こそ部屋を離れた。

「それでは、行つてきます」

『行つて参ります、ミセス桃子』

「気をつけてね、シノン君」

玄関で高町家の皆さんに見送られ、オレは家を出た。

この世界でのオレ自身の私物はせいぜい服ぐらいしかないので荷物は右肩にベルトを通して担いでいるバッグだけ。左肩には小さくな

った美音を乗せている。

しばらく歩いて海岸に辿り着く。不思議とオレの足取りは無意識に普段より遅いものになっていた。

そのまま潮風を浴びながらしばらく呆然としていた。

突然背後に強大な気配が現れる。オレを飲み込む波のように全身にプレッシャーを感じる。しかし昨日のように動揺はしない。この気配の主はもう知っているのだから。

「ほう、気配を絞って浴びせてもまったく動揺せんとはな。何かあったか？」

背後を振り向くと先生が興味深そうな顔でオレを見ている。

「別に何も。強いて言えば……問題を全て解決したから、ですかね」

「はははは！、そうか。……では、行くぞ！」

無言で頷く。先生は美しい宝石で形作られた短剣を取り出した。しかし、その形は剣と呼んでよいと思うような形ではなかった。

オレがその短剣を目にするのは二度目。詳しい仕組みは一切知らないが絶対的に強力な武装だというのは既に身を持って体験済みだ。

虹色の極光がオレの周りを囲み、次第に光を強めていく。もうすぐオレはこの光によって並行世界に旅立つのだろう。

不安は無い。静かに瞳を閉じて流れに身をゆだねる。

「ではなシノン。多くは語らん、楽しく生きろ、そして強くなれ」
「はい」

体が浮遊感に包まれ、意識が薄れていく。肩に乗っている美音も次の瞬間。オレはこの世界から完全に姿を消した。

S i d e O u t

修行編開始 1話 強くなる為の旅立ち（後書き）

?????

シノン「ん？此処は何処だ？」

すまんが今回は緊急で話の場を設けさせてもらった。

「作者か。今までまともに話したことがなかったからすぐに気付かなかった」

そうか。で、本題だが。

「ああ、わかっている。コラボのことだな」

雨季様、本当に……。

二人「ありがとうございます。そしてこの作品をご覧ください
いる皆様もありがとうございます」

「そう言えば……座談会が終わったときに色々もらったな」

久遠のストラップ、『チートじゃ済まないinnegima』のキャラを
誰でも、何人でも、好きに使える券と神様が夜なべで創った一度だ
け願いを叶えてくれる宝玉、この三つだな。

「……一番目もありがたいが、二番目と三番目は今のオレに
とってまさにチートだな。しかし……三番目は夜なべで創れる
のか？」

「二番目にはそう遠くない内に世話になるかもしれないが……三番目は使いどころを見定めないと。」

「大事に使わせてもらおうとしよう。……しかし、オレはこれからは修行編か……。言うのは少し恥ずかしいが、頑張るとしよう」
「そうだな。では皆様。」

二人『また、次回に』

「これからも”白銀の来訪者”をよろしくお願いします。」

外伝 来訪者の兆戦 Ver・雨季様 (前書き)

直しました。

前書き 初めてのコラボです。シノンの初挑戦者は雨季様の”一条要(A S初期バージョン) 最初から勝てっこない相手ですが、がんばらせます。

では、ごきげん。

外伝 来訪者の兆戦 Ver. 雨季様

これは来訪者が目的の世界に辿り着く間にあつた物語。

そこは来訪者のいた世界とよく似ていて、まったく違う世界。

Side シノン

「……………なぜオレは海鳴にいるんだ？」

公園の真ん中でオレは途方に暮れていた。

あの時、先生の”魔法”によってオレは確かにあの世界から抜け出したはずだ。

しかし、目を覚ましたオレがいたのは馴染んだ潮風が吹く海鳴市。しかも肩に乗せていた美音がいなくなっている。

オレ自身は体に何の影響も感じられない。体調は万全だ。

（持っていたのはヴェルフグリントとソフィアのみ。まるで戦闘の為に軽装にしたような……ん？）

ポケットの中に何かが入っている感触を感じ、取り出してみる。入っていたのは一通の手紙。

『すまんが早速一番目の相手のいるところに送った。

そこは確かに海鳴だが、平行世界の海鳴じゃ。ちなみに相手はお前のことを知らん。

お前ならば恐らく自然と会うことが出来る、そして……出会った途端に戦うだろう』

「つまり、相手を探して戦え、ということか……」

手紙を細かく引き裂いて左掌に火を灯す。灰すら残さぬ程に手紙を燃やし尽くし、歩き出す。

出会った途端に戦うか。いいだろう。オレがそれだけで戦う相手だ、すぐにわかる。探すでしょう。

それから歩き出して少し広い噴水公園に辿り着いた。噴出す水が空中に虹を描いている。

「……当たり前、かな？」

自然と呟いたその言葉に反応してか、ヴェルフグrintが無言で境界を展開した。

青空が異様な色に染まり、微かに聞こえていた自動車の排気音などの全てが消える。しかし、音が消えた世界の中でトントんと靴音が響く。

オレとは正反対の入り口から入ってきた一人の少年。少年は青が混じった白髪を風に揺らしながら噴水を中点にしてオレと同じ距離に対峙する。

少年と目が合った。その瞬間、少年の気配に違和感を感じた。

「初めまして。ちょっと聞くけど、一通りの話はしておくべきかな？」

「……なんだ。いきなり襲ってくると思ったけどまともだったんだな。じゃあ少し話そうか。俺は一条要、一応あんたと同じ魔導師だよ」

「シノンだ。シノン・ガラード。要はどうしてオレが魔導師だとわかるんだ？オレから魔力は感じられないはずだが……」

「だってこの結界張ったのシノンだろ？それが証拠じゃん」

こいつは失態。自分でいつの間にか墓穴を掘っていたわけか。

「じゃあシノン、単刀直入に聞くけど、あんた何者？一般人とは到底思えないし、管理局の人間？」

「おいおい傷付くな、推測とはいえあんな奴らの同類に見られるとは……。残念だがハズレ。簡単に述べるなら、実力の底上げに来た挑戦者だよ。というか、そう言うお前も何者だ？体の中に随分と変わったペットを飼っているようだ」

そう、感じた違和感の正体は恐らくそれだ。

要の気配は一つに感じるようで微妙に違う。要自身の気配の他にも一つ、その気配があまりにも強大なせいでそれが要自身の気配を上書きしている。

さすがに正体まではわからないが人の手によって扱えるものとは思えない。しかし、見る限り要はその存在を自分の管理下に置いていくように見える。それだけで実力は充分にわかる。

「!!!……気付いてたのか。もしかして、俺達ってお互いにもとじやなかったりするのかな？」

「さてな、だが一言だけ……オレはこのままお開き、なんて気は無いぞ？」

「だよなあ……」

オレの言葉に苦笑を浮かべた要が口を僅かに動かした。瞬間、今までほとんど感じられなかった要の魔力が別次元のレベルまで跳ね上がった。大雑把に凶つても既にオレの魔力を越えている。

互いにもう言葉は無い。同時にデバイスを取り出す。ちなみに要のデバイスは一つの球体。

「ヴェルフグレント」

「アリストテレス」

『セットアップ!』

身に着けた衣服が騎士甲冑に変わり、左腰に差してある刀を右手で抜く。

対する要の格好は変わらず、両手に一对の白いグローブを装着していた。

どちらも言葉を口にしない。ただ自分の武器を構えて感覚を研ぎ澄ませている。

先手を取るために瞬動で接近。一瞬で要との距離を詰めて腰溜めに構えていた刀を右に一閃した。もちろん峰ではない、刃でだ。体への負荷を考えない瞬動からの本気の一閃。全身が重い空気抵抗に受けて悲鳴を上げる。

完全に先手を打ったオレの一閃は要の首を両断しようとする。勝った、一瞬脳裏に勝利の宣言が下される。しかし、この程度で終わる相手ではなかった。

「魔力放出！」

接近するオレに対して要は両の掌を突き出してきた。すると、要の体がまるでジェット噴射をしたかのように後退し、逆に前方に加速していたオレの体は不可視の圧力によって減速した。

前のめりに倒れそうな体勢から左手だけのハンドスプリングで跳ぶ着地してすぐに前を見るが要の姿は無い。

「……ちっ！」

舌打ちして周りを見渡す。しかし、突然右のこめかみに衝撃が走り

公園のコンクリートを陥没させ破壊するほどの力で地面に叩きつけられた。さらに不覚にも刀、ヴェルフグリントを手放してしまった。ぐらつく右目の視界で上を見上げると、要が高い高度から真下のオレに向かって蹴りを打ち込もうとしている。

うつ伏せになっていた体を仰向けにし、両手を胸の前でクロスする。

「柔招来！金剛剄！」

体の耐久力を上げ、全身を闘気で作ったシールドで覆う。

要の右足蹴りとクロスした両手がぶつかると、コンクリートの破砕面が大きく広がり土煙が舞う。

「……まさか耐え切るとはね」

要は少なからず驚いていた。

実を言うと、回避は不可能ではなかった。脳震盪のうしんどうで視界がぐらついていていただけであの場から抜け出すことは可能だった。

ではなぜ耐え切ることにしたか。それは……。

「この距離ならさっきのようには逃げられんぞ」

右手を伸ばして要の頭を掴む。そのまま要の顔を真横の地面に叩きつけて立ち上がる。

「おかえしだ」

間を空けずに左手で要のこめかみを殴る。オレの時と同じく地面が陥没を起こし、コンクリートが砕ける。

「！！・・・かはっ」

要が意識を取り戻す前に決める。手加減などはしない。右拳を引いて力を溜め、要の胸元目掛けて一気に振り下ろす。

「剛力徹破・突！！剛昇弾！！」

放った拳と闘気の砲弾は触れば一瞬で要をただの肉塊を変える。しかし、放った拳は青紫色のシールドに阻まれてしまった。

シールドごと貫こうと力を込めても一向に通らない。要が持つ莫大な魔力によってこの防御力を再現しているのだろう。

「くそっ！！・・・馬鹿げた出力を・・・！！」

シールドを貫けず、仕方なく後退する。それによって時間を得た要は先程と同じジェット噴射で跳ね起きて意識を整える。

「シールド」

『了解』

要が短く口にした命令によって現れたのはなにも変わったところが無い一枚のシールド。強いて言うならシールド全体の大きさが小さく、かなり薄いというぐらいだろうか。

要はシールドを右手で掴み、腕を後ろに引く。嫌な予感を感じオレは右手を左腕の袖に伸ばす。

「シールドスライサー！」

要は引いた腕を前に振るう。そしてその手に持つシールドに縦回転を加えてオレに投げつけてきた。何をするかと思えば、防御シールドを投げつけるとは。

左腕の袖の中に仕込んである小さなガントレットから先端に釣り針のような針が着いている一本の糸を垂らす。もちろん普通の糸などではない御神流で使われている鋼糸だ。

左腕を勢い良く振り回して、先程手放したヴェルフグリントに鋼糸を引っ掛けて引き寄せる。右手でキャッチ、すぐに両手で構える。

『ただいま戻りました』

「おかえり」

軽口を叩きながら飛んでくるシールドに刀を右薙ぎに打ち込む。刀身とシールドが衝突し、盛大な火花が飛び散る。

(このシールド……鋭さを追求して強度を減らしている?この程度なら……)

拮抗していた刀を右に振りぬく。シールドに刃が徐々に食い込み……

(斬れる)

すれ違った瞬間シールドを両断していた。

「まだまだあー!!」

前方から要が両手に発生させたシールドを連続で投げってくる。連射か、上等だ。

刀を構えなおして迫るシールドを何枚も切り裂いていく。唐竹、右逆袈裟、左薙ぎ、右薙ぎ、左逆袈裟と刀を振るう。しかしこのままの状態を保つつもりは無い。次のシールドを両断すると同時に瞬動で接近しシールドの投擲を封じる。

「……………ぐっ!……………何!?!……………」

突然左肩に痛みが走る。視線を動かすと、左肩には青紫色の針のようになり小さい魔力弾があった。そして最悪なことに痛みを感じて大きな隙が生まれ、要のシールドに左肩を切り裂かれた。傷口から血が噴き出す治療している暇など無い。もう次のシールドが迫っている。

「くそつ……………絶風刃!爆炎剣!魔皇刃!剛・魔神剣!」

左手が使えない分は術技を乗せて威力を上げる。先程までシールドを切り裂いていたのに今ではシールド碎いて破壊している。しかし、やはり片腕だけでは手数が足りない。しかし左手は完全には動かない。仕方ないか、痛いのはやはり嫌なんだがなあ。

目前に迫ってきたシールドをわざと刀で受け止める。そして……………

・チェインソーのように回転するシールドを左手で、全力で握る。そしてもちろん、左手からは血が大量に噴出し、激痛が襲い掛かってくる。

「ぐうっ！！がああああああ！！！！！！」

悲鳴を上げながらシールドからは絶対に手を放さない。シールドを掴んでいる中、別のシールドが右の脇腹と頬を切り裂くが左手の痛みで何とも感じない。

「ああああああ・・・うおおおお！！！！」

シールドを完全に掴んだ状態から体を左に一回転。力を振り絞り、左手に掴んだシールドを地面すれすれに全力で投げた。

オレの投げたシールドは要の投げたシールドを全て潜り抜けて要に迫る。

要はオレの予想外の行動に息を呑んで上空に逃げた。だが遅い。オレは既に瞬動と飛行魔法で要の真上の位置に移動していたのだから、要もすぐに気付いてガードの姿勢を取るが僅かに遅い。

「剛力徹破・咬牙！！」

今度こそ確かな手応えを感じた。浸透剄によって骨もいくつか砕けただろう。要は空中から地上に向けて落下する。シールドスライサーを封じるために距離を開かせるわけにはいかない。アクセルフィンを飛ばたかせてオレも急降下する。

巻き起こった土煙の中からシールドが飛んできてくる。しかしその全て

を右手で抜いた刀ですれ違い様に真っ二つに斬り裂く。

土煙の中に勘任せで刀を振るう。しかし手応えは感じられない。代わりに土煙の中から突き出されてた拳に左頬を殴られ吹き飛ばされた。拳の軌道が若干素人臭かったが速度が速くて避けられなかった。しかも左頬に走る衝撃に意識がぐらつき、アクセルフィンが解除され、刀を手放してしまった。

だがやられっぱなしでは済ませない。体が吹き飛ばされる瞬間に右足で要のこめかみを蹴り飛ばす。皆さん覚えているだろうか？セツトアップ時のこのブーツには靴底に鉄板が仕込まれていることを。

オレと要は10メートルほど後方に吹き飛んだ。しかし、休息の間を与えぬ為にすぐに立ち上がる。

見る限り互いに肩で息をしているが、オレはまだ少し余裕がある。対する要はどうかかわからないが、もう限界と言うことはないだろう。

「ハア……ハア……強いな、シノンは。左手、大丈夫か？」

「……ハア……この程度なら直せるさ……というか、敵の怪我を心配するとは随分と余裕だなお前……」

「悪いけど実際にまだ余裕だからな。ハア……ハア……そろそろ終わりにするぞ……破壊しろ……ORT、開放」

呟きの言葉と共に要を中心とした光が発生する。光はそのまま拡大を始め、ボロボロになった公園を包み込んでいく。嫌な予感がしてならないが光の拡大速度から見て逃れることは不可能だろう。逃げ

るのは諦めて、手放してしまったヴェルフグリントを拾う。

『何か来ますね。マスター、左手は大丈夫ですか？』

「この戦いではもう使えんだろっな。・・・だが、負けるつもりはないさ」

光が晴れ始める。その時足元に違和感を感じた。平らなコンクリートを踏んでいた感触が一瞬消え、滑らかな巨大な宝石を踏んでいるような感触に変わる。

光が完全に晴れる。視界に移る景色は海鳴の公園ではなく見渡す限りに張り詰められた水晶、その水晶にどこからか差し込んでくる光が照らされその空間全てが美しく見える。

その水晶界の中、オレの前方15メートルほど先に巨大な異形が佇んでいた。青白い40メートル近い大きさの体、その姿はどこか蜘蛛にも見える。

「・・・おいおい・・・幾らなんでも人の身でこんなもん抱えるものか？」

「！！！」

乾いた声を上げるオレの目の前で異形が咆哮を上げて足を振り下ろしてくる。40メートルもの大きさではそんな攻撃でさえも死と同列の恐怖を感じさせる。

『マスター！しっかり！！』

ヴェルフグリントの声を聞いてハツとなり、その場から全力の瞬動で離脱する。危なかった。あと数秒遅れていたら完全にミンチになっていた。

『マスター！まだです！』

ヴェルフグリントの言うとおり、異形が振り下ろした脚が振るわれ、無数の1メートル程の水晶の破片が弾丸のような速さで飛んできた。一つでも当たればタダでは済まないだろう。

「ふっ！・・・はあ！・・・せいっ！・・・」

飛んでくる破片の一つ一つを刀で斬り裂き、対応しきれない破片は他の破片を足場にして瞬動で離脱している。瞬動は足場が確保できなければ使えないが、皮肉なことに周りに飛んでくる破片のおかげで足場には困らない。

ちなみに余談だが、先生の話では瞬動にはもう一段階上の”虚空瞬動”というものが存在するんだそうだ。虚空瞬動は通常の瞬動と違い足場を必要としない。つまり空中戦でも使うことが出来るのだが、しかし、そのメリットに釣り合う程に鍛錬を積み重ねなければいけないが。

（まさか・・・あの少年がこんなものを身に宿しているなんて大丈夫ですか？）

（まだ少しは平気だが、いかせんきりが無い・・・しかも今の肉体では瞬動の連発には完全に耐え切れない。このままじゃ負荷が徐々に蓄積していつてギリ貧になる・・・仕方ない・・・ヴェルフグリント！仕掛けるぞ！）

(Yes, My master. Axel finn. Ready
Go.)

肩に銀色のフィンを再展開、瞬動で異形に向かって動き出すと同時にアクセルフィンを羽ばたかせる。魔法と体術の同時加速によって全身を重い反動が襲う。肋骨が二本ほど嫌な音を出した。しかしその痛みには構わず刀を握り締める。

腹部に走る痛みの代わりに異形の脚の内側に入り込むことが出来た。これで顔面がノーガードだ。

「ぐっ！・・・理の根源、峻烈の炎、非情なる疾風、猛り立つ怒涛、万感の思いと連なりて此処に集え！・・・アルティメットステインガー！！」

この技はエステルの秘奥義、アルティメットエレメンツをオレが独自に改良を加えた技だ。

本来のエステルの秘奥義は精霊を具現させてその力を一斉に放つもの。しかしオレはエステルのように精霊を完全に使役することは出来なかった。せいぜい半霊体の状態までが限界だった。故にオレは”精霊を具現化させる”のではなく”精霊を武器に集束する”という形でこの秘奥義を作り上げた。

精霊の力を束ねた刺突が異形に直撃する。異形は痛みで悲痛な咆哮を上げた。いや、よく見てみると異形の体を傷つけているのは刀の刀身ではなく刀身が纏った精霊の力だ。

水晶だらけの世界と40メートルの異形。どちらも人間に再現が可

能な芸当ではない。この力は魔術的か神霊的な力が源ではないかとも思つて精霊の力を借りるこの技にしたのだが、どうやら正解だったらしい。

(このまま精霊の力を混ぜた攻撃を繰り返していけば……)

一瞬、勝てる、と思つた。しかし、目の前の異形はオレの予想を簡単に破壊してくれた。

「……!!」

異形が吼えた。その声は大気を震わせ巻き起こっていた爆風を吹き飛ばした。爆風が晴れた異形の顔を良く見ると、オレの付けた傷は半分以上が完治していた。

「嘘だろ!? 4体の精霊を集束した攻撃だぞ! どんな神霊適正持つててもこんなに速く直るわけがないだろ……があつ!!」

『マスター!!』

このとき、オレがこの固有結界『水晶渓谷』の中では全てのステータスランクが一つダウンすると知っていたら恐らくこう叫んでいるだろう。『反則だろそれは!!』と。

脚が使えない状態から異形は巨大な顔面で頭突きをかましてきた。回避も間に合わず、咄嗟に柔招来と金剛剄で防御力を底上げしたが焼け石に水。10メートル程の巨大な物体が正面から激突してきた衝撃に子供の体で耐え切れるわけがない。正面からミサイルが直撃したような錯覚を感じる。

息が出来ず、空中を無様に落ちていく。とどめのつもりだろうか？
薄れた視界の先で異形が脚を振り下ろそうとしている。

負ける。逃れられない敗北感がやってくるが不思議と恐怖がない。
逆に湧き上がってきたのは怒りに似たような感情。負けたくない、
まだ戦える、心の中で未だ敗北を認めない声が反響する。

右手になぜか力が籠もる。

『マスター！？』

ヴェルフグリントの声に反応する言葉は無い。もう飛び掛けている
意識の中で可能な限りの魔力と闘気を圧縮していく。

異形がオレのあがきを完全に封じようと脚を振り下ろす。

轟剣。ほぼ同時に、オレも刀を逆手に持ちかえて投げる。

次の瞬間、時の庭園で戦った化け物の攻撃を遥かに上回る衝撃を受
け、オレの意識は撃沈した。

だが、意識を失う瞬間……………。

(効いたよ、シノン……………次があったら互いにもっと強くなっ
てようぜ?……………)

そんな声が聞こえた気がした。ただの幻聴か、本当の念話か、どち
らでもいい。オレは感覚が無い体の口元に笑みを浮かべ……………。

(上等……………その時は今度こそ勝たせてもらおう……………)

”強くなる” その決意を固め、出来たかわからない念話を心で唱えた。

外伝 来訪者の兆戦 Ver・雨季様 (後書き)

ご覧いただきありがとうございます。

新年までに間に合ったああ！！

投稿が遅くなりましたが何とか新年には間に合いました。

次回からは修行編の舞台に移動します。

では、また次回。そして皆さん、よいお年を

第2話 訪れた修行の舞台、その名は冬木市 (前書き)

お久しぶりです。今回は冬木市の衛宮家に来訪です。

では、ごきげん。

第2話 訪れた修行の舞台、その名は冬木市

S i d e ? ? ?

「これで終わりか。しかし、いきなり自宅の掃除を要求するとは・・・どうやら私のマスターの頭の中では、英霊は使い魔から使用人に格下げの兆しがあるようだな」

夜の冬木市、その街中に建つ一軒の洋風邸宅の屋根の上で男が一人愚痴を零していた。

男はかなりの長身で褐色の肌をしていた。髪型はオールバックで白く、鷹のような瞳は夜闇の中で金色を帯びている。

服装は太ももから下に細かくベルトが巻かれた黒いズボンと男の鍛え上げられた筋肉を良く見せるように密着した黒いライダースーツ。服装と掛け合わせると今から誰かを暗殺しに行くスナイパーのように見える。

だが男が終えたのは暗殺ではなく自身の主に命じられた自宅の掃除。実はこの男、その身に宿す家事の腕はかなりの物なのだ。

「やることは全てやった。あれほど完璧に仕上げれば文句も言われまい。さて、行くか・・・ん？」

仕事を終えてその場を離れようとした時、ほんの僅かな時間、夜空を一筋の光が走った。

通常の人間なら一瞬視界に移すだけで消えてしまう光。

だが生憎、その男は色々な部分で通常とは別次元の存在。男の瞳はしっかりと光の姿を捉えていた。

「流れ星に願いを送る者たちを誤解させた正体が何かと思っただが、まさか人とはな。・・・途中で見失ってしまったが、あれは遠くないところに落ちたな。この街が窮地に陥ることなどありえんが、明日にでも凛に伝えるとしよう」

情報の整理をつけた男はその場から突然、景色に溶けるように姿を消した。

来訪者は自身の力を鍛えるために別世界にやってきた。そして、その来訪者は今は・・・死にそうだった。

S i d e シノン

「げほっ！・・・・・・・・動けるまでは・・・・・・・・まだ・・・・・・・・掛かるかな？・・・・・・・・」

現在オレは山の中で血を吐いて倒れている。ちなみにこれは落下時の怪我ではなく、この世界に来る前に戦った時の傷だ。

生きているのが不思議に思う傷だったが、生きているとわかってからオレは必死にあがいた。

そよ風が吹けば消えそうなほどに小さい意識の中で何でもいいで
治療術を使った。

最初にファーストエイドで意識を繋げ、次にヒールで呼吸を出来る
ようにし、今はハートレスサークルとリザレクションを交互に使っ
て傷を治している。オレ自身の自己治療能力が高いこともあって何
とか意識を持ち直した。流した血は補充のしようがないが動くだけ
なら問題ない。

「くう〜ん？」

「大丈夫だよ美音。あと少したったら動けるようになるから」

不安そうに鳴く美音の頭を撫でながら周りを見渡してみる。何処の
山なのかは分からないが、動けるようになったら川を探して人里を
探すしよう。だがまずは………。

「げほっ！げほっ！」

喉に出し残している血を全て吐き出すとしよう。あ、やべ、また吐
きそう。

「よし、行くか」

傷を完治させ、血に汚れきった服を着替えてオレは歩き出した。若
干体がだるいが仕方が無い。手荷物はバッグ一つだけだ、頑張ると
しよう。

それから川を辿りながらヴェルフグリントの索的スフィアを使
って町にたどり着いた。落ちた場所からすぐ近くにあったのがこの
町なのでここが目的地なのだろう。

先生の手紙に書かれた住所を頼りに街中を進み、たどり着いたのは
『衛宮』と書かれた和風の屋敷。随分と立派な屋敷に見えるのだが、
何故だろう。この屋敷だけ他の家と違う次元に位置するような感じ
がする。

先生の手紙に書かれているのも確かに此処だろう。覚悟を決めると
しよう。いくらなんでも殺されることはないはずだ。いや、そう願
う。

ガラガラガラガラ。

「すみませーん。どなたかいらっしやいますかあー？」

玄関に足を踏み入れ、ごく普通の挨拶を行う。

それなりに聞こえる音量で叫んだはずなのだが家の中からの反応は
無し。どうしようか途方に暮れそうになるが、正面の廊下の奥の方
から足音が聞こえてきた。

現れた足音の主は女性だった。赤いシャツとスカートを着ていて、
髪は腰まで届く黒髪、両方の瞳の色は青、整ったその容姿は間違い
なく美人のカテゴリーに当てはまるだろう。

「こんにちは。どうしたの坊や？迷子にでもなった？それともこの
家に用があるの？」

女性はオレの前に立って優しげな口調で訊ねてきた。しかし質問の最後の部分だけ複雑な意味を感じたのは気のせいだろうか？

「初めまして、シノン・ガラードと申します。この家の人に用が会ってきたのですが、この家の方ですか？」

「いいえ、私はこの家の人間の友人よ。何の用なのかしら？」

「ある人からこの手紙を渡されて”この家に行け”と言われたんです」

「手紙？・・・うそ、もしかして・・・ちょっとこの手紙借りるわね！すぐに戻るから！」

「は？あっ・・・ちょ！・・・」

先生から受け取った手紙を見た女性はこの世の災厄を目にしたような顔で家の奥に走って行った。わけがわからず肩に乗っている美音と同時に首を傾げる。

そのまま玄関に呆然として突っ立ったまま一分ほどが経過すると、先程の女性が息を切らしながら一人の男性を連れてきた。さっきの女性の彼氏だろうか？

オレンジ色に近い短い髪、金色の瞳、容姿も中の上ほどはあるだろう。先程の女性の彼氏になっても決して不釣り合いにはならないだろう。

「はぁ・・・はぁ・・・確認として聞きたいんだけど、この手

紙をくれた人の名前ってわかる？」

「え、えっと。確か、キシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグ、と」

「おいおい……遠坂の思った通りってことか？それで遠坂、どうするんだ？」

「じゃ、じゃー。まずは上がってもらおうかしら。士郎、私はちょっと用事が出来たから先にセイバー達をこの子に紹介しておいて」

「用事？用事って……っておい！遠坂！」

男性の言葉など耳に入らないように女性はすさまじい速さで外に駆け抜けていった。

「えーと、とりあえずよろしく。俺は衛宮士郎、一応この家の家主だ」

「シノン・ガラードです。こっちは家族の美音。オレの呼び方はシノンで結構です」

「くう〜ん！」

「なら俺も士郎でいいぞ。よろしく、シノン、美音」

どうやらこの人、士郎さんがこの家の家主らしい。しかし、名前がなのは父親と同じとは。

家にながらせてもらい、やってきたのは居間。そこには驚くことに、

先程の女性に負けず劣らずの美人の女性が三人いた。

金髪緑目の女性、紫色の長髪に眼鏡をかけた女性、同じく紫色の髪でおしとやかな雰囲気をした女性。重ねて言うが三人の誰もが美人だ。

「シノン、紹介するよ。金色の髪の女の子がセイバー、眼鏡を掛けているのがライダー、おとなしそうな雰囲気の女性が間桐桜。セイバーとライダーはこの家に住んでいて、桜は俺の後輩だ」

「初めまして、シノン・ガロードです。こっちは美音」

「セイバーです。以後お見知りおきを」

「ライダーです。よろしくお願いします」

「間桐桜です。よろしくね、シノン君」

三人の口調は至って友好的。警戒されているわけではないようだが、先程から何故か体に緊張が走る。体験で語るなら、首筋にナイフを当てられたまま話をしている時のものに近い。

それにセイバーさんとライダーさん、二人の気配もどこかおかしい。確かな気配が存在しているが僅かに気配が薄い。まるで雲のようだ。それに名前も、本名なのだろうか？

「とりあえず座ってくれ、遠坂が戻ってくるまでみんなでお茶でもしてよう」

「あ、じゃあ私・・・お茶を淹れてきますね」

「ありがとうございます。．．．あれ？どうした美音？」

普通なら部屋の中を元気に走り回るはずなのだが、何故か美音はオレの肩に乗ったまま。いや、オレの頭の後ろに震えながら隠れようとしている。美音のおびえた視線の先にいたのは．．．．．テーブルの先で目をキラキラさせているライダーさんだった。

「あの．．．．ライダーさん？．．．．美音が何か？」

「い、いえ．．．．単に興味があるというか、撫でてみたいというか、かわいいというか．．．．」

つまり美音に触ってみたいということか。一瞬妖狐のことで何かされるのかと思っただが、そういうことなら問題ないだろう。美音だってとても賢い子だ。暴れることもないだろう。

「大丈夫だぞ、美音。あの人はいい人だ。．．．ほら」

頭を撫でてやりながらライダーさんに美音を渡す。美音は少々怯えていたがライダーさんが笑顔で優しく撫でていくことにそれは消えていった。

ライダーさんも嬉しいようで、美音に優しげな笑顔を向けながらその毛並みの手触りを堪能している。

「シノン、質問してもよろしいですか？」

問いかけてきたのはセイバーさん。その表情には若干疑惑の色が見える。やはり少なからず警戒されているのだろう。

「あなたは……私やライダーがどういった存在なのか知っているのですか？」

「どういった存在、とは？」

「ふうー。やはり知りませんでしたか。そんな状態であのようなことをさせるとは、凜の大師匠はいささか無茶がすぎるのでは？そういうえば士朗、凜はどうしたのですか？」

「ああ、さっき急な用事が出来たって言って家の外に飛び出してっただけど……」

「恐らく他の者たちに根回しに行ったのでは？ 私たちも後で言われるでしょう」

「……あの人には世話になったから別に嫌でもないんだが、なんだかなあ」

「私達などまだマシな方でしょう。一番気の毒なのはシノンに思えます」

回答を聞いてセイバーさんのオレを見る目がひどく同情を帯びた目に変わった。けど、”あのようなこと”とか”根回し”って、なんのことだ？

ちなみにライダーさんは美音を抱きしめながら幸せそうにトリップしている。しかもいつの間にか桜さんまで参加していた。

「それじゃーまずはセイバー達のことを説明して……」ただい

まあ！！上がるわよ士郎！」遠坂、用事は終わったのか？

「ええ何とかね・・・まったく 안타って奴は、そんなもん目撃したならさっさと報告しに来なさいよ！おかげでこっちは街中走り回らされたわよ！」

「・・・ぐっ！・・・だからと言って無防備の鳩尾に絶掌を打ち込むな・・・英霊のこの身でも一瞬死ぬかと思ったぞ・・・」

遠坂と呼ばれている女性が居間入ってくると、その後ろから長身の男性が鳩尾部分を手で抑えながら居間に入ってきた。男性の格好は黒いズボンとYシャツのみでホストで働いている人のように見える。

「ああ、シノン。自己紹介がまだだったわね、私の名前は遠坂凜で、こっちがアーチャー。一応形的には私はあんたの姉弟子ってことになるわね」

姉弟子ということとは、オレと同じようにこの人は先生に魔術的な関係の弟子なのだろうか？それにしても・・・セイバー（剣士）とライダー（騎兵）の次はアーチャー（弓兵）か、偽名の疑いがますます濃くなっただが。

「さて・・・それじゃ、修行内容の詳しい説明を行いますか。まずは補足説明ね。シノン、実はこの手紙ね、魔術で特殊な細工を加えると新しい文章が浮き出る仕組みになったの。ちなみに浮き出た文章はこれね」

テーブルの上に置かれた先生の手紙。見てみると元々の文面が消え、新たに文字が書き込まれていた。恐らく魔術的なあぶり出しだろう。

この細工をすぐに見抜いた時点で遠坂さんの魔術師としての腕がかなりにのものだと確信できる。

「 久しいな凜よ。」

このような手紙を使わず直接用件を伝えても良かったが、生憎とワシも暇と言うわけではない。頼みたいことは一つ。そこにいるシノン鍛えてほしい、何をとは言わん、鍛えられるものを出来うる限り鍛え上げる。

お前の所ならシノン鍛えられる人物が溢れておるだろう？この手紙が届いた二カ月後にシノンを迎えに行く。それまでシノンのことをよろしく頼む。……ちなみに……」

手紙の伝えたいことは理解した。つまりオレは今日から二カ月後、この街であらゆる技術を磨いていくということ。鍛えてもらう人に関しては遠坂さん任せだが、あの先生が薦めたのだ、間違いはない。

……ところで、皆さんも気付いているかもしれないが、手紙の文の最後が不自然に形に終わっている。手紙を見てみると引き裂かれた跡がある。遠坂さんが破ったのだろうか？でも何故？

「 え！？……えつと……わ、私個人への大事なメッセージだったのよ！だからあなたは見なくても大丈夫よ。あ、あはははは」

説明する遠坂さんの表情はどこか拳動不審に見えたが、深く追求する必要もないだろう。

シノンとは結局見なかったが、文の最後の部分はこうなっていた。

『………ちなみに………』

そのシノンはお前さんが前にやらかした宝石剣の失敗のただ一人の被害者なのでな。

頼みは断つても構わんが、それでシノンが死んでしまったら、いささか寝覚めが悪くはならぬか？』

(う、嘘は言っていない………ただシノンに見せちゃ色々まずいから(主に私が)見せないだけ)

嘘について誤魔化している凜の内心は本当はシノンへの謝罪の気持ちでいっぱいだった。

Side シノン

「………さて、次はアンタを鍛える面子のことだけど。先にセイバー達の存在についてかな？」

シノン、少し長くなるけど一先ず一通り聞いてね。まずは………
「………」

………。

遠坂さんに聞いた説明を要点で区切ると、まず一つ目、ここにいるセイバーさん、ライダーさん、アーチャーさんは人間ではなく、名

称をサーヴァント、わかりやすく言うと現代世界に魔術の力を借りて具現した英雄の霊。

この街で具現しているとはっきりしているサーヴァントは合計で8体。ここにいる3人の他に、ランサー（槍兵）、アサシン（暗殺者）、バーサーカー（狂戦士）、キャスター（魔術師）、そして異例な存在として前回の聖杯戦争から残った前回の（弓兵）。

その全員が世界にその名を刻んだ英霊であり、これからオレを鍛えてくれる人物たちだ。オレ自身グラニデで幾つか摩訶不思議な事象を経験したが、まさか英雄に鍛えてもらうことなど想像もしなかった。

二つ目、鍛えてもらえる二ヶ月の間、オレは一週間につき一人のサーヴァントに鍛えてもらう流れを8回繰り返す。一週間内に技術を鍛え、盗む、この手順を繰り返して残った2、3日に総合の見直しを行う、これが計画の理想系だ。

「……さて、大体の流れは理解したわね？とりあえず今日はゆっくり休んで起きないさい。明日からしばらくは嫌でも死にたいと思えるような日々が続くんだからね」

………ううして。

冬木市での二ヶ月間の修行の日々が幕を開けた……………。

第2話 訪れた修行の舞台、その名は冬木市 (後書き)

ご覧いただきありがとうございます。

予想出来ていたかもしれませんが、シノンを鍛える相手は主にサーヴァントの皆さんです。早速次回から修行を開始します。

では、また次回。

第3話 サークヴァント講座 VSセイバー編（前書き）

ついにシノンの修行が開始です。

最初の相手はセイバー！。

では、どうぞ。

第3話 サークヴァント講座 VSセイバー編

Side シノン

刀の姿となったヴェルフグリントを右手に握り、オレは騎士甲冑の姿で木々の間を駆け抜けていた。魔法など使わず足の跳躍のみで、だ。

しかし、そんなエセ忍者のような動きで木々を駆け抜けているオレに、後方から人一人分ほどの大きさの青い弾丸……いや、青い閃光が近付いてくる。

青い閃光は木々の間を目で追うのが困難なほどの三次元機動で通過し、確実にオレとの距離を縮めてきている。

そして距離感が10メートル程まで詰まった。その瞬間、青い閃光は一瞬の溜めを置いた急加速によって10メートルの距離を0にした。

近付かれた。そう理解したオレは上半身全体を使って体を右に捻り、闘気の炎を纏った刀を振り抜く。

「魔王炎撃破！！」

片手だけの力を補助するために放った炎の斬撃。だが、閃光の正体にこんな攻撃は脅威にならない。

閃光の中から放たれた一筋の斬撃。それにはオレの放った斬撃のような術の補助などは何も無い。

衝突。右手に慣れ親しんだ金属と打ち合った時の手応えが走る。それと同時に刀身に纏っていた炎が輝き、オレと閃光の間に爆発を起こす。爆風で体が後ろに跳びそうになり、足に力を込める。だが、突然に振りぬいた刀が右腕ごと押し戻され、オレの体は後方に大きく飛んだ。

何が起きたのかはすぐに理解できた。ただ、オレの斬撃が相手の斬撃に負けて、そのまま体ごと後ろに弾き飛ばされたのだ。片手のみ力だとしても術技を重ねた斬撃が打ち負け、さらには吹き飛ばされたのだ。頭で理解できても少し理不尽を感じる。

足を着けることも出来ず、オレの体はまったく高度を落とさずに飛んでいく。背中に木の枝や葉が当たるが、気にしてなどいられない。きつと数秒もしないうちに追撃が来る。

「…………ちっ！…………アクセルツッ！」

『Axel finn・Ready go.』

両肩に銀色のリアクターフィンを出現させ、後ろに飛んでいく体に減速を掛ける。速度が徐々に緩くなるが、思っていた通り追撃がやってきた。再び斬撃が放たれた。斬撃のラインはオレの左肩から右側の腹部を狙っている。

（空中に浮いた状態で迎撃しても逆に不利なる…………ここはあえて後方に飛ぶか…………）

左手を峰の部分に添え、相手の斬撃のコースに刀を割り込ませて防ぐ。衝撃、再びオレの体は後方に飛んでいく。それと同時に両肩の

アクセルフィンで加速を後方に掛け急速後退。一気に敵との距離を引き離れた。……と言っても、少し経ったら追いつかれるだろうが。

突如背中当たっていた木の枝や葉の衝突が無くなった。周りを見渡してみると、どうやら木が密集していない広い草原に出たようだ。空中を背中向きで飛んでいる体勢からバック転で体を捻る。それと同時にアクセルフィンを消し、地面に着地。ふとオレ自身、いつの間にか若干肩で息をしていることに気付く。

今まで意識化に無かった疲労感までもが襲い掛かり全身の力が緩くなりそうになる。

(いや、だめだ！)

今戦っている相手は僅かな休息など許さない。ハツとなって抜け落ちそうになった活力を再び体に注ぎ込む。左への全力瞬動。皮肉なことに窮地での瞬動のキレは今までに無いほどの良さだった。

瞬動による負荷を全身に感じた次の瞬間、コンマ数秒前にオレがいた場所を斬撃が叩き込まれた。

地に着いた足に力を籠め、地面を滑りながら相手の方に体を向ける。

「ほう、今のを避けましたか。本気で打ち込んだのですが……3日目でここまでの成長、大したものですよ、シノン」

5メートル程先に立ち、優しげな笑みを浮かべているのは先程オレが必死に迎撃していた青い閃光の正体、セイバーさん。オレとは対照的に呼吸はまったく乱れず、汗一つ掻いていない。

その格好は衛宮邸で見た時とは違い、首から腹部までの胴体と腰からロングスカートの端まで届く銀色の甲冑。腕と足には同じ銀色のガントレットとメタルブーツ。それはオレのような名称のみの物ではなく、真の騎士が纏う甲冑だ。そんなセイバーさんの手には一振りの美しい西洋剣が握られている。

修行の内容を説明してもらった翌日、オレは早速修行を開始することになった。最初の一週間の相手はサーヴァントの中で最優のセイバーさん。

最初はどんな修行をするのかと話し合っただけが決まったのが『とにかく実戦的な戦闘を行い戦闘力を鍛え、その途中で試したかったり思いついた技があったら戦闘の途中で試す』というものだった。わかりやすくまとめれば、セイバーさんと戦いながらあらゆる能力を鍛える”というものだ。

修行を開始してすでに三日目。オレとセイバーさんは凜さん（名前前で呼んで良いと言われた）が知り合いに頼んで用意してくれた広大な森の中で戦闘を行っている。

修行が開始された当初、オレはサーヴァントの存在がいかに異常なものなのか思い知らされた。

まずはオレよりも身長が低い体からは想像も出来ないほどの剛剣と森の中でオレを追ってたような目で追うことさえ困難な速度の突撃。剛剣だけなら対処の仕方もあったが、魔力放出という能力での

加速が加わっているので厄介なものだ。おかげで修行一日目は正面から挑み、10分ほどで叩き潰される戦闘が何度も続いた。ワンサイドゲーム

次にセイバーさんが持つ超強力な対魔力。それを知らずに二日目は接近戦を控えて術主体に戦ったのだが、放った術の全てはセイバーさんに当たることなく、全て無効化かされた。そして呆けている所を叩かれ撃沈。

セイバーさん本人の感想では、精霊の力を借りているオレの術でセイバーさんを傷つけるには上級の術でも無理らしい、なにそのチート。恐らくセイバーさんを術で倒すのなら秘奥義クラスの術でなければ無理だろう。まあセイバーさんが詠唱の暇を与えとは思えんが。

そんなこんなで今は修行三日目、オレは二日間で経験したことをフル活用してなんとかセイバーさんの攻撃に耐えている。

「ヴェルフグリント……始めてからどのくらい経った？」

「およそ3時間程です。体力もそろそろ限界が近いのでお気をつけください」

一日目とは違い、今は見事に3時間も耐え続けている。なぜこれだけの長時間を戦っていられたのだろうと自分でも不思議に思う。

「……参ります。構えなさい、シノン」

剣を両手で握り、殺気を飛ばしてくるセイバーさん。しかし、”構えろ”と言ってくれる所に確かな優しさを感じる。恐らくオレの体力が残り少ないことに気付いたのだろう。最後の打ち合いとして

本気で来る。

先手を取るために全力で瞬動。セイバーさんも魔力放出でこちらに突っ込んでくる。だがその動きはオレのように直線的ではなく、自由自在を感じさせる鮮やかな動きだ。しかも速度はオレの瞬動より上。

はつきりセイバーさんの魔力放出はオレにとってはかなり羨ましい。瞬動を超えるほどの加速状態で自在な方向転換を加えられるなど、バリエーションを加えればかなりの応用性がある。

（オレにも出来ないものかな……ん？魔力を放出？……魔力で可能ならもしかして……試してみるか、元々それが目的なんだ）

オレとセイバーさんがすれ違う。すれ違った瞬間に火花が飛び散った。すれ違い様にオレとセイバーさんの放った斬撃が衝突したのだ。どちらも傷を負っていないが速度の違いでオレの腕に衝撃が伝わった。

すれ違って互いにすぐ体を捻って反転。オレの唐竹とセイバーさんの逆袈裟がぶつかる。しかし、鏝せり合いにはならず、二人の得物が弾かれる。

オレは左薙ぎに刀を振るうがセイバーさんは右足を後ろに引いて避ける。追撃に右薙ぎの斬撃を放つ。しかしセイバーさんの振り上げで刀を上弾かれる。

「ハアアア！！」

「剛・魔神剣！！」

ガラ空きになったオレの胸部にセイバーさんが袈裟斬りを放ってきたが、上に弾かれた刀を無理矢理振り下ろして防ぐ。

少しずつ力が抜けていく足を無視して前に踏み出す。右袈裟斬りを放つ。しかし正反対の斬撃で弾かれる。反撃でセイバーさんが逆袈裟を放ってくる。地面に刀を突き刺し斬撃のコースに割り込ませる。

「裂壊桜！！」

刀を突き刺した場所から桜色の斬撃波を放つ。セイバーさんは魔力放出で後ろに回避、オレとの間にあった距離が大きく開く。

「……三時間、私の本気の剣にここまで耐えたのは誇っても良いことです。……次で最後とします。受け切るか、打ち勝つか、乗り越えて見せなさい……」

突然風が吹いた。通り過ぎりの突風ではなく、セイバーさんを中心として吹き荒れる嵐のような暴風だ。その風はセイバーさんの腕

正確には握られている剣に巻き付いていく。

セイバーさんが構える。オレとの距離は10〜12メートルほど。

魔力放出の加速を用いても一瞬で詰められる距離ではない。ということ、風を使った中距離攻撃か。

回避は足の疲労からして無理だろう。フォースフィールドを使えば防ぎ切れるかもしれないが、オレ自身にその気は無い。どうせもう限界間近なんだ、正面から打ち破ってやる。

「……行きます」

セイバーさんが構える。竜巻のような風を纏った剣を真横に振り抜く体勢で固定、左足を前に出して右足を後ろに深く引く。対してオレは刀を下段で握った上に振り上げる構え。

「ストライク・エア
風王鉄槌！！」

振り抜かれた剣と共に放たれたのは一つの台風。普段は触れても何も感じない風が、万物を吹き飛ばし切り裂く凶器となってオレに襲い掛かってくる。直撃すれば全身を細かく切り刻まれることだろう。目を閉じて短く深呼吸。耳からはもう風の音は聞こえない。意識を集中させ、手に持つ刀に闘気を籠めていく。すると刀身が黒い闘気に覆れ、研ぎ澄まされた一つの大きな刃となる。

薄く目を開く。視界に映るのは迫り来る巨大な暴風。頭の中を自分の体が切り刻まれるビジョンが通り過ぎる。

怖い？否、断じて否。目の前に迫る風は壁だ、オレが進む先に立ちはだかる力と言う名の壁。ならばそこに恐怖など無い。立ちはだかるなら斬るだけだ。たとえその壁が何であれ、オレはいつもこの手で切り開いてきた。

斬れる。いや………斬る！！。

「魔神剣………刹牙アアア！！！」

目を見開くと同時に刀を真上に振り抜いた。黒き刃と暴風がぶつかり合い、衝撃波が拡散した。本来ならここで力の押し合いが始まる

のだが、既に勝負は決していた。それはオレが剣を”振り抜けた”ことが確かな証拠だ。

暴風が縦に両断され、小規模のサイクロンが巻き起こる。恐らくこの向こう側にいるセイバーさんはオレが打ち勝ったことに喜び、微笑んでいるだろう。だが生憎、これで終わりではない。

『マスター!!』

「……うおらああああ!!!……轟・剣!!!」

振りぬいた刀を逆手に持ち替え、闘気を瞬間圧縮。そのまま風の壁に目掛けて全力の投擲した。

オレの手を離れた相棒は一瞬で音速を突破し風の壁の向こう、セイバーさんに目掛けて迫る。セイバーさんは大層驚いているだろう。さて、相棒だけではなくオレも働くでしょう。

「スカラーガンナー!!!」

右手で拳を作り、圧縮した闘気の砲弾をヴェルフグリントが開けた穴に向かって撃ち出す。詠唱術が効かないセイバーさんでも魔力を使っていない物理攻撃は効くはずだ。

発射を確認したと同時にもう瞬動も出来ない足に力を込めて走り出した。やはり足に大した速度は期待できない。試すなら、今だ。

走りながらシノンとは体を前に倒した。一見転倒したように見えるが、シノンの足は前に走り続けている。だがこのままでは確実に転倒する。

大きな金属音の後に衝突音が響いた。シノンの放った轟剣がセイバーに弾かれ、セイバーの鎧に闘気の砲弾が直撃したのだ。

シノンの体が完全に前倒れの角度になった。体はそのまま地面に倒れるはず。

しかし、シノンが力を籠めた足で地面を蹴った瞬間、それは覆された。地を蹴った瞬間、シノンの体が物理法則を無視したように爆発的に加速したのだ。脚力的にも速度的にもそれは瞬動ではない。

では何か？実はこれこそがシノンが咄嗟に思いつき、試そうと考えたもの。

その名も『闘気放出』。セイバーの魔力放出は魔力を瞬間的に放出して能力をブーストするもの。なら、魔力と対の存在となつている気、そしてその気に近い存在の闘気でも同じことが出来るのではないか？とシノンは考えたのだ。

結果的にシノンは体をわざと前のめりに倒し、背中を中心とした部分から闘気をブースターのように放出して、瞬動を上回る加速を可能にしたのだ。ぶつつけ本番もいい所だがシノンの経験で言えば実戦は最も良い経験を積ませるものだ。

闘気による加速でシノンは風の壁を突破し、スカラーガンナーが当たって怯んだセイバーに肉薄する。そのクラスに恥じず、セイバーはすぐに反応した。

しかし、例え英霊であろうとその体の形は人間。最初に飛んで来たヴェルフグントを弾く時に全力で剣を振るったセイバーは剣を天に掲げるように振り上げているのだ。そのまま剣を振り下ろしてもシノンには既に懐に入っているので届かない。

シノンの拳がセイバーの腹部に触れる。走る衝撃。秘奥義の連続使用で出せる術技も無かったが、その一撃はセイバーに確かなダメージを与えた。

腹部に拳を当てたまま、シノンはその場で膝を着いた。ついに体力が限界を迎え、立っているのも辛くなったのだ。すぐに意識も消えていくだろう。

意識が消えそうな中、シノンは頭をセイバーに撫でられた。そして・
・・・・

「本当に見事です。シノン……」

かつてのブリテンの王であり、聖剣エクスカリバーの使い手、アーサー王・アルトリアから偽り無き本当の敬意を称された。

王の称賛を受け、シノンはその場に崩れ落ちた。その時のシノンはどこか満足したような小さな笑顔を浮かべていた。

第3話 サークヴァント講座 VSセイバー編（後書き）

スキル『闘気放出』

セイバーの魔力放出を真似てシノンが独自で考えた技。

まだ扱いが完璧ではないのでランクはB+（サーヴァントランクで）という所だが、セイバーほどのレベルまで扱えれば間違いなくA+に辿り着ける能力である。

ご覧いただきありがとうございます。

シノンにはこのまま冬木市で新技能を増やしてもらおうと考えています。相手はサーヴァントですから何もかもが命懸けです。

では、また次回。

第4話 サークヴァント講座 VS キャスター & 凜編（前書き）

遅れてしまいました。

では、どうぞ。今回はキャスターと凜が相手です。

第4話 サークヴァント講座 VS キャスター & 凜編

Side Out

冬木市の中で一番歴史が根強い大きな寺、その名は柳洞寺。その境内にシノンが立っていた。しかし、その表情はいささか不機嫌の色が漂っている。その原因はまだ残る修行で出来た傷でもなく、嫌な出来事があったわけでもない。

根元がまったく違うと言ってもシノンは過去に宗教団体に殺された経験があるのだ。心の中ではあきらめかけていても本能の部分がどうしてもこういった場所を拒絶してしまう。その酷さは生きている限り教会などには絶対に足を踏み入れてたくないと思うほどだ。

しかし今は二ヶ月しか時間が無いという状況なので不機嫌なのは表面上で留まっている。むしろこの場所のことよりもシノンの心の中では新たな修行の相手に対しての関心の方が強かった。

そしてその修行の相手をする”2人”はシノンの前方に佇んでいる。

一人は既にシノンが会っていた遠坂凜。もう一人は紫の儀礼服の上に長いローブを深く被って顔をよく見せない格好をした女性。その雰囲気と格好から言うまでもなくその正体はサーヴァント。その身に与えられたクラスはキャスター、つまりは魔術師だ。

ちなみにシノンは知らないが、キャスターの攻撃手段は主に魔術、しかし他のほとんどのサーヴァントは対魔力のスキルを有している

のでキャスターのクラスは全サーヴァントの中で最も弱いと言われている。とは言ってもそれは”サーヴァントの”中での話、英霊であることに変わりはないことからその身が持つ力は常識を遥かに超えている。

そして、優れた魔術師二人が揃っているという時点でこの先何を行うのかはシノンには漠然と想像できた。

「・・・さて、多分予想できてるかもしれないけど、私達はこの一週間であなたの魔術技能を鍛え上げるわ」

忘れていた人もいるかもしれないがシノンはゼルレッチに魔術を教えられたことがあり、魔術を使うことが出来る。教えてもらったのは、強化・解析・投影・ガンドの四つ。その全てがゼルレッチの気まぐれで教えてもらったもので、魔術の錬度はかなり中途半端だ（ちなみにゼルレッチがなぜこの4つにした理由は咄嗟に土郎と遠坂のことが頭に浮かんだから）。

魔術を教えられた頃はシノンも多少は魔術を頼りにしていたのだが、今ではほとんど使用していない。

理由は単純、魔術よりシノンの鍛え上げた術技の方が強力になったのだ。故に使うこともなく、ただ覚えている技術の一つとして頭の隅にしまっけて置いた。

しかし、それはシノンの魔術技能が中途半端な状態でほったらかしになっているからだ。土郎並の異例ではないが、シノンの使用する投影は充分に戦闘に利用できる。完成させれば今より遙かに役に立つだろう。

「……それじゃ、シノンだったわね。試しに魔術を一度使ってみて……あと、この周りには人避けの結界を張っておいたから周りの目を気にする必要はないわ」

「はい。 創造、開始（クリエイト、スタート）」

キャスターの言う通り、境内を見渡してみても住職は一人もいない。気を取り直し、シノンは瞳を閉じて魔術回路を起動させ、頭の中で適当な無銘の剣をイメージする。続いてこのイメージを元に魔力で剣を形にする。これが今まで何度もやってきたシノンの手順だ。……しかし、その手順は突如、根元から崩れ去った。

ブシュツッ！！ポタポタポタ！……ドサツ！！

「……は？」

零れた声はその場にいる3人全員のもの。誰一人さえ目の前の現象に理解が追いつかない。

シノンが魔術回路を起動させ魔術は発動した。それにより生まれた無銘の剣が右手に握られた瞬間、突如シノンの口から大量の鮮血が吐き出されたのだ。それによりシノンはその場に倒れる。

凜やキャスターはもちろん、血を吐いた本人のシノンでさえ呆然としている。

今までシノンは何度も魔術を使ったことがあったが、吐血などとい

う現象を体験したことはない。確かに魔術は手順の一つでも間違えれば重大な損傷が起こる可能性がある。しかし、今の魔術に不手際は一切存在しなかった。そのことは指導役である最高級の魔術師二人が保証できる。

「はっ！！……ちよつと！シノン、しっかりして！
！ キャスター、治療を手伝って！！」

「教える生徒が初日に死ぬなんて笑えないわよ！！……ちよつと、なによこれ……首筋の頸動脈が切れてるじゃない！例え魔術に失敗したってこんなひどくなるなんて……」

1時間後。

「………んで、なんでこんなことになったんですかね？」

凜とキャスターの適切かつその場での最高の治療によって無事だったシノンはまず原因を訊く。といっても吐血のせいか顔の血色はあまりよくはないが。

凜とキャスターはシノンが異世界で経験したことや素性などからあらゆる原因を検討した。そしてその結果、最も真実に近いものを教えた。

「……これはあくまでも私とキャスターの仮説なんだけどね？恐らくあなたという存在が持つ価値観というか、世界への認識能力が混乱しているからだと思っの」

「世界への・・・認識能力？」

「わかりやすく言うと、個々の人間が抱える”独自の感覚”かしらね。あなたは投影魔術を使う際にどんな結果を頭に思い浮かべているのかしら？」

「え？そりゃ・・・イメージした道具が目の前にある結果ですかね」

「そうね。それが当たり前の感覚。しかし、今のあなたはその感覚が混乱しているの」

「????？」

シノンにはキャスターの言っていることの意味がまったくわからなかった。精神論の話をしていることはわかるのだが、それがなぜあのようなグロテスクな現象の原因になるのだろうか。

「つまりね。あなたも知ってる通り、私たち魔術師は神秘を味方につけて魔術を行使している。けどシノン、あなたは別の世界で魔導師という存在とそれらが使う”魔法”を知った・・・」

魔術師と魔導師、この二つは似ているように見えるかもしれないが、存在定義のベクトルはまったく正反対。魔力を術の燃料に使う部分は確かに同じ。しかしそれだけだ。

魔術師は過去から刻まれた神秘を使う、いわゆる”オカルト”の力。対して魔導師の使う魔法は”高度な科学技術”が形を成した物。

「過去を目指す魔術師と未来を目指す魔導師。あなたはこの二つの認識から互いに引つ張られている状態なの。．．．いえ、少し違うわね。恐らくあなたの体は魔導師側に引つ張られている。でなければあれほどの反動が帰ってくるはずない。何か心当たりはない？魔導師関係の物質や粒子を体に取り込んだ、とか」

そう言われてシノンには自然と右手を見た。その右手は魔導師の世界でも危険視されているロストロギア、ジュエルシードを取り込んだ腕だ。恐らくシノンの体がキャスターの言う魔導師側になったのはこの右手がジュエルシードを取り込んだ時だろう。

よく考えてみればジュエルシードを取り込んでからシノンが魔術を使ったのは一度、海上のジュエルシードにソードバレル・フルオーブンを使った時だけだ。あの時は何も起こらなかったが、あれが最後の魔術行使だったということだろう。

「．．．話を纏めるわよ。キャスターと私が見る限り、シノンの体はもう大した魔術は行使出来ない。そして今出来るのは魔術以外にシノンが鍛えるべき能力を見つけ、それを鍛えること」

「魔術以外に鍛えるべき能力、か．．．」

『マスター、せっかくだのであれについて話してみても？時の庭園で使ったアレです』

「ああ、あの頭の中に色んな情報が流れてくるやつか。．．．そうだな、アレも出来ればものにしたい」

そう言ってシノンは凜とキャスターに謎の力について説明する。

「なるほど。重力をある程度操作し、脳内でそれらに必要な物理学計算、つまりは演算を行う、か。キャスター、どう思う？」

「使いこなすことが出来れば恐ろしい力になることは確実ね。しかも訊いた限りその力は魔術でも魔法でもない。この子自身が独自に身につけた異能。そうね、俗に言う”超能力”ってやつなんじゃないかしら？」

「超能力って、サイコキネシスとかテレポートとかのアレですか？」

「ええ、あなたの場合は重力操作、少し違うけどグラヴィテーションって所かしら」

重力を操る。ピンと来ない言葉かもしれないがその言葉が意味する本来の力はすさまじいものだ。最終的にはシノンの工夫次第だが、魔術を使えなくなった分の代わりとしてこれは充分すぎる力である。

「でも、なんでいきなりオレの体がそんな能力を手にしたんですかね？」

「ああ、そりゃ多分あなたの右手にあるソレのせいよ。取り込んだときの痛みや感覚が体に突然変異を引き起こしたならおかしくないわ。……んじゃとりあえず、まずは力を自在に使えるようにしましょう。感覚で発動させる力なら私たちで充分手伝えるしね」

S i d e シノン

重力操作の鍛錬を始めて既に5時間が経過した。

凜さんとキャスターさんのアドバイスを元に努力して発動だけは自由に行えるようになった。それでも脳内での物理学計算などが思い通りにいかず発動する時間が遅い。二人が言うにはオレの脳がまだ演算に慣れていないからだそうだ。

だが発動に時間が掛かる分、発動した力はすごい一言に尽きる。背丈分の重力壁を使って防御力を見てみたのだが凜さんとキャスターさんの魔術を受け続けて10分間揺らぎもしなかった。感想を聞いてみるとAランクの魔術を集中的にぶっ放さなければ簡単には撃ち抜けないと言われた。

ちなみに試してみた結果、重力は集まると黒紫色になることがわかった。(イメージ：アスラクラインの？鐵が使う重力の色を少し黒くした色)

そして今は脳を演算に慣れさせるために模擬戦を行いながら能力の鍛錬を行っている。この模擬戦ではオレは刀、つまりデバイスの使用が出来ず、使えるのは詠唱術と体術と重力操作。二人からの要望は一つ、遠慮せずに殺す気で来い、だそうだ。

対する凜さんとキャスターさんは二人組みになって問答無用の攻撃

を仕掛けてくる。

キャスターさんは大きな羽を広げて空中に浮遊した状態から紫色のレーザーを連射し、凜さんは地上からガンドを機関銃のように撃ちまくってくる。キャスターさんの放ってくるレーザーは地面に着弾した途端に大爆発を起こして地面を抉り、凜さんのガンドは物理的に高い破壊力を持っている上に体調に即効性のある呪いが込められている。

どちらとも一発喰らえば続いてやってくる連射で蜂の巣にされてしまふ。瞬動と闘気放出をこまめに使用して回避を行っているが、なにぶん二人の連射数が馬鹿げているので回避しきれないものもある。

そこで重力操作の出番、走りながら避けきれない攻撃全てを高重力場で防いでいる。最初は走りながらでの演算など到底出来ないと思っただが、ここで意外なスキルが役に立った。魔導師の基本中の基本であるマルチタスク、分割思考である。これによって”演算”のみに一部の思考を割いているのだ。

オレ自身の脳がどれほどの負荷に耐えられるかはわからないがまだまだ余裕はある。そろそろ反撃といこう。せつかくだから重力操作の実験もしてみよう。

正面に走り抜けていた状態から180度反転。同時に闘気放出によって減速を一切行わずに再加速。以前なら体が悲鳴を上げる動きだが、セイバーさんに鍛えられた一週間によって今では闘気放出と瞬動を同時に使っても体に負荷が掛からなくなった。

「ちよっ!？」 何よあの動き!？重力操作ってあんな出鱈目な動きが出来るようになるの!？」

「ちがうわね・・・あれはあの子が自分の力で可能にしたものよ」
まず狙うのは空中のキャスターさん。闘気放出による精密な連続加
速で降り注ぐレーザーを縫うように回避しながら演算を開始する。

（掌に重力を一点に収束・・・球体を作るように、丸く、丸く・・・）

右掌に紫電が迸り、オレの掌よりも大きな紫の球体が出来上がる。
（イメージ：まんま？鐵の高重力球体）サイドスローでキャスター
さんに投擲・・・いや、確かな質量を保っていない球体なので高
速射出と言ったほうが近いかもしれない。

「なっ!?!?・・・くっ・・・コリユキオン!!」

未知の球体の急接近に一瞬驚いたようだが流石は英霊、即座に右手
の人差し指で刻印を描き大きな紫色の球体を撃ち出す。オレの放っ
た重力球と少し似ているので同質の物なのかもしれない。

衝突。数秒間球体同士の拮抗が続いたが互いに数秒で爆発した。し
かしこれでいい、あの重力球は実験と同時にただの目くらましだ。

「　　ッ!?!?・・・キャスター!?!?　　真下っ!!」

そう。二人の注意が重力球に向いていた隙にオレはキャスターさん
のほぼ真下に移動していた。上へ跳躍。そして瞬動も闘気放出も使
っていないはずのその跳躍は一瞬でキャスターさんのいる高度に辿
り着いた。

キャスターさんは驚きで目を見開き反射的に障壁を展開するが、遅い。

「がッ……！！！」

障壁が展開される前にオレの左手がキャスターさんの首を掴む。そのまま左手を横に振るって頭を真下に向ける。オレの体は自然と落下を始めるが、突然落下速度が跳ね上がり地上に向かって急降下する。

まるでミサイルが降ってきたかのような衝撃と速度でキャスターさんを地面に叩き付ける。まずは一人目。

間を置かずその場から瞬動で離脱。先程まで立っていた地点に無数のガンドが着弾する。さすがは凜さん。僅かな隙すら逃さずに的確な攻撃を放ってくる。

気配を感じた。ちょうど背後。巻き起こっていた土煙の中から細い腕が突き出された。回避や迎撃は間に合わない。背中越しに重力場を生成、かなり不安定なものだが近づく腕の勢いが少しでも減ってくれば充分だ。

振り向くと本来の勢いが殺されている拳がオレの胸に触れる。即座に払い落とそうと右手を振り上げた。しかし、突然胸部に鉄骨を叩き付けられたかのような衝撃が走り、体が後ろに後退する。

(これはっ……！！……八極拳の絶掌か……！！)

八極拳をマスターした者は、手が相手に触れてさえいけば最大威力の打撃を放つことが出来るらしいがここまでとは。……だが、

これで……。

「……チエックです」

オレ自身を中心に半径2メートルの地面が無色の圧力を浴びて急速に陥没した。オレ自身には何の影響もないが凜さんの体は地面に勢いよく叩きつけられた。

魔術により隠蔽されていたとはいえ先程まで爆音が絶えなかった境内が沈黙に包まれる。体中打ち身お埃だらけになって立っていたシノン は短く息を吐いて何も無い虚空に目を向ける。

「これで、いいんですか？」

「ええ、上出来よ。あなたはどうかしら？お嬢さん」

「文句なしね。こんなのが魔術師でなくてよかったって思うほどよ」
虚空から現れたのは人二人分ほどの大きさで広げられた紫の布。布が捲られ、そこから現れたのは外傷など一つも負っておらず、上機嫌な凜さんとキャスターさん。

そう、先程まで戦っていた二人は本体ではなかったのだ。それに気付いたのはキャスターさんを地面に激突させた時、腕越しに感じる手応えに若干の違和感を感じたのだ。まるで今まで生きていた生物から突然魂が抜け落ちたような感じに近い。

よく考えれば二人はセイバーさんのように近距離での防御方法を持つているわけではない。そんな二人がセイバーさんと一週間剣を交えているオレと正面から本気で戦うわけがないのだ。

しかも相手は超が付くほどの熟練魔術師。それを二人掛かりも相手にしてオレがここまで外傷を負っていないのはおかしすぎる。なんだ、疑問点など全てオレ自身が証明しているではないか。

「しかし、本体ではないとはいえ最高クラスの幻影を倒すとはね。明日からの鍛錬が楽しみね」

「ふふ、珍しく同感ね。シノン、約束しましょう。この一週間であなたに自分の異能の素晴らしさを教えてあげるわ」

この時に二人の笑顔を見て、本番（地獄）はここから始まるのだな、とオレは心の中で一人納得した。

第4話 サークヴァント講座 VS キャスター & 凜編（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

シノンが魔術を捨てて新たな力チートを手にしました。

お気付きの方はわかっていたかもしれませんが”重力操作”の力の種類は”とある魔術の禁書目録”にある”超能力”とまったく同じです。

グラヴィテーション
重力操作

元々シノンの奥底で眠っていた力だが、ジュエルシードを取り込んだ際の知識の濁流によって完全に目覚めた。

演算能力はおよそレベル4クラス。

ちなみにシノン自身は気付いていないが、ジュエルシードを取り込んだ際にシノンの脳は高い演算能力を手に入れ、それを完全に扱えるように脳の機能が一部変化していた。

操作できる重力の総量はまだ不明だが、高重力での圧力攻撃、重力場を壁や足場にしたり、自身の体を無重力にして単独の飛行を行うなどの応用性が豊富である。

・重力球

重力を丸い形に圧縮して作り出して高速射出する重力砲弾。本文に

もあるように？鐵の重力球とまったく同じである。威力は最低精度でも魔導師ランクでA Aランクの威力がある。

第5話 サークヴァント講座 VSアサシン編（前書き）

今回は作者が結構好きなアサシンです。

ZUZU様から感想をいただきました。ありがとうございます。

では、どうぞ。

第5話 サークヴァント講座 VSアサシン編

Side シノン

凜さんとキャスターさんの協力で超能力”重力操作”を物にした一週間を終えた次の週、オレは再び柳桐寺に来ていた。正確にはその山門だが。

時刻は夜中の10時。今までのサーヴァント達とは違い、今回の人物は昼ではなく夜を指定してきた。

別にオレ自身は構わないのだが何故夜なのだろう？日が差していると動けないとか？だとしたら相手は吸血鬼か？血を吸われるのは少し嫌だな。

「しかし……やっぱり動きづらいな」

愚痴るようにオレは一人呟く。重力操作をものにしてから、オレは凜さんから出された常時行う鍛錬として”日常の中で自分の重力を数倍に引き上げる”という鍛錬をやっている。

確かにこれなら歩いているだけで全身の鍛錬になるし、演算能力を鍛えることも出来る。だけど、なぜだろう。それを行う前日の記憶がなく、凜さんとキャスターさんの顔に後悔と同情の色が浮かんでいるのは。

そんな考えを巡らせていると、心地よい風が吹き、月明かりが山門を照らした。月明かりを浴びてオレの髪が薄く光り、風によって虚空になびく。ふと空を見上げてみる。そこには、今まで見た中で一

番美しい月が映った。

「……綺麗だな」

「ほう、此処から見る月の美しさがわかるとは……中々興味深い」

一瞬、心臓が止まりかけた。背後から聞こえた透き通る声、それは形の無き刃のように感じた。

膝を折って屈み、首を左に傾ける。何故そうしたのかはわからない。思考ではなく直感がそうさせた。

頭の右斜め上を銀の光りが通過した。一瞬視界に映ったそれは、おそらく刀。

「セットアップ！」

今までと比べ物にならない速度で腰に刀が現れる。ヴェルフグリントが独自の判断でセットアップを行ったのだろう。いつも通りの速度だったらオレは早々に殺されている。

避けた刀が振り下ろされる。オレはそれを右手で抜き放った刀で上に打ち上げる。そこから体を回転させて後ろに刀を横薙ぎに振るう。

「真空破斬！！」

ガンッ！！

しかし振るった刀は注ぎ込んだ力を無視して上に打ち上げられた。

まずい、腹部がガラ空きだ。

「ぐ……ッ!! 獅吼……爆炎陣!!」

「ほう……」

伸びきった右手に左手を添えて無理矢理振り下ろす。刀が地面に触れ、オレの足元で指向性の爆発が起こり爆風が吹き荒れた。

「いやはや……初めは少し驚かすだけのつもりだったが、思ったより楽しく熱が入ってしまった」

喜ばしい感情を隠そうともしない声、耳を頼りにその方向に目を向けると、視線の先には身の丈以上の長刀を持った一人の長身の男性がいた。

その男性の姿は予想と大きく違ってまんま”侍”だった。見るからに上質な着物の上に着た陣羽織がこの時代に生きる人間ではないと確信を促してくる。間違いなくこの人が今回の相手のサーヴァントだろう。

「まだ名乗っていないかったな……私はアサシンのサーヴァント、佐々木小次郎だ」

「佐々木……小次郎……ッ!!」

「む？我が名を知るか。シノン、であったな。あの女狐から話は聞いている。呼び方は好きにせよ」

知っているに決まっている。佐々木小次郎という名前は海鳴市の図

書館の本を読む前から与えられた知識で知っていた。それはつまり、佐々木小次郎が生前、世界に深く名を刻んだのかよくわかる。

「あれ？・・・女狐って・・・？」

「キャスターのことだ。悲しいことに私を呼び出したのはあやつでな、しかし実体が無いサーヴァントではサーヴァントのマスターになどなれはしない。そこであやつは私の依り代をこの山門にし、サーヴァントへの絶対命令権、令呪を使って私を此処の門番にしたのだ」

「じゃあ、時刻を夜にしたのは・・・。この山門から動けないから？」

「左様。・・・さて、では始めるか。生憎と人に何かを教えられる自信など無いのでな、これの打ち合いしかできぬ。お主はその無色の枷を外した方が良いぞ？」

そう言つて小次郎さんが突き出してきたのは右手に握っていた長刀、物干し竿。というかこの人、オレがやつてる重力負荷に気付いてたのか。

思わず口元が緩む。セイバーさんもキャスターさんもきつと有名な英霊なのだろう。しかしオレは二人の本当の名を知らない。それだけがオレの楽しさを歯止めしていた。

しかし今回は違う。目の前にいるのは、真正正銘の剣豪、佐々木小次郎。そうだ、相手の名を知るだけでこれほどに嬉しく感じる。そして今、目の前の存在を超えようと挑むのだ。

小次郎さんは長刀を右手に握ったまま腕をだらりと下げている。しかしそこから隙は見えない。あれが小次郎さんの構えなのだ。対してオレは刀を両手で正眼に構える。

「いね………」

「……行きます」

互いに踏み込むと同時に刀を振るう。狙った場所は同じ首筋。袈裟に振るった刃がぶつかり、力と力が火花を散らす。

しかし小次郎さんはそこから長刀を後ろに引いて唐竹に振り下ろしてくる。刀身を横に構えて受け止める。しかし初撃に続いて再び刀が振り下ろされる。二撃、三撃、そこから腹部を両断せんと長刀が横薙ぎに振るわれた。

オレはその場から闘気放出で後ろに急速後退。そして着地と同時に前方に加速。小次郎さんも微笑を浮かべ、階段を跳躍しながらこちらに降りてくる。

唐竹の斬撃。長刀に受け止められ弾かれる。すかさず逆袈裟に斬り上げるが小次郎さんは体を軽く後ろに引いて避ける。

小次郎さんが喉元を狙った神速の突きを放ってくる。ぎりぎりです。イドステップが間に合ったが長刀の刃先が首筋を掠めた。そのまま長刀の刀身が突きを放った構えから払いを放つように横倒しになった。

「ッ……!!」

膝を折ると同時に重力負荷を使って体を沈める。次の瞬間、頭の上を長刀が通り過ぎた。斬られた銀髪が数本虚空を彷徨う。危なかった。重力負荷で体を沈めてなかったら首を跳ね飛ばされてたな。

「いやはや、楽しいものよ。まさか英霊の身でもない者がここまでやるとはな……」

小次郎さんの顔には純粹に楽しい笑顔が浮かべられている。汗一つ掻いていないのを見ると疲労はないのだろう。別に驚きはない。セイバーさんだつてオレの全力疾走に追いついても汗一つ流さなかった。

ただ、この人との打ち合いはなんとというか、オレ自身が求めていた物に非常に近い。

同系列の武器を使用しているからだろうか？立っている場所から一定範囲以上移動せず、極限まで感覚を研ぎ澄ませ、休む暇なく武器をぶつけ合う。

楽しい。そうだ、今はとても楽しい。首筋を刃が掠めた時の感覚を思い出すと疲労など忘れてまだ勝負を続けたいと心から活力が溢れてくる。

「まだまだ……」

口元に笑みを浮かべて刀を正眼に構えた。小次郎さんは一瞬驚いたようだがすぐに笑みを浮かべて長刀に両手を添える。

再び踏み込む。牽制を含めて小次郎さんの腹部を狙って突きを放つ。しかしそれは予想通り簡単に弾かれる。

ならば次だ。弾かれ続けるなら斬撃の速度を上げ続け、相手の速度を上回ればいい。

20、30、40、50と打ち合い、防がれるたびに互いに攻防の速度が上昇する。

60・・・65・・・70を超えたところで打ち合いの中に術技を混ぜ込んでいく。そして気が付けば斬撃の速度が限界の状態まで上がっていた。

夜の山門には重く鋭い金属音が響く。月明かりに照らされた中、二振りの刀が描く銀閃が空を、地を、縦横無尽に走り回り、銀閃が交わった時には火花が散る。

85を超えたところで小次郎さんの斬撃の速度がオレを超えた。反射的な動きで防御を行うが間に合わず、少しずつ体に傷が走る。しかしオレは攻撃を捨てていない。打ち合いが防御のみになるなどいやだし、それでは勝てない。

100・・・110を超えた。その時、背筋に今まで感じたことのない強烈な悪寒が走った。前を見ると、小次郎さんが初めて構えらしい構えを作っていた。長刀を顔の後ろに引き、柄を顔の横に置くような構え。

左肩に鋭い痛みが走り、刀に衝撃が伝わった。そう感じたときに、オレは刀で胸部を守りながら闘気放出を使い、後ろに倒れこむように後ろに跳んでいた。

一瞬呆然としたが、水平な足場に背中を打ちつけた衝撃ですぐに我

に返る。階段をたどって見上げれば小次郎さんが長刀を右に振り向いたまま硬直していた。その顔は斬撃を外した無念と過去を思い出すような懐かしさがあった。

死んでいた。あの時後ろに跳んでいなければオレは間違ひなく殺されていた。だが何が起こったのかさえよくわからない。小次郎さんがあの構えを作った次の瞬間、目が一瞬だけ三つの銀閃を捉えた。しかもその三つ全てが近付く速さは”まったく同時”だった。

(嘘だろ……今のが、剣技?)

今の斬撃が連続で放たれたのなら驚きはない。最初に放たれた斬撃さえ防げばいいのだから。しかし同時に放たれたのなら話はまったく違う。最初の斬撃が防げても残りの二つの斬撃が残ってしまうので防ぐことが出来ない。

避けるのも恐らく不可能だろう。あれほど長い長刀だ。小次郎さんの踏む込みを加えればその距離はかなり広い。

「まさか……これが、燕返し……」

燕返し。剣豪、佐々木小次郎が辿り着いた秘剣。その詳細は確認されていなかったが、まさか三つの斬撃を同時に放つ必殺剣だったとは。

「いかにも。これぞ我が秘剣、燕返し。しかし奇妙なものよ、よもやセイバーの時と同じ原因で避けられるとは……」

「同じ……?」

「なに簡単なことよ。足場が水平でなかった故、最後の薙ぎの斬撃が入らなかつたのだ。しかし、我が秘剣の内二撃を防いだのは事実。大したものだよ」

そう言つて小次郎さんは構えを解いた。そうだ、ここまでやり合えた。それだけで今日はもう充分なはずだ。しかし、まだ・・・まだ終わりにたくない。

先程の燕返し。アレを見たときに心から思った。あの剣技に挑みたい、あの剣技を手にしたい、あの人を超えたい、と。

「小次郎さん。・・・お願いがあります。もう一度、燕返しを打つてくれませんか？」

「・・・今の足場は水平。先程とは違い三つ全ての斬撃がお前を襲うぞ。わかっているのか？」

「はい、それを承知の上でお願いします」

「・・・承知した。久々に楽しませてもらった礼だ。もう一度我が秘剣を見せよう」

再び先程の構えを取る小次郎さん。その構えからの踏み込みと同時に放たれる秘剣は回避も防御も不可能。打ち破る方法があるとすればそれは、正面から挑み、打ち勝つこと。

だが今のままではどんな攻撃を使つても打ち勝つことは出来ない。ならばあの剣技をものしてやる。まったく同じとは言わなくても限りなく近い剣技を作ってみせる。

「ッ……!?」

刀を右肩に担ぐような構えにする。そして体を前に傾け、踏み込む。小次郎さんの表情が一瞬揺らいたが、それはすぐに消え失せ、同じく踏み込んできた。

大気が、空間が爆ぜる。繰り出される三つの斬撃、それ目掛けて一気に突っ込む。

Side Out

シノンとアサシンがすれ違った。すれ違ったという事はどちらかが一方的に負けたということは無いのだろう。

アサシンは燕返しを放った体勢で、シノンは左袈裟に刀を振るった体勢で静止している。

だが、短い沈黙の後に血飛沫が舞った。発生源は、膝を着くシノン。そしてアサシンだった。シノンは右胸部を袈裟に、アサシンは右脇腹を切り裂かれていた。傷はシノンより明らかに軽いが、”アサシンが傷付いている”これが意味することはすなわち、燕返しが僅かでも破られた、ということ。

「燕返しを……抜けた……?」

「……ハア……ハア……ハア……ッ!」

右胸の傷を抑えて仰向けになったシノンをアサシンは驚愕の視線で

見た。

「何をした……と訊くのは無粋か？」

「い、え……グツ……ハア……考えたんです……オレには3つの斬撃を同時に放つことなんて出来ない、精々二つまでが限界です。だから、その二撃を”どのように振るう”のか考えてみた」

初めからシノン自身がよくわかっていたのだ。燕返しは真似ることは出来ない。

元々シノンは才能に愛されていない。生み出された時から身体能力は優れていたが才能は明らかに低いものだった。だからシノンは死に物狂いで努力し、見た技を自分なりに再現し、工夫する技術を身につけ、それを極めていった。

そして今回シノンが燕返しを見て捉えたのは、斬撃の軌跡、いわば刀身が描くコースの角度である。

アサシンの燕返しが描く斬撃は前方に目掛けた大きな山なりだ。シノンは二つの斬撃を前方よりに振るい、”<”状の形を形成したのだ。この形は燕返しのような必殺ではなく、戦闘の最中に切り札として使用する奇襲を目的としている。

衝突時に、アサシンの右、左の袈裟斬りとシノンの一撃目がぶつかり、最後の払いと二撃目が打ち合った。しかし所詮シノンの技は急造したもの、一撃目が僅かに打ち負けシノンは右胸を斬られたのだ。

アサシンは心の中で冷静に認めた。”この少年は将来、自分を超える”と。

セイバーの時と状況が同じとはいえ、必殺の秘剣、燕返しを一度回避し、二度目は僅かながら秘剣を抜け自分に傷を負わせた。

先程の剣技もまだまだ荒削りだが、きちんと形にすれば間違いなく秘剣の域に達することが出来るだろう。そしてそれが出来るのは同じ境地にいる自分だけ。

（やれやれ・・・元々は無名のこの身が他人の剣を鍛え上げることになるとはなあ。・・・だが、それもまた一興か・・・）

「シノンよ、今からその剣技、『しろかぜ白風』と名乗れ。私の燕返しに並ぶやもしれん剣技、この一週間で完全な形にしよう・・・」

「はい・・・！」

それから夜の月は、美しく輝いていた。

第5話 サークヴァント講座 VSアサシン編（後書き）

白風 しろかぜ

シノンがアサシンの燕返しを参考に作り出した剣技。技の名前は風のように速く、鋭く斬り裂くことから。（白の文字はシノンの髪の色から）

闘気放出や瞬動による急速な踏み込みから二撃の斬撃を同時に前方に目掛けてく状（横から見た形）の形に繰り出す。簡単に言えば最速で踏み込んだ状態からX状の斬撃を放つ技。

（イメージ：仮面ライダー555のカイザースラッシュ）

強力な速度と突撃力を合わせた防御を無効化する技なので、燕返しとは違い戦闘中や初見の時などの奇襲に向いている。

今回はアサシンから新たな技を習得しました。

予定ではこの技をシノンのエース技にしたいと思っています。（シグナムの紫電一閃的な）

では、また次回。

第6話 サークヴァント講座 VSアーチャー編（前書き）

今回はアーチャーです。

では、ごじゆ。

第6話 サークヴァント講座 VSアーチャー編

Side Out

温かな日差しが差し込んだ森の中、二人の男性が遠く離れて相對していた。その距離はおよそ50メートルほど。一人はデバイスをセットアップ状態にしたシノン。もう一人は洋弓を構え、褐色の肌の上から上から下まで真っ黒の格好をした弓兵のサーヴァント、アーチャー。

二人はその位置からまったく動かない。ただ無言で武器を構え、佇んでいる。

バンツ！！

突然響く大きな発射音。弾丸でも発射されたようなその音の発生源はアーチャーの弓だった。

サーヴァントに選り抜かれた英霊の実力は常識を遥かに超える。

それは当然弓矢とて同じだ。現にアーチャーのが放った弓矢は魔術による青い光を纏ってライフル弾を凌駕する速度に到達している。当たれば間違いなく怪我では済まない。そしてそれは前方にいるシノンに急接近する。

迫る脅威に対してシノンは冷静に左手に持った刀を振るった。右逆袈裟に振り抜かれた刀の刀身は打ち合わせをしたかのようなタイミングで矢と激突し、それを弾く。

弾かれ空中を彷徨う矢は光を失った。そして矢の正体は、矢の形にそっくり似せた木の枝だった。先端は潰されていて取り敢えずはシノンの体を貫く危険性は薄い。しかし放たれる速度が速度なので今のシノンは柔招来と金剛剱の同時発動を小まめに行っている。

「そら、次だ」

弾かれた矢が地に落ちるより先にアーチャーが次の矢を撃ち出す。速度は先程より速い。矢を構えた気配さえ感じさせないその動作速度は下手をすれば一秒にも満たない。

シノンは振りぬいた勢いを殺さずにそのまま刀を右袈裟に振り下ろす。見事に矢を弾くが今度はシノンの腕に僅かな衝撃が伝わってきた。アーチャーが矢の威力を強めたのだ。

ババンツッ！！バンツッ！！

今度は同じ速度で二連射とそれに続いてもう一発。シノンの動体視力は即座に狙われている箇所を特定する。同タイムで迫る矢は左肩と右膝、遅れて放たれた矢は胸の真ん中を狙っている。

シノンは刀を両手で持ち、左から三日月を描くように振るった。二本の矢を斬り落とした手応えを感じながらシノンはそのまま刀を唐竹に振り下ろし最後の矢を真つ二つに両断する。

アーチャーは休む間など与えずに次の矢を撃ち出していく。今度の数は二乗の9発。シノンも即座に体を起こして素早く刀を振るう。弾き、払い、折り、斬り裂いて全ての矢を無力化していく。

「チツ……！ハツ……！」

しかし、刀一本で防ぎ切れるほど英霊の弓撃は甘くはない。次第にシノンの振るう刀が矢の連撃に追いつけなくなって来た。その証拠に、シノンは先程から回避行動をしながら刀を振るっている。

「ッ……！」

額を狙った矢をシノンは首を傾けてぎりぎり避ける。続いて左胸に迫る矢を割り込ませた刀の腹で弾く。だがその衝撃で体が後ろによろめいた。

左膝と右脇腹に走った衝撃にシノンが顔をしかめた。遂に矢が体に当たったのだ。

右足だけで地面を強く蹴り、左に転がる。すぐに起き上がり刀を振るって矢を斬る。捌ききれない矢は空いている左拳や両足の蹴りでへし折っていく。

だが、限界がやってきた。

空中に浮いたまま蹴りを放った左足の膝に再び矢を当てられた。体を崩した体が地に落ちるが、シノンは右足だけでなんとか着地する。それと同時に右膝と右手首に矢が直撃し、シノンの体は地面に倒れ刀が手元から離れる。

シノンは諦めない。両手を地面に着いて上半身を起こそうとする。

しかし、勝負は既に着いていた。

地面に着いた両手が放たれた矢によって地面から離れる。再び地面

が迫るが、今度は倒れる前にアーチャーの放った矢がシノンの額を直撃した。

S i d e シノン

「58発……防ぎ続けるといふ条件の中では大した物だな。時々思うのだが、キミは一人で死徒とやり合えるんじゃないか？」

「痛つつ！……冗談言わないでくれ。オレが得意な相手は大型の獣や魔物だ。人の形をしたびっくり生物の相手なんて向いてないし、やりたくもない」

「……まあ確かに、キミが使う技を見るとそちらの方が向いているな。対人戦で使うにはいささか火力が強すぎるものがある。だが味方を巻き込まない機能まで着いているのだ、羨ましい限りだよ」
額に張った湿布をテープで固定しながらオレはアーチャー（さんは着けなくていいと凜さんから言われた）とさっきの鍛錬のおさらいをしている。

今回アーチャーと鍛えることにしたのは”防御と回避”。アーチャー曰く、近接戦闘の鍛錬では自分の技能は他のサーヴァントに比べて役に立たない”らしい。

そこで思いついた鍛錬内容は、アーチャーの弓撃を一定範囲内に留まりながら防ぐ、または避けるというものだ。

で、やって見た結果、オレは58発の矢を避けたところで先程のよ
うに額に矢を撃ち込まれたというわけだ。・・・しかし痛い、こ
りゃしばらくは腫れるかも。

「・・・それで、私から見た限り、どうにも今のキミは左手が生か
されていないな。対象が矢というのもあるだろうが、右手の刀を使
うのがほとんどだ」

確かに矢を弾く際はほとんど右手に握った刀を振るっていた。左手
を使ったのは終盤位からだろうか。

「左手にも同じ刀を持ってスタイルを双剣に変えてみてはどうだ？
片手だけであれほど出来たのだ、使わないのはあまりにも惜しいだ
ろう。それに双剣ならば私もある程度は教えられるしな」

双剣か。アドリビトムではロイド、スパイダ、ノア、あとかろうじ
てリオンも入るだろうか。

グラニデでは双剣士の武器は両手に剣を持つだけだったが、今のオ
レの武器はヴェルフグリントだ。スタイルを変えるならば設定も変
える必要があるんじゃないのか？

グラニデのオレは職業上ほとんどの武器を使えるのでその場で拾っ
た剣を使って双剣にしたり、折れたらすぐに捨てて刀一本に戻す、
という感じの戦い方だったが。

「どうだ？ヴェルフグリント」

オレは待機状態で空中に浮いている相棒に聞いてみる。

「そうですねえ……ここには設備もありませんので。今の設定の消去と新しい設定の準備を合わせて……30分頂ければ可能です。マスター……ソフィア、あなたも手伝ってくださいね？」

ヴェルフグリントはオレの身勝手な頼みを一切嫌がるうとせずに引き受けてくれた。同じく空中に浮いているソフィアもスイッチ部分を点滅させて承諾を示している。

「では、その30分の間に見合った形の双剣を決めておくか……来いシノン」

そう言われてアーチャーに着いて行くが、こんな場所ですらやって見合った双剣の形を決めるんだ。

そんなオレの疑問に答えるようにアーチャーの両手に陰陽の色をした中国風の双剣が現れた。意識していなかったが恐らく今のは投影魔術、錬度もオレの物とは比べ物にもならない。あれ？アーチャーのクラスって弓兵だよな、双剣使いの弓兵で魔術が使える英霊なんているのか？

「今からこのように様々な形の武器を二つセットで出していく。その中でじっくり来る形があれば言ってくれ。そこからその武器の長さなどを調整する……あと、合わない判断したものはその場に放り投げてくれ、勝手に消える」

説明を終えてアーチャーは手に持つ陰陽の双剣を投げってくる。なんと両手でキャッチしたが、抜き身の刃物投げるな！

「それで？……素振りでもして確かめればいいのか？」

「生憎違つ。．．．なに簡単なことだ、実戦風に使えばいい」

アーチャーの両手に再び陰陽の双剣が握られる。しかし今度は手放さずに中段に構えた。表情がかかつてこいと言っている。あぁなるほど、打ち合いながら調子を確かめると．．．。

納得と同時に踏み込む。最初は右手の白い剣で袈裟斬り、アーチャーも同じように白い剣を打ち付けてくる。

そのまま互いに右手を横に振り抜き、今度は左手の黒い剣を上段から振り下ろす。再び衝突。そこからすぐにアーチャーはバックステップで距離を取った。

オレは手に握る双剣を数秒見詰め、地面に放り投げた。アーチャーはその行動に驚かない。二回の打ち合いでこの双剣がオレに合わなかったただけだ。

「次だ」

双剣を上空に軽く投げて両手に二本のレイピアを投影、そのままオレに放り投げてくる。オレは無言でキャッチ。アーチャーも双剣をキャッチした。同時に再び打ち込む。

打ち合い 放棄 投影 打ち合い。こんな流れを延々と繰り返していく。様々な剣を振るい、捨て、自分に合った武器の形を求めていく。

両手のクレイモアを後ろに投げ捨てる。今ので捨てたのもう何本目だろうか？

アーチャーが新しい武器を投げってくる。キャッチと同時に振りかぶる。

今両手に握っているのは日本刀、というか普通の長刀だ。今まで振るった武器の中でこれは一番長く使っている。

だが、まだ何か満足になれない。そう思って長刀を放り投げる。

「今でもダメか……」

「刀の形がしつくり来るのは間違い……だけど、まだ何かが満たされないんだ。ごめん」

「謝る必要は無い。これはキミの生死に関わることなのだからな。しかし、刀の形で他の武器か。少し待ってくれ……ふむ、これならどうだ？」

アーチャーが少し考えて新たに投影したのは、刀身が普通の長刀よりかなり太い太刀だった。放り投げられる二本の大大刀をキャッチ。無言で斬りかかる。ちなみに、アーチャーも何度か剣に限界が来たので今は二本の西洋剣を構えている。

もう何度目かわからない衝突。そこから開始される打ち合い。立ち位置を変え続けながら武器をぶつけ合う。今までの武器は長くて10回打ち合えばすぐに放り投げていた。しかし、今回は違った。

「・・・おっ・・・おおっ・・・！」

無意識にフクロウのような声が漏れる。オレとアーチャーは動きを止め、構えを解いた、

(これか・・・今までに無かった何かの正体は・・・)

「なるほどな・・・ただの刀では感じられなかった不満は斬撃の威力、わかりやすく言えば切断力ではなく、破壊力か」

「そうだ、”刀”は斬るのではなく正確には切り裂く武器。だがオレが欲していたのは”剣”が持つ破壊力なのだ。」

「それで・・・^{イメージ}形は纏ったか？」

「完璧にな」

『それでは開始します。最初の時とは違いますので、イメージして頂くのは武器だけで結構です。それではカウントを始めます。3・2・・・1・・・どうぞ』

打ち合いを終えて少し経ち、今はヴェルフグリントの武器の再設定を開始している。

初めてセットアップをした時と同じだ。漠然としたものではなく、正確な形をイメージする。

『イメージ受信完了。生成開始』

両手を左右に伸ばす。両掌に物体を掴む手応えを感じた。その物体は急速に収束する光で確実な形になっていく。

『完了』

ヴェルフグリントの声と同時に両手に握っている武器を眼前でクロスさせた。

そこにあるのはまったく同じ形をした大きな刀。だがその形は刀と呼ぶのは少し疑問が浮かぶかもしれない。

まず柄が日本刀のそれではなく、西洋武器に使われる僅かに湾曲した形。銀色の刀身は上だけでなく、鐔の下まで伸びている。厚さも太く、片手で使うのはかなりの腕力と技量が必要とする。(イメージ：マブラヴオルタネイティブの不知火や武御雷が使う74式近接戦闘用長刀)

続いて後ろの腰部分に大きな黒塗りの鞘がクロスするように二つ出現する。(イメージ：二つの鞘がラトスクのエミルと同じ付け方でクロスしている状態)

「成功・・・だな」

「これはまた・・・大太刀どころか刀と呼ぶのも怪しいな。同じ形を投影しようとしても出来るかわからん・・・」

『しかしマスター、この状態では白風を放つことは難しいのでは？』

「二本同時に振るえば出来るかもしれんが、一本だけは鍛錬あるのみ、だな……目的としては片手で白風を使えるようになるってところだ」

『了解しました』

「それじゃ……アーチャー、最後に調子確かめたいから付き合ってくれん？」

「普通はここで終わりにするべきだと思うのだが……まあいい、この際最後まで付き合おう」

その後はしばらく打ち合ったが、新しい武器の使い心地は最高。打ち合いでは一本も取られなかったし、防御訓練は時間切れまで持ち堪えることが出来た。

第6話 サークヴァント講座 VSアーチャー編（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

マイソロ3がついに発売しました。歴代のカノンノが全て参加するのは流石にぶったまげましたねえ。だが嬉しいから良いのです。

今回はシノンの武装が変化しました。

シノンはチート職業だけど武器はデバイスなのでそのチートっぷりは今の状態ではあまり発揮されていません。技は全て覚えているのに武器が無い状態です。

双剣に変えたのは単純に「そろそろ、刀一本じゃ無理があるか」と思ったことと「双剣の方が戦い方が多くなる」と思ったからです。

さらに双剣でオリジナルの新技も追加されます。

白風・散ちり

形は通常の白風とあまり変わらない。

刀一本の時と違い、二本同時に斬撃を放てば良いので（それでも、他人が真似られる可能性は皆無だが）通常の白風より斬撃の破壊力が高い。ただし、二本だと同時に振るうタイミングがズれるので突撃力が通常より劣っている。

よってシノンが目指す白風の最終形態は『刀一本ずつで二つの白風を同時に放つ』こと。

では、
また次回。

第7話 サークヴァント講座 VSバーサーカー編（前書き）

今回は序盤から登場したバグキャラ、バーサーカーです。

それと、PVが30万を突破しました。皆さん本当にありがとうございます。

では、ごっご。

第7話 サークヴァント講座 VSバースーカー編

Side シノン

ここはセイバーさんと一週間何度も戦った広い森。オレはその森の中で今回の相手を見上げる。見詰めるではない、見上げたのだ。

目の前に立っているのは巨大な黒の巨人。軽く2メートルを超えるその巨体は子供の姿をしているオレを無表情で見下ろしている。その巨人の名はバースーカー。理性を代償に力を求めたサーヴァントである。

バースーカーの肉体はどこまでも鍛え抜かれ、肉体そのものが一つの鎧と化している。衣服は唯一つ腰に付けられている防具のみ。そして右手に握られている巨大な斧剣はまともに受ければオレの肉体など簡単に両断してしまうだろう。

「ふふ、どう？・・・実際に見たバースーカーは」

愉快そうに笑いながらバースーカーの足元からひよっこりと現れた一人の少女。

オレと同じ長い銀髪と赤い瞳、人形のように美しいその容姿は確実に美少女と呼べるものだ。

実はこの少女こそ、バースーカーのマスターと同時にこの森の土地所有者、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンである。

「正直・・・想像以上ですよ。こついののは当たってましたけど、

デカさが予想外です。ていうか、オレって今からこの人と戦うんですよね？イリヤ姉さん（こう呼べと本人から言われた）」

「そうよ。鍛錬の内容は簡単・・・バーサーカー、ヘラクレスを一度殺すこと”。ちなみに、バーサーカーは手加減があまりうまくないからね」

イリヤ姉さんは綺麗な笑顔で物騒なことを言ってくる。オレより頭二つほど小さいこの人からは並みの人間とは違う覇気のようなものを感じるので、言葉の一つ一つに重みがある。

「・・・わかりました。すぐ準備をしますんで、準備が出来たらお願いします」

ヘラクレス。ギリシャ神話に登場する大英雄。己が罪を償うために十三の試練を乗り越えたその身は13回殺されなければ死ねない体なのだ。その肉体こそバーサーカーの纏う強力な宝具『ゴッドハンド神の試練』。

オレはバーサーカーから少し距離を取り、重力負荷を解除、同時進行でデバイスをセットアップする。両手に新たな姿となったヴェルフグリントを握る。二、三回振るって調子を確かめる。よし、問題はない。

「始めてください！」

「わかったわ。・・・それじゃあ、狂いなさい！バーサーカー！」

「！！！！！！！」

イリヤ姉さんの命令を聞いた瞬間、直立不動だったバーサーカーが

天に向かい咆哮を上げた。空間全体が断殺魔を上げ、吹き荒れた風圧がオレの髪を後ろになびかせた。

「岩斬、滅砕陣!!」

走り出すと同時に右手の剣で足元の地面を斬り上げる。突出した岩の棘が縦一列に波となってバーサーカーに迫る。牽制にしては少し威力が大きい技だが、あの巨体だ。油断は出来ない。

だが、すぐに知ることになった。こんな攻撃などはバーサーカーにとっては牽制にすらならないと。

「!!!」

バーサーカーが手に持つ斧剣を地面に振り下ろした。それだけで小規模の地震が響く。そして斧剣が振り下ろされた場所からオレと同じような岩の棘が波となって放たれた。しかしその大きさはオレの術技のものより大きい。オレの術技すら飲み込み、バーサーカーの攻撃は猛スピードでオレに向かってくる。

「くっ!!」

闘気放出で左に平行移動。そこから前方に向かって闘気放出で加速。再びバーサーカーへと距離を詰める。

バーサーカーは地面から斧剣を引き抜き、その巨体からは想像も出来ない速さで急接近してきた。突進しながら右手の斧剣が右袈裟に振るわれる。もちろん後退はありえない。

「背狼」

背中に闘気を溜め込み、瞬動と同時にそれを放出する。闘気放出と瞬動を同時に使った超高速移動、オレはこれを背狼と名付けた。

「白風・散!!」

そして高速移動の状態から双剣を振るう。単純な筋力で明らかに負けているオレは加速などを力に変換するしかない。

バアアン!!!

手に大きな衝撃が走る。高速移動によつて歪んだ景色が元に戻っていく。そして、元に戻った視界が最初に捉えたのは、バーサーカーの斧剣と、それとぶつかっているクロスに構えた双剣。

(受け止め・・・られた・・・!?)

背狼による加速からの破壊力が上がった白風。この組み合わせをバーサーカーは斧剣の一振りで阻止した?冗談であつてほしい。どこまで目の前に佇むサーヴァントは規格外なのだ。

「!!」

斧剣と双剣が押し合っている状態からバーサーカーが右足で突き出すような蹴りを放ってきた。軽自動車くらいなら軽々と踏み潰せるような足の蹴りなど、まともに受けた場合を想像することさえ躊躇う。

左の長刀を引き戻して迫る蹴りへの盾にする。

衝突。左腕がピキッ！と音を立て、衝撃を受け止めきれずに体が後方に飛ばされる。

空中でバツク転を決めて転倒を免れる。だが前方からはバーサーカーがあと4メートルほどの距離まで近付いていた。大きな真空を生み出しながら右薙ぎに振るわれた斧剣が迫る。避けられそうにないな。

双剣をクロスさせて受け止める。重力操作で全身に負荷をかけ、両足を地面に縫い付ける。そのおかげでオレの体は地面を抉りながらも飛ばされることはなかった。しかし、バーサーカーの猛攻は止まらない。

突然胴体が空中に浮き始める。重力負荷によって150kg以上の重さになっている体のだ。

この時オレは重大なことを失念していた。バーサーカーがオレに放った斬撃は、右手だけによるものだということを。

そう。オレの体はバーサーカーの左手で鷲掴みにされているのだ。そして当然、全身にはバーサーカーの強力な握力による重圧が襲い掛かってくる。

「がああああああ！！！！！！」

「！！！！！！」

咆哮が耳に届いた瞬間に全身が加速した時と同じ感覚に包まれた。恐らく投げ飛ばされたのだろう。全身をプレス機に掛けられたような体験をしたオレには、はっきりとしない意識の中で防御力を増加

させる術技をひたすら連射するのが精一杯だった。

Side Out

森の木々が盛大な土煙を巻き起こしながら倒れていく。

それを遠くから見ていたイリヤはクスリと微笑を浮かべる。

「へえ……初めて戦った時のセイバーより保つなんて素直に驚きね。ほんと、将来は並みのサーヴァントより強くなるんじゃないかしら？」

イリヤが従えるバーサーカーは間違いなく”今回”の聖杯戦争に選ばれたサーヴァントの中では最強の存在だ。単純であり、絶大な破壊力を持つ怪力。Aクラス以外の攻撃をほとんど無意味なものへと変える肉体。とどめには13の方法を用いて13回殺さねば死なない宝具『神の試練』ゴッドハンドだ。

余程の例外でなければ、初めて戦う者に勝つことはできない。そして、シノンはその例外に含まれていない。イリヤの認識の中でその例外に適応されるのは天上天下唯我独尊を貫く黄金の王だけだ。

「最低でも1回……最大まで譲歩してその半分。さあ、どこまでやれるかしら？」

土煙が巻き起こり、視界がうまく確保できない中、バーサーカーはシノンを投げ飛ばした方向をただ見詰めている。サーヴァントで

も耐え切れるかわからないほどの力で投げ飛ばしたのだ。あくまで人間の肉体であるシノンはまだでは済まない。

その時、土煙の中で一つの人影が立ち上がった。十中八九シノンである。

「……………!!!」

バーサーカーが咆哮と共に走り出した。敵がまだ生きている。それだけでこの黒い狂戦士が動き出すには充分だ。

「霸道……滅封!!!」

土煙の向こうから地を滑るように放たれたのは炎で作られた一筋の斬撃波。凄まじい速度で迫るそれはバーサーカーの右足に直撃、バーサーカーの足が止まった。

「せいっ!!!」

そして、その隙を狙ったように二撃目が放たれた。今度は縦に大きな形をしている。回避が間に合わない判断したバーサーカーは咄嗟に斧剣を盾にするが、斬撃波が爆発を引き起こしバーサーカーが初めて後退した。

土煙が晴れると、シノンが左の長刀を頭上に目掛けて振り上げた体勢で立っていた。

しかし決して無傷ではない。額がざっくり切れていて右目は見えず、背中には大きく深い裂傷が刻まれている。しかもバーサーカーに鷲掴みにされた時の力で肋骨が数本折れている。遠くで見えているイリ

ヤも傷の具合でしばらくしたら中止の判断をするだろう。

だが、その命令が下されるまでバーサーカーは止まらない。今度こそシノンに仕留めようと再び走り出す。

（イリヤ姉さんの話だと、バーサーカーにはAランクの攻撃しか通用しない。さっきの霸道滅封はバーサーカーにダメージを与えた。・・・見よう見真似だが、やってみるか）

シノンは右手の長刀を地面に突き刺し、右掌をバーサーカーに向ける。

「ダオスレーザー！！」

シノンの右掌からエメラルドの光線が発射。まっすぐバーサーカーに迫っていく。

（すげえ・・・出来たよ）

実はこの技が使えたことに一番驚いているのは撃った本人だった。だがバーサーカーは体の前で腕をクロス、防御の構えを取って光線に正面からぶつかっていった。

振り下ろされる斧剣。シノンは左手の長刀で受け止め、斧剣を弾く。しかしバーサーカーは弾かれても再び斧剣を振り下ろす。シノンは右手で突き刺した長刀を抜き、斧剣を止める。

「ぐう・・・がっ・・・！」

斧剣を長刀で受け止める度にシノンの罅が入った左腕と折れた肋骨が悲鳴を上げる。

「！！！！！！」

「・・・っ・・・！！」

大きな咆哮と共にバーサーカーが斧剣を両手で横薙ぎに振るった。片手とは段違いの速度で迫る斬撃をシノンは重力負荷を使い、二本の長刀をクロスさせて受け止めた。

しかし、シノンの体はその場に留まらず宙を舞った。なんとバーサーカーの両手の斬撃は150kg以上の物体おも吹き飛ばす破壊力があつた。

背中を強く打ちつけながらシノンは着地した。背中を打ちつけたことで傷が刺激され、折れた肋骨が悲鳴を上げる。

シノンは激痛を歯を食いしばって耐え、体を起こそうとする。その時、シノンの周りが突然影に包まれた。シノンが自然と上を見上げると、バーサーカーが右足を下に突き出した状態で空中に浮いていた。

シノンの首筋に冷たい汗が流れる。無理もない。自分より数倍も大きい巨体が頭上から迫っているのだから。

「くっ・・・フォースフィールド！！」

絶対守護の結界が展開される。結界はバーサーカーの巨体と、加わった落下エネルギーを完璧に受け止める。しかしこの結界は常時展

開は出来ない。それに結界で包まれた術者は結界から発動中は出られないというリスクがある。

シノンが胸の前で双剣をクロス。術技を連射して防御力を底上げする。

パリン！という音がした。次の瞬間にバーサーカーの右足がシノンの体を踏みつけた。

「うわあゝ・・・あれじゃ流石におしまいかしら？」

シノンの受けているであろうダメージはバーサーカーのマスターであるイリヤでさえ顔を青ざめさせるほどだった。

「多分死んではいけないと思うけど、速めに治療しないとヤバイはね・・・仕方がないか」

イリヤは即座にパスを通じてバーサーカーに指示を出そうとした。

「！！！！！！！！」

通常より一段大きい咆哮が届いた。イリヤはその咆哮を聞いて集中を閉ざして巻き起こっている土煙の方向に目を向ける。

その咆哮は普通ならば勝利を喜ぶものに聞こえる。しかし、マスターであるイリヤだけはその咆哮の中に違う意味を察した。それは、痛みを訴える咆哮だった。

土煙が晴れた。そしてイリヤの目に映ったのは、右手を失ったバーサーカーが血の色で出来た巨大な剣に貫ぬかれている光景だった。

土煙の中、バーサーカーは踏みつけた右足に違和感を感じた。人の体を踏んだ感触と僅かに違うその正体は、右足に走った痛みが教えてくれた。

踏みつけた足元からシノンが飛び出してくる。体のあちこちが汚れ、背中の怪我はさらに酷くなっている。動けて数分が限界だろう。

左手も使えるのはあと一回。シノンはバーサーカーの右足を双剣で受け止め、そのまま足を切り裂いて押し返したのだ。元々罅の入っていた左腕は折れる一歩手前なのだ。

「天翔、蒼破斬！！！」

シノンの両手の長刀が膨大なエネルギーを纏って同時に振り下ろされる。狙ったのはバーサーカーの右腕。完全に不意を突かれたバーサーカーは対処が間に合わず、右腕を両断された。右腕が宙を舞い、斧剣は離れた地面に突き刺さった。

「！！！！！！！！」

「まだまだああ！！！！　　グングニル！！」

狂戦士が始めて痛みの悲鳴を上げた。シノンはそんな悲鳴に反応も

せず右手の長刀をバーサーカーの腹部に突き刺した。

バーサーカーの体勢がよろめく。右手から長刀が離れたが、代わりにその隙はシノンに詠唱時間という大きな好機を与えた。

「ドラゴンスレイヤー!!」

シノンの背後から巨大な血の色をした剣が飛び出した。それはバーサーカーの胸部に三分の一ほどまで突き刺さり、内側からその肉体を破壊していく。シノンは左手に持っていた長刀を右手に握り、走り出す。

バーサーカーも体勢を整え左拳をシノンに突き出す。シノンは右手の長刀を構え前傾姿勢をとる。

「背狼!!」

リスクなど度外視して超加速。シノンはバーサーカーの拳を潜り抜け、懐に入って長刀を構える。

「くたばれえええ!!!!!!」

渾身の力でシノンは長刀を振り下ろす。その狙った先は、バーサーカーの体に突き刺さっている剣の柄だった。

シノンの斬撃による衝撃が加えられ、ドラゴンスレイヤーは、バーサーカーの体を貫いた。

「はぁ……はぁ……はぁ……げほっ!!」

深呼吸の後に吐血したシノンはその場に倒れる。しかし視線の先に佇む巨人は一度殺されたというのにその場に直立している。それは意地が成せる技か、または神の子たる立場が許さぬのか。

「……驚いた。あんなポロポロの正体から反撃してバーサーカーを殺すなんて……おめでとう、シノン。あなたはあのセイバーでさえ簡単に成しえなかったことをやってのけたのよ？だからもう眠りなさい。あなたは頑張ったのだから」

その声を聞き、頭を撫でられながらシノンは安心と共に意識を手放した。

その時、目の前の巨人ヘラクレスは眠ったシノンを敵と認識できる存在だと確かな目で見ていた。

第7話 サークヴァント講座 VSバーサーカー編（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

背狼はいろう

瞬動と闘気放出を同時に発動させた複合加速移動術。

速度は闘気放出を上回っているのでシノンは主に白風と同時に使用している。

ただし急激な方向展開が出来ないので旋回性能は瞬動以上、闘気放出以下というところである。

では、また次回。

第8話 サーヴァント講座 VSランサー編（前書き）

今回は兄貴ことランサーです。

では、ごんご。

第8話 サークヴァント講座 VSランサー編

Side Out

冬木市には一軒のみ教会が存在する。名は言峰教会。

その主である言峰綺礼は既に亡くなっており、今は新しく派遣されてきたシスターが主を務めている。

そんな教会の正門前で、金属をはげしく打ちつけているような音が絶えず鳴り響いている。

音の発生源は二人の男が操る槍。片方は血のような真紅の槍^{ランス}、もう片方は目立つような外見ではないがかなりの強度を備えている作りの槍^{ランス}だ。

真紅の槍を振るっている男は、目が赤く青髪を首の後ろで纏めている。もう片方の少年は目が蒼く、銀髪を纏めずに垂らしている。

青髪の男は槍兵のサーヴァント、ランサー。真の名をケルト神話に登場するアイルランドの大英雄、クー・フリーン。その手に握られている槍は必中必殺を完全に表現した対人宝具、魔槍”刺し穿つ死刺の槍^{ゲイボルグ}”

銀髪の少年は別の世界からの来訪者、シンン・ガラード。

本来ならばその手に握られているのは槍ではなく、唯一つの相棒が武器となった双剣なのだが、今回の相手であるランサーが”生憎と俺が教えられんのは槍だけでね、どうだ？今回だけ槍ってのは”と

提案したのでだ。

結果、今回シノンにはアーチャーに頑丈な作りの槍を作ってもらい、武器を槍に変えて戦っているのだ。

シノン自身、槍の扱い方を知らないわけではない。いや、むしろかなりの熟練者と呼べるレベルだ。どんな武器でも使いこなすことを可能にした実力は、自身をどこまでも鍛え抜いたシノンだから実現できているのだ。

だが、裏を返すとそれは所詮実力の分岐を繰り返したただけ。対するランサー、いやほとんどのサーヴァントはシノンのように百の技を求めた物ではなく、ただ一つ、己が選び抜いた一つの武器を極めているのだ。

「くっ！・・・はっ！・・・」

「せいっ！・・・はあっ！・・・」

ランサーは瞬きを上回る速度で弾幕のように刺突を放ち続ける。振るっている魔槍の矛先には刃潰しなどない、力を解放させずとも体を斬り裂けば呪いを纏った傷を負わせ、突き刺せば30の棘を広げ体の中をスタスタに決る。

しかし、サーヴァントの領域に届かずともシノンが鍛え抜いた技術は低いわけではない。実際、シノンは肩で息をして防戦一方だが、その身は一つも魔槍による傷を一つも負っていない。

壁を作るように迫る刺突の一つ一つをシノンは捌いていく。常に足を止めず、矛で槍を打ち上げ、刺突に槍を絡めて軌道ずらす。ある

時は魔槍の腹に蹴りを打ち込んだり、矛先に矛先をぴったりぶつけるなどの技もやってのけている。

「そらああ!!」

「月破紫電脚!!」

ランサーの大きな右薙ぎと紫電を纏ったシノンの空中からの蹴りがぶつかる。しかし地上で槍を振るったランサーとは対照にシノンが蹴りを放ったのは空中。ランサーが槍を振り抜き、シノンは後方に押し返された。

空中彷徨う今のシノンは無防備。槍を振り抜いたランサーは落下地点を即座に予測し、すさまじい速度で走り出す。

シノンもランサーの行動は予測していた。空中で無理矢理のバック転、ランサーが迫ってくる方向に背中を向ける状態で着地した。そこから振り向き様に刺突を放とうと体を勢い良く捻り……その動きをピタリと止めた。

刺突を繰り出すより先にランサーの魔槍がシノンの首筋に矛先を添えていたのだ。

「……参った」

「惜しかったなあ。あの時に蹴りじゃなくて槍を振るってたらもっと早く体勢を立て直せただろうぜ」

その場に尻もちを着いたシノンにランサーは満足げに笑いながら失点を教える。

鍛錬を開始してからすでにこれで14回目の打ち合い、14回すべてシノンの敗北で終わっている。

クランの猛犬の異名をもつ大英雄と14回打ち合い、敗北しつつもその身に傷を負っていないのは真正銘シノンの実力である。ランサーもシノンの実力を数回の試合で理解したので攻撃に容赦などない。

「しっかし、お前も随分人間の枠から外れてやがるなあ……最初に会った時のセイバーのマスターなんて必死に俺から逃げただけだったのに」

「セイバーさんのマスターって……もしかして士郎さんか？」

「おう。それに比べたらお前は異常な方だな。俺と14回も試合して一つも傷を負わなかった人間なんてお目にかかったことねえ」

失礼なことを言われてシノンは少々ムカツと来るが、ランサーが少なからず実力を評価していることがわかったので怒りが和らいでいく。

今こそランサーとの鍛錬に集中しているが、最初この場所に来た時のシノンは滅茶苦茶不機嫌だった。理由は簡単。今の場所が教会だからだ。

柳桐寺の時もそうだったが、シノンは信仰の象徴たる建物が大嫌いだ。本来ならシノンは、教会など生きている限りは絶対に足を踏み入れたくない建物だと思っている。

「……さて、んじゃ15回目といくか。……本気出してやる、そろそろ最後にするぜ?」

シノンの息が整ったのを確認してランサーが少し離れて魔槍を構える。

本気、その言葉が意味するのは恐らく”宝具の使用”。

ランサーの持つ”刺し穿つ死刺の槍”ゲイボルグ。因果を逆転し「敵の心臓に命中している」という結果を確定させた後に攻撃を放つ対人宝具。余程強力な幸運を持っていなければその一撃を回避するのはほぼ不可能。

シノンは実物を見ていないが、ランサーほどの実力者が切り札として使用している時点で強力なのは自然と理解できた。

「……やめとくか?別に恥じることじゃねえぞ」

「……いや、やるよ。むしろこつちから頼もうと思ってた」

シノンの返事を聞いたランサーはもう何も言わなかった。にやりと笑みを浮かべ、全身から殺気を放った。

二人が同時に動き、刺突を放つ。ランサーは心臓、シノンは首筋を狙った。

矛先がすれ違い、その場で何度も槍をぶつける。互いの槍が弾かれる。シノンは弾かれた槍を右手だけで後方に引き戻し、左足で蹴りを放つ。ランサーは体を後ろに引いて回避、そこから突きを放つ。

シノンは右足で地面を蹴り体を左に回転、ランサーの突きに背中を向ける体勢で回避。そのまま一回転と同時に右手の槍を突き出した。

「　　つとー！・・・」

ランサーは槍を突き出した姿勢からバックステップ。顔面の前をシノンの槍が通り過ぎ、地面に突き刺さる。ランサーの背中に一瞬冷たい汗が流れた。

シノンは空中に浮いたまま棒高跳びの要領で空中ロンダートを決める。そのまま後退したランサーの頭に八極拳の震脚を放つ。ランサーは再度バックステップで後退するが、最小限の距離だけ後退し、地面を踏み砕いたシノンに突きを放った。

「水塵渦龍槍！！」

後ろの槍を掴んだままの右手。それをシノンは無理矢理に引き抜き、槍を地面に打ち付ける。するとシノンを囲むように物凄い水飛沫が起こった。それによりランサーの槍は弾かれ、ランサーは再び後退。

（おいおい・・・マジかよ・・・俺がこうも押されるとはねえ）。
だが、そう簡単に切り札は切ってやれねえんだよ！）

シノンを囲む水流が消えたと同時にランサーは上に高く跳ぶ。そのまま空中からロケットのような速度で突きを放つ。

「墜牙爆炎槍！！」

迎撃として放ったシノンの槍とランサーの魔槍が衝突。衝突点から盛大な爆発が拡散し、両者の体ごと後ろに吹き飛ぶ。その瞬間にも

両者は片手だけで槍を突き出している。シノンの槍はランサーの右脇腹を、ランサーの槍はシノンの左肩を斬り裂いた。

ランサーは苦痛に一瞬顔を歪めるが何とか着地、シノンも左肩を庇うように着地する。双方離れ、空いた距離はおおよそ6、7メートル。互いに一瞬でゼロに出来る距離だ。

(・・・ここで・・・)

((決める!!))

シノンは背狼の超加速で急接近し、ランサーはその場で槍を地面に滑らせルーンの刻印を描く。四枝の浅瀬アトララその刻印に刻まれた誓いは”決して退かぬこと”。ランサーが宝具を使用する最大限の礼儀なのだ。

しかし刻印の意味を知らぬシノンは容赦などしない。いや、例えわかっていても止まりはしない。

懐に入り込んだシノンは槍を振り下ろし、それが防がれる前に蹴りを放ち、再び槍を振るう。止まることのない連撃をランサーは全て槍で受け止める。しかし、一際大きな力が籠められた振り上げに体を打ち上げられた。

それをシノンは追撃しない。代わりにシノンの槍を青い光と紫電が覆い、身の丈の数倍程も大きい槍が作り出された。その形はどこかロンギヌスの槍に似ている。

シノンは投擲の姿勢を取る。その手に握られた槍の目標は言うまでもなくランサー。直撃すれば常識を遥かに超えるサーヴァントの体

とはいえどタダでは済まないだろう。

「……………ッ!!」

槍を投げようとした瞬間、シノンの体が謎の威圧感で硬直する。威圧感の正体は空中に飛ばされたランサー！。

今までその手に握られていた魔槍が強く発光している。それから放たれる死の気配はシノン一人に目掛けて襲い掛かっている。

「その心臓……………貫い受ける!!」

それこそクー・フリーンの持つ宝具、魔槍”刺し穿つ死刺の槍”ゲイボルク。必殺必中の魔槍が空間に干渉し、槍そのものが血の色で輝く。

「刺し穿つ（ゲイ）……………!!」

「霸王……………!!」

空中と地上にいる二人が同時に投擲体勢。因果律を捻じ曲げる魔槍をシノンは破壊力で乗り越えようとしている。逆に捉えれば乗り越えられねば魔槍が心臓を貫くのだ。

そして二人が決着の槍を、投げた。

「……………死刺の槍（ボルク）!!!!」

「……………籠月槍!!!!」

激突。

一瞬、風の音さえも消し去り、槍が押し合う。

だが、予想より決着は速く着いた。

シノンの使っていた槍がシノンの鬨気に耐え切れず、自壊したのだ。だが結果的にぶつかりあった力は完全に相殺され、魔槍がシノンの心臓を貫くことはなかった。

相打ち。いや、シノンの武器が自壊したのだからランサーの勝ちなのかもしれないが、”今日は”そういう形で片付いた。

「楽しかったぜ、シノン」

「オレもだよ、ランサー。出来ればあの宝具はもうお目に掛かりたくないけどな」

「はははは！そうかい・・・ほらよ」

その場に座っていたシノンに刺し伸ばされた手。その手を差し出すランサーの顔には邪気の無い、人懐こい笑顔があった。

第8話 サークヴァント講座 VSランサー編（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

今回はデバイスではなく普通の武器を使った勝負でした。

なんだか槍の戦いのイメージが難しくって戦闘が若干手抜きになってしまった気がする。

それと、近々試験が迫ってきましたのでしばらく更新を遅れさせていただきます。まあ元々早くもないのですが。どうかご了承くださいます。

では、また次回。

第9話 サークヴァント講座 VSライダー編（前書き）

ようやく電気が通ってきたおかげで投稿できました。

今回の主役はシノンでは無く、今まで身を潜めていた美音です。

では、ごうき。

第9話 サークヴァント講座 VSライダー編

Side シノン

「シノン、そろそろ始めますが気分はどうですか？」

真夜中の冬木市。最低限の明かりしかないビル街でオレにそう言うてきたのは紫色の長髪を夜風に靡かせるライダーさん。

格好こそ衛宮低での普段着と同じだが、大きな目隠しを着け、額には呪詛のような文字が大きく書かれている。さらに両手には長い鎖で繋がれた二本の長い杭。恐らくアレがライダーさんの主武装なのだろう。

あの美しい容姿からは考えもつかないほどの威圧感を放っているライダーさん。見るだけで”準備は万端だ”と伝わってくる。それに對してオレは……。

「……………今すぐ鍛錬の場所変更を強く希望したい気分です」

青ざめた表情で必死に下を見ないようにしている。

「どろろしてでしょうか？」

どろろして……そりゃー。

「ビルの屋上の端っこで向き合って会話してりゃ普通にイヤでしょ！……しかもなんでこの屋上にだけ柵無いんだよ！？」

そう。今オレの立っている場所は屋上の本当に端っこ。オレ自身は別に高所恐怖症と言うわけではないのだ。むしろ高い所は見慣れているし、どちらかと言えば好きな方だ。

しかし今のビル街は最低限の明かりしかない状態、下を見てみると視界には底無しの真っ黒空間が無限に広がっているのだ。さすがにこれは高い所が好きだろうが嫌いだろうが見るのを躊躇う。

それと今はキャスターさんと凜さんがここら一带に人避けと防音の結果を張っているので完全な無人状態。ゴーストタウンとはよく言ったものだな。

「くうくん？」

オレの声を聞いて右肩に乗っていた美音が反応して顔に頬を摺り寄せてきた。いつもなら鍛錬のときは家で留守番なのだが、今日はライダーさんに連れてきなさいと言われたので連れてきた。

「それで……結局鍛錬は何をするんですか？」

「そうですね……私が教えられるのは精々空中戦闘くらいです。まずシノン、あなたは鍛錬中にヴェルフグリントの飛行魔法を使ってはいけません」

はい？空中戦闘なのに足場が不安定とか以前に足場が無いこの環境で飛ぶな？……オレに死ねと？

『ライダー様、マスターを殺すつもりですか？』

「大丈夫ですよ。変わりに今回は美音に乗せてもらって空中を移動

しなさい。いいですね？美音」

「くう〜ん！」

「ん？・・・ちよつ！！・・・美音！？」

ライダーさんの言葉を聞いて美音は嬉しそうに鳴いて肩から飛び降りる。しかし飛び降りた先は屋上の地面ではなく足場がない空中。

慌てて伸ばした手が届く瞬間、美音の体が青く光った。突然の閃光に反射で目を閉じる。

発光は一瞬だった。目を開けると、そこには本来の巨大な狐の姿に戻った美音が空中に浮いていた。

「この姿なら問題ないでしょう？・・・偶には人目を避けてこの姿にしてあげなさい。この姿こそ美音の本当の姿なのですから」

「くう〜ん！」

ライダーさんは優しげに微笑み美音は呆けているオレの顔に頬を摺り寄せる。小さい状態と違ってしっかり踏ん張らなければそのまま押し倒されそうだ。というか、本来の状態のこいつの顔は狐というより狼の方がしっくり来る気がする。

「・・・あれ？そういえば美音・・・お前って空飛べたんだな
」

「初めから飛べたわけではありませんよ。シノンが鍛錬を行っていた間に私が美音の力を調べてみたからです。本当によく頑張っている

ました。飛行以外にも色々と覚えたんですよ？」

なるほど。必死になっていたのはオレだけじゃなかったわけか。

ありがとこの意味を込めて頭を撫でてやると美音は嬉しそうに鳴いた。

「……話は変わりますが、シノン。美音に秘められた力がこんなものではないとあなたは知っていますね？」

「はい、もちろん」

「美音は魔術の世界で当て嵌めるならば幻獣クラスは固いでしょう。しかし美音はその身に宿っている力の正体すら知らない状態。だから今回の鍛錬では空中戦闘を鍛えると共に、美音に力の解放と制御を身に付けさせます」

美音の力。オレはお目にかかったことはないが幻獣クラスの存在の強さはサーヴァントと同列に近いほどと凜さんから聞いた。

今の美音に危害は無いが、もしその力が暴走した場合の被害はここ以外の場合一つが消し飛ぶ程度では納まらないかもしれない。

「……それは良いんですが、どうするんですか？流石にサーヴァントでもオレと美音を同時に相手にするのは……」

「心配ありませんよ。私にも頼りになる味方がいますから」

にこりと微笑んだライダーさんの背後から強烈な発光。オレも美音も目を閉じてしまう。どうでもいいが今回は夜中なのにやたら光り

を浴びるな。

光りが弱まったので目を開けると、ライダーさんの背後に巨大な白い馬が浮いていた。しかもただの馬ではない、その体から巨大な2枚の羽を生やしている。

「まさか……天馬？^{ペガサス}……契約？……いやこれは……」

「そう、この仔は私個人が扱う存在。本来なら宝具を長時間展開するのは魔力の消費が大きいです、今回は桜の許可の元です……では、始めますよ……」

ペガサスの上に跨ってライダーさんは両手に光る手綱を握る。手綱がペガサスの首に掛けられると穏やかそうだった目は凶暴そうな赤目に変わった。

「ちっ……!!……セツトアップ!……美音、頼む!」

『Yes, My Lord. Stand by ready. Set up.』

「くうくん!くうくん!」

騎士甲冑を展開し右手のみに長刀を握る。そこから高く飛んで美音の背中に飛び乗る。落ちないように重力負荷を掛けるのを忘れない。

天馬、ペガサスが接近してくる。美音はペガサスを敵と認識し全身から敵意を放つと同時に青い炎を纏う。

「グオオアオア!!!」

(・・・これって、美音・・・だよね?)

いつもの可愛らしい鳴き声とは正反対、もはや咆哮と呼べるそれはビル街に響き渡る。一瞬咆哮の発生源が向こうのペガサスだと本気で思いたくなくなったぞ。

虚空を猛スピードで飛行し美音とペガサスがぶつかる。青い炎と見えない力場が衝突し、風が吹き荒れる。少しの間押し合いが続くが、オレは身を乗り出して右手の長刀を振るう。

右手に確かな手応えを感じた。長刀が弾いたのは一本の長い杭。恐らくライダーさんが投げってきたのだろう。左手でもう一本の長刀を抜刀、右薙ぎに振るって続いて放たれたもう一本の杭を弾く。弾かれた杭は素早くライダーさんの手元に引き寄せられる。

オレは次の攻撃を警戒したが、ライダーさんはペガサスの上から跳躍、なんとそのままビルを足の脚力のみで駆け上がっていく。いやいや、サーヴァントってあんなことも出来んの？逃げようとしても逃げ場ねえじゃん。

ライダーさんがオレを見た。”追って来い”言葉にしなくても視線がそう語っていた。マジで紐無しバンジー状態でやんのかよ。重力負荷を解除して美音の背中の上に立ち上がる。

「はあ〜・・・美音、こっちを頼む。オレはライダーさんの相手をするからさ」

「くう〜ん!」

いつも通りの鳴き声で答えてくれた美音に一瞬安心感を抱いたが、次の瞬間、美音は体を横に逸らしてペガサスの突進をやり過ごした。そこから体を上に弾いてオレを上空に放り投げる。美音は体を横に一回転、尻尾でオレの足を叩いて天に打ち上げた。

闘気放出で二次加速を行いライダーさんに迫る。しかしライダーさんが黙って接近を許すはずもない。投擲された杭を体を軽く逸らして回避する。しかし動いたせいで上への加速が弱まる。

「ちつ……！……背狼！」

演算を瞬時に済ませて足元に重力場を形成、それを足場にして背狼で再上昇。屋上に着地すると同時に背後から飛んできた杭を右の長刀を右に振るって弾き、振り向いて背狼で接近。

「白風・散！！」

背狼から白風を放ったが、ライダーさんはバックステップでビルから飛び降りて回避した。躊躇わず後に続く。

ライダーさんはビルの壁を蹴ってほぼ縦横無尽に跳び回っているが、オレは重力場を足場にしなければ即地面に急降下だ。一心重力操作でオレ自身の重力をゼロにすることは出来るが、それはその場に浮いているだけなので使うのは本当に落下すると決まった場合のみだ。

ちらりと視線を移してみると。戦う場所を上空に変えた美音とペガサスは上空で派手な戦いを繰り広げている。ペガサスが流星のような輝きと速さで突進すると、美音は全身に青い炎を纏った突進で對抗する。正直、オレより美音のほうが頑張っていないか？

「余所見をしている暇はありませんよ……?」

「うおっと……せいっ!……」

注意と一緒に額へ飛んできた杭を左の長刀で弾き、左手の勢いを利用してそのまま空中で回転斬り。背後から回り込んだライダーさんの接近を阻止する。

背狼で急接近しようとするが、ライダーさんはすぐに視界から消え、ビル街を走り回る。

舌打ちしたい気分を抑えて跳躍、重力場を連続で形成しながらライダーさんの真似事をする。

そのまましばらくはすれ違い様に攻撃を放ち、虚空を飛び続けるが……。

「があ!……くそっ……」

やはり機動性はもちろん、何より経験で負けているので当然追い詰められていく。

後ろ左斜め下から飛んできた杭が左腕に突き刺さる。抜いている暇が無いので鎖を斬り落とそうとするが、もう一本の飛んできた杭が邪魔をしてくる。

「うおっ!……」

急に左腕が持ち上がり、体が上に急上昇する。もちろんオレの意思ではない、刺さっている杭が引っ張られ、オレの体ごと引き上げら

れているのだ。

今度こそ鎖を両断しようとするが、首筋に冷たい鉄の感触が走り、急激に首が絞まる。背後に回ったライダーさんが杭の鎖でオレの首を絞めているのだ。

「ぐっ……ああ……！」

（くそ、声が……これじゃ術も使えねえ……）

右の長刀を鞘に納め、力尽くで鎖を緩めようとする。しかし、信じられないほどの怪力が加えられていてビクともしない。さらにライダーさんは残った鎖でオレの右手を背中に固定する。オレは完全に空中に拘束された。

「ふっ……行きますよ……」

微笑んだライダーさんはオレの鳩尾に拳を打ち込み、薄れる視界の中で天に向かって走っていく。合わせるように上空のペガサスも美音を振り切って下降、空中でライダーさんを背に乗せた。おい、まさか……。

「騎兵の（ベルレ）……」

ペガサスが一際強く輝く。そのまま流星のような速さでビル街の真ん中に拘束されているオレに目掛けて突っ込んでくる。抜け出そうと右手に全力で力を込めるが鎖はビクともしない。おまけに力を込めたせいで左腕から血が噴き出す。

（まだまだ……右肩を外せば……）

「・・・手綱（フオーン）！！！」

そして遂に、ペガサスがオレの十メートル前方にまで接近した。オレは直撃を覚悟し、その瞬間に出来る最大出力の重力場を構築、全身に力を込めて目を閉じた。

「ダメエエエエエ！！！！！！」

耳に届いてきたのは聞き覚えの無い女の子の声。オレの記憶の中ではその声に該当する人物は見つからない。しかし、今この場において、オレの危機に割り込んで来られるのは一つだけ。美音である。

目を開けると、青い炎を全身に纏った美音が必死にペガサスを食い止めていた。徐々に押されているがライダーさんの宝具を前にして耐え続けている。

それだけで大したものだが相手は宝具、美音が全身に纏っていた炎は目に見える勢いで消失していく。

「美・・・音・・・逃げ・・・ろ・・・」

オレは美音に声を掛けようにも声がつまなく出せず、体も動かない。完全に足手まといだ。

動いたせいで体の酸素も徐々に無くなり、左腕の出血もヤバイ。美

音が喋れるという事実には驚く思考余裕も今のオレには無い。

「守る！！・・・美音はシノンの家族！シノンは美音の家族！・・・絶対に守る！！」

その言葉と共に美音の体が青く発光を始めた。その光はドーム状に美音の体を包み、ライダーさんの宝具の衝撃を完全に押し返した。

狭くなってきたオレの視界が光のドームの中に人影を捉えた。その人影の視線は完全にオレを捉えている。

そして人影と目が合った瞬間、光が・・・弾けた。

ガンッ！ガンッ！ガンッ！

何かが砕かれたような音と共に締め付けられていた体が浮遊感に包まれ、呼吸と視界が楽になった。

「・・・美・・・音・・・」

「うん！・・・大丈夫だよ、シノン」

光で閉じそうになる視界に映ったのは、一人の女の子。瑠璃色が混じった深い青の瞳、後ろ髪は腰まで届き、前髪は視界の邪魔にならないように整えられている銀髪、微笑むその顔はオレにとってとはとても眩しく、純粹で、美しかった。

「成功、ですね」

「ライダー・・・さん・・・」

「申し訳ありません、シノン。美音の力を覚醒させる為とはいえ、苦しい思いをさせました」

つまり、この子はやはり美音。ライダーさんの目的はこうした美音の力を覚醒させることだったというわけだ。

「すみ……ません……少、し……休み……ます」

「うん、シノン、今は休んで。ね？……」

「ああ……おやすみ」

あまり話せなかったが、美音の浮かべる笑顔が眠ることに安心を与えてくれたおかげでオレの瞼は簡単に閉じてしまった。

第9話 サークヴァント講座 VSライダー編（後書き）

ご覧いただきありがとうございました。

今回シノンライダーは空中でボコボコ（？）にされました。左腕が持ち上がったのはFateで士郎がされたのと同じものです。

今回はあまり時間に余裕が無かったので美音の能力の詳細は別で書きます。

では、また次回。

外伝2 美音の設定紹介（前書き）

今回は美音が人間形態になれるようになったので美音の設定紹介です。

では、どうぞ。

外伝2 美音の設定紹介

- ・名前：美音
 - ・年齢：妖狐なので最低でも150以上
 - ・性別：女
 - ・身長：約150cm
 - ・体重：消されていて読めない
 - ・容姿：腰まで届く青色混じりの銀髪、瑠璃色が混じった青い瞳、ルックスは綺麗というより可愛らしい種類に入る。（マブラヴオルタネイティヴ トータル・イクリプスのイーニア・シェスチナとそっくり）
 - ・声のイメージ：能登麻美子（上記のキャラと同じ声）
 - ・好きなもの：シノン（兄を慕う妹のような感じ）
 - ・嫌いなもの：シノンに害をなす存在、親しい人の死
 - ・魔力ランク：C
 - ・妖力（魔導師ランクで表示）：SSS以上（正しくは計測不能）
 - ・戦闘スタイル：妖炎格闘（テイルズ オブ グレイセスのソフィと同じ戦闘法で、光子の代わりに青い妖炎を纏う）
 - ・武器：素手でも充分戦えるが、手を傷めないようにナックルガード着きの手袋を着けて戦う（後からデバイスを装備する）。さらにシノンから闘気の使い方を習っているので格闘系列と治癒の術技が使える
 - ・詳細
- アルハザードにまだ人が住んでいた時に発見された妖弧。なぜアルハザードに居たのかは不明。

通常の妖弧とは違い、300年分の妖力を僅か50年で取り込むという特異性を持つ。その特異性により現在は尾が四本になっている。

性格はその身に秘めている危険性とは対照的で純粹無垢。だが人の心の中に隠す邪念を見抜くなど、時にはかなり鋭くなる。また学習能力も非常に高く、様々な人のコミニケーションを見ている内に独学で言語能力と日常生活の形をマスターした。

初めて優しくしてくれたシノンをとても慕っており、小狐状態の時はシノンの肩や頭の上、人間の状態はシノンの膝枕で寝るのが日課になっている。銀髪関係でシノンと並べば兄妹に見えなくはない。

外伝2 美音の設定紹介（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

美音が戦うのは多分A・S編に入ってからですね。もつすぐ修行編も終了する予定です。

では、また次回。

第10話 サーヴァント講座 VSギルガメッシュ（前書き）

今回で”最後”のサーヴァントは、バグキャラな慢心王、ギルガメッシュです。……え？真アサシン？誰それ？

では、ごきげん。

第10話 サークヴァント講座 VSギルガメッシュ

Side シノン

ここはアインツベルンの森の中。

「……………ぐっ……………」

騎士甲冑の右肩が飛来してきた剣に斬り裂かれ鮮血が噴き出す。

倒れそうになったが右足で体勢を整えて左手の長刀を振るう。振った長刀は続いて接近してくる剣を叩き落とす。そして今度は右手の長刀。

オレはその場から動かずに両手の長刀を休まず振るっている。オレの視界に映るのは無数の武器。剣、槍、鎌など、数え切れないほどの種類の武器が機関銃のように放たれ、迫ってくる。

それを操っているのは、迫る無数の武器の向こうにいる私服姿の男。黄金の髪とルビーの瞳、美しいと言えるその顔からは人の上に立つことが当然と思わせるような覇気が溢れ出ている。

その男は戦いが始まって微塵も動いていなかった。最初から今まで、男はただ両手をポケットに突っ込んだまま不動の状態で背後の歪んだ空間から無数の武器を射出していた。

それと最悪なことに、撃ち出される武器の一つ一つは全て宝具らしい。最初に聞いたときは信じられなかったが、一つ一つの破壊力の大きさからすぐに信じた。

宝具の連続射出、オレはそれだけの攻撃に防御を続けてだんだん追い詰められている。すでに叩き落した宝具の数は100を越すかもしれない。

最初は防御の訓練か？と思ったがすぐにその考えは捨てた。あの人にそんな気は微塵も無い。

右の長刀で目の前の宝具を砕く。次を迎撃しようとするが、ふと宝具の連射が止まった。今までの疲労が押し掛かり、長刀を杖にして体を支える。

「ふむ……今ので100は落としたか……暇潰しとしてあの小娘の頼みを引き受けたが、これは中々に楽しませる。雑種、我は貴様に教えられることなどはない。あつたとしても王である我が雑種に知恵を与えることなどありえんがな……」

誤解のように言っておくがオレはこの人に嫌われているわけではない。セイバーさん達の話ではこの態度こそが自然体で、信じがたいがオレは寧ろ好意的に思われているらしい。

そしてこの人と話した途端、家を出る時のみんなの出兵に行く息子を見送るような視線の理由がよくわかった。

「ところで雑種……」

名前は知っているはずなのに先程からオレは雑種と呼ばれている。この人の極められた傲慢な性格のせいなのだろうか？何故だか微塵も怒りが湧いてこない。断っておくがオレはマゾではない。

そういえばオレって世界樹に生み出されたよな？親の交配が無くて体の全部が同じもので構成されている。雑種ではないとしてもオレって何種になるんだろう？

「……聞いているのか？……貴様はセイバー達から私の真名を聞いたか？」

「……え？真名ですか？……いえ、聞いていません……あなたが前回のアーチャーのサーヴァントだったことぐらいしか……」

「ほう……あいつらが何の情報も与えずお前を私の元に来させたとは……では答える、貴様はこの私の真名をなんと考える……？」

そう言われてもかなり難しい。これほどの宝具を自分の懐に収めている時点で巨大な国の王であったことはわかる。というかさっき自分を王と言ったし。だがそれだけだ。これだけではまだ正確な名前の特定は出来ない。

（間違えたら冗談じゃなくマジで殺されそうな気がするし……）

「すみません……何処かの王だというのは確実なんです名前が特定が出来ません……」

「ふん……何も情報が無ければそんなところか……だが雑種、私は寛大だ。その失態、今回は許そう……」

「え〜と……ありがとうございます……」

「では遊戯の再会だ・・・今宵はこれで最後、足掻いてみせよ雑種・・・それと、我の真名に気が付けばその場で言ってみよ、一度だけ我の本気を見せてやる・・・」

王様（一番無難だと考えた呼び方）の背後の空間が歪み、空中に無数の武器が出現してくる。あの中に王様の宝具は無い、多分あの武器を収容している空間、貯蓄庫が宝具なのだろう。

両足に力を入れて立ち上がり、二本の長刀を構える。それと同時に王様が右手を持ち上げる。その姿は背後に控えた無数の部下に発砲を命じようとしている指揮官に見える。そして王様の手が前に振ると、全ての宝具が一斉に射出された。

それと同時に、オレは右へ背狼で移動。そのまま速度を殺さずに前方へ闘気放出で再加速。王様へと距離を詰める。

「守り続けては勝ち目など無いと理解したか・・・だが、王の懐に入るのは御し難いぞ、雑種」

オレの進路を阻むように突き刺さる宝具、そのせいで足が止まってしまい宝具の連射が迫る。

放たれた宝具の矛先に意識を集中させ、両手の長刀を連続で振るう。その度に宝具が弾かれ、墓標のように地に突き刺さる。しかし当然追い詰められていく。右足が軽く斬り裂かれ、ガクンと膝が折れる。

「そらそらあ！！ 休む暇など与えぬぞお！！」

王様が適当な剣を一本掴んでオレに投擲した。射出されるものより速い速度で迫るそれを咄嗟にクロスさせた長刀で受け止める。

だが速度が違うなら単純な破壊力も違う。予想外の威力に二本の長刀が弾かれ、地面に倒れる。

(マズイ・・・！)

追撃を予想して背中から鬨気を放出して跳ね起きる。

だが目に飛び込んできたのは、射出された胸に迫る槍。防御も回避も間に合わない距離まで接近したその槍は、そのままオレの顔面に直進してきた。

Side Out

アーチャーは楽しんでいた。

暇であった時に遠坂凜から「修行相手」に誘われ、実際その少年に会って強さを見ると、少年の強さはその年からすればかなりのものだった。

いつの間にかアーチャーにもスイッチが入り、攻撃に少し熱が入った。だが、少年に放った槍が回避も防御も出来ぬとわかり、ここま
でか、と心で納得、そこでこの修行は終了するはずだったのだが・
。

「・・・む？」

シノンの体からは鮮血が一滴も舞わなかった。アーチャーが目を細めると、その目がシノンの胸の前に出現した黒い小さな穴を見つけた。

(あれで宝具を無力化したか……あれは魔術か?……それに宝具は何処に行った……?)

「……どうやらまだ終わらぬらしいな……許すぞ雑種、精々我の名を当てるまでは耐えよ……」

再び射出が始まる無数の宝具。それは全てシノンに串刺しにせんと迫る。

しかしシノンは動かない。ただその場に立ち尽くして黒い穴を睨んでいる。

そして宝具がシノンに刺さりそうな距離に接近した時、黒い穴がその面積を膨張させた。その大きさはちょうどシノンの背丈と同じくらい。

その穴に宝具が触れた途端、射出された宝具は黒い穴の中に吸い込まれた。貫通したわけではない、現に穴の後ろにいるシノンは一切傷付いていない。

つまりこの黒い穴はアーチャーの宝具をその中に”取り込んでいる”のだ。

「……王の財を喰らうか……身の程を弁える雑種!!」

アーチャーの怒りの声に呼応して宝具の射出数が増す。ほとんど同じように穴に吸い込まれるが、その度にシノンの顔に玉のような大きさの汗が流れる。まるで宝具を取り込むことにシノンが苦しんでいるように見える。

実はこの黒い穴の正体は、なんと”ワームホール”なのだ。この技を生み出したのは凜とキャスターの二人と重力操作の鍛錬をしていた時。手の平に高重力を圧縮したら演算が狂って半分事故のような形で生まれたのだ。

それからシノンにはワームホールを作るときは演算ではなく、自分で事故の時の感覚を再現している。理論的にも生成など不可能なワームホールをシノンは理論を無視して独自の感覚だけで作り上げたのだ。

ワームホールを凜やキャスターと調べた結果、ワームホールのもたらずメリットの一つは、取り込んだ物体を中に保管できること。ただし、入る物体の総量はシノンの演算次第だが。

二つ、ワームホール内を通過して別の場所に出口を発生させることでワープが可能だとわかった。だがシノンは凜とキャスターの二人からこれの使用を禁止されている。出口の生成が失敗すれば二度と出られない可能性があるからだ。

現在はこの二つぐらいだが、このワームホールにはまだまだ利用方法が眠っているだろう。

そしてメリットがあれば当然デメリットもある。

それはワームホールの発生と維持に必要な膨大な演算処理。シノンが宝具を取り込む度に苦しんでいるのは単純に、膨大な演算を連続で行っているせいで脳が悲鳴を上げているからだ。

おまけにワームホールを発生させているときは脳が限界間近なので

シノンには動けない。

すでにワームホール内に取り込んだ宝具の総数は50を超えているがそれに比例するシノンの脳への負荷も限界が近い。このままでは確実にジリ貧である。

『マスター！ワームホールを解除して右に闘気放出を！』

「……ッ！！」

ヴェルフグリントから聞こえた念話の内容をまったく疑わず、シノンは思考回路をフル活用して演算を放棄して右に移動。着地にまで力が入らずそのまま地面に倒れる。ワームホールの壁が消え地面が宝具に挟まれ、消し飛ぶ。

だが宝具に挟られたすぐ後、そこに赤い一筋の光が突き刺さり大きな爆発を生んだ。四方八方に爆炎が飛ぶ。

「今のは……」

『マスターがワームホールの壁を展開している時にあの方が上空に投擲されたのです。サーチを掛けて調べてみたのですが、形状が……』

煙が晴れ、消し飛んだ地面に突き刺さっていたのは血のような色をした一本の槍。その槍は紛れも無くシノンが一度目にしたものだ。た。

「刺し穿つ死刺の槍……？」

ゲイホルク

なんで……レプリカ？……い

や……」

「己の武器に救われたか・・・それと、それはレプリカなどではない、むしろ本物より価値のあるオリジナルだ・・・」

（宝具のオリジナル？・・・つまり、原点・・・おい、もしかしてあの宝具全部が・・・？）

クタクタになったシノンの思考回路が最悪な一つの可能性を見つける。それは恐らく最も正解に近く、最も残酷な現実である。

「その顔・・・私の真名に気付いたか？」

「ええ・・・絶望しか浮かんできません・・・古代ウルクの王ギルガメツシュ・・・」

「はははは！・・・然り、それこそ紛れも無くこの英雄王の真名よ・・・しかし原点の一言が加わっただけで辿り着くとはな・・・」

古代メソポタミア神話に描かれる古代ウルクの王ギルガメツシュ。数多くの神話や叙事詩に登場するその武勇伝は数え切れない。英雄の格は下手をすればヘラクレス以上だ。

その最古の時代の王だからこそ、あの無限と言える宝具を有している。全ての宝具の”原点”を。

考えてみれば簡単なことである。あの蔵がギルガメツシュの宝具だと思つたら、その正体はあれほどの武器を自分の手の中に集められるほど広い領土を手にした王に限定される。しかもその全てが原点であるなら時代はかなり過去だ。

つまりシノンの挑んでいた相手は同じサーヴァントであろうと勝つのは絶望的といえるほどの相手だったのだ。

「……我の名を呼んだのだ、これからは貴様の名も呼ぼう、シノンよ……その様では次が限界であろう？……殺さぬように威力は下げてやる、受け止めるか立ち向かうか、好きにせよ……出番だエア、英雄王の絶対的な力を見せ付けようぞ……」

ギルガメッシュが背後の蔵の宝具、王の財宝ゲート・オブ・バビロンに手を伸ばし、一つの武器を取り出した。それはおよそ一メートル半はある長剣。だがその形は剣と呼ぶにはあまりにも歪だった。

剣は刃物である以上『対象を切断』或いは『切削する』機能に特化していなければならない。

だがその剣にはそれを可能にする刀身が存在せず、三本の円柱を連結させて三角錐を形作っている。先端には螺旋状に捻くれた鈍い刃が見えるが、敵に傷を負わせるには小さ過ぎる。

エアと呼ばれた剣の円柱が回転を始めた。その回転と共に、その柄から膨大な魔力が迸る。

やばい、とシノンは体を起こして二本の長刀を地に刺し、両手を前に突き出す。意識を集中し、秘奥義の発動を急ぐ。

ギルガメッシュが使おうとしているのは間違いなく宝具、それを前にして防御は期待出来ない。ならばシノンは正面から迎え撃つことに決めた。

「その目に焼きつけよ……天地乖離す開闢の星……」エヌマ・エリシュ

「来たれ創生の光……ビッグバン！」

シノンの秘奥義は術者を中心に無限に等しい熱量を持った爆発を起こした。対してギルガメツシユは回転を続ける剣を振り下ろし、そこから膨大な魔力の束を吐き出した。

ギルガメツシユが振り下ろした切っ先は、初めからシノンを狙ったものではない。いや、狙う必要もないのだ。乖離剣の名を与えられたその刃が斬り裂くのは、”敵”という標的だけでは収まらないのだから。

エアとは、古代メソポタミア神話で語られる、『天』と『中』に別たれた大地と水の神。つまりは天と地を切り分けた者の名だ。それと同じ名を与えられた剣が切り裂くものとはすなわち、”世界”そのもの。

「なっ……ッ」

乖離剣が生み出した一つの亀裂がビッグバンの光に接触した途端、相殺などという言葉を超えて光が亀裂の奥の虚無に飲み込まれた。大地にも亀裂が走り、砕かれ、虚無の奈落が生まれた。

そんな破壊の嵐は呆然としたシノンにも迫り、飲み込んだ。斬撃とも打撃とも異なる破壊をその身に感じ、シノンの意識は奈落に落ちていった。

S i d e シノン

全身隙間無く走る痛みに意識が強制的に覚醒した。開いた視界に

映った景色は星が輝く夜空。だが目に血が入りかけているようで赤色が混じっている。

気絶する前は確か午後の2時頃だったはず、今何時かは知らないが最低でも夜になるまでの4時間は気絶していたのだろう。

『マスター!?!?!意識はありますか!?!今こちらにライダー様と凜様が向かっています。しっかりとしてください!』

「ギルガメツシュ……あの人は……?」

『マスターが気絶したのを確認したらすぐに立ち去りました……。それより喋ってはダメです!本当に死んでしまいますよ!』

つまり、オレは負けたのか。鍛錬ではなく殺し合いで。他のサーヴァントとはギリギリ渡り合えてもあの英雄王には手も足も出なかった。グラニデを出てから負けたのはこれで二度目、一度目はこの修行の最初の相手である一人の少年。

「あの時と同じか……。いつか、勝ちたいな……」

眩いた視線の先の夜空はいつまでも美しかった。

第10話 サーヴァント講座 VSギルガメッシュ（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

他のサーヴァントと一週間ギリギリ喰い付けるシノンもギルガメッシュには傷一つ付けられませんでした。

あと数話で修行編はお仕舞いです。それからA・S（合ってるかな？）編に入ろうと思っています。

では、また次回。

修行編最終話 舞い戻る舞台、その名は海鳴市（前書き）

お久しぶりです。

今回で修行編は終了。次回からはA、S編に入ります。今回はかなり短いです。

では、ごっご。

修行編最終話 舞い戻る舞台、その名は海鳴市

S i d e シノン

全サーヴァントと行った一人につき一週間の鍛錬を終え、オレは現在衛宮家で治療を受けている。

先生が迎えに来る予定の日は明日。本来ならサーヴァントとの鍛錬を終えて残った2、3日は鍛錬の成果を見直すはずだったのだが、怪我が予想より遙かに深刻だった。

最後のサーヴァント、英雄王ギルガメツシユの宝具、天地乖離す開闢の星エヌマ・エリシュを受けて出来た傷は予想より深刻だった。

ギルガメシュに敗北してから余った6日間を費やして怪我はかなりマシになったのだが、未だにベッドから離れて歩くのが少し辛い。中庭に行くだけでも獣状態の美音の背中に乗せてもらう様だ。

コンコン。

「シノン、起きてるか？・・・飯作っただけど・・・」

「起きてます・・・どうぞ、士郎さん」

ドアを開けて入ってきたのはこの家の主、士郎さん。手に持ったお盆の上には湯気を上げているお粥が置かれている。別に風邪を引いたわけではないのだが、内臓も少しやられていたので消化が良い物だけを食べるようにしているのだ。

「起きられるか？遠坂から飯の後に包帯の取り替えが必要ならやっ
とけつて言われたけど・・・」

「大丈夫です。ベッドの上なら体も少し動かせるし、傷もかなり塞
がってききましたから」

ゆっくりなペースで土郎さんにお粥を食べさせてもらい、ベッドに
背中を預ける。

「本当にすみません、土郎さん　　泊めてもらう場所だけじゃ
なく看病まで・・・」

「何言つてんだ・・・俺は別に苦じゃないぞ？それにシノン毎日
家事手伝ったくれたじゃないか。桜や藤ねえもシノンが教えてくれ
たスイーツを気に入って感謝してたしな」

「いや泊まらせてもらってるんだから家事くらいは　　それに料
理のもスイーツ以外は逆に学ぶことだらけだったし」

以前、料理の片付けを終えた時にパニールから教えてもらったスイ
ーツを改造したオリジナルスイーツのレシピを思い出し作ってみた
のだ。

これが以外に好評で、残ったスイーツを巡って女性陣が危うく流血
沙汰の争奪戦を始めそうになった。結果的にはオレが土郎さんにレ
シピを教えることでじゃんけんで解決した。

その案を出す前に女性陣の近くに見えた剣やら杭やら宝石やら黒い
液体やら魔術刻印やら竹刀やらは鍛錬の疲れで見えた錯覚だと信じ
ている。

「大丈夫だよ、俺達はシノンを迷惑だと思っ
てないしむしろ感謝して
る……今はちゃんと怪我を治せよ？最後の夕食になるから今
日の夜は桜もこっちに来るってさ それじゃあな」

「はい 昼飯、ありがとうございました」

士郎さんが出て行き、部屋が静かになった。

「ヴェルフグリント、海鳴に帰るのは明日だ、ソフィアも一緒に機
能チェックをしておけよ？」

『了解しました。それにしてもマスター、冬木市に来てからは忙し
い毎日でしたね』

「確かにな だが肉体をかなり鍛えられたし力も得た。それを
抜きにしても来て良かったと思えるよ」

凜さんが言った通り、サーヴァントとの鍛錬の日々は何度も死にた
いと思うほど辛かった。だがその辛さに比例する位の強さを得たし、
時々楽しい日々だってあった。

『……ですが明日になったら、戻るのですよね』

「ああ……少し残念にも思えるが、あっちにはこんなオレを待
っていてくれる人達がいるしな」

高町家のみんなは元気だろうか？今のオレのように一週間ごとに負
傷を負うようなことは無いだろうか少し気にはなる。

コンコン。

「ん？・・・どうぞ」

「体調はどうですか、シノン・・・美音が貴方に会いたがっていたので」

「シノン、体大丈夫？」

部屋に入ってきたのはライダーさんと人間の姿となった美音。あれから美音は人間の姿を気に入ったらしく、常時は人間の姿でいることが多くなった。ちなみに美音の服装は、持ってきたのがキャスターさんなのでよくわからないが白いレースが入ったフリフリのドレスみたいな格好だ。（イメージ：超重神グラヴィオンのリールの格好）

「大丈夫だ　　と言っても全治までにはまだ掛かるがな・・・ライダーさん、美音の方はどうでしたか？」

「ふふ、順調ですよ。妖炎の制御はほぼ完璧ですし、格闘の基礎も覚ええました。もう貴方と組み手をしてもらい勝負が出来るでしょう」

「ほう・・・すごいじゃないか美音・・・けどせっかくだ、体が満足に動くようになったら格闘系の術技を教えてやるよ」

「えへへ　ありがとう、シノン」

頭を撫でてやると綺麗な笑顔を浮かべる美音。それを見ているオレとライダーさんも自然と微笑を浮かべていた。

「ねえ、シノン・・・ 明日になったら、海鳴に帰るんだよね？」

ライダーさんが退室して美音と長く話していると、突然そんなことを言われた。

「そうだな・・・イヤか？」

「ううん・・・イヤじゃないよ、けど何だか嫌な予感がするの。海鳴に帰ったら、きっと何かが起こってる」

「・・・だろうな。多分オレもなんらかの形で関わることになる・・・」

海鳴を出る前に先生が言葉の中に隠して教えてくれた。オレは恐らくまた別の事件に首を突っ込むことになる。

「大丈夫さ・・・何が来てもオレ達は負けない、だろ？」

「うん！」

そうさ、負けない。元々その為にここへ来たのだ。何が来ようとも生き延びてやる。

次の日。どんな方法を使ったのかわからないが朝起きた時にはオ

レの傷は全てが塞がれ、跡すら無くなっていた。何かの薬でも使ったのか？

久しぶりに自分の足だけで歩き、着替えてみんなと朝食を食べ、しばらく道場で士郎さんとセイバーさんの二人と稽古を行った。

そして昼が訪れ、オレと美音は纏めた荷物を持って中庭へ出た。

数分待つて中庭の空間が歪み始めた。歪みの中心から虹色の光が漏れ出し、一人の老人が姿を現した。

「お久しぶりです、先生」

「・・・久しぶいの、お主の体感時間で二ヶ月ぶりか。お主もよくやってくれたようじゃの、凜よ」

「お久しぶりです、大師匠。シノンとは二ヶ月前とは見違えるほどに強くなったと思います」

背後を見てみるとそこにはギルガメッシュとバーサーカー、小次郎さんを除いたオレの鍛錬相手が全員揃っていた。

「シノン、あなたとの鍛錬は私自身への鍛錬にもなりました。なにより、あなたの作るスイーツはとてもおいしかった。また、いつか会いましょう」

「色々と苦勞もあつたけど、最終的にはあんたが強くなったから結果オーライか。姉弟子としてこれからもあんたを応援するわ。頑張んなさい、シノン」

「遠坂のお嬢さんと私が一緒に考えた毎日の能力鍛錬はちゃんとやるのよ？それと、アサシンから伝言があるわ・・・」もう少しお主が年を食ったら共に月を見ながら酒でも飲もうぞ」・・・ですって」

「偽者しか作れん私がキミだけの武器を生み出す手助けをするとはな。まあそれなりに楽しかった。達者でな、シノン」

「結局槍術を少し教えてやれたぐらいだったが、楽しかったぜ。機会があればまたやろうや。今度は釣りも教えてやるよ」

「美音、あまりシノンを困らせてはいけませんよ？シノン、どうか美音を見守ってあげてください。どうかお元気で」

「またね、シノン。また会えたら今度は屋敷でゆっくりお茶でもしましょ？」

「元気でね、シノン君。なんだか弟が出来たみたいで楽しかったです」

セイバーさん、凜さん、キャスターさん、アーチャー、ランサー、ライダーさん、イリヤ姉さん、桜さん、色んな言葉をくれた人達に感謝と別れを籠めて美音と一緒に深く頭を下げた。

「お世話になりました！」

別れを告げたみんなに見送られ、オレと美音は冬木市から海鳴へと戻った。

修行編最終話 舞い戻る舞台、その名は海鳴市（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

なんだか今回はすごいグダグダな感じがしました。あと、女性の着る服のイメージがあまり湧いてこない。

次回からはA' S編。STSに辿り着くまで、一体どれだけ掛かるんだろう？

では、また新編で。

A' S編開始 第1話 半年ぶりに帰ってきてすぐ戦闘……何故だ？(前書

ついにA' S編開始です。

あと丁度良い場所なので一言、感想お待ちしております。

では、どうぞ。

A' S編開始 第1話 半年ぶりに帰ってきてすぐ戦闘・・・何故だ？

Side ????

半年程前にあったプレシア・テスタロッサ事件、通称PT事件が解決してから半年ほど過ぎた12月2日。夜を迎えた海鳴市の上空に一人の少女と青い毛並みをした一匹の狼が浮遊していた。

常識から考えて人と獣が浮遊しているなど異常以外の何でもない。しかし魔導の力を身につけたその身は大地だけでなく無限の空でさえ自由に行き来できるのだ。

少女の身長は低く推定で年齢は8歳程に見える。赤い髪を2つの三つ編みに纏め、若干鋭さを感じさせる瞳は月明かりの下で青い光を宿している。

狼は青い毛並みの中で首筋の部分が白く、両目は赤い、閉じられた口からは牙が二本短く出ている。それまでなら外見はギリギリただの狼で納まるかもしれないが、異常だと確信できるのは前後全ての足に取り付けられた脚甲だ。

もう片方の少女の服装はいささか目立つものだった。上から下まで全てが赤く所々に十字架の模様が入ったゴスロリ衣装、頭部に被る帽子も赤く、その帽子の横には何故か口を縫われた赤目のウサギの顔が付けられていた。

その格好だけでも充分人の目を集めるだろうが、一番視線を集めるのは少女の右手に握られた身の丈の半分を越すほど大きく長い機械的なハンマーだろう。長い柄の底と鏑元には赤いグリップが付けら

れ、鏢とハンマーの間には無数の小さな穴が開けられた排気口のようなユニットがある。十分な殺傷能力に見合う重量を持ったそれを少女は右手だけで軽々と持っている。

片方の左手には一冊の本が握られていた。見た目だけで膨大なページだと分かる分厚さ、タイトルは書かれておらず、表紙の真ん中には金色の剣十字が描かれている。

「どうだ、ヴィータ・・・見つかりそうか？」

狼が落ち着いた若い男の声で喋りだした。魔導の世界では人話を話す獣は特に珍しくはないのだ。

「いるような・・・いないような　くそっ！この間から時々出てくる妙に大きな魔力反応が見つかれば、一気に20ページは固いの・・・」

ヴィータと呼ばれた少女は少し苛立ちながらハンマーの柄で肩を叩く。

「・・・ん？」

「どうした？」

「今流れ星が見えたような・・・いや、何でもねえ」

ヴィータの視界に一瞬だけ映った光。気になって空を見てもその光はもう無かったのでヴィータは気のせいだと納得する。

「今夜は別れて探すとしよう　闇の書は預けたぞ」

「オツケー、ザフィーラ あんたもしっかり探してよ」

「無論、心得ている」

ザフィーラと呼ばれた狼はその場から上昇して姿を消した。同時にヴィータがハンマーを振り下ろす。するとヴィータの足元に大きな赤色の魔法陣が出現した。その魔法陣は三角形の形をして陣の中には少女が持っている本に描かれているのとよく似た剣十字が描かれていた。

「封鎖領域・・・展開」

『Gefangnis der Maggie』

少女が言葉を呟いた瞬間、少女を中心に通常とは異なる空間が形成され、あっという間に街全体を覆い尽くした。形成された空間に覆われた人々が消失していく。

この領域は魔力を持つ者のみを封鎖するもの。イレギュラーな事態が起きない限り一般人がこの領域に引きずり込まれることは無い。

封鎖領域が展開されて数秒後、強い魔力反応がヴィータに伝わって来た。

「・・・ツ！魔力反応！行くよ、グラーフアイゼン」

『Jahool（了解）』

右手に握るハンマー型アームデバイス、グラーフアイゼンを構え、

ヴィータは高速飛行を開始した。

この時、ヴィータは気付いていなかった。異世界より帰還した来訪者がこの領域に入り込んでいたことを。

Side シノン

「危ねえ〜 咄嗟に重力を無効にしてなかったらやばかったな。しかし、いきなり空中に出現は流石にびっくりしたな。大丈夫か、美音」

「うん、平気」

冬木市での二ヶ月間の修行を終え、オレはこっちの世界に帰ってきた。しかし先生が出現させた場所は海鳴市の夜空、つまりは空中だったのだ。

落下の寸前に重力操作を使ってオレと美音の重力を無効にしてビルに降りたので怪我は無かったが、あれは単純に心臓に良くないと思う。

「シノン、こんなのが落ちてたよ？」

「ん？えっと、なになに……」言い忘れたが、平行世界の時差が予想よりも大きかったのでそっちの世界はお前がいなくなっただけから半年ほど経っている『……半年？マジで？』

向こうでの二ヶ月がこっちでは半年だとは予想も出来なかった。というか大丈夫かな？高町家の皆さんには鍛錬の期間を伝えてないけど流石に心配されるんじゃないか？

『マスター、嫌な情報が続けて伝えてしまうのですが・・・封鎖領域の発動を感知しました。3秒後にこの場所も飲み込まれます』

「「え？」」

ヴェルグリンツの言葉に続いたようにオレ達は迫ってきた結界に取り込まれた。

展開したのが誰かは知らないが街の中心でやるとはな、恐らく戦闘だろうな。

しかし、何故かこの結界には違和感を覚える。ユーノが展開した結界とは根本的な何かが違っている気がする。どちらかと言えばヴェルグリンツの結界に似ているような。

『マスター、展開した本人と思われる反応が高速飛行で移動し戦闘を開始したようです。恐らくこの反応は　　なのは様です・・・
・封鎖領域内に転移反応、なのは様の付近に新たな3つの反応が出現しました。反応から推定して、フェイト様、アルフ様、ユーノ・スクライアの3名です』

「フェイト達が？　　ああそっか、半年も経ってれば裁判も大体終わってるか・・・しかしなのはやつ、相変わらず厄介事に巻き込まれてんのか・・・」

しかもこんな結界を使ってるってことは間違いなく魔導師関係の事件だ。なんだって半年前も今も”管理外”のこの世界で起こるんだ。

「仕方ないか

襲撃犯の奴らには鍛錬の成果を確かめる実験台

になっていたどころ。美音、行けるか？」

「うん！大丈夫」

『Set up・Axel fin Ready go.』

騎士甲冑を身に纏い、背中に銀色のフィンを出現させ戦闘の場所までを猛スピードで一直線に飛ぶ。すぐ横には足に燃え盛る妖炎を纏わせて飛行する美音。

一度どうやって飛んでいるのか聞いてみたのだが、本人曰く「飛べるといふ感覚を初めから知っていたから詳しい仕組みはわからない」だそうだ。

『マスター、どうやらなのは様は戦闘不能、現在は敵勢力3名と1対1で交戦を行っているようです』

「敵勢力の内1名はなのはを戦闘不能にするほど、最悪の場合は3名が同じクラスだと考えるべきか。とにかく急ぐぞ。間に合いませんでしたじゃ洒落にならない」

Side Out

シノン達が飛行を続けている一方、なのは達はかなり不利な状況にいた。

突然攻撃を仕掛けてきたヴィータによってなのはとレイジングハートは戦闘不能。現在はユーノの作った回復と防御の二重効果シールドの中にいる。

なのはに変わってユーノがヴィータと交戦しているが、まともな攻撃手段を持たないユーノではひたすら防御に徹しながら展開されている結界の解析を行うのが限界である。

アルフの方はヴィータに続いて参戦してきたザフィーラと戦っている。今のザフィーラの姿は狼ではなく人間形態のアルフと同じように狼の耳と尻尾を出した人間の男の姿だ。

長身の体に褐色の肌、髪と眉毛は短い長さで白く、目は赤い。筋肉の付いた肉体の両手両足には手甲と脚甲が装着されている。

そのザフィーラと戦っているアルフは完全に押されていた。パワーで圧倒されているが、何より格闘戦の技術差がアルフの不利を確定させている。

そしてアルフの主であるフェイトも同じように苦戦している。戦っている相手はザフィーラと共に現れ戦闘に参加したシグナムと呼ばれた女性。

ポニーテールに纏められた長いピンク色の髪と水色の瞳、ヴィータのように少し鋭さを感じさせる両目が美貌に凛々しさを感じさせている。

服装はどこか西洋の騎士を思わせ、右手には機械的な長剣を持っていた。白く長い刃、柄にはグリップが巻かれ、鍔の部分には丸いマインスボルトのようなパーツ、その近くの鍔元にはヴィータのグラーファイゼンとよく似たユニットが搭載されていた。

フェイトは先程からフォトンランサーやアークセイバーでの攻撃を繰り返しているが、全てシグナムが現在展開している装身型防魔

法、パンツァーガイストによって阻まれ（シグナムは回避せずわざと受けている）まったくダメージを与えられていない。サンダースマッシュャーなどの砲撃魔法ならば突破できるかもしれないが、シグナムがそのような隙を逃すわけもなく、チャージ中に潰される。

対してフェイトはシグナムの攻撃を捌き切れず、防御魔法で受け止めようとしても障壁ごと叩き斬られている。さらにフェイトのバリアジャケットは装甲が薄いのでシグナムの斬撃などまともに受ければ間違いなく致命傷だ。

攻撃が効かず、相手の攻撃は防御出来ない上に一発当たれば即アウト。もはや単なるワンサイドゲームに見える状況だ。フェイトは唯一シグナムに勝っている速度をフル活用して何とか耐え凌いでいるが、同時に、確実に追い込まれていた。

『Sonic Move』

唐竹に振り下ろされた斬撃をフェイトはギリギリで回避してシグナムの背後を取る。それと同時にフェイトはフォトンランサーを4発直撃させるが、やはりシグナムは無傷。シグナムは一直線でフェイトに接近し、剣を振り降ろす。

何度も連続でソニックムーブを使用した疲労感がフェイトの反応を遅らせた。バルディッシュが咄嗟に障壁を展開させるが、即席の防御などシグナムの前では紙も同然、5秒も掛からず砕け散った。

「レヴァンティン！　叩き斬れ！」

『Jahool!』

レヴァンティンと呼ばれる長剣型のデバイスが主に返答すると、長剣の鍔元に装着されているユニットが上にスライド、ユニットに覆われていた内部から小さな何かが吐き出された。ユニットが撃鉄音を立てて下部にスライドして排気口から蒸気を噴出する。

次の瞬間、シグナムの魔力が爆発的に跳ね上がり、レヴァンティンの刃を炎が包む。フェイトと同じ魔力変換資質、その炎属性を持つシグナムにはごく自然な利用方法だ。

再び振り下ろされた斬撃、直撃だけは回避するためにフェイトは斬撃をバルディッシュで受け止める。だが、シグナムの攻撃はバルディッシュ本体の装甲を斬り裂きコアさえも傷付けた。攻撃を受け切れなかったフェイトは下方に高速落下、ビルの中に突っ込んでいった。

「諦めてはくれぬか……抵抗しなければ命までは取らんぞ、テスタロッサ」

「はぁ……はぁ……無理な相談です」

完全な余裕を見せるシグナムを前にフェイトはバルディッシュを支えにして何とか立ち上がり、シグナムと同じ高度まで上昇する。

「……そうか　では……ッ！」

再び剣を構えたその瞬間、シグナムの右側から銀色の光が迫ってきた。シグナムは迎撃しようと剣を右薙ぎに振るったが、腕に凄まじい衝撃を感じてシグナムは後方に吹き飛ばされ、フェイトの落下時を上回る速度でビルに突っ込んだ。

「お〜お〜、飛んだ飛んだ。出来れば敵のデバイスごと両断したかったが、意外に固かったな」

『今の女性・・・それにあのアームドデバイスの機構　やはり、あれは・・・』

ビルに突っ込んでいったシグナムを見てフェイトは呆然としていたが、聞き覚えのある声を聞いて意識をしっかりとらせる。

夜風でなびく腰まで届く銀の髪、深い蒼色の瞳、両手には以前の日本刀の姿から二本の長刀へと変化したデバイス。

「シノン・・・？」

「おう。久しぶりだな、フェイト」

『お久しぶりです。フェイト様』

その人物は、半年前にPT事件を解決させた重要人物、異世界からの来訪者、シノン・ガロードであった。

A S編開始 第1話 半年ぶりに帰ってきてすぐ戦闘・・・何故だ？（後書

ご覧いただきありがとうございます。

守護騎士達にサンドバック及び技試しの標的のフラグが立ちました
ちなみにシノンが降りた場所は戦闘場所からかなり遠く離れていた
ので到着まで時間が掛かったという設定です。

ヴィータ達の襲撃は原作とほとんど大差ありません。

前書きを見なかった人の為にもう一回、感想お待ちしています。

では、また次回。

第2話 始まった戦い (前書き)

遅くなりました。今回は少しグロテスクかもしれませんが。

では、ごきげん。

第2話 始まった戦い

S i d e シノン

やっと到着してみたらフェイトが女性に剣を振り上げられてた。

空中に重力操作で足場を作って背狼で突撃。デバイスごと首を両断するつもりだったのが、思ったよりデバイスが頑丈だったので襲撃者はビルに吹っ飛んだだけだった。

「……無事みたいだな……で？あの連中は何が狙いでこっちを襲ってんだ？」

「分からない……ただ、命を取るつもりは無いみたい」

殺すつもりが無いのになのは戦闘不能になるまで追い詰めたわけか。それって通り魔より性質が悪いんじゃないか？

「……フェイト、管理局の連中は何してる？」

「え？多分今はアースラの方でこっちの状況を調べてると思うけど……」

子供を真っ先に戦場に向かわせて自分達は所有する戦力を一切投入せず実質上の高みの見物、半年の年月を過ぎても下種なやり方は変わらないか。

(美音、そっちはどうだ？)

(アルフを助けたよ……私が1人を相手にすればいいんだよね？大丈夫)

冬木市で美音に念話を教えておいたが、どうやらちゃんと物にしているらしい。

「シノン、今なのはが念話でスターライト・ブレイカーを撃って境界を壊すって……」

「わかった……ならそれまで終わらせよう。あとはオレがやるから下がってろ、バルディッシュもそろそろ限界が近いみたいだし休ませてやれ」

「……うん、無理しないでね？」

はいよ、と答えて右手の長刀を後ろへ右薙ぎに振るう。手応えを感じ後ろを向くと、ビル目掛けて吹っ飛んでいった女性が頭部から少量の血を流しながら剣を振り下ろしていた。

「随分丈夫なんだな……体もデバイスも、それなりに強い力で吹っ飛ばしたんだが……」

右手を振り抜いて女性の剣を押し返す。見た所デバイスにも大した損害はないらしい。

「それなりに修羅場を潜っているのな……それより、お前からは魔力を感じられない。何故魔力を持たない身で魔法を使える」

「特異体質みたいなものでね、最近の辻斬りさんは魔力を持った相手しか襲わないのか？」

「辻斬りだと！？・・・私が名はベルカの騎士！ヴォルケンリツタ
ー、烈火の将 シグナムだ！！その言葉を今すぐ訂正してもらおう
！！・・・貴様の名は何だ！？」

どうやら辻斬りと呼ばれてかなりお怒りのようだ。というかふざけるな、誰がさつきまで友人に刃物で斬りかかった人間に名前乗るか。

「お前の世界じゃどうだったか知らんが、この世界じゃ刃物振り回して襲い掛かる人間は紛れも無い辻斬り、あるいは通り魔だよ。そんな人間が騎士？訂正するのはお前の方じゃないのか？・・・ああ、それと覚悟しろよ・・・」

両手の長刀を構え、殺気をぶつける。それに反応してシグナムと名乗った女性が剣を構えた。

「お前らはオレの友人を1人傷付け、もう1人を同じ目に遭わせようとした・・・容赦はせん」

その言葉を言い終えると同時に接近。左の長刀を左袈裟に振り下ろす。当然シグナムも反応して打ち込んできた剣とぶつかり、押し合いとなるが即座に右の長刀を打ち付けシグナムの剣を後方に押し返す。

「崩襲脚・炎龍！！」

がら空きになった腹部目掛けて炎を纏った蹴りを打ち込む。同時にオレ自身の重力を跳ね上げ落下の力を加える。

シグナムは左腕に障壁を発生させて蹴りと爆発の直撃を防ぐ。だがよく見ると防御した左腕はだらりと垂れ下がっていた。骨がへし折れた、あるいは砕けたのだろう。

爆発の勢いに抗わずシグナムは後ろに後退、オレとの距離を取る。

『後方より物理誘導弾接近』

逃がすまいと追撃を仕掛けようとした時、後方から数発の小さな鉄球が飛んできた。その場を動かさず、二本の長刀を振るって全て弾く。どうせ誘導弾なのだから回避するより打ち落とした方が手間は掛からない。

すると今度は背後に赤いゴスロリを着た少女が現れ、ハンマー型のデバイスを振り下ろしてくる。

「テートリヒ・シュラーケ!!」

「ちっ……月閃光!!月閃虚崩!!」

振り向き様にハンマーの鏢元へ長刀を割り込ませて上に弾き、両の長刀を同時に振り下ろしてゴスロリ少女を後方に弾き飛ばす。

「こいつはユーノと交戦してたんじゃないのか？」

『ユーノ・スクライアの反応はかなり遠くに確認できます。恐らく、あちらを振り切ってこちらに来たのでしょうか……マスター!上です!』

体勢を崩したゴスロリ少女に追撃を掛けようとするが上空から降下

してきたシグナムに阻まれる。

「レヴァンティン」

『Explosion』

（レヴァンティン？レヴァティンじゃなくて？）

デバイスの鏢元が撃鉄音を上げて何かを吐き出した。一瞬だけ見え
たが、あれは……

（弾丸？デバイスの形状からして銃剣には見えない、何か仕掛けが
あるな……）

デバイスから弾丸が吐き出され、シグナムの魔力が一瞬で跳ね上が
りデバイスの刀身を炎が包み込む。

丁度良い、思いついた新技を使ってみるか。

左の長刀を腰に着けた鞘に仕舞う。右手の長刀を腰溜めに構え水平
に寝かせた刀身に魔力を纏わせた左手を添える。その体勢を維持し
たままシグナム目掛けて接近し、ほぼ同時に斬撃を放った。

「紫電……一閃！！」

「行くぞ新技……焰切り！！」

振り抜いた長刀が炎を纏ってシグナムの斬撃とぶつかり、小規模の
爆発が起こった。ちなみにシグナムの炎は魔力属性によりものだろ
うが、オレのは本物の炎では無く刀身と左手の魔力が激しい摩擦を
起こして発生した一時的な産物だ。

(シノン、なのはが大変！私は今手が放せないからお願い！)

突然美音から聞こえてきた念話。どんな状況かはわからないのですが、なのはの元へ向かいたいが、正面からは体勢を整えたゴスロリ少女とシグナムが迫っている。

「ちっ！ユーノは何やってやがる……くそ、邪魔だてめえら！」

足元に重力場を生成して着地、即座に背狼で正面の二人目掛けて突っ込む。

「白風！！」

急加速状態でほぼ同時に放たれた二つの斬撃はゴスロリ少女とシグナムの真ん中を通り過ぎて左肩と右脇腹を深く斬り裂く。白風は敵が一人の時に使用するのがベストな技なので熟練者二人相手ではまだこんなものだ。

二人の間を通り過ぎ、展開したままのアクセルフィン羽ばたかせて急停止と急旋回を同時に行い、二人の背後を取る。

右の長刀に炎、左手の長刀に冷気が渦巻く。二本の長刀を同時に袈裟斬りに振るう。熱と冷気が交じり合った真つ赤な風が二人を牽制する。

「こいつ……二つの属性変換持ちか！？」

「一緒にすんな！……闇の炎に抱かれて消えろ！浄破滅焼闇！

！」

両の長刀を振り下ろし、巨大な漆黒の炎が二人を飲み込み、大爆発が起こった。

空中に漂う爆煙の中から二つの物体が飛び出し、正面のビル内に突っ込んだ。とどめを刺しておきたいところだが、今はなのはの元へ向かうとしよう。

「負荷は気にしなくて良い、常時最大出力で飛行しろ」

『了解。アクセルフィンの加速を最大出力でセミオートに設定します』

背中のフィンが普段よりも一段と輝きを放つ。直後に全身が風に包まれ、オレはその場を離れた。

Side Out

シノンがビルが密集した場所を抜けると、目印のように輝きを放つ桜色の球体を見つけた。

間違いなくなのはの最高魔法、スターライト・ブレイカーである。

見る限りでチャージは終了しているのだがスターライト・ブレイカーは放たれていない。

肉体の性能が常人より優れているシノンの目がなのはの姿を映した。

純白のバリアジャケットは傷付き、手に握るデバイスはすでにボロボロ。だが、シノンの目が捉えたのはなのは胸元から突き出ている腕だった。

緑色の衣服に包まれ、細さから女性だとわかるその腕は手の平に桜色の小さな球体を持っている。魔導師の力の心臓とも呼べる器官、リンカーンコアだ。

瞬間、シノンの目が見開かれ、頭の中で何かが切れた音がした。

(殺す・・・全員殺してやる)

最大出力を維持した状態で闘気放出を連射してさらに加速。地に左の長刀を突き刺して減速を行い、なのはの傍に降り立つ。

シノンは無言でなのはの胸元から出現した腕を左手で掴み、片手で発揮可能な最大限の力で腕を握り潰した。何かが弾けたような水音と粉碎音が響き、血が噴き出す。返り血が顔や体にぶちまけられるがシノンの表情は動かない。

潰れた先から腕は力を失い、手の平の中にあつたリンカーンコアはなのはの体内に溶け込んでいった。

しかしシノンは腕を放さず、右手に持った長刀を高く振り上げる。そのまま振り下ろされれば潰れた腕は真っ二つになるだろう。

『Explosion』

「やめろ!」

『R a k e t e n f o r m』

「シャマルを放せええ！！・・・ラケーテンハンマー！！」

それを必死に拒もうと左右から響く撃鉄音。シグナムのレヴァンテインが炎を纏い、ヴィータのグラーフアイゼンがハンマーの片方を鋭利なスパイクに、もう片方を噴射口に姿を変えた。

シノンには仕方なく左手を離す。潰された腕は緑色の魔力光に包まれて消える。

（美音、なのはを頼む。・・・できるか？）

（うん、大丈夫！）

シノンは気絶寸前なのはを左手で支え、すぐに駆けつけて来た美音になのはを預ける。

ヴィータとシグナムの二人がおよそ10メートル程まで近付いた。シグナムはレヴァンテインを振り上げ、ヴィータは噴射口から噴射された魔力で己を高速回転させて高い殺傷力を得たスパイクをシノンに打ち込もうとする。

しかし、その攻撃はどれもシノンに届かず、ヴィータとシグナムの二人は無色の圧力によって地面に叩きつけられた。

シノンが重力操作でシグナムとヴィータの立つ場所の重力を数百倍に跳ね上げたのだ。魔導師であろうと騎士であろうと所詮は人間。デバイスの保護機能が無ければすでに内臓を破壊されているほどの高重圧下ではもはや何も出来ない。

「ぐっ……んだよ……これ……！」

「これは……動けん……！」

必死に立ち上がろうとする二人をシノンは自然と見下す姿勢になる。二人に向けられた目にはただ冷たい殺意しか宿していない。長刀を握る両手に力が籠もった。

しかし、その力が解放されるより先にシノンの体を青白ロープが拘束した。魔導師が主に使用する拘束魔法、バインドである。

それが絶え間無く連続で出現し続ける。両腕と胴体にそれぞれ5つ、瞬く間に計15個のバインドがシノンの体を完全に拘束した。

「バインド？……誰が……ッ！」

即座に力尽くでバインドを破壊しようとしたが、その瞬間にシノンの全方位から無数の魔力弾、正面からは砲撃魔法が出現した。

発動の気配がまったく感じられなかったせいでシノンは術技による防御すら出来ず、魔力弾と砲撃魔法をまともに受けた。しかも殺傷設定になっているようで、騎士甲冑を貫通されたシノンの全身から鮮血が舞う。

ヴェルフグリントは主のために全力でバインドのプロテクトを解除している。もう一つのデバイス、ソフィアの助力があればもっと早く解除出来るのだが、生憎とシノンの手が届かずセットアップが出来ない。

シノンも痛みには耐えながら両腕の力を籠め続けるが、シノンの目の前に1人の男が無音で静かに降り立つ。長身に白いスーツと仮面を着けている。

シノンは術で牽制を仕掛けようとするが、その前に仮面の男がシノンの腹部に拳を打ち込む。そのまま男は拳からブレイクインパルスを発動、シノンの腹部からはっきりと骨折音が響いた。

「ぐっ……がはっ……！」

「魔力は惜しいが、貴様は危険だ……死ね」

大量に吐血するシノンの頭を片手で掴み、仮面の男はもう片方の手を手刀の形にして魔力刃を形成。それをシノンの顔面へ突き出す。当たればシノンの顔面を切り裂き、頭蓋を貫通するだろう。

仮面の男の腕がシノンの顔面を通過し、破裂音と共に鮮血が飛び散った。

仮面の男が魔力刃を突き出した瞬間、シノンは左こめかみ部分から闘気放出を行って顔面を力尽くで左に移動させて魔力刃の直撃を回避した。

だが完全には避けきれず、魔力刃はシノンの左目全体を深く抉った。

「うっ　　あああああああああ！！！！！！！！」

生きてきた中で最大の激痛が走り、シノンの喉が勝手に大声を上げる。同時にシノンの体を拘束していたバンドが一斉に砕け散った。

『マスター、正面に全力で刀を振るって!』

意識が断裂寸前のシノンにヴェルフグリントは大音量で念話を飛ばす。意識より先に体が反応し、シノンは両腕の長刀を逆袈裟に振り抜いた。

仮面の男は仕留められなかった驚きで反応が遅れ、胸元をクロスの形に切り裂かれた。

「くっ……今だ、やれ!」

傷口を庇いながら仮面の男はヴィータとシグナムに叫んだ。目をやられた激痛でシノンは演算が解除され、ヴィータとシグナムはすでに動けるようになっていた。

仮面の男の声を聞いてヴィータとシグナムは躊躇い無く動いた。シノンが危険な存在だということは既に二人の身に染みていたのだ。

迫るスパイクハンマーと炎を纏う剣。シノンはグチャグチャの意識の中で必死に体を動かす。

「ああああああああ!!!」

絶叫と共に両手の長刀が振るわれ、左右から迫る攻撃をそれぞれ片手で受け止める。

右から迫るシグナムの斬撃を受け止めたが、見えなくなった左側から迫ったスパイクハンマーは矛先の回転で長刀を通り抜けた。

「ぶち抜けええええ!!!」

振り抜かれたハンマーはシノンの胸部に直撃し、騎士甲冑すら破壊してシノンの体を鮮血に染めた。

衝撃でビル内に吹き飛んだシノン。シグナム達はそれを追撃せず、ザフィーラと合流して結界を解除、そのまま別々に転移して離脱した。

仮面の男も結界が解除されると同時に転移魔法を発動、その場から姿を消す。

美音は敵など眼中に入れず、全速力でシノンの元に向かった。

「シノン！」

ビル内に倒れ伏したシノンを見つけ、美音は教えられた治療術で左目を重点的に治療した。フェイトも回復した通信でアースラに医療班を最優先で要求する。

この襲撃を引き金に、第一級ロストログア闇の書によって後に”闇の書事件”と呼ばれる騒動が幕を開けた。

第2話 始まった戦い（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

今回のシノンが上がって叩き落とされました。冬木市で地獄の鍛錬を体験したのに仮面のKYに台無しにされてしまった。

仮面の男の中身は近距離主体の方です。遠距離主体の方は離れた場所にいました。これで分かる人は分かるよね？

では、また次回。

第3話 刻まれた傷跡

Side Out

シノン・ガライドは依頼を達成し、グランマニエの港町に建つ依頼管理の事務所を訪れた。

中に入るとシノンに視線が集まるが、シノンは気にもせず受付へと歩を進める。

「あらシノン君、お仕事お疲れ様・・・また少し背が伸びたんじやない？」

この受付を務める女性軍人はシノンと少し面識がある。始めて会ったのはシノンがモンスター討伐を終えた約3年前。あれから女性はよくシノンに話しかけるようになり、かなりのスピードで成長を続けるシノンも少しは心を許している。

「・・・お願いします」

「はい・・・依頼品の納品を確認しました。これが報酬ね。今回は怪我しなかった？」

「・・・大きな怪我はしてません。そんなに危険な場所でもなかったのです」

過酷な環境で生きてきたシノンは女性の態度に少々苦手意識があるが嫌いではなかった。

用件を終えたシノンは照れ隠しのように事務所の出口を目指す。

「またね、シノン君」

「……………はい」

一礼してシノンは事務所を出る。そのまま宿屋に足を運び、受付を済ませて部屋に入る。

ベッドの上に座ったシノンは夕食までの時間を考え、報酬を合わせた所持金の確認、今後の予定、武器の手入れなどを開始した。

刀の整備を終え、夕食を食べようとシノンは立ち上がる。しかし、窓から見えた夜の街から一点、赤い光が見えた。良く見ればそれは燃え盛る炎だ。

だがシノンは炎よりも炎が出ている場所が気になった。土地勘を元に見て、あの場所はシノンがよく使う事務所の近くだ。

いやな予感がする。シノンは刀を腰に差してフードを着用して、宿屋を飛び出した。

見た目の体軀からは考えられない速度で夜道を走るシノンは近付く炎の場所を見て徐々に不安を大きくしていく。

着いた先でシノンが目にしたのは業火に包まれる事務所。周辺には一般人が集まっている。

「おい坊主！・・・ここは危ない、早く家に帰りな」

「何があつたんだ・・・」

「あ？見ての通りだよ・・・突然事務所が燃え出したんだ」

突然、その言葉にシノンは引つ掛かりを覚えたが今はそれより気になることがあつた。

「中に人はいるのか・・・？」

「それはわからんが・・・誰かが事務所に明かりが点いてたと言つてたな・・・あ、おい！！」

話を聞いたシノンは躊躇いも無く走り出し、燃えるドアを蹴り飛ばして事務所の中へ突入した。

事務所は一階建てで横に部屋を広げる構造をしている。よくここを訪れるシノンは建物の構造を理解している。脳内で情報を再確認したシノンが向かったのは軍人達が書類仕事を片付ける部屋。

「魔神剣！！」

燃えているドアを破壊して中に入る。だが、そこにはシノンが最も望んでいない光景があつた。

部屋の中に倒れる数人の人間。その中にはシノンが良く知っている顔があつた。受付の女性軍人だ。

近付いてみると、腹部にある傷から血を流していた。脈も既に無く、他の人間も同じように負傷を負っている。それが意味するのは、この人間は火災が起こる前に誰かに殺された、その事実だ。

「・・・・・・・・」

シノンは無言で女性を抱き上げ、出口へと疾走する。その途中、シノンはただ歯を食いしばっていた。

翌朝、火災の通報を受けて駆けつけたライマ軍と消防団が火災を沈静して事務所の跡地では死体の処理や現場の検証などが行われていた。

シノンはその場から少し離れた所にいた。女性の体を寝かせ、その上にフードを掛けている。シノンはただ黙って近くに座っている。涙は無かったが、その目には確かな悲しみがある。

「失礼、少しお話を・・・・・・・・お知り合いだったのですか？」

背後から話しかけてきた軍人の問いにシノンはただ頷いた。燃えた事務所の中には軍人しかいなかったのだからシノンの前に寝かされた人間が軍人なのはすぐにわかる。

「そうですね・・・・・・・・感謝します。彼女の遺体は後でこちらが預かりますので安心してください。それと、あなたは気付いているかもしれないので真相を教えてください。」

調査の結果、今回の火災は事故ではありませんでした。何者かが中の軍人を全員殺し、その後火を放ったようですね……ですが犯行を行った連中の足取りは既に掴めていますのでご安心ください」

やはりシノンの予想通りだった。シノンの表情は動かないが、右手を強く握り締めている。

「……頼みがある」

「頼みですか？」

「報酬はいらない……だからその連中の討伐にオレを加えてくれ、捨て駒にしてもらってもいい」

軍人の方に顔を向けず、シノンは頼んだ。報酬を求めない傭兵、同業の人間から見れば鼻で笑われるほど滑稽なことだろう。

だがそうまでしてもシノンは犯行グループに用があった。用事の内容は大したことではない。殺す、ただそれだけだ。

「何をするかは聞くまでも無いでしょうね……いいでしょう、こちらとしてもタダで働いてくれる傭兵はありがたい……あなたのお名前は？」

「……シノン……シノン・ガラード……あなたは？」

シノンが顔だけを後ろに向けた。視線の先にいた軍人は顔立ちが随分若く、茶色の髪を肩まで伸ばし、強く輝く赤い瞳に眼鏡を掛けている。

目を合わせた瞬間に目の前の男は微笑を浮かべた。普通ならただの笑顔に見えるが、大人の汚い部分を昔から見てきたシノンはその笑顔に隠されている黒い部分を感じた。

「ジェイド・カーティスと申します・・・階級は中佐です。よろしく願います」

これが、シノン・ガードがアドリビトムに接触するきっかけの原点であった。

Side シノン

「・・・・・・・・チツ・・・いやな夢を見たもんだ」

全身に走る激痛を感じる先に言葉が出た。ちくしょう、何が悲しくてあの野郎と出会った時のことを思い出さなきゃならんだ。つか気のせいかな？何だか視界がいつもより狭い気がするんだが。

「・・・・・・・・」

なんだ？なのは達が呆然とオレを見ているが、何かあったのか？

「目が覚めたの！？大丈夫、シノン？」

「シノン！・・・大丈夫？」

フェイトと美音が瞳に涙を溜めて近付いてくる。頭でも撫でてやり

たいが生憎と体が動かないので声で無事を知らせよう。

「一応、生きている……首から下がまったく動かなくて悪いがな。ここは何処だ？」

「時空管理局の本部、本局だよ。キミは気絶した後、転移魔法でここに運ばれたんだ」

「他のメンバーは無傷か軽傷だったけど、あなたはかなりの重傷だったのよ？……ここにいるのが奇跡みたいなものなんだから。ちなみに運ばれてからすでに1日が過ぎてているわ」

入室してきたのはKY執務官ことクロノ・ハラオウン……だっけ？（真剣に悩んでいる）そしてその母親のリンディ・ハラオウン。くそ、治療を受けた身でなければ現場に現れなかった無能を罵ってやったのだが。

「世話になっただけ……感謝する。それと、連中を仕留め損ねたことを謝罪する」

周りの連中が息を呑んで固まるがこれは本心だ。あの仮面の男が乱入してきたせいでもあるが結果的な原因はオレの力が足りなかったことだ。実際オレを鍛えてくれたサーヴァントの皆ならあの状況でも軽傷で済むだろう。

「……キミが謝る必要はない。あの連中はかなり前から管理局が手を焼いているんだ」

「お医者様の話だと怪我の酷さから全治約3ヶ月……明日からは一応海鳴市の病院に入院してもらって予定のだけど……」

海鳴市の病院か。高町家の皆さんにも帰ってきたと伝えたいし好都合か……最も、こんな体たらくで帰ってきたというのもおかしいがな。

「わかりました、それよりも……状況を説明してもらいたいのですが」

「それよりもって……死んじゃうかもしれないんだよ!？
……わたしのせいで」

オレの言葉が気に入らなかつたらしく今まで黙っていたのはが声を上げた。その顔からはすでに涙が溢れている。

「……状況の説明、だったわね……何が知りたいのかしら？」

沈黙が落ちた空気でリンディさんが言葉を発する。情けないことになのはへの言葉が思い浮かばないので質問を優先させてもらおう。

「……それじゃあ、まず……ヴェルフグリントは？」

「現在はもう一つのデバイスと一緒に別室に置いているわ、自分達だけで考えたいことがあるそうよ」

「次……襲撃犯の足取りは？」

「現在ユーノ君とアルフさんの協力で転移の痕跡を辿って必死に追跡しているけど……場所の特定は難しいでしょうね」

「次……ちょっと鏡貸してもらえます?」

「え？いいけど・・・はい・・・」

「・・・どうも、ちょっと顔に傷が無いか心配だったので・・・次は・・・」

「おいお前ら・・・個室だからって大所帯で病室に入るんじゃない、銀髪の娘以外はとっとと出てけ」

扉が開き、部屋に入ってきたのはダルそうな顔をした長身の男。首筋まである黒髪は無造作に伸びて、顔立ちは整っているのだが目つきが悪いせいで少し近寄り難い。

白衣を着ているということは医者なのだろうが、何故口に火が点いていない煙草があるのだろうか。

「あ、わかりました・・・ごめんなさいシノン君、質問にはまた今度答えてあげるから・・・早く怪我を治してね・・・皆出ましよう」

リンディさんの声を聞いてみんなが退出していく。部屋を出る時になのはが小さい声で”ごめんね”と言ったので”気にしなくていい”と返答した。

みんなが部屋から退出し、部屋の中にはオレと美音と医師だけしかいなくなつた。

「めんどくせえが俺はリブス、死に掛けの状態で運ばれてきたてめえの手術を担当した医者だ。あのハラウンが直々に頼みに着やがったせいで今はこうして容態を確かめに来たわけだ・・・まず単刀

直入に訊いとく、お前本当に人間か？」

「……どういう意味ですか？」

「言葉の通りの意味だ。此処に運ばれてきた時にちらつと見たが、あの時てめえの左目は完全に切り裂かれてた……だが手術を開始してみれば眼球の傷は格段に小さくなってた。それから他の怪我も手術が済んだら信じられない速度で再生を始めやがった……どう考えてもまともな人間が成せる技とは思えねえな」

普通の人間とは違い、オレの体は全て世界樹によって作られている。そして世界を見るための目として生み出されたこの体には並大抵では死ねない脅威的な自己治癒能力がある。意識が無くとも、生きている限りこの肉体は是が非でもオレを生かそうとするのだ。

「……生まれが少し特殊でしてね、その経緯で自己治癒力が人間離れしてるんですよ……けど、こんな体でもヒトですよ？」

「……その特殊ってやつは医者として聞かねえ。俺が知りたかったのはてめえの正体だ……それじゃあ怪我の詳細を教えてやる。負傷箇所はほぼ全身、一番多かつたのは全方位から殺傷設定の魔力弾と砲撃を撃たれて出来た傷。次にブレイクインパルスをゼロ距離で使用されて折れた2本の肋骨、幸い内臓は傷付かなかったがな。そして深刻なのが胸部に受けた抉り傷と、その左目だ」

リプスが指差した先にあるのは”傷一つ無い”左目。意味がわからないように美音は首を傾げている。

「そっちの娘も知っておくべきだろうな……おいガキ、正直に答える。今左目は見えるか？」

「……いえ、見えません」

目が覚めた時から視界がいつもより狭い気はした。だが鏡で自分の顔を見ても左目には包帯などは無いし、見た目には何の傷も見えない。だが、見えないのだ。

「……手術の時に見たが、眼球の網班の奥の視神経ごとざっくりやられてやがった。切断された神経に自然治癒能力は無意味、手の施しようも無かった。自己治癒が直せたのは外見までが限界だったんだろう」

「シノン……目、見えないの？」

「……みたいだな。でも、今は美音がいるから大丈夫さ」

涙を溜めてオレの左目に触れる美音に微笑を返す。少し辛い話を聞かせてしまったが美音はオレの家族みたいなものだ、出来れば知っておいてほしい。

「片目無くしたつてのに随分余裕あるじゃねえか……まあパニックになられるよりはマシか。その目のことを他の奴に話すかはてめえで決める。いいな？……次は胸部の傷だが、外傷はお前の自然治癒と処置で時期に直る……だが問題は其中、リンカーコアだ」

リンカーコア。魔導師の力の心臓とも呼ぶべき器官であり、魔力の源だ。連結する核の意味を持つこれは大気中の魔力を体内に取り込んで蓄積することと体内の魔力を外部に放出する役割を持っている。

これはオレの体内にも存在し、今では使わなくなった魔術回路とは別である。

「・・・検査の結果、胸部に直撃した攻撃はお前のリンカーコアまで到達、そのせいで一部の機能が不全を起こしてやがる。魔法適正・・・まあ魔導師の才能ってやつか、詳細はわからんが魔法の使用に大きな制限が付くだろう」

「・・・不全を起こしてる機能というのは？」

「リンカーコアは体内に魔力を取り込んで蓄積、それを放出する。人間の呼吸と同じだ。だが、お前のリンカーコアはそのバランスが壊れてやがんだ。体内に魔力を取り込む量が増加する一方で放出する量が通常の半分以下になってやがる。このままだと内側から体が壊れていくだろうな」

左目が完全に失明し、リンカーコアの損傷によって出来た厄介な後遺症。もしかしなくてもかなりやばい状況のようだ。いや、あの状況下にこの程度で済んだのなら良い方か？

「まあ、左目の方はどうしようもないが・・・リンカーコアの方は何とかしてやる」

「治療法があるんですか？」

「違えよ・・・ぴったりの薬を処方してやる。準備に少し時間が掛かるが2、3日で済ませてやる」

薬か、確かに治療法があるなら既にされてるはずだもんな。

しかし、片目が見えないとなると少なからず不便だな。まだ片目の視界に慣れてないから日常生活も苦労するだろうし、戦闘だって左側が見えないことに付け込まれるかもしれない。

ヴェルフグリントも恐らくオレの現状を知っているだろう。目をやられたあの時一番近くに居てくれたのだからな。今ここに居ないことから見てあいつも気負っているんだろう。

片目の視界に慣れる、後遺症を背負った今の状態での戦力把握、襲撃犯が来た時のための戦力強化、やることは山ほどある。

「……とにかく今は寝とけ。何をするにしてもまず体が動かないけりゃ話にならねえんだ」

「……そう、します。おや、すみ……美音」

「……うん。おやすみ、シノン」

会話が終わると忘れていたように強烈な睡魔が押し寄せてきた。出来ればリブスと美音が退出するまで耐えていたかったが、オレは睡魔に抗えずに眠りに付いた。

第3話 刻まれた傷跡（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

シノンには左目を失くしました。今の所何かの力で復活、みたいな予定はありません。さらにリンカーコアの負傷による後遺症まで追加、冬木市での修行が無駄になりそうだ。

では、また次回。

第4話 薬に見えない薬（前書き）

謎様から感想をいただきました。ありがとうございます！

では、ごじゆ。

第4話 薬に見えない薬

Side シノン

『申し訳ありませんマスター・・・私の力が足りなかった為にお怪我だけでなく左目まで・・・』

「何度も言うが、もう気にするな・・・オレが今お前に求めるのは謝罪ではなく意見だ」

『・・・了解しました。ですがこれだけは誓います・・・あの時のような失態は二度と犯しません』

リブスから体の現状を教えてもらった次の日、オレは海鳴市の大病院に入院した。入院費用は管理局が無償で負担してくれるらしい。

入院してから2日、まだ片目の視界に慣れないが体の傷はだいぶ良くなってきた。激しい運動は辛いが松葉杖を使って歩く程度なら問題ない。(イメージ：禁書目録の一方通行が持つてる松葉杖を左手に持つ姿)

オレの担当医になったフィリス・矢沢さんは高町家の皆さんによるとかなりの名医らしい。実際初めて話した時にオレの左目が見えていないことを一発で見抜いた。

それと高町家の皆さんだが、なのはが自分を助けてオレが怪我をしたことを伝えてしまったようで、桃子さんと土郎さんに頭を下げられた。

不注意だと言ったのだが聞き入れてもらえず、何日か間を空けて見舞いに来ることに決まった。あれ？最初は感謝されたのに、どうして最後はオレの立場が低くなってるんだろう。

あと美音は高町家で面倒を見てくれるらしい。流石に病院内で狐はまずいからな。

そして今オレはベッドの上でヴェルフグリントと話している。思った通り前回の戦闘のことをかなり気に病んでいた。だが生憎と謝罪の言葉はいらない。

左目を失い、リンカーコアには後遺症。オレはこの状況で今必要なことを考えた。

そこで出て来たのが、デバイス、ヴェルフグリントとオレの重力操作の性能強化だ。

冬木市での修行で二刀流の戦闘スタイルを生み出したが、デバイスの使用魔法が飛行魔法だけなど宝の持ち腐れだ。超能力にしても同じ、魔力などを一切使わずに行使できるこの力にはまだまだ可能性がある。

性能強化に使えるデバイスのパーツはアルハザードから持ってきた物が大量にあるし、施設の方も管理局の施設をソフィアのハッキングで使えるように出来る。オレ自身もアルハザードにいた時にデバイス関連の知識は一通り理解した。

『……やはり現状で考えるべきなのはマスターの後遺症をクリアできる具体的な戦闘形態でしょうね。魔力吸収が高速化しても外

に排出する機能が不完全、このままではカートリッジシステムはもちろん、難易度の高い魔法も使用出来ません』

「やっぱりそうなるか……リブスの話だと薬は明日来るそうだけど」

カートリッジシステムとはシグナム達のデバイスに搭載されていた圧縮した魔力を込めた弾丸を組み込む武装のことだ。

ヴェルフグリントに教えてもらったのだが、あれはなのはやフェイトのようなミッドチルダ式と呼ばれる魔法体系と対を成すベルカ式に特徴的な武装らしい。そういえばシグナムも自分のことをベルカの騎士と言っていた。

ミッドチルダ式は主に遠距離と広範囲に力を入れているが、ベルカ式はそれを少々度外視した対人戦闘に特化しているらしい。

ちなみにヴェルフグリントはベルカ式のデバイスだ。けど本来の使用目的が戦闘ではないらしくカートリッジシステムは未搭載。

話がずれたな。

リンカーコアに生まれた後遺症の影響でオレの体は魔力を普段より多く吸収するようになった。だが、それを対外に排出する機能に不全が起こった。排出量が通常の半分以下にまで低下したのだ。

そんな状態でカートリッジシステムなど使用すれば即座に肉体がロボロ口になってしまう。風船と同じだ、一定以上の空気を詰めれば形を歪めて最後には破裂する。

しかし、カートリッジシステムが持つメリットはどうにも諦められない。瞬間的に出力を増大させることでチャージ時間を短縮、さらに最低限のコストで高威力の攻撃を放てる。考えれば考えられるほど応用性が浮かび上がってくる。

やはり薬が届いてから考えるしかないか、そう思っただけで病室内を見渡すとなのはと桃子さんが暇潰しの時のために置いて行ってくれたアニメの本の束とノートパソコンが目に入った。

「ちょうど暇だしな、どれどれ……」

適当な本を選び、読んでみる。なのはが自信満々に薦めてきただけあつておもしろい。

そして本を読んでいく度、無意識にオレの頭がデバイス強化の設計図を構築し、破棄するやりとりが行われていたことにその時は気付いていなかった。

翌日の夕方

「おら、薬だ」

「ノックもしないで入ってきて第一声がそれか？言語力と常識に重大な欠陥があるんじゃないか？」

「ならてめえも目上の人間には敬語を使っつていう常識を脳に刻んどけ」

「使うに値する人間にはそうするさ……それとも、オレが嫌う

人間に使ってる嘘の敬語でも使ったほうが良いか？」

その言葉を聞き、リブスは舌打ちを一回して椅子に座る。そしてベツドの上に薬包紙を放り投げた。

これが薬なのだろうと思い薬包紙を開け・・・閉じた。

「何してんだ？早速使ってみろ、効果が足りないかもしれねえしな」

「その以前に何だよこれ・・・なんで薬包紙の中に入ってるのが薬じゃなくて煙草とライターなんだよっ！？実はこれお前の買ったものを間違えて入れたとかじゃねえだろうな！？」

「違えよ・・・とにかく試しに1本吸ってみろ、そうすりゃ納得する」

ふざけている気配はないのでどうやら本気で言っているらしい。というか、納得する以前に未成年者に喫煙を薦めるのはどうなんだ？信じるぞ、と言って箱の中から煙草を1本取り出す。口に咥え、左手に持ったライターで火を点ける。先端から煙が登るのを確認し、煙草を吸って息を吐いて煙を吐き出す。すると、何だか肩がかなり軽くなったように感じ、呼吸が楽になった。

「中々様になってるじゃねえか。どうだ、楽になったろ。その煙草に使われてる薬草にはな、燃やして煙になると魔力を急速に吸い取るっていう特性を持ってやがんだよ。本来なら薬に使うもんじゃねえから入手に時間が掛かつちまった」

つまりオレの体調が楽になったのはこの煙草から吸った煙が体内に

溜まってる魔力を吸ったから、ということか？確かにこの方法ならリンカーコアの問題は何とかなるかもしれんが……。

「人前でやったら即警察行きだな、これは」

「認識阻害の魔法でも使つとけばいいだろうが、てめえの魔力と後遺症から見ても一日中使つても問題ねえはずだぞ。ちなみにその煙は一定以上の魔力を取り込んだら自然と消滅するからニコチンとかの心配はいらねえぞ。薬を使うのは一週間に2本が無難だ。体がきつくなったらその時に使つても良い」

そう言うとリブスはポケットの中から普通の煙草を取り出し、火を点けた。

「おい、ここ病室なんだから禁煙だつてわかつてんだろ」

「既に煙草啜ってる奴が何言つてんだ？それに換気扇の真下で吸ってるから煙は勝手に吸い込まれるし吸うのも1本だけだ、問題無えよ」

「勝手に吸い込まれるとか1本だけとかの問題じゃ……勝手に勝手に、吸い込む？」

喫煙をやめさせようとしたが、リブスの言葉に頭の中で何か引っ掛かった。

儀式魔法で圧縮、魔力を籠めた弾丸、圧縮と装填、自動、勝手に吸い込む……そうか、これなら。

「リブス、薬はありがたく使わせてもらう。けど、今日はもう帰っ

てくれ、今頭の中で大事な事を解決出来るかもしれない方法が浮かんだんだ」

「あ？・・・わかった、だが近い内に本局の俺の所に来い、薬のことに精密検査をやるからな」

「了解だ。ありがとう」

リブスは手に持っていた煙草を握り潰して病室を出て行った。

「ヴェルフグリント、オレが思い付いた方法でカートリッジの問題がなんとかなるかもしれんぞ」

『それはどのような・・・』

「今紙に纏めるからお前はカートリッジシステムのデータを詳しく集めてくれ。お互いに結果を30分後に交換だ」

『了解しました』

30分後

『こんな方法があるとは・・・これなら可能かもしれませんが、マスター』

「こつちもお前の集めてくれた情報のおかげでもう設計図は出来上がった。まずは第一問題クリア、次は戦闘形態か・・・ん？」

そういえば、さっき読んでいた本の中に幾つか面白い武器があったな。詳細や動画なんかはノートパソコンで何とかなるな、それに他

にも参考になるものがあるかも知れないし・・・よし、やってやろう。
ノートパソコンと設計図を描く紙を準備し、リブスから貰った薬（
煙草）の箱を見つからない場所に隠す。そんなとき、箱の中から折
り置かれた一枚の紙がベッドの上に落ちた。広げてみると、そこ
は短い文が一つ。

『ギル・グレアム提督とその使い魔二匹に注意しろ』

いたずらではないだろう。あの男もそこまでガキでもないし暇でも
ない筈だ。

ギル・グレアムと使い魔二匹。提督という単語からして管理局の人
間なのは間違いない。しかもこんな方法で情報を渡してくるくらい
だ、既に何処かでオレを見ているかもしれない。

「いや、今出来ることをやろう・・・どっちにしろ怪我が良くな
るまでは敵もオレも何も出来ないんだからな。ヴェルフグリント、
ソフィアと協力してさっきの設計図と手持ちのパーツを照らし合わ
せて作成の流れを作っておいてくれ」

『了解しました。さあ、ソフィア、始めましょう』

その会話を最後に病室に静寂が落ち、部屋の中にはオレのキーボ
ードを打つ音とペンを走らせる音しかしなくなった。啞え煙草にノ
ートパソコンと紙に何かを必死に書き込む姿、外野から見るとその姿
は締め切りが近い小説家に見えるかもしれない。

その日の夜、集中しすぎて消灯時間を忘れていたオレはフィリス
先生に説教を受けてしまった。

これからは設計図の作成を行う時間帯を決めておくとしよう。怒ったフィリス先生は桃子さんと同レベルで怖い。

第4話 薬に見えない薬（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

シノンはい院していても大人しくしません。

シノンが最高のデータバンクの二次元に手を出しました。ヴェルフグrintが確実にモンスターマシンになるフラグですね。

あと薬なのですが、錠剤や液体じゃなんかつまらない気がしたので、シノンの薬は煙草の形になりました。

では、また次回。

第5話 意外な人との再会（前書き）

今回は短いです。

では、ごきげん。

第5話 意外な人との再会

Side シノン

入院してから4日目。

持ち前の驚異的な治癒力によって外傷はほぼ完治、まだ折れた骨と胸部の抉り傷が残っているがあと二日もすればこちらも完治するだろう。

だが病院の医師たちから見ればオレの回復速度はただの異常だ。まあ死に掛けた重傷の半分以上が3日で治ったら不審に思うよな。

正直に”自然治癒が早いです”と説明したのだが信じてもらえず、午前中は精密検査を何度か受けることになった。正直に説明したというのに、理不尽だ。

精神的に少し疲れたので午後になった今は病室のベッドで休んでいる。

ただ寝ているわけではなく、美由希さんに頼んで持ってきてもらったスケッチブックと様々な太さの鉛筆を手に絵を描いている。こう見えてオレは絵描きが得意、というか好きだ。アドリビトムでも子供組みに好評だった。

被写体は無く、今はイメージした光景を書いている。

浮かべた光景はバンエルティア号の甲板で見たキラキラとした海が広がる美しい地平線。広がる青空に様々な形の雲が浮かび、心地よ

い風が吹いていた。

細かく何度も鉛筆を変え、後で色を染めるので薄く描く。海の輝きを調整し、雲を描き終えて最後に絵の中央に描いたのは1本の木。だがその木はとても巨大で、根は海の中から顔を出し木に巻きついている。

世界樹。グラニデという世界の心臓と言っても過言ではない大樹であり、オレを作り出した創造主。

数秒手が止まってしまったが、気を取り直して色を加える。

完成したその絵に目を通し、満足感を感じてページをめくる。そして再びイメージした光景を描く。アメールの洞窟、サンゴの森、チユロス海底遺跡、レーズン火山、様々な場所を描いていく。

だが、レーズン火山の風景を鉛筆で描き終えた時に手が止まり、微笑を浮かべて中心に新しく人を描いていく。その人物は紫の髪をなびかせ、体にフィットした黒い服を着ている。首元には先端が燃えてなくなったような大きなマフラー。

火山内部では随分と異様な服装だが、最も異様なのはその右腕だ、肘から先が全て骨組みの大きな爪と化している。

ゲーデ。生まれた形は違うがオレと同じく世界樹によって生まれた存在。

だが同じラインにいてもオレとゲーデは対極の存在、マナと負、その身に宿したものの本質がまったくの逆なのだ。

色を染め、ゲーデの絵を完成させてページをめくろうとした時、ドアからノック音。どうぞ、と返答してドアが開けられた。

「えと……こんにちは……わあ、やっぱりシノン君や！」

入ってきたのは髪型をショートカットにして、車椅子に乗った少女。その少女をオレは知っていた。この子はオレが世界に来て最初にオレに笑顔を向けてくれた。

「……これはまた、予想しなかった来客だな。久しぶり、はや
て」

「うん！久しぶりや！」

図書館で出会った少女、八神はやては満面の笑顔を浮かべた。

「看護婦さんが私より少し年上の子供が入院したって聞いたんやけど……長い銀髪の男の子って聞いたらシノン君やと思ったんよ……あれからどうしたん？半年の間ずっと図書館に来てくれへんかったし、それに入院しとるなんて……」

「色々あってな、つい最近まで遠くに行っていた。図書館に行けなかったのは素直に謝罪するよ」

はやては足の診察でこの病院に来たらしいのだが、帰る時にオレのことを聞いてやってきたらしい。

しかし約半年ぶりだというのに、よくオレのことを覚えていたものだ。

「……シノン君、絵描いてたん？」

「ん？ああ、暇だったんで久しぶりに描いてみた」

「……見せてもらってもええ？」

「……別に構わんが、見たことない風景だし上手くないからな」
スケッチブックを受け取ったはやてはゆっくりとしたペースでペー
ジをめつくていく。描いた絵はそれほど多くないのですぐに見終わ
りスケッチブックは閉じられる。

「……どこが上手くないや！？どう見ても上手いで!？」

「そうか？イメージとは似ても似つかないと思ってるんだが……」

カノンノやパニールにも上手いと言われたが、プロの感想を聞いて
みないことには自信が出て来ない。カノンノから出す本の絵を描い
て欲しいよ言われた時は本当に慌てたものだ。

「イメージって……じゃあこの人も場所もイメージしたん？名
前なんて言うん？」

「こいつか、こいつの名前は……ゲーデっていうんだ。こつち
の洞窟はな……」

いつの間にか絵の中の風景についての話し合いになってしまっているが、はやては楽しそうに聞いているので安心する。

イメージと誤魔化しているとはいえ、グラニデのことを他人に話せるのはオレにとっても楽しいし、嬉しい。なのは達にも素直にオレが異世界から来たことを教えて良いのかもしれないが、管理局が目を光らせている今の状況で話すのは色々と厄介なことになるかもしれない。

「……………んでこの一番奥には祠が二つあってな、その一つが……………どうした、はやて？」

ふとははやてが黙ってしまったことに気が付く。はやてはどこか悲しそうな表情をしていた。

はやてが身を乗り出して右手をオレの左目に添える。頬に感じる手は、震えていた。

「シノン君……………もしかしてやけど……………目、見えないん？」

その言葉を聞いて一瞬心臓が止まった気がした。そして不覚にもその動揺を丸出しにしたせいではやては自然と答えを理解した。

「……………どうして、わかったんだ？」

「シノン君の右目が動いているのに……………左目が全く動いてへんかったから……………どうして？ここに入院したのもそのせいなん？」

「まあな……………悪いが、このことは誰にも言わないでくれないか？まだ誰にもこの目のことは知られたくない……………頼む」

「……うん、わかった。けど、なんか出来る事があつたら頼ってな？」

「ありがとう、助かる」

その後、はやては迎えの人が来るそうで帰って行った。ただ、最後までその目には悲しみの色があつたのがオレに罪悪感を感じさせた。

あと、窓から微かに見えたはやての迎えの人の後ろ姿、何処か見たことあるような。

それから3日後、オレは怪我を完治させ、めでたく退院した。え？予想よりも1日遅れている理由？自然治癒を未だに信じてもらえないせいで1日の殆どを使った連続検査を受けたんだよ。

しかも医師たちは終わってもずっと怪しい目を向けてきた。頼むから少しは患者の言葉を信じてくれ。

そして退院を終え、高町家に一通りの荷物を置いたオレが向かったのは、時空管理局本部。

第5話 意外な人との再会（後書き）

??????

シノン「またこの展開か」

そういうわけだ。嬉しいことにまた雨季様にコラボに混ぜてもらった。

しかしシノン、お前紹介されて早々帰ろうとするとはな。

シノン「勘弁してくれ・・・あの55人の中で今のオレが勝てる相手なんていない。あそこでも言ったが、命が幾つあっても足りない。まあ楽しかったがな」

美音「美音もいたけど、怖くなかったよ！友達も出来た！」

シノン「久遠と仲良くなれたのか？ヴェルフグリントもスカイと話してたよな？」

ヴェルフグリント「数少ないデバイス同士、とても素晴らしい交流でした」

シノン「よかったな2人と・・・作者もうれしいんじゃないのか？お土産もらったんだろ？」

願えば自分の欲しい物に変わるカード、だな。よく考えれば以前のコラボで買った3つの内2つもまだ使用していない。

シノン「ストラップは何かに付けているわけではないが、しっかり

お守りとして持っているからな。

しかしどうする、このままケチってどれも使わないというのも失礼なのではないか？」

そうだな……では使うとしよう。

3人『え？』

せっかくだ、飛び級の願いを叶えて貰おう。

3人（……嫌な予感しかしない）

安心しろ、人間をやめるわけじゃない。……では皆様。

3人『また次回』

第6話 デバイス改造計画、開始（前書き）

遅くなりました。

しかも今回はかなり短いです。

では、どうぞ。

第6話 デバイス改造計画、開始

S i d e シノン

「来たか・・・さつさと検査始めるぞ、お前や俺も他に用事があるんだからな」

時空管理局本局の医療ブロック。そこにあるリブスの診察室に訪れたオレはその言葉に何も言わず、大人しく検査を受けた。

検査と言ってもCT検査の機械に良く似たものでリンカーコアを調べるだけらしい。検査そのものも数分で終わり、今はリブスがカルテを纏めるのを待っている。

しかし、ただ待つのも暇なのでリブスに頼んで貸してもらった本『時空管理局のシステム全集』を読んでいる。分かりやすく言えば、管理局の行動目的、定めた規定、適用される法律など・・・管理局の仕組みが書いてあるのだ。

「貸しておいて何だが・・・そんな本読んでどうすんだ？」

カルテ作成の手を止め、リブスがこちらを向いた。

「単純に知りたい、というのものもあるが・・・別世界でも上手く生きていく為にはルールを憶えておくのが最も確実だ」

「ガキの言葉とは思えねえな・・・で？読んでみてお前は管理局をどうという組織だと思ったんだ？」

「97管理外世界の”地球”で当てはめるなら、ただの独裁組織だ。下手をすればテロリストより性質が悪いかもしれん」

特に感情を込めず、普通に返答した。言っておくが、管理局の連中が気に入らないからではない、これを読んで本当にそう思ったのだ。地球上の全ての政治家に読ませても8割以上がオレと似たような評価を下すだろう。

理由1 質量兵器、銃火器や戦術兵器の使用や製造を禁じて犯罪者の非殺傷を志すのは勝手だが、それで人手不足を起こし、有能という一つの理由だけで子供を生死に関わる戦場に投入しては意味が無いだろう。

ハラオウン親子も例の一つに入るかもな。母親の愛情どうこうを語るつもりはないが、息子を当たり前の顔で戦場に向かわせる人間をオレは母親とは思えない。しかもその母親は安全地帯で指示を出すだけとは恐れ入る。

はっきり言おう、ふざけるな。

何で管理局の人手不足解決に守られるべき子供達が利用されるんだ。自分達が作った組織が起こした問題なんざ大人が自分で解決しろ。子供の力を利用してある時点で、ハラオウン親子を初めとした管理局の権力者共は子供以下、ただのクズだ。

理由2 法律の決定、適用、執行の全てを管理局が行っている時点でただの独裁だ。これでは無罪、有罪の判決が全て管理局の思うがままになってしまう。これなら局員側は好きなかだけ違法行為を行える。オレの評価が低かった一番の原因がこれだ・・・三権分立を見習ってほしいものだな。

理由3 管理局は他の世界を”管理下”に納めてその世界のロストロギアを回収している。何故管理下に置いていない世界にまで手を出し、自分達で危険だと言うロストロギアをわざわざ回収するのさう？そもそも管理局が他の世界の事情に首を突っ込む必要はない、その世界には初めから管理局などいないのだから。

これでは次元世界の平和を守るといふより、ロストロギアを理由に勢力下に納める世界を増やしているだけのような気がする。

「……なるほど、確かにあの世界と比べれば管理局は随分と腐った組織に見えるな……俺も気に入らねえと思うところがあつたが……これほど歪んでたとはな」

軽い口調で言葉を放ちながら煙を吐くりブスだが、その目は見えな
い何かに憎しみを抱いていた。

だがすぐに無気力な目に戻り、カルテの作成に戻る。オレは深く追
求せず、再び本に目を通した。

「……渡した薬は充分効いてたし、傷の方も異常は見つからな
かった。一応、完治だな……それで、お前はその後何処に行く予
定なんだ？」

「デバイスの改造だ。話を通して整備室を一つ確保してある」

カルテを机の上に放り投げて質問したりブスに背中を向けたまま答

える。今はヴェルフグリントの改造設計図に目を通している。

「改造？・・・まあ前線に行かれるよりはマシか・・・後でオレの連絡先を送っておく。薬に不備が出たり症状に変化が起こつたらすぐに連絡しろ」

「・・・一度聞こうと思ってたんだが・・・なぜここまでしてくれるんだ？」

「難しい理由なんざねえよ・・・俺は医者でお前は患者、それだけだ」

それだけ言っつてリブスは部屋を出て行った。さて、オレもすぐに取り掛かるかね。

「では、こちらの部屋をお使いください。申請内容には5日間と記載されていましてので、お気をつけて」

説明を終えた局員が一礼して立ち去っていく。オレは部屋の中に入り、すぐ入り口にロックを掛けておく。ハラオウン親子が来られないようにだ。

部屋の中にはデバイス調整に使用する機材一式とベッドが一つ。どうやら使用者はここで眠るのが当たり前のようだ。元々そのつもりだったのでありがたい。さて、後は・・・

「ソフィア、セットアップ」

部屋中のあらゆる機械に小さなコードが張り付き、赤いチップへと姿を変えた。セトアップを完了したゴーグルは額に固定しておく。

「ソフィア、この部屋のシステム全てを掌握しろ　ヴェルフゲリントは作業の用意を頼む」

命令を聞いて二つのデバイスはすぐに作業を開始した。

ここは管理局の施設だ、どこから監視の目が向くかわからない。

故に対処をすぐに行った。電腦戦ならばソフィアの性能は絶対的に信用できる。

『マスター、準備完了しました　ソフィアの方も同じく』

「わかった　ソフィア、システムにアクセスが行われたら知らせる……」

返答するようにゴーグルのレンズが小さく発光した。少しは喋れるようにAIでも作るか？

「さて、始めるぞ……ヴェルフゲリント」

『Yes, My Lord』

その会話を最後に、しばらく部屋の中にはキーボードを打つ音しか聞こえなくなった。

第6話 デバイス改造計画、開始（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

今回はデバイス改造の前に、皆さんも思っている管理局の腐ったやり方を述べてみました。まあ他にも山ほどあるような気がします。

あと突然ですが、そろそろ試験が近いので”白銀の来訪者”ともう一つの小説の更新が止まると思われます。

この二つを読んでくださっている皆様には申し訳ありませんが、どうかご了承ください。

では、また次回。

第7話 再戦開始。生まれ変わる力と新たな力（前書き）

滅茶苦茶お久しぶりです。

1ヶ月近く間を空けてしまった……。

あと、ついにエクシリアの発売日が決まりましたね。初回限定版予約しなきゃ！

では、ごきげん。

第7話 再戦開始。生まれ変わる力と新たな力

Side Out

少女、八神はやては9歳である今よりも昔に両親を亡くし、天涯孤独のみだった。

さらに両親を亡くしてから足が原因不明の麻痺症状を起こし、幼い身でありながら下半身不随となってしまうた。

しかし、9歳となった6月4日の午前0時、はやてに新しい家族が出来た。

はやてが物心付いた頃から部屋の本棚に置かれていた一冊の本が紫色の光を放ち、4人の女性と1人の男性が現れたのだ。

その本の名は管理局で第一級搜索指定遺失物に認定されているロス・トロギア、通称”闇の書”。そしてこの5人こそ、闇の書の防衛プログラムが有する守護騎士、ヴォルケンリッターである。

その5人の名は、烈火の将 剣の騎士シグナム、紅の鉄騎 鉄槌の騎士ヴィータ、風の癒し手 湖の騎士シャマル、蒼き狼 盾の守護獣ザフィーラ、と言った。

闇の書と呼ばれるロス・トロギアは合致する魔力資質の持ち主をランダムに選ぶ。

起動した初期段階の闇の書は666頁^{ページ}全てが空白の状態となっており、この頁は魔力の源であるリンカーコアを蒐集することで埋まる。

それら全てが埋まれば闇の書は完成と言われている。

さらに蒐集したリンカーコアが魔導師だった場合、闇の書の主はその魔導師が所持する魔法をそっくりコピーしてそれを使用することが出来る。

ヴォルケンリッターの役目は主の守護だけでなく、闇の書の頁を埋めることも役目の一つに入るのだ。

だが今回の主、八神はやてという少女はその優しさからか、または魔法を知らなかったからか闇の書が持つ力にまったく興味を持たなかった。彼女がヴォルケンリッターに命じたのは”家で一緒に仲良く暮らすこと”。

今までの闇の書の主や、その脅威を知る人間なら鼻で笑うような願い事だろう。

それでもはやてにとっては何よりも大切な願いだった。幼い身で両親を亡くした子供の願いは、なんと儂く尊いものか。

最初はそんな主に戸惑った守護騎士達も、はやての優しさと平穏な日々の楽しさを感じる内に良い方向へと変わっていった。

しかし、守護騎士たちはある出来事を引き金に優しき主の命令に背いた。

守護騎士たちを生み出した第一の覚醒以来、闇の書が徐々にはやての肉体を蝕んでいたのだ。

それによりはやての足の麻痺は心臓にまで迫り、シグナムたちは”

このままでは主が死ぬ”と考え、呪いとも言つべきはやての苦しみを取り除く方法は一つしか思い浮かばなかった。

闇の書の666頁全てを埋め、はやてを真の闇の書の主として覚醒させる。

はやてを助ける。ただそれだけを願い、守護騎士たちは主の命に背き、その力を解き放った。

そして今日も、守護騎士たちは戦う、優しい主のために。

S i d e シノン

「・・・完成か」

時空管理局本局にある広い訓練ルームの一室でオレは突き出した右手を下ろして呟いた。

『新機能と新形態もほぼ完璧、私とマスター、共に文句なしですね』

待機状態で浮遊しながらコアを点滅させる相棒。待機状態に変化はないが、セフトアップした性能は前のものとは次元が違う。ぶつちやけ、想像通りに改造が実現できてこつちが驚いた。

『あちらも、随分と喜んでいらつしゃいますね』

相棒が見る先には新しい力を試して楽しんでいる美音。

「……だな……まだ片目の視界には慣れないが、オレもお前もこれだけ変わったんだ。問題は無いだろうよ……美音、帰るぞ」

「うん！」

杖を左手に持ち、美音と共に出口へ歩き出すが、突然空中にスクリーンが表示されリンディさんの顔が映る。

『シノン君、今何処にいるのかしら？』

「本局の訓練ルームですが？」

『よかった……実は守護騎士を発見して、今なのはさん達が応援に向かったの。あなたにも協力をお願いしたのだけど……』

こいつの頭は大丈夫か？殺し合いの現場に再び子供を向かわせただと？しかも怪我を知っているくせにオレに協力を頼むとは……
一体何処まで腐っている。

「ちっ……体調が万全ではないので戦力になる保証は出来ませんが、それでいいなら」

『充分よ……時間が無いからそこから転送するわ、待ってて』

『……よろしいのですか？あのような連中に協力など……』

リンディさんとの通信が終了してすぐに相棒が話しかけてくる。その声には隠すことなく不満の色がある。

「協力する気はないが、なのは達を放っておくわけにはいかない。デバイスを改造したらしいから遅れは取らないだろうが、念の為だ。・・・それに、オレも連中に用事が無いわけじゃない」

転移用の魔法陣に包まれながらオレはそつと左目に触れた。リブスのメッセージとオレの推測が当たりならば、あいつは守護騎士たちが追い詰められた時に現れるはずだ。

「悪いが、オレは片目をやられて遠慮するほど善人じゃない・・・覚悟しろよ」

その言葉と同時にオレと美音はその場から姿を消した。

転移が終了し、視界に映ったのは結界内で見られる異様な色を纏った空とビル街。

周りを見てみるとデバイスをセットアップしたなのはとフェイト、ヴィータと呼ばれていた赤いゴスロリの少女と美音が相手をしたザフィーラという男、この二組が睨み合いをしていた。

なのは達の後方にはアルフ、ユーノ、クロノの三人がバックアップに付いている。ていうか執務官、何で本来戦うはずのお前は後方にいるんだ？前に出ろよ。

「私達は、あなた達と戦うために来たわけじゃない・・・まずは話を聞かせて」

「闇の書の完成を目指してる理由を……！」

「あのさあ、ベルカのことわざにこういうのがあんだよ……」
「平和の使者なら槍は持たない」

ヴィータの回答の意味がわからず、なのはとフェイトは顔を会わせて首を傾げる。オレは何が言いたいのかわかった……。

「話し合いをしようってのに武器を持ってくる奴がいるかバカ！って意味だよ、バーカ」

「なっ！……い、いきなり有無を言わずに襲い掛かってきた子がそれを言う！？」

デバイスを突きつけながら放ったヴィータの発言になのはは言い返す。

「それに、それはことわざではなく、小話のオチだ」

「うっせ！いいんだよ、細かいことは……」

ザフィーラの冷静な返答にヴィータはバツが悪そうになった。だが、確かに今の二人のデバイスは話し合いの席にはちよつと危険すぎるな。

AIを搭載している分デリケートな作りをしているインテリジェントデバイスにカートリッジシステムを導入した二人の新たなデバイス。レイジングハート・エクセリオンとバルディッシュ・アサル

レイジングハートにはオートマチック式の、バルディッシュにはリボルバー式のカートリッジシステムが搭載されている。それを与えられたあの二人は間違いなく以前より化ける。

そんな時、真上の結界がピンク色の閃光によって突破され、閃光がビルの屋上に降り立った。その正体は間違いなくシグナム。

「ユーノ君、クロノ君、手は出さないでね！私あの子と一対一だから！」

「マジか……」

「マジだよ……」

なのはが見詰める先にはヴィータ、フェイトが見詰める先にはシグナムがいる。どうやら二人の対戦相手は決まったらしい。

「私はどうしようかなあ……」

隣で美音が退屈そうにしている。敵で残っているのは自然とザフィラだけになるので、アルフに念話を送る。

(アルフ、すまんがザフィラは美音に譲ってやってくれないか？
・・それと、少し美音を頼む)

(え？……まあ、あなたには世話になったし、引き受けるよ)

「(すまん)……いいぞ、美音」

「うん！わかった！」

嬉しそうな美音の声に続き、それぞれが空へ散らばって交戦を開始した。その場に残ったのはオレ、クロノ、ユーノの3人。

「シノン、少し協力して欲しいんだが……」

「他の仲間を探すんだろ？」

あの3人以外にも、まだなのはリンカーコアを蒐集した奴が残ってるはずだ。あいつらの怪我の治り具合から見て必ず近くに居るはずだ。

「……わかってるなら話は早い、僕は結界の中を探すから、キミとユーノは外を頼む」

「あいよ………エイミィさん」

『了解！外に転送するよ！』

さてさて、オレが用のある相手はいるかな？

Side Out

シノンとユーノが結界の外に移動し、上空ではそれぞれの戦闘が始まっていた。

なのはとヴィータ……

「ふん！結局戦るんじゃないかよ」

「私が勝つたら、話を聞かせてもらおうよ！いいね！？」

「やれるもんなら・・・やってみるよ！」

『Schwalbfliegen』

ヴィータが懐から鉄球を4つ取り出し、グラーファイゼンでそれを打ち出す。

『Axelfin』

しかし、なのはは出力が向上した飛行魔法で上昇、それを余裕で回避する。

「アイゼン！」

『Explosion・Raketentform』

畳み掛けるようにヴィータが接近する。グラーファイゼンがカートリッジを1発使用し、前回レイジングハートに大きな傷を与えたラケテンフォームに姿を変える。

片方から魔力がブースターのように吹き出し、もう片方のスパイクハンマーとヴィータの体が回転を始める。以前と全く同じ様になるはへ迫る。

だが、前回のようにならざる結果は訪れない。

『Protection Powered.』

右手を突き出し発生させた桜色のシールド。それはヴィータのラケ
ーテンハンマーを正面から受け止めた。

「固え・・・！」

「あ、ほんとだ」

前回は簡単に貫いた攻撃を受けても、なのはの障壁はビクともしな
かった。その強度にはヴィータだけでなく使用者のなのはも驚いて
いる。

『Barrier Burst.』

レイジングハートの指示で障壁が爆発し、その衝撃を浴びたヴィー
タが後方に吹き飛ばす。

『アクセルシューターを撃ってください』

「うん！・・・アクセルシューター！」

『Accel Shooter.』

ミッドチルダ式の魔法陣が出現し、一つのダイバインスフィアに魔
力が圧縮される。

「シュート！・・・え！？」

「なっ!？」

再び両名が驚く。レイジングハートから射出された誘導弾の数が異常だったのだ。見てみると全弾合計で12発ある。

『コントロールをお願いします』

レイジングハートの言葉を聞いて、なのはは目を閉じて意識を集中させる。

すると、誘導弾の一発一発がコースを変えてヴィータの周りを飛び交い囲む。だが、周りを囲んでいるだけでその身には掠りもしない。

「アホか・・・こんな大量の弾、全部制御できるわけが・・・」

そう、魔導師の誘導弾はレーダーやロックを頼りにする軍用ミサイルとは違い、一発一発を発動者が思念で制御する。

なのはが操れるデイバインシューターの最大数はフェイトとの決戦時で8発。12発の同時制御など難しさはそれの比ではない。

ヴィータが左腕を振るい、空中に浮遊したままだった鉄球が四方からなのはに迫った。しかし、なのはは動かない。

『出来ませぬ。私のマスターなら』

その声に答える様に、ヴィータを囲んでいた誘導弾の12発の内4発が機動を変え、ヴィータの放った鉄球を全て撃ち落した。

「約束だよ・・・私達が勝ったら事情を聞かせてもらって・・・」

アクセル・・・！」

なのはが右手を掲げると、全ての誘導弾が加速を始める。

「・・・シュート！」

「ちっ！・・・」

『Panzerhinderinis.』

身の危険を感じ、ヴィータの体が赤色の多面体で構成された障壁で覆われる。その直後、ただ周りを飛び交っていただけの誘導弾全てがヴィータに襲い掛かった。

ヴィータは傷を負わなかったが、誘導弾は着実に障壁を削り、あらゆる場所に亀裂を刻んでいく。

「っの・・・！」

悔しげな声と共に、ヴィータは自分と戦っている高町なのはを改めて敵と再認識した。

フェイトとシグナム・・・

ビルの間を金と紫の光が飛び交い、衝突し、また離れていく。

フェイトのバルディッシュとシグナムのレヴァンティンが打ち合い、鏖張り合いに似た状態となる。だが数秒後にその場から離れる。

『Plasma Lancer.』

フェイトの周囲に環状の魔法陣を纏った槍型の魔力弾が出現する。

「プラズマランサー……ファイア！」

8発の魔力弾が放たれる。シグナムはその場を動かないが、前回のよう正面から受け止めるのではなく、炎を纏ったレヴァンティンを一閃して魔力弾全てを弾く。

「ターン！」

フェイトの言葉の後に、弾かれた魔力弾の矛先が180°回転し、再びシグナムを襲う。

シグナムは上昇して避けるが、魔力弾は再び矛先の方向を変えて追跡する。

「レヴァンティン」

『Sturmwinde』

『Blitz Rush』

埒が明かないと判断したのか、シグナムはカートリッジを一発ロード、レヴァンティンを振るい、炎の壁を作る。バルディッシュが指示を出して弾速を加速させるが、全て炎の壁に触れて消滅する。

『Haken Form』

だがフェイトはすぐ近くまで距離を詰めることに成功した。バルディッシュが撃鉄音と共にカートリッジを一発ロード。サイスフォームよりも格段に大きな魔力刃が展開される。

『Schlangenform.』

だがレヴァンティンもカートリッジを一発使用して姿を変える。刃が細かく分割され、中心にある一本のワイヤーで固定されている。武器の種類で言うなら連結刃だろうか。

衝突。小規模の爆発が起こり、互いに距離が開く。互いに無傷ではないらしく、フェイトは左腕、シグナムは胸元に傷を負っている。

「・・・強いな、テストロッサ・・・それに、バルディッシュ」

『Schwertform.』

一振りで連結刃が長剣に戻る。言葉を発するシグナムの顔は何処か楽しげだ。

『Thank you.』

「あなたとレヴァンティンも・・・シグナム」

『Danke. (感謝)』

「この身に為さねばならないことが無ければ、心躍る戦いだっただが・・・仲間達と我が主のために、今はそうも言ってもらえん・・・

」

シグナムは虚空から出現させた鞘を手に取り、長剣を納めて居合いのような構えを取る。

「殺さずに済ます自身は無い・・・加えてあの男も控えている・・・この身の未熟を許してくれるか」

「構いません・・・勝つのは私です・・・あなたがシノンと戦うことはありませんよ」

その言葉に互いが微笑を浮かべ、再びデバイスを振り上げた。

残った美音とアルフ、そしてザフィーラは・・・

（状況は、あまり良くはないな・・・シグナムとヴィータが負けるとは思えんが、あの銀髪の男のこともある、ここは引くべきだろう・・・シャル、何とか出来るか？）

ザフィーラの念話の相手は結界の外にいる4人目のヴォルケンリッター、湖の騎士シャル。

緑色のドレスのような騎士甲冑を纏い、左手に闇の書を持っている。書の防衛機能によって再生した腕の指には指輪上のアームデバイス、クラールヴィントが輝いている。

（私もあの子が来てる時点で早く何とかしたいんだけど、数人の局員が外から結界維持をして私の魔力じゃ破れない・・・シグナムのファルケンかヴィータちゃんのギガントクラスじゃないと・・・あなたの方はどうなの？）

シャマルにとって前回の戦闘で自分の片腕を潰したシノンの存在は一つのトラウマになっている。

(二人とも今は手が放せん、俺の方は・・・相手が少し変わって
いて下手に動けん・・・やはり、ここはアレを使うしか)

(わかってるけど、でも・・・えっ!?)

(シャマル・・・どうした? シャマル!)

突然シャマルとの念話が途絶えザフィーラの心に動揺が広がる。考えられる原因は外にいる管理局員に発見された、というのが一番確実だ。

「お話終わった?」

そんなザフィーラの心境とは正反対の陽気な声。美音である。ザフィーラが念話を行っている間、アルフが何を言っても手を出さなかった。

「手を出さなかったのは情けのつもりか?」

「違うよ?ちゃんと集中して戦って欲しいなって思っただけ・・・その方が良い経験になるってシノンが言ってた!」

笑顔で言う美音の態度にザフィーラは交戦の意思が揺らぐが、待ってもらった礼として全力で相手をしようと身構える。

それを確認した美音は首に下げていた丸い宝石を取り出した。瑠璃

色に似た深い青色、その宝石はラピスラズリと呼ばれるものだ。

「デバイスか……」

「うん、シノンが作ってくれたんだ！……行こう、ソウルゲイン……セツトアップ！」

『stand by ready.set up.』

宝石から光が拡散し、美音の服装が変わる。白の半袖Tシャツに黒色の中国風長ズボンを着て、茶色の軍用ブーツを履く。

バリアジャケットの装甲を殆ど排除して機動性を優先したそれはフエイトと同じく高速戦闘を得意とするかわかる。というか、美音が持つ魔力量は元々少ないので自然と戦闘スタイルはインファイトに絞られてしまう。

宝石が形を変え、武器へと形を変えた。美音の両手の指先から肘間接までが青白い装甲に覆われ、打撃力を強化するような装甲を形成する。手首が白い装甲で保護され、肘の部分から頭部まで届くほどの長さの刃が出現する。

最後に宝石が手の甲の部分に収納される。これが、シノンの試行錯誤により生み出され、妖力と闘気による戦闘を主体とした美音専用のデバイス、ソウルゲインである。

「じゃあ、始めよつか……」

くすりと微笑んで、美音は足に力を込めた。

結界の外で念話を行っていたシヤマルは緑色のチエーンバインドで体を拘束され、球体状の結界に包まれていた。それを行ったのはシヤマルの後ろで結界とバインドを維持しているユーノ。

「拘束はしたけど……一度クロノかシノンに連絡を取らないと……っ!!」

ユーノは念話で連絡を取ろうとしたが、突然右方向から腹部に蹴りが打ち込まれた。完全な不意打ちであるその攻撃はユーノの体を吹き飛ばし、ビルをいくつか貫通させた所であろうやく勢いが死んだ。

当然防御も出来なかったユーノは頭部から少量の血を流しながら気絶してしまう。

吹き飛ばした犯人は、シノンに奇襲を仕掛け、左目を奪った仮面の男だった。

『エイミイ!今は!?!』

『わかりません!サーチャーに何の反応も無く、あんな距離まで近付くなんて……』

アースラスタッフが困惑している内に、仮面の男はシヤマルを拘束している結界とバインドを拳で破壊する。助けられたシヤマルは仮面の男の出現に混乱する。

「あ、あなたは……「使え」……え?」

戸惑いながらのシャマルの言葉を打ち切って仮面の男はそれだけを口にした。仮面の男の視線の先にはシャマルが持つ闇の書。

先程ザフィーラが口した”アレ”とはこれのことである。蒐集した魔法の中には結界を破壊できる魔法が大量に存在している。

「闇の書を使って結界を破壊しろ……消耗したページは後からでも増やせるが、仲間のほうはそうも「割り込み失礼」……っ！」

仮面の男の声を遮ったのは何処か楽しそうな、だが何処か狂気を含めた声。

シャマルと仮面の男が声の方向に目を向けると、そこにいたのは左手に杖を持った1人の少年。月明かりを背後に従えた少年の銀髪と蒼目は美しく輝き、一瞬二人を見惚れさせた。

「よう、仮面の不審者さん……この間のお礼に来たぜ……」

そう言って歪んだ笑みを浮かべたのは、前回仮面の男が襲撃して暗殺を試みた少年、シノン・ガロードだった。

第7話 再戦開始。生まれ変わる力と新たな力（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

美音のバリアジャケットは”ネギま”のネギの衣装の上を白にして足をブーツに変えたようなものです。

デバイスについては近々別で設定を書こうと思います。

では、また次回。

第8話 生まれ変わりし来訪者とその力（前書き）

非常に眠い状態で書いたので前書きと後書きが不安です。

では、ごんご。

第8話 生まれ変わりし来訪者とその力

Side Out

その場に現れたシノンを見て、仮面の男とシャマルは背筋に冷たい汗が流れるのを自覚した。

仮面の男は身構え、シャマルは肩の震えを必死に抑える。

「……生きていたか」

「おかげさまでな……色々と厄介な問題が増えちゃってご覧の有り様だ……んじゃ……」

シノンは左手に持っていた杖をその場に放り投げ、懐から銀色のカードを取り出した。それが指で弾かれ、空中で回転する。

「覚悟しろ……ヴェルフグリント・ディステンス、セットアップ」

『Yes, My Lord. Stand by ready. Set up.』

「フォームは”ゼロ”を指定、”ヴァルス”も同時展開だ」

宝玉が空中に打ち上げられ、銀色のカード部分が光になって拡散し、シノンの体を包む。

上半身に灰色の長袖Tシャツ、下半身に厚めの黒い長ズボン（イメ

ージ：FF？ACのクラウドのズボン）、手と脚には以前と同じく踵部分に鉄板を仕込んであるブーツと指出しのグローブ。だが見た目が微妙に異なりブーツは爪先と踵、グローブは手の甲に白い小さなユニットがある。

その上に丈が足首まであり、各所に何本かのベルトを装備した漆黒のロングコートを着る。その際腰の部分に以前と同じ二本の鞘が現れ、ベルトを装着してコートと共に固定する。（イメージ：アニメ版ムシウタのかつこうが着るロングコートに二本の鞘を装備させた姿）

蒼い宝玉から武装が生まれ、以前のものと同じ形をした二本の長刀を形作る。真上から真っ直ぐ落ちてきたそれをシノンは両手でキャッチ、鞘に納める。

続いて両手首に3本の青いラインが刻まれた大きい白い腕輪が装着される。腕輪の中には左右それぞれ20発のカートリッジが収納されている。ただし、カートリッジに”魔力は一切籠められていない”。

この腕輪はシノンが開発した専用のカートリッジデバイス、ヴァルス。

外見が上から下までほぼ黒に染められている騎士甲冑。これが新たなヴェルフグリント・ディステンスの基本展開状態、フォルム”ゼロ”である。（イメージ：下半身にクラウドのズボン、上半身にアニメ版のかつこうのロングコート（丈が長い）を着た姿）

セットアップが完了し、シノンは無言で仮面の男とシャマルを見下ろす。だが突如、シノンが右の手の平を仮面の男に向けて、小さく

眩いた。

「潰れる」

その言葉と共に仮面の男の全身がとてつもない重圧に襲われ、ビルの屋上にめり込んでいく。仮面の男は何とか逃れようとするが、重圧によって指一つ動かせない。

シノンが一步足を踏み出す。その時シノンの前方に一瞬、等身大の黒い穴が出現し、シノンの体はそれに飲まれた。そして一秒も立たぬ内にシノンは仮面の男の目の前に出現し、足を踏み出した。

「なっ……！」

「何を驚いている……そら、まずは肋骨の礼だ……」

何の変哲も無い左ストレートが放たれる。だがそれを腹部に受けた仮面の男の体は盛大に吹き飛び、ビルを数件貫いた。どう見てもシノンがストレートに籠めた力とは釣り合わない破壊力だ。

吹き飛んだ仮面の男からシノンはシャマルに眼を移す。肩の震えを抑えながら、必死に闇の書をその身で守ろうとしている。

「邪魔をするな……そうすれば手は出さん」

その様子から状況の全てを悟ったように、シノンはそれだけ言って再び目の前に出現させた黒い穴の中に足を踏み入れ、その場から姿を消した。

助かった、そう思いながらシャマルはその場に膝を着いていつの間

にか乱れていた息を整える。

前回腕を握り潰されたトラウマもあるが、今のシノンとは戦うべきではないとシャマルの騎士としての経験が叫んでいた。強化されたデバイスだけではなく、シノン個人にも脅威を抱いたのだ。

「あ・・・そうだ・・・（み、みんな・・・今から結界破壊の砲撃を準備するわ！・・・上手くかわして各自ばらばらに撤退を）」

（（（おう！！）））

Side シノン

紫が混じった黒い空間、ワームホール内から出口を通り、通常の空間に出る。あれくらいの威力ならこの辺に転がってると思うのだが。

「しかし、想像以上だな・・・演算能力が増えただけでここまで出来るとは・・・」

ヴェルフグリントと共に強化を計画した超能力。それを実現させるため、オレはあるアイテムの恩恵を受けた。

「コラボでもらった」一度だけ願いを叶えてくれる宝玉」、これを使わせてもらった。

「願いの内容は”演算能力の増大化”なんでも作者の話では”演算能

力だけなら白髪のロリコンを超えている”と言っていたが……誰だ？白髪のロリコンって、ネタの匂いがしてならない。

まあ、そのおかげで演算能力が別次元のレベルまで跳ね上がり、オレはデバイスや術技無しでも充分に戦えるようになったのだがな。

出現させるだけで脳がオーバーヒートしそうになるワームホールも今では長時間の拡大と展開が可能になり、さつき仮面の男の前に出現したように連続的な短距離ワープも行えるようになった。

それと、重力操作の派生で引力と斥力も操れるようになった。仮面の男があれば吹き飛んだのは、拳が当たった瞬間に強力な斥力を負荷させたからだ。

他にも、単純な重力付加による圧力、重力場の生成、重力を操作できる領域の広さ、それら全ても以前とは大違い。

「他にも試してみたことがあるしな……精々良い実験台になってもらうか」

「うおおおお！！！」

そう呟いた矢先、後方から仮面の男が猛スピードで飛び蹴りをかましてきた。

左目は見えないので、右に飛んで蹴りを回避する。奇襲に失敗した仮面の男は屋上に足を着け、摩擦でブーツから煙を出して減速した。オレは両腰の長刀を抜刀し、両手をだらりと下げたまま様子を見る。

「……あの短時間で怪我を完治させ、デバイスの性能強化まで

やっつてのけたか・・・やはりお前はあの時仕留めるべきだった」

「貴様の都合など知ったことか・・・何が目的かは知らんが、相應の報いを受けてもらう」

片目を潰し、結果的に厄介な後遺症を刻んでくれたこいつに情けを掛けてやるつもりはない。殺してもいいが管理局の連中がうるさいので、殺さず血祭りに上げてやろう。

「蒼破追連！」

左右それぞれの長刀から蒼破刃を放つ。仮面の男は魔力弾を二発生成し迎撃するが、斬撃波の二つの内一つが魔力弾の威力を上回った。オレの右手によって威力が増しているのだ。

仮面の男は冷静に通過した斬撃波を右拳で殴り、相殺した。どうやら格闘戦の力はそこそこ在る様だ。

両腕をクロスさせ、右足を後ろに引いて地面を蹴る。ブーツが地面を蹴る瞬間、その間に斥力場を生成し、反発のエネルギーを加速に利用、オレは仮面の男の目の前まで高速移動した。

両腕を振り抜く。自然な動作から懐への急接近、そのせいで仮面の男は防御すら出来ずに斬撃をもろに受けて体が後ろに傾く。だがタダでは引き下がらず、オレの顔面に右ストレートを放ってきた。

オレは首を傾けて拳を回避、左の長刀を手放し、重力操作で空中に浮遊させる。空いた左手で作った拳をカウンターのように仮面の男の鳩尾に打ち込む。

それと同時に、グローブの手の甲に装着されていた白いユニットが金色に発光を始め、拳が銀色の魔力でコーティングされた。このユニットは近接戦闘でのこうした威力強化と保護のために作ったのだ。

「ぐおっ！・・・があ・・・！」

斥力を使った威力強化は行っていないが、鳩尾へ綺麗に直撃した拳のダメージは決して軽くない。

「ふんっ！」

左腕の肘で顎を打ち上げ、から空きの胸部に蹴りを打ち込む。爪先と踵のユニットが輝き、銀色の魔力コーティングによって威力が強化されたその蹴りは仮面の男を10メートルほど吹き飛ばした。

仮面の男は必死に立ち上がるが、ダメージの大きさからしてすぐに立ち上がれはしない。まあこうなるように威力を調整したから死にはしないだろう。こいつにはまだまだ苦しんでもらって最後に話を聞かなきゃならないんだからな。

「ぐっ・・・うう・・・」

仮面の男の体が魔法陣で覆われる。どうやら転移するつもりらしい。敵を目の前にして随分必死なことだな。

当然それを許すつもりなど無く、背狼で距離を詰めようするが・・・。

『マスター、上空より巨大な魔力反応です。おそらく砲撃・・・
・来ます！』

ヴェルフグリントの言葉通り、展開されている結界の真上にあつた黒い球体から紫電が吐き出されていた。狙いは結界なのだろうが、拡散した余波がオレに飛んでくる。

「回避は少しやばいな・・・今何発使える？」

『左右それぞれ4発、計8発です』

「ヴァルスの性能実験も兼ねて防御するか・・・2発使う」

『Yes, My Lord. Load Cartridge. Round Shield.』

左右両方から一回ずつの撃鉄音。魔力が一切籠められていなかったカートリッジ2発から魔力が開放され、目の前に発生させた防御障壁を強化する。

紫電が次々と障壁に直撃するが、カートリッジの強化が加わったためそれが碎けることはない。ちなみに、カートリッジを使った今のオレの体は何の不調も起こしていない。不調を起こさないためのヴァルスで、そのための”専用”カートリッジデバイスなのだから。

「おお・・・結界の中はまるで爆心地だな・・・ちっ、性能実験にはなったが、あいつは逃がしちまったか・・・」

碎けた結界を見ながら舌打ちする。オレが防御の準備をしていた数秒の間に転移したのだろう。仮面の男の姿はもう見当たらなかった。

「”闇の書”か・・・また厄介なことになりそうだな・・・」

そう呟いたオレはワームホールを通過して気絶したユーノの元に向かった。

Side Out

「ああ、こつちは大丈夫だよエイミィ……。なのは達にはマシヨンの方の本部に撤退を指示してくれ、僕もすぐに向かう」

通信を終了したクロノ・ハラオウンは一人で重い溜め息をついた。

考えていたのは協力者であるシノンのこと。ジュエルシード事件では首謀者であったプレシア・テストロツサを倒し、今直面している事件でも前回は守護騎士たちをあと一步のところまで追い詰めた。そのことから実力の高さは自然と分かる。

クロノ本人も始めて会った時は圧倒され、おまけに髪の毛をアフロにされているので彼の實力は理解している。

だが、そんな経験をしたからこそシノンの強さに嫉妬と怒りが込み上げてくる。それに、管理局の思想をことごとく否定したシノンをクロノは純粹に嫌っている。

「くそつ……。！」

嫉妬と怒りの感情が、その原因である彼の力を借りている今の状況を憎たらしく思う。しかしクロノの力はシノンに遠く及ばない。い

や、そもそもシノンはクロノと戦う気さえ起こさないだろう。

「クロノ・ハラオウン」

突然聞こえてきた声。

声の方向に視線を動かすと、そこにはシノンを襲撃した仮面の男がいた。クロノは知らないが、仮面の男は先程の戦闘でシノンに叩き潰された。この場にいるのはあまりにもおかしい。

「お前は……っ」

クロノは迎撃体勢を取ろうとデバイス、S2Uを構えるが、仮面の男はその場に留まったまま。

そして、心の中に醜い感情を抱えたクロノに……

「あいつを……シノン・ガラードを管理局の手で排除したくないか？」

まるで迷える者を利用する悪魔のように、仮面の男は囁いた。

第8話 生まれ変わりし来訪者とその力（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

美音のソウルゲインとシノンのヴェルフグリント・ディステンスの詳細は次回書こうと思います。

今回はシノンが自身とデバイス共に強化されました。

コラボでもらった品をいつまでも使わないのはもったいないと思い、シノンの自身の能力を上げました。とりあえずこれでシノンもデバイス無しで戦えるレベルになりました。

デバイスの方も、どうせ強くするんならありったけ強くしてしまえと思い中身がガラリと変わりました。

それと、管理局が真の下種組織となりそうな空気が漂ってきました。

では、また次回。

外伝3 新デバイスの詳細説明（前書き）

謎様、雨季様、faku様の3名から感想をいただきました。ありがとうございます。

今回はデバイスの詳細です。

では、ごうごう。

外伝3 新デバイスの詳細説明

・ソウルゲイン

シノンが開発した美音専用のアームデバイス。AI人格は若い男性。

形状はまんまスーパーロボット大戦OGのソウルゲインの両腕。

魔力は少ないが膨大な妖力と妖炎、格闘系の術技を使う美音の戦闘スタイルから、起動とバリアジャケットの維持とサポートにのみ魔力を使い、攻撃や防御などを全て妖力と闘気を使って行うというまったく新しいタイプのデバイス。

ちなみに魔力をメインで使わないのでカートリッジシステムは未搭載。

ソウルゲインの場合は美音の妖炎をグレイセスのソフィのように両手足や胴体に纏わせたり、術技を使う際、錬度がまだ未熟な美音のために出力をブーストしたりと、制御をサポートする。

初期搭載されている技は……妖炎を圧縮し高速に放つ”青龍鱗”、至近距離で手の平に溜めた妖炎を爆発させ相手を吹き飛ばす”白虎咬”、闘気で生成した無色の砲弾を音速に匹敵するスピードで放つ”玄武剛弾”、超スピードで移動しながら両肘の刃で敵を切り裂く”舞朱雀”、ソウルゲインと美音のリミッターを人為的に解除して通常時の数倍の出力を發揮する”麒麟”。

だがこの内、舞朱雀は美音の術技の錬度がまだ足りないため完全な

威力を発揮できない（発揮できて本来の6割）麒麟はソウルゲイン本体と美音の体がリミット解除の負荷に耐えられぬため、シノンがプロテクトを掛けていて使用不能。

解除にはシノンの許可が必要で、無理に使用した場合はセツトアツプが解除され、美音も共に眠るようになっていく。このことはシノンも美音に説明済みで、美音も麒麟を使わないと約束した。

実際、“麒麟”はソウルゲインのフルドライブで、今のソウルゲインはフルドライブを使用できない状態のデバイスである。

実はソウルゲインには美音の力が暴走しないように非常時の妖力のストッパーになる機能が備えられていて、麒麟のプロテクトも美音の力を抑制するためである。ぶつちやければ美音は暴走させた方が何倍も強いのだ。

・ヴェルフグリント・ディステンス

仮面の男に左目をやられ、リンカーコアに後遺症を刻まれたシノンが戦力を万全にするために魔改造を施した新しいヴェルフグリント。

元々の使用目的が戦闘ではなかったせいも、中に不要なデータが山ほどあり、シノンがそれを全て削除した。それにより、大量な空き容量が出来たため、シノンの考えたアイディアを全て導入しても尚、容量は大量に余っている。

これまで飛行魔法しかまともに使ってこなかったので、本格的に魔

法を使うことを決め、現在の状態でも最低でフォルムが4つ搭載されている。しかもフォルムの一つ一つにバリアジャケットと各デバイスが用意されているという豪華装備だ。

ちなみに、フォルムや武装などのアイディアの出所はなんと、なのはが持っていたアニメやゲーム。

シノン本人は「素晴らしいアイディアがたくさんあったな」と言っていてまったく気にしていないのだが、なのはの方は「やってしまった」という感覚を強く感じている。

・フォルム・ゼロ

ヴェルフグリント・ディステンスの基本フォルム。騎士甲冑が以前と違い、軽く見ても漆黒のロングコートに厚めの黒い長ズボンという上から下まで真っ黒の格好。（イメージ：下半身にクラウドのズボン、上半身にアニメ版のかっこうのロングコート（丈が長い）を着た姿）

武装は以前でも使用していた二本の長刀（イメージ：マブラヴオルタナイティブの不知火や武御雷が使う74式近接戦闘用長刀）。

・フォルム・イエーガー

スピードを追及した超高機動フォルム。武装は両腕に魔力と闘気の出力をブーストするガントレット型デバイス”クォルフィン”（イメージ：鋼殻のレギオスのサヴァリスの天剣）

騎士甲冑のイメージはアニメ版レギオスの最終話のサヴァリスの衣装。

戦闘形態はフェイトに似ていて、装甲をフォルム・ゼロよりも薄くして反応できない速度で相手に攻撃を打ち込むというもの。

それを実現させるため、背中と太もも部分に高出力のブースター型デバイス”ファルザー”を使用している。（イメージ：VANQUISHのザイツエフのアーマースーツに搭載されているウイングブースターと太もものブースター）

通常の飛行速度も格段に上昇しているが、最も力を入れているのは瞬間的な急加速で、その際に発揮される速度は短距離間の瞬間移動にすら見えるほど。ただ、背狼や闘気放出の速度を上げることは出来ないという欠点がある。

・フォルム・シュナイダー

剣などを使った戦闘が主なフォルム。騎士甲冑の見た目はフォルム・ゼロと変わらないが装甲はゼロの数倍。武装は1本の長剣を初めに他の複数の剣を合体、分離させる合体剣（FF？ACのクラウドが使う合体剣とまったく同じ）

ゼロと違うのはこの剣を収納するホルスターを背中に着けているところで、ホルスターの全てに剣が収納されている。

剣の一つ一つがデバイスになっており、シノンの意思に従って自立兵器のように敵を攻撃できる。（イメージ：劇場版機動戦士ガンダム00のダブルオークアンタのソードビット）

こんなことが可能にあったのは、シノンが得た演算能力とそれによるマルチスキルの精度向上が大きな理由である。つまり、他の人間には不可能。

剣にはフォーメーションが登録されており、空中に円の形を作つて強固なシールドを作つたり、砲撃の性能を上げるバレルにもなる。

・フォルム・パンツァー

シノン本人の考えでは”圧倒的な火力と機動性を用いて大多数の敵を相手にするフォルム”なのだそうだが、頭の中で思い描いたことが上手く形にならず、時間が足りなかつたため現在は未完成状態のフォルムである。

だが完成した場合、その性能はSランク魔導師数人分に届く、とシノンは考えている。

・フォルム・イクス

ヴェルフグリント・ディステンスのフルドライブ形態。だが、パンツァーと同じく時間が不足しているので予想図すら浮かんでいない状態。なので現在のフルドライブは単なる出力向上機能しかない。

・ヴァルス

後遺症によりリンカーコアの魔力排出機能が通常よりも下がってしまった状態で、何とかカートリッジシステムを使用できないかと考えた結果生まれたシノン専用のカートリッジデバイス。

ヴェルフグリントと同時にセットアップされるように設定されていて、展開状態は白い二つの腕輪。

・片方ずつ20発のカートリッジが搭載されていて、セットアップ時のカートリッジは”全て魔力が込められていない”。つまり、空の状態である。

ゼロとシュナイダーの時は両腕の手首に装備され、イエーガーの時は両腕のクォルフィンと融合する。

・カートリッジは本来、儀式魔法によって圧縮魔力を弾丸に込め、それをデバイスに装填し、ロードすることで爆発的な出力向上を得る。つまり最初から魔力を込めておくのが普通なのだ。

そこでシノンが目を付けたのはカートリッジに魔力を込める儀式魔法である。術式に自分で改良を加えて、カートリッジ一つ一つに魔力を永続的に自動吸収する術式を刻んだのだ。

これで空の状態のカートリッジは刻まれた術式の効果で”シノンの体から”魔力を自動で吸収し、圧縮するようになる。つまり、シノンはカートリッジに込める魔力を自分の体から与えているのだ。

数発のカートリッジを使用した場合も、他の空のカートリッジが増えた魔力を吸収してくれる。これならシノンの肉体が悲鳴を上げることは無い。

・ロードされたカートリッジは普通なら捨てられるが、ヴァルスはカートリッジを排出せず空になったものをそのまま内部に残すよう回転シリンダー方式になっている。使用しているカートリッジも複数使用が可能な特別製だ。

ヴァルスのカートリッジ搭載数が多いのは、外部からの補給の必要性を失くすことと、真紅のジュエルシードを使用している時などに吸収するカートリッジが全て埋まっているという事態を防ぐためでもあるのだ。

・両手の甲と両足の爪先にある白いユニット

暫定名称はまだ無いが、A Iは未搭載、ゼロとシュナイダーの場合は位置は変わらないが、イエーガーの場合は爪先の部分が無くなり、手の甲部分がクォルフィンに組み込まれる。

機能は攻撃や防御の際の武器や拳の威力補助。ただイエーガーの場合は魔力刃の構成と維持を自動で行う機能が働き、魔力刃を爪のよ
うな形にも出来る。

外伝3 新デバイスの詳細説明（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

皆さん当然気付いているでしょうが、新しいヴェルフグリントのイメージは”ゾイド新世紀スラッシュゼロ”のライガーゼロです。

実はかなり好きなんですよね。原形をまったく留めていませんが。

美音のソウルゲインも同じ様なものです。青い炎、で閃きました。

近々試験が迫ってきたので、また更新が遅くなると思われます。申し訳ありません。

それと、感想で私の書いた作品が読者の方を萎えさせてしまったということと、読者の方に”つまらない”と思わせてしまった事実を知ってメンタル面が少しアレなので、試験が終わっても更新ペースが戻るかどうかはわかりません。

私の身勝手により重ね重ね申し訳ありません。

では、また次回。

第9話 現状確認（前書き）

テスト期間に入る前に何とか投稿できました。

では、どうぞ。

無印編の9、10話に間違った内容があったので編集しました。気が向けば見てみてください。

第9話 現状確認

Side シノン

「・・・カートリッジシステムは扱いが難しい代物なの。本来なら繊細なインテリジェントデバイスに組み込むようなものじゃないんだ。本体の破損の可能性があるし、何より術者にも負荷が掛かるから、やめるようには・・・言ったんだけどね」

時空管理局のアースラスタッフが闇の書事件を追うために構えた拠点（とは言ってもマンションの広い一室だが）で、今エイミィさんがなのはとフェイトにカートリッジシステムの説明をしている。

使っている代物が代物だ。オレが使うヴァルスのようなカートリッジシステムではなく、守護騎士達と同じものを使う以上、しっかりと釘を刺すべきだろう。

「・・・しかし、一度敗北を経験したからって違う魔法体系のシステムを要求するとはね・・・案外負けず嫌いなのかもな、あいつら・・・主人と似て」

『かもしれないですね。ですが、悪い気はしません・・・というかそれを言うならマスターも似たようなものでは？』

「あはは、シノンも負けず嫌いだね」

オレが負けず嫌いね、まあ否定も出来ないかな？

「モードはそれぞれ3つずつ、レイジングハートは中距離射撃のア

クセル、遠距離砲撃のバスター、フルドライヴのエクセリオン。バルディッシュは汎用のアサルトと鎌のハーケン、フルドライヴはザンバー。

破損の危険性が高いからフルドライヴはなるべく使わないようにね。特になのはちゃん、フレイム強化をするまでエクセリオンモードは使っちゃダメだよ」

「はい！」

なのはとフェイトが頷き、自らのデバイスに視線を落とす。

フルドライヴ。その名の通りデバイスと術者の出力を完全に引き出す機能のことだ。

魔導師も騎士も通常は潜在魔力の6割程度しか使用できない。それ以上の魔力使用は体が負荷によるダメージを抑えるために拒否するからである。つまり無意識に働いているリミッターがあるのだ。

フルドライヴはこれらの安全機構をあえて解除し、限界に近い出力を發揮する。だが当然、少なからず過剰負荷によるダメージは体に残り、傷や体調不良を悪化させる要因にもなりえる。

なのはの言葉を借りるなら、まさにフルドライヴは”全力全開”という言葉がしつくり来る状態だ。

「なのはもフルドライヴ使えないんだ・・・美音と一緒にだね」

「何を言ってる、お前の場合はソウルゲインだけじゃなく肉体も耐えられないんだろうが・・・」

美音のソウルゲインに搭載したフルドライヴ”麒麟”は術者にもデバイスにも負荷が強過ぎるので、あれを使用することは今は無理だ。それと美音のことを全員に聞かれたが、”オレの使い魔”ということで誤魔化した。深く追求もされなかったが、なんだか順応早いなこいつら。

「・・・ただいま戻りました」

ドアを開けて入ってきたのは普段着姿のクロノ。だが、一目で分かるほど顔色が悪い、まるで病人のような顔だ。

「どうしたんだ？そんな病人みたいに真っ青な顔して」

啞然としている他の連中を代表して真っ先に聞いてみる。まあこいつの場合、オレが聞いても逆効果かもしれないがな。

「っ！！・・・いや、なんでもない・・・すみません艦長、少し疲れたので報告は明日でもよろしいでしょうか」

「え、ええ、構わないわ・・・今日はゆっくり休んで頂戴」

しかし結果は大違い。クロノはオレの声を聞いて一瞬肩を震わせ、本当に疲れ切ったような声で返答した。リンデイさんもかなり動揺しているようだ。

「はい・・・失礼します」

そのままクロノは部屋を出て行き、ドアが閉まった途端、オレと美

音以外の全員がふう、と安心したように息を吐いた。

「・・・エイミィ、どうなってんだい？なんでクロノはあんな死人みたいな顔してんのさ」

「死人つて、さらにランクが・・・私もわかんない、最後の通信の時はいつも通りだったんだけど」

その最後の通信を終えた後に何かあったと見るべきか。目の仇にしているオレの前でもアレなのだ、どうにも只事ではない。

「今は事態の確認を優先しましょう・・・最初の問題は、守護騎士の目的ね。何だか守護騎士の動きを見ると、自分の意思で闇の書の完成を目指してるように見えるし・・・」

「え？それっておかしなことなのかい？闇の書つてのも、つまりはジュエルシードみたいに凄い力が欲しい人が集める物なんでしょ？だったら、その力を欲しがってる主の為にあの連中が頑張るのはおかしくないと思うけど・・・」

確かにアルフの言うことは一理ある。あの連中が闇の書の主に仕えているのなら、その主の為に頑張っているというのは一番しっくり来る理由だ。

「えっとね・・・第一に、闇の書の力はジュエルシードみたいに制御できるような代物じゃないの」

「完成前も完成後も、純粋な破壊にしか使えない。少なくともそれ以外の目的で使われた記録は一度も無いわね」

「一度も無い……なら、前回闇の書が完成した時はどういった形で事態が収集したんですか？闇の書は転生機能を使って次の主をランダムで選ぶんでしょう？」

「……前回は完成、というより暴走を起こした闇の書が一隻の次元潜航艦のコントロールを乗っ取り、奇跡とも呼べるほど最低限の被害でその艦を破壊して事態を収集したの」

オレの質問にそう答えるリンディさんの顔は隠し切れないほどの悲しみの色があった。どうやら闇の書には個人的な因縁があるらしい。しかし、闇の書というのはアレが本当の姿なのだろうか？

純粋な大量破壊にしか使えない代物だというのに何故転生機能や再生機能など搭載したんだ？純粋な破壊に使うなら転生などさせずただ再生させればいい。そのまま残しておけば効率良く破壊行動が行えるはずだ。

それに、管理局がこれほどまで危険視するほどの闇の書。それを持つていた歴代の闇の書の主は何故死んでるんだ？結界を破壊したあの魔法の威力からして、完成した場合の力は並大抵のモノではない。それほどの力を手にした人間が全員死ぬなど奇跡に等しい。普通ならその人物は英雄か、大犯罪者のどちらかになって名を刻むと思う。だとしたら、考えられる理由はリンディさんの言ったように”力を自分で制御できない”または”力を使う前に何らかの理由で主が死んでいるか”だ。

「それにね、あの騎士達は人間でも使い魔でもなくて、闇の書に合

わけて魔法技術で作られた擬似人格なんだよ。だから、守護騎士達が自分から闇の書の完成を目指すっていうのはかなり異質なことの」

擬似人格ね……そうすると、オレも誰かの人格を元にして作られたのかな。

フェイトの方に目を向けると、自分の生まれのことを少し思ったのか少し俯いていた。

だが、それもほんの数秒。すぐに顔を上げて意志の強い瞳になった。開き直ってるオレと違い、どうやら自分の生まれを受け入れたらしい。

「過去の記録からも守護騎士が外部と意思疎通を行ったっていうことはあるんだけど、感情を見せたことないの」

「けど、あの帽子の子、ヴィータちゃんは怒ったり悲しんだりしてました……」

「シグナムもはっきり人格を感じました……為すべきことがある、仲間と主の為に……」

「オレからすれば、むしろヴィータが一番感情豊かだと思うが……シグナムからも騎士道精神みたいなのを感じたし、あの金髪の女はオレを見てばっちり怖がってたな」

「ザフィーラも静かな感じだったけど、ちゃんと美音とお話してくれたよ？」

過去の記録が確かなら、今回の守護騎士達にはちゃんとした自我があるということになる。誰から見ても分かる確かな自我が。

今まで人形のように生きてきた奴らが確かな自我を持つことになっただきっかけ考えられるとすれば、主の影響だろう。少なくとも破壊や殺戮を楽しむ暴君のような性格ではないらしいな。

「転移頻度から見ても主はこの付近にいるには确实だし、案外、主の方が早く捕まるかもしれないわね」

「そうですね・・・闇の書の完成前なら主もただの魔導師ですし・・・」

ただの魔導師ね・・・実はこの街に闇の書の主がいて、主は戦い方どころか守護騎士の今の行動すら全く知らない幼い女の子とかな・・・ははは、流石にありえねえか。

「・・・にしても、闇の書についてももう少し詳しいデータが欲しいわね・・・そうだ！エイミィ、本局の方に運ばれたユーノ君、もう目を覚ました？」

「え？あ、はい、一応今日はあっちの方で休むそうですけど・・・」

何か閃いたらしく、リンディさんはエイミィさんに確認を取ってから部屋の奥で通信を始めた。うつすらと頭の上に猫の耳が生えているのが見えたが、誰かの使い魔か？

「ねえ、今回の事件、シノンはどうするの？前の事件の時みたいに協力しないの？」

「ん？ああ、それならさつきリンディさんと話した。囑託魔導師って扱いになって、事件解決まで管理局に協力することになった」

フエイトが躊躇いがちに訊ねてきた質問にオレは普通の口調で返す。

「え！？シノン君、管理局に協力するの！？」

ジュエルシードの時は協力しなかったからなのか、なのはは驚きながら身を乗り出して訊ねてくる。

「協力って言っても指揮下に入るわけじゃないさ……ある程度は行動の自由も許されたし、命令の拒否権もある」

「そ、それって……なんかシノン君の方が立場が上に見えるかも」

「立場は知らないが……オレは”お願いされた側”だからな。リンディさんはオレの出した条件を全て飲んでくれたよ」

なのは達以外にも戦力を整えておきたかったのだろう。向こうから協力の話を持ってきた。

まあこの場合は協力ではなく契約だろう。なにせリンディさんはオレの出した条件全てを受諾し、報酬としての現金まで用意したのだ。え？金額？2の後に0が6個くらい並んだ数です。ちなみにポケッタマネーらしい……給料どんだけ？

そんな契約内容でリンディさんはこの事件の解決を要求してきた。見た限り、私怨の感情は無いようだが一人の管理局員として、とい

うわけでもなさそうだ。

「ええ・・・わかったわ、それじゃあ明日クロノと一緒に行かせるからお願いね・・・急に話し込んでごめんなさいね。とりあえず、今日はここで開きにしましょう・・・シノン君、申し訳ないけど明日は本局に来て頂戴、雇い主としての最初のお願いつてことで」

「了解しました・・・あ、それと先程お願いした件は明日でお願いします・・・」

（本局か・・・さっきのユーノ関連か？・・・まあいい、それが終わった後はリブスの所に寄ってから性能実験の続きだ・・・）

ハラオウン低での話し合いが終わり、オレとなのは、そして美音は現在高町家に帰宅中だ。

もうすっかり日が落ちた街の中は帰宅中のサラリーマンや学生などが多く、車道の方も車が少し多い。

（ねえ、シノン君・・・闇の書の主ってどんな人かな？）

（適正を持つ人間をランダムで主に選ぶからな・・・人柄どころか性別もわからない）

（そっか・・・・・・案外、私達と同じ年くらいの子供だったりして・・・）

(・・・オレも同じことを考えたが、流石にそれは・・・
というかお前さ、オレの方が年上なの忘れてないか?)

そんなことを念話で話しながら赤信号で立ち止まる。ちなみに美音は疲れたらしく、小狐状態でオレの頭の上でぐっすり眠っている。

美音の乗り方が絶妙なのかまったく落ちる気配が無い。念のため重力操作で支えておくとしよう。え?力の使い所間違ってる?いいんだよ、癒されるから。

頭の上に小狐を乗せているので通行人の人達から視線が集まるが、オレはまったく気にしてない。たまに黄色い声を出して近寄ってくる女共がいたが、殺気を込めた睨みで追い払った。

ピリリ!ピリリ!ピリリ!

聞こえてきた電子音。音の方向に目を向けると、音源はなのはの携帯だった。

「あはは、すずかちゃんからだ・・・えっとね、友達がお泊りに来てるんだって」

「すずか・・・ああ、確か月村すずかだったか?」

「うん!・・・ほら、これが新しい友達だって・・・」

なのはが差し出してきた携帯の画面に目を向けた瞬間、オレは一瞬驚きで体が硬直した。なぜなら、携帯の画面に映っていた月村すずかの友達とは・・・

「……………世の中って意外と狭いのかね」

……………この間久しぶりに再会した友人『八神はやて』だったのだから。

Side Out

シノン達が帰宅している時、クロノは明かり一つ点いていない自室のベッドに腰を下ろしていた。

「……………シノン……………ガラード」

その名を呟いた原因は仮面の男にあった。

それほどの影響を感じるほど、あの仮面の男が口にした言葉はクロノの心に衝撃を与えた。

「な、何を言っている……………そんなことが……………」

「答えはまだ必要ない……………ただ今はまだ動くな、時を待て、それが正しいとすぐにわかる」

「それは……………どういう意味だ……………大体お前は味方なのか……………」

「闇の書の悲劇は間もなく終わる……………その時に、お前が終わら

せる。父親を殺した闇の書を、管理局の敵であるあの男を……」

「ッ！……待て！何故お前がそれを……」

その言葉に反応を見せたクロノの言葉を聞かず、仮面の男は転移魔法で姿を消した。

クロノは何故だかあの仮面の男のことを報告しなかった。

あんなものはハツタリだ。こちらを動揺させるだけの嘘だ。

普段のクロノならそう思い切れたはずだった。だが、しなかった。

「僕は……っ」

苦しそうな声を出しながらクロノは両手で頭を抱える。

執務官としての思い、ただのクロノ・ハラウンとしての思い、その二つはクロノの心を重く押し潰していった。

第9話 現状確認（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

クロノは説明会に参加しませんでした。現在はメンタル面がとても不安定状態です。

今回の話を書きながら”そういえば”と思ったのですが、私、アリスとすずかの二人まったく言っていないほど登場させていなかった。

今回はたぶん場所が本局になるかも。

では、また次回。

それと、前回は愚痴のようなことを書いてしまい申し訳ありませんでした。

第10話 隠すことの出来ない憎悪（前書き）

お久しぶりです。やっと試験が終わりました。

では、ごきげん。

第10話 隠すことの出来ない憎悪

S i d e シノン

時空管理局本局。

「つい最近オレの”訪れたくない場所ランキング”ベスト3位に刻まれた場所だ。

そんな施設の中をオレは歩いている。

正確にはオレ1人ではなく、エイミーさん、クロノ、ユーノが一緒にいる。ちなみに美音は留守番だ。

来たくない、と願っているようなオレだが、今回はリンディさんの雇い主としての命令で、しかもオレは報酬を貰う方の立場なのだ。いくら拒否権があるからって何かもイヤというほどガキではない。

それと仮面の男にやられて気絶してしまったユーノだが、オレが助けた後は本局に運ばれていた。そして治療を終えてからすぐにオレ達と合流したのだ。

「・・・しかし、随分と大所帯で出て来たけど・・・向こうは大丈夫か？」

「まあ・・・モニタリングは他のスタッフに頼んだし、大丈夫ですよ」

「それで・・・僕は闇の書について調査をすれば良いんだよね？」

「ああ。これから会う二人はその辺に顔が利くんだ。僕の師匠でもある」

この3人が来たのは会話の通り”闇の書の調査”。何でも管理局内にある巨大データベースからユーノの力を借りて闇の書の情報を探すらしい。ユーノが暮らすスクライアの一族は過去の歴史の調査などが専売特許らしいので、この役割は適任だろう。

そしてオレがここに来た用事なのだが、オレはリンディさんから何も聞かされていない。ただ協力者の二人に会えば分かる、と言われた。その二人がオレに用でもあるのか？

「リーゼ。久しぶりだな、クロノだ」

クロノとエイミイさんを先頭に入室した部屋には、猫の尻尾と耳を生やした二人の女性がいた。恐らく使い魔だろうが、リンディさんと話していたのもこのどちらかだ。

髪が長い1人は個人用のソファアームに座って本を読んでおり、もう1人のショートヘアーはスカートを気にせずロングソファアームに腕を頭の後ろで組み、片足を上げて寝ている。

そして次の瞬間、先頭にいたクロノが突然姿を消した。

よく見てみると、ショートヘアーの方の女性が一瞬で接近しクロノを抱きしめている。

「わ〜お！・・・クロ助！お久しぶりい！」

「ちよっ・・・ロツテ！やめるこら！・・・アリア！助けてくれ！」

「なんだと〜・・・久しぶりに会った師匠に随分冷たいじゃんかよ〜。ウリウリ」

「せっかく会ったんだ、好きにさせてやれ・・・それに満更でも無かるう？」

ロングヘアの女性の言葉を引き金にクロノは逃げ道を封じられ、ソファアの陰に押し倒された。

クロノの悲鳴が部屋に響き、ユーノは顔を青くするが、エイミィさんは表情を一つも崩さず、もう一人のロングヘアに近付き、タツチを交わす。

「リーゼアリア、お久し」

「ああ、お久しエイミィ・・・そっちの二人が？」

「そう・・・あ、二人とも、紹介するね。クロノ君に魔法教育をしたお師匠さんのリーゼアリア、向こうでクロノ君と遊んでるのが近接戦闘のお師匠、リーゼロツテ・・・二人とも、グレアム提督の双子の使い魔なの」

「ユーノ・スクライア君とシノン・ガラード君だよ？・・・リンディ提督から話は聞いているよ。呼びにくいだろうからアリアって呼

んでくれ」

そう言つて微笑むアリアさん。普通ならよろしくの一言でも返すベきなのだろうか、エイミイさんの紹介の中に聞き捨てならない単語があつたのでそれ所ではない。

『ギル・グレアム提督とその使い魔二匹に注意しろ』

リブスに渡されたあのメッセージに書かれていたのは恐らくこいつらのことだ。何故気を付けると書かれていたのかは知らないが、完璧な信用はしないでおこう。

「そつちのスクライアの子は”無限書庫”の方だったわね……ロツテ、その辺にしときなさい」

「うにやゝ……ご馳走様……おや？ねえクロ助、こつちも喰つていい？」

「……金髪の方は作業が終わつたら好きにしる。僕は知らん。それと、もう1人はやめておいた方が良く。逆に痛い目を見る」

「なっ!?!……お、おい!ちよつと待て!……ひっ!」

頬のあちこちにキスマークを付けたクロノの言葉にユーノが抗議の声を挙げるが、すぐにロツテさんの獲物を狙うような眼光に怯んでオレの背後に隠れる。

その時、一瞬だけだがロツテさんから僅かに殺気を感じた。だがその本人の表情は崩れず笑顔。どうやらリブスのメッセージ内容はアタリと思つた方が良さそうだ。

「ロツテ、あんたは先に無限書庫の方をお願い。私はシノン君を父様の所に案内してくる」

「了解、了解。んじゃ、行こっか？」

「は、はい」

冷や汗を流しながらユーノはロツテさんとクロノの二人と一緒に部屋を出て行く。部屋に残されたのはオレとエイミィさんとアリアさん。現在この部屋で交戦できるのはオレとアリアさんの二人。

(ヴェルフグリント・・・)

(室内戦闘を想定してセットアップ時の形態は”イエーガー”でよろしいでしょうか?)

(・・・上出来だ)

我が相棒の仕事の速さに心の中で苦笑しながらアリアさんと一緒に部屋を出て廊下を歩く。どうやらエイミィさんとは別れるようだ。

特に会話は無く、やがて一つの部屋にたどり着いた。アリアさんが扉横のコンソールで会話し、部屋の中に入る。

「お父様、お連れしました」

「おお、ありがとうアリア・・・初めましてだね、シノン・ガラード君。私はギル・グレアム、先程キミが会ったアリア達の主人だよよろしく」

入室したオレの方に穏やかな声を掛けてきたのは初老の男性。

管理局の制服を着こなし、柔らかな物腰をしているが、齢を重ねたことにより滲み出る渋さが何処か威厳のようなものを感じさせる。

一見すれば優しそうな男性にしか見えないだろう。この男の目の中にある濁りに気付かなければ。

だが、その目が見ているのはあの女、プレシア・テストロッサとは違う。あの濁りは、復讐の色だ。

過去に何度も目にしたことがある。いや、オレも同じ目をしていたことがあったな。

「……どうも。それで、オレに何か？」

ああ、ダメだ。口調から嫌悪感を隠し切れない。

この人を見てると思い出してしまう。オレの日常や周りの人を何度もぶち壊してくれたナデイの連中への憎しみを。それだけでなく、昔を思い出しているような気分になる。

そして、そんな復讐の感情を隠して他人に”良い人”の仮面を被っているこの人はオレより酷い。復讐がしたいならただ憎しみの目をしていればいいだろうに。

「いやなに、リンディ提督やクロノからキミの話を何度か聞いてね。話してみたいと思ったんだよ」

微笑むグレアムさん。その顔は子供を賤けるような、悪く言えば手懐けるような、無意識に相手を下に見ているような気配がした。

ふと視線を移すと、いつの間にかアリアさんがテーブルの上に紅茶を二つ用意していて、そこに手招きされてソファアに座る。

紅茶を置き終えたアリアさんはオレとグレアムさんが話し合う左側に移動して留まる。狙ってやったのか、それとも偶然なのか、その位置は今のオレの死角だった。

「なのはくん、フェイトくんとはもう話したんだが、その時キミは重傷を負って眠っていたからね。怪我也治り、こうして話せて嬉しく思うよ」

「まだ完治せず、後遺症もありますが・・・それで話とは？」

皮肉を混ぜて親しさの欠片も見せない口調で返す。正直ここまで冷たい態度を表に出している自分に驚きだが、先程の理由を除いても何故かこいつは気に入らない。

オレの態度に思う所があったのかアリアさんが身を乗り出したが、グレアムさんがそれを制する。

「・・・ははは、やはりリンディ提督の言ったとおり、キミは管理局を嫌悪しているようだね。理由は聞かないし、私はその態度を悪いとも思わない・・・だが、一つだけ約束してくれないか？」

紅茶を一口飲んで真剣な表情を見せるグレアムさん。その時だけは目の中にあつた復讐の濁りが消えていた。

「フェイトくんにも言ったのだが・・・友達や、自分を信頼してくれる人達のことは、決して裏切ってはならない・・・それだけ約束してくれるのなら、私はキミの味方だ・・・出来るかね？」

その言葉を聞いて、軽く俯いたオレの口元から薄く小さい笑い声が零れた。

「信頼してくれる人達は決して裏切るな、か・・・ならなんであんたは、”良い人”の仮面を被って周りの人を騙し、心の中で復讐心を燃やしてるんだ？」

ああ、ダメだ、限界だ。こいつは他人だけでなく自分にまで嘘を付いているクソ野郎だ。何が裏切ってはならないだ、自分が既に周りを騙してちゃ世話無いだろう。

顔を上げると、そこには先程オレに助言した人間の目を見開いた顔。

「何故って顔だな・・・あんたさ、自分に嘘をつくのが下手なんだよ。憎悪の感情ってのはそう簡単には隠せねえんだ・・・何度も経験しないとな。あんたが何を憎んでるのは知らんが、あんたみたいなのは”隠さない方が楽”だぞ？」

そう言ってオレは立ち上がり、杖を左手にそのまま出口を目指す。

「ああそうだ・・・」

だが、扉の前で立ち止まり、見えていない左目を指差す。

「もし”これ”の件で誰か心当たりがあったら教えてくれませんか？その人のお仲間共々、少し”お返し”がしたいので・・・それで

は・・・」

そう言つて部屋を出る。もしあの男が仮面の男に関係が無いのなら構わない。だが、もし逆だとしたら随分とらしくないことをしたものだ。アレでは余計な警戒心を与えてしまうだけだ。

(まあいいか。恐らく闇の書に関わっていれば、奴とは必ず接触できる・・・さてと、次はリブスの所に行くか・・・)

思考を中断し、まだ慣れない片目の視界と杖を使った歩行でオレは歩き出した。

『失礼しますマスター・・・。たった今、ソフィアがああ執務官と仮面の男についてある情報を見つけたのですが・・・』

だが、オレの足はその言葉に反応し、再び止まってしまった。

Side Out

シノンが退出した後の部屋の中はただ静寂に包まれていた。

グレアムは自分の背筋に流れる冷たい汗を感じながら、シノンのことを考えていた。

隠さない方が楽、その言葉とシノンの歪んだ笑みはいつまで経って

もグレアムの頭の中から消えてくれない。

まるで自分の考えを全て読まれているような錯覚を感じ、グレアムの精神を乱す。

それは使い魔と主の間にある精神リンクを通じて双子の使い魔も感じていた。恐怖に似ているが、確かな敵意が抱けない。そんな不安定な感情だ。

「彼は……一体……」

だが、今グレアムの中に広がる感情を消すことが出来る人間はおらず、その眩きはただ室内に響いただけだった。

第10話 隠すことの出来ない憎悪（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

今回はグレアムさんとの話し合いでした。全然話が進まねえ……

では、また次回。

第11話 砂漠の逃亡戦（前書き）

ゾンビ様から感想をいただきました。ありがとうございます。

多分後半少しグダグダかもしれませんが。

では、どうぞ。

第11話 砂漠の逃亡戦

Side Out

管理局の調査で文化レベルが0、つまりは人が住んでいないと認定を受けた砂漠の無人世界で現在戦闘が行われていた。

無限に広がる砂漠の一箇所が爆音を鳴らし、巨大な砂の柱を作った。爆発が起きたわけではなく、何かが砂中から飛び出してきたようだ。飛び出して来たのは、一匹の四足で歩行する竜だった。だが鱗と呼ばれるべきものが全て鋭利な岩石になっており、翼と呼べるべき部分が見当たらない。呼ぶならば地竜が正しいのかもしれない。

その地竜の目前には煙草を啜えた1人の少年がいた。銀の髪をなびかせ、上から下までの真っ黒の武家装束のような格好をしている。両手には太陽の光を浴びて輝きを放つ白金のガントレット型のデバイス。

少年が息と共に煙を吐き出した。少年の蒼い瞳は迫る地竜を見ている。ただ煙が漂う空を見ている。

その態度に腹が立ったのか、地竜は鋭い牙を供えた前足を持ち上げ、少年に振り下ろした。少年の何倍も巨大な質量が迫り、その小さな存在を押し潰そうとする。

「・・・起きろ”ファルザー”」

少年が呟いた次の瞬間、地竜の前足が振り下ろされ、大量の砂塵が

舞う。だが、地竜は自分が振り下ろした前足に手応えを感じず、足を退けてみても血痕の一つも無かった。

周りを見渡していると、砂漠の上に影が映っている。しかし光を受けている物体が見当たらない。

地竜は視線を地上から空に移した。そのさせたのは野生の本能が為せる技なのか。なんにせよ、影の根源である少年はそこにいた。

両足に現れたりアクターフィン以外は先程と変わっていないが、見た目の姿よりも目を引くものが現れていた。

それは背中に装着されたユニットから伸びている機械的な黒い翼だった。恐らくそれ自体が巨大な推進ユニットなのだろう。良く見ると太ももの部分にも小さいブースターが装備されている。

「もう少しゆっくり吸わせて欲しかったな……悲しいが、コレ
の誘惑は馬鹿に出来ない」

少年が再び煙を吐き出し、吸い終わったのか右手で煙草を握り潰す。握られた右拳から一瞬だけ発火が起こり、再び開かれた右手の上には何も無かった。

「さてと……もうイエーガーの試運転は済んだし、すまんがお
帰り願おう」

初めて少年の蒼い眼が地竜を捉えた。殺気は宿っていないが、地竜に確かな敵意を向けている。

地竜が吼えた。その咆哮が響くと、背中部分の鋭利な岩石が少年目

掛けて射出された。地を走っていた生物が相手の意表を付くには良い攻撃だ。

だが、空にいる少年には効果が無かった。

シャキン！と展開音が鳴り、背中と太もものブースターから魔力のジェット噴射が起こる。一瞬の噴射音が鳴ると、少年の姿はそこに無かった。

その事実を認識するより先に、地竜の体が右から襲い掛かった衝撃によって吹き飛び、宙を舞う。地面に叩きつけられゴロゴロと砂漠の上を転がる中、地竜はどうか立ち上がるうとする。だが、その前の上から大きな力で体を強制的に地に固定された。

地竜の体が砂漠にめり込み、潰された分の砂が天に昇って柱を作る。その中心に倒れる地竜の傍に、少年がウイングブースターを停止させ着地した。

地竜を吹き飛ばしたのも、地に叩きつけて固定したのも、全てこの少年が持つ速度と拳が為した技だったのである。

最初の射出された岩石も迂回せず正面から潜り抜け、吹き飛んだ先に早く辿り着く。少年はこのような速度と力を見事に両立させた素晴らしい、かつ滅茶苦茶な技を実現させたのだ。

「グオ・・・オオ・・・！」

立ち上がるうと地竜が震わせながら体を動かすが、ふと地竜の頭を少年の右手がやさしく撫でた。

「動くな、傷を治してやる……その後はすぐに消えるから、おとなしくしてくれ」

その言葉と共に地竜の体を緑色の魔法陣が包み、降り注ぐ光が地竜の傷を急速に治していく。ほんの数秒で怪我が完治し、地竜は体を起こして少年の方を見た。

「相変わらずとんでもない出力の底上げだな……これじゃもうリザレクシヨンのレベルだな……しばらくは安静にしてるよ、じゃあな」

己の右手を見ながら呆れた声を出し、少年は地竜に背を向ける。再び背中ของウイングブースターが広がり、少年、シノン・ガラードは空へと飛び立っていった。

Side シノン

「……うん、やっぱり悪くないな。急加速も良いが普通に飛んでも楽しい」

背中のファルザーは折り畳んでおり、今は両足のアクセルフィンで浮きながら空を見ている。

本局での用事全てを終えてから、オレはこの無人世界に来ていた。目的は簡単に言えばフォルムの試運転とりハビリみたいなものだ。

先程までは今ぶん殴ってきた地竜より何倍も強いのを相手に実験を

していたが、苦ではなかった。食物連鎖の形が素敵にぶっ壊れてるグラニデの”強い魔物”に比べたらこんなものだ。

試運転も終わってやることもなくなったので、リプスに貰った薬（煙草）を吸いながら空を眺めていたのだが、そこにさっきの竜がやって来たのだ。

「……にしても、クロノのデバイスにハッキングしたことなんてオレ自身忘れてたな……ま、そのおかげで背中の警戒心が強くなったわけだが」

『ソフィアが進言するまで私も忘れていました。マスター、私も協力しますので今度何かご褒美でも与えてあげてください』

「メンテナンスだけじゃ可哀相だし……AIでも付けるか？」

すっかり忘れていたが、PT事件が終わり、フェイト達が去っていく時にオレはクロノのデバイスにソフィアのハッキングコードを打ち込んでいた。

それを通してソフィアがオレに知らせてくれた事実、それは前回の戦闘である仮面の男がクロノに接触し、オレを貶めないかと話を持ちかけたことだ。

しかし妙だな。少しはボコったのに、オレから逃げた後クロノに会いに行くというのは、少しおかしいと思うのだが。

この事実を知ってヴェルフグリントはクロノのことを告発しよう、と言ってきたがオレはソフィアの報告を黙殺することにした。

大した理由は無い。これからクロノがどっちに付くのか興味があるのだ。それに、この事実を告発するとハッキングの事実を突かれてオレも自分の首を絞めることになりかねない。

もしクロノが敵に回っても、ソフィアに指示を出してデバイスを強制停止させれば無力化できるしな。

『マスター、エイミー様から通信です』

「繋いでくれ」

『ごめんシノン君！急で悪いんだけどフェイトちゃんの救援に向かって！シノン君が一番近い世界にいるの！』

通信ウインドに表示されたエイミーさんの視線はこちらを向いていない。他にもやるべきことがあるのだろう。後ろにいるのはと美音は様子を見ると待機つてところか。

「引き受けました。転送はそちらでお願いします」

『オッケー、5秒待つて！』

通信が切れると同時に転移魔法陣が出現した。毎度のことながら準備と手際が良いものだ。

その時、いつの間にか新しい煙草を取り出して口に啣えようとしていた自分に気付いた。いかん、1日一本で充分だというのに依存しかけているぞ。気を付けねば。

『転送！』

さてと、頑張りますか。

Side Out

シノンが救援に向かったその場所では、フェイトとシグナムが砂漠を移動しながら前回よりも派手な戦いを繰り広げていた。

二つの光がぶつかっては離れ、すぐに激突、そんな流れを何度も繰り返している。

カートリッジシステムの扱いに馴染んできたフェイトは火力でもシグナムに負けていない。対するシグナムも負けておらず、シュベルトとシュランゲの二つのフォルムを使い分けながらフェイトの追隨を許さない。

一見互角に見えるこの勝負。だが実際はフェイトの方が少し不利だった。

フェイトの方がスタミナを多く消費しているのだ。高速戦闘を得意とすれば当然のことだが、その差は次第に致命的な敗因となる。

今でこそ速度で誤魔化しているが、時間が経てばいずれ潰される。だが、相手が相手なので撤退も容易ではない。

故に、フェイトが取る方法は……

(ソニックフォーム・・・やるしかないかな)

未だ伏せている手札を切り、速攻で決着をつけることだ。

フェイトとシグナムが互いにデバイスを構え、再び正面からぶつかる。数秒間だけ鏖闘り合いが起こるが、弾かれ距離が開く。

「はあ、はあ・・・っ!!」

「くっ・・・せいっ!」

再び高速移動で視界から姿を消すフェイト。その向かう先はシグナムの背後だが、ギリギリで反応されレヴァンティンが振るわれる。

「っ! また消え・・・」

ここで流れが変わった。再びデバイス同士が衝突する前に、フェイトが再び高速で移動した。

スタミナが限界に近付いている状態でさらに上昇する速度。これはシグナムの予想を上回り、完全にその背後を取った。

金色のハーケンが振るわれる。

シグナムは左手に持った鞘を割り込ませたが、防御を貫かれ吹き飛ばされた。直撃は避けたようだが軽いダメージではない。

「バルディツシュ!!」

『Load Cartridge』

畳み掛けようとフェイトのバルディッシュからカートリッジが一発ロードされ、フェイトの左手に電撃を纏ったスフィア、間の前に加速・増幅用の環状魔法陣が複数生成される。

だがその時、砲撃の準備を整えたフェイトの背後から突然、腕が飛び出した。シグナムに意識を向けているフェイトはそれに気付かない。

そして、腕がまっすぐとフェイトの胸を後ろから貫こうと突き出された。

ガシッ！！

「ギリギリか・・・フェイト、集中するのは良いが背後の警戒は疎かにするな」

その腕は新たに聞こえた声の主、シノン・ガラードによって阻まれた。飛び出した腕はクオルフィンを纏ったシノンの右手ががっちり掴んでいる。

「シノン！？どうして・・・」

「救援に来た。こっちは気にせず、思う存分やれ」

そう答えてすぐにシノンの右拳が振り抜かれ、何も無いはずの空間に隠れていた存在をぶん殴った。

鉄拳が揺らいだ空間に食い込み、そこから人影が飛び出した。殴り飛ばされた状態から体勢を整え、着地する。その人物は、仮面の男

だった。もしシノンが阻止していなければあのままリンカーコアを奪われていただろう。

「くっ……貴様ぁ……！」

「惜しかったな……不意打ちしか能が無いってわけじゃないだろうが、まだ甘えよ」

腹部を手で押さえながら仮面の男は憎しみを隠そうともしない声を出す。だが、シノンはその憎しみをそよ風のように無視する。

「プラズマ……スマツシャー……！」

気を取り直して放たれたフェイトの砲撃魔法。だが間を置いてしまったのでシグナムには対応する時間が出来た。鞘にレヴァンティンを収納し、カートリッジを一発ロードする。

「飛竜……一閃……！」

再び抜き放たれた剣は連結刃へと姿を変え、圧縮された魔力が斬撃と共に放たれた。二つの攻撃が衝突し、相殺されたことで爆発が起こる。

フェイトとシグナムは再び空へと飛び立ち、衝突した。

また空に上がったか。

軽く見てもフェイトのスタミナは限界が近かったし、多分長くは持たんな。

(ヴェルフグリント、フェイトがやられたらすぐに知らせる。その時はこいつとシグナムを振り切って脱出する)

(了解しました)

念話を終えてファルザーを展開。クイツクムーブ(ブースター使った高速移動の名前)を使って一瞬で仮面の男に肉薄し、顔面に向かって右拳を突き出す。

仮面の男は首を右へ傾けて拳を回避するが、オレは左太もも部分だけブースターを噴射させて仮面の男の顔面に向かって膝蹴りを放つ。だがそれも寸での所で仮面の男が割り込ませた右腕に阻まれる。

「……随分と顔面への攻撃が多いな」

「いい加減その趣味悪い仮面ぶっ壊して素顔を拝みたいんだ、よっ！！」

足を戻す反動と同時に急速後退で距離を取る。仮面の男は懐から銀色のカードを3枚取り出し、それを指で弾いた。

すると、突然出現したバインドがオレの体を拘束し、全方向から無数の魔力弾が迫ってきた。

「そう何度も同じ手を食らうか……ソフィア！」

懐に仕舞つてあるセットアップ済みのソフィアがバインドの解析を始め、一瞬でバインドが砕ける。電子戦でこいつを上回るデバイスは恐らく存在しないだろう。

続いて演算を開始してオレを中心とした全方向に斥力場を発生させた。斥力場と衝突した魔力弾は物理法則に従って反対方向へと弾かれ、霧散する。

オレは空中に上昇し、右手を空に掲げて紫電を迸らせながら重力球を生成する。

「なっ・・・！」

仮面の男が驚愕する。それはそうだろう。今オレが生成した重力球の大きさは凜さんとキャスターさん二人を相手にした時のものとは比べ物にならない。大体で直径10メートルはあるだろう。

「避けなきゃ死ぬぞ」

それだけ言つて重力球を高速射出。砂漠に着弾し、大爆発と共に砂塵がばら撒かれる。

この程度で死ぬ実力者ではない、恐らく回避したはずだ。

すると、砂塵の中から仮面の男が飛び出し、右足で蹴りを放つてきた。やはりこいつ、オレの死角である左側を狙ってくる。

蹴り足にぶつけるように左腕を割り込ませる。だが、蹴りの威力が想像よりも遥かに高く、ガードの上から吹き飛ばされた。

「威力が上がった……！！さっきのカードか」

オレの睨んだ所、あのカードは術式を込めた簡易型の魔法発動媒体だ。アレを使ってデバイス無しでバインドや魔力弾を使っているのだろう。ならば身体強化の術式があってもおかしくはない。

種はわかった。ならばもう恐怖は無い。

「はあっ！！」

「おらあ！！」

仮面の男が放った右ストレートに右拳をぶつけて受け止める。右腕に衝撃が来るが、今回吹き飛んだのは仮面の男のほうだった。多分だが、右腕も今ので折れたな。

「なに！？」

「いくら身体強化を施しても斥力の力を足した拳には勝てねえよ」

イエーガーが得意とするのは高速機動からのインファイトだが、打撃を放つ際には重力操作を使って破壊力を増大させている。今回や地竜を殴った時も、打撃の際に斥力の力をプラスしたからあの破壊力を何度も実現できたのだ。

斥力は簡単に言えば弾く、あるいは遠ざける力。体が触れる瞬間にその斥力を一瞬だけ強力に発生させれば、対象物は打撃力と一緒に大きな衝撃を受けて吹き飛ぶ、というわけだ。これは生半可な防衛魔法で防げる威力ではない。

「さてと、そろそろ正体拝ませてもらおうか……どうせその姿全部魔法で偽装してんだろ？ポコポコにして魔法を無理矢理にでも解除してもらおう」

両拳を構えてクイックムーブで距離を詰めようとするが、突然地上のほうで爆発が起こった。煙の中に見えた炎と電気からフェイト達だろう。

（マスター、もうフェイト様が限界です！このままでは蒐集されません！）

「だな……近くにアルフがいる筈だ。合流して離脱する」

（了解しました）

くるりと反転し、クイックムーブでフェイトの元に向かう。仮面の男の正体よりもフェイトの安全が優先だ。もうなのはが蒐集された時のようなことはごめんだ。

「行かせん！」

「なに！？……うおっ！」

突然体を複数のバインドに拘束された。術者は言うまでも無く仮面の男。

「邪魔をするな、これは必要な犠牲だ」

「ふざける！！何に必要な犠牲だ、んな理由で納得できるか！……」

・うおお・・・らあああ！！！！

バリイイーン！！

ソフィアの解析が終わるより先に、バインドを力尽くで破壊する。

クイックムーブを使い、再び姿を消す。向かう先はフェイトのいる方向ではなく、仮面の男だ。また邪魔をされないよう速攻で黙らせる。

「ヴァルス！！」

右腕から二度の撃鉄音が鳴り、クォルフィンの肘部分から煙が吐き出される。

一瞬で懐に入り込み、左手で仮面の男の胸倉を掴む。これなら避けられることはない。

「くっ・・・離せ！！」

魔力強化された拳や蹴りが打ち込まれるが、この手は死んでも離さない。そして、右拳は特製のカートリッジ二発分の魔力を纏い、銀色に輝いている。

「吹っ飛べ！！・・・インパクト・バンカー！！」

仮面の男に押し当てた右拳から解放された膨大な衝撃波。拡散せず一点のみに放たれたその破壊力は仮面の男の体を大地に向かって一気に叩き落す。

本日何度目かわからない砂柱が出来上がり、轟音が響き渡る。

死んではいないだろうが、しばらくは動けまい。この魔法の破壊力は並みの砲撃魔法よりも凶悪だ。

「くそ……フェイトは……」

ファルザーを羽ばたかせ、フェイトの元に向かう。邪魔された時間は約15〜30秒。状況にもよるが蒐集するには困らない時間だ。

見えた。地面に倒れたフェイトの横でシグナムが闇の書を広げている。既に蒐集が始まっているのか、フェイトの体から金色の光が吸い取られている。

「くそっ!!」

毒づきながらクイックムーブで真っ直ぐに突っ込む。急接近したオレの存在にシグナムが気付くが、通り過ぎ様にフェイトを抱き上げ即離脱する。

どうにか間に合ったらしく、蒐集は途中で停止した。

(アルフ！フェイトを回収した、どこにいる！)

(そこから南西5キロってところだよ、今ザフィーラと交戦してる！)

(なんとか振り切ってこっちに来い、離脱するぞ！)

指定された方角へ旋回し、再び急加速。シグナムや仮面の男が追っ

てこないとは限らない、すぐにこの場を離脱しよう。

「ヴェルフグリント、転送準備だ！」

『了解しました。2分お待ちください』

頼りになる相棒の返事を確認しながらアルフの元へ急ぐ。やれやれ、まさかイエーガーが最初の実戦でこれだけ活躍してくれとはな。

「お〜い！シノーーン！！」

進行方向からアルフがやってくる。オレの飛行速度が異常なおかげでかなり早く合流できたな。

アルフの後方にはザフィーラ、オレの後方からはシグナムが追いかけて来ている。フェイトを庇いながらの戦闘だと少し厳しいな。

『準備完了、転送開始！』

期待に込えてくれた相棒の声と共に、オレ達は魔法陣に包まれ、その世界から姿を消した。

第11話 砂漠の逃亡戦（後書き）

・インパクト・バンカー

カートリッジを使用して生成した魔力を拳に圧縮し、零距离で打ち込む零距离砲撃魔法。（イメージ：スパロボOGのアルトアイゼン・リーゼのリボルビングバンカー）

ただし、魔力を圧縮して純粋な衝撃として打ち込む魔法なので、実は非殺傷設定が出来ない。

ご覧いただきありがとうございました。

なんだかシノンが通常戦闘よりも馬車馬のように動きまわる方面で活躍している気がする。

原作と違い、フェイトは完全に蒐集されませんでした。まあそれで話の内容が変わるわけでもないんですが。

ようやく原作の半分くらいです。

では、また次回。

第12話 残酷な真実（前書き）

なんか前話だけじゃ納得がいかなかったなので書きました。

……けど、時間が掛かり過ぎてしまった。

では、どうぞ。

第12話 残酷な真実

Side シノン

「フェイトさんはリンカーコアにダメージを受けてるけど、シノン君の助けが早かったおかげでかなりの軽症よ。なのはさんよりも早く復帰できるわ」

「アースラの稼動中で何よりだな。おかげで救援も早く行えた」

今オレ達は本局内で整備中のアースラでブリーフィングを行っている。メンバーはオレの他に、ハラオウン親子とエイミーさん、ロツテさん、クロノ、なのは、アルフ、美音、あとアースラスタッフの一人のアレックスさんだ。

あの砂漠の世界から脱出してすぐに、フェイトはアースラの医務室に送られた。容態はそこまで深刻ではないが、今は眠っている。というか、はつきり言ってオレも眠りたい気分だ。

イエーガーの試運転から即座に実戦、その後はフェイトとアルフを連れて必死の逃亡戦、さすがに精神面で少し疲れた。今オレの膝の上で小狐になって丸まってる美音が唯一の癒しだ。

「フェイトちゃんとなのはちゃんの二人が出動してすぐに、駐屯地の管制システムが外部からのクラッキングでほとんどダウンしちゃって……それで、指揮や連絡、転送まで出来なくて……ごめん、私の責任だ」

砂漠から離脱する時、オレがエイミーさんではなくヴェルフグリ

トに転送を頼んだ理由はこれだ。仮面の男との戦闘中にエイミィさんからの通信が一度たりとも無かったのは流石に不自然だと思い、即座にヴェルフグリントに頼んだ。

半分勘任せの判断だったが、結果的にはベストな判断だったらしい。

「んなこたあ無いよ。エイミィがすぐにシステムを復旧したからアースラとも連絡が取れたんだし、仮面の男の映像だって残せたんだ」
落ち込むエイミィさんにフォローを入れるアリアさん。口には出さないが、仮面の男の映像ならヴェルフグリントとソフィアがばっちり撮ってるのであまり意味は無いんだよなあ。

「にしてもおかしいわね。向こうの機材だって管理局で使っているものと同じシステムなのに・・・それを外部からクラッキング出来る人間なんているのかしら？」

「そうなんですよ！防壁も警報も全部素通りして一気にシステムをダウンさせるなんて・・・」

はっきり言えば、そんな人間は存在しない。もし出来る奴がいるとすれば、そいつは人間じゃない。

防壁を解除しつつ警報も一切鳴らせない、ソフィアだってそんな真似は出来ない。精々警報の鳴る時間を最大限に遅らせ、警報が鳴った時の混乱に乗じて一気に防壁を突破するのが限界だろう。

それにクラッキングもだが、この仮面の男の能力もおかしいというか、疑問に思う点がある。

なんでもこいつ、なのはがヴィータの逮捕に向かった際に威力が上がった新型バスターを完全に防御して、そこから長距離バインドを決めたらしい。

そしてその後は最短で20分掛かる転移移動を僅か9分で成功させ、フェイトに後ろから不意打ち。精密な魔法技術はもちろん、集中しているとはいえフェイトの背後を取る近接戦闘技術、どちらもかなり優秀だ。

だけど、それなら何でオレとの戦闘時はあのカード以外に魔法を使わなかったんだ？魔力切れとか？

「それだけ強力な技術者がいるってことですか？」

「うん。もしかして、組織だってやってんのかもね」

なのはの言葉に返答するロツテさん。なのはの言うことも、組織の可能性も考えられなくは無いが、多分ハズレだ。例え何処かの組織が絡んでいたとしても目的がわからない。闇の書なんて物騒な代物の完成を目指して何のメリットがあるんだ？

そして、組織が否定されるとすれば、やはり……。

「アレックス、アースラの航行は問題無いわね？」

「ありません。上層部からの指示通り、アルカンシエルも搭載してあります」

アルカンシエル。エイミィさんが軽く口にしていたが、どうやら随分とヤバイものらしい。ちなみに言うと、破壊力がだ。

「では予定より早いですが、本部をアースラに移します。各員はそれぞれの持ち場に……っと、なのはさんは一端お家に戻らないとね。シノン君もお疲れ様、今日はもういいわよ」

リンデイさんの言葉を聞いて席から立ち上がり、美音を肩に乗せる。左手に杖を持ち、小さな欠伸を零しながら出口に向かう。

「あれ？シノン君、このまま家に帰るの？」

「いや、この間入院した病院から再検査に来てって言われてな、そっちに行くってくる……たく、もう治ったって言うてんのに……あ、そうだ。悪い、なのは、美音預かってくれ」

右手で美音の体を摘まんで持ち上げ、なのはの頭の上に乗せる。美音が少し寂しそうな目でオレを見てくるが、頭を少し撫でてやって部屋を出た。

だが、部屋を出てすぐにオレの足は止まった。アリアさんが壁に背中を預けながら待ち構えていた。

「……ちよつと話さないかい？転送ポートまで歩きながら良いからな」

「……構いません」

杖を支えに並んで再び歩き出す。アリアさんは少し遅いオレの歩くペースに合わせながら歩いてくれている。ただ気のせいだろうか？歩いている時にこの人がたまに何かに耐えるような顔をしている気がする。

「突然なんだけどさ、キミ前回の闇の書事件の結末って知ってる？」

「リンディさんから少し聞きました。一隻の次元潜航艦のコントロールに乗っ取られ、奇跡とも呼べるほど最低限の被害でその艦を破壊し、事態を収集した、と」

「その通り……実はね、その時の犠牲者の一人が、クロ助のお父さんだったんだよ」

クロノの父親？なるほど、それならあの時のリンディさんの悲しい表情も頷ける。雇い主に随分と失礼な真似をしたものだ。

「ねえ、もしだけどさ……大切な友人が物凄く危険なウイルスに掛かったら、キミはどうする？その友人を殺してたくさんの人を救う？たくさんの人が死ぬのを承知でその友人を助ける？」

あまりにも突然で不自然すぎる会話内容だ。

何故いきなりそんなことを聞くんです？

そう言ってしまうはこの会話は恐らく終わる。だが、この会話は中途半端に終わらせてはいけない、終わらせればオレ自身が後悔する。そんな気がした。

「その友人が本当に大切だとして、多分オレなら……そいつが殺して欲しいと言えば殺すし、生きたいと言えば助けるでしょうね」

前者のように生きる気力が無いのなら躊躇い無く殺す。

自分の命を諦めた奴はオレ自身嫌いだし、命を自分で諦めた奴を生かしておいてもそいつが苦しむだけだ。何よりもそいつ自身が死を願っているのだから。

だが後者、これは生半可な気持ちで口に来る答えではない。

たくさんの人間の命を無にしても生きたいと願う絶対的な生存本能。それを持つ者しかこの答えは出せないだろうな。かつてのオレ自身がそうだったのだから。

そして、そうまでして生きたいと願うなら、オレはそいつを助け、救おうとするだろう。

「それじゃあ、もし殺したと仮定して……そのウイルスは新たな感染者を生み出した。ウイルスが本格的に広がれば間違い無くたくさんの人が死ぬ……そしたら、またキミはどうする？」

もう被害を出さないために、二度と感染者が出ないように誰の手も届かない所に永遠に閉じ込める？それとも、また友人の答えを聞いて動く？」

止まらない負の連鎖、というやつだろうか。それを止める為に現在の少数を殺して未来の無数を守る。間違い無く正しい選択だろう、少ない犠牲で多くの命を救えるのだから。

例えその詳細や過程が非人道的であろうとも関係無い、その行為は”正しい”のだ。

だが、それをわかっけていてもオレは……

「どうするか、という点だけで言えば……多分、”もう誰も死

なせません”。その感染者も、周りの人も」

「・・・そのせいで、誰かが傷付いても？残念だけど、それは唯の叶わない我儘だよ。それに、例え誰一人死ななかつたとしても、傷付いた人達はその感染者をきつと憎む・・・ずっとね」

「まあ、そうでしょうね・・・けど、わかってても嫌なんですよ。大切な友人を殺して、そして今度は同じ境遇の人間を永遠に閉じ込める。そんな理不尽を認めたくないんです・・・もう誰かが何かの理由せいで振り回されるのは、見たくないから」

気が付けばオレとアリアさんは完全に通路で足を止めていた。オレが前に立ち、その後ろからアリアさんが話しかけている。

互いに顔を見ない会話だったが、最後の言葉だけはアリアさんの目を見て言った。これだけはちゃんと伝えなければならぬから。

「ッ！・・・キミは・・・」

「ここで話したことは、もう忘れます。その方がお互いの為になるでしょうから・・・それでは」

それだけ言ってオレは再び歩き出す。ロツテさんが追ってくる気配は無かった。オレは一度も振り返らず、黙って転送ポートまで辿り着いた。

『マスター』

「ん？どうした？」

『これだけは憶えていてください。例えこの世の全てがマスターの敵となっても、私やソフィア、そして美音は、最後まであなたの味方です』

一瞬ウエルフグリントの言葉に啞然とするが、オレは微笑みながらただ一言、ありがとう、と答えた。

Side Out

「そうか……彼はそう答えたか。危ない真似をさせてすまない、アリア」

「いえ、彼は何もしてませんでしたし……多分、さっきの会話も本当に忘れるでしょうね」

管理局本局の一室。そこにいるギル・グレアムは使い魔に礼を述べながら静かに目を閉じた。

「そういえばロッテ、無限書庫の方はどうなの？」

「あのスクライアの子が頑張ってたねえ。闇の書の正体は大体分かったみたいだよ」

ユーノが無限書庫で調べた結果、わかったことはたくさんあった。

まず、”闇の書”というのは本当の名前ではない。古い資料に記された正式名称は”夜天の魔導書”である。本来の製造目的は各地の偉大な魔導師の技術を蒐集し、研究に使用すること。

破壊の力を振るう今の姿になってしまったのは、おそらく過去の主によるシステムの変更。闇の書、いや夜天の魔導書も、ある意味では被害者だったのである。

そして、その変更は厄介なモノを生み出してしまった。主と共に旅をするための機能と、破損箇所を修復する自動修理機能、この二つが暴走を起こし、転生機能と無限再生機能が生まれたのだ。

古代の力によって歪められた力は今でも残り、闇の書を不滅たらしめている。

だが生まれた歪みはこれだけではない。主への性質までも変わってしまったのだ。

一定期間に蒐集を行わなければ主の魔力や資質を侵食し、完成したとしてもその後は主の魔力を無差別破壊に際限無く使わせる。現在の主であるはやての下半身不随の真の理由がこれだ。

そして、シノンが疑問に思った”闇の書の主が全員死んだ”という答えもこれだ。歴代の闇の書の主は全員、その力で何かを為す前に死んだのだ。

封印や停止を行おうにも、闇の書は主と認めた者にしかシステムへの管理者権限を使わせない仕組みになっており、もし外部から無理に改竄しようとすれば、主を吸収して転生、完成前も完成後も手が付けられない。

これにより、闇の書は永久封印が不可能なロストロギアと言われている。

「大したもんだよ、あの子は……それで父様、どうするの？ デュランダルはもう完成したけど」

「頼まれた時は驚きましたよ？ 現状で最も危険なあの子にあんな話をしてくれ、なんて」

「……どうしても知っておきたかった。私に”憎しみを隠さない方が楽”だと言った。そんな彼ならどうするのか。だが、やはり予想が付かないな……”誰も死なせない”か。不思議と彼ならやってみせる、と思ってしまう」

この三人が、いやグレアムがやろうとしていることは合法ではない。管理局では立派な違法となる行為だ。だがグレアムは止まらない。かつてその手で自分の友であり、クロノの父であったクライド・ハラウンを闇の書ごと殺した時から決意したのだ。

絶対に闇の書を永久封印すると。

そんな時にグレアムはシノンと出会い、己の中に宿る憎しみを見抜かれた。そして知りたくなった。自分にあそこまで言った彼ならどうするのか。

帰ってきたその結果は予想通り、”予想外の答え”だった。

「最後に見たあの子の目……なんて言うか、とても悲しい目でした。クロノよりも年下なのに、一体どんな体験をしたのか」

本人は自覚していないであろうその目は直に見たアリアに驚きと恐怖を感じた。まだ子供であるその外見が出来るような目ではなかったのだ。過去を懐かしみ、深い悲しみを思い出したようなあの目はだがそれはシノンが誰にも明かさない自身の闇。彼が無意識に閉じ込めたモノが浮かび上がったものなのだ。

「……彼は必ず私達の前に立ちはだかる。だが、絶対に成功させなくてはな」

「はい!」「うん!」

ギル・グレアムは止まらない。たとえシノンが立ちはだかろうと、どんな手を使っても闇の書の封印を成し遂げるとすでに心に決めたのだから。

Side シノン

「……ちくしょう。何が悲しくて、健康体で病院に来なきゃなんねえんだよ」

(マスター、そろそろ機嫌を直してください。今日の検査で終了と言われましたし、フィリス医師が杖を買ってくれたのです、もう良いではありませんか)

受付前の広いロビーでソファに座りながら、オレは深い溜め息をついた。

先程まで検査を受けていたのだが、やはりオレの回復力が信じてもらえず様々な検査をした。おかげでこっちは杖を使いながら病院中歩き回らされた。

その疲れのおかげでようやく検査は終了し、フィリス先生が本当の退院を祝って使っていたのと同じ杖の新品を買ってくれた。

まあオレもそこまでガキではないので本気で怒っているわけではない。愚痴もコレで最後にしよう。けどなあ……しばらくは病院来たくないかも。

さて帰るか、と思いつながら杖を片手に立ち上がるうとした。だが次の瞬間、オレは立ち上がった体を伏せるように地面に戻した。

「……あれは、なんの冗談だ？」

(……冗談にしてはキツ過ぎると思います)

周囲にいた数人の人が奇怪な視線を向けてくるが、それどころではない。

たった今エスカレーターから降りて入り口を目指している三人の集団。その容姿が目立つおかげで気付けたが、その三人は出来れば日常で最も遭遇したくない相手だった。

桃色、金色、赤色、それぞれ三色の髪。そして一瞬だけだが顔が見

えた。間違いない、あれは守護騎士の内の三人だ。

幸いオレには気付かなかつたらしく、病院を出て行った。ふう、と息を吐いて立ち上がる。周りから向けられる視線は気にしないことにしよう。

看護婦の一人を呼び止め、出て行った守護騎士三人について聞いてみる。

「ああ、あの人達ね・・・何でもご家族が突然倒れたらしいわ。一応検査入院するらしいけど」

ご家族。ユーノの調べた情報が確かなら、おそらくその人間が闇の書の主だ。

雇われ魔導師の身としては、すぐにリンディさんに報告するべきなのだろうが、なんだかその気にはなれない。

・・・行ってみるか。主がどんな人間なのかを見てから報告するかどうかを決めよう。

看護婦に礼を言ってエレベーターに乗り、教えられた番号の病室を見つけた。名札を見ると、そこには”八神”と書かれていた。

「八神？八神ってまさか・・・（ヴェルフグリント、部屋の中にトラップや警報装置は？）」

（スキャンを掛けましたが発見できません・・・マスター、八神とはもしかして・・・）

(・・・見てみればわかるさ・・・出来れば違うことを祈るがな) どうやら思いついた人物は同じらしい。心の中で別人であることを祈りながら、音を立てずにスライド式のドアを開けて中を覗いてみる。

夕日の光が差し込む病室の中、ベッドの上には一つの人影が見える。体格から見ておそらく女、それも幼い少女だ。

徐々に目が慣れ始め、その姿がはっきり見えるようになる。

「・・・良く考えたら、オレって何かに祈るの嫌いなんだっけな」

残念なことに予想は的中。ベッドの上の人物はオレの知っている人間、八神はやてだった。

だが、これで色々と納得がいった。

今まで人形のように生きてきた守護騎士達に確かな自我を持たせるほどの主。そして、守護騎士があれだけ蒐集に必死になる理由、確かにはやてが主ならそれもわかる。

たぶん、はやては守護騎士達の行動を知らないのだろう。知っているのなら一般の病院に入院したりなどしないはずだ。守護騎士達もそこまで間抜けではない。

「はあ・・・よう、はやて」

「え?・・・シ、シノン君!?何でここにおるん?」

「看護婦さんの話を聞いて、もしかしたらって思ってたな……結果は予想通だったけど、そろそろ面会時間もやばいか。ごめんな」

偶然を装って話しながら、ベッドの近くに置かれていたパイプ椅子に座る。オレが入院したときと立場が逆になった状況だ。

はやてはオレの予想外の来訪で驚いているようだが、すぐに笑顔になつた。

「いいんよ。こうして来てくれただけでも充分嬉しい……うっ！」

嬉しそうに話していたはやてが急に胸を抑えて体を前に倒した。かなり苦しんでいるのか、痛みの声すら聞こえてこない。

気が付けばオレは右手をはやての体に当ててヒールを使っていた。淡い光がはやての体を包み、治療を行う。それによつてはやての表情が楽になつていくが、完治したわけではなさそうだ。

そんな時、はやての左肩に置いたオレの右手が少しずつ金色に発光していることに気が付く。

「これは、ジュエルシードの時と同じ……」

「あ……れ？……痛みが、無くなった？……シノン君がなにかしたん？」

「あ、ああ……ちよつとした魔法を使つてみたんだ。悪いがこれも内緒にしてくれるかな？この目よりも知られたくないんだ」

はやての痛みが消えたことにオレのほうに驚いているのだが、なんとかフォローを入れる。

多分、今がユーノの調べた情報にあつた闇の書の蒐集だな。

ジュエルシードの時と同じ現象が起きたということは、はやての体になんらかの形で負の力が干渉しているということだ。はやての助けになったのは嬉しいが、右手の内部にあるジュエルシードに影響が無いのか不安だな。

「うん……前と同じくタダってというのは納得いかんよ」

「ははは、それは困ったな……それなら前回の分も含めて二つ願いを聞こう。それでどうかな？」

後に、オレはこの時の自分の発言を呪い続けることになるとは思わなかった。

「ほんま！？それなら……手、繋いで。それで、この前の話の続き聞かせて？」

「この前の話って、あの絵の話か？」

「うん……だめ？」

不安そうな顔でこちらを見上げるはやての声は今にも消えそうなほど弱々しいものだった。伸ばされた手を握ると、その手は確かに震えていた。ずっと誰にも不安を見せないよう耐えてきたのだろう。こつこつ子はどこまでも隠し通そうとするからな。

「……え？……シノン、くん？」

「ずっと耐えてきたんだろ……よく、頑張ったな。もう、大丈夫だ」

はやての頭を胸に抱き寄せ、優しく頭を撫でてやる。やがて、胸の中から嗚咽の音が聞こえてくる。

「イヤや……私、まだ死にとうない！……まだ、生きていたい！」

事情を知らなければまったく理解できない弱音だ。だが理解できているオレでもこの子が感じている恐怖はわからない。

オレに出来るのはこの子の本命を受け止めてやることぐらいだ。闇の書の実態を知っていなければ魔力を差し出すということも出来たが、それをしてしまえば、はやては死ぬ。

そのまま少しして、泣き疲れたのか、はやてはぐっすりと眠ってしまった。外を見てみると、もう日が落ちかけている。

はやてをそつとベッドに寝かせて布団を掛けてやり、またな、と言ってオレは病室を後にした。そのまま家に帰るべきなのだろうが、オレは何故か屋上に向かった。今は少し一人になりたいのだ。

高町家には遅れると連絡を入れてあるから問題はないだろう。

「ヴェルフグリント……オレは、何が出来るんだろうな……最初は仮面の男に左目をやられたことが憎かったただけだが、今はそ

れがどうでも良く思う・・・オレは、はやての為に何をしてあげられるんだろっ」

オレは今まで何をしてきた？ただ左目をやられた報復をしようとしていただけだ。

正義のためなどという理由が欲しかったわけではないが、はやてのあの状態を知って自分がとても中途半端だと思える。

リップスに貰ったタバコ（もうタバコと認めた）に火を点け、呆然と空を眺める。

『マスター・・・ッ！マスター！！すぐにそこから・・・』

ヴェルフグリントの言葉の途中で、足元から発生した無数のバインドに体を拘束された。完全に油断していた。一人だけの今なら絶好のチャンスなのに。

だがそれだけではなく、同時に腹部に衝撃を感じる。バインドの発生と攻撃が同時だと？どうなっている。

「グッ！・・・ガア・・・」

「悪いな、今回は魔力でブーストされた拳だ。生身ではこの衝撃に耐え切れまい」

「中途半端な状態でも危険だ。こいつは力尽くでバインドを破るほどだ。完全に気絶させる」

良い所に拳を入れられたせいか意識が朦朧となり、視界が薄れてい

く。だが、その視界の中で確かに目に映った。

「キサ・・・マ・・・二人・・・」

オレに拳を叩き込んだのは予想通り仮面の男だった。しかし、その後ろのほうにもう一人、同じ姿をした人間が立っていた。つまり、”仮面の男は二人いた”のだ

「・・・うつ・・・く・・・そお・・・」

なんとか抵抗しようにも意識が薄れていくせいで力が入らず、演算も出来ない。薄れる視界が最後に映したのは、オレの顔面に向かって全力で振り下ろされる拳だった。

この時、オレは自分の行いを心の底から呪った。

あの時、はやての願い事を聞かずに早く帰っていれば。

この時、屋上などに行かず、無防備な状態を晒さなければ。

そうすれば、闇の書があんな形で完成を迎えることは無かったかもしれない。

第12話 残酷な真実（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

グレアムは止まりませんでした。なにがなんでも闇の書を封印します。

ちなみに、はやてが入院した病院とフィリスさんが働いている病院が同じなのは曖昧なんでしょうオリジナル設定です。

今回は多分闇の書完成？主人公、肝心な時に役に立ちません。

では、また次回。

第13話 覚醒の時、執務官の答え

Side Out

岩山の中に出来た天然の洞窟。中は複雑に入り組んでいて、小さなアリの巣を真横に広げたような道になっている。

その中でシノン・ガラードはただ一人で刀を振り、周りを囲む体格の大きい賊の男達を一人一人斬り裂いていく。

刀身が振るわれる度に血飛沫が飛び散り、斬られた者の悲鳴が洞窟内に響く。

目の中に確かな憎悪の色を宿したシノンは無言で刀を振るう。心の中で渦巻く激情とは反対に、振るわれた刀の切れ味と体捌きは今までの中で最高のものだった。

シミターを振り下ろそうとした男の腕を肘の部分から逆袈裟に斬り飛ばし、袈裟斬りでその男の体を肩から胃まで両断する。

そこから弾かれたように刀を右へ振るい、真後ろにいた男の首を両断する。さらに余った勢いで他の男の顔を斬り裂く。右手で刀を引き戻し、手首を捻ってくるりと刀を回して、さらに他の男の腹部へと突き刺す。

「がっ、ああああああ！！！！！！！」

「黙れ」

シノンは刀を腹部に突き刺したまま刀身を捻って横に倒し、一気に力を込めて刀を左に薙ぐ。肉はもちろん、脊椎骨まで両断された男は悲鳴を途切れさせて絶命した。

シノン以外に動く人間が無くなり、その場に静寂が落ちる。刀を振るって刀身に付いた血を払い、腰に差した鞘に刀を納めようとしたが、新たなに聞こえた足音を聞いて再び抜刀し、音が聞こえた方向に体を向ける。

「いやはや、その年で見事な腕前ですね……おかげで本来討伐をする私達が楽ですよ」

陽気な声で話しかけてきた男、ジェイド・カーティスの姿を見てシノンは今度こそ刀を鞘に納める。合理的な手段をベストに考えて動くこの男が最前線に立っているのだ、それはこの男が自分で安全だと判断した証だ。

「……何の用だ」

「一度も休憩に戻ってこなかったの、死んだのではないかと思いません」

「捨て駒にしても構わないと言ったのはオレ自身だ……そんな奴の死体をわざわざ見に来る必要があるのか？」

「善人とも言えませんが、これでも心はそこまで腐っていません……子供一人に我が国のゴミ掃除を丸投げするのは個人的に気に喰わないんですよ……しかし、来る途中で見ましたが、ただの賊程度に随分とお怒りのようですね」

「・・・・・・・・」

ジエイドが改めてシノンの全身を見てみると、その全身は3分の2が鮮血で染まっていた。

新調したマントのあちこちには血で水玉模様が描かれ、正面の割れ目から見える衣服、顔や長い銀髪などの全てが血で赤く染まっていた。

「半分以上は奴らの返り血でしょうが、それだけではないのでしょうか?」

「この程度の傷、直す必要も無い」

ジエイドの問いに短く答え、シノンは目の近くや頬に付いていた血を全てグローブ装備の手の甲で強引に拭う。だが、右頬と左側の頭部から新たな血が流れ、右脇腹から垂れた血が地面落ちる。

「はぁ・・・・・・・・わかりました。ですが、ここで引き返しては寝覚めが悪いので、私も同行させていただきます」

「・・・・・・・・なに?」

「そんな露骨に嫌そうな顔しないでください・・・・・・・・足手纏いにはなりませんよ、基本的にはあなたが前衛、私が後衛でどうですか?」

「・・・・・・・・わかった」

そう答えてシノンは刀を抜き、再び奥へと歩き出す。その後ろをジエイドが追いかける。

少し歩いてまた男達が待ち伏せていたが、即座にシノンが敵のド真ん中を目指して正面から突っ込んで相手を混乱させ、その混乱の隙にジェイドが一網打尽の上級詠唱術をぶち込むという、即席にしては非常に息が合った連携で全滅させた。

だが、まだ生きている奴がいたらしく、奥へと必死に走っていく人影が見えた。シノンは投擲用のナイフを左手に持ち、それを投げようとすがジェイドに腕を掴まれて阻まれる。

「少し泳がせてみましょう・・・親玉の所に案内してくれるかもしれません」

シノンはその言葉に無言で納得し、走り出して逃げた男を追い始めた。

「一つ聞いてもいいですか・・・あなたは、あの賊達をただ殺したいと思ったから、あの時私にこんな頼みを？」

「・・・かもしれない。けど多分、オレは知りたいんだ・・・なぜあの人達が殺されなきゃならなかったのか」

「・・・そうですね」

その会話を最後に、二人は無言で洞窟の中を走り続けた。

「……また、あの頃の夢か」

「起きたかね……どうやら睡眠魔法も限界のようだ」

開けた視界が景色を認識し、上半身が何かにグルグル巻きにされ、拘束されていると気付く。どうやら椅子に座らせられているようだ。薄暗い明かりが差す部屋の中、声がしたほうに目を向けると、そこにいたのはソファアに座りながらオレを横目で見るグラム提督。先程の発言から脳内で高速に答えを叩き出した。

「なるほど……そういうことが、クソが……一つ聞かせろ、あれから何日経った」

「私は現在過労で休んでいることになってるので本局の外に出ていないが、恐らく今日の地球はクリスマスイブだよ……あと、この部屋には念話妨害が働いているから助けは呼べないよ」

「2、3日つてところか……どうせオレの行方は自分の使い魔に探させるって報告で誤魔化してるんだろ。そうすればあの二人はユーノの手伝いから解放され、本来の目的の為に自由に動ける」

アリアさんとの不自然な会話を思い出せば、こいつの憎悪の対象が闇の書であることはわかる。二人の仮面の男……いや、アリアさんとロツテさんの二人も、この男も、誤魔化したのは憎悪だけじゃなかったわけか。

ヴェルフグrintは没収されている。外部と連絡は取れない。オレ自身は上半身をバインドで完全に拘束されているので迂闊に動けな

い。聞いた話じゃこの男もそれなりの実力を持った魔導師らしいし、魔力弾を後頭部に数発撃ち込まれば再び気絶だ。

「……心配しなくとも私はキミを殺すつもりは無いよ」

「どの口がほざいてんだ？てめえの使い魔がオレに何したか思い出せ、タコが」

「そうだったな……だが本当だ。キミをここに拘束できた時点で、計画の成功は決まった」

グレアムがそう言うと、壁に映像が映し出される。映っているのは何処かの屋上で、なのはとフェイトの二人、ザフィーラを抜いた守護騎士3人がバインドで体を拘束されている。その上空には姿を誤魔化して一同を見下ろす使い魔の二人。

「どういうことだ……何故なのはとフェイトだけでなく守護騎士まで行動不能にする」

「不足分のページは不要になった守護騎士が自ら命を差し出して確保するんだよ、これまでも何度かそういうことがあった」

二人の内一人（多分ロット）が闇の書を取り出し、守護騎士3人のリンカーコアを蒐集する。だがその蒐集はなのはの時と違い、根元までに至る全ての魔力を取り込んでいく。全てを吸い尽くされ、シグナムとシャマルの体は粒子体となって消滅した。

そこに、蒐集を行うロットが目掛けてザフィーラが憤怒の形相で拳を突き出す。だが、残酷なことに渾身の拳は障壁に阻まれ届かない。

拳を通して腕から血が吹き出し、リンカーコアから魔力が喰われるが、ザフィーラは止まらない。たとえ刺し違えても目の前の敵を殺す勢いだ。しかし拳は届かず、力が抜け切ったその身は屋上に墜落した。

自身から生み出した守護騎士の全てを喰らい、闇の書は強い紫色の光を放った。恐らく、完成を迎えたのだろう。

使い魔の二人はバインドで拘束されているのはとフェイトを屋上から少し離れた上空に運び、青い円錐状のケージに閉じ込める。複数のバインドとあのケージ、レイジングハートとバルディッシュの協力があっても脱出には数分掛かるだろう。

二人の拘束を終えた使い魔二人はその姿をなのはとフェイトに変え、屋上に大きな魔法陣を展開した。その数秒後、魔法陣の中心にはやてが姿を現した。

「はやて・・・！」

状況が理解できず、目の前に倒れているヴィータとザフィーラの姿に涙を流している。すると、使い魔二人は笑みを浮かべながらヴィータとザフィーラを破壊した。

顔が絶望の色に染まり、はやてが天に向かって絶叫する。まるでこの世の全てを呪殺せんばかりの悲しみが込められているようだ。

はやての近くに闇の書が降り立ち、白色のベルカ式魔法陣が広がるが、それは黒紫へ色を変えてはやての体を包む。その光は一瞬で収縮したが、そこにいたのは、はやてとまったく異なる女性だった。

腰まで届くほどの銀色の髪、曇りの無い赤い瞳、成人のそれである肉体の背中からは一對の黒い翼を生やしている。もはや何処にもはやての面影は無い。

「覚醒したか・・・キミが彼女の正体に気付いたようなのでね、アースラへ報告する前にロツテ達にキミを拘束させたんだよ」

「なるほど、どうりで襲撃のタイミングが良かったわけだ・・・あんたはどれくらい前から知ってたんだよ」

「随分前から知っていたよ・・・私は、今は亡き彼女の父親の友人を偽って援助をしていたからね。永遠の眠りに付く前くらい、家族と一緒に幸せに過ごしてほしいと思ってね」

「ヴェルフグリントやオレが考えたのと同じ方法だな。大方、強力な氷結魔法で永遠に凍らせ、どこかの世界に封印か・・・ふざけんなよ偽善者が！！何が家族だ！！何が幸せに暮らしてほしいだ！！結局その両方を奪ったのは他でもないてめえだろうが！！」

らしくもなく、その場の感情だけで声を荒げる。今のオレの中ではこいつをぶん殴ってやりたいという怒りの感情が渦巻いている。だが、これまでにないほど強固なバインドのせいで体は動かない。

「だがそうするしかなかった。11年前に、私はこの手で友人であるクライド君・・・クロノの父親を殺した。だから私は誓った。憎き闇の書を封印し、悲劇を終わらせると！」

隠すことをやめたのか、瞳の中には憎悪の色しかない。

恐らくこいつは気付いていないだろう。自分が闇の書を封印しよう

としている理由が、これ以上の被害を出さないことではなく、単なる復讐に変わっているだけだと。

「キミもわかつているのではないか？これが被害を失くす為にも最善だと。地球に住む60億以上の命と少女一人の命、比べるまでも無い筈だ！……”誰も死なせない”残念だが、それでが誰も救えはしないよ、シノン君」

60億以上の命と一人の少女。そうさ、どちらが正しいかなど考えるまでもないことだ。オレの望みなど、大切な人の死に臆病になっただけの我侷だ。

けど、それでも……

「わかつてるさ！……けど嫌なんだよ！ガキだと、バカだと言われても良い！……理由を並べて誰かが殺されるのはもうたくさんだ！！」

オレは何度も見てきた。グラニデの為、世界樹の為、そんな理由を並べてナディ殺され、踏み躪られてきた人達。食料に困ったからと理不尽な理由で盗賊に村を襲われ、皆殺しにされた人達。

運が悪かった、仕方なかった。そう納得しようとしても出来ず、殺された人達から目を逸らし、ただナディや賊共を斬って敵を討った。そんなことを何度も繰り返して、自分を騙し続けた。けど、もうたくさんだ。

「……オレはあいつを、はやてを助ける。正しい間違いの問題じゃない、オレがそうしたいと思うから助けるんだ！」

「無理だよ、なぜならキミはここを動けない。キミは魔法以外の力を使えるそうだが、そのバインドはとて人1人の力で解除できるモノではない、それをすぐに解除できるのは術者のアリアだけだ」

「残念だったな。オレの手札はそれだけじゃない・・・ハアアアアア！！」

右手が蒼く発光し、一瞬強力なフラッシュを放つ。

全身が蛍火の光に包まれ、銀髪に蒼の色が混ざる。体内に巡る膨大な魔力と活力を感じ、上半身を通してその魔力全てをバインドに送る。

すると、濁流とも言えるほどの魔力に耐え切れず、バインドは内側から碎けていく。徐々に拘束が緩んでいくのを感じ、バインドを力尽くで碎く。

「なっ・・・！」

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

床に膝を着くと、右手の内側から芽生えたような真紅の宝石が目につく。

「なるほど、ジュエルシードか・・・しかし、今のキミがあのデバイス無しでその力を使うのは些か危険ではないかな？」

「ハア・・・ハア・・・ぐっ！！・・・ごはあ！！」

胸の部分から激痛が走り、喉元に込み上げてきたものを吐き出す。吐き出されたのは、オレ自身の血液だった。それによりジュエルシードは機能を停止し、右手の中に沈んでいく。

リンカーコアの後遺症により、オレの体は効率良く魔力を体外に放出できない。リブスの薬やヴァルスのカートリッジシステム、あれが無い状態でジュエルシードの力など使えば、当然オレの体は魔力に耐え切れず内側から壊れていく。

「薬もデバイスと同じく没収している。バインドを破壊できても、その体では私を倒すことは出来そうにないな」

ソファアールから立ち上がったグレラムの手にクロノのS2Uに似たストレンジデバイスが握られる。デバイスの先端に魔力スフィアが生成され、急いで体を起こそうとするが、全身に走る激痛で体が動いてくれない。

そんな時、部屋のドアが開かれ、その先から2発の魔力弾が放たれた。狙いはオレではなく、グレラム自身とその手に持つデバイス。

ドアの方を向くと、そこにいたのはクロノ・ハラオウンだった。

「……何故、私だとわかった」

「あのタイミングで、僕の父について情報を持ち出してきた時点で相手は11年前のあの事件を詳しく知っている人間、さらにシノンが管理局に非協力であると知っている。この二点を考えれば真つ先に出てくるのは母さんが提督くらいです」

「ならば……お前ならわかるだろう。こうするしかない……」

「これが最善の手段だと」

「違う、今提督の体に当たった魔力弾が僕の答えです。それに、現時点での闇の書の主は永久凍結を受けるような犯罪者じゃない。・ ・ ・ 良く考えたら簡単なことでした。だって、父さんだってこんなやり方を認めるわけがない」

そう言いながらクロノはオレに向かってヴェルフグリントと煙草を投げた。受け取ると同時にヴェルフグリントはセットアップを開始し、体内の余分な魔力をヴァルスに送ってくれた。

立ち上がりながらクロノの顔を見ると、あの病人のような顔とは対照的に何処か吹っ切れたような顔をしている。

「いいのか？」 管理局の敵”であるオレを助けて」

「キミが真正正銘の犯罪者になったら考えるさ。・ ・ ・ 僕は執務官だ。提督のやり方を認めるわけにはいかない」

「子供が。・ ・ ・ !揃いも揃って全員奇麗事ばかり。・ ・ ・ ぶほっ！」

怒りの表情を浮かべながら立ち上がったグレアムの顔面に右ストレートを叩き込む。ひとまずこいつへの礼はこれまでだ。今は他にやるべきことがある。

「オレはお前のやり方を間違っているとは思えない。だが、悲劇を繰り返さないと言って、実際にお前がやるうとしてるのはただの復讐だ。そして、その復讐に巻き込まれた犠牲者がはやてだった。オレは、はやてが殺されるのが気に入らないからお前の敵になる」

「ならば・・・ならばはどうしたら良かったんだ！？確かに私のしていることはただの復讐なのかもしれない！だがそれはキミだつて同じはずだ！個人的な感情で60億以上の命を危険に晒すキミは私と変わりはない！」

「否定はしねえよ・・・むしろオレは、ある意味じゃお前よりも酷い人間だ。だからオレはやり遂げてみせる。その道が悪だと言われても、あなたの願いを踏みにじっても、オレははやてを助ける」

「・・・ふつ、勝手にしたまえ、もう私に出来ることはない。デュランダルはアリアとロツテの手にある。あの子達が暴走まで逃げ切れれば、私の勝ちだ」

グレアムの言葉を聞き、オレとクロノは部屋を出る。入れ替わって武装した局員が部屋の中に入る。

オレとクロノは飛行魔法を使い、通路を猛スピードで移動する。目指す先はアースラだ。一刻も早くあの場に急がなくてはならないが、その前に、リンディさんに頼んでおいたアレを受け取らなければならぬ。

「シノン、恐らくロツテ達は覚醒した闇の書が暴走するまで、なのはとフェイトに時間稼ぎをさせていると思う。そして、僕が敵に回ったことをあの二人は知らない」

「味方に見せかけて捕まえる、か？執務官が随分と鬼畜な作戦考えるねえ・・・悪いがその作戦は少し変更だ。あの二人組みが急ごしらえの奇襲で捕まるとは思えん。お前は味方の振りをしてデュランダルとかいうのを奪え、その後オレが二人を相手にして行動不能にする」

「そのほうが時間的にも手っ取り早いか。しかし大丈夫なのか？あの二人だってプロだ、キミへの対策を考えているかもしれないぞ」

「関係ない。悪いが、あの二人相手に時間は掛けてられない」

転送ポートに辿り着き、数秒でアースラのブリッジに転送される。リンディさんは現場指揮の命令を出していたが、オレとクロノに気が付き、クルーの一人に代理を頼んでこっちに歩いてくる。

「シノン君、今まで一体何処に行ってたの!？」

「その辺の事情はたった今ヴェルフグリントが詳細データを送りました。現状は把握しています。リンディさん、頼んでおいたアレ、出来てますよね？」

「ハア・・・わかりました、詳しい事情は後ほどね。頼まれていた物はちゃんと出来ているわ・・・ただし、使うタイミングにはくれぐれも気をつけて・・・すぐにクロノ執務官とシノン・ガラード君の転送を！急いで！」

スタッフ一同が「はい!!」と答え、オレとクロノは急いで転送ポートに乗り込む。

「一体何を頼んだんだ？キミが管理局に頼むくらいだ、きっと重要な物なんだろうけど・・・」

「向こうに着けばすぐにわかるさ・・・作戦、ミスんじゃねえぞ？」

「わかってる。提督にあれだけの大見得を切ったんだ、絶対に成功させてみせる。もうこれ以上、僕や母さん、そして提督のような、”こんな筈じゃなかった未来”を進まなきゃならなくなった人達をもう生み出したりはしない。それが、今僕がやらなきゃいけないことだ」

こんな筈じゃなかった未来、か。オレの人生もそんな未来の一つだったのかな。

「クロノ、シノン君、なのはさん達を、はやくさん達を救ってあげて。転送ー!!」

転送の光が体を包み、すぐに結界に覆われた海鳴市の上空に姿を現す。

「さてと、せつかくのクリスマスイン聖夜なんだ……ふさわしく、みんな笑顔のハッピーエンドと行こうか」

『All right, my master!』

「フォルムセレクト……GO! シュナイダーッ!!」

第13話 覚醒の時、執務官の答え（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

遂に闇の書が完成を迎えました。けど肝心の主人公は椅子に芋虫の状態でした。

脱出には久々のジュエルシードを使い、完了後吐血しました。

守護騎士が蒐集される場面は変化ないので短縮しました。

あと、クロノ君はちゃんとした執務官になるようです。でも、原作と違い使い魔二人を捕まえてませんのでデュランダルは未所持。

グレアムさんが原作から想像つかないほど違うキャラになってしまいました。原作じゃ大きな声出してませんし。

リンデイさんに頼んだものは次回登場します。武器ではありません。

そして最後の台詞は……これがやりたかったあ!!!!!!

では、また次回。

第14話 ここに来ての腐れ縁（前書き）

全然関係無いんですが、TYPE・MOONのカーニバル・ファン
タズムが発売したんで見ました。

結構笑いましたねwww

では、どうぞ。

第14話 ここに来ての腐れ縁

Side Out

「保つかな？なのは達は・・・スクライアの子や使い魔も合流してみたんだけど」

「あの男、シノン・ガラードの使い魔もいる。暴走開始までは保つてほしいな」

リーゼ姉妹は未だ姿を変えて身を隠していた。姉妹の視線の先には覚醒と共に出現した女性が発動させた魔法、デアボリック・エミツシヨンが黒い球体を街中に生み出していた。

あそこには現在なのは、フェイト、ユーノ、アルフ、美音の5人がいる。このメンバーならあの程度で負けることは無いが、長期戦になると流石に分からない。

闇の書は完成し、あの女性、闇の書の管制人格が目覚めて破壊行動を開始した。だが、まだリーゼ姉妹が真に望む封印の時ではない。覚醒はしても暴走はまだ始まっていないのだ。

故に、この2人は暴走までの闇の書の相手をあの5人に任せた。

「デュランダルの準備も出来ている。シノン・ガラードも無力化することが出来た。あとは暴走の瞬間に闇の書を永久凍結させれば・・・」

(アリア、ロツテ、聞こえるか？クロノだ)

「ッ！！」

(落ち着いてくれ、僕は味方だ。2人やグレアム提督の事情も理解してる・・・それより大変だ。グレアム提督が身柄を拘束された)

(なっ！？マジかい、クロノ！)

(・・・こつちから父様に連絡することは禁止されてる。それに、父様が抑えられたつてことは、あの男も・・・)

(ああ、シノン・ガードが開放されて此処に来るのは時間の問題だ。あの男が邪魔に入ると厄介なことになる・・・一端合流しよう、ポイントは　だ。そこでデュランダルを受け取る)

(・・・わかった。最悪の場合、あの男は私とロツテが相手をするから・・・あなたは闇の書を)

そこで念話を中止し、姉妹は変身魔法を解除して元の姿に戻る。グレアムの身柄が拘束された時点で使い魔である自分達も共犯だと確定したようなものだ。今さら正体を偽る必要は無い。

「んじゃ、急ごうロツテ」

「あいよー！」

同時に空へと飛翔。2人が飛び立った先には、暗雲立ち込める空の下に広がる海があった。

S i d e クロノ

「とりあえず誘導は成功だ。疑っている様子は無かったし、あとはデュランダルを受け取る」

念話を終えた僕は再び空を移動開始、真横に開きっぱなしの通信ウインドには何かの作業に取り込んでいるシノンが映っている。

味方の振りをしてデュランダルと呼ばれるデバイスを受け取り、リーゼ達をシノンが行動不能にする作戦。シノンのアレンジが加わっているとはいえ、提案したのは僕だ。

師匠であるあの2人を騙すのは辛いし、酷いことだとわかっている。けど今は我慢だ。罵りは後で幾らでも受ける。

『了解だ・・・しかし、執務官は随分と演技がお上手なようで・・・本当にこの方法でいいのか？』

「・・・ああ、大丈夫だ・・・それより、闇の書の方は大丈夫なのか？あれを誘導するのはかなり難しいと思うが・・・」

転送が完了し、シノンはリーゼ達との合流ポイントを指定してきた。詳しく説明をしている暇はないというので詳細は知らないが、戦う前の重要な準備らしい。

不安に思っただけでエイミィに確認を取ってみたが、艦長も了承済みらしい。

誘導するのはリーゼ達だけでなく、闇の書やなのは達全員も含まれている。なのは達は連絡すれば何とかなるだろうが、闇の書を都合良く誘導できるとは思えない。

だが、ラーゼは作業を続けながら微笑を浮かべ……

『心配無用だ。美音は……あの子はちゃんと出来る子だよ』

そう言った。言葉通りの意味なら、あの美音という使い魔の少女が闇の書を誘導するということだ。守護騎士との戦闘の際にもほとんど実力を見せていないが、あの子に可能なのか？

S i d e 美音

なのはの家でお昼寝してたけど、病院で結界っていうのが発動したみたいだから来てみた。

途中で合流したアルフとユーノの話だと、闇の書っていうのが完成したみたい。

なんだか銀髪の女の人が見えるけど、あの人の目、とっても悲しそう。ううん、きっと悲しいんだ。無表情に見えるけど、心の中で泣いている。

シノンならどうするのかな？やっぱり助けてあげるのかな？

突然シノンがいなくなっちゃって今は少し寂しいけど、シノンは「

ちゃんと、なのは達の言うことを聞いて良い子にしてるよ？」って
言ってたから、今はなのは達を守らなきゃ！

と考えていたら、新しい結界が広がった。なんだか閉じ込められち
やっみたい。

美音達を狙ってるみたい……何も悪いことしてないのになあ
。

「それじゃあ、私、なのは、美音の3人が前衛、ユーノとアルフは
サポートをお願い……美音、大丈夫？」

「え？……うん、大丈夫！」

今はあの女の人を止めなきゃいけないみたい。シノンに稽古をつけ
てもらったから何となくわかるんだけど……あの女の人、きつ
と強い。負けはしないけど、勝てるかどうかはわからないや。

女の人が背中中の翼を広げた。多分だけど美音達を見つけたんだ。

シノンがいないけど……頑張らなきゃ！ね？ソウルゲイン。

『無論ですマスター。ですが……水を差すようで申し訳ありま
せん。たった今、姉上……ヴェルフグリントからメッセージが届
きました。シノン様からの伝言らしく、手段は問わないからあの女
性を指定した場所に誘導してくれ、と』

……え？

Side Out

「クロノ！」

「アリア、ロツテ、デュランダルは？」

「これだよ……はい」

合流したリーゼ姉妹がクロノに渡したのは、待機状態の白いカード型バイス。これこそが闇の書の永久凍結を可能にするデバイス、氷の杖デュランダルだ。

「セットアップ」

『OK, Boss. Start up.』

クロノの命令に従い、デュランダルがその姿を変える。S2Uより短かく、先端部分がスピアに似た形状をした杖だ。

「父様がそのデザインを考えたんだ。多分、あんたやクライド君の戦い方を元にしたんじゃないかな」

「そつか……」

今は亡きクロノの父親、クライド・ハラオウンは今のクロノとほとんど同じ戦闘スタイルだった。ストレージデバイスを使い、ミットチルダ式の魔法を主体とする遠中距離戦闘型。

グレアムはこのデバイスを作る時に、使う人間をクロノやクライドにと考えていたのだろうか。

そう考えると、クロノは今から自分のする行為をとて辛く思う。最初はシノンも気を使ったのか、自分が正面から叩きのめしてデュランダルを奪っても構わないと言ったが、クロノはそれを断った。これは自分がやらなければならないと。

しかし、改めて迷ってしまう。こんな方法で二人を騙していいのだろうか？

(……………いいわけがない)

「……………なあ、アリア、ロツテ……………僕は……………」

「やっぱり嘘を吐くのは辛い？」

俯き始めたクロノの顔が勢い良く持ち上がる。その先には呆れたように溜め息を吐くアリアと頭の後ろで腕を組み笑うロツテ。

「まさか……………けど……………どうして……………」

「あたしらあなたの師匠だよ？何年の付き合いだと思ってるのさ」

「まあ、あなたがそんな顔しなければ渡す気も起きなかったけどさ……………ついさっきだけど、父様との精神リンクを感じたんだ。父様は今……………本当は後悔してる。あたし達は父様の使い魔だから、父様が望むことはどんなことでもやる。だけど、今の父様はその望みを後悔してる……………だからさ、それはあなたにやるよ」

クロノの視線が右手に握られたデュランダルに移動する。

現存する中で闇の書の永久凍結を可能にする唯一つのデバイス。そして同時に、それはグレアムが心の中に秘めてきた11年間の憎しみの結晶でもある。

その11年間の憎しみを、今のグレアムは後悔している。シノンと話をして何かあったのかはわからないが、憎悪の感情が別の何かに変わったことは確かなのだろう。

私の勝ちだと言った時の顔はクロノには見えなかったが、あの時からグレアムの心には変化が起きていたのかもしれない。

「本当は、父様は誰かに止めて欲しかったのかもね……クライド君が死んでも、管理局は闇の書への解決法を本格的に考えなかった。だから父様は自分が闇の書を封印するって決意した……自分がやるしかないからって、八神はやての身の上を知っても計画をやめるわけにはいかなかった」

「本当ならやりたくない。だけど、やらなきゃまた大勢の人が死ぬ。父様は優しいから……あの憎しみの本当の意味は罪悪感を忘れることだったのかもね」

やめることは出来ない計画だった。だが、シノンの存在が加わったことでその計画は大きく狂い、今になってはもはや実行は不可能になった。デュランダルがクロノに渡ってしまったのだから当然だ。

「……僕もそう思いたいな。提督はとっても優しい人だから」

「大事に使えよ？デュランダルはあたしとアリアと父様、3人の血

と汗と涙の結晶なんだからさ」

「血は含まれてないでしょ……ところで、何で合流の場所をこんな場所にしたの？あたし達を相手にするなら、分断させやすい市街地の方が良いと思うけど」

騙して誘導することだけでなく、奇襲されることもすでに予想済みだったアリアは市街地の方向を親指で指す。市街地では、なのは達と闇の書の戦闘で起こった発光が見える。

「相変わらず見事なものだな。僕もそう思ったんだが……この場所を指定したのはシノンだから」

「げっ！もしかして、あたし達この場所であいつにボコられる流れか！？」

「……ま、まあ、自業自得とか因果応報って言ったらそれまでんだけど……肝心の彼が来てないね。意外に闇討ち狙いか？」

「……いや、もしかしたら一網打尽が狙いかもしれないぞ」

「「え？」」

だらだらと冷や汗を流すリーゼ姉妹。その隣にいるクロノは市街地の方向に目を向けていた。姉妹もそちらに目を向けてみると、蒼色の光が流星のような速度で接近していた。

よく見てみると、流星の正体は……全身に蒼色の炎を纏った美音だった。しかも驚くことに、右手で闇の書の首を掴んだまま直進

している。ちなみに表情は笑顔。

その後方には必死にそれを追いかけるのは達が見える。

「……あの子って、実はあんなに強かったの？」

「てか、あの子楽しそうに見えるんだけど……主よりやばくない？」

「本当にやってのけるとはな……シノン！お前の望んだ状況になったぞ！」

リーゼ姉妹が呆然とする中、クロノは通信を開いて大きめに声を出した。現時点で存在する勢力の全てが、今その場に集まったのだ。

S i d e シノン

「……了解っと」

クロノからの通信を聞き、立ち上がる。

オレは展開した重力場を足場にして海上に座り込んでいた。今のオレの格好は騎士甲冑を纏っているだけだ。今までずっと、ある作業を行っていた。

これは闇の書をどうにかする前に必ず必要なことだったのだ。だからこそ管理局の力と技術を借りたのだから。

「・・・さて、始めますか。エイミーさん、そっちの準備は？」

『万事オツケー！いつでも良いよ！！』

その答えを聞いて、オレは右手に持っていたそれを握り締める。手の平と同じ位の大きさをしているそれは、機械による加工が施されたボールだ。オレは今まで、ずっとこれに魔力を籠めていたのだ。

「その身に力を与えよ、シャープネス」

右腕全体にブリストを加えた強化を行う。そして重力場を強く踏み締め、投球ホームを作る。視線の先には暗雲立ち込める空。そこに向かつて・・・ボールを、投げる！！

元から持つ人並み外れた身体能力に強化魔法、さらに斥力による力もプラスしたことで、右手から解き放たれたボールは一瞬で空高く打ち上がった。

『お見事です』

「ありがと・・・エイミーさん、あとよろしく」

『了解了解！シノン君も急いで！』

アクセルフィンを両肩に展開し、ボールを追いかけるように急上昇する。その途中にも通信ウィンドからはエイミーさんの楽しそうな声が聞こえる。

『よっしゃあ！！おっぱじめるよ！！管理局のルールで言えば』 8

割黒のグレー” なほほ違法兵器、皆さん揃って無人世界に……
行つてらっしゃーい!!”

次の瞬間、空に打ち上げられたボールが強烈に発光し、紫色の空間を作り上げた。オレを含め、近くにいる全員がその空間に取り込まれる。

空間内は暴風が吹き荒れ、外部の空間はまったく見えない。

『……おいシノン！なんだこれは！？今エイミイが言ったのはどう意味だ！？』

「言つてた通りだよ。管理局のルールからしたら8割黒、つまりは違法な兵器だ。ギリギリ黒じゃないから大丈夫だろ」

『そうじゃない！無人世界に、という意味だ!!』

「この空間に入り込んだ全員を強制的に転移させんだよ、人がいない無人世界にな。そこなら戦闘による被害も考えなくていいし、もしアルカンシエルを使つても死ぬのは最悪オレ達だけだ」

オレが少し前からリンデイさんに頼んでおいたもの、それこそがこの”強制空間転移爆弾”だ。半径数キロ圏内に転移魔法の発動範囲として魔力球体を展開し、球体内の対象を空間ごと転移させる。効果を聞く限りは凄く聞こえるが、この兵器はかなり危険かつ効率が悪い。

まず、発動させるのに膨大な魔力が必要となる。魔力の自然回復速度が異常なオレでも、10分は魔力を籠め続けなければならぬのだ。オレはランクだけならSSクラスの魔力を持っているが、そん

な人間がほとんどの魔力を10分も籠め続けなければならないなど効率が悪すぎる。

次に、転移の対象選択が出来ないので使う場所とタイミングが難しい。範囲内に山があれば地形を丸ごと飲み込んでしまっし、範囲内に肉体が納まつていないとその部分だけしか転移しないなど、使い方によっては大量破壊兵器にもなりえる。

リンディさんも使用許可を得るにはかなり苦労したそうだが、その時持っていたファイルを見せたら全員すぐに了承してくれたのは・・・いや、考えるのやめよう。

とにかく、こうして闇の書と戦闘員全員を無人世界に移動させることが出来たわけだ。無人世界ならどれだけ暴れても人的な被害は限り無く最小限だ・・・例え暴走が起こってアルカンシエルを撃つても、それで死ぬのはオレ達だけだ。

万が一の事態に備えて転移爆弾はもう一つ用意しているが、そんな事態はなるべく遠慮したい。

『転移、終了します』

ヴェルフグリントの声を聞き、視界が開けてくる。岩山と荒野しかない、晴天が広がる場所だ。

闇の書に目を向けると、無表情で状況を確認している。あと美音は転移完了と同時に離れた。

「9対1、流石に分が悪いな」

そう呟いた女性の声にはわずかな感情があつた。何かに期待するような、同時に諦めたような、そんな気がした。なんだ？何を求めている。

ふと、女性の瞳がリーゼ姉妹に固定された。クロノを含め、3人は自然と身構える。

「……その感情、開放しろ」

「なに？うつ！あ、あああああああああ！！！！」

「アリア！？うう！うわあああああああ！！！！」

そう言つて女性が右手を突き出すと、リーゼ姉妹の体を黒い霧が包み始めた。その霧が出現すると同時に、オレの右手が反応するように発光する。まさか……あれは……。

（ラルヴァ！？……いや、あれは純粋な負だ。でも、これは……クロエやアニス達の時と同じ……）

二人の黒い霧が二人の体を完全に包み込み、瞬く間に人の形を作る。上から下まで衣服も全てが真っ黒の姿をしたそれはリーゼ姉妹とそっくりの姿をしていた。

やはり、あれはクロエ、ファラ、アニスの時と同じ負の具現化。心の中の負い目や傷を形にし、その世界に命として生まれる現象。

しかも今回はあれより性質が悪いな。まさか元の宿主の人間を取り込んで肉体を確保するとは……。

だが、何故負が具現化したのだろうか。あの3人の時はグラニデに溢れた負が彼女達の心の傷を刺激したからだ。今オレ達がいるこの世界には具現するほどの負は存在しない。何よりも、ここはグラニデではないのだから。

「貴様　　何故負を操れるっ！その力を何処で手に入れた！」

「　　お前はこの力を知っているのか？」

冷静さなど放り投げ、怒りを含んだ声で女性に答えを求めた。だが、女性は変わらず無表情で逆に質問を返してきた。

「これは蒐集した武装局員のリンカーコアから流れてきたものだ。その局員も、誰かにこれを植え付けられたようだったがな」

植え付けられただと？・・・まただ。プレシアの時と同じく、また”外部の何者かが事件に負を干渉させている”。あの時は論文、そして今回は蒐集された局員の体内。

（誰だ　　誰が裏から関わってる！！）

『『闇の書が憎い』』

『クライド君を殺した闇の書が　　』 『父様を苦しめた闇の書が

『それを邪魔をする人間が　　』 『何もしなかった管理局が

『全てが憎い！！』

リーゼ姉妹の影の音がオレの思考を打ち切る。隠すことの無い憎悪を込めたその声は、今この場にある万物に対しての呪詛にも思えた。グラニデの時と違い、生まれてきたあの影は徹底的な破壊衝動に満ちていた。

「・・・これで6対3、この程度なら充分だろう・・・ここならば結界を張る必要も、破壊力を抑える必要も無い」

銀髪の女性とリーゼ姉妹の影の3人が戦闘体勢に移る。それら3人の敵意はそれぞれオレ達の誰かに向けられている。

「ヤバイッ！！（美音！なのは達と一緒に闇の書を頼む！）」

念話を飛ばしてからの美音は一瞬で行動を始めた。全身から発生させた蒼炎を纏い、爆音を鳴らして移動する。二度目だというのに、その速度に反応できなかった闇の書は先程と同じ様に再び肉体の自由を奪われた。

それを確認する間もなく、オレはワームホールを展開して突入する。出現した先は影2人の目の前。

「予想外の事態になったが本来の計画通りだ。クロノ！なのは達を連れて美音の所へ行け！こっちの相手はオレがする！」

「わかった！一応言っていくが殺すんじゃないぞ！」

なのは達に視線で指示を飛ばし、美音が交戦を開始した方向に向かうクロノ。二人の影は不思議とそれを追いかけようとはしなかった。

『『またお前か』』

『お前がいたせいで』 『お前みたいなのがいたせいで』

『お前さえいなければ』 『計画は狂いはしなかった』

「それはどうだろうな オレがいなくとも貴様らの計画は途中で終わっていたかもしれないぞ？ 一つだけ言ってやる……あまり、なのは達を甘く見るな」

背中が発光し、剣を納める大きめのホルダーが装着される。続いて、虚空に6本の剣が出現し、全てがホルダーに納められる。

鍔元が半円の形になっている片刃の短剣が2本。刃の上部がソードブレイカーのような形になっている直剣が2本。片刃で、持ち手が刃に埋め込まれている形の直剣が1本。

最後に、突き出した右手の前に先端が二股のような形をした両刃の大剣が現れ、それを手に取る。頭部にはゴーグルへと形を変えたソフィアを装着する。

これがフォルム・シュナイダーの武装だ。右手に握られた大剣の内にはヴェルフグリントのコアが内蔵されており、他の剣全てにも簡易型だがA Iが仕込んである。強度はどれも折り紙着きだ。

「悪いなクロノ……前にも似たようなことはあったが、こういうのはある程度ぶちのめさねえと元には戻らねえんだよ」

『ですが、ちょうど良いと思えます。いかに改心して協力的になったのであろうと、やはりこの2人がマスターにしたことは許せそう

「ありません」

オレの代わりに怒りを露にしてくれる相棒。気のせいか、頭部に装着しているソフィアも僅かに振動して感情を表してくれている気がする。

「ありがとな・・・向こうには美音となのは達もいるが、なるべく早めに終わらせるとしよう・・・ヴァルス!!」

両腕の腕輪からそれぞれ1回の撃鉄音。得られた魔力は全て右手の大剣に纏わせる。

リーゼ姉妹が動き出した。ロットテが前に体を乗り出し、アリアは後方に下がる。片方は拳に魔力とは異なる黒い霧を纏わせ、片方は暗黒に染まった魔法陣を足元に広げた。

「はあっ!!」

突き出された拳に右手に握った大剣を叩きつける。金属がぶつかり合うような衝突音が響いて四方に火花が飛び散る。

その衝突音を合図にして、もはや腐れ縁とも言える負との対決が始まった。

第14話 ここに来ての腐れ縁（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

地球が大変なことになってしまいかもしれないので、場所を強制的に変更しました。

強制空間転移爆弾とかは完全にオリジナルです。発動時のイメージはネギまの強制時間跳躍弾みたいな感じかな？

リーゼ姉妹の変化は負からモンスターが出てきたんなら、負が宿主体に乗っ取ってるのもありかな？と思ひまして。

あと、アインスがリーゼ姉妹の負を刺激した時の台詞がオーズの力ザリみたいになってしまった。

では、また次回。

外伝4 来訪者の異なる未来（前書き）

なんかカーニバル・ファンタズムを見てたら色々繋がって書いてしまいました。

しかもヒドイ出来になってしまった。

もし、世界樹がシノンを別世界に送らず、月面の聖杯戦争に参加させたら？って話です。

では、どうぞ（？）

外伝4 来訪者の異なる未来

これは来訪者の異なる未来・・・

・

世界樹が来訪者に新たな命を与えた未来ではない、
“if”のお話・・・

来訪者が向かった新たな戦場。その名は・・・

“聖杯戦争”

Side シノン

ゲーデに左脇腹を抉られ、右腕を握り潰され、致死レベルの血を流した。

カノンノの腕が体に触れているという感覚さえも消え去り、完全に視界が闇に覆われた。絶命することは分かりきっていたので、その闇に恐怖は無い。数秒もすれば意識もこの世から消え去るはずだ。

・・・そのはずが、一分以上待っても意識は消えてくれない。少し苛立ちを感じ、もう開くことのない瞼を開けてみる。

すると、オレの眼球が映したのはお花畑でも三途の川でもなく、真つ暗な空間の中に浮かんでいるステンドグラスのような地面だった。

「・・・はあ？」

え？なに？どうなってんの？天国って実は芸術を愛する場所だったの？つか本当に此処って天国か？体の感覚はちゃんと機能してるし、記憶だつてあるんだけど。

「ぐっ！……」

あれ？なんだ？頭の中になにかの知識が流れてくる。

聖杯戦争、魔術、月、電腦空間、セラフ、フォトニック結晶、ムーンセル、マスター、サーヴァントなど……知識がぶち込まれ、強制的に脳が現状を理解する。

「痛つてえな……ああ、そうかい。了解了解、理解したよ……」

「

つまりあれだ。オレは魔術師達ウィザードが殺し合う戦争の参加者に選ばれたわけか。しかもマスター側ではなく、サーヴァント側だ。

なるほど、まだ完全に死なせてくれないってか。クソつたれが。

見えない何かに対して吐き捨てるように呟き、先程からこちらを見ている少女の下へ歩く。こちらを見上げる少女は見えない傷を負っているのか地面にへたり込んでいても辛そうだ。

「さてと……殺されて早々、お呼ばれに預かったんだけど……キミがオレのマスターかな？」

「え、えと……はい……そうです……」

「承知した。お互い望んでこの場に來たわけではないらしいが・・・
・キミの願いと、この命が尽きるまで、共に戦うことを誓おう」

手を差し延べて少女を立ち上がらせる。そして手を放した途端に少女の手が赤く光り、3つの模様を合わせた紋章が浮かび上がる。

「それは令呪。サーヴァントの主になった証だ。絶対命令を3回まで下せるものだが、使い所には注意してくれ。それが全て失われるとキミは死ぬことになる」

本当に何も分からないのか、おそろおそろ頷く少女。

だがすぐに後ろから聞こえた物音を聞いて勢い良く振り返り、オレの背中に隠れた。前を向くと、そこには全身に血管のような赤い模様を刻んだ人形が立っていた。なるほど、これが初試験の相手か。

「大丈夫だ。そこで待っていてくれ、すぐに終わらせるから」

前に踏み出し、改めて自分の姿を見る。この命を失ったあの瞬間と同じ格好、同じ容姿、そして腰に差されたオレだけの武器である黒い長刀。日本刀と同じデザインのグレー色の柄を握って抜き放つ。

外気に出された刀の刀身は雪のように白く、波紋は黒い。ちなみに鞘は全体に彫刻が浮き出て、色は薄めの白が混ざった黒色、さらに先端に取り付けられたサファイアが強く輝いている。

オレに身勝手な生を押し付けた世界樹が唯一、オレに与えたもの。世界樹の根元を守っていたあの男を倒して貰い受けたオレだけの武器。レディアント、霊剣プリミティブカオス。

「……まあいいさ、今まで殺しばつかの人生だったんだ……」
走り出した人形が右腕を突き出した。後ろにいるマスターが声を上げるが、それはすぐに途切れる。

だらりと下げていた長刀を左逆袈裟に撫でるように振るい、人形の右腕を綺麗に両断する。続いて地面スレスレに振るわれた右薙ぎの斬撃が人形の両足を膝元から断つ。

「……たった一人の少女を守るといっても、悪くないか……
魔皇刃！！」

頭上に高く振り上げた長刀を叩き付けるように振り下ろす。闘気が爆発を起こし、人形は真つ二つへと割れた次の瞬間に粉々になった。というか威力が低いな。本来なら今ので粉々ではなく消し炭にするはずだったんだが。

動きもいつもより鈍い気がするし……ふむ、どうやらマスターの実力に合わせて制限が付けられているようだな。まあ、本来の力は出せないが、中級までの術技は使えるみたいだし何とかなるだろ。

とりあえず今は……オレの隣まで歩いてはったり倒れてしまったマスターをどうするかだ。どうしよう？オレ、システム面はわかっているけど、生活面のことはサッパリなただけだ。

最後のマスターが“セイバー”のサーヴァントを召喚し、128人のマスターとサーヴァントは今此処に揃った。

この中で勝ち残れるのは“一人”のみ。

たとえ相手が憎かろうと、愛しかろうと、必ずその者とは殺し合わねばならない。

無慈悲でありシンプルなこの戦争は、今始まった。

「起きたかい？マスター」

「え？あ、はい……あの、私、よしみ 佳美、はるか 遙です。あなたは……」

「基本的にはセイバーって呼んでもらった方が良いんだろっけど……どうせオレの真名なんて誰も知らないだろし……シノン・ガラードだ。好きに呼んでくれ、ハルカ」

「えっと……じゃあ、シノンさんで……」

聖杯戦争の全容すら理解できていない少女、遙は来訪者と共にマスターへの道を歩いていく。

その存在の情報がまったく無いサーヴァントと記憶を失い自身が何

者なのかわからないマスター。

何処か似ているこの二人組みは、次第に聖杯戦争の全貌を目にしていく。

頂上の力を有して戦う英霊。敗北したものには逃れられない絶対の死が訪れるシステム。

遙は迷いながらも、シノンと共に戦い続けてゆく。

第一回戦。対戦者、間桐慎二

「う、嘘だ。僕のライダー……エル・ドラゴの宝具に耐えるなんて……」

「……あんたほんとに何者だい？その武器に見たことの術や技、仕舞いには魔術であたしの艦隊攻撃を防ぐ盾を作るなんて」

「大したことない。魔術と言ってもこれ以外には殆ど使えん。それに多分、オレは、勇者を庇って死んで、そのお零れで英霊になっただけの脇役だよ……」

第二回戦。対戦者、ダン・ブラックモア

「覚悟はいいかね？セイバーのマスターよ」

「・・・はい、決心しました。私達は、あなた達を倒します」

「まったく・・・毒殺主義なアーチャーの俺にセイバーと正面から戦えなんてキツ過ぎだつての!？」

「アーリーナではマスターに狙撃を許してしまったが、今なら標的はオレ一人だ。今のオレではその毒は直せん、オレがお前を斬るか、その毒がオレを殺すか、どちらが先だろうな!ロビンフッド!」

第三回戦。 対戦者、ありす

「お兄ちゃんはアリスと同じだけど。ありすやお姉ちゃんとも少し似てるね。だって、自分がここにるのが不思議って顔してるもん」

「そうね、ありす。彼は本当なら此処にいなかったのかもしれないわ」

「否定は出来んな。過去に少し食い違いが起これば、高い確率でオレは生み出されなかった」

「え?シノンさん・・・生み出されなかったって・・・」

「ふっ・・・だが、オレは今此処にいる。悪いが、お前の夢は此処で終わりだ。ナーサリーライム」

第3回戦終了。 残りのマスターは、32人。

この時を引き金に、戦いは加速する。

【CLASS】セイバー

【マスター】佳美よしみ 遙はるか

【真名】シノン・ガロード

【性別】男性

【身長・体重】185cm・60kg

【属性】秩序・中庸

【ステータス】

(初期)筋力D 耐久C 敏捷C 魔力D 幸運B

(現在)筋力B 耐久B 敏捷B 魔力C 幸運B

(全盛期)筋力A 耐久A++ 敏捷A 魔力EX 幸運A

【クラススキル】

・対魔力：D

一工程による魔術を無効化する。効果としては魔除けの護符程度と、セイバーのランクではあり得ない低さ。

本来ならA、最低限Bランクの対魔力スキルなのだが、マスターの実力不足によって召喚時にランクが格段に落ちている。

・騎乗：B

乗り物の概念があるものは一通り乗りこなすことが出来る。ただし、幻想種（魔獣・聖獣）を乗りこなすことはできない。

【保有スキル】

・魔術：C

彼が生前に教えてもらった魔術。彼の持つ根源の属性と魔力量から充分に強力な力となるのだが、戦闘では殆ど魔術を使用しないためランクが下がっている。

・心眼（真）：A

修行・鍛錬によって極限に磨き上げられた戦闘を有利に進めるための洞察力。Aランクにもなると、時には未来予知に近い能力を発揮する。

・戦闘続行：A

瀕死の状態でも戦闘を続行するスキル。何度か臨死体験を重ねていく内にAランクまで上り詰めた。しかも、その副産物として耐久のランクも上がっている。

・仕切り直し：A

戦闘から離脱する能力。特に集団（最大4人）での逃走時は時間を掛ければ確実に逃げ切れる。

・神性：C（EX）

神靈適の高さ。高ければ高いほど、神との交わりが深いことをしめしている。一つの世界を作ることさえ出来る世界樹から生み出された人工生命体なので、本来なら最上級の神靈適正を持っている。だが彼自身に自覚が無く、世界樹を少なからず憎んでいるのでランクが落ちている。

よく考えれば、出身の流れから彼はある意味で真祖に近い高位存在なのだ。

【宝具】

・『レディアント・靈剣プリミティブカオス』

ランク：E〜A++

種別：対人宝具

世界樹が生み出した武具。名前の意味は「太古の混沌」。本来ならレディアントはディセンドーが使用する武具のだが、世界樹はシン専用レディアントを作り、ニアタを通じて試練を与えた。

試練の内容は、世界樹の根元で待ち受ける者に自身を認めさせること。詳細は省くが、戻ってきたシンは瀕死に近い重傷で5日間生死を彷徨った。

シンの発揮する闘気や殺意、簡単に言えば意志の強さに比例して破壊力や切れ味を増幅していく。故に、宝具のランクはその時々で

変化する。

・恵みの右腕
ハンズ・オブ・プレス

ランク：EX

種別：対人宝具

ゲーテによって潰された右腕の代わりとして世界樹が与えた新たな右腕。神経も通っていて骨も皮膚もあるが、感覚が伝わらない。シノンが言うには、高密度に圧縮されたマナで作られた義手、らしい。

シノンの任意によって、全体的な性能をブーストできる。本人の感覚では2〜3倍ほどの違いがあるらしい。

ちなみにブーストの対象には秘奥義も含まれており、ブーストを加えたビツクバンの破壊力はラニが令呪追加で自爆に使用した第五真キーテ説要素を越える。爆発の規模を簡単に言えば、決戦場やアリーナをライト含めて学園すら吹き飛ばせるほど。

外伝4 来訪者の異なる未来（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

ほとんど文章無しで台詞だけというヒドイ状態になってしまいました。

本来のシノンのステータスは何処に出しても恥ずかしくないものになりました。自分でも何このチート？と思います。

一応このストーリーを書く気はありません。精々余裕が出来たら（たぶん出来やしないだろうけど）決戦日の戦闘だけ書くか？程度です。

では、また次回。

第15話 来訪者の決意（前書き）

お久しぶりです。更新滅茶苦茶遅くなってしまいました。

では、ごきげん。

第15話 来訪者の決意

Side Out

ロツテの拳とシノンの大剣が衝突し火花が飛び散ったが、拮抗は一瞬だった。

ポオン！！と爆発に似た音と共にロツテが後方に吹き飛ぶ。別に大したことではない。シノン自身が元から桁外れの膂力を持っているのだ。それにカートリッジ2発分の強化を加えれば単純な破壊力だけでも凄まじいレベルになる。

ロツテが吹き飛ぶと同時にシノン目掛けて無数の黒い魔力弾が襲い掛かった。恐らくアリアの放ったのだろう。

ざっと見ただけでも4、50発に届く数の魔力弾が降り注ぐが、シノンはその場を動かさず左手を突き出し目の前に斥力場を展開して全て防ぐ。

だが、防御中のシノンの背後に吹き飛ばされたロツテが黒い霧を放出しながら転移したように現れ、先程よりも濃くなった黒い霧を纏う右アツパーを放つ。

『はあっ！！』

シノンは右手の大剣を後方に振るいロツテの拳を迎撃するが、衝突音が鳴ると同時に体を黒いバインドに拘束される。

ソフィアが即座に解析を始めるが、それが完了するよりも先にシノ

ンの死角、左後方に出現したアリアが手刀に纏わせた魔力刃を突き出す。

『何度も死角を突いた攻撃を行うとは、ふざけているのですか？』

くだらないものを見たようなヴェルフグリントの声。その声があった途端、ロツテが右肩、アリアが右脇腹を深く斬り裂かれ血が飛び散った。

突然の痛みと衝撃に驚き、アリアとロツテは体勢を崩して後方に仰け反る。その隙にソフィアが解析を終了させ、動けるようになったシノンは大剣を右肩に担ぐように構え、一瞬の溜めの後にロツテ目掛けて高速で振り下ろした。

「うう……らあ!!」

ロツテは咄嗟にシールドを展開し、防御を行う。だが、左右のヴァルスから撃鉄音と共にカートリッジが2発ロードされ、振り下ろした大剣は爆発的な二次加速を得た。シノンが編み出したオリジナルの魔力付加斬撃魔法、ブーステッド・ストライクだ。

初撃の数倍に匹敵する威力となった斬撃はシールドを一発でぶち抜く。そして、無防備となったロツテにシノンは圧縮された銀色の魔力を纏う左拳を叩き付けた。

「吹き……飛べええ!!」

押し当てた拳から白銀の閃光が輝き、一点に圧縮された魔力が純粹な衝撃波へと姿を変える。シノンが独自に編み出した零距离砲撃魔法、インパクト・バンカーだ。

『がつ！……ぶはあ！！』

破壊力だけなら砲撃魔法よりも遙かに上なので、イエーガのようなガントレット状態でなくても直撃を受けたロツテは地上目掛けて凄まじい速度で降下していった。

(リーゼ姉妹……ロツテが近接戦闘、アリアが術による後方支援。きっかりと役割を分けて戦う2人に負の力が加わったおかげで、能力が強化されてるわけか。拳や魔法はともかく、あの転移動が少し厄介か？あとさっきのアップパー、ありや臥龍空破だな。威力が魔力強化と比べ物にならない)

シノンは地上へ急降下していったロツテを見て相手の戦力を測っていたが、背後から思考を打ち切るように黒い火球が迫ってきた。その火球は明らかに魔力弾とは違うものだが、その火球は高速で飛び回る何かに全て迎撃され、爆発した。

「今度はファイヤーボールか……まあ、元々“外”が発生源だから使えてもおかしくないか」

『ですが、その程度では一生マスターに届くことはありません』

無傷で佇むシノンの傍に魔力弾を迎撃した物の正体が降り立ち、その場に浮遊する。

その正体は、シノンの背中のホルダーに収納されていた5本の剣だった。人の手によって振るわれる剣がひとりで浮遊し、主であるシノンを守るように待機している。

先程アリアとロツテを攻撃したのも、魔力弾を迎撃したのも全てこれの仕業なのだ。

「さてと……とりあえず、向こう（グラニデ）でやってた時と同じく、後方専門の術者から先に潰すか」

シノンが大剣の矛先をアリアに向ける。すると、シノンの周りを滞空していた5本の剣が弾かれたように動き出し、大剣の刀身を囲みながら回転する。その姿はドリルのような見た目を思わせるが、これはバレルを形作っているのだ。

『バレル安定、照準誤差修正完了……どうぞ』

「デモリツション・ブラスター……シユート！」

大剣の矛先から白銀色の魔力砲撃が放たれ、5本の剣で形成されたバレルを通過すると、高密度に圧縮された砲撃が超高速で放たれる。圧縮されているというのに、砲撃の大きさは簡単に見てもなのは、使うデイベインバスターと同等だった。

そんな砲撃を防ごうとは流石に思わず、アリアは全身から黒い霧を放出してその場から転移、シノンの砲撃を完全に回避する。

通り過ぎた砲撃を見てアリアはニヤリと笑みを浮かべてシノンの方向を見ようとした。だが、その直後に背後からドオオン！！と大きな爆発音が聞こえ、暴風のような爆風がアリアを襲った。

『……なっ!?!』

視線の先には、荒野の大地に出来上がった大きな黒煙。回避したと

はいえ、もし当たっていたら怪我や気絶などでは済まなかっただろう。

「余所見とは余裕だな」

気が付くと、シノンはアリアに急接近して大剣を振り上げていた。高火力を誇る砲撃魔法でさえ、シノンは陽動に使ったのだ。

『くっ……！』

咄嗟に展開したシールドで止められるが、シノンは左手に持ち手が刃に埋め込まれている形の直剣“弐式”を持ち、なんとそれを右手の大剣“壹式”に詰め込んで合体させた。

刃の大きさが増した大剣が再び振り下ろされると、障壁は脆くも砕け散った。剣を1本追加しただけだというのに、破壊力が比べ物にならない。

「それとそつちも……奇襲はもう通じないって理解しとけ」
背後に出現したロツテの拳をシノンは空いている左手で受け止め、そのまま引き寄せて鳩尾に斥力を加えた膝蹴りを打ち込む。

ロツテは寸前に右腕でガードするが、右腕から伝わる衝撃でダメーシを追った。

アリアとロツテは即座に転移で距離を取ろうとするが、それよりも先に全身を不可視の圧力に拘束された。シノンが高重力場を作り、前後から板挟みするように全身を圧迫しているのだ。

「今のお前等なら死ぬほど辛くはないだろうが、無理に動けば全身が潰れるぞ」

つまりアリアはもう動けない。その言葉は、傷一つ負わない圧倒的な勝利の確定だった。

剣を直接振るう近距離、飛び回る剣の中距離、砲撃魔法による遠距離、その全てをサポートする2つのデバイス。高水準のオールレンジ性能、これがフォルム・シュナイダーの戦闘形態。

その使い手であるシノンも重力操作や術技、異常なまでの身体能力、トドメでほぼ無制限に供給できるジュエルシード。

デバイスと使い手、互いが自分の性能に見合っているからこそこれ程の力が発揮されるのだ。

魔法を使用する戦闘で絶対的に不利になる後遺症を抱えているのに、クロノを圧倒する2人が負の力でブーストしても勝てない。それが今のシノンの実力だ。

『・・・何故だ・・・何故お前みたいなのがいるんだ!!お前だって私達と同じじゃないか!!』

『本当なら生まれることすら在り得ない・・・勝手な思いが形となくなってしまった化け物だ!!』

『それなのに何故お前と私達は違う!!』 『何故、私達の願いは届かない!!』

勝てない事実を否定するように2人が叫んだ。本来なら人の心の中

で眠り続けるだけの心の中の負の感情。意思を持ったその感情は宿主の心の声を代弁するように嘆き悲しむ。

「違うな、それはお前達の本当の願いじゃない。宿主の一部であるお前等ならわかってるだろう。取り込んだ自分の宿主が本当にやりたかったことを」

だが、シノンはその嘆きをあっさりとは否定した。それは違つと、心の底から本当に望んだのは憎しみではないと。

憎しみを撒き散らしていた2人がピタリと動きを止めた。何かに気付いたような、何かを言い当てられたように大人しくなった。やがて、真つ黒の両目から涙が零れ出し、再びシノンの顔を見た。

『ああ……そつか……そうだった』 『私達は、闇の書を憎むよりも……本当は……』

『苦しんでる父様を助けたかったんだ……』 『』

『そんな当たり前で大切な願いを……』 『いつの間にか……』
『忘れてたんだ』

その言葉を言ったのは宿主か、それとも負か。どちらにしても、リ―ゼ姉妹は自分達の本当の望みを思い出せたのだ。

シノンは大剣をホルダーに納め、右手をロツテに左手をアリアに突き出す。足元に術技による魔法陣が描かれ、そこから溢れ出る光が神秘的な美しさを感じさせる。

『世話を掛けたね』 『目のことも……謝って済むことじゃない』

けど、ごめん』

「まったくだな、その謝罪は宿主と話し合ってからにしろ。キツイのをお見舞いしてやるから歯を食いしばれ。断罪の光よ、穢れし魂に安息を……ジャツジメント！」

天から降り注いだ二本の極大の光柱。それはアリアとロッテの全身を包み、膨大な破壊力が負の穢れを吹き飛ばした。勿論この技は浄化ではなく、広範囲殲滅用の技だ。シノンのアレンジによって威力を収束しているので、2人の受けたダメージは相当なものだ。

2人の全身を包んでいた負が消し飛び、シノンの右手が輝くことでマナへの浄化を教える。

アリアとロッテは傷だらけの体で地面に落ちていくが、地面に落ちるよりも早く2人は魔法陣に包まれて姿を消した。恐らくアースラが回収したのだろう。

自分以外に誰もいなくなったその場所で、シノンは何も言わず煙草を啜えて火を付ける。

「これではつきりしたな……ラルヴァ、いや負がこっちに関わっているのは間違い無い」

煙を吐き出し、シノンは呟いた。その言葉にはプレシアの時のような怒りは無く、むしろ何かを決めたような強い覚悟を感じた。

本来ならあり得ない。平行世界の壁すら乗り越えてやって来たシノンの仇敵。それを誰かが利用しているのか、それとも自然に発生したか。

プレシアの話からすれば後者の可能性が大きいが、どちらにせよ、負の脅威はあると知った以上、シノンはこの件に関わらなければいけない。

世界樹に生み出された存在だから、などという理由ではない。アドリビトムの一員として、負がもたらした悲劇を知るものとして、シノンは負に立ち向かわなければならぬ。

「はははっ、上等だ。どこの誰だか知らないが、必ず見つけ出してやる。オレは一度決めたらしつこいぜ？覚悟しとけよ」

煙草を啜えながら空を見上げたシノンは笑みを浮かべてそう言った。言葉を発していないが2体のデバイスも自らの主と共に歩むと固く決意している。ここにはいないもう1人の家族も、きっと喜んで一緒に行くだろう。

『おや？・・・マスター、通信が来ました。繋がります』

『あ、繋がった！シノン君！！』

「なのは？闇の書はどうしたんだ、交戦中じゃなかったのか？」

『そうだったんだけど、突然あの女の人が急ぐように転移魔法で移動しちゃったの。それで、もしかしてシノン君の方に向かったんじゃないかなって思ったんだけど』

なのはが通信で状況を報告するが、シノンは半分ほどから聞こえていなかった。

何故なら、現在シノンの真上に突如現れた銀髪の女性が拳を振り上げていているからである。

状況を理解する時間を与える筈も無く、銀髪の女性は超スピードで拳を放つ。

ヴェルフグントですら察知できなかった完璧な奇襲だ。しかし、今のシノンは丸腰でも触れるのが難しいのだ。放たれた拳は、シノンが神速の反射神経で発生させた斥力場によって届かない。

その間にシノンの右手が後ろ腰のホルダーに伸び、収納した大剣を勢い良く抜き放つ。並列思考で他の剣に全方位からの攻撃を命じ、勢いを殺さずにシノンは大剣を振ろうと上を見た。視線の先には無表情の顔に僅かな驚愕の色を浮かべる銀髪の女性。

しかし、驚愕したのは女性だけではなかった。何故かシノンまでもが驚愕に目を見開き、風のように素早かった動きをピタリと止めた。

「?.....我が内に眠れ」

『マスター?どうしたのですかマスター!?!』

「あ、やべつ.....!」

その言葉の後にシノンの体が発光し始め、指先から徐々に体が無くなり始めた。

『ちよつ、シノン君!?!どうしたの、シノン君!?!』

「くそつ.....美音に伝えてくれ、“朱雀”までなら好きに使えつ

て！！そう言えばわか・・・」

言葉を言い終えるよりも先に、発光していたシノンの体が閃光のよ
うに輝き、遂にその場から完全に姿を消した。

その場には銀髪の女性1人だけとなり、音が止んで静かになった。
そんな沈黙の中、銀髪の女性の瞳から涙が流れ始めた。自分の敵を
1人無力化したというのに、何故か涙を流す。

「あの者なら・・・あの力を知るあの男ならばあるいは・・・
何を今更、無駄なことだ。どれだけ足掻こうと、所詮この悲劇は止
められない」

一瞬だけ何かを期待するような眼差しとなったが、すぐに絶望した
ような無表情へと戻る。

そして、遠方からこちらに近付く5つの反応を感じた女性は再び戦
闘態勢に映った。

第15話 来訪者の決意（後書き）

・ブーステッド・ストライク

インパクト・バンカーの応用で、カートリッジの魔力を圧縮して衝撃波にし、衝撃波で斬撃を急加速させて放つ斬撃魔法。威力はバンカーよりも上（イメージ：SAOのキリトが使うヴォーパル・ストライク）。

ご覧いただきありがとうございます。

申し訳ありません。試験のせいであつたく投稿が出来ませんでした。しかも間が1ヶ月つて……。

主人公は2対1でも負けません。最後にとつ捕まりましたが。

ただ、作者の文章力が足りないせいで主人公とデバイスの反則的スベックが表現できない。しかも全体的にグダグダな感じが消えない。
……orz

一応シユナイダーはオールレンジに対応できる戦闘形態にしました。便利なフォームです。

あと、キーワードを見た方は分かると思うのですが、ヒロイン決めました。まだ公開しませんが、次回あたりでわかるかと。

最後に一言……エクシリア、最ツ高だねエ！！

では、また次回。

第16話 ありえない相対（前書き）

ちくしょう！絶え間なく続く試験のせいで更新が遅くなる。

しかも今回短い……。

では、どうぞ。

第16話 ありえない相対

Side なのは

シノン君が消えた。

通信越しにそれを見た私は数秒間呆然としてしまった。だが、すぐに立ち直ってエイミイさんに通信を繋ぐ。

「エイミイさん!!」

『状況確認!・・・シノン君のバイタル、異常無しでまだ健在! 闇の書の内部空間に閉じ込められただけみたい。助ける方法はこっちで現在検討中!』

とりあえずまだ生きてることがわかって安堵の息が零れた。けど、私は今の状況が少しだけ信じられなかった。

闇の書さんは確かにとっても強かった。さっきまで私達が戦ってたけど、美音ちゃんがいなかったら少し危なかったかもしれないほどに。

だけど、それでも私は心の中でシノン君の方が強いと思った。

私に戦い方を教えてくれて、鍛えてくれたシノン君の強さは今まで何度も模擬戦をやった私がよく知っている。強くなった私とレイジングハートが挑んでも焦り一つ見せなかったし、勝つ度に私の欠点を指摘してくれた。

そんなシノン君が捕まっちゃうなんて、やっぱり信じられない。

「とりあえず、シノンの奴がまだ生きてるといふのはわかった。それなら多分あいつの心配はいらないうらう、放っておいても自分で何とかするかもしれないしな」

クロノ君の言葉にその場の全員が頷いた。どうやらシノン君の心配をしてる人はいないみたい。信用が厚いことの裏返しみたいなものだけど、少しシノン君がかわいそうな気がするなあ。

「あ、そうだ美音ちゃん。シノン君が消える寸前に“朱雀までなら好きに使え”って言ってたよ。言えば分かるって」

「そつか……うん、わかった。それだけ使えれば充分だよ、シノン」

私の伝言を聞いて美音ちゃんは1人納得し、両手に付けているデバイスを見詰めた。シノン君が好きに使えって言ったの、もしかしてデバイスのことなのかな？

『マスター、遠方にいる敵の魔力反応が増大しました。転移確認、来ます』

魔法陣が描かれ、強い光と一緒に闇の書さんが姿を表した。無表情に見えるけど、その両目からはまだ涙を流していた。

「我が主もあの男も、終わり無き夢を見ている。生と死の狭間の夢、それは永遠だ。お前達も、もう眠るといい」

「いつかは眠るよ。だけど、それは今じゃない。今はやるべきこと

をちゃんとやらなきゃ、納得なんて出来ないもん」

『もちろんですマスター。参りましょう、エクセリオンモードなら問題ありません。私とマスターならば必ず使えます』

「うん！レイジングハート、エクセリオンモード！ドライブ！」

『Ignition』

エイミーさんには、フレーム強化が終わるまでは使っちゃダメって言われたレイジングハートのフルドライブ。もしコントロールに失敗してレイジングハートが壊れちゃうのはとっても怖いけど、今躊躇したらずつと後悔しちゃう。

だから、今は進まなくちゃ。

カートリッジが1発ロードされ、レイジングハートが姿を変えてゆく。バスターモードの二股部分が横に広がり、ユニット全体の形を槍のように変える。それに合わせて持ち手の部分が延長し、全体の長さも長くなった。

これがレイジングハートのフルドライブ、エクセリオンモード。大丈夫、私達ならきつと扱える。

フェイトちゃんとバルディッシュもフルドライブ、ザンバーフォームを使ったみたいだ。いつもは斧か鎌の形をしてるバルディッシュが今は大きな大剣の形をしてる。

「そっか・・・まだ、抗うか」

「無駄だよ、闇の書さん。私達は絶対に諦めない。それに、もしノンがこの場にいたら多分あなたを叱ってるよ？何で決め付けるんだって、何で諦めるんだって、もし何度も失敗したって諦めちゃだめなんだよ」

その時、無表情だった闇の書さんが美音ちゃんの言葉に反応した。私達でもはっきりと分かるほどの怒りの表情を浮かべ、拳を強く握り締めている。その姿は何故か私には、とてもか弱く見えた。

「お前に……お前に分かるものか！！幾たびも主を死なせてしまった苦痛が、途絶えぬ輪廻から逃れられぬ孤独が！！」

「確かに私は主を死なせちゃった苦しみはわからないよ。だけど、1人ぼっちの辛さは知ってる。私もシノンと会うまで、ずっと1人ぼっちだったから。だからね、私も皆も、あなたを助けない。もう苦しむことなんて無いようにしてあげたい」

「それこそ無駄なことだ……暴走は私が拒んでも阻止できないのだから」

「違うよ。出来るか出来ないかじゃない、あなたとはやてがどうしたいかだよ！」

闇の書さんと美音ちゃんが同時に動き出した。美音ちゃんは両腕に青い炎を纏わせ、闇の書さんは拳に魔力を込める。2人の拳がぶつかり、衝撃波みたいな暴風が全体に広がる。

その衝突を引き金に、私達の戦いの第2ラウンドが始まった。

昼寝から目を覚ました時と同じ様な感覚で意識が覚醒し、瞼を持ち上げる。

「んっ……」

瞼を開いてみると、オレは真っ黒の空間の中にポツンと立っていた。全てが黒色で染まりきっているのにオレだけが自分の色を持って存在している。

『あ、マスター。お目覚めになりましたか……』

「ここは、闇の書の中か……?」

『はい。内部に取り込まれたようなのですが、マスターが気を失っていた数分間は何も起こっていません。自分から取り込んだというのに何もしないと、少し妙ですね』

確かに、こうしてオレを無力化出来たというのに何もしないとというのは少しおかしい。最低でも拘束して出られないようにするはずだ。なのに、オレの体には外傷一つない。

何をやるうと此処からは出られないってことか?それとも闇の書の方が不祥事を起こしたか。

体調を見る限り魔力を奪われたわけでもないようだが、問題は脱出だ。周りを見渡してみても直感的なものが普通には出られないと可

能性を否定する。

ワームホールを使えばあるいは、と思うがやめておこう。こんな今にも崩壊しそうな空間に直接干渉して空間が崩壊したら洒落にならない。使うとしても最終手段だ。

『妙と言えばマスター……闇の書の顔を見た時、何故動きを止められたのですか？バイタルを見る限り、驚いたというより呆然となさっていたようですが……』

「ん？……ああ、あれか……あれはな……」

続きの言葉が口に出せず、視線を泳がせて右手で髪を軽くかき乱す。オレのこんな様子を珍しいと思うヴェルフグリントは不思議そうに答えを待っている。

「……見惚れた」

『……は？』

バツが悪そうに言葉を放つ。ヴェルフグリントはオレの回答があまりにも予想外だったようで、言葉を失っていた。言った内容が内容だから仕方ないが、自分で自分が恥ずかしくなってくる。

だが、事実そうなのだ。距離が離れていた時はあまり気にならなかったが、近距離であの女の顔を見て不覚にも綺麗だと思ってしまうた。

「……すまん」

『い、いえいえ！少し驚きましたが、謝る必要はありません。私とソフィアも闇の書の転位を感知できなかったのですから』

振動して反応を示すソフィアとヴェルフグリントの言葉を聞いて、今更ながら我が相棒達の優しさに涙が流れそうだ。

『ですが、少し安心しました。初めてマスターが男性らしい反応をされましたので』

「そりゃあ、な……」

平穩とは程遠い波乱の日常を送ってきたが、オレだって男だ。女性にまったく興味が無いというわけではない。

近くで見たあの女性、無表情で機械的に見えるが、容姿はかなりの美人だった。オレと同じ銀髪や真紅の瞳などから大人の魅力を感じられたしな。自分で言うのもなんだが……オレの好みのタイプはあんな感じなのか？

まあ、例えそうだとしても難しいだろうな……初恋は実らないうってやつかねえ。あ、やばい、何か落ち込みそう。

「この話は一端終わりにしよう……今は此処からどうやって出るかだ」

『はい。ですが、此処は少し厄介ですね。魔法で作られた空間ならば破壊力の高い攻撃で破壊して出られるのですが、この場所は本当に曖昧な空間です。私とソフィアの二人掛かりでも闇の書のシステム内部なのか魔法空間なのか判別出来ませんし……』

魔法でも現実でもない空間。どちらかであれば脱出も容易だったのだが、どちらか分らない以上は下手に動けない。こんな不安定な空間なら恐らく距離の概念もないだろうし、飛んで移動しても恐らく無意味だ。

何もわからない、という理由だけで脱出の可能性は大きく削られるのだ。

「やっぱり一か八かワームホールで脱出するしかないか？けど、この空間見る限り成功率はかなり低いだろうし、マジで命賭けだよなあ」

一人呟きながら周りを見渡してみる。真っ黒で何も無い空間が何処までも広がっているだけだ。闇の書というより、闇そのものの内部つてのがしつくり来る。まるで……

「……負に取り込まれてるみたいだ」

「負、ですか？……マスター、その時はどうやって脱出したのですか？」

「ん？……いや、脱出というより、オレがやったのは掌握だよ。不快感に耐え切れなくなつて感情が爆発、気が付いたら負の中に自分の空間を作つてた」

昔一度だけ負に取り込まれ、こんな真っ黒の空間に閉じ込められたことがあった。

それで、閉じ込められてる内にその場所の不快感が耐え切れなくなつてオレは暴走、精神制御に抗うような感覚で負の空間を自分の物

にしてしまったのだ。おかげでオレは負を弾き出して脱出できた。

「もしかして……あの時と同じ様にやってみれば脱出できるかも……」

『やめておけ、あの時と今回では規模が違う。逆に飲み込まれるぞ』
突然、何も無いはずの空間で聞こえた声。オレもヴェルフグリントも言葉を発していない。つまりはオレ達以外の者が発した声だ。

その声に反応したように、真っ黒だった空間が変化し、空間の構築を変更していく。そして数秒後に完成したのは、夜の森の中だった。オレは腰のホルダーから式と合体させたままの壱式を抜き放ち、残り全ての剣を空中に浮遊させ全方位を警戒させる。ヴェルフグリントとソフィアはオレよりも早く行動を開始しており、周囲を警戒しながら臨戦態勢に入っている。

『先程と違って空間がとても安定しています。……いえ、これはむしろ固定ですね、空間情報が強固で解析すら出来ません。ワームホールでの脱出はまだ無理です……マスター？』

「ここは……まさか……」

気のせいではない。オレはこの場所を知ってる。忘れるわけがない……この場所は……

「そう、お前がグラニデに生まれ落ちた場所だ」

後ろから聞こえた声に反応して振り向く。気配を感じられなかった

というのに、オレの振り向く速度はいつもよりかなり遅い。

そして、振り向いた先にいたのは長身の男。漆黒のロングコートを着た上から下まで真っ黒の格好。腰には美しい装飾が描かれた黒色の長刀を携えている。

腰にまで届く程の銀髪は森の中に差す月光を浴びて輝きを放ち、蒼色の両目がオレを見ていた。

そう、そこにいたのは……グラニデで最後を迎えた、成人の姿のオレだったのだ。

「よう、」同類「

第16話 ありえない相対（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

はい、ご理解したかもしれませんが、ヒロインはリインフォース・アインスにしました。

というわけでアインスは死なせません。オリジナル設定の力でも何でも利用して絶対に生き延びていただきます。

作者自身ヒロインを増やす予定はあまり考えていません。もし、増えることになっても1人追加だけで抑えたいと思います。

あと、大人シノンの衣装は今のシノンの格好とほぼ同じです。

では、また次回。

第17話 書の内と外（前書き）

エクシリアのトロフィー、コンプリートしたああ!!

初めてのプラチナトロフィーがテイルズシリーズで良かったあゝ

では、どうぞ。

第17話 書の内と外

Side Out

「ナイトメア!!」

「青龍鱗!!」

黒紫色の砲撃魔法と圧縮された妖炎が直線状で激突し、数秒で大爆発を起こす。

それを放った美音と闇の書の管制人格は高速で肉薄し、互いに拳をぶつける。しかし、互角と思われた出力の差は勢いが増した美音の青炎によって傾き、管制人格は後方に吹き飛ばされる。

体勢を崩した所にユーノとアルフがバインドを放ち、上半身と両足を拘束する。

『Divine buster, extension.』 『Plasma smasher.』

「シュート!!」「ファイアー!!」

その隙を逃さず、前方と後方からなのはとフェイトの放った砲撃魔法が同時に襲い掛かる。だが、それほど簡単に直撃を許す相手ではない。

「盾よ……」

『Panzer Schild.』

管制人格は力尽くでバインドを引きちぎり、体勢を取り戻す。

そして、前後から迫る砲撃魔法に対して右手と左手を向け、三角形の魔法陣を展開して盾にする。両手での同時発動はかなり高位の技術だというのに、管制人格の顔には汗一つない。

しかし、身動きが取れなくなった管制人格の目の前に美音が移動し、妖炎を溜めた手の平を掌底のように打ち込んだ。美音の上空には無数の魔力光弾を従えるクロノ。

「白虎咬！！」

「ステインガブレード・エクスキューションシフト！！」

至近距離で爆発を受けて管制人格は再び後方に吹き飛ばされ、そこに追撃として100を超える魔力光弾が降り注ぐ。

爆煙が空中に漂うが、管制人格がスレイプニールを大きく羽ばたかせた風圧で吹き飛ばす。間違いなく直撃を受けていたはずなのに、その身には傷一つ無い。

先程からずっとこの調子だ。攻撃が当たっているのにダメージがまったくくない。アースラの解析結果では超速再生によるものではなく、単純な防御力のせいで攻撃が効いていないらしい。

「やはりダメか……」

『あの防御力を抜いてダメージを与えるなら……なのはちゃん

のスターライト・ブレイカーを直撃させるしかないかもね』

「けど、あいつはチャージの時間許すほど甘くはないよ……」
クロノとエイミーの会話にアルフが割り込む。

確かにあの反則的な防御力を貫ける可能性が一番高いのは現状でなのはスターライト・ブレイカーである。しかし、蒐集した全ての魔法を使用して近接戦闘ではザンバーフォームのフェイトと互角の管制人格をチャージの時間まで足止めするととなると難しい。

単純な防御力だけでほぼ無敵状態なのだ。真っ直ぐ突っ込んできた足止めする手段など無い。

「刃以て、血に染めよ。穿て、ブラッディダガー」

『Blutiger Dolch』

管制人格の言葉に従い出現したのは、その名の通り血の色をした鋼の短剣。数えなくても軽く20発はある。その剣は突如姿を消し、次の瞬間にはなのは、フェイト、クロノの3人の目の前に数を分けられて出現した。

3人が爆煙に包まれるが、直撃の寸前にデバイスが自己判断でプロテクションを展開しダメージを抑えることが出来た。

管制人格は再びブラッディダガーを展開、その数21。視認するのが困難な程の速度で放たれた短剣の照準は、全て美音に定められていた。美音は瞬時にそれを理解しその場から急上昇する。

しかし、短剣の全ては誘導弾らしく、同じく急上昇して美音を追撃する。美音は上昇しながら上半身を勢い良く後ろに倒して頭を地面に向けるような体勢になる。

「シエルスローー!!」

振るわれた右手から妖炎が投剣のような形で放たれ、散弾銃のような弾幕が短剣を全て迎撃する。逆の左手には闘気が集まり、無色の砲弾が放たれる。

「玄武剛弾!!」

一瞬で音速に匹敵する速度となった砲弾は大気を貫き、管制人格の頭上から襲い掛かる。

だが、砲弾より先に背後からフェイトがソニックムーブで接近しザンバーを横薙ぎに振るう。

管制人格は冷静に両手に魔力を纏わせ、右拳で闘気で作られた無色の砲弾をアツパーのように殴って相殺し、左手の甲でザンバーの刀身を受け止める。

砲弾はその場で効果を失い、全方位に強い風を撒き散らした。至近距離で風を受けたフェイトは後方へと下がる。そこで全員の動きが一端止まり、睨み合うように様子を伺う。

「もう眠れ……私に勝てぬとは既に理解しただろう」

「いや、まだまだ。体力も魔力もまだある……僕達はそう簡単には折れやしない」

「無駄なことだ。先程取り込んだあの男ならば私を殺せたかもしれないが……それでも、結果的には闇の書の暴走を止めることなど出来はしないが……ぐうっ!!」

突然、無表情の管制人格が苦痛の色を浮かべて胸を押さえた。なのは達から見てもその痛みはかなりのものだとして理解できるほどだ。

「ば、かなっ……幻覚魔法で作られた存在が……自我を持つて空間を掌握するだっ……!」

管制人格の呟きの後、闇の書が紫色の強い光を放ち、雲一つ浮かんでいない空に映像を映した。映された景色は暗い森の中で、そこには2つの人影があつた。

その2人はどちらも長い銀髪を夜風で揺らし、蒼色の瞳で互いを見ていた。だが背丈は大きく違い、片方は成人の中でも長身の部類に入るほどだ。

よく見れば、背丈の低い方の顔立ちは長身の男のそれに良く似ている。

まあ、それはそうだろう。なぜならこの2人は……

「あれ？シノンが……2人いる……?」

まったくの同一人物なのだから。

闇の書内部

「懐かしいだろう？此処は世界樹に造られたオレ達の始まりの場所……あの時から、オレ達は世界の状況を見定める“目”として生き始めた」

過去を懐かしむ顔で成人のシノンは少年の方に歩き出し、向かい合うように正面に立った。

『まさかマスターのコピーとは、不愉快なものですね……マスター？』

「……違う、こいつは……」

「そう、コピーじゃない。真正銘オレはシノン・ガライドだ……お前はわからないだろうが、オレ達にとってはコイツが何よりの証拠だ」

そう言つて突き出されたのは鞘に美しい装飾が施された長刀。それはシノン・ガライド以外、どの世界のあらゆる人間も扱うことが出来ない唯一無二の武器。故に形だけであろうと魔法で真似ることができず、それを持っていられるのはシノン本人以外にありえない。

「だが、何故同じ場所に同じ人間が2人いる……しかもお前の姿は……」

「そう、お前の昔、いや本来の姿か……簡単だ。オレは幻覚魔法で闇の書の一部として生み出された。んで、いつの間にか自我を持ってな……そのまま内部からシステムを掌握して、こうし

て舞台を整えたってわけだ。それと、名前が同じではややこしいだろう。オレのことは……アナザーとでも呼べ」

言葉の意味が一瞬理解できず、少年のシノンとヴェルフグリントはその場で呆然とした。

目の前にいるもう1人の自分、アナザーは今、創造主である闇の書のシステムから自力で独立し、そのままシステムの一部を乗っ取ったと言ったのだ。

「……我ながら、無茶苦茶だな」

『今まで闇の書から何の干渉も無かったのは、システムの掌握に時間を掛けていたから、というわけですか。しかし、何故そのような準備を？生み出されたのなら、闇の書が狂っているのはあなたも理解したのでしょう』

「知ったことか。場所を作ったのはオレの目的を邪魔されないようにするためだ」

ヴェルフグリントの質問を一言で切り捨て、何の前触れもなくアナザーの姿がその場から消えた。

同時に大剣を握るシノンの右腕が右逆袈裟に振るわれ、次の瞬間には盛大な衝突音が響く。

「ほお、本気で打ち込んだんだがな……思っていたよりはやるみたいだな」

「斬りかかって来た奴の言葉とは思えんな……とりあえず訊

くが、何の真似だ？」

シノンの目の前には、いつの間にか抜き放った長刀を大剣と打ち合わせているアナザー。互いに片手で武器を打ち合わせながら話をしているが、2人の顔には余裕しかない。だが、隙あらば息の根を止めてやるうとチャンスを狙っているのもまた同じだ。

「自分自身と話をしてみたい、などという願望はない。だが、自分と戦ってみるといのは少し興味がある」

「オレは興味が無いし、迷惑極まりないな。ここでお前と戦って何の意味がある」

シノンが大剣に力を込めるが、すぐにアナザーの力も増して再び拮抗する。自身の状況の違いから心理的な余裕はアナザーの方が大きいようだ。

「そうだな・・・オレに勝てばお前の今したいことを手伝ってやるし外に出してやる。あの管制人格の女、助けたいんだろう？安心しろ、オレから見てもあれは良い女だ」

「何を安心しろってんだよ・・・しかしその条件、本当だろうか？」

「どっちの条件だ？」

「寝ぼけたこと聞くんじゃねえよ・・・あの女の救済と脱出、両方だ。」

その言葉が互いの承認となり、空間が軋む程の殺気が膨れ合う。 2

人の瞳が殺意と敵意に満たされ冷酷な眼差しが交差する。もはや2人が目に映しているのは殺すと決めた相手だ。

シノンにはマルチタスクにより待機していた4本の剣を操作。アナザーを串刺しにしようと左右2本ずつ迫る。

当然アナザーはその攻撃に気付き、長刀を後ろに引くと同時にバツクステップ。シノンはその動きをすでに予想しており、操作した剣を再び散開。その中から参式を左手に持ち替えた大剣に引き寄せ、合体させる。

「ヴァルス」

『Load Cartridge』

2発のカートリッジがロードされ、シノンは背狼で急加速する。アナザーは正面から迎え撃とうと長刀を構え、輝きを増した雪のような白い刀身が炎を纏う。

「ブーステッド……ストライクッ!!」

「魔王炎撃波!!」

爆発的な二次加速を得た大剣と炎を纏った長刀が衝突し、四方に拡散した膨大な衝撃波が森の木々を吹き飛ばす。衝突の反動で2人は後ろに吹き飛ばすが、地面に武器を突き刺して数メートルで急停止。

「今の魔法か……なるほど、こんぐらいやれるなら手加減の必要は無さそうだな」

「当たり前だ。体は縮んでるが、そう簡単には負けやしねえ……直撃するとは思わなかったが、今の術技、お前タイミングを調節してワザと打ち合わせただろう」

軽口を叩いているが、シノンの内心は言葉とは少し異なっていた。

（流石というべきか……気付かれてはいないみたいだけど、オレよりあいつの方が僅かに重いし速い。埋まりようのない身体能力の差ってやつか……）

チラリと視線を移すと、大剣を持つ左手が微かに震えていた。それが意味するのは、先程の衝突で僅かにシノンが破壊力負けしたということ。

僅かな焦りを胸に生み出し、シノンは再び動き出す。2人の距離は2、3歩あれば縮まる程、同時に動け出して数秒後に激突が再開された。

「……ふっ!!」

真っ直ぐに迫るシノンの首を狙ってアナザーの長刀が左薙ぎに振られる。シノンは長刀を大剣で受け止め、そのまま直進。顔の横で大量の火花を散らしながらアナザーの懐に入り込む。

カートリッジが2発ロードされ、シノンは左手でインパクト・バンカーを放つ。だが、アナザーは左手を握り締め、シノンの拳よりも先に足元の地面を殴った。

「魔神拳!!」

それは格闘系の術技で初級のもの。だが、初級の術技であろう使い手の熟練度によっては性能が大きく違う。

実際アナザーの放った拳は地面を震わせ、対戦車地雷が炸裂したかのように土砂の柱を生み出した。

「ぐっ!!……っ!!……」

土砂によって進行が遮られ、シノンの足が止まる。そして、そこを狙ってシノンの左側面から白い刀身が飛び出してきた。咄嗟に大剣を逆手に持ち替えて防ぐが、その刺突は先程とは少し違っていた。

(……っ!!……光っ!?!……)

刀身に纏われた僅かな光、それに気が付いたシノンは即座に距離を取ろうとするが、死角からの奇襲が反応を遅らせた。刀身の光は数秒で閃光と呼べるレベルまで大きくなり、破壊力が増していく刺突はシノンをその場から逃がさない。

「翔波……烈光閃!!」

閃光は遂にその名の通りの烈光と化し、シノンは膨大な閃光と熱線に飲み込まれた。

第17話 書の内と外（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

成人の方のシノンは単独で闇の書を掌握する程のバグキャラです。さらに術技の威力は初級の技でも中級クラスになるほです。

尚、2人の戦闘はなのは達に中継されています。当然会話も。

美音の方はなのは達と協力してアインスと交戦中です。しかし、改めて考えると原作のアインスって滅茶苦茶強いんですよ……それと単独でやり合ってたなのはも凄いけど。

では、また次回。

第18話 夢と現実、過去と現在（前書き）

遅くなりました。

学園祭の準備で更新が中々進まない…………。

では、どうぞ。

第18話 夢と現実、過去と現在

Side はやて

眠い。

車椅子に座りながら、私はすごい眠気を感じてた。

(あかん………瞼が重い)

何とか目を開けてみると、ぼんやりとやけど綺麗な女の人が見えた。でも、すぐに瞼が下がって見えへんようになる。

「そのままお休みを、我が主。あなたの望みは、全て私が叶えます。さあ、目を閉じて、心静かな夢を見てください」

優しく囁いてくれる声を聞きながら、私はまた眠ってしまいそうになる。

せやけど………

ドオオン!!!

なんやえらい大きな爆発音と揺れが襲い掛かってきて強引に目が覚めてもうた。あかん、今でもう眠気なんてまったくない、眠れ言われても無理やわ。

「今のは………まさか、戦闘の余波がここまで………!」
「無事ですか、我が主!」

銀髪のお姉さんが慌てとる。そんな心配せんでも平気やて。けど、今のなんやる？戦闘って言うとなったけど、誰かが近くで戦っとるのかな？

そんなことを考えてたら、辺り一面暗い場所が歪んで映像を映した。映ったのは、薄暗い森の中。その森の中で火花や風や土煙とかが見える。

「あれ？・・・シノン君が、2人？」

戦っとる1人は私の知っとるシノン君やけど、もう1人背の高いシノンがある。親御さんとか兄弟とかのレベルやなくて、ほんまにそつくりの人や。

「なあ・・・これって、今起きてることなん？」

「はい・・・現在この2人は闇の書の内部空間で戦闘中です。一部のシステムを乗っ取られていますので、こちらから干渉するのは難しいかと」

「・・・っ！」

闇の書。

その言葉を聞いて、忘れとったことと今の状況が理解できた。そして、これから起こるかもしれへんことも。

「あなたが、闇の書の管制人格なんやね？せやったらお願いや、力を貸して」

「無駄です、我が主。どのようなことをしても、暴走は私やあなたが望まなくとも止めることはできません。あなたは願ったはずで、健康な体、愛しい者達とずっと続く暮らし、夢の中ならばその幸せを感じる事が出来ます」

「……うん、確かに望んだ。望むように生きられんし、ずっと一人で寂しかったから。けど、どんなに幸せでもそれは結局夢やる？ だったら、現実で幸せな時間を作る？ マスターの願いは聞かなあかんよ？」

身を乗り出して女の人の頬に触れる。足元が魔法陣で明るく照らされてハッキリ見えたその顔には涙が流れてた。

この人も私と同じ。ずっと寂しくて、辛いのを我慢してきた。

けど、これからは違う。直接やないけどシノン君が教えてくれた。寂しかったら、辛かったら、誰かを頼っていいし、泣いてもいいって。

「一緒に行こう？ あなたも、私の家族なんやからな」

「……はい……我が主よ」

Side Out

烈光を纏った連続の刺突。

その直撃を受けたシノンには森の木々まで吹き飛ばされ、長刀を振り抜いたアナザーは右手を下ろす。

通った。吹き飛んだ場所が土煙で覆われているので視認は出来ないが、今のは間違いなくダメージを与えたはずだ。

シノンとは違って右手に確かな感覚を持つアナザーは己の一部ともいべき長刀の刀身からの手応えを確信した。だが、その表情は歓喜ではなく不満に似た感情に満ちている。

(・・・なるほど、ガキの姿が理由かと思ったが・・・魔法を戦力の要に取り込んだのはそのせいか。だけど、こういうのを見ていると確かに自分と戦っていると理解できるな・・・)

アナザーの足元から水音が鳴る。そこには大きくないが決して小さくはない血溜まりが出来ていた。その真上にあるのはシノンの四式の刀身を握り締めた左手と伍式が僅かに切り裂いた左脇腹。

それは秘奥義の烈光がシノンを読み込むほんの数瞬前、アナザーの背後から迫った物だった。

強力な破壊力故に、どれ程の達人であろうと秘奥義を放った時には必ず隙が生まれてしまう。逆にその隙のマイナスすら無意味と変えてこそその秘奥義でもあるが、とにかく秘奥義の後には隙が生じる。

アナザーと同じく秘奥義を会得しているシノンは烈光に飲まれながらもその隙を狙って背後からの奇襲を狙ったのだ。いかに膨大な演算能力と魔導師のマルチタスクを持っているとはいえ、簡単に出来ることではない。

だがアナザーも咄嗟にその奇襲に気付き、避けるのを諦めて負傷を最低限に抑えるという選択を一瞬で決断した。回避や防御を行えば秘奥義は放てず、その隙をシノンに狙われる。

頭を狙った四式の刀身を左手で握り締め、心臓を狙った伍式は剣が体に刺さるといふ事態だけを避けて体を動かした。結果は無傷ではないが、無傷で留めようとしていれば最悪アナザーはシノンに殺されていただろう。

勝利の機会を貪欲なまでに逃さない。その姿にアナザーはまさにあいつは自分自身だといふ認識を確かに固める。そして、相手が自分自身であるのならこれで終わりだとは思えない。

ガシャン！！

土煙の中から聞こえた僅かな駆動音。アナザーの聴覚はそれをハッキリと聞き取り、左手に握っていた四式の柄を逆手に持って土煙の中へ全力で投擲する。

四式の後ろに引きつけられていた突風は土煙を消し飛ばし、一瞬で視界を良好にする。だがアナザーの視界が映したのは四式と入れ替わるように迫る白銀の砲撃魔法。

「　　ッ！？彼方より現れ、闇を貫け！ダイバインストリーク！」

驚愕よりも先に鍛え上げられた反射神経が詠唱を唱え、目前に出現した魔法陣から真っ直ぐ放たれた極大の光が白銀の砲撃と拮抗する。

「　　っ！」

だが、拮抗したと言ってもそのタイミングはかなりギリギリだ。数秒の抵抗も虚しく、アナザーは離脱も間に合わず砲撃魔法をその身に受けて爆発に飲み込まれた。

アナザーの秘奥義をも上回る破壊力が大地を揺らし、木々をゴミのように吹き飛ばす。まるでミサイルが直撃したような大爆発だ。

「くそっ

」

『マスター、左足と額の傷は……』

「わかってる……少し深くやられたな」

毒を吐いたのはシノン。ガード越しとはいえ秘奥義を受けた肉体は傷を負っていた。

現在使えるフォームの中で最も優れた防御力を持つシュナイダーの騎士甲冑。それを貫通した烈光の刺突は大剣の防御が薄い箇所、左側の足と額を深く斬り裂き血に染めていた。

額から流れ出た血が左目を塞いでいるが、元より左目は見えていないので大した損失にはならない。だが左足に負傷を負ったのは少し拙い。致命傷ではないが、このままでは次第に機動力が削られる。

今でもヒールとキュアを省略詠唱で使用し治癒を行っているが再び激しく動かせば傷が開くだろう。負傷の酷さを理解しているシノンは出来れば今の砲撃で決めたかった。

だからこそ、今放ったデモリッション・ブラスターにはシノンの総

魔力の約3分の1を込めてぶっ放した。しかし、アナザーとてシノン・ガロード、これで終わりはしなかった。

「げほっ！げほっ！……あぁ、くそっ……サイクロン！」

黒煙の中より巻き起こった巨大な竜巻。発生した時間は短いですが、数秒間の暴風は黒煙を綺麗に吹き飛ばした。

晴れた場所に立っていたアナザーはその身をフォースフィールドで覆われていたが、途中からの防御ゆえに左腕全体がズタズタになっていた。既に治癒を施したようだが、状況はシノンの左足と同じ様なものだろう。

「……今ので仕留めるつもりだったが、少し遅かったか」

「殺すつもりで来てるってのは合格だが……片目だけでオレと戦うってのは、なめてんのか？」

「……」

「さっきの刺突の反応速度でハッキリわかった。お前の左目、見てくれは無事でも“見えてねえ”。剣を浮遊操作して攻防に使ってるのもそのせいだろ。“全方位に対応できる攻撃と防御”ってのは便利に聞こえるが、オレ達クラスから言わせればそれは“全方位に対応出来ない”ことの裏返しだ」

見破られた。

今では防ぐこと叶わない絶対の死角を見抜かれ、シノンは大剣を握る右手に力を込める。そして、このやり取りが闇の書の外にいるな

のは達に見られているということをシノンは知らない。

空中に待機している四六式がシノンの元へと戻り、参式まで合体した大剣に全てが加わる。奇襲を防がれた時点で多方向からの同時攻撃はもはや通用しないと考えたのだ。

発揮される破壊力に比例して質量が増し、初めは長剣だった姿は今ではシノンの身の丈の3分の2を越す大剣となっていた。

(…………なめていたのは、オレの方が…………)

「先程の言葉は詫びよう…………来い！」

本来の姿へと形を成した大剣を右手に握り、シノンは走り出した。その動きを返答として受け取り、アナザーも正面から走り出す。

動き出したことで2人の傷口は血を滲ませ痛覚を刺激するが、そんなもので止まりはしない。

互いのリーチに敵を捉え、研ぎ澄まされた鋭い斬撃が袈裟に振るわれる。金属音が響き、大剣と長刀は一瞬すれ違った。

アナザーは振るった刀身を地面と水平に倒し、シノンの視界の左側から首を狙う。だが、死角とはいえ奇襲でなければシノンの直感と反応速度はそれを脅威と捉えない。

シノンは体を低くして右に回る。長刀が頭上を掠め、一回転した分の力を加えた大剣が右薙ぎに振るわれる。

右から胴元を真っ二つにされる寸前でアナザーは長刀を打ち付け大

剣の行く手を阻む。

しかし本来の力を発揮する大剣の威力は想像よりも大きく、アナザ―の長刀を押し切った。

「……っ！」

抑えるのを諦め、アナザ―は長刀で大剣を受け流しながら上に高く跳んだ。普通なら移動が出来ず不利な空中だが、アナザ―は急降下しながら刀身に赤い闘気を纏わせる。

「轟け、地の牙！……」

シノンは振り切った大剣を腕のバネを使って引き寄せ、そのまま勢いを殺さず青の闘気を纏った大剣を両手で高く振り上げる。

「響け、龍虎の咆哮！……」

闘気の輝きを纏ったシノンとアナザ―の武器が同時に振り下ろされた。

「魔王、地顎陣！！」「龍虎、滅牙斬！！」

シノンの足元から蒼炎を纏った無数の龍が噴き上がり、それとぶつかった長刀の刀身からは地割れでも起こせそうな程の衝撃波が放たれた。

二つの力が衝突し、シノンとアナザ―の間で爆発が起こる。

爆風を利用してアナザ―は地面に着地。数秒だけ視線を交えてシノ

ンは背狼、アナザーは瞬動に風の噴射を加えた急造の加速移動でその場から姿を消す。

一瞬の後に大剣と長刀が再び激突し、両者はすれ違う。その手応えから傷を負わせられなかったのは目で見なくともわかった。

着地してすぐに姿が消え、2人は森の中を超高速で移動しながら剣を振るう。絶え間無き剣戟と術技がぶつかり合い、火花と衝撃波が途絶えない。

シノンの背狼が巧みな技術操作によるものなら、アナザーの我流瞬動は強力な術出力に物を言わせ、その反動を強靱な肉体で相殺する無茶苦茶な加速法だ。

速力はほぼ互角。どちらも自分の技量や能力によって可能にしている動きだ。しかし、2人が姿を消す度にその場所には傷口から溢れた血液が残る。

シノンは左足が地面を強く蹴るたび、アナザーが両腕で長刀を振るうたびに血が溢れ出す。

当然2人は肉体の機能が徐々に低下し始めていることに気付いているが、止まることも出来ない。左足を使わなければシノンは機動力で圧倒され、両腕を使わなければアナザーは力で押し負ける。

互いが互いの不利と有利を理解しているからこそ止まれない勝負。その身を血に染めながら2人は森の中を疾走する。

だが……

「…………ぐっ！」

『マスター！』

勝負の結果を決めたのは、大人と子供を隔てる覆しようなない身体機能の差だった。

ついに左足が着地の衝撃すら吸収できず、バランスを崩したシノンは膝が折れて地面に倒れる。

シノンは大剣を突き刺して杖代わりにし、重力操作を左足の代わりにバランスーにして一秒でも早く立ち上がるうとするが、顔を上げたシノンの顔面をアナザーが横から蹴り飛ばす。

「…………っ！！」

こめかみから頭蓋骨を粉碎するような衝撃が伝わり、シノンの体は地面と平行するように飛んだ。木々を数本へし折ったところで勢いが止み、体が地面に横たわる。

（まずいな、左足の限界が近い…………）

痛む体に鞭を打ちながら大剣を支えに立ち上がり、シノンは左足に視線を移す。一度治癒を施して止血した左足は治癒の前よりも血塗れになっていた。改めて意識すると太ももから下に向かって流れる血液が不快感を誘う。

動かないという程ではない。無理をすればあと数分は全力で動ける。

だがそれ以上は無理だ。どれほど治癒を使ってもこの戦闘で左足は

もう使えなくなる。そうならばシノンの負けは決まったも同然だ。

そして、シノンとは違いアナザーには制限時間が無い。

「しけた結果だ。大人と子供、そんなものの違いで勝負が決まっちゃうなんてな」

自分の有利な状況が気に食わず、不機嫌な顔で歩いてくるアナザー。左腕はシノンの左足と同じく、おびただしい量の血で真っ赤に染まっている。

シノンはなんとか両足で踏ん張り大剣を構える。その姿勢を維持しているだけでもシノンの左足は悲鳴を上げて血を流す。

「その足じゃ動けて数分つてところだろ……オレがお前の立場なら、方法は1つだな」

「ああ……次で決める」

それしか方法は無い。守りに徹しても勝機などない。ならば取る方法は1つ、左足が使える数分間で勝負を決める。

だが、アナザーもその意図には気付いている。その上でシノンは打ち勝たなければいけない。

次の攻撃、そこで勝敗が決する。

第18話 夢と現実、過去と現在（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

アナザーはブーストが働く右手（外伝4で書いた宝具）を持っていませんが、左目が健在なので死角はありません。

そして、シノンとアナザーの身体能力には大人と子供という超えられない壁があります。

2人の勝負は次回で決着が着くと思います。

では、また次回。

第19話 全てを超える風（前書き）

なんとか今回で決着が付けられました。

では、ごきげん。

第19話 全てを超える風

Side Out

シノン・ガラードとアナザー。

この2人は同じ存在であるが、現在発揮出来る戦術技能には違いがある。

例えば肉体と技術。これは2人が戦闘で使用する術技も含まれる。

武器の種類は違うが、それを扱う2人の型はほぼ同じ。

だが、剣技であろうと術であろうと、外部からの干渉が無い限りその肉体で発揮出来る破壊力には限度が存在する。

未だ成長途中のシノンと成人した全盛期のアナザー。この違いによって、同じ術技でもシノンは破壊力で数段劣ってしまう。

例えば先程の秘奥義、翔波烈光閃。もしアレを2人が正面からぶつけ合っても、ブーストを行わなければシノンの秘奥義はアナザーの3分の2程度の破壊力が限界なのだ。

他にも、アナザーはシノンがまだ使えない術技を使うことが出来る。その気になればあらゆる属性精霊を召喚することも可能だろう。まあ、召喚したところでシノンとの勝負に明確な差が出るわけでもないのだが。

しかし、それだけでシノンが不利だということ決してない。

裏を返して捉えれば、シノンは一ブーストを行える右手を持っているし、ブーストを使えば破壊力でアナザーに対抗できるのだ。

他にもシノンは重力操作という超能力、ヴェルフグリントを始めとする魔導師としての力がある。それは決してアナザーには真似できないものだ。

このように、2人の間には大きく異なる強さが存在する。

そして現在、シノンは自分が持つ能力全てと動ける数分間を使ってアナザーを倒す方法をシュミレートしていた。マルチタスクと持ち前の演算能力を駆使し、行動を思い付いてはすぐに消していく。

幸いなことにアナザーはシノンの攻撃に正面から挑む気だ。避けられるという可能性が殆ど無くなるのならば、シノンが勝利するのは決して不可能ではない。

だからこそシノンはその方法を考える。

考える。そして探せ。

不可能でないなら見つけれられるはずだ。無数に枝分かれした可能性の中にある、勝利という未来を。

(大剣の形状・・・合体剣という特異性・・・この戦闘でハッキリと正体を見破られていない重力操作・・・未だ見せていない機能・・・最後に・・・“白風の存在”・・・)

断片的なキーワードをヒントに、脳内で未来が思い描かれる。

そうして、硬く閉じられていたシノンの両目が遂に開かれた。それは両目が勝利の見た確かなる証。

「……………掴んだか」

呟いたアナザーも両目を開き、両手で握る長刀を顔の横に置くように構える。

その構えは“シノン・ガライド”が使う防御の構えでは無い。意思の強さによってその力を高める長刀の輝きからも分かる。アナザーには避ける気などないのだ。

対するシノンは右手のジュエルシールドを発動させ、大剣を右肩に担ぐように構える。蛍火の輝きを纏う体を前傾にしたそれは、冬木市の修行で形となったシノンだけの構え、“白風の構え”だ。

知らない変貌と構えにアナザーが目を細めるが、構えは動かない。敵の行動が思い通りにいかないなど別に不思議ではない。

2人とも同じだ。これまでと同じ様に……………目の前の脅威に立ち向かい、それを超える。

“シノン・ガライド”は……………いつもそうしてきたのだから。

「……………行くぞ」

シノンが動き出す。

地面を強く蹴り、背狼の加速と斥力の反動がシノンの姿を消した。

当然その動きによって足から流れる血が制限時間のカウントダウンを開始する。

「白風……烈っ!!」

「……………はあっ!!」

超加速を加えた2つの斬撃。それを向か打つアナザーの長刀は何の変哲も無いただの右袈裟斬り。

だが全力で振るわれた白い刀身は眩く光り、その速さはシノンの急加速とまったくの同等。

バアアアアン!!!!

激突を知らせる金属音。

シノンとアナザーはすれ違う寸前の位置。

アナザーの長刀は振り抜かれ、体には胸と腹部の2箇所斬撃の傷があった。だが、それは致命傷にまで届いていない。アナザーはまだ動ける。

対するシノンの体に傷は無いが、両手に握られていた大剣、ヴェルフグリントが手元を離れて真上に弾かれていた。

白風・烈は結果的にアナザーの斬撃に打ち勝ったが、その威力を大分殺されてしまったのだ。

しかも、シノンはその手から武器を弾かれ失ってしまった。

だが、シノンの右眼は勝利への道を見詰めて逃がさない。

『ソードパージ』

真上に弾かれたヴェルフグリントが内側からロッキングボルトを外したような炸裂音を響かせ、本体である長剣を空中に残して他5本の剣全てが四方八方に散らばった。

「……………っ!!」

自身の加速を緩めず、白銀色の軌跡を残してシノンはアナザーの隣を通過する。

シノンが走り、手を伸ばした先で掴んだのは散らばった5本の剣の内1本、弐式。

「ヴアルスツ!!」

カートリッジが2発ロードされ、弐式の刀身が魔力を纏う。

それと並行してシノンはその場で体の向きを左に180度反転。引力を操作して自身の肉体を停止させず、加速状態を保ったまま再びアナザーに肉薄。右袈裟のブーステッド・ストライクを放った。

「……………ふっ!!」

全力の斬撃を放った後の隙。それを突かれながらもアナザーは振り返る勢いと共に長刀を振るい、シノンの斬撃を完全に受け止める。

(・・・なんだ今の動きは・・・いや、それより・・・これで詰めか・・・?)

だが、シノンはまだ止まらなかった。

斬撃が阻まれたのを認識したレーザーは躊躇いもなく式式を手放し、再びアナザーの隣を通過していた。

そして、再び不可解な反転移動で接近してきたシノンが手にしていたのは、刃の上部がまるでソードブレイカーのような形になっている2本の直剣、参式と四式。

「白風・・・散っ!!」

衰えを知らず、むしろさらに加速するシノンが再びアナザーの背後から斬撃が放つ。

「・・・っ!?!」

2度目の背後を狙った攻撃。

1度目の攻撃からそのタイムラグは2秒も満たない。全盛期のアナザーと云えども動きを追うことは出来るが、反応速度に対応が追いつかない。

「・・・くっ!!」

だが追いついていない対応速度でもアナザーの動きは素早く、不安定な体勢で右薙ぎに振るわれたというのに長刀の刀身は白風もろともシノンを打ち砕かんばかりに輝きを放っている。

だが、斬撃がぶつかる数瞬前にアナザーは背後から奇襲を受けた。

「なにっ……!!?」

背後から迫ってきたのは、重力操作で操られた片刃の短剣2本、五式と六式。

2度ならず3度目の奇襲。しかも今度は前後同時。

「ちい……!!」

恐れも躊躇いも無く、アナザーは速度を一切緩めずに長刀を右薙ぎに振り抜く。その斬撃は白風の威力を完全に封殺し、無力化した。

アナザーの斬撃が白風・散と直角だったのは、背中に突き刺さった五式と六式のおかげだ。

流石のアナザーでも長刀を振り抜いた体勢から前後の攻撃に同時対応することは物理的に不可能。だからアナザーは致命傷の可能性が高い白風を防ぎ、短剣をその身で受け止めた。

最初の一撃から背後を狙った3連続の奇襲。

ここまでやってもアナザーを仕留めるには届かない。

しかし、まだシノンの手札は尽きていない。足が動く制限時間は残りおよそ1分。

「っ、ぶっ……!!」

両手に持つ参式と四式を放り投げ、斥力を使い地面から弾かれたような空への全力跳躍。

その先で掴んだのは合体剣の中心である壱式、ヴェルフグリント・デイステンス。そして、釣られたように他の剣も集結し、再び大剣の形が形成される。

「フルドライブ!!」

『Full Drive Ready……』

カートリッジ4発を消費し、最大出力を発揮するデバイス。

振り上げられた大剣の刃が白銀色の魔力が覆い、薄暗い森を明るく照らす。

(まだ……折れないか……ならば……)

来る。

3度に続く奇襲攻撃を行ったというのに、このタイミングでアナザーに体勢を立て直す時間を与えてまで武器の出力を上げたのだ。

ならば、最大の攻撃には最大の攻撃で対処する。

アナザーは最後の衝突を確信し、長刀を鞘に納めて腰溜めの構えで姿勢を低くする。

もはやアナザーの左腕は限界。ならばその左腕を鞘の固定に回し、

一瞬の破壊力が高い抜刀術で迎え撃つ。左手の威力不足を補うにはそれしかない。

「……っ!!」

先に動いたのはシノンだった。

アクセルフィンを羽ばたかせ、空中を蹴ったと同時に背狼と引力の力を加えての三重加速。

光の軌跡を残し、急降下するそれはまるで流星の如く。

対するアナザーは動かず、長刀を抜き放つその時を待ち、心を研ぎ澄ませる。

鞘の内部に納められた雪色の刀身はかつて無いほどに輝き、光を収束させる。

「白風……墜っ!!」

「刹華斬……月影っ!!」

交わる2つの斬線。

アナザーの秘奥義は本来なら多段ヒットを狙う限界を超えた攻撃だが、それをあえて2回に絞ったことで総合的な破壊力を上げた斬撃は白風に良く似ていた。

偶発的に生まれたそれは同じ斬線を描き、長刀と大剣はほんの一瞬……1秒にも満たない時間拮抗し、すぐにすれ違う。

だが、その拮抗の瞬間に決着は付いた。

振り抜かれてもまだ輝きを衰えさせないアナザーの長刀とは対照的に、シノンの手にある直剣は刃に無数の亀裂が走った壺式のみとなっており、白銀の魔力は確実に霧散している。

衝突の際、アナザーの長刀はシノンの命を絶つまでに届かなかったが、崩壊寸前の壺式を残して他の剣を全て弾き飛ばしていた。

左腕が動かなくなり、秘奥義を放った今のアナザーは絶対的な隙を見せていた。その隙はおよそ3秒ほどだが、アナザー本人はそれを危機とは感じていなかった。

長刀の手応えから、もうシノンの剣は振ることが出来ないと確信したからだ。実際、もう壺式の刃はアナザーに届くより先に砕けそうだった。

(……………終わりだな……………今度こそ……………)

ゆっくりと時が流れる意識の中、アナザーは勝利を確信する。

剣が使えなくなった時点で、シノンがアナザーに勝利出来る可能性は消えた。打撃ではアナザーを一撃で仕留められず、術では詠唱の時間が無い。

後は遅れて振り返ったアナザーがシノンの命を断つだけだ。

そう、“剣が使えなければ”もうシノンに勝ち目は無い。

『外装フレーム、ダメージ臨界。“零式”ぜろしきオープン』

その時……

からん、と鉄が落ちたような音が鳴り、今にも砕ける刃の中からヴェルフグリントの声が聞こえる。

アナザーはそれに違和感を覚えた。どう考えてもその声は大破寸前に出せるものではない。

バアアン！と壱式の刃が炸裂音を鳴らし、亀裂だらけだった刃が“内側から”弾け飛んだ。

アナザーの表情が凍りつき、驚きで目が見開かれる。

その時の感覚は、過去に何度か死に掛けた時にも体験した“死神”の気配と良く似ていた。

炸裂音と共に発生した煙の中から、月光を浴びた蒼銀の光が現れる。

現れたその正体は、蒼銀色の刀身を持つ長剣だった。

グリップは代わらず、機械的なデザインの鍔は四角の形。刃の太さは壱式のような大剣クラスではないが、10cmは間違いなくあるだろう。もちろん、刃に傷は1つも無い。

鍔元にはヴェルフグリントのコアである蒼い宝玉が埋め込まれ、膨大な魔力を纏う蒼銀の刃と呼応するように輝きを放ち続けている。

砕けた大剣の中より現れたこの長剣こそ、フォーム・シュナイダー

に搭載された本体の姿、零式。

シノンが長剣を構える。それはもちろん“白風の構え”。

全てはこの刹那の為に。今この場で限界を……自分自身を超えてその先へ。

「極式……」

「っ！……そうか……これはお前の……！」

斬撃が同時に放たれる。

その斬撃の線は“3つ”。今までと同じ2つの斬撃、それが交差する点の上を一瞬遅れた刺突が突き抜ける。

そして、どう足掻こうと間に合わない無防備なアナザーの体を深く斬り裂き、心臓を貫いた。

この時、アナザーは第六感を通して理解した。

そして、同時にあり得ないと現実を疑った。

誰が……いや、どのような無双の強者であれ予想出来たであろうか……。

今この瞬間、そこに至るまでの攻撃全てが……

「……神風……！」

・ ・ ・ ・ ・ シノンが生み出した1つの秘奥義によるものなどと。

第19話 全てを超える風（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

今回、遂にシノン個人のオリジナル秘奥義を出すことが出来ました。

でも……長い!!

描写とかを途中に入れてるとしても、結果的に秘奥義1つ表現するだけでどれだけ遠回りしてんだ、私は。

とにかく、一応これで勝負が決まりました。

そろそろA、S編の終わりも近いですかねえ

では、技の紹介です。

白風・烈

大剣状態の破壊力と二重加速による踏み込みを合わせた白風。

単純な変化攻撃だが、その破壊力と突撃力には倍近くの差がある。

白風・墜ついで

飛行魔法、歩法、重力操作による落下時の加速。この三重加速を加えて放つ急降下型の白風。

こちらも単純な変化攻撃だが、今までの白風とは違い落下時に使用

する白風なので重力操作によって絶大な威力強化が行える。

極式・神風

シノンが現時点で発揮可能な手札のほとんどを注ぎ込んだ秘奥義。

シノンは、ほとんどの秘奥義を一度見ればその技術構造を理解して使用することが出来るが、自分だけが使う秘奥義は持っていないかった。

よって、これは本当の意味でシノンの秘奥義なのだ。

本来は白風・烈の正面攻撃から始まって、壱式のみ状態で背後からブーステッド・ストライク。

その先で壱式を手に取り白風・散と残りの剣全てによる全方位同時攻撃。次に大剣形態で白風・墜の落下攻撃という流れ。

それでも決めきれない、または倒しきれない場合に壱式を開放、不完全ではあるが、白風と魔力砲撃のような刺突を合わせた3つの斬撃を叩き込む。

壱式の使用をなるべく渋るのは、使用した後にきちんと修理しなければ浮遊剣は使えても、壱式と大剣を使えなくなるからだ。

刹華斬・月影

ウッドロウ（通称、空気王）が使用する秘奥義にアナザーが独自のアレンジを加えた即席の我流秘奥義。

本来なら限界を突破して40に近い斬撃を叩き込むのだが、アナザ

―は多段ヒットによる威力の減衰と即死の反動を嫌い、斬撃数を2つに絞ることで総合威力の増加と反動の極小化に成功した。

こんなところかな？

では、また次回。

第20話 動き出す奇跡（前書き）

今回は主になのは達外側が主です。

あと、どうでもいいけど話の数字がもう一つの作品と並んでいるのに気付いた。

では、さようなら。

第20話 動き出す奇跡

S i d e シノン

「ごぼッ！ なるほどな……この連撃に至るまでの全てが、お前の秘奥義だったってわけか。いやいや無理だわ。クラトスの奴でも見抜けねえって。大抵の奴なら見破る前に途中でやられちまう」

心臓を長剣に貫かれ、胸元と背中から流れたアナザーの血が足元に大きな血溜まりを広げていく。

だが、吐血しながら贅辞を送るその顔は何処か清々しいものがある。左足が限界を向かえたオレはバランスを保てず、アナザーに寄りかかるような体勢だ。

悔しいことに、アナザーが体を倒さないでくれている今の状態はありがたい。

「ああゝあ……見た目がガキの自分に負けるって、意外と堪えるもんだなあ」

「その割に悔しそうには見えんな。つか、よく喋れるなお前」

「なんだかんだ言っても元々は幻影生み出されたからな。なんて言うんだ？死にたくても死ねない、そんな感じだ。まあ、放っておけば勝手に消えるさ。条件はしっかり守ってやるから安心しろ」

条件。そういえば戦う前にそんな約束をしていた。

それを思い出し、心の何処かで安心したように力が抜ける。

「なあ、1つ訊いていいか？」

「自分自身と話をしたい、なんて願望はないんじゃないのか？」

「そうだったんだけどな……滅多に無い機会だし、頼むわ」

「……わかった」

「ありがとう……でも、そんな難しい質問じゃない……お前はさ、生まれてきて良かったと思うか？」

「当たり前だろう。そんなこと」

即答に驚き、アナザーは目を見開くが、この返答はオレの迷い無き本心だ。

確かにシノン・ガロードの歩んできた人生は過酷なものだった。だが、辛いと、理不尽と思うことがあると自分が誕生したという事実を不幸とは思わない。

例え誰かがオレの境遇を不幸と思うとそれだけでは決して譲らない。

「……ふっ、ははははは！ そっか、そうだよな……オレ達は自分の命に、胸を張っていいんだよな」

「自分自身から答えを得られて満足か？」

「ああ……この上ない大満足だよ」

長年捜し求めた答えを得るように、アナザーの閉じられた瞳から静かに涙が流れる。

だが、涙を流すその顔は同じ存在のオレが別人と思えるほど幸せそうだった。

不覚にも、オレはそんな顔が出来るアナザーが羨ましいと思った。

Side Out

はやてと管制人格の女性は2人の勝負を見ていたのだが、戦闘の余波で映像を途中から見られず様子を見ていた。

「……ツ!?主、2人の内部戦闘に決着が付いたようです。空間所有権だけは乗っ取られたままですが、今ならば……」

突然、闇の書のシステムを通じて管制人格は2人の決着を知る。

「ほんと？シノン君がどうなったかわかる？出来ればこっちに連れて来たいんやけど……」

はやての問いに“お待ちを”と答えて管制人格は瞳を数秒閉じて、静かに首を振る。

「どつやら勝利したようですが、こちらからでは脱出させることは出来ません」

「そつかぁ……うん、シノン君やったらきつと大丈夫や。今は私達が脱出せんとな……その前に……」

はやては車椅子から身を乗り出し、自分の前で片膝を着いている管制人格の頬に手を添える。

「主？」

「大事なこと忘れとった。あんたの名前……もう闇の書とか呪いの魔導書なんて私が絶対に呼ばせへん、言わせへん……」

マスターであるはやての願いを受け、白色のベルカ式魔法陣が輝きを増して新名称の登録を開始。

「夜天の主、八神はやてが汝に新たな名を贈る。強く支える者、幸運の追い風、祝福のエール、リインフォース」

光が弾け、管制人格、否、リインフォースが涙を流しながら笑顔を浮かべる。

「ありがたき幸せです。我が主よ」

「うん！……それじゃ、始めよか。まずは防衛プログラムを止めへんとあかんやつたつけ？どないすれば止まるん？」

「強く念じてください。マスターであるあなたの声ならば、きつと

届くはずです」

「う、うん……（えっと……お願い、止まって）」

難しい方法で無いことに安心するが、おっかなびっくりのような調子ではやては強く念じた。

* * * * *
* * * * *

闇の書の外部、通常空間で、なのは達は防衛プログラムとの交戦を続けていた。

こちらで戦闘の余波でシノン達の勝負は途中から見られず、映像が途絶えた途端に防衛プログラムは再び攻撃を仕掛けてきた。

現在に至るまで戦況に大きな変化は無い。

反則的なスペックで圧倒しようとする防衛プログラムと攻撃を凌ぎながら反撃を繰り返す6人。

いや、よく見てみるとなのはとフェイトの動きや連携が明らかに鈍くなっている。

心此処にあらず、というのがしつくり来る程に戦意を削がれ、自分に放たれる攻撃全てを咄嗟に回避し続けている。

その原因は先程まで空に映っていた映像での会話。

“異世界で造り出された” “本来の姿” “見えない左目”

突然聞かされたシノンの情報に2人は動揺を抑えられず、シノンが無事なのか気になって戦闘にまるで集中できていない。

今は美音が1人で前衛を担当し、ユーノ、アルフ、クロノの必死なサポートでなんとか現状維持が出来ている状態だった。

「このままじゃ……………」

「ああ、まずいな……………」

シールドで攻撃を防ぎながら防衛プログラムの四肢をバインドで拘束するユーノの呟きに、スナイプを操作して攻撃するクロノが続く。

状況は良くない。

今はもちろん悪いが、なのは達が戻っても今の状況は好転するとは思えない。

何か……………この状況を根本的に覆す何かが必要だ。

そんな時、変化が起こった。

防衛プログラムが身に纏っていた紫色の魔力とドス黒い負が霧散し、

その体が人形のように軋みを上げ始めた。

（外の方……えっと、管理局の方！そこにいる子の保護者、八神はやてです！）

「……ッ！はやてちゃん!？」

突然聞こえてきた対象を選ばぬ無差別の念話。

その声に反応したなのはが顔を上げて答える。

（え？なのはちゃん!？ホンマに!？……でも話が早いわ。ごめんなのはちゃん。どうにかしてその子、止めたげてくれる？）

「でも……さつきから何度も攻撃してるけど、全然効いてないの」

（大丈夫や。魔導書本体からのコントロールを切り離れたから、今そっちに出てるのは自動行動の防御プログラムだけや）

「え、え〜っと……」

小学三年生が理解するには難しい単語の連続で、なのはは少なからず混乱する。

だが、今の状況を瞬時に理解したユーノとクロノは顔を合わせ、なのは、フェイト、美音に叫ぶ。

「3人共聞いて!……わかりやすく言うよ。今からあの子を魔力ダメージでぶっ飛ばして!手加減も遠慮もいらぬ!全力全開

で！」

「うまくいけばシノンや八神はやてを助けられる！いいか？手加減は一切無しだ！叩き込めるだけの火力を叩き込め！」

かなり噛み砕かれた説明。

だが、やることさえ分かればこのメンバーは完璧にその実力を発揮する。

「さすがユーノ君！わっかかりやすい！」

『It's so. (まったくです)』

心の動揺を吹き飛ばし、その瞳に力を取り戻したなのはとフェイト。ただ、フルドライヴ形態であるデバイスを構え直し魔法陣を展開して大火力攻撃の用意をする2人と美音の顔が楽しそうなのは気のせいだろうか？

直感的に危険を感じたのか、防衛プログラムの周りに大地から飛び出した無数の触手が盾のように現れる。恐らくは闇の書が蒐集した原生生物の一体だろう。

だが、なのは達の決意はそんなもので阻めるほど生温いものではないし、他の仲間がそんなものを許しはしない。

「ユーノ！アルフ！」

「わかってるよ！」

「邪魔はさせない！」

クロノ、ユーノ、アルフの3色それぞれのバインドが宙を漂う触手を余さず拘束し、標的以外の遮蔽物を“射線上”から取り除く。

「エクセリオンバスター、バレル展開！中距離砲撃モード！」

『All right. Barrel shot.』

レイジングハートの持ち手の後方がスライドし、突撃槍に届く程の長さまで伸びる。

6枚の桜色の翼が大きく広がり、先端部分に収束した魔力の束が発射音と共に無色の衝撃砲弾として打ち出される。

壊れた人形のように動きが悪くなった防衛プログラムが避けられる筈もなく、衝撃波が直撃する。

直撃を受けた防衛プログラムは衝撃波と同時に不可視のバインドを受け、金縛りを受けたように空中で動きを固めた。

これで文字通りの通り道が出来上がり、後は本命の砲撃をぶっ放すだけだ。

『『対象周辺に防御障壁の多重展開を感知』』

「………ッ!？」

何が何でも、と言うように防衛プログラムの全身を複数のシールド

が覆う。その数、25。

3機のAIの同時警告に砲撃体勢だったなのは手が止まる。

防御を貫いて砲撃を届かせる自身はある。だがそれでは魔力ダメー
ジの殆どを殺されてしまう。しかも瞬間的に一番大きな魔力ダメー
ジを發揮できるのはなのはの砲撃だ。

「なのは、任せて！」

「障壁は美音達が砕くから、砲撃準備をして！」

言葉を飛ばしながら防衛プログラムの上から雷光が、正面から青炎
が高速で肉薄する。

「疾風・迅雷！スプライトザンバー！！」

フェイトの肩に担がれた身の丈を越す巨大な大剣、バルデツシュ・
ザンバーが雷撃を纏って振り下ろされる。

本来なら結界・補助魔法、設置型のトラップ・幻術・作動済みの捕
獲魔法などを完全に破壊する魔法なのだが、魔力刃による単純な物
理破壊力は防衛プログラムの障壁を一振りで10枚近く破壊した。

「残り全部砕くよ、ソウルゲイン！」

『了解しました。“しよつこかく聳弧角”展開。出力のブーストとサポートはお
任せを』

肘先のブレードを展開し、両腕両足全体に青炎を纏わせた美音が一

瞬姿を揺らめかせて消える。

次の瞬間、防衛プログラムの展開する障壁に衝撃が伝わり、亀裂が走る。そして1秒も間を置かず再びの衝撃。

「はあああああッ!！」

右、左と、もはや目視すら叶わない超高速の連続攻撃が防衛プログラムの障壁を確実に削り、再び姿を揺らめかせた美音は防衛プログラムの真上に現れ、落下しながら右腕を振り上げる。

「断ち切れ! 舞朱雀!！」

渾身の力で振り下ろされた美音の右腕。

その一撃は防衛プログラムの障壁を完全に両断、粉碎し、余波の威力で防衛プログラムの体を縦一文字に斬り裂いた。

「「なのは!！」」

「ッ! エクセリオンバスター・フォースバースト! ブレイク・シユート!！」

カートリッジが4発ロードされ、光球に収束された魔力が4発のバスターとなって放たれた。

それは緩やかな軌道制御を受けて防衛プログラムに直撃し、桜色の魔力が引き起こした大爆発が荒野を明るく照らした。

* * * * *

『自動防御プログラム、外界からの一時消滅を確認。管理者権限が使用可能になります。ですが、防御プログラムの暴走は止まっています。管理下から離れた膨大な力が時期に暴れ出します』

「うん……まあ、そこは皆でなんとかしよう。シノン君もすぐ来るやろうし、きつと大丈夫や。行こか、ラインフォース」

『あ、あの男が……はい、我が主』

「ん？どないしたん？」

『い、いえ……その、少し顔を合わせ辛く感じまして』

「?……ははあゝん。そう言えばシノン君2人共、ラインフォースのこと見惚れたとか良い女とか言うつつたもんなあゝ」

『て、転移の時間が近付いています！主、他の作業をお早くお願いします！』

* * * * *

「……………どうやら、外も決着が付いたみたいだな」

「なに？……………うおっ！」

アナザーは言葉を呟き、顔を上げたシノンの体を全力で突き飛ばした。

体勢を崩し、体が倒れそうになるが、シノンの体は背後に出現した黒い渦に収まり、徐々に吸い込まれていく。

「これは……………おい、アナザー！」

「心配するな、ただの出口だ……………それよりも聞け、シノン。

あの女のことだが、あいつを助けるには切り離された防衛プログラムを完全に破壊する必要がある。いいか？“完全に”だぞ？欠片の1つでも残すな。

その後は簡単だ。すぐに闇の書のシステムを本来の形、夜天の魔導書と同じ形に直せ」

「おい待て、どうやって本来の形に戻せばいい。原点のプログラムは何処にも無いんだぞ」

胸元から長剣が抜かれ、さらには出血量が増しているがアナザーは構わず説明する。

そして、シノンにはハツとなって身を乗り出し、アナザーに質問する。

「いや、ある。時間が少ないから詳しく説明出来ないが、お前たちは確かに夜天の魔道書の原点を所持している。それを探せ」

確かな自信を持って断言するアナザーの姿を見て、シノンは無言で頷き黒い渦の中に呑み込まれた。

薄暗い森の中、もうそこに残っているのはアナザー1人だけである。

「さてと……オレはオレの方で、出来る限りやってみるか」

長刀を肩に乗せ、血塗れの体でアナザーは動き出す。

治癒術の1つも使っていないその怪我を動かしているのは、皮肉なことに彼が反抗して逆に乗っ取った闇の書の幻影魔法効果時間。

あと十数分で消える体を引き摺りながら、アナザーはただ歩を進める。

（バカな質問に答えてくれた礼だ……少し手伝ってやるよ）

聖夜の終わりは、近い。

第20話 動き出す奇跡（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

防衛プログラムは原作よりかなり往生際が悪いです。

次回は、出来れば敵が涙目の総攻撃シーンまで持って行けたらいいなと思います。

あと、近々試験が迫っているので更新が遅れると思います。ご了承ください。

では、また次回。

第21話 全員集合、そして作戦会議（前書き）

お久しぶりです。ようやく試験が終わったので投稿できました。

雨季様から感想をいただきました。ありがとうございます。

リアルも既に12月に入りましたし・・・クリスマスも近いですね。

では、ごきげん。

第21話 全員集合、そして作戦会議

Side Out

闇の書の外部で防衛プログラムとの戦闘を行っていたなのは達は空中に浮遊し、全身を揺さぶられながらアースラのからの指示を待っていた。

はつきりと耳に聞こえる程の振動音が空間を震わせている。いや、本当に周囲の空間そのものが振動しているのだ。

その元凶は全員の視線の先には荒野にある巨大な球体状の黒い淀み。その周りには淀みを守るように無数の触手が芽生え、ゆらゆらと動いている。

なのはの砲撃が直撃した途端に防衛プログラムが姿を変えた結果がこれだ。

まるで何かが生まれる寸前の卵を見ている気分になる。

いや、実際に何かが生まれようとしているのだろう。先程のはやての念話が正しいのなら、あれは魔導書本体から切り離された防衛プログラムそのもの。

つまりは管理局が幾年にも渡って痛手を受けた闇の書の力が。暴走している闇の書の力があの一点に集まっているのだ。

それと、黒い淀みの目の前、なのは達と淀みの中間に位置する場所に浮いている小さな白い球体。

その中には現在、八神はやてがいる。

『みんな、下の黒い淀みが暴走の始まる場所になる。まだあの中に残ってるメンバー、最低でも八神はやてちゃんかシノン君のどつちかが出てくるまで無闇に近付いちゃダメだよ!』

* * * * *

『防衛プログラムの進行に割り込みを掛けました。ほんの数分程度ですが、暴走開始時間の遅延が出来ます』

「うん、それだけあつたら充分だな」

防衛プログラムを切り離れたはやては光に満ちた空間で瞳を閉じながら次の命令を飛ばす。

「リンカーコア送還、守護騎士システム、破損箇所修復……おいで、私の騎士達」

はやての周囲に4つのリンカーコアが浮かび上がり、輝きを放ちながら外界の白い球体を囲むように再出現する。

次の瞬間、白い球体が爆音を鳴らしながら形を変え、一本の光の柱となった。天の雲と地の荒野に突き刺さりながら輝きを放つその傍には、ベルカ式魔法陣の上に立つ4つの人影があった。

「我等、夜天の主の下に集いし騎士」

「主ある限り、我等の魂、尽きる事無し」

「この身に命ある限り、我等は御身の下に在り」

「我等が主、夜天の王、八神はやての名の下に！」

シグナム、シャマル、ザフィーラ、ヴィータ。

夜天の守護騎士、ヴォルケンリッターの4人がここに蘇る。

* * * * *
* * * * *

「リインフォース、私の杖と甲冑を」

『はい、我が主』

はやての全身を白いラインが入った黒い服が包み、先端に黄金の剣

十字を取り付けた長めの杖、シュベルトクロイツが現れる。

瞳を開いたはやてがそれを手に取ると、周りを包んでいた白い球体に亀裂が走り、一瞬で弾けた。

「夜天の光よ、我が手に集え！祝福の風、リインフォース、セエー
ーットアップ！！」

シュベルトクロイツを頭上に掲げ、はやての騎士甲冑が姿を変える。

腰から踵まで届く黒いマントが飛び出し、黒い服の上から白色のジヤケットを纏う。さらに栗色の髪がリインフォースとの融合ユニオンによってクリーム色に変わる。最後に背中から左右3枚ずつのスレイプニールを生成。

この姿こそ、夜天の魔導書の主、八神はやての騎士甲冑の真の姿。長い間姿を現すことがなかった夜天の主が今ここに舞い降りた。

「はやて……………」

「すみません……………」

「あの、はやてちゃん、私達……………」

「申し訳ありません……………」

「ええよ、みんなわかってる。リインフォースが教えてくれた。せやけど、細かい話は後や……………今は、おかえり、みんな」

その言葉を聞き、今まで必死に涙を堪えていたヴィータが限界を迎

えた。

涙を溢れさせながら泣き声を上げ、大好きな主の名前を叫びながら精一杯抱きつく。はやてはヴィータを抱きしめながら母のように優しく背中を撫でる。

他の守護騎士3人がそれを微笑ましく見詰めていると、魔法陣の上になのは、フェイト、美音の3人が着地した。

争う理由が既に無くなり、なのはとフェイトに敵意は無かった。だが、美音だけは表情に悲しみを浮かべ、複雑そうな顔をしていた。

「なのはちゃん、フェイトちゃん、ウチの子達が色々迷惑掛けてもうて・・・それに、美音ちゃんもゴメンな・・・シノン君のこと、謝って済む問題やないけど」

「（フルフル）・・・美音はいいの。シノンに謝ってあげて」

美音は決してはやて達に怒りを向けない。

本当は怒りをぶつきたいところなのだろうが、何も出来なかった自分がはやて達を憎む資格はない。

だからこれは、シノン自身に決めて欲しいというのが美音の願いだった。

「すまない。水を差してしまうが、時空管理局執務官、クロノ・ハラウンだ。八神はやて、そちらの方でまだ出てきていないシノン・ガラードの情報は無いか？」

右手にデュランダル、左手にS2Uを持ったクロノ、そしてユーノとアルフが傍に降り立つ。

3人共顔から疲労の色が消えていないが、暴走までの時間は刻一刻と迫っている。そんな長らく休んでいる暇は無い。

「あ、えっと……シノン君やったら……」

『みんな、すぐ近くに転移反応！注意して！』

はやての言葉を途中で遮るエイミイの言葉。それに続くように、全員が固まっていた場所の近くに突然黒い渦が現れた。

全員が警戒するが、誰かが行動するよりも先に黒い渦の中からドオン！と何かに殴られたような衝突音が聞こえた。

2度、3度と衝突音が鳴り、4度目の衝突音と共に黒い渦は粉碎音を鳴らしてぶち破れる。

数秒後、破られた黒い渦の中から人影が飛び出し、その人物、シノンは漆黒のロングコートと銀髪を風に靡かせながら空中で荒れた息を整える。

シノンは数秒で呼吸を落ち着け、すぐになのは達の魔法陣を見つけて降下を始める。だが、それよりも先に笑顔を輝かせた美音が青い軌跡を残しながら突撃した。

それが鳩尾に入ったのか、体を悶えさせたシノンはそのまま美音に肩を貸してもらいながら青褪めた顔で今度こそ降下してきた。

「よ、よお〜・・・オレが最後みたいだな・・・遅れて悪い・・・げほっ」

「い、いや・・・気にしなくていい。それと、負傷してるなら座っていた方が良さぞ」

「そうするわ・・・それと、それぞれオレに話があるようだが、今は忘れて目の前の事態に集中してくれ。でないと間違いなく死人が出る」

話すことなど後で幾らでも出来る。だから今は戦うべきだと。左足を庇いながら魔法陣の上に座ったシノンの言葉に全員が無言で頷く。

「では、シノンには悪いが本題に入ろう。ユーノとそちらの守護騎士の女性はシノンの治療をしながら聞いてくれ。」

今直面している問題は、あそこの黒い淀み、闇の書の防衛プログラムだ。あれがあと数分で確実に暴走を始める。僕等はそれを何らかの方法で止めないといけない。

停止のプランは現時点で2つ。1つ目はこのデバイス、デュランダルに登録されている強力な氷結魔法で活動を停止させる。2つ目は軌道上に待機している艦船アースラの魔導砲、アルカンシエルで消滅させる。

これ以外に他に良い手は無いか？闇の書の主と守護騎士の皆に聞きたい」

永久凍結魔法と魔導砲アルカンシエル。この2つが現在の管理局側が用意できるプランだ。

クロノは誰よりも夜天の魔導書の機能に精通している守護騎士に有効手段を尋ねる。他のメンバーも自分の頭の中で方法を考える。

すると、シノンの左足を治療しながらシャマルが片手を上げた。

「あのおく……最初の案は多分難しいと思います。主の無い防衛プログラムは単なる魔力の塊みたいなものですから」

「凍結させてもコアがある限り再生機能は止まらない。今の状態では、もはや無限増殖と言った方が正しいかもしれん……すまない、あまり役に立てそうもない」

「今回のように不足分のページを補う為に蒐集されたせいなのか、我等にも完成後や暴走時の記憶があまり無いのだ」

「だよなあ……やっぱりアルカンシエルしか無いんじゃないかねのか？地球とかだったらはやての家までぶっ飛んじやうから絶対にダメだけど、此処って無人世界だろ？」

上からシャマル、シグナム、ザフィーラ、ヴィータの順で意見が述べられる。しかし、守護騎士達でも有効的な案は思い付かない。

だが、アルカンシエルというのがどんなものなのか知らないメンバー、なのは、フェイト、美音の4人は首を傾げながらその威力を訊ねる。

「アルカンシエル？そうだね……発動地点を中心に、百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら反応消滅を起こさせる魔導砲、って言えば大体分かる？」

シヤマルと同じくシノンの治療をしていたユーノの答えを聞いても完全に理解は出来なかったが、百数十キロを消滅させる、と聞いただけで地球で撃たれたらどうなるか大体分かる。

そして、一瞬ゾツとするような想像をしたなのは達は改めてシノンの強制空間転移爆弾を使った場所移動に感謝した。

「やはりアルカンシエルを使うしかないか……出来る限り使いたくはなかったが」

「……なあクロノ、そのアルカンシエルだが……発射準備を始めてから撃つまでの大体の作業時間は分かるか？」

方法が決まったと思った時に、今まで黙っていたシノンが質問した。

「え？そうだな……初弾だけならチャージ開始から完了まで10分、バレル展開からトリガーを引くまで2分程度だろうな」

「……わかった。はやて、魔導書から切り離されても防衛プログラムは今まで蒐集した魔法を使えるのか？」

「えっと……うん、使えると思う。けど、発動時の効果とか術式はリインフォースが使ってたやつとほぼ同じはずや。多分精度も」

「……そうか。エイミィさん、暴走開始までの時間は？」

『暴走臨界点までのタイムリミットはあと15分を過ぎたところだね。会議の決断はお早めに！』

「少なくとも1つの決断は出来ましたよ……現時点ではアルカンスィエルを使えないってね」

その言葉に全員が驚きながらシノンを見るが、シノンは眉一つ動かさずに言葉を続ける。

「アルカンスィエル発射までの時間が約12分、暴走臨界点までの時間が約14分、今から発射準備を始めてもかなりギリギリだ。そして、防衛プログラムが蒐集した魔法を使用できるなら軌道上のアースラを砲撃で狙う可能性がある」

「だが、地上から軌道上までの長距離を撃ち抜ける砲撃魔法など……」

「あるだろ、なのはのスターライトブレイカーが。美音の話だと、地球での戦闘でリインフォースが砲撃を発射するまでの時間は約2分半。だけど防衛プログラムの魔力があればチャージの時間なんて1分と掛からないし、射程だって多分限度が無い」

簡単なことだ。つまり、アルカンスィエルを使用する際に勝敗を決するのは“どちららが先に引き金を引いて相手に攻撃を当てるか”である。

「あれ？ だったら、暴走が始まるより先にこっちがアルカンスィエルを撃っちゃえば……」

「残念やけどなのはちゃん、それは多分ダメや。さつきシャマルが言ったけど、防衛プログラムは魔力の塊みたいなもんや。そして、今はまだちゃんとした体を作っとらんから、コアにもはつきりとした形が無いんよ」

「そんな曖昧な状態でアルカンシエルを当ててもコアまで完全に吹っ飛ばせる確率は低い。最悪の場合は別世界に転移して増殖されるかもしれない。オレが防衛プログラムだったらアルカンシエルが自分に当たる前にありつただけの砲撃で弾幕を張って迎撃するってのもありだな」

「シノン、正直に答えてくれ……キミの見立てで、暴走臨界前の防衛プログラムを完全に消せる確率はどの位ある」

「……3、4割ってところだろ。臨界後なら、防衛プログラムがアースラに攻撃せず、攻撃してもそれより早くこちらの攻撃が当たれば勝ち。逆に相手の攻撃の方が早かったり、こっちの攻撃を迎撃されればその時点で負けだな」

「……あまり高いとは言えない確率だな」

その場に沈黙が落ちる。

デュランダルによる永久凍結は効果無し、最終手段のアルカンシエルでさえ成功確率は3、4割。

諦める者こそいないが、微かな希望も見えない状況であるのは確かだった。

「だあああああ！もっつ……！！」

そんな時、溜まった苛立ちを爆発させたような声が響く。

全員の視線が移動する先には、空中で胡坐を腕を組んでいるアルフ。

「ごちゃごちゃと鬱陶しいね〜！！みんなでズバツと全部纏めてぶつ飛ばしちゃうわけにはいかないのかい！？アタシの頭じゃその方が楽なんだけど！」

「ア、アルフ……これはそんなに単純な話じゃないんだよ。それで済むならここに居る全員ですぐにやってるさ」

「はあ……防衛プログラムはアタシ等が倒すから、コアだけアースラの前に出て来てくれないかねえ……」

心底疲れきったようにガクリと落ち込むアルフ。

だが、泣き言に近いその言葉にシノン、なのは、フェイト、はやてがピクリと反応し顔を合わせる。

「……それだ（それや）！！」「」「」

「な、なんだ……どうしたんだ？」

同時にアルフを指差す4人にクロノを含めた全員が目丸くするが、4人は構わずに動く。

「シヤマル、防衛プログラムの中からコアだけを取り出すって出来るか？」

「え？そうですね……本体から露出するレベルまで出てくれば、クラーレヴィントと旅の鏡で抽出可能です」

「ユーノ君、強制転移魔法って使える？」

「アルフも、使えるかな？」

「何人かとサポートし合えば10メートルくらいは出来ると思うけど」

「アタシも、邪魔が入らなきゃユーノと同じ位だね」

はやてがシャマルに、なのはとフェイトがユーノとアルフにそれぞれ質問を投げる。

そして、それぞれの答えを聞いたシノンが良い感じに左手で指を鳴らし、顔を上げた。

「それじゃあ、最後の質問だ……お前等、あと何回全力で暴れられる？」

にやり、と笑みを浮かべるシノンの顔は何処か上機嫌で楽しそうに見えた。

第21話 全員集合、そして作戦会議（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

残念ながら、今回で総攻撃まで行けませんでした。もし期待していた方がいたらごめんなさい。

自分で戦う場所変えたくせに、今度は無人世界でアルカンシエル撃たせないように必死な状態です。

今回のオリジナル設定は、アルカンシエル発射までの時間、防衛プログラムが蒐集した魔法を使用できること、臨界前はアルカンシエルで消滅させられる可能性が低い……こんなところです。

次回こそは総攻撃までいきたいと思います。

では、また次回。

第22話 断ち切る悲劇（前書き）

遅くなりました。

前回の終わり方に納得がいかなかったので、続けてこちらを投稿です。

そういえばもうすぐTHE GEARS OF DESTINYの発売日ですね、とても楽しみです。

では、どうぞ。

第22話 断ち切る悲劇

Side Out

「なんとまあ、相変わらずというか何と云うか……色んな意味で常識が通じないのは、シノン君だけじゃないみたいね」

「いやいや艦長、自分で雇っておいてそれは無いでしょう……でも、実際とんでもない作戦ですよこれ。しかも計算上だと実現可能レベルですし……」

「クロノ、こっちは作戦通りアルカンシエルのチャージを開始するわ……暴走臨界点までは後10分ほどだから、そっちな準備を始めなさい」

* * * * *

「了解です……個人の能力頼りという不安要素しか無い作戦だが、今のところ成功確率は一番高い。やってみる価値はあるだろう。全員、やることは分かるな？」

「まずはウチらそれぞれの攻撃で防衛プログラムの魔力と物理の複

合四層式バリアを破る」

「バリアを抜いたら、私となのはとはやての一斉砲撃でコアを外部に露出させる」

「そしたらユーノ君達の強制転移魔法でコアをアースラの前、軌道上に転送！」

「そんで最後はアルカンシエルで消滅……単純に暴れるだけ、実に簡単でオレ達向きだろ？」

「美音達がうまく出来れば、これで万々歳だね！」

全員が空中に浮かぶ中、零式を肩に担いだシノンと笑顔を浮かべる美音に全員が頷く。

シノン達4人が思い付いた作戦とは実に簡単なものだった。

まず、暴走を開始した防衛プログラムをここにいるメンバー全員で攻撃する。もちろんアースラを攻撃させないため、それぞれが発揮できる最大火力での連続攻撃だ。

そして、無限再生すら追いつけないほどのダメージを与えて防衛プログラムを削り、その奥深くに存在するコアを外部に露出させる。

露出したそのコアをシャマルがリンカーコアを摘出する際に使う魔法、旅の鏡で補足。そのままコアをユーノ、アルフと協力して軌道上に強制転移。

最後に、転送されたコアを軌道上のアーヌラがチャージを終えたアルカンシエルで消滅させる。

こんな感じである。

簡単に言えばシノン達は、長年に渡って管理局が壊滅的な被害を与えられてきた第一級ロストロギアに正面から喧嘩を売って戦おうとしている。ようは、力尽くだ。

歴史にその名を刻んだ数多の軍師が聞けば怒りどころか呆れを貰うかもしれない。

だが、誰もがそれを無理とは思わない。ここにいる全員なら出来る、確かな自信がある。

そう、やる事が決まれば他のことは関係無い。

ただ、前に進むだけだ。

* * * * *
* * * * *

『暴走開始まであと2分！何が起ころうとも良いように警戒して！』

暴走開始までの時間が迫り、黒い淀みの周りを囲む触手はいつの間にか数を増やしていた。

なのは達は空中に浮遊しながら黙って警戒し、作戦開始の時間を待つ。

ただ1人、シノンだけは他と違って自分用の煙草を吸っていた。

リーゼ姉妹から生まれた負とアナザーの2連戦。しかもその内の1戦はジュエルシードまで開放したので、流石にそろそろ体内の魔力を霧散させなければいけない。

もちろん煙草を見た他のメンバーは真っ先に注意を飛ばしたが、シノンはリンカーコアの負傷をかなり噛み砕いて説明し事無きを得た。

「あれ？良く見たらシノン君だけやなくてなのはちゃんとフェイトちゃんもボロボロやな。そのままやと辛いやろうし・・・シャルル」

「はい、3人の治療ですね。それじゃあクラールヴィント、本領発揮よ」

『Ja・（はい）』

優しい笑みを浮かべたシャルルは自身が持つ指輪型のデバイス、クラールヴィントに軽くキスをして足元に緑色のベルカ式魔法陣を広げる。

「静かなる風よ、癒しの恵みを運んで」

舞い踊るような動きと共に魔法陣から緑色の光が溢れ出し、シノン達3人の体を包み込む。

すると、光に包まれた3人の怪我が大小問わずに治癒され、体内の疲労感が抜けていく。それだけではなく3人の服、バリアジャケットの損傷までもが完全に修復された。

「湖の騎士シャマルと、風のリング・クラールヴィント、癒しと補助が本領です」

「わぁ……すごいです」

「ありがとうございます！シャマルさん」

「本当にありがたいな。疲労とかもだけど、騎士甲冑ボロボロだったし……」

なのはとフェイトが素直に礼を述べ、アナザーの攻撃でロングコートの左半分が焼け焦げたり裂けたりしていたシノンもそれに続く。

シノンの左足はやはり万全ではないが、恐らくこれからは主に空中での戦闘だろうし、疲労感が消えて騎士甲冑が直ってくれたのだから十分に補えるマイナス要素だ。

「さてと、アタシ達3人はサポート班だ。あの触手共……防衛プログラムのうざいバリエードを潰すよ。いいね？ユーノ、ザフィーラ」

「うん」「承知」

『暴走臨界点、到達確認！ みんな、いよいよ来るよ！』

全員が最後の準備を整え、ここに戦いの幕が上がった。

さあ、始めよう

“悲劇”を断ち切る戦いを

「始まるぞ」

クロノの言葉に続き、淀みの周囲に変化が起こった。

淀みと同じ色の光が柱の形となって大地から飛び出し、連続で飛び出した柱は淀みを囲んだ。

「夜天の魔導書を、呪われた闇の書と言わせたプログラム……闇の書の“闇”」

胎動を続けていた黒い淀みはその形状を球体に変え、空間を震わせる破裂音と共に砕けた。

そして、その中から巨大な異形の獣が具現する。

大きさの全長は約15〜20メートル程で、背中にはスレイプニ

ルに似た巨大な黒翼が4枚。背中からはスパイク状の岩石が無数に生え、体の前方から伸びる2本の巨腕と蜘蛛のような6本脚が体を支えている。

胴体の中心近くには大きな口と鋭い牙があり、頭頂部の辺りには紫色の肌をした白髪の女性がいる。

「ア
」

白髪の女性が遠くまで透き通りそうな声を響かせる。まともな言語を話せればさぞ綺麗な声だろう。

だが今、この場においてその声は開戦を知らせる合図だった。

「ユーノ、アレやるよ！・・・チェーンバインド！！」

「了解！ストラグルバインド！！」

誰よりも先に動いた2人のバインドが周囲の触手を縛り上げ、ユーノとアルフは右手を握り締める。

「バーストツ！！」

音が伝わり、2人のバインドがその場で爆発する。単純に魔力を暴発させたのだが、1つが低級の砲撃魔法に匹敵するような複数の爆発は触手を爆散させた。

「縛れ、鋼の軛！！ だええやあ！！」

続いて、ザフィーラの咆哮と共に放たれた古代ベルカ式拘束魔法が

残りの触手群を全て薙ぎ払う。

「ツアア　　！！！」

どうやら痛覚は存在しているらしく、白髪の女性が悲痛な叫び声を上げる。

そして、それは確かな攻撃の手応えを示すものであり、次の攻撃への合図となる。

「ちゃんと合わせるよ、高町なのは！」

「っ、ヴィータちゃんもね！」

魔力と物理の複合四層式バリアを破る第1班の2人がデバイスを構える。

ちなみに、ヴィータがなのはの名前をちゃんと口に出来たのはこれが初めて。前はちゃんと名前を覚えられず、高町なんとか、と呼んだこともある。

「鉄槌の騎士ヴィータと、鉄の伯爵グラーファイゼン！！」

『G i g a n t f o r m 』

カートリッジ1発分の魔力を喰らい、グラーファイゼンが形状を変える。

ハンマーの全体を自身の身の丈ほどまで巨大化させた角柱状のものに変形させ、ただ純粹な打撃で相手を叩き潰すことに特化した形態、

ギガントフォーム。

「轟天……爆碎!!!」

ハンマーを振り上げる際にも魔力を使用し、そのサイズと質量を更に増大させる。

その大きさは防衛プログラムの巨体と同等かそれ以上だ。

「ギガント、シュラーーク!!!!!!」

その名の通りに巨人の一撃が振り下ろされ、ソレは直撃と共に強大な衝撃波を起こして4枚のバリアの内1枚を数秒の抵抗の後に砕いた。

「高町なのはと、レイジングハート・エクセリオン……いきま
す!!!」

『Load cartridge』

カートリッジを4発ロードしたことで6枚の翼が展開され、先端部分に桜色の魔力が収束する。

それは、1度の直撃で自己防衛プログラムをぶっ飛ばした砲撃、エクセリオンバスター。

その威力を警戒したのか、防衛プログラムは健在の触手を鞭のように振るい、なのはを狙う。

だが、その攻撃はユーノ達がサポートするまでもない。

『Barrel shot.』

触手の到達よりも先に不可視のバインドが無色の衝撃砲弾として放たれ、触手を単純な衝撃で吹き飛ばしたまま巨体の動きを封じる。

「ブレイク　　！！」

収束した魔力がそれぞれ強力な破壊力を持つ4発の砲撃となり、同時に放たれる。

それは2枚目のバリアに衝突するが、まだぶち破るには至らない。

だが、フォースバーストとは違い、なのはの砲撃はまだ終わっていないかった。

「　　シューーート！！」

新たにもう1発の砲撃が放たれ、それは先行した4つの砲撃すらも飲み込んでバリアを砕く。

「次、シグナムとテストロツサさん！」

総攻撃の指揮を務めるシャマルの声を聞き、なのは達とは反対の位置に浮くシグナムが動く。

「剣の騎士、シグナムが魂。炎の魔剣、レヴァンティン……刃と連結刃に続くもう1つの姿、ここにお見せしよう」

剣の柄尻に鞘の口を合わせる。

続けてカートリッジが1発ロードされ、光を放った鞘と剣がその姿を変えた。

『Bogenform.』

それは剣でも連結刃でもなく、上下部分の端を魔力の弦で繋いだ“弓”だった。

上部と下部の両方からそれぞれ1発ずつ、計2発のカートリッジが装填され、1本の矢が現れる。

新たに現れた触手群が砲撃体勢を取るが、決定的に遅い。シグナムはそれを全く意に介さず、弓を引き絞る。

「駆けよ、隼はやぶさ!!!」

『Sturmfalken.』

矢に収束した魔力が輝き、一瞬の閃光と共に矢が解き放たれた。

大気のを貫き、音速を超えてバリアへと到達した矢は大爆発を起こして衝撃波を拡散させながら3枚目のバリアを完全に破壊する。

「フェイト・テストロッサ、バルディッシュ・ザンバー……いきます!!!」

3発のカートリッジをロードして、1回転の勢いを乗せた大剣の刃が振り抜かれる。

それにより発生した衝撃波が、触手を斬り飛ばしながら防衛プログラム
のバリアに衝突した。

「撃ち抜け、雷神!!!」

『Jet Zamber』

天より落ちる雷撃。

それを纏った刃が増大する魔力に呼応し、敵を斬り裂こうと伸びて
ゆく。

斬撃はバリアを容易く切り裂き、それでもまだ勢いが納まらない大
剣はバリアの奥の巨体の左半身を容赦なく両断した。

「ア
!!!!」

白髪の女性が悲鳴を上げ、それを一刻も早く鎮めるように触手群が
砲撃体勢を取る。大技を放った直後のなのは達に迎撃する余裕はな
いが、全員の守護を担うのはベルカの守護獣だ。

「盾の守護獣、ザフィーラ！砲撃なんぞ・・・撃たせん!!!」

ベルカ式の魔法陣が広がり、地中より飛び出した鋼の輓が砲撃を放
とうとした全ての触手を貫き、切り裂いてゆく。

全身を串刺しにされ、防衛プログラムはその動きを止めた。

「はやてちゃん！美音ちゃん！シノン君！」

「了解や！2人と、先に仕掛けるで……彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍と成りて、撃ち貫け！！」

空に薄黒い渦が広がり、白い光が7つ灯る。

「石化の槍、ミストルティン！！！」

7つの光が槍となって防衛プログラムの巨体を貫き、着弾した場所を基点として凄まじい勢いで石化が広がっていく。

石化した部分はすぐに崩壊を始めるが、無限の再生機能はそれすらも凌駕する速度で外装を修復し、増殖していく。

「美音とソウルゲイン、いくよ！」

「シノン・ガロード、ヴェルフグリント・ディステンス……いくぞー！」

近接ブレードを出さず膨大な青炎を纏わせた美音の両腕が、自身の周りに他の剣を囲ませて天に掲げた美音の零式が輝きを増す。

「宿れ拳神！轟け鼓動！」

「瞬け、明星の光！うおおおお！！！」

美音の姿が震脚の雷鳴と共に消失し、防衛プログラムの巨体を青い閃光が貫いた。

さらに途絶えることのない連撃は防衛プログラムの巨体をも空に浮かせるほどの破壊力を生む。

「インフィニティアソウル!!!」

頭上に現れた美音は真下に急降下しながら蹴りを放ち、再び防衛プログラムの巨体を衝撃波と共に大地に叩きつけた。その攻撃により、防衛プログラムの体が再び3割ほど消滅した。

そして、すぐにその場から退避する美音を確認したシノン自身を包み込む輝きの全てを零式の刃に収束し、固定する。

「闇の空を輝きで満たせ！ 天翔、光翼剣!!!」

気合の声と共に全力で振り抜かれる零式。

その刃が斬り裂くものは無くとも、刃から解き放たれた光は一瞬の極光と共に白銀色の線となり、防衛プログラムの巨体を飲み込み、その6割を消滅させる。

しかもその斬撃は防衛プログラムの先に広がる荒野すら両断し、巨大な断層を作っていた。

「うわぁ……」

その破壊力を見た誰かが声を出し、全員がその威力に圧倒された。同時に、こんな技を人のいるところで使った時の被害を考えてゾッとする。

だが、そんな破壊力の攻撃を受けても無限の再生機能は止まらず、原形をとつくに無視して新たな外装が出鱈目に生み出され繋がれていく。

『やっぱり、並の攻撃じゃ通じない！ダメージを入れた傍か再生されちゃうー!!』

「だが攻撃は通っている！プラン変更はなしだ！！・・・いくぞ、デュランダル」

『OK, Boss.』

荒野の大地に冷たい風が吹く。それは瞬く間に大地を凍らせ、命の時を止める。

「悠久なる凍土。凍てつく棺の内にて、永遠の眠りを与えよ・・・」

防衛プログラムの巨体だけでなく、水分など皆無に等しい荒野でさえ凍りついた氷河へと変える。

「凍てつけ!!」

『E t e r n a l C o f f i n .』

瞬間、今まで暴れまわっていた防衛プログラムの肉体の大部分が凍結・停止。

中心核まで凍結させるには至らなかったが、防衛プログラムの動きは確実に動きを鈍くなっている。

そしてこの時間こそ、勝負を決める重要な時間だ。

「いくよ。フェイトちゃん、はやてちゃん!!」

「うん!!」

『Starlight Breaker』

防衛プログラムの上空に3つの魔法陣が展開され、他のメンバー全員が無言で空を見上げる。

「全力全開!! スターライト……!!」

「雷光一閃!! プラズマザンバー……!!」

「響け終焉の笛!! ラグナロク……!!」

流星の如く集まる星の光が、天を引き裂く雷鳴が、黄昏の大戦を鎮める白い光が収束する。

「ごめんな……おやすみな……」

小さく呟くはやて。その言葉は、例え害のあるものであっても一緒に暮らした家族への別れの言葉。

「……ブレイカー……!!!!」

解き放たれた3つの極光。それは膨大な魔力を持って防衛プログラムを呑み込んでいく。

数秒で防衛プログラムは光に呑み込まれ、かつて無い大爆発が周辺の空間を盛大に揺らした。

「シャマル！」

「やってるわ……本体コア、露出……捕まえ、た！ユー
ノ君、アルフさん！」

「長距離転送開始！」

「目標、軌道上のアイスラ前方！」

見る影も無く徹底的に破壊された防衛プログラムの残骸の中、ユー
ノとアルフの大型転移魔法が展開され本体コアを完全に補足する。

「……転、送……！！！！」

3人の手が天に掲げられ、残骸の中から本体コアの一部のみが転送
された。

*

*

*

*

*

*

*

*

*

*

「コアの転送、来ます！転送されながら、生体部品を修復中。ス
ゴイ速さです！」

「アルカンシエル、バレル展開！照準調整、10秒で終わらせてます！」

艦の先端にある二股の形をしたユニット3つの大型環状魔法陣が展開され、中心の魔法陣に今までの戦闘時間を使ってチャージしたフルパワーの魔力が集まる。

「ファイアリングロックシステム、オープン」

リンディの命令に答え、目の前に箱状のユニット、アルカンシエルの火器管制装置が現れる。

「命中確認後、反応前に安全圏まで退避します。準備を！」

『了解！』

リンディは手に持っていた1本の鍵をユニットに差し込む。すると、透明色の火器管制装置が真っ赤に染まり、アルカンシエルの最終安全装置を解除する。

「来ました！！」

クルーの言葉を聞き、リンディは閉じた瞳の中で今は亡き夫の姿を思い浮かべる。

（クライド、見ている？ 私達の息子が、その仲間達が、この悲劇を終わらせる機会をくれたわ）

ゆっくり目を開く。

転送魔法の光と共に、気色の悪い物体が現れる。

それには生物としての形が欠片も存在せず、あらゆる世界の生態系から逸脱したその姿には人間としての本能が拒絶を示す。

だが、それでもリンディの瞳は動かない。ただ真つ直ぐに、敵の姿を捉えている。

右手の鍵を一度の呼吸と共に握り直す。そして……

「アルカンシエル……発射!!!」

勢い良く手首を右へと捻り、悲劇を終わらせる一撃の引き金を引いた。

* * * * *
* * * * *

S i d e シノン

軌道上で放たれた閃光とその着弾は、地上から空を見上げるオレ

達にも確認できた。

周囲の空間振動がはつきり分かるほどの光と衝撃波が起こり、着弾点を中心に様々な輝きが見える。

命中対象を反応消滅させているとはいえ、その輝きはまるでビッグバンによって宇宙が誕生する瞬間を見ているようだった。

やがて、輝きが納まると共に赤い線が走り、天に完全な静寂が訪れた。

『効果空間内の物体、完全消滅！再生反応……ありません！』

『わかりました。アースラは準警戒態勢を維持、もうしばらく反応空間を観測します』

『了解……ふう……ま、というわけで……現場のみんな、お疲れさまでした！状況、無事に終了しました！』

その言葉を聞いて、全員憑き物が落ちたような顔になる。

笑顔を浮かべる者もいれば、笑顔でハイタッチする者もいるし、終わったことに安心して深い安堵の息を吐く者もいた。

ちなみにオレは3番目+煙草の摂取（無意識）で、美音はなのは、フェイト、はやての計4人で笑顔のハイタッチをしている。

『この後まだ、残骸の回収とか市街地の修復とか色々あるんだけど……みんなはアースラに戻って一休みしていつて』

「あつ……あの、エイミーさん。アリサちゃんとすずかちゃんはどうなったんですか？」

『ああ……被害が酷い場所以外は結界を解除してるから、元居た場所に帰ってもらってるよ』

「……アリサとすずか？ あの2人がいたのか？」

「うん。地球で戦ってた時に巻き込んだじゃって……」

その頃、話題の中心である2人は突然元の空間に戻ったことで、1人は苛立ちのあまりに虚空へ向けて大暴れ、もう1人はそれを必死で宥めているのをオレ達は知らない。

「シノン君、お疲れ様や……って、また煙草吸つとる」

「だから薬だつて言つたら？……まあ、お前もお疲れさん。初陣にしてはスゴイ働きだな」

「えへへ……けど今回のこと、本当に色々とあんがとうな」

「オレは頼まれた仕事をしただけさ……そうだ。はやて、よく聞け、実は夜天の魔導書を完全に修復できる原点のデータが見つかりそうなんだ」

「え？原点って……ホンマに！？それホンマなんか！？」

アナザーから言われたことを思い出して伝えた途端、はやては血相を変えてオレの体に抱きつくように必死に迫る。

「ああ、本当だ。外に出るまでヴェルフグリントやソフィアとそのことについて話をしたんだが、多分そのデータの場所は……」

『ご苦労様でした。アースラの諸君、夜天の主と守護騎士の諸君、そして、優秀な協力者の諸君』

オレの言葉を遮って聞こえてきた突然の声。

それなりの年を積んだような声は、アースラからの命令と同じく通信を通して聞こえてきた。

気が付けば先程オレ達が見上げていた空に巨大な通信用のスクリーンがあった。

そこに映っているのは、見るからに裕福な暮らしの元で育った雰囲気纏う茶髪黒目の男。見た目からして年齢は20代後半から35歳あたりだろうか。

リンデイさんと同じ服装をしているので時空管理局の局員、それも最低で次元航行艦の艦長を務める階級なのは間違いなさそうだ。

『それと初めましてだね、シノン・ガラード君』

その男は、何故かアースラ艦長のリンデイさんでも、夜天の魔導書の主であるはやてをも無視して囑託魔導師の1人でしかないオレに声を掛けてきた。

その男はオレと視線が合うと、その口元に笑みを浮かべて見下しながら口を開いた。

『私はエリトル・マグナード。階級は提督だ。時空管理局本部より
“人型生体ロストログリア”として認定されたキミを封印する命令を
受けて来た』

地球の12月24日の夜、クリスマスイヴに最後の『闇の書事件』
は幕を閉じた。

だが同時にこの時間から、管理局、いや次元世界の記憶に刻まれる
事件『銀の反逆事件』が新たに幕を上げていた。

第22話 断ち切る悲劇（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

なんとか今回で総攻撃を書けました。久しぶりに見ても原作のシーンには鳥肌が立ちますね。

ユーノとアルフが使ったバインドの自爆は文の通り、バインドの魔力を暴走させてわざと爆発させるものです。

ただ、爆発は魔法ではないので非殺傷設定は効きません。一般人に使用したら即死です。

あと、シノンの使った天翔光翼剣は名前はユーリのと似ていますが、攻撃の仕方がかなり違います。

ユーリのは剣をそのまま振り下ろして一刀両断って感じですが、シノンの場合は剣を振るって光の斬撃を放つものです。

イメージはFateのセイバーのエクスカリバーが近いです。

ちなみにこんな形になった理由は、冬木市で士郎から聞いたセイバーのエクスカリバーの攻撃や威力を聞いたから、という設定です。威力は比べるまでもなくシノンの方が負けていますが。

つか、セイバーのエクスカリバーなんて使ったらコアも纏めて防衛プログラム消滅しますよね。アルカンシエル涙目www

そして、もう少し2期は続きます。こっからはオリジナルみたいな

ものですね。

あ、エリトルの見た目はまんまガンダム00のアレハンドロ・コーナーでオーケーです。

では、また次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6229/>

白銀の来訪者

2011年12月17日01時59分発行